
世界を翔ける！

鶏 庭子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を翔ける！

【Nコード】

N18410

【作者名】

鶏 庭子

【あらすじ】

世界中に知られたファンタジー小説の異世界に召喚されて、元の世界に戻るには契約条件を遂行しなければならないという無茶振り。何故か双子の弟も先にいて、男装して従者して眼福男子出てきて料理して胃袋つかんじゃう系のお話・・・なのか？

完結しました。ありがとございました。

序（前書き）

はじめまして。

行き当たりばったり小説へようこそ。

序

その日、海野翔子うんのしょうこは大きな荷物を肩に下げ、電車のホームにいた。

「もっつ……電車まで予定通りに行かないだなんて」

小声で呟くその姿は華奢であり、大きな荷物を抱える様子はまるで新一年生のランドセル状態であった。パンパンに膨らんだバッグには一体何が入っているのか？

周りに立つ乗客は、あまりに本人と荷物との不釣り合いさについて目が行く。

重そうなのにしっかりとバッグを抱え、その揺らくことなく立つ姿は濃紺のリクルートスーツ姿で身を固めており、膝丈スカートから覗く足は健康的にすらりと伸びていた。上のほうに視線を見やれば、苛立ちを含んだ瞳に目が行く。

美少女！ という程でもないがパツと目を引く整った顔立ちであり、少々きつめな目が意志の強さを窺わせて魅力的に映る。

髪は背中の中ばまであるのを、軽く一本に結んであり、シンプルながらも清涼さを感じさせた。

手元の時計を見ると、定刻から三十分以上過ぎている。

どうやら電車のガラスがなんらかの原因で割れて、点検の為に運

行を休止しているらしい。

(参ったなー、こりゃ間に合わない……)

翔子はこれから新しい職場へ行く途中だった。

寮があるため、家財道具一式(といっても大きなバッグ一つ)持って電車移動。

決められた時間に余裕を持って間に合うよう早め早め出てきたが、三十分のタイムロスでは早めの意味がなくなり、更に運行開始されるまでのアナウンスがない為遅刻は確実だ。

仕方ない……と、携帯で先の職場に電車遅延の為遅れますと連絡をいれ、電車が来るまでの間のんびりコーヒーでも飲もうとコーヒースタンドに向かった。

どこの駅でもよくある至って普通のコーヒースタンド。

自動ドアを、普通にくぐる。

くぐったはずだった。

あれっ？

くぐったとたん、真っ暗だった。

「停電？ にしても、暗すぎ……」

たとえ停電だとしても、通常窓ガラスが大きく取られている店内は昼間なので外の光が差し込むはずだ。

それなのに翔子の周りは暗い。自分の手が見えない。黒のインクがまとわりついたかのように、絡みつく闇。

「えー、ちょっと、何コレ？ 店員さん！」

経験したことのない暗さに、今まさに入ったはずのコーヒーショップ店員を呼ぶがまったく返事がなく、むしろ無音状態で耳が痛くなってきた。

一体なに……？！

理解不能の状態に陥り呆然と立ち尽くしていたが、ふ、と声が聞こえた。

そちらの方に（見えないけれども）目をやれば、小さく点のような明かりが見えた。どうやらその辺りから声が出たようだ。

明かりが見えた！ ということもあり、むやみに飛びつくのは危険だとも思ったけど真っ暗な闇にいるより大分マシに違いはないだろうと、明かりを目指して走った。

「……ちゃん……ねーちゃん……ん」

聞き覚えのある声。

「ねーちゃん、こっちーん」

「^{かける}翔？！」

なぜに弟の声か！

と思った拍子に躓き、頭から光に飛び込んだ。

光り輝く閃光。

そして浮遊感。

落下。

「つきやあああああああ！！」

落下するにもいずれ終わりはある、叩きつけられて死ぬのはいやだー！と思つた瞬間、ふわつと抱きとめられる感触があつた。

人を抱えているのに、それを感じさせないほど逞しい腕。

これは俗に言う「お姫様抱っこ」状態？

ぎゅうと閉じていた目をそつと開くと、そこに飛び込んできたのは漆黒の髪。

視線を上げてみると、深い海の色をした瞳が見えた。

恐ろしく顔が整っていて、しかし精悍さの方が際立つ容姿。

だれ？

聞こうとしたけど、落下したときの衝撃で気持ち悪くて目が回って気が遠くなってきた。

「ねーちゃんいらっしやーい」

なんて言う気軽な翔の声をかすかに聞きながら。

1 異世界によつて

この日。

私は新しい職場の寮に行く所だった。

前の職場は業績不振で事で、再就職の難しいおじさまではなく、「君はまだ若いから」ってことでサクッと切られた。折角寮付の会社だったのに！

もともと荷物はとても少ない。寮なのでトイレバス共同だし、食事は寮母さんが作ってくれるので台所用品も不要。自分用に買ったプリンなどは、共同冷蔵庫に名前を書いて入れておくのが決まり。たまに勝手に食べられてしまい、揉めるのはご愛嬌つてものだ。

箆筒もいらぬ。ダンボールでリサイクルしました。器用なのよね、私。

貧乏性もあり、できるだけ工作などして済ました。服も図書館で借りた「着まわしコーデ」月！」っていうのを参考に、似たような服を低価格で安心なお店で買った。それっぽく見えれば別に気にしないのだ。安いものを探す嗅覚は優れていると思う。おかげで、「これどこのブランド？」とか聞かれることも多い。値段を聞かれたら「うふふ内緒」で逃げておく。

一応社会人なので、ハタタリは必要なのだ。

「着まわしコーデ」のおかげで、さして多くもない衣類は一つのバッグに収まり、これにて引越し完了。ちょっと大きいのが難点だけれども。

なんとか元会社の口利きもあり、新しい会社に就職が決まり、これからいざ向かおうという所で電車の遅延に会い、なんだか出鼻をくじかれた次第だ。

ん……？ それからどうしたんだっけ……？

ゆるやかに意識が浮上する。

直前まであったことをツラツラなぞっていたけど、現状が把握できていない。

あれー、コーヒーショップに入って、なんだか暗くて、眩しくて、落ちて、拾われて……？

「目が覚めたか」

低音の、ぞくりとする声ですぐ近くでした。なんて良い声！そちらの方へ目をやれば、そう、落下した私を助けてくれた人だ。

「う……わっ！ すみません、ありがとうございます！！」

慌てて飛び起きようとしたら、ぐらつと目の前が揺れた。

「わっ！」

あれ、ここベッド？！ って、落ちるよ！

と思ったら、ふわりと体を支えられた。再び横に寝かしつけられる。

「移動酔いらしい。暫くは動かんほうがいいだろう」

そう言って立ち上がり、ドアを開けて何かを話している。

(うわ……背が高い！ 体格もいい！ うらやましい！)

私は自分の体が華奢なので、あの位の背格好を見るとどうしてもあこがれる。

男だったら絶対あなつてやる！ つて思っているのだ。

(つて、そもそもどこだよ？)

まず、自分の身の回りを観察する。

ベッド、知らない。

部屋、知らない。

彼、知らない。

彼の衣装……なにそれ？

詰襟で、膝下まである上着にスリットが入っている。その下にズボン、皮のブーツ。

色は黒。

なにより、腰の所に……剣？

まず現実ではありえない代物が佩いてある。

いやいやいや、これってコスプレかもよ？ あの物語のだったら、世界中に人気だし。

頭の中には、超有名ファンタジー小説が浮かんでいた。

世界中の人が読んでいて、映画化にもなったり、日本で言えばゲームや漫画にも発展。人気声優が声を当てたこともあり、その手のオタクさん達もこぞってコスプレをしたものだ。

それにしても、ずいぶん精巧に出来ているなあ。

そんなコスプレをじっと見ていることに気づいたか、単に会話が終わったのか分からないけど彼が戻ってきた。

「今食事を頼んだ。食べられるか？」

食事と聞いて、私のお腹はグウと返事をした。

お腹の虫のほうが返事が早いだなんて！

私は真っ赤になりながらも、「お腹すきました……」と訴える。笑われちゃうなーとチラリと彼を見ると、無表情だった。

思いつきり、無表情。

良い顔なのに、無表情。

なんか、私悪いことしたかな？

あまりのリアクションのなさに心配になった頃、彼はベッドの脇にあった水差しからコップに注ぎ、私に寄越した。

「とりあえず、飲むと良い。丸一日寝ていたから喉が渴いているだろう」

「え？」

そんなに寝ていたのか、私！

言われたからなのか急に喉の渴きを覚え、ゴクゴクと一気飲みした。

うわー、美味しい！

水分を得たことで、スッキリしたので、少し余裕ができた。

周りをちよつと見回すと、なんだか違和感がある。

なんだろう？ 違和感の正体を確かめたいけれど、日が傾いてきたらしく、明るさがちよつと足りない。

「すみません、今何時ですか？ 暗いので電気付けて欲しいんですけど」

「デンキ？ デンキとはなんだ？」

ベッド脇にある椅子に座った彼に聞くと不思議そうに返された。まるで、『電気』という言葉を知らないかのような。

「え……？ 明かりをつけて欲しいって事なんですけど……？」

「明かりか」

すると彼は立ち上がり、扉近くにあった戸棚の上にあるランプに火を灯した。

えー……と……？

これは突っ込むところ？

あまりに自然にランプを付けた為、わざと付けたのかどうなのかが全く判断できなかった。

いやいやいや。
まてまてまて。

なんだかありえない事がふつと頭に浮かんでしまった。

そう、よく知られたあの世界的有名なファンタジー小説。色々な作家がアンソロジー的な文庫を出していて、勿論すべて読み込んである。中には、そう、まさにこのような状況に陥った様子が書かれているのも……あ……る……。

ま、まさか……？

いやな予感がまさにこの状況かと思った時、いるはずのない人物が飛び込んできた。

「ねー……ちゃん！」

バンつとけたたましい音を立てて扉を開け、まっすぐに私に向かってきた。

「か………翔^{かける}!!」

飛び込んできたという表現が一番正しい。

私にぎゅうと抱きついた。苦しいよ！

「ちょっと！ 何なの翔!!」

べりつと剥がし、とにかく落ち着かせる。ホントは私が落ち着きたいのにな！

「えーと、翔、半年振りくらいね？」

海野翔。私の双子の弟。

お互いちよつと遠方に職場があり、年に1〜2回会えれば良いほうになっていたので、久しぶりに会えてとても嬉しい。

こんな状況じゃなければね。

「ねーちゃんも久しぶりー！ 元気してたー？」

屈託なく満面の笑みで返す翔。

折角良い造りの顔なんだから、へらつと笑うのやめなさいな。

翔は「あ」と気づいたように、ふとベッドの横にいる彼に目をやる。

「あー、ごめんなジエネ、ちよつとはずしてくれる？」

「わかった。扉の外で待機している」

言うなり、サツと出て行ってしまった。

すばやい動きに私は声すらかけていないよ！

「彼、ジエネさんっていうんだ？」

「うーんとねー、正しくはジエネシズだよー」

翔はベッドの横の空いた椅子に腰掛け、彼の名前を覚えてくれた。うん、後でお礼を言わなきゃね。

「それで……一体コレは、どういうこと？」

すべてを含んだ言い方に、翔は勿論承知をしていた。

「うん、話せば長いことになるよー、いい？」

ちよつと目を伏せながら言う姿に、いよいよなんだかヤバそうな香りがプンプンしてきた！

でも聞かない事には始まりも終わりもないね。翔にもう一杯水を貰い、腰を据えて状況を聞く事にした。

「あなたのノーテンキな顔見たら殴らずに気が済むか！」

「横暴だー！ 可愛い弟に鉄拳なんてー！」

「うるさいうるさい！ 甘んじて受ける！」

実際、気持ちの処理として八つ当たりせずにはられないのだ。
この状況、受け入れろって方が無理でしょ！

「と……とにかく座りなよ！ まだ目が回るんじゃないの？」

涙目になりながら頭をさする姿は、とても同じ二十三歳と思えない。子供か！

怒りのあまり立ち上がったが、確かにまだふらつく体なので、再びベッドにひざを抱えて座る。

「とにかく状況を説明するよ」

翔はしつこく頭をさすりながら（演技だな、これ）話し始めた。

「まず、今ここにいる国の名前は『ラスメリナ』というんだ。聞いたこと、あるよね？」

「ラスメリナ、ラスメリナ……うーんと、『剣と竜の騎士団物語』の舞台？」

読んだことのある小説の名前をあげてみたら、翔はコクリと頷き、先を続ける。

「そう、その本であってる。剣と竜の騎士団物語そのままの場所

なんだよー。まさしくファンタジー！王道だねー。この国では剣で身を立て、竜もいるんだよー」

うわっ！ でた、非・日・常！！

剣だの竜だのなんて余計ありえないでしょう！

でも、本を読み込んでいたお陰で、大体の事情は察した。竜騎士団を立ち上げるための苦労話だったかな（ザックリ）

「ちょっと確認させてもらっていい？ あの物語での生活様式は、まんま一緒なわけ？」

女子ですもの、気になります。

服とか、食事とか、お風呂とか、トイレとか、トイレとか、トイレとか……！！

「実際ね、中世ヨーロッパ位の認識でいてくれれば良いと思う。っていうかさ、僕が思うにあの時代の人たちが割と行き来してみたいで、どっちかの様式に真似たり真似されたりだったみたいよ？ まっ、そんな時代の事なんか知らないから、女子的な生活についての指導してくれる人は用意させるね」

「させるねって、そっぴや翔、なんであんだここにいの？」

そもそも。

なんで弟がここにいのか。

すると、なんでもないような口ぶりでサラッととんでもない事を言った。

「あ、僕今ここで王様やってるんだー」

「お、王様?!」

アッサリという翔を、もう本日何度目か分からない程驚いた。
ビックリ選手権あつたら多分私優勝。

「王様で、ラスメリナ王国の?」

「うん、そうだよー。まあ色々あつたけど、これこそうーんと長くなるから割愛するとして……」

「しないでよ!」

「まーまー。とにかく色々荒れている所を、僕が王様になってなんとか国の秩序も戻ってきたのさー。そこでなんだけど」

一旦言葉を切り、急に真面目な顔になった。

翔はちららんぼらんどどこ吹く風を装っているけど、実際のこいつは策士だ。こういうときの翔は本気なので、こちらもちよっと居住まいを正す。

「隣国との関係がね、ちょっとアヤシィんだよねー。国を立て直すのに流石の僕も手一杯で、最低限しかしてこなかったし。ってことで、ねーちゃん?」

「ここで私の名前がでるの?!」

出るタイミングじゃないだろう、全くの異世界人だし！
きつとやばいことだ。

危険な香りがプンッポンする！

両手で耳をふさごうとしたけど、見越してたのか、ガシッと抑えられてしまった。

翔がずいっと身を乗り出して、厳かに告げられた言葉は。

「ねーちゃんには、僕の代わりに、レーン王国の王様に謁見してもらいます」

「はあ?!」

「ま、ぶつちゃけ身代わりだね。」

「いや、バレるでしょう！ 大体女だし、顔も双子の割にあまり似てないし!」

「ばれないよー。男の格好してサラシ巻いて置けば大丈夫。大体僕の顔だつてこの国でもあまり広まってないし？ 黒髪黒目って位だからね、知られてるの。黒と黒つてのは珍しい色の組み合わせみたいよー?」

それに、と翔は付け加えた。

「なによりジェネシズがついているから。安心して?」

そう、気になってたジェネシズさん。あの人って一体?

「ジエネはね、レーンの国の近衛騎士団第七番隊の隊長してて、今回僕を迎えに来た騎士なんだよー」

「レーンの国の騎士って……『精霊姫と騎士の旅』っていう物語に出てきたアレ？」

再び覚えのある物語をあげると、翔は嬉しそうにうなずいた。

「さっすがねーちゃん話が早い！ その物語で合ってる。近衛騎士団は全部で十五隊あって、むちゃくちゃ騎兵戦がうまい所なんだよなー。ジエネは強さでいったら多分あの国最強じゃね？」

そ、そうなんだ……。

抱えられたときのあのしなやかだけど厚みのある体は、武道をやるものだとは思っていたが騎士ですか。足音も立てず、しかしあの存在感は黒豹を思い起こさせた。

「まージエネも色々あつて七番隊に甘んじているんだけど、これまた割愛。本人に聞いたら面白いって？」

「う、うん……」

翔のちよつと苦味を感じた瞳に、これ以上は話したくない雰囲気を感じ取った。

「でもアイツはこの世界で僕は一番信用しているんだ。ねーちゃんを任せるならあいつしかいない」

ちよいまって。

もう行くなって決まったかの様な言い方しないでよね、翔。

「あのさ翔」

さりげなく相手国の情報を語りだした事に危機感を覚えたので、止めた。

「あんた、私に身代わりだの何だの言うけど、まだいいよって言っ
てないんだけど？」

「いやー、良いつて言うしかないと思うよ？」

「なんでよ？」

にや……と人の悪い笑みを見せた翔。

「召喚するときの契約事項として『レーン国にて国王謁見と書状
の手渡しに成功を収めること』ってなってるからだよー」

「はあああああああ？！」

なんて酷い！

私は、物語の記憶の中から召喚される時の手順を思い出してい
た。

一、召喚する魔術師

- 二、対象となる相手呼び出す為の魔方陣
- 三、召喚するに当たっての、世界に示す契約

これらが揃って、初めて異界からの召喚が成功する。

たまにウツカリ発動しちゃうこともあるらしいけどね。魔術師若葉マークの人が多いらしい。だから異世界召喚物語が多いのも頷けるってもんだ。

一番厄介なのが三番目の契約。

先にあげたウツカリな召喚は契約する前に発動しちゃったりするんで、契約はされていなく、適当な場所に出現したのちに、異世界人として自力で何とか生きて行かなければならない。

うまいこと成功して、魔術師にお金積んで元の世界に戻れた人も、勿論いる。そういう人が物語書いてたりするんだけどね。

キツチリ契約込みで召喚成功した者は、その契約が果たされない限り元の世界に戻ることはならない。

どっちみち帰れないんだよな。成功しなきゃ。

駄目じゃん！

私は、会社に行く所だったのに。新しい会社。はじめが肝心の初日！

早く戻らなきゃいけないのになにその約束！

私の心配を勿論見越している翔は

「成功したら、コッチに来る直前まで時間軸戻すよ？」

う。

「成功報酬も、ちゃんと日本銀行券でねーちゃんの希望額を国家

予算からまわすよ?」

う。

「身の危険は絶対無い。その辺も手配するよ?」

う。

「まあ……折角の異世界だし? 旅行気分で楽しまない?」

「……」

「ねーちゃん。頼むよ」

じつと私を見つめる翔。

「わ……分かったわよ! 行けばいいんでしょ!」

ヤケクソに了承した。私は、翔のお願いに弱いのだ。

「ありがとう、ねーちゃん」

満面の笑みに、私は天井を仰ぎ見ながら、あー、この笑顔にだまされるんだよな、いつも! なんて事を思っていた。

トントンとドアをノックされる。

「いいか？ 食事が届いた」

翔は「はいよーん」とドアまで行き、ジェネシズを迎え入れる。

「ねーちゃん、座って大丈夫ならコッチのテーブルに置くけど？」

ふらつくようならベッドに持っていくよ？ という翔に、私は大丈夫だとそっとベッドを降りた。日本で生まれ育った自分には、洋画のワンシーンのようにベッドで食べるだなんてとてもじゃないが受け入れられない。テーブルまで歩くと、ふわんふわんとした体が面白かった。何だろっこの感じって。

とりあえず椅子に座ろうとしたら、ジェネシズさんが椅子を引いてくれた。おージェルメン！

ありがとう、と言いなから腰を掛け、アレ？ そっういえばと翔に聞く。

「ねえ？ なんで私ジェネシズさんに言葉通じてるの？」

あの物語での異世界召喚された人たちは、大体三パターンあって最初から何故か通じる！ っていうのと、一生懸命勉強して覚えるか、魔術師に何らかの術を掛けてもらってやつだった。

今の私は一番目の最初からってやつだね。

「ああ、そのことねー」

なんでもないような口調で（またか）翔は私の向かいに座り、いつの間にかお茶を注いでいた。

「まあジエネも座りなよ？ 説明二度手間になるのメンドクサイからさー」

翔は三つのカップに淹れたお茶を、それぞれの目の前に配る。

ジエネシズさんは少し躊躇ったあと、椅子に座った。多分、翔がいう二度手間ってことで、この場にいた方が良いと判断したからである。

私もちよつとジエネシズさんに興味あつたし。

顔の造形もさることながら、体つきが最高に好みである。鍛え上げられた体なのに、ボディビルダーの様に見える為の筋肉ではなく、実用的に付いているしなやかな筋肉。

こんな筋肉筋肉言っていると、実は自分筋肉フェチかと危ない扉が開いてしまいそうなので慌てて目をそらす。

ここは一つ翔の淹れてくれたお茶を飲もう。

いい加減に淹れてるけど、翔の淹れる茶は何故かとても美味しい。私は（これもなんだかホントに紅茶の味だし……本当に異世界なのかな？）という疑問を持った。

「まず言葉なんだけどね？ 異世界へ通じるときに、ありとあらゆる物質ってもんはその世界に合った物へと再構成されるみたいなんだ。分かりやすく言えば、コッチの世界って変わった色の髪の毛があつたりするんだよ？ どピンクとかー、緑色とかー」

「……アニメみたい」

「まあそうだね。でもさ、そんな色の人が僕たちの世界にはいないだろ？ コッチからアッチへ行くとなったら多分どピンクの人は日本だったら日本らしく黒っぽく再構成される。言葉も一緒に、日本語がデイスカバラント語に再構成。この紅茶だと思ってる物も、デイスカバラントにしたら紅茶ではなく別物なんだ。僕が「紅茶」と言ったら、その物質に当てはまる物に脳内変換されて伝わり、これが出てくる。……大体分かった？」

「……ギリ」

理解は出来ないけど、なんとなく「そーゆーもんだ」って事が分かったかな。

いいよ、通じるなら。

「今も移動酔い、少しあるだろうけど、それも再構成された後遺症っていうかー。明日には治ると思うよ？」

それだけ言うと、翔はカップを持ち上げて一気に紅茶をゴクゴク飲み干した。

1 翔からのお願い

あれ？　じゃあ、言葉が通じないって人もいたのに、どうなんだろうその辺は。

ふと湧いた疑問だったけど、ジェネシズが食事を並べてくれたのでそちらに意識が行ってしまった。

「カケルは、そちらの世界の料理と比べると『素朴』だと言っていたな」

「そうそう！　超シンプル。素材の味だけか、しょっぱ過ぎるかの、栄養取るだけの食事なんだな」

二人が見ながら言った食事とは。

固そうで、薄く切り分けたパン。

具が良く分からないスープ。

茹でただけの野菜。

塩。

……。

塩って！　自分で味付けしろってことなのかな？

「僕、ねーちゃんの料理が食べたくて！　後で作って？」

「う、うん……いいけど？」

作るのには別に苦ではない。ウチは母一人子供二人の母子家庭。母親は出張などでいないことが多かった。家事全般取り仕切るのは私の仕事。節約の為に、色々工夫をしていかに快適に過ごせるかを考えていた。その生活は、私と翔が大学卒業するまで続き、翔のおふくろの味といったら私の作るご飯の事となった。

とにかく、出されたものを食べる。

パン……固くて顎が痛む。酸味があるなあ。

スープ……ダシが全く感じられない。

茹でただけの野菜……うん、素材そのままね。ジャガイモらしき物は不思議なオレンジの色をしていた。あとなんか分からないけど、アッチの世界にあるものとそう変わらないかな。

インゲンっぽいのもあったけど、筋とり位して欲しい。

スープの中に野菜を入れて、塩で味を調べ、パンを浮かべてチーズを入れてオーブンで焼き目を入れたら美味しそうだなあ。

そんなことを考えながら、固いパンを咀嚼した。

「ジエネも食べたいだろー？ ふふん。ねーちゃんの料理、最高にうまいんだ」

「前々から聞いていて、興味があるな。是非一緒に頼む」

ハードル上げすぎだよ！

翔を軽く睨む。隣のジエネズさんを見ると、ごく僅かに目元がふんわりと優しくなっていた。

うっわー……良いもん見た！

無表情な人だと思っていたけど、よく見ればわかるんだな。不躰なほどに見てしまう私に、翔はニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべる。

「ジエネは無愛想って思うだろ？　これはねー、色々隙を見せない為の仮面でもあるんだ。国の上に行けば行くほど、足の引っ張り合い多いからねー。僕の前では大分リラックスしてくれるようになったんだけど、ここに来るまでの道のりがまたっ……！！」

泣きマネをして、いかに苦労したのかを語りだそうとした翔を、ジエネシズさんが素早く翔の口を塞いだ。

「頼む……その話はやめてくれ……」

ジエネシズさんが『参った』とでも言うように片手でこめかみを押さえ、うなだれた。

よっぼど聞かれない何かをやったんだな、翔が。

泣きマネから一転、今度はニヤニヤ笑いながらジエネシズの肩を組む。

「そんな訳で、僕はジエネに貸しがある。その貸し分でねーちゃん
の護衛を頼んだのさー。実の所、国王謁見はアポ無しでコッソリ
行ってもらってもんでね。いやいやいや、大丈夫！ 危ない事はない
……よ？ 多分」

アポ無しコッソリだなんて！ と、どう考えても物見遊山のな道
中では無い事に顔を険しくした私を、翔は慌てて大丈夫と両手をバ
タバタしながら言うけど、なんとも頼りない返事だ。

大体なんでコッソリ何だよ！
するとジエネシズさんが一つ溜息を付きながら翔のフォローをす
る。

「カケルは、この国の王になってまだ三ヶ月程しか経っていない。
王になったとはいえ、まだ混乱は多く不在にするべきではない。し
かし我が国レーンとの関係は先代の王により険悪な物となっていて、
カケルに代替わりした今こそ友好的な関係を気付く時機だととらえ
ている。使者を立てるのもいいが、最も効果的な演出として本人が
謁見した方がより一層覚えはいいだろう」

淡々と、あの耳の奥にジンとくるちょっと低めの良い声で語られ
ると、私もうーんそうかな？ じゃあ行っちゃおうか！ なんて気

になるから怖い。ちょっと待てよ私の本能！ と理性が抑える。

「本人がつていうか、その役目が私に振られるってことなんだよね？ 私でいいの？」

本人が謁見、と言うには訳があり、翔はとても人と馴染むのが早い。気に入られるタイプなのだ。

大学二年の頃、二十歳の記念にこじんまりとした居酒屋で乾杯してたら、隣のオジサマと意気投合。なんと大会社の社長さんで、下積み時代から通うこのお店にたまたま居合わせたのだ。

オレんところ来ーい！ の一言で卒業後の就職先も決定。就職活動すらしてないのに、決まってしまうた。勿論花形の営業職。翔には天職だと思われる。

一方、私ときたら家事を極めるのに楽しくなってしまう、図書館に通って料理の本、ハーブの本、おばあちゃんの知恵袋的な本、収納の本などを読み漁っていた。

就職活動はこれといって有名企業に狙うわけでもなく、翔は就職先が県外なので生活のサポートは要らなくなり、母親は相変わらずほぼ家にいない状態なので、とある有名リゾートホテルに寮に住み込みつきで就職することにした。

お客様に、いかに気持ちよく滞在してもらえるか。

これは今までの私の家事にも通じるものがあった。いかに家族に気持ちよく過ごしてもらえるかと。

有名リゾートホテルとはいえ経営は厳しかったらしく、従業員は何役も掛け持ちをしていた。時間帯によって忙しくなる部署があるので、時間の空いているスタッフを効率良くまわしていたので、いっしょか私もチェックイン業務、ベッドメイキング、調理補佐、色々こなせるようになった。

できるようになり、やりがいを感じ始めた頃にリストラの宣告が降りた。

そして冒頭に戻るのである。

「私にはそんな外交スキルなんてないし、たとえ双子といつても翔の様にうまく出来る自信なんかないんだけど？」

「とにかく国王に会ってくればそれで達成したと思って？ 書状もついでにばいっとさ！」

ま、これはオマケの様なもんだけどねーと、お代わりのお茶を淹れながら言った。私も、味はともかくお腹は落ち着いたのでお茶のお代わりを要求。

「僕はちよつとやることあるから、また後で色々注意事項伝えるよ。それまでジエネに色々聞いといてー」

勢い良くカップのお茶を一気飲みして、じゃっ！ と、こちらが何か言う間もなく出て行ってしまった。

「カケルも王様なんだ。今ここに来れたのも、寝る間を惜しんで仕事したからだ」

ジエネシズさんは、翔が開けっ放しにしたドアを閉め、椅子を引きっぱなしだったのを戻し、飲み干したカップを片付けた。うう、すみません！ あいつは散らかし魔なんです！！

私も食べ終わった食器を積み重ね、ティーセットの置いてあったワゴンに置く。ついでにサッと台拭きらしきものでテーブルを拭

き上げた。使い終わったもの、すぐに片付けないと気分が悪いからね。

テーブルの上が綺麗になりお腹も落ちついた所で、生理的欲求がやってきた。丸一日寝てたし水飲んだしスープ飲んだしお茶飲んだし！ そりゃー行きたくなるさ。

でも……と、私の中の乙女が恥らう。

イケメンジェネシズに聞くのか。

いやいやでも！　すでに尿意満タンなので時間がありません
部長！（誰だよ）

漏らしてしまう恥よりも、聞く恥のほうが天と地も差があります。

「あの……おトイレってどこでしょう？」

顔が赤くなってる自覚をしながらジェネシズさんに聞くと、軽く目を見開き、その瞳が揺れたのが見て取れた。多少でも動揺した、のかな。

「悪い、案内させよう」

と言って、ドアを開けて誰かを呼んだようだ。うわーよかったー！　あんなカッコいい人に付いて来てもらうのって恥ずかしいもんね。冷静な対応にも救われたよ。そして入ってきたのは侍女っぽい衣装の可愛い、と言うより綺麗！　が当てはまる、多分私とそう年齢も変わらない女性だった。

「彼女はサーラという。君の事情は織り込み済みなので女性として困ったことがあったらサーラに言うといい」

「初めまして、サーラと申します。不慣れでしょうが、心を込めてお世話をさせていただきますね」

ニッコリ。

あまりにステキな笑顔にきゅんとしちゃった！　なんて綺麗なのサーラさん！

感激しながらも、早速トイレへと連れてってもらうことにした。

トイレ、行ってきました。

あまりの事に、即日本に帰りたくなりました。
異文化ってすごいね。

現代社会って、恵まれてるね！

なんだか、大事なものを一緒に落としてきたような気がします。

事細かく説明するのよね。色々差し障りあるけど引かれない程度にいうならば。

とにかくここはラスメリナのお城で、割と上の階に居たらしく。案内されたのは小さな小部屋。よかった、個室なのねー！ 地球世界には、ただ溝があるだけで仕切りも無くみんな仲良くしちゃいましょ！ みたいな所もあるというのは知っていたので、個室だと言っただけでもありがたい。

ほっとした所でドアを開けたら。

「え………？」

そこは、日本のトイレの個室とあまり変わらない広さ。うん、これはまあいいよね。

個室の中には階段二段分位の段差があって、その真ん中に穴が開いていた。

そつとのぞいてみたら。

地面が見えました。かなり下ーーーーーに。

うそーーーーー！

垂れ流しーーーーー！！

そして無情にもパタリとドアを閉められた。早くしろということ

か！
しかし背に腹（尿意）は変えられない。
いざ勝負！

あー……。

フワツとお尻を撫でる風。もういいや。終わったな私。
お母さん。私何か壁を乗り越えた気がするよ。前にあるのか後ろにあるのか分からないけど。

というトイレドタバタ珍道中でした。
持つてる小説などにトイレの描写が無かった為に予備知識ゼロだからね。アイドルはトイレに行かない信仰と似てる気がする。
スッキリした所でサーラさんに声を掛けた。

「サーラさんお待ちせ。ありがとうございます」

「チッ」

なんだか空耳でしょうか……？

綺麗なサーラさんから舌打ちが聞こえたような。綺麗なサーラさんの顔が歪んで見えるような。

あの……サーラさん？

「ちよつとアナタ、グズグズしないでよ！ アタシの仕事が遅くなるじゃないのー!!」

腕組みして私を睨みつけた。

えええ、私になにか悪いことしました？ 確かにトイレにはビビってましたけど。

「ふんっ。カケル様の姉と言うけど、大した事無いわね。鈍くさそうだし」

と言い捨て、サツサと元の部屋へ歩いてしまった。慌てて私も追いかける。増築改築繰り返したらしい歴史あるこのラスメリナの城。あの部屋に迷わず戻れる自信は全く無いから、必死にサーラの背を追った。

サーラさん、ジェネシズさんの時にはにこやかに挨拶してくれたのになー。

この変化って一体なんだろう。

こんな初対面で敵意を向けられる経験が無いので、考えても分からないから放棄した。

やけに早い歩みに追いつくのがやっとで、サーラさんが角を曲がった所で見失っては大変だと距離を詰める為に走った所、その角で衝撃を感じて尻餅をついてしまった。

「いたたたた……あぁっ！ すみませんごめんなさい大丈夫ですかっ！」

お尻が痛くて立ち上がれないけど、飛び出し不注意なのは私なので慌てて声を掛けた。

すると、相手は尻餅どころか普通に立っていた。頑丈だな！

「いえ、私は大丈夫ですよ。貴方こそ立ち上がれますか？」

すっと手を出し立ち上がるのを助けてくれた。茶髪に緑の瞳で、少し目じりの下がった癒し系の顔立ち。

「あ、すみません」

「ああ、ひよつとしてカケルの姉君様？」

「は……」

『はい』の い、まで言えなかったのは、視線の先でサーラが爆走して戻ってきたのを見たからだ。

そして、ガツと彼の腕を取ってギュツと自分の腕で取り込む。

「ユーグ！ ここに居たんですの〜？ 私探してましたのにい」

なんて甘ったるい声！ さっきのはやっぱり私幻覚見たのかも！

ユーグさん？ の腕に顔をスリスリしてるサーラさんは、先ほどまでの険悪な雰囲気は一切感じさせなかった。ユーグさんは、「はは、こいつう」なんて言っちゃって！ いきなりイチャイチャしてるし私いたたまれません。

それにユーグさんの死角から時折ギラつとした視線をサーラさんから感じるんですが！

「サーラ、また後でゆっくりアレしような。さて、姉君様は部屋に戻る途中ですね。私もジエネに用事があるので一緒に帰らせてください」

（アレってなんだ、あれって！！）

非常に気になる単語もあり、突っ込みしたい所だったけどこの雰囲気におサラバしたかったし、なによりサーラの殺気が怖くて早く部屋に戻りたかった。

城の回廊というのか。

等間隔に蝋燭が灯り、温かみは感じるけど、現実味は全く感じられなかった。微妙な凹凸を足の裏へ伝わるタイルも、木で出来た扉も。私だけなんだかCG合成されちゃった、みたいな。

何らかの配慮があったのか、ひとり人気は全くなかったけど、前を行くイチャイチャカップルはこれらの景色に馴染んでいた。

いや、とび蹴りしちやいたいたい気持ちはあるけどね。

よそ様のラブラブな姿見ると、なんとなくイラっとしませんか。僻みかもしれないけど。

扉を開けて中に入ると、ジエネシズさんは何か書類らしき帳面から顔を上げた。

「ユーグが来たということは、あの件は通ったと理解しているか？」

「勿論です。国境近辺までとなりますが、ある程度時間は稼げるでしょう」

「流石ですわユーグ……」

ウツトリとしたサーラは置いていて。（もうこの際呼び捨てだ）
込み入った話をしている二人だったけど私にはさっぱり分からないので、食事の時に目の端に捉えていた私のバッグの所に行く。

異世界に来ちゃった時に無くした物だと思っていたけど、一緒にたどり着いたらしい。

何となく手持ち無沙汰だったので、今のうち、この世界で使えるようなものを分けておこう。

そこで今の服装を思い出した。

あまりに自然に着ていたから忘れてたけど、私スーツじゃん！

シワになってるな……絶対。

でも、着替えるとしてもTシャツにデニムパンツは違和感あるだろうな。

うーん、と考えるも分からないので後回しにした。

後は雑貨だけど、シャンプーリンス等は寮の物使ってたし、化粧ポーチもあまり自分自身しっかり化粧をしないせいもあり、かな

り薄い。後は、手帳、鏡、携帯、財布、腕時計、ハンカチ、ティッシュ、ガムとタブレット。

役立ちそうな無いね。こう、スタンガンとかさ。エアガンとかさ。

持ってたら逆にどうなんだろうみたいな。職務質問なんかされちゃった時大変だね！

とりあえず、携帯の電波をオフにしておく。省エネモードで待機。一応自家発電できるグッズ（ハンドルくるくる回すアレ）があるからなんとかなるかな。防災用品で一応持っていたんだった。

だって、写真撮りたいじゃない？

折角ならば、写真撮って思い出しにして置きたいもんね。

さて、どれを持って行こうか……と悩み始めた所、ジエネシズさんが声を掛けてきた。

「ちょっといいか？ これからの旅の事での話を詰める」

「はいっ」

そういつて、ジエネシズさんは先ほど見ていた書類を手に取り確認するように言い出した。

「まず最初に。これよりカケル姉の事を『ウンノ』と呼ばせてもらう。『カケル』の名は知られているが姓までは認知度が低いからな」

「はい」

「それから、女性一人我が隊に居るには不都合が多い。私の従者として付いて来てもらうことになる。カケルの姉と言う事情を知るのはいここに居る三人とカケルだけだ。サーラにはそれについての支

度をしてもらう。それから、ユーグ。ユーグはカケルの補佐をやっている。事務処理が主な仕事だ」

「あはは、カケルはよく『人には向き不向きがある！』と逃げますからね。私が大体処理してどうしても判断が必要なものだけ判断を仰ぎます」

「いやあ……すみません！」

恐縮ですよ。ホントすいませんウチの翔が！

「ジエネ、それには何が書いてあるんですか？」

「ああ、カケルからの注意事項が書かれている」

書類を覗き込んだユーグさんは、「相変わらず悪筆ですね」と苦笑してた。なんでも、召喚における再構築でも流石に文字を書くという所までは及ばず、カケルはこの世界の字を学び始めてやっと幼児並みに書ける様になった所らしい。だけど、元々あいつはミミズがのたくったような判別しづらい字なので、たとえこの世界で字が書ける様になったとしても悪筆のレベルは変わらないだろう。

ジエネシズさんが眉間に皺を寄せて解読している。

なかなか読み進めることが出来ないみたい。

おー、こんな表情でるんだ！ 翔の悪筆も、こういう表情引き出せるなら悪くない。

「私のほうがカケルの字を見慣れてるので読み上げましょうか」

そうユーグさんに言われると、ジェネシズさんはサツサと読む事を投げた。無駄な努力はしないということだね。

書類を手に取ったユーグさんは、空いてる椅子に腰を掛けた。するとまるでそれが自然だというようにサーラがちょこんとユーグさんの膝に座る。え……っど？

ジェネシズさんが何も気にする様子が無い所を見ると、これは日常風景なんだろう。

私も見なかったことにした。だって、サーラ怖いし。

ユーグさんは、サーラの頭を撫でながら、反対の手に持つ書類を読んだ。

「1、姉ちゃんは『ウンノ』と呼び、ジェネの従者として付いていくこと。」

2、国境近くまでは竜騎兵隊が送る。帰りも連絡あれば迎えに行く。

3、ジェネは、とにかく姉ちゃんを守ること。

4、姉ちゃんは、とにかくジェネに守られること。

5、姉ちゃんの食事は何よりも最優先せよ。

6、姉ちゃんには悪い虫が付かないように考慮せよ。

7、姉ちゃんには……

……

……

「じゃあ、早速その調理場連れてっていただけますか？」

この空気にいたたまれなかったので、話題をそらした。

「ええ、いいですよ。じゃあサーラたんお願いしますね」

「はいユークたん。お任せください」

ああ！ 見てられないわ！！

私はジエネシズさんに近寄り「耐えられない」と、そつと声をかければ、「空気になれ」と、なんとも頼もしいお答えが返ってきました。

調理場に着くと、それまで天使のような笑顔でキャピットしてたサーラが、極悪な顔に変化した。

こつ……メンチきかせるっていうか？ サツと目をそらし、私は調理場の様子を窺う。

うーん、なんていうかキャンプの調理場に似てるかも！ 調理台と、かまどと、水がめかな？あとは鍋やらそんな調理器具が一そろい。食材はどうなんだろう？私に使えるものがあるのかなー？

今まで読んできた小説には、あまり食事の描写が出てこない。大抵野宿で獣捕らえて焼いて食べたとか、『食事をすませた』の一言で終わっていたので何一つ参考にならないや。何やってんだよ過去の召喚体験者！ 後世に伝える！

「で。アナタはどうしたいわけ？」

「へ？」

調理場をウロウロする私にサーラは焦れたらしい。ユーグに頼まれイヤイヤ（私以外おくびにも出さない）付き合っではいるが、本当は私なんかの相手したくないのが手に取るように分かる。

きょんとした私にキャンキャンと金切り声で罵詈雑言浴びせながら、大きく舌打ちして調理台に飛び乗り、私に指さした。

「アナタほんと邪魔！ カケル様の姉だからって、こんな特別待遇許されないわ！ 散々私達が苦勞して築き上げた場所に、気軽にやってこないで！ 一番大変な時を知らないくせに、ちよっと国が

落ち着いたから来るなんて調子が良すぎ!」「

「……ちよつと?」

言われたことを気にしなかったといえは嘘になるが、その前に最も許せない事をしたサーラに何か私の中でブツつと切れる音がした。指をさしたままのサーラは、声が一段低くなった私を見て雰囲気がおかしい事に気付いたようだ。

「な……に?」

「……サーラ? アンタちよつとそこを降りなさい」

命令。

私は全く意識していなかったけど。

抗えない強さの言葉がサーラを縛る。

体中が痺れたかのように動けなくなったサーラは、それでもなんとか口を開く。

「ちよ、つと、何よ……」

「いいからサツサと降りなさい! 調理台は汚い足を置く場所じゃないのよ!」

私は多分目が据わっていたと思う。

びくりと体を震わせたサーラは、ぎこちない様子で、それでもなんとか調理台を飛び降りた。

「いい? 調理台って事は、食事を作る場所よね? 口に入るも

のを置く場所にアンタの汚い足が乗ってもいいわけ？ 大体この城
って土足でしょ。土とかついてんじゃないの？ その土が食材につ
いちちゃったりして、それでそのまま食べちゃってもい・い・の？！」

「よ……よくは……な……いわ」

うつすら涙を浮かべたサーラ。

そこを更に畳み掛ける。

「ってことは、そっかー、自分の靴の裏なめられるんじゃないの
？ どうぞ舐めてくださって結構よ？ 汚い足で台に乗って人を指
差せる失礼なアンタならやれるわ」

私は調理台の上に土足で上がると言う行為に相当頭に来ていて、
許せなかった。

サーラはグツと唇を噛み締めたけど、ぽろりと一粒涙をこぼし、
蚊の鳴くような声で

「……ごめんなさい」

と謝った。言い終えると同時に涙腺決壊！しゃくりあげるように
泣き出した。

あー、言い過ぎちゃったかな……でも、やけにあっさり謝ったよ
ね？ なんてだろ。

それでもちよっとした後味の悪さに、まあまあと宥めにかかる。

「いいのよ、分かれば。調理場というのはとても清潔にしなければ
ならない場所だから、これから気をつけるように！」

そっとサーラにハンカチを渡しながら言う。

「サーラ、もういい年なんだからそんな風に泣かないの！ お子
ちゃまみたいよ？」

「……ひつく、すみません……もう十四にもなって恥ずかしいで
す」

え、ちょっと！！

今度は私が固まった。

十四て！！

いやいやいや、どう見ても私と同じ二十三歳位なんですけど！
焦りながら、そういえば地球世界でも欧米人より東洋人は若く見
られる傾向であることを思い出した。うん、それならば多少青い所
があっても仕方がないかな。年齢聞いてから急にサーラが可愛く思
えてしまった。

近づいて、ギュッと抱きしめる。そして背中をトントンとやさし
く叩く。最初は硬直してたサーラだけど、トントんが気持ちいいの
か段々と力を抜いた。か、かわいい……！

「ごめん、言い過ぎちゃった。サーラもう成人してるかと思っ
たから」

「成人……してますよ？」

「えっ？ 十四歳で??？」

「はい、月の物が来るようになったら成人と認められるんです」

ほー！ 早いな成人！

まあ、歴史を見れば十二歳の嫁入りとかもあつたらしいし、子作り可能¹¹成人¹²って事なのかな。

ちなみに、男は十五歳で成人とひとくくりらしい。安定収入得るためにはその位の年齢にならないといけないという理由ね。

ユーグさん、サーラに手を出して犯罪じゃないか？ という疑問も、多少解決？ 世界で成人と認められた二人ならば、問題はない。ユーグさんは二十六歳らしいので充分に歳の差があるけど、愛に年齢は関係ないのか。へええ。
愛は地球も救っちゃうので、なんか万能だね！

すっかりおとなしくなったサーラ。気分が落ち着くまで、色々話した。

どうやら一方的に嫌っていたのは、単なる嫉妬だったみたい。

この国をどうにかする為に、翔とジェネシズさん、ユーグさん、サーラ、あと一人別の任務についている竜騎士が仲間となり、相当辛い試練を戦い抜いた。その中にぼつと出の私がやってきて、みんなに気を使われてるのがむかついたらしい。

……私、勝手に呼ばれたんですけど、それでも？

それにしてもサーラは地球世界で言う中学二年生位だけど、精神年齢ちょっと幼いな。攻撃的の割にすぐ折れやすくて。

逆に、肉体的には……すごい色気が。出るトコは出すぎて、引込むトコは綺麗なラインで引っ込んでる。これ、ホントに十四か?! うん……まあ……かわいいからいつか。

散々暴言吐かれたけど、私は元々怒りが持続しない。嫌な事あっても寝れば収まるタイプだ。

一通り調理場の様子も見れたし、後は食材だね!

どんな種類があるか見たかったけど私は『存在しない』存在なので、メインの調理場を窺い知ることは出来ない。なんかいい手はないものか。

「そうですね! おねーさま!! 朝、城下の市場に行けばいいじゃないませんか? 髪さえ隠せばカケル様と同じ黒髪が分かりませんから」

ちよつと! いつの間にアナタからおねーさまと呼ばれることに?!

あまりの変わりように、私がついていけません。

「えー、外には出てっちゃっていいのかな?」

「朝市なら、人も多く紛れるってもんですわ。おねーさまの世界

と同じような食材を、自分の目で探す事が出来ますし」

「それもそうね……カケルが良いって言ったらね」

一応私はこの世界の初心者。おっかないからまずはカケルの判断に任せよう。

部屋に戻ると、ユーグさんは居なかった。

待っていたジェネシズさんが言うには、家臣の一人が不穏な動きをかねてから見せており、網を張り餌を撒いて、充分証拠が揃った所で翔は家臣を呼び出して殴り飛ばしたらしい。

「どんだけ暴君だよ！」

「拳で語り合う系なのか?!」

そんな滅茶苦茶な沙汰も、人気の一つらしい。いいのかそれで。だから、ユーグさんはその滅茶苦茶な事後処理に回っているらしい。ここでもやりっぱなしの散らかし大魔王降臨だ。

「それで、どうしてこんな事になっているんだ？」

「さあ？ 私にも分かりませんが懐かれました……」

私の腕にはサーラがごろにゃんと引っ付いている。うん、可愛い。そんな姿を見てジェネシズさんは眉間の皺を指でグリグリと押す。

「サーラが懐くのはユーグだけだった。よくもまあ短時間でそれ

だけ懐かれたもんだな。 サーラ、ウンノに着替えと湯浴みの準備をしろ」

「はあい。 おねーさま、一緒にお風呂入りましょう！ ね？」

言われたことには素直に従うんだね、えらいえらい。一緒に入る約束をした後、サーラは支度をする為扉の外へ出て行った。

「ウンノ、これからは私をジエネと呼べ。ウンノの身分はレーン国の私の幼馴染の十六歳の弟と言うことになっている。たまたまラスメリナに来ていて、そこに来た私の従者として仕える事になったという筋書きを整えてある」

「ジエネさん」

「ジエネ、だ。幼馴染の弟なら、敬称はいらん」

うーん、言いづらい。こんなカツコイイ人に慣れ慣れしいだろ私。

「……ジエネ」

「それでいい」

そう言っつて、頭をよしよしと撫でられた。ぎゃー！ それ反則でしょうー！！

武人らしき厚い手の平は、温かい。心まで温まるようだった。私は人に甘えるという事がないため、この「頭ヨシヨシ」は憧れの行為。それが今まさに行われているという……！！

湧き上がる血液と飛び跳ねる鼓動をなんとか押さえ込みつつ、先ほどの自分の役どころを確認する。

「ええええーと、私は十六歳のウンノ。ジェネの従者。幼馴染の弟……」

「従者という者は主の世話だ。よろしく頼む」

「はいっ」

「ラスメリナの城下には私の部下が待機している。明日の夜に指定場所に落ち合うことになっているからそれまでこちらの生活習慣など、サーラに聞くといい」

「わかりました。そうだ、明日の朝、城下の朝市見たいんですけどいいですか？ 翔に夕飯作ってあげたいんです。でも食材がどんな物があるのか私には分かりませんし、目で見て確かめたいと思います」

「そうか、ならば私が同行しよう」

「ええっ！ そんなあっさり。いいんですか？」

「私はウンノの手料理を楽しみにしているんだ。カケルから聞かされる度に非常に羨ましく思い、それがいよいよ現実となるなら城を抜け出す位どうということはない」

「うわあああ……」。

「これって、口説き文句じゃないの?! うっかり落ちちゃいそうだよ！」

そしてジェネは片膝を付き、左手を自分の胸へ、右手は私の右手

を取りキスをした。

「ひゃっ！」

「これは騎士の礼だ。私は貴女を守ることを魂に掛けて誓う。私に守られてくれ、ウンノ」

ジエネに守られる前に、私は心臓破裂で死にそうです。

僕はこの世界に初めて来たのは、確か高校入学してすぐ位だったかな？ 何となくひよっとしていつか……？ という期待があった。ねーちゃんと二人でよく読んでいた、異世界トリップ物のファンタジー小説がいよいよ僕が体験できるんだー！ と興奮したねっ！ 落ちる予定の場所はホントは違う場所らしいんだけど、ちよっとした座標の狂いである女性のベッドの上に落ちちゃったからさあ大変。

いやー、焦った焦った。思い出すのも面倒なくらいに荒れたし、追われたし、殺伐としたやり取り合った中、何とかなったからいいよね？

世界を消したい位、腹が立つたけどさ。

そんな時にジエネと会って、大親友と呼べる程仲良くなった。ジエネ居なかつたら、僕は多分この世界を愛することなんて無かった。ジエネはこの世界の恩人でもあるんだよ？

男の僕から見ても武人として優れた体格をしていたし、見目も良い。あの深い海の底の様な瞳は僕のお気に入りなんだ。無表情に見えるけど、内面はとても感情豊かなのも知った。

ちよっとしたトラブルがあつて、僕が現実の世界を行ったり来たりしなきゃ行けない時にジエネが国の厄介事に追われ、不味い立場に立たされたとき、僕が助けに入った。

『僕の大親友に手を出すなよ』ってね。

ちよつと暴れすぎちゃったけど、まあいっか！

その時の事を話そうとすると、ジエネは何故か苦い顔して目をそらす。えーなんだよー。ちよつとアレしちゃっただけじゃなかー。

ま、その事件が『貸し』としてある。

僕は貸しも思っていないけど、ジエネは義理堅いから。

隣国との関係が、きな臭い。

ラスメリアの国は平定したけど、無茶苦茶辛くて苦しい戦いだっ
た。その間国境付近で争いも起こり。

僕はちよつと国を離れるには時期的にまずいんで、ここは一つ、
ねーちゃんを巻き込もうと思った。僕の身内なら、間違いなくジエ
ネは命を掛けて守るだろう事を見越して。

だって僕にはまだ持てる駒は少ないんだもん。

ねーちゃんは、小さい頃から家事全般こなしていた。双子だけど
姉という立場があつたし、世間でも「しっかりしてるね」という目
で見られるので、余計に自分を律した。

僕は手伝おうとしても「翔はその分勉強や運動頑張つて、上を目
指してね」と一切やらせてくれなかったんだよね。オマケにバイト
もいくつか掛け持ちして。小さい頃ホント貧乏だったから、貯金が
ないと不安だそうだ。

かーちゃんは出張が多いから、甘える相手なんていなかったし、
傍で見ている僕としては逆に辛かった。

そろそろ、いい事あつてもいいんじゃない？

ほんの少し。僕のささやかな期待もあつて、僕をこの世界に召喚した魔術師を呼んで魔方陣を組んでもらった。

契約は「レーンの王様にて国王謁見が成功を収めること」

召喚は成功し、ねーちゃんはジエネの腕の中に落ちて。

その姿を見て僕は安堵した。

……良かった。

アホな家臣を殴りつけたあと、ねーちゃんの部屋に戻ったらジエネだけがいた。

どうやらサーラと仲良くお風呂に行ったらしい。

えー、あのサーラを手懐けるとは！ 流石の僕もビックリだ。サーラって実は暗殺者集団『アンザス』の構成員なんだよね。四つの頃からその稼業に手を染めてるから、世間一般の常識に欠けてるっていうか……その所ユীগが教え込んでるんだ。つーか、あんな事まで教えなくてもいいのに。バカッブルめ。

ジエネは、明日城下の朝市にねーちゃんと買い物に行く約束をしたらしい。

僕の為に、夕飯を作りたいから食材を選びたいんだそうだ。

ジエネと一緒に安心だし、一応目立たない格好してね？ って言ったら、勿論だと剣の柄を軽く握りながら言った。ジエネがこの仕草をする時は、剣に誓いを立てた証だ。言葉にしなくても伝わる。

ジエネシズ、よろしくね？

僕がお茶を淹れてたら、お風呂から二人帰ってきた。

ほんのりと上気した顔のねーちゃんは、普段全く色気の無い姿からは想像できない程艶めいていた。夜着であるキャミソールタイプのワンピースがシンプルなだけに、ねーちゃんのスタイルの良さも際立った。でも出来ればそのタオル、首に引つ掛けないで欲しかったな。この辺に色気のなさの原因があると僕はおもっている。

未だに彼氏がない事を嘆いてはいたが、僕としてはいなかったことに感謝してる位だ。下手な男なら僕は納得しないからね。でも相反して『世の中の男の目は節穴か！』と怒鳴りつけてやりたい凶暴性もある。

「すごいね翔、温泉が湧いてるだなんて！」と感動するねーちゃん。そう、ここは温泉が湧いていて僕は王様の権利を行使して最優先で温泉風呂を作らせたんだ。源泉掛け流し。

日本の心は温泉にあり。

安全の為に、サーラはそのまま一緒にベッドで寝ることになった。ジエネは隣接する部屋へ。

部屋へ行こうとするジエネに、サーラは何事かニコニコしながら囁いた。すると、ジエネが固まり、うつすら耳が赤く染まった。わー、めずらしい！ 何言っただよ教えるよ。

うふふー内緒ですーって逃げられちゃった。まあいいや、いいもん見たし。

明日の夕飯。ねーちゃんの手料理。楽しみだ。

s i d e ジェネシズ(前書き)

今回はジェネシズ視点です。

Side ジェネシズ

朝、ウンノの部屋を訪ねるとすでに支度を終えていた。華美な装飾の無い町娘風の上下ひと続きになった外衣で、それに色を合わせた前掛けをつけ、頭には労働をする女性が良く付ける一般的な帽子で髪を覆っていた。下手に顔を隠すとかえって気になるもの。遠い田舎から貴族の屋敷に出稼ぎに来たという体をとった。

サーラが衣服の手配をしたが、無難に纏まっていて安心した。アングラスでの教育では変装も教え込まれているので外す事は無いようだ。周囲から目立つ要素が全く無く、これならば外出してもいいだろう。

そこでふと思い出してしまった。

昨夜の湯浴みの後は非常に目のやり場に困った。

カケル達の世界では、あまりにもな奔放すぎる位の衣装が多いらしい。こちらでは肌を見せることは恥とされ、手首足首すら隠すもの。それが「このキャミワンピ肌触りいいねー」と、腕と膝下の肌を晒して現れたので、普段から物事に動じない俺も流石に参った。カケルから無愛想だと言われるこの顔が、今は一番俺の中で頼りになる。

俺はカケルの姉を召喚するのは反対だった。カケルは姉を溺愛しており、どれだけ良くできた姉かを何度も何度も聞かされた身としては、それならばわざわざ危険な役をさせなくてもいいのではないかと。我が国は、俺が言うのも憚れるが醜い争い事が多い。そのせ

いで俺は振り回されてきたから。

するとカケルは、「今回のことは、ジエネから貸し分もらうからね」と半ば強制的にカケルに対してあった『借り』を取られる事となった。

あの『借り』を盾に取られるならば、俺はもう何も言えなくなる。

それだけ、俺にとって大きな借りであるから。

俺の従者としてこれから行動をとるのだから、俺がまず女性扱いせぬよう最初からあえて名前を呼ばず『ウンノ』と呼んでいた。カケルは王となりこちらの世界を主軸とするだろうが、姉の方は帰すと聞いた。だから俺は深く関わりあうつもりはなく、一線を引いて契約を遂行するだけだった。

「これは騎士の礼だ。私は貴女を守ることを魂に掛けて誓う。私に守られてくれ、ウンノ」

こう言ったのも、カケルから頼まれたから。

先ほどの書類の最後に書いてあったのをユーグが小声で伝えてきた。

姉ちゃんは甘えるのが苦手だから、甘えさせてやって？

変に情が移ると取り返しがつかなくなると、そんな風に片隅で思うのも俺としては不思議な感情だ。

明朝城下の市へ行く約束をし、部屋に戻ろうとしたところサーラが耳打ちしてきた。

「シヨークさま、ウツトリする程の肢体ですわ。特に胸の形が素晴らしいです」

そんな事俺に聞かせてどうする！

市が開くのは日が昇る時。ウンノと共に俺は城下に向かった。カケルと同じく、こちらの世界の事は物語で知っていて歴史的な事変などにはとても詳しくだったが、日常生活についてはとても疎い。

ウンノは「こんなに味気ない食事だとは！」と憤っていたが、俺たちにとつてそれが普通の食事なのだから特に不満はない。しかし、カケルが「ねーちゃんの作るご飯食べたら、よそで食べられなくなるよ？」と食事を取る毎に言われ続けていたので、いつしか姉の料理に焦がれるようになった。それが今夜叶うとなると、今回の召喚に感謝してもいいだろう。

色とりどりの野菜や果物、獣肉、スパイス、ハーブ。
豊富に並ぶこの市はラスメリナー賑わう朝市である。

「これだけ食材揃っているのに、何故工夫しないのかしら」

ウンノは珍しげに視線を彷徨わせていたが、人のよさそうな売り手の女性に話しかけた。

「すみません、私田舎から出てきて分からないので教えてください。こちらの丸い緑の……？ ああ、マッサロというんですね？ どうやって調理したらおいしくなりますか」

なんのてらいもなく、知識の無さを恥じるでもなく。
臆することなく話しかけるウンノに後で聞いたら

「わが国にはね、いい諺があるんです。『聞くは一時の恥、聞か

ぬは一生の恥』『百聞は一見に如かず』。良く知ってる人にどんどん聞くのが早いつてもんですよ」

柔軟な考えに感心した。一般的には自らが知りえぬ物に関して、自尊心が邪魔をして決して他人に尋ねるなどの行為はしないものだ。

全く、この双子は面白い。

我が国で無くしたと思っただ感情を思い出させてくれる。

買い物を終え、調理場に食材を置いた所で俺はサーラと交代した。部下達との打ち合わせがある為だ。ウンノはそのまま料理する為調理場に籠るらしい。サーラがいるのでその場を任せる。

今夜の食事には、カケル・ユーク・サーラ・俺の四人でウンノの料理を囲むらしい。

夕飯までに、精一杯腹を空かせていこうと思う。

1 ラスメリナで夕食を

まあ、こんなもんかなー？

買出しを終え、調理台に並ぶ食材を眺めて呟く。異世界の食材は物珍しく、ついつい長居をしてしまったのでこれから超特急で調理をしなければ。日本独自の米味噌醤油が無い為、私が出来る範囲はかなり狭いけど、なんとかなるかな。

基本的な調味料も似たような物があり、それに沿って献立を考えた。

まずはダシを取らなきゃね。

極彩色ではあるが、鶏つばいのを一羽。流石に丸ごと捌いた事は無く、さてどうしてやろうかと思っていたらサーラが。

「あら、私がいりますよおねーさま。さつじ……いえ、に……くを削ぐのは得意なので」

おやおやなんだか危ない単語垣間見えましたよ？！

深く聞いてはいけない気がして、あえてスルー。

サーラは、言うだけあってとても刃物の扱いが上手かった。何か違う使用方法を想像できるほど。ただ料理はしたことが無いらしい。またこちらに帰ってきたら、料理と一緒に作るうと約束した。サーラは大好きなユীগに料理を作って、一緒に食べたいそうだ。

肉を取り終えた鳥ガラを大きな鍋にいれ、いくつか野菜と共に煮込む。

昼食には、軽く食べられる卵サンドを作った。パンはベンチタイムが長いのでその時間を利用して色々できるので助かる。マヨネーズも、卵黄、酢、油さえあれば簡単に出来てしまうし、翔がマヨラーなのでこれは欠かせない。マヨネーズは正義だ。

丁度そこへジエネがやってきた。夜に出発するので仮眠を取るように言いに来たらしい。翔に卵サンドを届けてもらうように頼み、更にもう一包み渡す。

「これは？」

「はい、ジエネの分です。翔の好物で、お口に合うか分からないけどよかったですらどうぞ」

「……実は昼も抜いて夕飯まで待とうと思っていたんだが、ウノの手料理ならば喜んで頂こう」

ぎゃーーーー！

なにその過剰な期待!!!

しかもね？ しかも、ジエネってばほんのりと口角が上がってます!!! 笑ってますよこの人!!!

サーラはそんなジエネをみて「あら珍しいわね」なんて、ニヤニヤしてた。これだけ楽しみにしてもらえるんだから、結果を出さないよね！ よーし頑張るぞ！

サーラに火の番を頼み、合間に一時間ほど昼寝をした。

その時間に生地を仕込んであるので、丁度なじむ頃合だ。再び調

理場へ戻り、最後の仕上げへと掛かる。

作っている間に、サーラから隣国レーンの話を聞くことにした。私や翔が知っているのは、どうやら二代前の王様の物語らしい。

『精霊姫と騎士の旅』の時代だ。だから今現在どのような様子か全く分からない。

私が覚えている内容と現在をすり合わせる。

レーン。

ラスメリナとの国境は、竜の背骨という名の幾つも連なり続いている山々である。過去の話では、物流が盛んで開かれたルートがあり、集落も点在し、山越えも楽にできるよう整備されている。その後森を抜けたら草原が広がり、レーンの城郭都市が見えてくる。その堅牢な城の背後は海が広がっていた。この城を落とすことは、どんな勇猛な将にかかっても出来なかつたらしい。

『精霊姫と騎士の旅』の物語で外せないのは、まさにその題名にある精霊姫。地・水・火・風・光・闇、全ての精霊を従える伝説の姫。その姫とレーン国騎士のラブロマンスであり、アニメ・ドラマ・映画全てにおいて興行収入ナンバーに輝いていた。あれは憧れたな！。

今もまだ精霊姫はいるのかとサーラに聞いたら、いない、と。まあそつだよな、ずいぶん昔の話だし。

するとサーラは「今いない、というのが異常なのです」と野菜の皮剥きの手を止めて目を伏せた。

「精霊姫が不在となり解放された精霊達が不安定で、さまざまな天変地異が起きているそうですわ。レーンの国に限ったことでなく、こちらにも被害の報告があるので怖いです」

精霊の姿が見えるのは、神官職や一部の能力者だけ。『精霊姫』を失った精霊達を抑えるのに忙殺されているらしい。

ラブロマンスの後日談がこれじゃ、あの主人公達は悲しく思っているだろうな。

話しながらも手は動いていたので、程なく完成した。

正直、ごく立派な料理ではなくてごく普通の一般家庭の料理だから、翔以外の口に合うだろうか心配だ。

サーラと料理を並べていたら、翔とジェネがやってきた。

「うっわー、うまそー！　ねーちゃん、ひっさびさの中華だねー」

「うん、ここの食材で作るなら中華かなと。こらっ！　ツマミ食
いしないの」

翔が伸ばした手をピシッと叩き、椅子に座るように促した。すると翔はすすすつと近寄ってきて、いつものヘラっとした笑顔を向けてきた。

「ねーちゃん、弁当ありがと！　久々この味食べられて嬉しかったよー！　ジェネがね、とっても感動してた。できる事なら毎日食べたいって」

「あら、毎日食べたいだなんて！　どんな意味を持つのですか？　うふふ」

「サーラー！」

ジェネが叱るようにサーラへ言うと、そのサーラは「ユーグたんを迎えに行つてきまーす」とひらりと扉の外へ出て行ってしまった。少し気まずそうにしたジェネは、それでも翔子へ声を掛ける。

「ウンノから貰ったあの『卵サンド』、あのような味は今まで食べたことが無く、二十七年生きてきて一番美味いと思った。また作ってくれ」

こんな端正な顔立ちの人に真摯な目でじつと見つめながら褒められたので、翔子は照れてしまったのをごまかす為につい翔を一発殴ってしまった。「ぎゃー！ いてえよねーちゃん暴力反対！」というのは聞かなかったことにする。

「あの味はどうやって出してるんだ？ 今まで味わったことが無いのだが」

「マヨネーズの事かな？」

「それ、サーラも聞きたいですわ！」

ユーグにお姫様抱っこされながら（なんで？）帰ってきたサーラが勢いよく手を上げながら聞いてきた。

「あのまったりとしてるのに少し酸味があつて、それでいてクドく感じさせない味わいの秘密を知りたいです！」

「どこの料理評論家だよ！」

「サーラさんに作り方教えてあげてください。今度愛情たっぷり作ってもらおうと思います」

ユーグさんはお昼は出かけると言っていたので渡せなかったのだ。

「わかりました。では食事をしながらお話ししましょ。冷めてしま

いますからどうぞ席についてください」

席順は、翔がお誕生席で（王様だし）、ユーグとサーラが並んで座り、私はジエネと並んで座った。料理と食べ方の説明をする。

「まず、こちらがおおよその材料で作った^{ライメン}拉麵。^{ハンバンジー}棒棒鶏風のサラダ、味的には合ってる餃子、エビらしきもののマヨネーズ炒め、キヤベツに似て非なるもののピリ辛炒め、最後に中華ポテトちつくなものです」

「ねーちゃん、大体で言うなよ……」

少し呆れた口調で翔は言うが、しょうがない。だって『っばい』
味で探したものだから。

「麺が伸びちゃうんでどうぞお早めにお召し上がりください、箸も作ってありますが、フォークでもなんでも使い易いのでどうぞ」

私と翔は「頂きます」と手を合わせ、ユーグとサーラは軽く目を閉じ、ジエネは左手を自分の胸に当て（これ騎士の礼の時にもやってたな）なにか呟いていた。国によって形式が違っただね。

私と翔以外は、流石に箸は難しいようで、ナイフとフォークを上品に使いこなしていた。逆に私はそっちのほうが難しいです。

「それで、マヨネーズの作り方なんですけど、卵の黄身を一つ分として量を決めるなら、そうですね……このスプーン一杯の酢を入れてよくかき混ぜます。完全に混ぜたら、うーんと、このグラス

くらいかなー？油を、ほんの少しずつ、ゆつくりとかき混ぜるの。このゆつくり、がポイント。最後に隠し味としてほんのつまみ砂糖を入れて完成」

私はエビマヨ炒めを食べながらレシピをサーラに伝えた。サーラは一生懸命にメモを取る。ユーグの為にがんばるんだぞ。

話している間に、翔とジエネは拉麺のお代わり。麺もスープも多めに作ってあるし、麺の湯で時間は二分程なのですぐに出来上がった。

いつの間にかジエネは翔に聞きながら箸の使い方を覚えていた。大きな手で箸を持つとなんだか微笑ましいが、異世界で衣装も違って武人の美青年が箸を使うってのはかなりヘンテコだ。でもいいのだ。イケメンは何でも許されるからね。

全てが綺麗に食べつくされ、食後のお茶は翔に淹れさせた。一国の王だろうがなんだろうが、私は姉の特権を行使する。だって、美味しく飲みたいし。

この紅茶らしきものには、市場からの帰りに草むらで見つけたハーブのステビアを入れてある。この葉は甘味が強く、砂糖要らずで低カロリー。ダイエット中には最適の天然甘味料なのだ。

「おねーさま！ このお茶も甘くて美味しいです！！」

サーラがベタ褒め。乾燥させておいて、いつでも使えると教える。「明日沢山採ってきます！」と張り切った。

そのサーラを見て、ユーグさんは目を細めながら「可愛い子だ」と、サーラの口の端についていた汚れをペロリと舐め取った。

そついでに、自室に戻ってからやってください、幾らでも！

1 いざ国境へ

翔とジエネも所用の為出かけ、私は今のうちに用意された服を着ることにした。

男として従者としてジエネについていくために男装は必須。

「ドキッ 男だらけの騎士団！ (ポロリもあるよ)」

自分で思いついたくせに、「何だよポロリって！」って思わず突っ込んでしまった。

……まあ、そんなハプニングに遭遇する確立むっちゃ高いけども、つまり騎士団に潜入してレーン国王に会う機会を窺うのだ。食事の席でも色々聞いたが、正攻法ではとても会える状況ではないらしい。今の王はまだ即位して二年にも満たない若干十六歳だという。傀儡政権^{かいらいせいけん}を狙う腹黒じじいども (翔が言った) が自らの手下を配置して年若い王を困い、許可無く王に会うということは至難の技といえる。

(……どこが物見遊山気分よ)

これから向かう私としては、平穩無事に済みそうに無い旅に、陰鬱な気分になる。

頼れるのはジエネシズだけというのも、不安はある。

(まあ、ずっとジエネにくっついて、お世話すればいいのよね)

シーツを加工して作ったさらしで胸をつぶし、ウエスト辺りは持参したタオルを巻く。成人式の着物でも、寸胴が良いとされる体型に補正するのと似てる。ジエネズと似たような服を着て、髪はそのまま一本結びをした。男性が髪を伸ばしているのは良くあることだから、特に問題は無いらしい。

あとは自分の手荷物の中から厳選した物を小さな化粧ポーチに突っ込み、用意されていた必要最低限の着替えと共にシヨルダーバッグに入れて、完了だ。

本日二十三個目のボンヤリとした光の丸い球体が、山の稜線から顔を出した。

(……………)

その球体をみて、なんともいえない気分になるね。

だって、ほかにあと五個は浮かんでるんだよ？ 夜空に！ 月じやなくて、丸い球体。

昨夜はあまり外を見ずにそのまま寝てしまったが、朝ジエネと城下におりたときにそりゃ驚いたよ！

太陽が六個浮かんでる！！！！！！

あまりの天変地異振りに度肝を抜かれたけど、ジエネが言うにはこれが普通だそう。二十四個の球体があり、それぞれ柄が違う。常に六個は空に浮かび、地平線から顔を出す球体の柄によって時間

を知ることができらしい。大体十二個前後で昼夜が変わり、季節によってそれが十個だったり十四個だったりとするそう。

はー……。

改めて異世界なんだなと思い知った。知ってる本には書いてなかったな。自ら体験してみないと分かりえぬ事が多い。

今私がいるのはここラスメリナの城における内堀を渡る橋の手前だ。城外へでる外堀を渡ると、ジエネの部下が待機しているらしい。

「じゃあ、ねーちゃんよろしく！」

ニコニコと私の肩を軽くポンと叩いた翔は、「ああそうそう」と自分の右手小指に嵌めていた指輪を私に寄越した。

「これ、まあお守りだから付けてって？」

「……？ うん、わかった」

笑顔だけど目が真剣なので私は受け取り、右手の薬指が丁度良かったのでそこに収めた。

ユーグさんは「無事に戻ることをお祈りしています」と、涙でぐちゃぐちゃ顔を濡らして泣いているサーラの肩を抱き寄せながら言った。

私はサーラの手をギュツと握って「帰ったら一緒に料理するからね！待っててね！」と、にっこり笑った。

大丈夫、またちゃんと戻るからね。

「さあジエネ、行きましょう！」

「いいのか？」

クルリと皆に背を向けた私に、ジエネは尋ねた。

「いいんです！ 決心鈍りますから早く行っちゃいませう！」

「そうか」

「ジエネ、頼んだよ？」

翔の声掛けに、ジエネシズは剣の柄をグツと握り

「行ってくる」

と一言呟き、私と共に並んで歩き出した。

月明かりがほのかに照らすラスメリナ外堀門の傍にある木立に、二人の人影が見えた。

「ジエネシズ隊長！ お帰りなさいツス！」

「竜船は？」

「はい、少し奥の茂みに繋いでありますツス！」

ヘンテコな敬語でジエネに言いながら、私の方に目を向けた。「だれだこいつ？」みたいな。

「ああ、私の従者として使えることになった。イル・メル・ジーン
の弟でウンノだ」

「…………げっ」

え。

ちょっと引きつってます？ ツーか、今明らかに「げっ」って言うてましたよね。イル・メル・ジーンさんって何者？ ジエネの幼馴染って言うてたけど。明らかに関わりたくないオーラ出てますね。

「…………まあ決まったことならしょうがないツス。あの人の弟にしちやずいぶん可愛い子っすけどね」。隊長、従者をやっとなつけるこ

とにしたんすスね。これでやっと隊長の魔窟部屋が片付く！ 隊のみんな喜ぶだろうな。ゴホン、俺はバツ・ランカートン。よろしくなっ」

ずっと手を出してきたのは、明るい茶髪に水色の瞳をした第一印象は体育系部活動などにいそうな、「おいっ、あと一点で逆転するぞ！ 頑張っていこーぜ！！」と激を飛ばすような盛り上げタイプ。

「よろしく」と、軽く手を握り返しもう一人に目を向けると、腰が砕けそうになった。

(何なのこのナイスミドルは！)

四十代までにはいってないだろう見た目だけど、ありえないほど色気がムンムンしてた。そう、ホントにムンムンという表現が合っている。深緑色の髪を丁寧後ろへ撫で付けてあり、同じ色の瞳は見ただけで天国へ召されそうである。「フェロモンビーム！」と叫んで、目からピンクの光線出してもちつとも不思議に感じないだろう。というか、見えないだけで常に出ているのかも。戦闘の傷であるとか、額と頬に大きな切り傷があるが、それもまた色気のレベルを上げている。ワイルドさ+二みたいな。背も高く、ジエネより拳一つ分出ているかな？ 私が百六十二センチなので比べてみると、バツが百七十二、ジエネは百八十五、フェロモン星人百九十弱、と大体の見当をつけた。

いやあでかいでかい。

騎士団だけあって鍛え抜かれた体躯をしている。しかし……その首のキスマークらしきものはなんだろうね？「さくやは おたのしみでしたな？」と聞いてみたくなってしまった。藪蛇間違いなしだろうけど。

「私はハルドラダ・メツシだ。あいつにこんなに可憐な弟君がいただなんて……信じられん。隊長、ウンノは本当に男ですか？ 私には女の子としか見えませんが？」

「うわー、いきなり来た！」

「そりゃそうだわ、こんな百戦錬磨（主に色恋沙汰）の手だれに、男女の違いなんて一目瞭然だろう。十六歳設定だけど、思春期なんてとづくに通り越して、成人もしちゃった二十三の女ですからね。こんなアツサリ見破られるのも困るしなんとかしないと！ なんとか……なんとかか！！」

「俺も、ちょっと男にしたら線が細すぎると思っくんすけど」

「バツツもそう思ったか」

「あの……」

「なんだウンノ、やはり女だと認めるのか？」

「いいえ違います！ 実は……僕、女の子になりたい……んです。単身ラスメリナに来たのも、その方法があるかもしれないと聞いたからです。探してる最中資金が付きてそこをジエネに拾ってもらいました。実家には頼れないし、従者やってお金を溜めようと思いまして……」

「そ、そうか。疑ってわるかったっす」

「い、いえ」

く、く、く、苦しい言い訳……！！

苦し紛れに言った『女の子になりたい男の子設定』を、ハルドラーダはまだ胡乱げな目つきでこちらを見る。うわー、その顔も素敵過ぎる！ ずるい！ 心のカメラで激写しておこう。
そんなハルドラーダの様子をジェネはさえぎった。

「…………ハルド、ウンノはそういう事情がある。なにより、イル・メル・ジーンの弟だからな」

「そうか…………あいつの弟…………。分かりました、そういうこともあるでしょう」

あるんかい！

弟っただけで、怪しすぎる私を納得できちゃう程の人物なのですか？ イル・メル・ジーンさんってば。

あー、それにしても何だよ私その『女の子になりたい男の子設定』って！ ただでさえ従者として付いていき、王様に書簡を渡すという難題に自らイタい子の役割更に振っちゃうってどうよ？！

人に掘ってもらった墓穴を、重機使つてより一層深い穴開けちゃった自分。ついその穴へ埋まりたくまりました。

私達は、翔の用意してくれた『竜船りゅうせん』に乗る為、バツツの案内で竜船が繋いであるという場所へ向かった。竜船で何だろうと思っていたら、ジエネが「背中に乗って飛行できる竜のことだ」と教えてくれた。

へー、そうなのか。私が知っている知識は、二代前の時代しか分からない為「今時の若いもんは」なんてつい口に出してしまっている。

自分の感覚で十分くらいだろうか。思ったより遠いしなんだか山も見えてきて、これ登るのかなあなんてうんざり思っていたら

「風竜よ、ジエネシズだ」

とジエネがその山に向かって声を掛けた。すると、その山の麓からスツと大きな首を持ち上げたのは……竜だった。

「ええっ！ 山だと思ってたのに」

かろうじて悲鳴は押さえ込んだが動揺は隠し切れず、思わず上げた声は震えていた。

竜。

ラスメリナの国の主役的存在で、この国は竜なくしては語れない。

人々から神の使者として崇められるも、一たび逆鱗に触れると三日三晩は荒れ狂い一面焦土と化す苛烈な面もあり、畏怖されてる。知能も恐ろしく高く、使役しようにも『試し』に認められないとその場で惨殺という例もあるほどだ。

もちろん、年若い竜ならば、ほんの数年のみの契約に気まぐれで人間に使役されることもあるにはあるらしいし、亜種ともなればそれほど知能も高くなく、普通に捕縛できたりもする。そのような竜はラスメリナ軍に配置し、兵は竜騎兵として戦に使うのだ。

しかし このサイズの竜って……古竜よね。気難しいじーさん
竜だよ、絶対！

(娘。主は我の声が聞こえるか)

「ひゃっ」

思わずビククリしてキョロキョロ辺りを見回した。

(娘。我が話してある。お主の心声が煩さくて敵わん。少し黙れ)

ジエネでもなくバツでもなくハルドラーダの声でもなく。というか、耳から聞こえてないような……？ ふと目の前の竜を見やると、バッチリ目が合ってしまった。

(え？ まさか？)

(遅い。そもそも心声で自ら語っているお主が気付かない訳なから)

(……いえ？ 私そんなつもり無くて、ただ考えてただけなんですけど)

機嫌が悪そうな風竜に怯みながらも、身に覚えが無いことに心の中で反論した。

(ククッ……どうやらお主、まだ目覚めぬ者らしいな。これは重畳じようじよう)

不機嫌から一点、愉快そうに笑いを噛み殺した風竜は、ギョロリとした爬虫類な金色の目を細めた(器用だな)

「ウンノ？ どうした」

竜をじつと見ていた私を気遣って、ジエネが声を掛けた。私は慌てて「なんでもありませんっ」と傍に駆け寄る。

「この風竜は、カケルが契約した竜だ。本来ならこの様な雑事をさせる訳にもいかんのだが、特別に許された」

コツソリ私に「ウンノの為だ」と耳元で囁いた。私は耳に伝わるジエネの吐息にざわりと体内温度が上がった。不意打ちだよ！

きゅつと一瞬縮こまった心臓を撫でつつ、契約した竜、という言葉葉を聞き返した。

「この大きさという事は……古竜ですよ？ ラスメリナ王と契約ってどんな『試し』があったんでしょうか」

「カケルから聞いた話では二日戦った上に勝った、と聞いた」

「は？ 勝った?!」

ありえない。古竜だよ？ こんな山みたい大きくて、神の使者って言われる畏敬の存在だよ？ なにその勝負って！ 無茶苦茶すぎだよ翔！！

(娘、煩い)

(うわっ！ すみませんまたダダ漏れでしたか……)

(まあよい。そうか、お主はあやつが言っていた姉か)

(えと、はい。翔の姉です。訳あって男のフリしてますが)

(その隊長の言っていた通り、我はあやつと契約を結び使役されておる。あやつは「ねーちゃんを大事に扱え」と我に言霊で縛りおった)

(御免なさいすみません申し訳ありません)

あまりの翔の暴挙に、つい謝罪も三段階で丁寧になる。

古竜に、翔の口調だろうが「ねーちゃん」と言われて、痒くも無い脇腹がムズムズした。

「風竜、私とこの三人を国境までよろしく頼む」

「承知」

風竜から、低音のくぐもった声が聞こえた。

「しゃ、喋った!!」

心声とやらで風竜と喋ってたから、てっきり声が出せないのかと思ってたよ!

驚いてる私を見て、まさか心声で会話してたと知らないバツツが私に教えてくれる。

「なんだよ知らないのかウンノ。契約した竜達は、会話ができるんだぞ。いやー、うれしいっす! 俺、竜に乗るの初めてで!」

キャツキャとはしゃぐバツツに「落ち着け」と、ゴツンとハルドラーダが拳骨を落とした。アホ認定するぞ、あいつ。

うーん、ひよっとして心声って私にしか聞こえてないのかな?

(そのようだ娘。我も暫く心声を聞いておらず、つい懐かしく声を掛けた。とにかく乗れ。目的地まで送ろう)

そう言つて(？)風竜は尻尾の先を、たたりとこちらに寄越した。ジエネはその尻尾の先から、竜の翼の生える付け根の背中に向かい登つていく。うわ、竜の鱗つてツルツルしてて滑らか！ ぐらつく私に、ジエネは手を寄越し繋いでくれた。厚みがあり、少しかさつた大きな手は私の手をすっぽりと包む。その合わせた手の平から、私のどくどくした脈拍が伝わってしまふんじゃないかと気になつて仕方が無い。

「たーいちよ、過保護ー」

バツツ、からかわないで！ その声に動揺して滑つて落ちちゃうよ！

「うるさい、黙つて来い」

バツツの茶化しに一喝したジエネは、体の固定をする為の紐を手繰つていた。

ちなみにフェロモン星人であるハルドラーダは、むやみやたらに放出される色気を抑える為の眼鏡を今はしている。

この眼鏡は、動物の角を薄く切り出し、薄く延ばして光が透けて見える程に磨いた物をレンズにしているらしい。サングラスっぽいのかな。ハルドラーダは眼鏡を掛けることによりおよそ六割の色気を抑えられるという、なんとも本人以外には非常にありがたい一品だ。

漫画の世界には、眼鏡を外すと絶世の美少女だった！ というお決まりの設定があるが、実物は初めてだ。男だしおっさんだけど。夜はやはり暗い為見えづらい為外しているが、耐性の無い私がいだ為、ジエネが掛けさせた。

あの色気はホントにただ事ではない。私なんて色気があるなんて

一度も言われたことないし自覚もある。あのフェロモンビームを受けたら、赤子はたちまち歩き出して抱きつくであろうし、老人は魂を天に召されてしまう事は確実。これは是非私も見習うべきであろう。そうだ、師匠と呼ぼう！ 心の中なら問題ない。ハルドラーダ師匠、心の弟子これより色気修行頑張ります！

「ク……クク……ク……」

風竜が体を震わせて笑いを堪えていた……しまったー！ ダダ漏れだったー！

「風竜？」

何事かと尋ねるジエネに、風竜はサアツと翼を広げた。

「いや。我は久方振りに愉快的気持ちになった。ククク……。さあ行くぞ。落ちぬようしかと固定せよ」

ジエネとハルドラーダ師匠は、初めて竜に乗る私とバツツに竜船用の紐を括り付ける。命綱だね。

「準備はできた。ウンノ、バツツ、しっかりつかまるんだ」

「うわー……怖いー！」

むくりと立ち上がる竜は、もうそれだけで高い！ 眼下に広がる景色は観覧車から見る景色に非常に似ている。ただ一点、囲いが無いって所が大違いだ。

大きく何度か翼をはためかせ、グツと足を踏みしめ一気に飛んだ。一瞬ふわっと気持ちの悪い無重力状態を感じて目がクラクラした

が、速度と共に自分に当たる風の冷たさにブルッと震えた。

(寒い！ そうか、いくら初夏といっても高度もあるし、風が体温奪っていくから冷えるんだ)

「ウンノ、大丈夫か？」

心配して声を掛けるジエネだけど、竜に振り落とされない為片方の手は綱に、片方は私を支えている。
寒いのは皆一緒だから我慢するけど……どの位の時間で着くんだろ？

(娘、寒いか)

(それはもちろん！ でも送って戴けるだけありがたいですし、我慢します)

(……お主なら簡単な事だろうに。目覚めぬものとは不便だな)

(さつきも言っていました……何ですかその『目覚めぬもの』って)

(自覚無き者に話しても無駄だ。いずれ分かるだろう)

それきり風竜は黙ってしまった。答える気が無いらしい。
なんなのそれ。全くわからない。

私は、地球世界でリストラされてこれから転職予定の単なる二十三歳なんです。あー、なんでこんなところにいるんだろ。時間軸戻してくれるってただけど、私はいつまでここににいるんだろ？

一ヶ月ほどで済めばいいが、数年単位だとすると、例えばコッチ

で私は三十超えちゃってて、元の世界に戻ったとき、戸籍上の年齢は二十三のままで……歳ごまかしてるって言われちゃうんじゃないんだろうか。それは勘弁してもらいたい。早く終わらせよう！

速度が緩やかになり、徐々に高度も下がってきた。どうやら目的地の国境付近に着いたらしい。

そろそろこの寒さにも限界だと思っていたから、助かった。

またも無重力状態の胃の腑がせり上がる気分になりながら地上に降り立ち、ガチガチに悴んでた手を緩めた私は、ようやく肩の力を抜いた。

再びジエネの手を借りつつヨタヨタしながら降り、辺りを見渡す。ここはラスメリナとレーンの国境となる『竜の背骨』山脈の麓。これよりこの山々を越えてレーンへ入らなければならぬ。流石に一日で踏破できるわけもなく、野宿しながら山登りとなる。

野宿って！ 学生時代の思い出でテント張ったキャンプならあるけど、野宿って！！（二度も言う）

風竜に国境越えた辺りで降ろしてもらいたかったけど、あの大きさでは発見される恐れもあり、余計な刺激は控えたい所なので却下された。

実際の所国境を超えるものには古くからの制約があり、能力の半分は削られてしまうという作用が働き、竜自身も出来るだけ超えたくないようだ。精霊も然り。

つまりレーンの国に数多くいる精霊使い達も、同じく制約は作用されるらしい。

人間には……その制約は掛かっていないらしく、特に国境越えたからどうという訳でもないそうだ。

ジエネ達は荷物を降ろしたりしている。私は手伝う気持ちはあったけど、寒さで縮こまった体で上手く動けなかった。バツツには「しょーがねーなー」なんて軽口叩かれたけど、開き直って熱が戻るまでじっとする事にした。

あー、写真撮りたかったな。夜景モードにしたって光源なんにもないから無理だー。

惜しいなーと思っっていたら

(シャシンとは何だ?)

(風竜さんっ！ えーっと、写真というのは……何て言えばいいのかな。んーと、今自分の目の前に見える風景を、写し取る事のできる道具の事……だと思えます)

説明が伝わるかどうか自分でも不安な為、だんだん声が小さくなっってしまった。

(あの一、またラスメリナに帰ったら、写真撮らせてください。こんな素敵な竜体に乗れた事が嬉しくて、思い出ししたいんです)

(いいだろう。帰還した折にカケルに言うがいい。我は主の命により動くのでな)

(ありがとうございます！)

(娘。……我の真名は見えるか?)

突然風竜が言い出した。

じっと、私を見つめてくる。

なにか試されてる？

私も、風竜の瞳を見つめた。

(集中せよ。我の奥をよく探せ)

そんな事言っただって……と思ったが、風竜の真剣な声に黙って従う。

やがて。

一切、周りの音が聞こえなくなる。目の前がチカチカと光が点滅してきた。

???

突如として脳裏に浮かんだ文字。しかし掠れてよく分からない。

(シュラ……ナ……ギース……ネ……??)

ダメだ、所々しか拾えないや。これ以上は読み取れない。というか、文字が浮かんだ事にビックリだよ！

(なんとも可笑しな娘よ。それだけ出来れば『目覚め』も早かるう。我から『読みとり』の饞別だ)

竜は再び「クククツ」と笑いを零しながら、ふわり……と宙へ浮いた。

「風竜、ありがとうございます」

ジエネが風竜に向かって礼を言った。

「無事に戻る事を待つ」

クルリと来た方向へ体を向け大きく羽ばたいた。

（娘、次会う時は、多少の色気をつけておけ）

と私に向かって言い捨てながら。

よくも言ってくれたな！ あの竜め！！
声に出して怒りたい所だけど、心声の為に誰にも聞かれなかった
ので、心の中で吐き捨てた。

私達は今野営地にいる。

野営地、っていつでも単に地面むき出しでゴツゴツで、草もポー
ポーで虫も飛んでて……。

そりゃそうだ、野宿だからね。のーじゅーくー（しつこい）

ハルドラーダ師匠は火を起こし、バツツは薪を拾いに、ジエネは
『旅の石』と呼ばれる、旅人に必須な呪物を、焚き火を中心として
四角になるよう置いている。

この石は、虫除け、獣除け、魔除けをしてくれるありがたい
呪物なのだ。値段が高くなれば高くなるほど効果が大きく現れる。

私はこれがあると聞いたから、野宿でも良いとなったのだ。

私がこの世で一番苦手なものは 虫。

うわー、自分で言っというて寒いぼ出た！ 想像すらしたくないね

！ あんなのと遭遇したら多分私気絶するだろうな。いやいや気絶なんてしちゃダメだ、意識無い時に寄ってこられたらどうするよ！
自宅にゴ（自主規制）出たときは、翔か友達が来るまで外で待機。その後、徹底的に掃除した。常に部屋を綺麗にしているのは、単にアレが怖いからに他ならない。一匹いると三十匹はいるっていうしさ。

初夏で割と天気も安定してて夜になっても寒くないというのは、野宿にとって一番ありがたい事だけど、それは虫たちにとっても言えることであって……。

あの石、日本に戻る時に翔に買わせて持ち帰ろう！

さてと。

私は、最後の旅の石を置いているジエネの傍に寄った。

「あのージエネ、ちょっとお話が」

「なんだ？」

バツツとハルドラーダに聞こえない距離を確認して、それでも小声で。

「ちょっとお聞きしたいんですけど、普通ですね、竜との契約って一対一で行われますよね？」

「なんの話だ？」

「ですから、竜の真名を知る人間って契約した主しか知らないものですよね？」

「通常そう聞いている。詳しくは知らんが真名というものは、『試し』に認められた人間一人だけに与えられる特別なものだ」

「ですよね……」

それがどうしたんだ？ という問いかけの視線を外し、「それと」と続ける。

「私を沢山使ってくださいね。ジエネの従者になると決めただし、徹底的に通してください。あ、バッツが戻ってきちゃった。ではよろしくお願いします」

一方的に言い切って、私はサツサとちょっと離れた茂みへと向かう。

バッツと途中すれ違い、「どこ行くんだ？」と聞かれ「トイレ！」と元気良く言い切った。

スッキリした所で、火の傍へ戻ると

「ウンノ……女になりたいんだったらもうちょっと憤み深くしろよ。トイレって大声で言うな！ 大体動きがあまり女っぽくない」

バッツからダメ出しされる。

うっ。そっだそんな余計な設定を自ら足しちゃったんだっけ！

「俺はさー、女になりたい気持ちは分からないけど、国を出てま

で悩んでるんだろ？ 頑張れよ、まずは見た目から」

うわー、同情されてる。泣きたい！ 主に『見た目』の所で！

「バツ先輩……どうやってたら女性っぽくなれますかね」

特に色気！ 色気！

「おつ、その先輩っていいな！ お前見所あるぞ。よし、俺お前に協力するぜ！」

そして、『バツから見ただ女性像談義』が延々語られた。

えーん！ もう眠いよー寝かせてー！！

ちよつとした言い訳がこんな珍妙な展開になるとは思ってもみなかった……。

*ジエネシズ視点

ようやくバツツが寝て、静かになる。

野宿は初めてだと言っていた割に、ウンノもアツサリと眠りに落ちた。相当疲れていた様だ。

バツツはああ見えて年下の世話を焼くのが好きだから、ウンノの「女になりたい十六歳の男」に同情したんだろう。あれこれと「女ならこういう仕草をするんだ!」「つーか目がキツイから、化粧して目を加工したらどうだ?」と語っていた。

「早く寝ろ!」と一喝してやっと黙ったが。

しかし。

本当のウンノを十八歳のあいつが知ったら驚くだろう。

十六歳でなく二十三歳の女性であり、ラスメリナ王の姉であり、異世界からやってきた……と。

その様子を想像して、知らず頬が緩んだ。

「若……ウンノは娘ですよ? どういう経緯で同行することになったのですか」

「ハル、それいい加減止めろ。ウンノは俺の大事な友人から預かる人だ。それとなく守れ」

ハルドラーダは俺の十歳上の乳兄弟で、生まれたときからずっと傍にいた為に、嘘は通用しない。最初に紹介した時すぐに疑問を引っ込めたのも、俺の黙っているという意思を読んだからだ。今、娘という言葉に俺は否定をしなかったので認めたも同然となる。

大きく息を一つ吐いたハルは、「それでしたら」と言葉を続ける。

「従者には従者の立場というものがありません。隊長としての態度を崩されませんように」

「私を使ってくれと、ウンノに言われた」

つい先ほど、小声で言われたことを思い返した。

その時、俺は自ら線を引いていたくせに、ウンノの方からも「線を引かれた」と感じた。それでいいはずなのになにか面白くないという感情が、落ちない染みの様に心に広がった。

「そうですね。彼女自身はきちんと立場を分かっているようですね。それならば私はもう言うことはありません。隊長の心次第です」

ニヤリと目が愉快そうに笑う。

「イル・メル・ジーンの妹……何番目の妹ですか？ 私は公式の二十八人しか覚えてませんが地方の子でしょうか？ 今更驚きませんがね。あいつの妹じゃなかったら喰ったのに、残念だな。では私は先に寝ます。交代の時起こしてください」

言うだけ言って、ゴロリと寝てしまった。ほどなくして、規則正しい寝息が聞こえる。

寝られる時に寝られるようにならねば、戦士として使い物にならないため、眠りに落ちるのも早い。

ハルは、小さい頃から美形だ。

十歳の頃から俺に仕えていて、俺は見慣れているが、初めて会う人間は大抵腰が抜ける。または、気絶だ。声を掛けようにも、濃密な色気の為に近づけないらしい。
が。

ハルは根っからの女好きで、自ら誘いよく遊んでいるらしい。たまに男もというのだから、節操がないと思ってしまう。俺は女が苦手だから、ハルは器用なものだと感心する。

あの眼鏡はイル・メル・ジーンからの贈り物だ。

『ハルは何人の人間を駄目にする気？ これでも使え、色魔め』

あいつなりの優しさだろうが、かける言葉は優しくない。

弱くなった焚火に薪を足しながら、炎の揺らめく明かりに照らされたウンノを見る。

女は苦手だ。

依存してくる。ドレスか美容の話が延々尽きず、誹謗中傷の話も多くてうんざりする。白粉を叩いた顔に、キツイ香水のニオイも嫌いだ。

しかし　ウンノは違った。

化粧しなくても整った顔をしていて、猫の目に似た瞳は興味を引かれた物を映す度よく表情を変えた。

ウンノの傍は爽やかな芳香がふわりと感じる。なんの匂いだらう

と聞くと「虫除けのハーブオイルを付けてるんです」といつも持ち歩いていてという小瓶を見せてくれた。

「シトロネラ・レモングラス・ラベンダーを調合してあるんですよ」

ウンノは虫が苦手だといい、それを避ける為の知識も持っていた。

カケルが言っていたように、ウンノは人に甘えない。竜の背に乗る時は流石に俺から手を貸したが、風が冷たくても文句を言わず、野宿をすると言っても「虫さえないければ大丈夫です」と虫の心配がしない。おまけに「私を使ってください」と。

余りに毅然とした態度の為、一人でも大丈夫だと思われがちだろう。

カケルに頼まれた、小さな願い。

俺は叶えることができるだろうか。

小鳥のさえずる音が聞こえる。

朝の、少し湿り気のある爽やかな空気。辺りはつつすらと明るくなっていた。

そうか、ここは山の中だった。

「ごそつと体を起こすと、体のあちこちが痛んだ。こういふ場所で寝るのは初めてな割に、夢も見ずぐっすり寝てしまった自分が意外に嬉しいな、と感心した。」

「起きたか」

ドキリとさせるこの声。ハルドラード師匠だ。朝っぱらから心臓に悪いわ！ 心臓の暖気運転終わってからにしてよ。

ジエネシズは木を背にもたれて寝ていたようだが、声に気付き目が覚めたようだ。

「おはようウンノ」

「おはようございます。あの……すみません火の番……」

「いや、交代制にするから問題ない。ウンノは今夜頼む」

「分かりました。では食事の支度をしますね」

まだ寝ているバツツを起こさぬようそっと立ち上がり、昨日のうちに見つけてあった沢に行つて手と顔を洗い、水を汲んだ。そしてまた焚き火の所に戻つて荷物の中から二つの小さな鍋を出し、水を入れる。

ひとつには、干し肉を細かく刻んだものを目分量でバラツと入れた後、ハルドラーダに頼んで作つて貰つた竈に鍋を当て、もう一つの鍋はそのまま湯をつくる。それが沸く間に先ほどの沢に戻つて色々物色をした。

ここはなんて素晴らしい場所なの！ と軽く興奮するくらいの山の山。

ほくほくとしながら戻り、再び調理を始める。

あまり小説の世界には食事について触れていないが、旅に出るときの保存食として固くて水分を出来るだけ抜いたパンと、干し肉が定番品としてよく出てきた。

いくらなんでも、それだけは寂しい。

折角の山の中だし、現地調達しようではないかと思つたのだ。

幸いにも季節は初夏。そしてこの世界ではハーブが良く見つかった。異世界召喚された人が持ち込んだものかもしれない。日本でも外来種とかよく見つかるし、そういうものかも。

ハーブは根性のある種が多いので、そこかしこに自生をしていた。これから山頂に向かうほどに植物は少なくなる。採れるうちに蓄えたい所だ。

湯が沸き、干し肉を入れた鍋に卵の卵白だけを良くかき混ぜてふんわりなるよう、そつと流し入れる。最後にチャイブというネギに似た味のするハーブを入れて完成。

パンは薄切りにして、細かくした干し肉と、ナスチウムの葉と

クレソンをはさみ、最後に伝家の宝刀マヨネーズ！ 先ほどのスープで使わなかった卵黄でマヨネーズを作ったのだ。

マヨネーズは、卵黄を殺菌力のあるお酢と混ぜて、それをたつぷりの油で漬けてある為に早々腐るものではない。ただ、こんな非日常に持ち歩くものではないから今日明日中には使ってしまった方がいいけない。

ついでに卵の事をいうなら、常温で一ヶ月は持つ。山越えには三日程度かかるらしいので、そこまで気にすることはないんだけど。

マヨネーズを作る様子を興味深そうに見やるジェネに、こう説明した。

ジェネはラスメリナで卵サンドを食べて以来、マヨの味が忘れられないらしい。

「うわ……うまそーな匂いがする！」

バツツがスープの香りに誘われてやっとなってきた。

「えー！ これウンノ作ったの？！ すげえな、こついう所は女っぽい！」

余計な一言よ！

さっさと食べるよう促し、私は食後のお茶を用意する。

といっても、これも現地調達品のハーブ。すっきりとした気分になさせてくれるレモングラスを摘んであり、先ほどの湯の中に入れて少々待つ。ほんのり色がついたところでカップに入れてそれぞれに渡した。

行き渡った所で急いで自分も朝食を胃袋へと押し込んだ。早食い

はホテル勤務時代から鍛えられている為にあつという間に食べ終えた。

グイツとお茶も飲み終え、今度は火の後始末にかかる。火を消し、竈を崩し、灰は少し除けておく。

「ウンノ、うまかった」

食べ終えたらしいジエネが、私の近くまで来て感想を言ってくれた。

「いえ、どういたしまして」

素直な感想に顔が赤くなる。そんな私を見たジエネは、軽く私の頭をポンと叩いて『旅の石』を回収しに行ってしまった。その手の名残を私はそつと押さえ、軽く手を握り締めた後、次の作業へと取り掛かった。

「このような場所でこれだけ美味しい物を作れるとはな」 ハル
ドラーダ。

「うまかった！ また期待してもいいよな？」 バッツ。

それぞれ気に入ってもらえて良かった。

使い終わった食器をまた沢へ持って行き、灰を使って汚れを落とす。ゆすいで水滴を拭き取り仕舞う。

そして、準備が整った所で出発した。

国境である山頂を目指して。

正直なところ、もっと登山とは辛くてきつくて大変なものだと思っ
っていた。

学生時代の課外活動である登山は、マラソン大会と並んで嫌な行
事のツートップだ。つい欲張って食材やら鍋やらも背負った重い荷
物も登る際の枷になるという程でもなく、むしろ登山というよりハ
イキング気分でスイスイと登れた。

私って実は体力すごいあったのかも？ と勘違いしてしまう程だ。
登りながらハーブを採ったりする余裕もある。食事の度に、調理を
して片付けして。でも何故か元気。

ほか三人は流石に騎士団に所属しているだけあり並みの筋力では
ないが、バツツは経験不足も手伝って、へばりつつあった。

流石になにか変だなあとと思う登山三日目の朝。

山頂付近で一晩寝たあと、山頂に着き、そのまま国境を越えてレ
ーンの首都に向かい下山する予定。

標高の高い山ならではのひんやりとした空気が心地よい。食後の
お茶として、ペパーミントとレモンバームのハーブティーを淹れた。
いつもの様にぐいっと一気に飲んで、手早く片付けを終える。

「ちよつとトイレ行って来まーす！」

元気良く言い、済まして帰ってきたらまたもバツツから指導が入

る。

「トイレってそんな遠くまで行かなくてもいいんじゃない？ 元氣良くトイレって言う割にそこは恥らうんだな」

「え、えつと……すみません！ お腹ゆるい体質なんです！」

あああー！ もうっ！！

女の立場で、男の従者になり済まし、女になりたい男の演技して、その上お腹がゆるいって！！

どんどん複雑な設定になる自分に眩暈がする。

後半二つは明らかに自分が言い出したことなんだけどね。

「そうか……大変なんだなお前って」

うわーん！ そんな同情的な目で見ないでえええ。

「山登りながら段差を踏ん張るとき出たりしねえ？」 「屁かと思つたら実だつたりとか？」

そんなこと乙女に聞くなあああ！

返答しにくいことは、接客業で身についた「曖昧な笑顔」で乗り切った。

「……つまりさ、国王がキチンと治まっていなと色んな災害が起こるんだ。ラスメリナは新王が立って一年以上経つたる？だから魔物も出ないし竜は大人しくなつたし、実りも豊かになつた。」

「へー、なるほどおお」

ジエネとハルドラーダが地図を見ながら何か話しているため、私はバツツと世間話をしていた。

「玉座に本物がいるといたないのでは、国土にも影響あるんですね」

感心しながら頷いた。あんな翔でも、王として世界に認められた証拠なんだと。身内が褒められるのはとてもこそばゆい気持ちになる。

逆に、レーンの国はどうなっているんだろう。十六歳の王を国の頂点として据えて二年だというのに、聞く様はまるで……。

「お前、本当に最近の事知らねーのな！ なんか知ってると思つたら俺のばーちゃんが知ってるような事を言つしよ」

「あ……そ、祖母と二人で暮らしてたので！ オマケに貧乏だったから、食べられる物を探して山に入ったりしましたし」

祖母と貧乏二人暮らし設定、追加！

行くぞ、と声を掛けられ慌ててバツツと先に行く二人の背を追う。

「バツツ先輩はどうして騎士になったの？」

「うーん、俺は一応下流貴族なんだけど三男坊でさ、家督継げないし健康だけが取り柄だったからな。貴族身分を持っていれば騎士に推薦で入団できるし、近衛はカツコイイし」

「それに」と続ける。

「なんといつても、ジエネシズ隊長！ あの人の下に配属されたのが嬉しかったな」

満面の笑みで、前方のジエネを見る。

「へええ！ ジエ……隊長ってそんな人気あるんですか？」

「あるってもんじゃねえよ！ 剣も強くて面倒見も良くて人気があって。あー、でも訓練は鬼だな！ 容赦ねーもん！ それ以外言うことねえ位の最高の指導者なのに。なんで七番隊の隊長って立場に甘んじてるんだかが俺にはわかんねえ」

うん、確かにジエネはそう思わせるだけの確かさを備えてる。

更にあの容姿だ。スラリとした長身なのに肉食獣を思わせるしなやかな体躯。胸板の厚さと腕の逞しさは、見せるだけの筋肉とは大きく違う。

髪は闇色をしていて、時折目にかかる前髪をうつつしそうに掻き揚げるその手は大きくて厚い。髪色と同じ色の服を着て、皮のブ

―ツを履き、腰には長剣と短剣の二本が佩かれている。

……ジエネのあの深い海の色をした瞳を見ると、心の片隅が何故だかきゅうつとした。懐の深い、優しい色をしている。

そつと視線を前へやると、丁度ジエネもこちらの様子を窺うように顔を向けて、目が合った。

かすかに笑うかのように弧を描いた目をして、また前へ向いてしまった。ちよつと寂しいなと思ってしまった自分は一体どうしたんだろう。

あと一息で山頂！ という所で小休止をとつた。
国境を越えるにあたり注意事項が申し渡される。

「ハルドラーダとバツツは行きでも分かっているだろうが、国境というものは目には見えんが明らかに環境が変わる。ウンノは今は元気そうだが、ラスメリナの安定した空間とは大違いだから気をつけるように。体調が変だと思ったら早く言え。精霊が不安定になっているから天候の大きな変化もある。外套も用意しておけ。野盗も出没するだろう、常に気を配っておくように」

矢継ぎ早にいい終えると、歩く順番もハルドラーダ・バツツ・私・ジエネシズと変え、真っ直ぐ並んできなり進む事になった。

今までがほんわかハイキング気分だったのが、ピンとした緊張感に包まれる。

ドクドクと心臓が音を立てた。

ここを超えたら、レーン国。

ハルドラーダが超え、バッツが超え。

私も続いて一歩踏み出した。

途端。

光が目飛び込む。

赤い、青い、黄色い、緑の、光。

一斉に耳の奥に響き渡る声。

何？ 何？ 何を言っているの？！

ぞわりと手足の爪の先から粟立つ感触。

あ。

そして暗闇に落ちた。

Side ジェネシズ

「ウンノ！」

グラリと傾いだ体を受け止めると、ウンノは気を失っていた。

つい先ほどまで、とても女性とは思えぬ健脚を見せていたのに、
国境を一步踏み出した途端体が崩れた。

一体何が？

ハルとバツツを呼び止め俺はウンノを背負い、休める所を探す。
熱も無く、体に変化もない所を見て、時間を置いて様子を見ること
にしたからだ。

レーンの国に入った事で、油断は出来ない。

国境、と目に見える線引きはないが、明らかに空気が違う。空を
見れば一面の曇天。先程までのラスメリナでは初夏の陽気で、とて
も柔らかな日差しに穏やかな気候をしていたというのに。

空に浮かぶはずの六つの光も見当たらない。

日が出なくなつてどの位になるだろう。

前王崩御の翌年より翳つたのもう十年か……。

『玉座に本物がいるといたないとでは、国土にも影響あるんですね』

先程ウンノが言っていた言葉が甦る。
その言葉は、疼痛となって俺の胸を蝕んだ。

(本物、か)

十六歳の王はどのように玉座の座り心地を感じているだろう。
自らの考えに沈んでいる間に、「隊長！」と緊迫した声が先の方
から聞こえた。

「ハル、どうした！」

「野盗です！ 六、七……十人はいますね」

思わず舌打ちして、ウンノをそっと茂みに横たえた。ここなら目
に触れないだろう。

自分の外套でそっと覆うと、殺気がする方へと向き直る。

「バツツ、落ち着け」

「は……はいっ」

実戦経験がほぼないバツツは、この空気に完全に飲まれていた。
訓練ではいかになく発揮する剣技も、命のやり取りが行われよう
とする殺伐とした領域では気迫が物をいう。

浮き足立つバツツに、背中を手の平で叩き「深呼吸だ！」先に剣
を構えたハルに「ハル、バツツを頼む」未熟な部下に、経験豊富な
ハルをつけ、俺はウンノを相手の視界から遮るよう立つ。

ポツリ、と雨が降り出した。

「出て来い。何の用だ」

俺の声に呼応して、一人の男が前に進み出た。

「街道を行かずに国境越えとは、密輸かい？ 荷物さえ置いていけば痛い目みずに済むがどうだい」

下卑た笑みを浮かべ、自らの剣をちらつかせる。腕に覚えはあるようだ。しかし、相手の力量を見て取れない様では、大した腕ではないだろう。

「返り討ちにされたくなければ、去るがいい」

「そつだそつだ！ お、お前らみたいなクズ相手にしてる暇はないんだ！」

剣を向け相手に去れと警告を発したハルに、バツツが腰が引けた構えをする。

「バツツ、黙ってる」

余計な刺激をさせて、必要以上に暴れられても困る。

「生憎と、金目の物はない。諦めてくれ」

しかし、そう簡単に野盗が去るわけがなかった。

「ほあゝ。聞いたかてめえら！ 見てくれもいんどこそのお坊ちやんだぞこいつら！ 愛玩奴隷で売ろうぜ！ いいか、出来るだけ

顔は傷つけずに取り押さえる！」

周りを囲んだ仲間が一齐に飛び掛ってきた。

「……この剣だと加減が出来ん」

愛用の剣は、他国へと行く自分の身替りとして置いて来た。必ず戻るという意思を表したものだ。

使い慣れない剣の為どうやっても手加減が出来ず、相手には気の毒としか言いようがない。

雨は、次第に激しく降り出した。

s i d e ジェネシズ(前書き)

痛い話、戦闘シーンがあります。苦手な方は注意してください。

「いくぞ」

右手より打ち下ろされる剣を、体を低くした姿勢でかいくぐり、鞘から抜きつつ胴を払う。一人。

そこで踏み込んだ足で前方に跳躍する。今いた場所に剣が突かれたところだった。振り返りながら短剣を、突いた男に投げつける。二人。

投げた瞬間次の対象へと体を向け、下段から斜め上へと切りつけた。三人。

ここまで一息に終え、他の状況を見てやると、ハルは四人片付けた所だった。新たに五人目と交戦中で、バツツは、一人と打ち合いをしていた。試合ではなく、本物の命が掛かっている為にどうしても本気が出せないようだ。

一対一の稽古では打ち合いもいいが、実践では一撃必殺がもの言う。その上、一人ずつ掛かってくるなどまづない。

「畜生！ よくも俺の仲間を！」

野盗の纏め役らしき最初に声を掛けてきた男が切り込んだ為軽く剣で受け止めると、視界の端で不意にバツツがよろめき、相手をしてきた男に剣を弾き飛ばされた。

飛ばされた先は、
ウンノ！

思うより先に動いていた。

剣を持つ右手はそのままに、左手で飛んできた剣を打ち払う。

「くっ！」

腕を傷つけたが、構わずに右手に握る剣で止めていた相手を蹴り飛ばし、突く。これで四人。

ハルは五人目を倒した後、バツツと交戦していた者も倒し、辺りは雨音だけの静けさを取り戻した。

「た、隊長！ すみません、俺……」

「いい、今は。それよりも雨を凌げる所を探せ」

短剣を回収して、剣についた脂肪と血糊を切り倒した人の服で拭い、鞆に納めた。

ウンノが気を失っていて良かったと思うのは、この戦闘を見せずに済んだことか。ウンノやカケルの世界はとても平和だと聞く。ウンノには血生臭い思いをさせたくなかった。

十人のならず者達の死体が転がり、血溜まりが雨水と混ざり一帯にじわりと広がる。

ハルとバツツが探す間に、俺は左腕の傷の手当てをした。思ったより深いが、この位の傷ならば問題ないと判断し、傷口に強く布を巻き血止めをする。

ウンノのいる茂みに行くと、そこはさほど雨の影響を受けず濡れずに済んでいた。俺は自分の外套が濡れている為、裏返して身につけ、ウンノを背負う。

自分の外套とウンノの外套で挟んで雨から彼女を守らなければ、意識の無い者には体温を奪う最悪の状況だ。

雨は先程よりも酷く降ってきた。剥き出しの肌に当たる雨粒は大きくて、冷たい。

先を行くハルとバツツに追いつく為歩き出す。

めいっばい降り注ぐ雨粒の為に視界は悪く、足元も滑り易いがしっかりと踏みしめて雨を凌げる場所を捜し求めた。

その時。

一瞬の光と共に轟音が響き渡る。落雷か！

ドオン！ と重い音がすぐ近くで聞こえ、そちらを見やると、大人四人で手を繋がぬと回せない程の大木が火の手を上げながら倒れる所だった。

轟音と共に地へと叩きつけられた大木に刺激されたのか、土砂が滑り始める。

「隊長！」

「隊長、こちらに！」

俺とハル達の間、それが起こる。

「ハル！ バツツを連れて例の場所に待機！」

「はっ！」

それだけで通じた。あいつは聡いので俺の考えを理解しただろう。とにかく、この場を急いで抜けなければならぬ。下におりるではなく、横へと。しっかりとウンノを抱えなおし、走る。

しかしどうやらこちらの方に向かっている　土石流が！

大量の土砂が、恐ろしい勢いでなだれ込んでくる。後一息の所で間に合わない！　俺はウンノを包み込むよう胸元に抱えなおし、衝撃に備える。

土砂が足を攫い、木片が打ちつけ、石が飛ぶ。岩が転がり、俺の左肩を直撃した。

「ぐ……っ」

意識を手放しそうになる。目の前がチカチカと瞬いた。しかし傷つける訳に行かない大事な預かり人を守る為、あえて痛みに集中した。

はずした……か？

骨折はしていないだろう。経験から痛みの種類を振り分ける。

ようやく、滑落が止まった。

そのまま崖に転落などなく、大木が林立する為いくらか勢いが弱まったのが不幸中の幸いというべきか。

そつと己が抱えていたウンノを見ると、こんな状況も露知らずほんわりと笑顔で寝ていた。

全く、どうかしてる。

ウンノに対してではなく、自分に対して呆れた。

どうして笑顔を見ただけで胸が疼くんだろう、と。

きつと危機的状況を脱して安心したからだろうと結論づけて、立ち上がる。方々傷んだが動けぬほどではなさそうだ。

手近な木に抜けた肩を押し付け「フツ」と気合を入れ、はめなおした。

痛むもののひとまず動けるようになった事に安堵した俺は、再びウンノを背負って雨を凌げる場所を探す為、歩き出した。

1 翔子の心

たゆたう意識の中。

夢を、渡り歩く。

「ねえ、おとうさんって、どこにいるの？」

二人きりで遊んでいたある日の夕方。

ついに、その質問がきた。

いつか聞かれるだろうな、と思っていたので案外スルツと言えたんじゃないかな。

「かける、わたしたちのおとうさんは、とおいくにいるんだって。ものつすごくとおくて、めったにかえれないからしょうがないよ」

自分に言い聞かせるように弟の目を見ながら言った。

私と弟は、双子の姉弟。

数十分差と大して変わらないのに、どちらかが上か下かに決まる

んだからおかしなもんだ。

私は女の子でも早熟な方で、五歳にして充分今の状況を理解していた。

お父さんは、いない。

お母さんは、あたし達を食べさせるために働いている。

親戚はどうもいないらしい。

母子家庭ということもあり、安アパートでつましく暮らしている私達家族に、割と好奇心な目を向けられることも多々あり。

お母さんが朝から晩まで働き通しでなかなか家に帰ってこれず私は弟と二人きりで一日中過ごしていた。

近くの公園へ行けば

「あらあら、子供だけで危ないわよー。お母さんは？ え？ 働いている？ 保育園には入らないの？ 幼稚園も？ どうして？ 弟君も行きたいよねー。ひよっとして、高給取りなのかしら？ 園に入れないのは節約だったりしてー。お給料、幾ら貰ってるか知らない？」

保育園だか幼稚園だか、なぜ入れなかったのか私には良く分からなかったんだけど、とにかく事情があったらしい。

でも、あなたに細かく教える必要何一つないんですけど？

そんな時には要領の言い弟が役立った。

「おばちゃん！ ちょっと、これみてよ！ でーっかいへびー！」

木の棒の先つちよにだらりと垂れ下がった蛇を、おばちゃん目の前に差し出した。

おばちゃんはぎゃあ！と言って足をもつれさせながら逃げていった。

ぐっじょぶ、おとうとよ。

何をするにも二人で行動していた。

生活用品から毎日の食べ物の調達までこなしていた。母親がメモした物を買いに。流石に調理までは出来なかったが、レンジは使える。母親がフリージングしてくれてあった野菜などを、レトルトカレーに入れて食べたり。レンジがあれば大抵の用は足りた。

「お姉ちゃんはしっかりしてるね！」

「お姉ちゃんだから、弟の面倒みないとね！」

「お姉ちゃんは弟の見本だよ」

お店の人などはこういつて私に声をかけるけど、正直苦痛だった。なによ！ たかが数十分差なのに、先に生まれたからと言ってここまで責任負わすか！

怒鳴りたくて喚きたくて、じたばたしたくて仕方なかったけど、やっぱり出来なかった。

おねーちゃんだから……。

弟は、ねーちゃんねーちゃん！ と、にっこにっこしながら寄ってくる。

お調子者で、おしゃべりで、要領良くて。悪戯もひどいけど、こ

いつはタイミングを分かっている。

買い物さえ終われば、あたしは自然と自宅に籠るようになった。面倒な会話もいらぬし、なにより自宅には本が沢山置いてあり、それは植物図鑑だったり、絵本だったり、小説だったり。

お母さんが集めていて、あたしと弟はそれを読んで一日を過ごす。不思議なことに、それらの本は同じ国を舞台にしていた。作家名はさまざまだったが、国の名前、地域、通貨、生活用品などすべてが共通で、物語の主人公が違うだけだった。

七歳になる年、私と弟は小学校に入学した。

「コセキガデキタからね」

と母親は満面の笑顔で言い、私には意味は分からなかったけどとにかく「学校」に行けるのがとてもうれしかった。

同世代の友達！ 憧れのランドセル！

ピカピカのランドセルを背負って、弟と二人手をつないで学校へ通うようになった。

そして、その頃から母親は「コセキガデキタ」お陰でもっと安定した職場に付くことになった。

「コセキガデキタ」万歳！

収入も上がり生活費は潤いを見せたが、また貧乏な生活に戻る事が怖くて安心して使えない。出張で月の半分以上は家を空ける様になった母親には黙って、翔と二人だけの時はより一層質素な生活をした。図鑑で勉強した「やりくり上手の冷蔵庫」「食べられる野草！」「ハーブの効能100」が非常に役立ち、ちよつと離れているけど山に収穫をしにいたりもした。

お金を使うのが、怖い。

私がいっかりしなければ！
私が支えなければ！

母親と弟を、守りたい。

2 (前書き)

召喚ちよつと前のお話です。

「あれ？ 翔子、まだ残ってたの？」

「うん、残業だったの。サヤカは？」

「えへへー、彼とこれからデートなの」

職場の同僚であるサヤカは、今にもスキップしそうな足取りで翔子に近づいてきた。サヤカは同じ年齢という事もあって、あつという間に仲良くなった親友だ。その彼女は、先週片思いの相手から恋人へと昇格した食材の配達業者である彼と、終業後デートの待ち合わせをしているらしい。

「彼がねえ『俺のサヤカなんだから、男除けに付けてくれ』って指輪を買ってくれるんだって！ その後は、うふふ」

ほわりと頬を赤らめる姿は、とても可愛らしかった。目は大きくクリクリとして、唇もふっくら桜色、思わず守ってあげたくなる容姿をしていた。私が彼氏だったら、今この瞬間ギュッと抱きしめたいね！

「サヤカ可愛い！ 彼氏メロメロでしょうね。指輪を付けてくれだなんて、心配なんだ？」

いいなと呟くと、サヤカはびっくりしたように私を見た。

「え？ 翔子ってオーナーの息子と付き合ってるんじゃないの？」

「な……訳ないでしょ！ 大体好きでもないし……そりゃ告白はされたけど」

最後はゴニョゴニョと口ごもった。

そう、告白をされたのは先月だったかな。ホテルの裏手にある散策にうつってつけの庭があり、その目立たず置かれたベンチに呼び出された。私としては呼ばれる理由だなんてサッパリで、何か不手際があったけど周りに聞かれないように配慮してくれたのかな、としか思えなかった。

季節は秋。カサリと落ち葉を踏みしめて冬の気配を感じていたら、先にオーナーの息子 手島啓介が待っていた。

「あ、すみません遅くなりました！」

「いや俺が早く来すぎたんだ、気にしないで」

そう言って私にベンチに座るよう勧め、自身もすぐ隣に座る。隙間のないほどに。

その距離間に戸惑いつつもチラと彼を窺うと、すこし顔を赤くして緊張した姿が見えた。

「海野さん、いきなりで悪いんだけど……俺と付き合って欲しい。好きなんだ」

「え？ あ、あの……」

「入社してきた時からずっと気になっていて。どうしても気持ちを抑えられなくなったんだ！」

激しく気持ちを叩きつけられ動揺していると、体をぎゅっときつく抱きしめられた。頭の中は大混乱で、なんで私？ どうして？ なんなの？ と全く状況が入ってこない。

「ちょ、ちょっと待ってください！ 苦しいです！」

手島の胸を押し出して、ようやく呼吸が楽になる。荒れ狂う感情を抑えきれない彼の目は、すごく怖かった。

「海野さん……返事をいただけないだろうか？」

「私は……」

怖い。

「お付き合いできません」

「！ どうして。俺知ってるよ、今彼氏いないんでしょ？ それとも誰か好きな人がいるとか？」

「いいえ」

「だったら！」

「ごめんなさい。今は誰とも恋愛したくないんです」

深々と頭を下げ、謝った。

今は誰とも。これからあるのかも分からないけど。

いきなり好きだと言われて、心が固まったのは一方的な押し付けを感じてしまったから。私と多少なりとも付き合いがあった人ならまだじっくり考えたかもしれないけど、オーナーの息子だなんてそう出会うわけでもなく、会話も挨拶程度しかしないのだ。それなのに付き合えって無体だな。

「休憩時間が終わってしまいます。戻りますね」

立ち上がって、もう一度深く頭を下げ、走って帰った。

その後は遠目で見かける程度で、話しかけては来なかった。

「で？　つまり翔子ってば振ったのね？」

「振っただなんて……うーん、そういうことになるのかなあ？」

誤解をされたままでは心地悪いので、一連の話をサヤカにした。

サヤカは「もつたいない！　教育次第ではいい条件の男だったのに」と呆れていたけど、私はその気じゃないのを知り無理強いはしなか

った。

「臆病、なのかな」

ポツリと漏らした言葉に、サヤカは優しく背中を撫でてくれた。

「翔子……いつかきつと『この人！』と思える人に出会えるわ。身も心も一緒になりたいと心から思える人。まだそのタイミングじゃないのね。あ、そうだ！」

何かを思いついたようでサヤカはバッグからゴソゴソと取り出し、私の手の平にぎゅっと押し付けた。

「ふふーん、これはね、私から幸せのおすそ分け！ 期限はあと五年はあるから、それまでには使いなさいよー！」

言うだけ言って、「キヤー、待ち合わせに遅れちゃうー！」と走って行ってしまった。

後に残された私は、手に握りこまれた物はなんだったのか見てみると。

これっ……！！

一二つ、連結されていました。個別にパッキングされて。

保健体育で、一応の知識はあります。なんの時に使うか。

「

！！」

声にならない悲鳴を上げて、ソレをスカートのポケットに押し込んだ。

リストラされたけど、手島を振った影響はなかったと思いたい。

2 (後書き)

過去編おしまい。

1 変化

しとしと雨の音がする。

ゆっくりと浮上する意識。

あの貰ったアレってどうしたんだっけ。

ぼやっとした頭で、夢の続きを追った。そうだ……あの場所に？

「ウンノ？」

「ひゃっ！」

急に耳元で艶っぽい声がしたのと、アレの行方を考えていた為飛び上がらんばかりに驚いた。

えっと、ここは??

寝ていた体をよいしょと起こすと、辺りは暗くて土の匂いが充満していた。雨音のする方を見れば、明るくぽっかりと丸く線を描く外が見えた。形状からいつて洞窟か巣穴か？寝かされた敷布代わりの外套と、もう一枚私に掛けられていたのは隊長のかな。

「隊長……あの私、どうしたんですか？」

いよいよレーンの国へ入るといふ緊張の中、国境へ足を踏み入れた所までは覚えてる。そこから記憶は途絶えたまま今に至る。

「ウンノは国境越えた途端気を失ったのだ。抱えて移動途中雨が降った為、雨宿りが出来る場所を探していたら土石流に遭い、あの二人とは別行動となった」

短い説明を言うと、ジエネシズは「体の調子はどうだ？」と聞くので「全く異常ありません」と腕をグルグル回して元氣アピールした。すると緊張が解けたのか、ほっと息をついて……。

「そうか……。ウンノすまない、暫く休む」

言うなり、ジエネシズは壁を背にしてもたれた。

「え、隊長？ どうしたんですか！」

よく見たら、辛さを堪えるかのように眉を寄せ、顔色も悪い。どうしたのかと手を触ってみたら、熱い！

「隊長！ 熱があるじゃないですか！」

今まで寝ていた場所を空け、寝るように促すと、倒れこむようにジエネシズは横になった。体を支えた時に触れた服は、水が滴る程に濡れていた。

私を濡らさない様にしてくれたの……？

とにかく、今出来ることをしよう。幸い荷物は濡れていない。こ

の袋は獣脂で塗り固められている為に水分を通さず、旅行者には欠かせない物だ。

ジエネの服を取り出し、着替えを手伝う。濡れたままでは体温を奪われる一方だから。

上着を脱ぐときに「……くっ！」と声を漏らした。左肩を見たら、腫れて熱を持っている。

「この腫れ……どうしたんですか？」

「少し外しただけで、戻っている。問題ない」

簡潔に答えただけで、黙ってしまった。

多分この人は、私を守つたんだ。

私はただ寝入っていただけなのに！ カケルとの約束の為に私を

……！

グツと下唇を噛むと、乾いた布でジエネの体を拭く。

見事な厚い胸板に、腹筋。広く逞しい肩幅。無駄な脂肪は一切付いていない。しかし、所々酷く傷痕が引き攣れて付いており、戦いに長く属している事を雄弁に物語っている。

そして、新しい傷も付いていた。打撲の痕や、特にひどいのは左腕の切り傷だった。止血してある為、血は止まっていたが、酷い事には変わらない。

周りを丁寧に拭い、乾いた服を着せ。

流石に下半身は断られた。辛そうだから手伝いたいけどお互いの為に、止めた。

黙って後ろを向いて、ゆっくり着脱してであろう時間を私に出来ることを考えた。

まずは傷の治療と、解熱と、腫れを抑えることよね。

頭の中でどれが効くか組み合わせを考え、そういえば！ と思いつ出した。携帯のデータフォルダに写真を沢山撮ってあることを。

珍しい形、見間違いやすい物などは忘れやすいので、撮影してフォルダに保存してあるのだ。

袋から携帯を取り出した。良かった！ まだバッテリーがもってる。

調べるのは、エキナセア、コンフリー。

どちらも私の住む所では余り見かけないものなので、形状を覚える為に写真を撮っておいたのだ。

あとは、ペパーミントとカモミール、レモングラス。ヤロウもあるといいな。

衣擦れの音が止んだので、振り返ろうと地面を触ったとき、何か変だなと気付く。

地面が温かいのだ。

あれ？ 地熱でも上がってきてるんだらうか？

だとしたら、体温を下げずに丁度いい場所ではないか。

「隊長、すみません少し外に出ますね。すぐ戻りますから！」

そう言って外に出ると、丁度雨が止んだ所だった。さっきまで割と降っていたのにね？ 変だなあ。

まあいつか、と周辺の草むらへと足を運ぶ。

しかし、そうそう見つかるものでもない。なにより雑草すら余り生えていないのだ。これも王座の影響か。

「うーん……エキナセアとペパーミントだけでも欲しいんだけどなあ」

ぼそりと呟き、もう少し先の茂みへ行こうとしたら あった。
いきなりそこから生え出したんじゃ？ と思うくらい、唐突に二つともあった。

んな訳ないじゃん、と思いつつ。

「……コンフリーとカモミールとレモングラスとヤロウも、あると助かるなあ」

目を瞑って一気に呟き、そおっと開くと。

生えた。

流石の私も、これは変だと気付くよ……。

わさつと茂ったハーブの山。

……生えてるのは嬉しいんだけど、怪しすぎて近づけない。

あまりの事に目が点になっていたら、茂みの影から囁き声が聞こえた。

「……おい、俺が言った通りになっただろうが！ てめーがこないっぺんに出すから姫さんビビってんじゃねーかよ！」

「だって、ひめさまのいうこと、かなえてあげたいんだもん！」

「まあまあ落ち着いて！ 先にご挨拶しましょうと申し上げたのを忘れたんですか？」

「だから、それは後でだなあ！」

「後で？ ならば今でも構わないじゃないですか。では私が先にご挨拶をば」

「えー！ ぼくがいくう！」

「ちょ………うるせえ！ 俺が先に行くぞ！」

「「エピソードエピソード」」

「…」

驚いた。

いや、揉めてるのはともかく、こんな所でこんな芸風が見られるとは。

そこには、四人(?)の子供がいた。一人は口が悪くて真っ赤な髪をした子。一人は青い髪をして冷静に話をする子。一人は黄色の髪をして、他の子より一回り小さく可愛らしい子。一人は緑の髪をして、ずっと黙っていた子。

一体この四人で何者だろうか？

どうぞどうぞと進められた赤い髪の子は「てめふざけんじゃねえよ!」と怒り出し、黄色の髪の子が「もー! じゃあぼくがいくもん!」青の髪の子が「やはりここは私がひとつ」緑の髪の子は「…」。私がじっと見ているのも気付かず、ワイワイと揉めて、收拾が付かないようだった。

「……」

私は生えたハーブをこっそり収穫して、静かに洞穴に戻った。
うん、見なかったことにしよう!

ジェネシズは寝入っていたようで、ほのかに赤らんだ頬が熱が高い事を窺わせる。汗ばんだ額に前髪がへばりつくのが妙に色気を感じた。先程の見事な上半身を思い出してしまい、思わず頬を「煩惱退散！」とペチペチ叩いて振り払った。

火を起こし、湯が湧く間に卵の殻を取り出した。すこし水に浸した後内側に張り付く薄い皮を剥がす。この膜が傷にとてもいいのだ。それをジェネシズの腕の傷に貼り付け、よく揉んだヤロウを膜の上にのせ、再び布で巻いた。

このヤロウというハーブは、止血、殺菌、解熱、健胃の作用がある。

お湯が沸いたので、ポットに半分入れて残りのお湯の中にはペパーミントを入れて煮出す。

ポットの中には、エキナセア、カモミール、レモングラスを入れてティーにする。これは体を温める効果がある。

ペパーミントの湯はよく冷まし、手ぬぐいをつけて額や首筋に当てた。すうつとした清涼感が気持ちがいいだろうと思って。

そして、コンフリーの葉はよく揉んで、痛めた肩に貼り付ける。腫れに利く効能があるから。

貧乏性から覚えた知識が、こう役に立つとはね。

当時は、「やったー、これで 円浮いたー」としか思えなかったけど。

起こすのも悪いなと思ってジェネシズの傍に座り、眺めた。

うん……いい男だわー。

よくまあ翔と知り合えたもんね。そういえば、この人自身の事あまり聞いてない……。翔も本人に聞いて？　って言ってたし。ジエネのフルネームも聞いてなかったわ。他に人がいないし、聞くならこの時を置いてないでしょうね。

レーン国の近衛騎士団第七番隊の隊長って。近衛騎士団に入るのはかなりのエリートってことよね？　貴族出身でないと入れなかつたらしいし。

今はどうなのか知らないけど、かなりの実力の持ち主なのは、その鍛え上げられた筋肉と体に刻む傷跡から読めた。

あー！　また思い出しちゃったじゃない、どうなのよこれって！

早く拭かなきゃと、じつくり見た訳ではないのに、脳裏にどうしても素晴らしい上半身が浮かんでくる。

これではまるで変態だ！
くるりと顔を反対に向けると、外の方から騒がしい声が聞こえてきた。

「駄目ですよ！　それは絶対お止めなさい！」

「こら！　てめー待て！！　洒落になんねえぞ！」

バタバタした足音を立てて、四人が走りこんできた。

先頭は黄色の子で、手に何か握り込んでいる。その後ろを、赤、青、緑が追いかけていた。

私を目が合った黄色の子は、パツと顔を輝かせ

「ひめさまー！！　これたべてー！！！！！！」

と、両手を差し出した。

「おいコラ待てバカ!!」

「あー……間に合いませんでした……」

後ろで何か言ってた様だけど、私の耳には入ってこなかった。目の前の、黄色の子の手に握られたものを見てしまったから。

イモムシ。それも両手一杯。

「……っ!!」

目の前が真っ白になり、倒れた。

こうして私は、人生二度目の気絶をした。

side ジェネシズ それから翔子

ことり、と右胸に何かが乗る重みで目が覚めた。

柔らかな絹糸の感触が頬を擦り、そしてそれは清々しい香草の香りがして胸を満たした。目を開けると艶やかな漆黒。そつと右手を動かして触ると、それは丸くほんのり暖かい。

これは、ウンノか？

ウンノが俺にもたれていた。先程までぐっすり寝ていて、起きたかと思つたのにまた寝てしまつとは、相当疲れていたのか。

あまりの髪の手通りの気持ちよさに、暫くそつと梳くしけずつた。幾度となく往復を繰り返し、ふと我に返る。

「なにやつてるんだ、俺は！」と己を叱咤し、手の平を握りこんだ。カケルからの大事な預かり人、それだけの相手だったはずなのに、どうしてか、いとおしむ気持ちが溢れ出てくる。

カケルから散々姉の自慢を聞かされ、特にその料理の腕たるや、デイスカバラント世界の料理人が泣いてひれ伏すほどだと豪語していた。

流石にそれは言いすぎだろうと思っていたが、ラスメリナで食事したあの料理の数々は、俺が今まで食べてきたのはなんだったんだ！と思わせる文句無しの美味しさだった。

ここに来るまでの食事も「簡単ですみません」と恐縮していたが、

旅の食事にはありえない程の美味しい食事。旅と言えば固パンと干し肉だけが基本だったのに、俺が雑草だと思っていた物をこんなに美味しく料^{じょう}る事ができるとは驚きだ。

食材への知識が豊富で、野草にも詳しいとなれば『薬師』だと間違^{まちが}いなく言われるだろう。肩や左腕に怪我の手当てがしてあり、額に当てた布もスツとした清涼感のある香りがした。

こんな状態なのに、何故だかとても居心地いい。

ウンノは異世界の住人で、こちらの世界に来てまだ五日目。

驚かされることばかりだな。

今まで出会ったことのない、とても気になる女性。

特定の女性を決めたことはなく、後腐れない付き合いしかしてこなかった自分がまさかこんな想いを持つとは……しかし。

昔の苦^{にが}く苦^{くろ}しい出来事の片鱗を思い出し、疼^{つぎ}くこの淡い気持ちに蓋^{かき}をすることにした。

カケルから預かるだけの、自分の世界に帰る娘^こなのだから。

それでもこの姿勢を動かすには惜しい。ウンノが目覚^さますまで、せめてこのまま……。

「ん……」

あれ、私寝てたっけ？

ジェネの手当てを終えて、子供が近寄ってきて……？

あの虫は、どこいった！

あの山盛りな恐怖が蘇り、がばりと起き上がると何故か隣にジェネが寝ていた。

ぴったりと、まるで私を暖めるように。

右腕も伸ばされ、まるで私を腕枕していたかのように。

そう、まるで私と添い寝をしていたかのように。

「うっうっうわああ……」

虫どころではなくってしまったよ！　なんでこんな事になるの？！　いや、そもそも気を失ったのがその虫であり、その虫はどこにいったんだよ！　っていうか添い寝って！

あまりの現状に混乱していたら、ジェネが目を覚ました。

「……ウンノ？　どうした」

ちよっと掠れ気味の声で、ゆっくりと上半身を起こす。

うわっ！　今ちよっとまともに正視できないんですけど！

「いついえ、あのっ！ 虫と添い寝で……」

「虫と添い寝？」

「キヤー！ 違います！ありえませんがそんな事！ ……えっと、あのすみませんでした！ どういう訳か横で寝てしまって……」

「ああ、私は構わない。ウンノは疲れていたのだろう」

「いえ……あの、虫が……大量のイモムシが現れて、どうも気を失ったらしくて」

こんな事で気を失うなど恥ずかしくて、自然と下を向く。

「私、虫がホントに駄目で。こちらに来てから『旅の石』と虫除け剤の効果で虫と遭遇しませんが、ちょっとまともに見てしまったと言っか、迫ってきたというか……」

しどろもどろ私の最大の弱点ともいうべき相手のことをいうと、ジエネが「くく……」と笑った。

「カケルの姉ならば何でも強そうなのに、かわいい弱点を持っていたのだな」

ちっとも褒められた内容ではないのに、『笑った』ジエネシズの顔に、ぽおっと見惚れてしまった。微笑すらまともに見たことがないのに、笑った……！

心臓が、ばくと動き、背中に甘い小波を起こす。

こんな綺麗な笑顔をこんな間近で独り占めしちゃった。

「それで、その芋虫はどうしたんだ？ 今の話からすると大量にいたらしいが」

「あれ？ さっきまであそこに……といいますが、ちょっと不思議な事がありました」

「何があつた？」

「四人の子供達が、すぐ傍に来たんです。イモムシ持って」

ジエネシズは、眉間に皺を寄せて「意味が分からん」と呟いた。

私も分からないんですけどね……。

1 精霊姫

「子供……このような山中に子供だけが現れたのか？」

訝しむジェネに、私は最初から変だと思った不思議な出来事について話した。

地熱があること、雨が止んだ事、荒涼とした土地なのに、眩いたハーブがいきなり生えていた事。そして四人の子供が揉めていて……。

雨が止んだのはともかく、四人の子供が現れると言う事がまずおかしい。

五歳程に見える背格好の子供を、荒れた天気の日の外へ出す親はいないだろうに。

「もし……本当に居たのなら、まだその辺りに居る可能性もあるな」

「そうですね。じゃ、私見てきます！ ……旅の石一個借りますよ？」

気絶なんてもう御免なので先に保険を持つ事にした。

「あ、そうそう。体調はいかがですか？」

体ごと向き直り、そっと手をジェネの首筋に当てた。翹が熱出したときに体温を調べる為によく触ったものだ。額よりも分かりやす

く、ついジエネにもそうしてしまった。

「ひと寝入りしたお陰で、大分良くなったみたいだ」

ジエネは若干目を逸らしながら言い、私も触れた感じで大分落ち着いてきてる事を確認できた。

「じゃあ、これ飲んでください。風邪によく効くんですよ」

ポットに入ったハーブティーを差し出し、私はさつき子供達を見た場所まで行く事にした。

「こんもりと突然生えたハーブの茂みの影で、その子供達はまだいた。」

「で？ 反省したのかよ」

「ひっく……あい。はんせいしてます」

「本当に反省してるのですかね。現に姫君は倒れられて、私達と会話どころでは無くなってしまいましたし」

「大体、なんでおめーはあんな虫持ってたんだよ！」

「ぐすっ……おいしいから、げんきになるとおもったんだもん」

「かーっっっ!! んなわけねーだろ!!」

「そうですね、寧ろ美味しいと言つご婦人を探す方が希少ですよ」

「ひーん」

……反省会してるよ。

泣いている黄色の子を囲むように、赤の子はイラつきを抑えられないのか、頭をバリバリ搔いていた。青の子は石に腰を掛け、足を器用に組んでいる。緑の子は腕を組んで仁王立ちだ。

どうやら話は纏まった様だ。

「姫様には虫厳禁」と。

話の流れ的に、姫様って私の事……なのかな？

イモムシを私に渡そうとした事で、黄色の子が怒られてるって事は。

「よしよし。話が決まった所で、水の、お前行けよ」

「え、私ですか？ じゃあ私が皆さんを代表して……」

「ぼくう！ ぼくがいくんだい！」

「……」

「皆さんみたいに雑な態度はいけませんよ。私が行きます」

「ぼくがー！」

「……！」

「てめーらしい加減にしろ！ 俺が行くー！」

「ぎんぎんぎんぎんぎんぎん」

「……！」

二度目！

声は二人だったけど、どうぞの手は見事に三本揃った。

余りにも可笑しくて、気付けばお腹を抱えて笑ってしまった。

「あはっ！ あははははっ！ なにそれー！！ お笑い芸人がいるー！！」

腹筋痛いよー！ ほっぺたの奥が痛いよー！

目に涙を滲ませた頃、ようやく落ち着いた。

指で涙を拭いながら子供達を見ると、みんなあぐりと口を上げてこちらを見ていた。

「ひ……」

「ひ……」

「……」

「ひめさま……！！」

どか……んと飛び込んできた黄色の子。

余りにすごい衝撃で後ろに倒れそうになるのを、グツと堪えて黄色い子供を支えた。

「ひめさまひめさまひめさま……」

「あつ！ コラ俺様が……！！」

「……仕方ありませんね」

ぎゅうぎゅうしがみ付く黄色の子を抱っこして、目線を合わせるためにしゃがんだ。

「あの……あなた達一体？」

「説明は私がさせていただきます」

一歩前に、青の子が進み出た。

「ようこそ精霊の国レーンへ。私達は『精霊姫』の後継者である姫君をお待ち申し上げておりました」

五歳児程の身長で、優雅に腰を折った。

「精霊……姫？」

人間違いじゃないのかな？ 私そんな能力なんてカケラも持って
そうもないんだけど。

そう思ったことを言ったら「とんでもない！」真面目な顔で返さ
れた。

「まず、私達をはつきりと視えてますよね？ 普通の人間ならば
私達は目に映ることはありません。それが証拠となります。あと
……私達、実はラスメリナの王城にも行っています」

「そーそー、俺様も行つたぞ。流石に国超えると姿が保てなくて
気配だけになつちまうけどな」

「ぼく、ひめさまのおしり、なでちゃったー」

「なっ！ てめえ俺様が知らない内に何やってんだよ！」

「かわいいおしりー」

「
！！」

お尻って……お尻って……思い出すのはあのトイレ！

入るたびに、お尻の辺りがスー・スーとしたのはそのせいか！

「つてことは、あなた風の精霊？」

「うん！ ぼくねえ、ひめさまおこったときも、いっしょにおこったの」

相変わらず抱っこのままで、じっと潤んだ瞳で私を見上げる。うう、かわいい！

「怒った時……あ！ サーラが調理台に乗ったときだ。あの時傍にいたの？」

「はい、私達も怒りに同調しました」

「姫さんの感情に引つ張られやすいからな、俺達は」

この子達が精霊というのは本当なのかも？ つてかあの物語で精霊達は見目も美しい成人男性の姿をしていたような。目の前の子供達はどう見ても五歳児。

「前の精霊姫……リインだったわよね。その時の姿とは違っみたけれど、どうしてなの？」

「さすが後継者の姫君だけあられる！ よくご存知ですね。確かにリイン様の時は人間の男性を模してましたが、あの騎士が嫉妬しました……この様な姿を所望されたのです」

「あー……なるほど」

恋愛要素が強かったもんね、あの物語。あの通りのままなら、確

かに嫉妬しちゃうだろうな！。美しい男達が六人も、愛する姫の周りを囲んでるんだもんね。

よろしかつたら、元の姿に変えますが？ といわれたけど、丁重にお断りした。私の心臓持ちませんよ、きつと。

「ねーひめさま！ ぼくたちのなまえ、きめて？」

きた！

こつこついう流れになるだろうという予測はしていた。物語の序盤に、精霊と契約するシーンがあったのだ。契約すると、その精霊は私の僕となり、主の意の向くまま使役できるのだ。

いやいや、ほら私別に精霊姫なんて器じゃないし？

それに姫なんてやってる場合じゃないし？

大体私なんかと契約しちゃったらかわいそうだよ。

暫く考えた私だけど、よし！ と立ち上がった。

「ひめさま、きまつた？」

「ううん、ちょっと隊長と相談させて欲しいの」

「ああ？ あいつに？」

「そう。大事な事だから」

「まあ、いいけどよ。俺達は姫さんから離れるつもりはねえぞ」

私は風の精霊を抱っこしたまま洞穴に戻り、後の三人は付いてき

た。

「ジエネ……隊長、起きてますか？」

先程の場所に帰ると、ジエネは上体を起こしてハーブティーを飲んで
いる所だった。

「ああ。見つかったのか？」

「はい、この子達なんですけど……」

そういって、私は抱っこした風の子をジエネによく見えるように
近づけたけど、ジエネの視線はちっともこの子を捉えなかった。

「この子、達……？ 私には見えないが」

「え？ どうしてですかね？ ここにちゃんと四人いるんですけ
ど」

すると青の子が私の服をツンツンと引っ張って

「姫君。私達は姫君にしか見えないんですよ。これが精霊姫たる
所以ゆえんです。姫君の許可さえあれば私達は普通の人間に可視化できる
のですが」

と言った。

「どうやら、この四人の子供達は精霊らしいんです……そして、
契約を迫られました」

端的に伝えると、ジエネは驚きの感情を瞳に移しながらも、眉を顰め顎に手をやった。

「精霊がいるんだな？　そして、精霊自ら契約を申し出るということは……」

ジエネは深い海の色双眸を閉じてじっと考えてたようだが、軽く息をついて開かれるその目は、僅かに自嘲めいた物が一瞬浮かんで消えた。

「お受けなさい。あなたは精霊姫に選ばれたんでしょ？」

「えっ」

ジエネシズが精霊姫、と言ったことにも驚いたけど。私なんかが本当に受けていいものなのか。

その不安を伝えると「貴女がいい、と来てくれたんだろう？ ウィンノを選んだ精霊達に失礼だと思わないのか」と、あっさり言っただけだ。

「 本当に、あなた達双子には驚かされてばかりだ」

うつすら苦笑を浮かべ（うわ！）軽く髪を掻き上げると、手を伸ばして私の頭をそつと撫でた。

華奢な作りのガラス細工を撫でるよう、優しく温かい、それがとても気持ちが良い手の重み。

二回撫でられ、手を引かれてしまった時に「もっと」、「と口をついて出そうになった。

…… もっと、撫でて欲しいなんて。

こんな気持ち、こんなねだるような気持ちは初めてで。

この人の国で、私が役立てる事なら。

この人の為に、役に立てる事なら。

「分かりました。私に何が出来るか分かりませんが、とにかく契約してみます。おいでみんな!」

抱っこした風の子を地面に下ろし、四人が並ぶ。

「えっと、それぞれ違う性質の子よね? この子が風で?」

「うん、ぼくかぜ!」

「俺様は火だ」

「私は水です」

「……地」

うわ! 初めて声聞いた! 喋れたんだね、この子。

「ひめさまー、なまえー」

うーん、ラインの決めた名前は使えないんだもんね。

私が、この子達にぴったりの名前を付けなければいけないんだ。

辺りはすっかり日が落ちて暗くなり、待ちくたびれた精霊たちは寝転がったり歩き回ったり、好きに過ごしていた。

「ひめさまー、まだー？」

「時間掛かりすぎでは？」

「ちよ、ちよっと待って〜」

「姫さんよあ、こついうのはパパッと決めてくれよな！　パパツと！」

「こつこつ」

私は、「名前を付ける」という所で行き詰っていた。契約する決意は出来ただけで、この子達に似合う名前ってどんなだろう…。

ジエネに助けを求めても、「これは契約者が考えなければならぬ事だからな」とやんわり断られ、うんうん唸って名前を考えた。

うーん、名付けて難しいなあ。こつちの名前風に考えるから浮かばないのかも？

そつだ、日本名でならどつだろ。

我ながらいい思いつきを感じた。

地、水、火、風。

自然の中でそれらが動く様を想像して　　ひらめいた！

「よし！ 決めた！！ 皆せいねーっ！」

期待に満ちた目をして、四人がびしつと横一列に並ぶ。

「では……まず火の子！ あなたは焰ほむら！」

「ほむら」

「水の子！ あなたは飛沫しぶき！」

「しぶき」

「風の子！ あなたは疾風はやて！」

「はやて」

「地の子！ あなたは息吹いぶき！」

「いぶき」

四人の精霊は私の付けた名前を復唱して目を閉じ、ボウツと光の繭に包まれた。

眩しくて目を閉じていたらいつの間にか光が収束し、四人の子の額の中心にそれぞれの色をした宝珠が付いていた。これは契約の証の宝珠らしい。

「……と、私も耳を触ったら左右の耳朶に二個ずつ、赤、黄、青、緑の宝珠が付いていた。ピアスみたいにキャッチが付いてるわけでもなく、埋め込まれた……ような？ とにかく取れないようになってる。これで契約は出来たのよね？ 多分。」

「じゃあ、まず隊長にあなた達を見えるようにして欲しいな」

私がお願いすると、「承^{しよ}」と飛沫^{しぶき}が簡潔に言い、ジエネに向かって手をサツと振ると細かな霧が降りかかった。

「！ 見えた。この方達が精霊……なのか？」

今度はきちんと精霊達に視線を合わせ、驚きを声に乗せた。焰^{ほむ}はニツコリ笑って

「おうよ！ 俺様が火の精霊だ！ 姫さんのお守り、ちゃんとやれよな！」

ジエネの足をコツンと蹴り、「なー、そうだろ？」と疾風^{はやかぜ}に同意を求めた。

「うん！ もうぼくたちもいるし、これからはあんしんだよ？」

「その通り。私達がいるからには姫君に仇なす者は皆無です。ただし、それは直接的な攻撃の場合に限りますよ？ 精霊姫となるからには、政治的駆け引きも生まれましょう。私達は人間の社会には関わられませんので、その辺りを守護する者が必要になります。……その点この人間は役立つかも知れませんが」

チラリと意味深な視線を飛沫しぶきがジエネに向け、「……さて、どちらに転ぶでしょうか」と言ってニヤリと笑った。五歳児並みの容姿なのに、やけに妖艶に見えるのが怖い。

ジエネシズは、飛沫しぶきの意図を正確に受け取ったようで、一つ頷くと

「風の精霊殿が危惧の念を抱かれるのも仕方ないだろうが、私は騎士の礼にてウンノを守ることを誓った。それは今も変わらない」

そういつて、左手を胸に当てた。

「ふうん……ま、頑張ってください」

頑張れという割にはややおざなりに言い、「姫君、後は所望に応じて呼び出して下さい」と消えた。どうやら普段は耳の宝珠に伏在するようだ。

「んで、姫さんはいつここを出るんだ？ この国の精霊は乱調子なんだよ。俺達がいるからこの辺は落ち着いちゃーいるが、時間の問題だ。そいつ、もう大分良くなっただろ？ 下界は山よりマシだから、とっとと降りよーぜ」

焔は暗くなった洞穴を照らす炎を熾し、濡れた衣服も乾かしてから宝珠へと転移した。あら結構マメなタイプ？

残った疾風と息吹は、暖かい空気の間を作ったり、大地の恵みである食べ物などを集めてくれた。ちよつと季節感無視な物もあつてビックリしたけど。

「ひめさまー、ちよつとおはなしー」

ちよちよこつと近づいた疾風に、なに？ と耳を近づけると

「ひかりとやみも、みつけてね？」

と、憂いを含んだ瞳で小さく笑った。「今居ないの？ どこにいるの？」と聞く前に疾風はスルリと消えてしまった。

精霊は全部で六種いて、残る二種「光と闇」。昼と夜を司る、大いなる存在。

見つけてあげてということとは、今現在において所在不明なのか。

視線を感じて下を見ると、私の耳に光る宝珠をじつと見つめていた息吹は、そのまま何も言わずに戻りそうだったので私は慌ててぎゅつと抱きしめた。

「息吹、地面温かくしてくれたのあなたよね？ ありがとう」

途端、カーカーと顔を赤くして「失礼！」と消えた。照れ屋だな、彼は。

精霊達が皆宝珠に戻ると、辺りは静寂に包まれた。

焔の作り出した炎は音もなく、静かに火影が揺らめいている。

急に静かになったため、ジエネと二人きりだという事を今更ながら意識してしまった。

「あ、あのっ！ ジエ……隊長、お腹空きましたか？ 今作りますね！」

この状況から少し頭を冷やそうと、息吹が持ち込んだ物で、私は食事の支度をすることにした。

Side ジェネシズ

精霊の作った炎で調理を始めた彼女を、壁に凭れながら眺め見る。

彼女は、精霊姫。

精霊が実体化して見えるらしく、ウンノが精霊を連れてきたと言った時は動揺を隠すのにとても苦慮した。

俺は精霊使いを何人か知っていたが、彼らが言うには、精霊とは『気配』だと。使役するのに見えずとも事足りるから。高位の精霊使いすら、うつすらと形らしきものが見えるという程度らしいので、ウンノの「精霊の子供達を抱っこ」という荒業には耳を疑った。

しかも四種の精霊が同時に、自ら契約を望む。
通常、精霊と契約できるのは一種類だけと言われている。
性質の異なる精霊同士を住まわせるには、人間の体では持たないからだそうだ。

つまり、そんな契約が出来る至高の存在は精霊姫ただ一人。

なんて規格外な双子なんだろう。カケルの時も心の底から畏怖の念を抱いたが、ウンノもこのような事態に陥るとは。カケルは知っていたのか？ 精霊姫に選ばれることを。 だから？

『姫さんのお守り、ちゃんとやれよな！』

『……さて、どちらに転ぶでしょうか』

精霊達は俺の事を知っていたようだ。しかし、主にはそれについて沈黙をした。

俺の立場は確かに複雑で、守る立場にいるはずが逆にウンノを窮地に陥れる可能性もある。

とうに自身では振り切ったはずなのに、今になって重く押し掛かる気がした。

その上。

契約を受けると言った自分の、何て利己的で浅ましい考えが詰まっていたんだ！ と自責の念に駆られる。

確かに、精霊に選ばれたのならば報いてやれと言ったが、それ以上。

ウンノとこの世界を繋ぐ枷になってくれたら……。

異世界の娘。

いずれは帰る存在。

しかし、精霊姫となれば多少なりともこの世界に残る可能性があるかもしれない。

淡く願う気持ちだが、契約を受けるといふ後押しをしてしまった。

つい半日前に蓋をしたはずの気持ちが、堪えきれず溢れる。

手当てをしてくれた左腕を撫でながら、ふうっと息を吐き

「……参った」

と、ひとりごちて、とうとう自分の感情に理性が降参した。自分で認めてしまったら、逆に気が楽になった。

彼女を守りたい。

彼女を帰したくない。

彼女を　俺だけのものにしたい。

ほんの六日前には、こんなに感情を揺さぶられるだなんて夢にも思わなかった。また、俺に感情という物がまだ存在したという事にも驚く。

感情とは……豊かで、苦しいものだな。

「お待たせしましたー。食材尽きて調味料も一切無くなっちゃったんで山菜スープ作りました。沢山食べて温まって、明日の朝には元気モリモリで頑張りましょう！」

につこり笑って、俺に腕を差し出すウンノ。

ああ、いいな。

じつと動かない俺に、ウンノは小首を傾げて「あれ？まだ熱ありますか？　ジ……隊長？」と手を伸ばしてまた俺の首筋に当てた。

少しだけ冷たく感じるその手が、とても柔らかくて気持ちが良い。そっとウンノの手の上から俺の手を重ねた。

びくり、と手を引きそうになる手を逃がさないように握り、ある願いを口にした。

「二人だけの時は、ジエネと呼んで欲しい。毎回間違えてるのは気付いているんだ」

すると、ウンノはみるみる顔を赤くして「うわー、ばれてましたか」と首を竦めた。

俺は、イル・メル・ジーンの弟という設定から、そう呼んでも周りから不審には思われないというと安心したかのように「……ジエネ？」と頬を朱に染めてこちらを見ながら呟く。

っ！ 今すぐ、抱きしめたい。

気持ちを把握してしまつたら、今度は衝動を抑えるのに苦労しそうだ。

彼女にとって、俺の存在がこの世界に留まらせる理由になつてくれる事を願う。

1 事情

小鳥の囀る声がして、瞼にほのかな明るさが差し込んできた。地面や空気が暖かい事から、昨日の出来事は夢ではないんだなと耳の宝珠を触りながら起きる。

昨夜はあまりグツスリとは寝られなくて。

それというのも、「ジエネと呼んで欲しい」と手を握りながらじっと見つめられて……。

私としては従者という立場の役どころなので、主従関係はつきりさせよう！という決意の元「隊長」と呼ぶことにしたのに、真摯な眼差しで乞われると抗える訳無く、降参した。

「……ジエネ？」

これでいいか？ という口調で呟くと、彼の表情はとろけるような微笑を見せた。

ぎゃ！ 反則！！

腰が砕けそうになり、慌てて両手で自分の目を塞いだ。

「……何をしている？」

突然目を隠した私にジエネは訝しむ。

「いえ、あまりに刺激的なので」

「刺激……」

あの極上の笑顔を見せられたら、私は間違いなく天へ召されちゃうよ！

刺激が強いあの笑顔が脳裏にチラついて、熟睡は出来なかったのだ。

「それで、私達はこれからどこへ向かえばいいんですか？」

朝食代わりの果物を食べながら、ジエネに尋ねた。

山菜と果物は大量にあるけど、それ以外の物、特に調味料が何も無いのがかなりイタい。流石の私も異世界サバイバルは未経験です。

「ここから麓に向かい、東南の方角へ半日ほど行ったキムロスという村でハル達と待ち合わせである。そこで合流してから、レーン国首都であるクリムリクスを目指す」

私が持ち歩く短刀で剥いた、林檎らしき物をジエネは恐ろしい勢いで平らげながら答える。この食欲ならば風邪の方は回復したといっつていいだろう。

食後のお茶として、『ローズマリー・ペパーミント・マロウ』のハーブティーを淹れる。疲れた体に効くのだ。

「ハルドラーダさんとバツツ、どうしてるかなー」

ジエネが言うには、土石流に遭ってしまい、彼らと別行動となっ

たらしいんだよね。

私はグッスリと眠っていたから全く覚えていないんだけど。

自然災害が起こっても起きない自分てどんなんだよ！ って思ったけど、どうやら国境を越えることにより私の中で色々変質が起こったらしくて単に「寝てる」訳ではなかったみたい。山登りが苦じやなかったのも、こちらの国に近づいたせいじゃないかって。

炎を挟んで寝転びながら、ジエネと色々喋ってたんだよね。私が思いついたことをベラベラ喋って、それをジエネが答えて。くだらない事でもキチンと答えてくれるのはかなり嬉しい。

そうそう、あのサーラが一喝しただけでおとなしくなった理由も分かった。私の怒りに精霊達が呼応してしまい、気配に敏感なサーラにとって、それはもう恐怖以外なかったんじゃないかってさ。

なんで敏感なのかは言葉を濁してたけど。

うん、ラスメリナに戻ったらサーラをうんと甘やかそう。

食事の始末を終え、大量に残ったハーブや山菜類はざっくりと蔓でくくって持ち帰る。もつたないからね。

ジエネに貼り付けていたヤロウなどを新しいのと取替え、出発の準備が整った。

「じゃあ早速だけど試したい事があるのよね」

宝珠から風の精霊、疾風を呼び出す。

「ひめさまー！ おはようー！」

そういつて、私の胸に飛び込んできた。うわあ…… かわいい！
何度でも言うけど、かわいい！

きゅっつと抱っこして、疾風の頭に頬ずりしちゃった。

疾風を呼び出したのは、『精霊姫と騎士の旅』で何度も登場した場面をやってもらおうと思ったからだ。

「ねえ、早速で悪いんだけど、私達をキムロスまで運んで欲しいの。お願いしていいかな？」

「もちろんですひめさま！ おやくにたててうれしいです！」

顔をうつすら上気させて、満面の笑みで答える。

「というわけで、ジエネ、行きましょう！」

元気良く声を掛けると、幾分呆れた顔をしていた。

「ウンノ…… 通常精霊使いというのは呪文がいるんだ。そして、精霊との契約に基づき『命令』するものと聞く。呪文なし、願い出るだけとは……」

ふっつと息を吐き、髪を掻き揚げながら言葉を続ける。

「精霊姫である、ということは内密に。ウンノはラスメリナ王であるカケルの信書をレーン王に渡すという役目の為に召喚されたのであって、『精霊姫がいる』事実を、国の強欲なくせに小胆な佞臣共に知られたら、あの手この手を使って己が内に取り込もうとするだろうからな。気をつける」

心底嫌そうな顔をして眉間の皺を濃くした。

あちら、結構毒舌吐いてません？ ずいぶん嫌っている模様。

勿論、私もそんなのは本意ではない。キツチリ手紙渡してさっさと帰ろうと思っているのだ。

「了解しました。じゃあ、コッソリやりませう」

どつちにしるやるのか。という心の声が聞こえた気がするが、気にしない事にする。

「ひめさま、いきますか？」

「うん、お願い」

さあ、出発しよう！

「じゃあひめさま、そのひとと しっかりくっついていてくださいね？」

疾風が最後まで言い終わらない内に、私とジェネの体は重力を無くしたかのように浮いた。

しかし、安定しなくてフラフラしてしまつて怖い！

「ふおっ！ こ、こんなにおっかないもんなの?!」

およそ女子らしくない悲鳴をあげ、慌てて思わずジェネに抱きついてしまった。

「ご、ごめんなさい!! おっと、おわわわわ」

「ああ、この方が安定するか? …… 役得だな」

というと（最後のセリフは聞こえなかったけど）、ジェネは安定しない私をしっかりと抱えた といいますか。

むしろ……? これは……?

抱きしめられてるといっていいポーズですよ！

「……………!」

「ほら、しっかり前を見る。下は見ない方がいい」

「はっ、はい! じゃあ行ってちょうだい」

「はい、いつきまーす」

途端、景色が、飛んだ。

「とうちゃーん！ あれっ？ ひめさま、どしたのー？」

「あはっ、あはははは……」

徒歩で半日は掛かるという距離を、およそ一〇分で飛んでしまい、震える膝を押さえながら私は力なく笑うしかなかった。

ジエネも心なしか顔が青ざめて見える。

そう、私は小説で見た『空を自在に飛ぶリイン』を真似してみたかったのだ。とても優雅に見えて楽しそうだったなら是非やってみようと思ったのだが……。

「良く考えれば不思議な力以外、目に見えて安全って訳じゃないのよね」

遊園地などでバンジージャンプやフリーフォールを行う場合、命綱というものがある。あれがあるからこそ安心して宙に飛び出せるというものだが、目に見えぬ精霊の力のみを信じて身を任せるといふのは心底恐怖を感じた。

その上、あの速度！

竜なんてかわいいもんだったよ。

よっぽどの事が無い限り、これは封印だな、封印。

キムロスは、街道沿いにある割と大きな村だった。

色々な街道が交錯する地に立つため、様々な旅行者が訪れるため、商店が賑わいを見せている。旅の支度を整えたり、宿を取ったり、商人の一団が危険回避の為に傭兵を雇ったり。

疾風を宝珠に戻し、私達はとある宿屋へと向かった。そこにハルドラード達が待っているらしい。

街中の雑踏を抜け、大通りから一本曲がった所にそれはあった。

ジエネは慣れた様子で入り口のドアを開け、私にも入るよう促す。

奥のほうからでっぷりと太鼓腹なおじさんがジエネを見つけて近寄ってきた。

「おう！ 久しぶりじゃねえか隊長！ お連れさんなら上にいるぞ」

ジエネの背中をバンバンと叩いて陽気に話しかけてきた。

「すまない、いつも世話になるな」

「いいってことよ。無事だったらなおさらだ」

後で下に食べに来いよ、と言い残し再び奥へと戻っていった。ジエネに聞くと、この宿屋の親父さんでよく世話になっているそうだ。一階は食堂兼酒場で、二階が宿屋というところではごく一般的な造りをしている。

朝食の時間は終わっているせいか、食堂はまばらであった。そこを横切り、階段を登る。

廊下にはいくつか扉があったけど、ジエネは真っ直ぐ一番奥の扉

へと進んだ。

「ハル、俺だ」

ノックをして名乗ると、すぐさまドアが開けられた。

「若！」

「だからそれやめろ」

「よくぞご無事で……」

ハルドラード師匠の目尻には涙が滲んでいた。うをを、美男子の涙とは！ 無事の喜びを確かめ合ってるのに無事ではなくなってしまうんじゃないか！

もちろんその目には眼鏡はしておらず、容赦なく色気に当てられた。ここは一つ自衛を……

「ウンノじゃないか！ どこか怪我してたりしないか？…… なんで目を隠す？」

「これは現時点における最善の防御です。えーと、私には怪我はありません。逆に、隊長に庇われてしまい怪我をさせてしまいました」

しょんぼりしながら、従者としてありえないですよね…… と謝ると、ジエネがポンポンと頭を撫でてくれた。

「それはもういい、忘れる。ハル、バツツはどこに？」

「はっ、昨夜こちらの酒場で耳にした噂を確かめに、情報を集めに行っております」

「そうか、あの場所だな？ 私も行こう。ハルとウンノはこの部屋で待機してろ」

「了解しました」

ちよつと待て！　と言いたかった。

このお色気魔人と、この部屋で待てと？！

焦る私を余所に、ハルドラードはギシリと備え付けのベッドに腰を掛けた。

……　普通の女性なら、あのベッドに飛び込んで行くかもしれないな。

相変わらず目を塞いだままの私に呆れたのか、ベッドの枕元に置いてある眼鏡を付けてくれた。

「ウンノ、私達と別れた後の事を教えて欲しいんだが」

「あ、えっと。これちよつと仕分けながらもいいですか？」

「それは？」

「山で収穫したハーブ達です。使えるところと分けようと思いついて」

眼鏡に安心した私は荷物に括り付けていたハーブを、大きく広げた布の上に並べた。息吹があれやこれやと持ち込んだものはあの場で処理しきれず持ち帰る事にしたんだけど、疾風のあの異常な速度の移動によりカリカリに乾燥したものもあって、使えるものとそうでないものを分けたかったのだ。香りがどうしても落ちてしまつて、ドライとして使えないものもある。レモンバームやチャイブ、バジルとか。

「ウンノの料理は美味かった。材料が豊富に揃っていたらまた格別だろうな。また私にも何かの折に相伴になりたい」

「ええ喜んで！ 美味しいと言って頂けるのが、僕にとって何よりの言葉です」

素直な賛辞にっこりと笑顔になる。嬉しい！

カモミールの花をブチブチっと茎から外しながら、私が覚えてる限りの事を伝える。流石に精霊のくだりは言えないので、ジエネと辻褃が合うように話してある。

あの洞穴から半日程度距離があることから、一晚寝たというのはいかんせん間に合わない。つまり、私が寝てるときにジエネも寝て夜中に起きてからずっと歩いてたどり着いた、ということに。

「あの土石流で別れてから、若なら大丈夫だと頭で分かっていたが、どうにも心配で落ち着かなかったぞ」

そこでふと、気になってた事をハルドラーダ師匠に聞くことにした。

「ハルドラーダさん、あのーずっと気になってたんですけど、隊長の事を若って？」

「ハルでいいぞ、七番隊の仲間だからな。そうか、お前知らないのか」

ずり落ちそうな眼鏡を押し上げながら、意外そうな顔をしてその長い足を組んだ。

「ハルさん。僕が知らないって、何がですか？」

「ジエネシズのレーン国に置ける立場ってやつだ。そうだな……いずれ誰かから不明瞭な噂を聞くよか今正確に話した方がいいだろう。若も、きつと自分からは言わないだろうから」

ウンノ、お前どこまで若の事知ってる？と聞かれ、はた、と気付いた。

そういえば良く知らない。

ジエネシズ、二七歳、レーン国近衛騎士団七番隊隊長……あとは？

「ジエネシズ隊長……家の名前すら知りませんでした」

知ってる事を指折り数えながら、あまりに知らない事に呆然としてしまった。

仕分ける作業も思わず止まる。

今日で出会って六日目だけど、ずーっと一緒にいたのに。

「多分、意図して言わずにいたんだろう。省略しない正式名言えば一発で分かるからな。若の本名は ジエネシズ・バルドウ・レーン。三つの名が表す意味、知ってるか？」

「ひよっとして…… 隊長、王族って事ですか？」

通常名前とは、二つだけとなる。ハルさんは『ハルドラダ・メツシ』と名乗った。最後のメツシとは実家を表す名前である。

ジエネの場合…… バルドウとは母方の実家、レーンとは父方の実家両方表している。その三つの名を表す立場といえば、すなわち王族。レーンという国の名前が入ってる、ということはこの国の、

間違いない王族だ。

ひえー、そんな雲の上のような存在だったのか！ 確かにジエネは姿、形、所作ともに非常に麗々しく、王族と聞いても似合いますぎでしっくりくる。

「本人はもう『継承権は放棄した』と言って、その名前に無頓着でな？ 煩わしい王座継承の輪から外れて清々していると言って笑ったんだ」

「え、ちよつと待ってくださいよ！ 継承権放棄って、割と王から近い存在だったんですか？」

大体『放棄』と言っても順番が遠ければ余り意味がないだろう。わざわざするということは相当？

「そうだな、若が放棄しなかったら今頃王様やってるだろうな。

今の王は、若の弟だ」

弟？！

玉座に座る若干一六歳の王。在位は二年になるらしい。

傀儡政権であり、いつだったかジェネが『国の強欲なくせに小胆な佞臣共』と吐き捨てるように言ったのはこういう事情があったからか。心底嫌いだったんだろね。

でも、王の話をしたときは表情がちょっと違ってたような？精霊が不安定だという話も、どこか憂いてみえた。

その間にも手作業は進む。

料理に使おうと、幾つかブレンドしたハーブをガーゼに包んだ。

パンやスープに使おうと、ローズマリー・ローレル・タイム・オレガノをまとめ。もう一つはブーケガルニとしてローレル・パセリ・タイム。煮込み料理にピッタリなんだよね。

「レーン国王のお兄さんですか……。よく王位継承権放棄できましたね？」

単純にそう思ったんだけど、ハルは苦虫を噛み潰した顔をした。

「それは……。若の母親は城の下女だったからだ。洗濯女で、たまたま陛下と出会い愛を交わされ……。若が生まれた。そもそも、政略結婚ではあるが王には正式な妃がおられ、王妃は非常におとなしい性格でその件について何ら意見は無かったが、その父親が……。怒り狂わんばかりに荒れすべて巻き込み王宮は乱れた。身分の事もあり相当虐げられた産みの母親は死に、王は見て見ぬ振りをなされ、第一王位継承者であるにも関わらず日陰の存在として若は暮らした。それから十年後、王妃が懐妊したんだ。あとは……。想像がつくだ

る？」

「……」

口の中がカラカラに乾いていた。

本や映画では『よくあるパターン』として捉えていたが、実際の当たりになると心が拒絶する。

おそらくではあるが、国王と王妃ならば血筋が一番よろしい。下女との子などサツサと廃しようとしてもなったのだろう。身の危険を感じてジエネは『王位継承権放棄』をしたのではないだろうか？

そして、どこか遠くに…… って、今騎士団にいるのはなんでかな？

「それで大方合ってる。その当時若は十歳でな、私は乳母をしていた息子であり、乳兄弟として一緒にいたんだ。よくぞ若は耐えなさったと思うぞ。死んだ方がマシだという状況下で私は無理にそれを止めたが、放棄なされるとは思ってもみなかった。…… たった十歳の子供がそう決断したのだぞ？」

当時の怒りを思い出し、ハルは拳をベッドに叩き付けた。そしてその拳を今度は大事そうに反対の手でそっと包んだ。

「重臣が集まる朝議の席で、一人王に向かって放棄すると宣言し、そのまま私の母の田舎である遠く離れた村へと移ったんだ」

私は、知らない。知らなかった。

むしろ、積極的に「知ろうとしなかった」のかもしれない。

ここまで関わる事になるとは思わず、さっさと帰るつもりでいたから。

本当に軽い気持ちで引き受けたんだな、と恥ずかしくて堪らない。

ジエネシズ。

あなたは、そんな過去を持っていたのね？

肉親の情もなく、ひっそりと生き

表情を無くすまで。

その後のことについて、ハルは続けた。

一八歳の頃再び王都へ戻り、一般兵と同じように試験を受けて今に至る、と。

どうして騎士に？と思ったが、ジエネは弟を守る為だけに近衛を志願したのだという。わざわざ切り捨てた場所に舞い戻る理由が全く分からなかったが、ジエネは「誓いを立てたから」との一点張りで答えない。

一人行かせる訳にもいかず、ハルも同じく騎士への道へと入ったらしい。

のんきな自分に腹が立つ。下唇をぎゅ、と噛む。

そんな自分に気付いたのか、ハルは立ち上がって近寄り私の肩を叩いた。

「これは過去の事だ。ラスメリナの王の事は知ってるか？ あの「竜帝」とお知り合いになられてから今の若は大分変わられた。人と関わる事も外へ目を向ける事も進んでなさる。親身になって目を掛けてくださる人も居られるから、そう悲観する事もないんだぞ？」

「は？ 竜帝?!」

「ラスメリナ王カケル様の二つ名だ。何だ知らないのか、あの国に滞在してたのだろう？」

食堂に着くと、客はすでにいなくなり、厨房の方では昼に向けての仕込みが始まっていた。

「マーサさん！ 茶を二人分頼む」

ハルは厨房に声を掛けた。「はい」と返事があり、暫くしてポットとカップ二つが運ばれてきた。

「はい、お待ちどう！ あらっ、この子初めて見る顔ね？ 名前は何？」

「あ、ウンノと申します。隊長の従者しています」

「あらそうなの！ あの隊長さんの！ あらあら良かったわ。隊長さん、人の世話ばかりで自分の事は無頓着だから丁度いいわね」

ここの親父さんと同じく、大分ふくよかな体を大きく揺らして笑った。ハルは苦笑して「その通りだな」とちらりとこちらを見た。そ、その視線はなんだ！ と動揺してしまい、カップに注いでいたお茶を少し零してしまった。

その時厨房から

「おいっ！ お前これなんだ！ 腐ってるじゃねーか」

と親父さんのガナリ声が聞こえ、慌ててマーサさんが「あらっ今行くわ！」と答えて、私達にペロツと舌を出しながら厨房に消えて

った。マーサさんなかなかお茶目だな。

「あら〜…… うっかりしてたねえ。魚の塩漬けがすっかり崩れちまった」

「おいおい困ったなあ。お前、これ処分しとけよ」

「残念だけど仕方ないね」

声が筒抜けだ。…… 魚の塩漬け？ ひよつとして！

私はガタンと椅子の音を立てて立ち上がり、一目散に厨房に突入した。そして、二人が検分していたモノに注目する。

「あら？ ウンノ、どうしたのさ」

「マーサさん、これって魚を塩漬けしたもの？」

「ああ、そうだけど。あたしうっかりしてて腐らせちまったよ。見てごらん、もう形も分からない程の液体になってるだろ？」

「うわー！ マーサさんやったあ！ 僕にこれください！」

私の喜びように、親父さんもマーサも仰天した。突然厨房に駆け込んだ私を追いかけてきたハルも「何でそんなものを？」と驚いていた。

「これ……魚醤ですよ！ いい具合に発酵してるー！」

きゃっほーいと喜ぶ私の傍で、三人がポカーンとしていた。

こちらに来る前のホテルでの送別会にて。懇意にしていた厨房の料理長が、酔うと雑字を語りだすというやっかいな癖を持っており、数人リストラ対象であった中で一番年若い私が料理長の講釈のターゲットとなってしまうのだった。

更に返事をしないと無限ループに陥るといふ悪癖でもあるので、適当な相槌でやり過ごすという事もできず、ひたすら耳を傾けなければならぬ。その時語っていた一つの話がまさに「魚醤」。日本では『いしる』『しょつる』など、海外で言えば『ナンプラー』『ニョクマム』と呼ばれる物だ。

これらは生魚を大量の塩で漬けて発酵させ、魚が液化した所で漉したものが魚醤となる。

大豆、小麦、塩で作る醤油ではなく、魚で作る醤油のような物なので、ちよつとした和風味が期待できる。嬉しい！ 料理長ありがとう、役立ったよー！

「こんな……腐った汁なんてどうするんだい？」

マーサさんが不思議がっていたので、私は調理台に乗っていた野菜を借りてサラダを作ってみた。レモンぽい物を絞り魚醤をそれと同量に入れ、砂糖少々入れて混ぜる。そして生で食べられる野菜はどれか聞いて、ざくざくつと切って作った液をかけておしまい。簡単魚醤サラダの出来上がりだ。

「どうぞ食べてみてください」

親父さんとマーサさんは、おそろおそろといった体で一口食べた。すると二人で顔を見合わせ「美味しい！」と目を見開いた。

「ウンノと言ったね？ こんな美味しい味になるだなんてワシは

何て今まで勿体無いことをしてたんだ！ うーん魚のダシが効いてるな。塩気がまたいい。マーサよ、この液体…… 魚醤と言ったか？ 瓶に移しておけ！」

「あらあら。急いで用意しますね。でもあなた、お昼の仕込みも終えてないのに……」

「ああしまった！ 時間が無い…… うつむ」

料理人魂に火が付いたらしい親父さんだったけど、昼の営業が迫ってる事もあってどうにももどかしそうだ。

「ハルさん、隊長達まだ帰ってきませんか？」

突然話を振られ、戸惑ったハルだったが「そうだな、昼には戻ると思う」と答え、それを聞いた私は提案をした。

「親父さん、わたし…… 僕、仕込みを手伝います！ 隊長戻ってくるまでです。その代わり、その魚醤少し分けてもらえませんか？」

「あ、ああ…… いいとも？ 元はといえばウンノが教えてくれた物だ。いいのかい手伝うだなんて」

「はい、僕こういうの得意なんです！」

言うなり、私は腕まくりをして戦闘準備へと移った。

5 (後書き)

魚醬は大きいスーパーなら売ってると思いますが。
んが、量を誤るとしょっぱくて魚臭いのでお気をつけください。

Side ジェネシズ

「ウンノ！ 奥のテーブルにこれ持ってけ！」

「はいっ」

「こっちも注文聞いとくれ！」

「はい！」

「……何をやってるんだ？」

「わあっ！ 隊長お帰りなさい！ 今忙しいんで、ハルさんに聞いて下さい！」

俺の声に飛び上がって驚いたウンノだったが、そう言い残して忙しそうに雑然とした食堂をクルクルと動き回る。注文を聞き、料理を運び、食べ終えた食器を片付ける。その一連の動きに無駄は無く、随分慣れてる様に見える。

しかし何故給仕を手伝っているんだ？ ハルを見ると、困ったように軽く頭を掻き、俺のいない間の出来事を説明した。俺達を待っている間にここでお茶を飲もうとしたら、ウンノが調味料に興奮して、手伝う代わりにそれを分けてもらうとなったらしい。

余りに生き生きとして楽しそうに働くウンノを見て、少し面白くない気持ちが掠める。そんな様子に気付いたのか、ハルが耳打ちしてきた。

(若、いい子ですねウンノは。応援してますよ?)

(っ！俺は)

(分かってますよ私には。随分気を許してらっしゃる)

ニヤツと笑って、空いてるテーブルに座り「さあ私達も食事にしましょう」と、椅子を俺に勧めた。

後から店に入ってきたバツツもウンノを見て少し驚きはしたけど「へえ、よく動くなあ」と言って大して気にも留めなかった。

ハルには見抜かれてるな。

なにせ、自分が生まれてから二七年の付き合いだ。常に傍にいたので、俺の事なんて手に取るように分かるのだろう。そして、男女の機微については百戦錬磨の猛者だ。かなうわけがない。

注文して暫くすると、ウンノが料理を運んできた。

「お待たせしました！ 親父さん特製煮込みと特製サラダです。一杯食べてくださいね」

両手には皿が何枚も載っていた。どうやったらそんなに持てるものか。「いえいえ、私なんかまだ五枚持ちしか出来ませんよ？ 職場の先輩は七枚持ってましたから」と謙遜し、皿を置いたらすぐに別のテーブルへと飛んで行った。

「隊長ー、あいつ剣よりも包丁が似合うっすね」

「黙って食べる！」

自分でもそう思ったことをバッツが言うので、八つ当たりだと承知しながらも当たってしまった。ハルは苦笑をしながら食べ始める。

うまい。

いつも使う宿で、この様に深みのある味は初めてだ。サラダは旨みが凝縮したようなソースがかかっている、いつもそのまま食べていた生野菜が一層美味しく感じられる。煮込みは大抵塩味だったが、ウンノが使っていた香草の香りがふわっとする。通りがかりのウンノにそう聞くと、「これはブーケガルニってやつですよ。肉の匂い消しにもなるんです」と、ニコニコ笑いながら答えた。

「ウンノ！ お代わり！」

バッツが瞬く間に平らげ、声を上げる。余りの速さにウンノは驚きのあまり目を見開いていたのは一瞬で、すぐににっこりと「はい！ お待ちくださいね」と厨房へ駆けていった。

あまりに嬉しそうな笑顔を見られたのは嬉しいが、その笑顔の相手がバッツだったので慥然と眺め、食事を続けた。

昼食時の混雑からは抜けて、テーブルに着く客の姿もまばらになった。

「はい、やっと終わりましたー。すみませんなんか」

やれやれと、俺達の座っているテーブルに戻ってきたウンノは、大事そうに瓶を抱えていた。

「いや、丁度剣の研ぎを鍛冶屋に頼むから時間はある。今夜は一泊して、明朝出発をする」

「うわーよかった！」

「よかった？ 何がだ？」

あからさまにホツとするウンノに聞くと、どうやら午後の仕込みも手伝いたいらしい。非常に面白くない。そもそもウンノは俺の従者役ではなかったのか。

自分のあまりの狭量さに嫌気が差しつつ、冷静な部分では確かに鍛冶屋に行くのにウンノは特に用は無いんだと気付いていた。この親父さんに預け置くのが安心だという事も。

その時バツが「こら、お前女っぽい仕草が足りないんだ。そこはな……」とウンノに耳打ちして、「うわー…… それ恥ずかしいんですけど！」「馬鹿っ！ ただでさえ色気足りないんだから仕草で学べよ」「そうですね…… 分かりました」と、ちよつと躊躇う仕草をして。

「隊長、ちよつとこちら向いて立ってください」

「なんだ？」

ウンノと向かい合う立ち位置で、これだと俺はウンノを見下ろす高さになる。

すると、ウンノは胸辺りで指を組み、そつと上目遣いで俺を見上

げた。

「隊長、お願いです」

「……」

「ジエネ、お願いです」

「……っ。分かった、好きにしる」

自分の鉄面皮に感謝をする。

自覚をした途端この攻撃は

厳しい。

アツサリと白旗を揚げた俺に、ハルはバツツとウンノから見えない位置で

腹を抱えて笑っていた。覚えてろ！

「おー、ウンノこれで一つ覚えたな！ 『上目遣いでおねだりポーズ』うちの姉貴が良く『必殺技よ』って言ってたんだよ。これでまた一歩いい女に近づいたな！」

「はいっ！ 先輩ありがとうございます。お色気マスター目指しますー！」

あまりに可愛らしくて、怒っていいものか迷ったが、結局「馬鹿な事言っていないで、さっさと行くぞ」と言うに止めた。

side ジェネシズ

鍛冶屋に剣を預け、再び情報を得るために馴染みの店へ顔を出した。どうやら、宰相派の動きが慌しくなっている様だ。王都に出入りする商人などに話を聞き、今後の行程を微調整する。ここキムロスからクリムリクスまでは徒歩ならあと三日はかかるが、部下二人と合流したのでウンノの精霊の力は使えない。馬を借りて時間を稼ぐべく、馬賃に話をつけておく。

精霊の力。あの尋常ではない速度に度肝を抜かれたが、ウンノを抱えていた為に逆に落ち着いて状況を把握する事ができた。半日の距離をごく短時間で到着できる精霊の力とは、凄まじいものがある。

『精霊姫』の名はここレーンでは大きすぎる名前。あくまでも秘さねばならない。

しかし、心配は杞憂に終わりそうだ。ウンノは精霊の力を使役する事には消極的だから。「自分の身の丈に合った生活をしないと、頼っちゃいますからね」と言つて、ともすれば乱用しがちになる主従関係だが、ここにも「甘えない」性格が出てくるんだなと、改めて思った。

再び宿に戻る頃には辺りはすっかり暗くなっており、そのまま夕食を取る事にした。ウンノは再び給仕に精を出し、にこやかに客へ配膳を行っていた。

入ってきた俺達にすぐに気付き「お帰りなさい！ お疲れ様でした隊長、ハルさん、バツ。今食事お持ちしますねっ」と厨房に向かつて「お食事三人前お願いします！」と声を掛け、入店してきた客に「いらっしやいませ！ こちらのお席にどうぞ」と案内をしたと思つたら、帰る客に「有難うございました！ またお越しください

いね」と声を掛ける。とてもすばやく、実に無駄が無い動きだ。

「うわー、ウンノすごいっすね！ この店の客を一人で回してるっすよ？」

「この時間は酒も出るから酔客も多いが上手くあしらっているよ。うだ。男だからそこまで心配要らないだろうが、女だったらさぞ心配の種になるだろうな」

ハルはわざわざ俺を煽っているようだが、その手には乗らない。適当に流して椅子に座った。

夕食も勿論美味しく、つつい食べ過ぎてしまっただった。ウンノによる味付けが生きて、親父さんの料理が格段に美味くなった。バツは食べ過ぎた……と腹を抱えながら部屋に戻り、ハルは。

「隊長の部屋は隣に取ってあります。ウンノと一緒に部屋になりますが、壁は防音対策してあるんでお気兼ねなく？」

「何を気兼ねするんだ！」と怒鳴る前に、ハルはニヤリとまた人の悪い笑みをして『夜の花』へと消えて行った。くそっ！ 一体俺にどうしろというんだ！

この宿は基本一部屋に二つの寝台がある。ハルとバツが一部屋で、俺とウンノが別々に取ったら明らかに変だろう。ウンノは『男の従者』だから。

湧き上がる衝動を堪えられるか……？ 自問自答しながら部屋に

行き、真つ暗な中二つ並ぶ寝台に溜息を漏らしながら入り口傍の寝台に腰を掛ける。

俺がこんなに心乱されるとは。

恋情、など全く抱く事のなかった過去。そもそも、一人の女性に固執することなど考えもしなかった。一夜限り名も知らぬ相手との情欲はあるが、溺れる事無く、記憶すらなく、過ごしてきた。

それがなんとというありさまだ。

絹糸を紡いだかのような艶のある黒髪。意志の強さを秘めた黒曜石の輝きをする瞳。抱きしめた時の柔らかかな身体から、ほのかに芳香を放つ。あれはハーブの香りが身に染み付いているのだろう。

ごろり、と寝台に横になり右手を目前に翳す。ウンノに対する、心情から溢れる愛おしさを最小の動作で、頭をこの手で撫でた。それ以上、それ以上に進みたくなる衝動は抑えなければならぬ。おそらくウンノは、俺に対して恋愛感情は無いだろう。

今はまだ、と付け足す。

俺に気が無い相手に無理強いをするつもりは無いが、少しでも恋情を持つてくれたら……。

その時は止まるつもりは、ない。

「あれ、隊長居たんですか？ 分かりませんでしたよ部屋が真つ暗で。明かり置きますね？」

暫くして、ウンノが部屋に角灯を持って入ってきた。そして親父さんも何故か。大きくて深い桶を持って、湯を張っていく。

「えへへ、今日のご褒美にお風呂用意してくれました！ 隊長もどうですか？」

「いや…… 俺はいい」

「俺？ うわー、隊長が俺って言うの初めて聞いたかも！」

どうですかって言われても…… と、啞然としていたら素に戻って「俺」と言っていた。ウンノは「わー、新鮮新鮮！」と頬に手を当て喜んでいたので…… まあいいか。

終わったら声かけな！ と親父さんは出て行った。ウンノは二つの寝台の間に紐を張り、敷布をかけて衝立代わりにした。

「こつち見ないでくださいね？」とやや恥らう声がしたと思ったら、シュル、と衣擦れの音がして、水音がして。

ふ、と敷布を見たら…… 影が映った。

角灯は、桶の傍に置いてある……！

一瞬で影から目を逸らしたが、瞼に焼き付いてしまった。見事な肢体であり、見事な曲線を描いて……。

「あ、そうだジェネ！ お客さんが言っていたんですけど、昨日から『夜の花』の機能が半分停止してるらしいんですって！。何かあったんですかね？とここで、『夜の花』って何ですか？」

知るか！ というか、それはハルのせいだ！！

そしてそんな質問今するな！！

湯浴み中、見張りも兼ねて居る為に、出て行くわけにもいかず生殺しの時間が過ぎるのを、ひたすらに待った。

s i d e ジェネシズ（後書き）

影絵のごとく、翔子の姿が映し出されてしまいましたとぞ。
知らぬは本人ばかりなり。

1 クリムリクスの壁

昨日も思っただけど、ずっと曇ってるな！。

朝、目覚めてから窓の外を見やると、一面の曇天だった。太陽でも月でもない球体が六個浮かんでいるはずの空は、厚い雲に覆われて一つですら見えない。

それでも幾分すつきりと起きられたのは、昨夜湯浴みが出来たお陰だと思う。ラスメリナ以降、野宿していたから軽く体を拭く位しか出来ず、更に胸にサラシを巻いていたので外す手間もかかり超短時間で拭き上げなければ不審に思われかねない。

久しぶりのお風呂。

やっぱり日本人とくりや湯に浸からないとねっ。お風呂最高！
ジエネには部屋が狭くて悪かったけれど、ゆっくりとお湯を楽しませてもらった。髪も洗ってすつきりし、仕上げにローズマリーの抽出液で作ったリンスを使った。

食堂を手伝う代わりに調理場を借りて色々作ったのだ。食堂なら竈が沢山あるので、仕込みの時間を利用して抽出液を作ったりできる。更に、食材の使い方を手に取りながら学ぶ事ができたので、この世界での料理の幅が広がるかの考えもあった。

そうして作りたいいくつかの小瓶を眺めつつ、昨夜の精霊達と交わした言葉を思い返す。

湯浴みが終わってジエネに声を掛けたが、何故か疲れた様子で「ちよっと下で飲んでくる」と、私が寝てしまうまで帰ってこなかった。

た。

一人だけぼつんとしてしまった部屋だけど、一人じゃない。耳の宝珠に宿る精霊たちと心話をしていた。

(おいっ！ 俺達もつと使えよ!!)(ひめさまー、あそぼうよ
う)(遠慮なさらずに！ ご用命に従いますよ?)と、もつと使つて欲しがってはいたけど、私だけの為にはできるだけ使役したくないだよ。

でもどうしても何か役目が欲しい！ と押されて(じゃあ・・・食堂で聞いた噂話の事で調べてきて欲しいな?)と頼むと(お任せください姫君)と飛沫が言い、(じゃあみんな行つてらっしゃい！私は残ります)と、残り3人に丸投げした。

(てめーふざけんじゃねえよ！ 何お前だけ残るんだ!)

(仕方ないでしょう？ 姫君をお守りする役目は要りますし)

(いいなーいいなー。ぼくものこりたいー)

(・・・私も)

(うるせえお前ら！ だったら俺様が残る!)

((どどどどどどど))

(!!!!)

どどどやら、こついつた展開はお約束らしい。

結局私の傍に残るのは焰で、あとは私のお願い通り三箇所調査し

に出ていった。焔はこういった作業が苦手らしいので、順当な結果といえる。

みんなを遠くまで行かせてしまったが、私が呼べば即転移してくるといなので心配は要らない。

焔が番をしていてくれるから安心して眠れるが、隣の空いているベッドを見て少し寂しく思いながらも疲れた体はすぐに眠りへ落ちていった。

朝食を終え、すっかり出立の準備が出来た頃ハルが戻ってきた。

……なんですかそのまるで水玉みたいな、赤いポツポツがいくつもいくつも肌にあるってのは！

せめて見えない所にしろ！

その上、ハルの後ろには大勢の女性達が涙を浮かべて立っていた。

「あれ……何ですか？」

バツツに問うと、ああ、とすっかり慣れた様子で答える。

「ハルさんとの別れを惜しむ会だよ。あーそっか、お前知らないんだな？『夜の花』でな…… つぐぐつ！！」

横から出てきたジエネの手が、バツツの口を塞いだ。

「うん、ハルは女性に人気。それだけだ」

「え、でも今『夜の花』って……？」

「さあ、馬貸に行くぞ、早く来い！」

…… ジェネ、明らかに話逸らしてますが？

私は後でコッソリとバツツに聞いちゃった。どうしても気になって。

あの『夜の花』とは、つまり花街。お仕事でお色気を楽しませてくれる場所。そのお色気を売る人のことを『蝶』と言っらしいんだけど、キムロス中の蝶を二晩で……。あのフェロモン魔人は、営業不能になるほど蝶達を魅了しつくしたらしい。他の客が取れないほどに。

…… うん、聞かなかった事にしよう。

そう結論付けて、先に行くジェネまで小走りで付いていった。

馬、でかつ！！！

リゾートホテル勤務時代、近隣には牧場などもあり休日に美味しい牛乳を貰いに行ったりした。その時に見かけた馬は遠くに居たせいもあってそれほどサイズを気にする事も無かったが……。

馬、でかつ！！！

この馬の顔なんて六十センチの寸胴鍋よりでかいんじゃないの？
ここまで至近距離で見たことが無い為、かなり腰が引ける。馬に
乗れる楽しみより、大きな動物に吞まれる恐怖の方が大きい。
大体どうやったたらあの背中に乗るのよ？ 鐙あぶみにすら足が届くかど
うか怪しい物だ。

馬を目の前に立ちすくむ私を見て、結局三頭だけ借りる事にした
らしい。

ジエネ、ハル、バツツ…… 私は？

「ウンノ、こい」

「え…… ちょっ！ 高いです怖いです重いですうわあああ」

そんな私のセリフなんて無視で、ジエネは私の腰を攫いひよいと
馬上まで掬い上げた。そしてひらりと自身も跨ると「しっかり？ま
れ。暫くは俺が支えてやるが、慣れる」とゾクリとする低音のいい
声で耳元に囁き、私の腰辺りに腕を回して支えられた。

「いくぞ」

そうジエネは二人に声をかけ、一路クリムリクスへと向かったの
だった。

道中も悲惨なものだった。

突然の大雨はいい方で、突風、雹、雷なんでもござれだ。

焔が何度も何度も（おいつ！ いい加減俺様を出せ！ こんな雨吹き飛ばしてやる！）と、暴れだしそうな勢いで訴えたが、過保護もいい所だよ！

焔に頼んで全員守ることも出来るが、ジェネと私だけの秘密なので他の目がある時は一切呼び出さないことにしている。

馬ならばおよそ丸一日、駆け足なら朝出て夕方には着く距離だがこんな天候なので、緩んだ時は一気に距離を詰め、荒れた時は休憩するといった具合だ。

「レーンってずっとこんな天気なの？ これじゃ食料自給率めっちゃめっちゃ悪くないですか？」

「ああ、ここの所特に酷くなった。食物は殆どを周辺各国に頼っている。日の光も無く、嵐もよく起こるのでは育たないからな」

今は雨宿りで大きな木の下に四人、温かいお茶を飲んで雹が止むのを待っている所だ。

初夏だというのに、大粒の雹が降り注ぐので寒くて仕方が無い。エルダーフラワーとカモミールをブレンドしたハーブティーで体の中から温める。

「隊長、あとどの位っすか？」

「そうだな・・・この分では遅くなるだろうが、今日中には着き

「そうだ」

「はい、期限ギリギリっすね。間に合って良かったっす！」

「期限？」

「ラスメリナ往復する為の期限だよ。ほら、俺ら近衛騎士団だろ？ 抜けた穴を誰が埋めるかっていう話だ。特に隊長なんて七番隊を任されているからそうそう抜けられない。そこを副隊長が書類全て整え、団長が後押ししてくれたからこそこっぴどく出てこれただぞ」

団長つて、近衛騎士団全十五番隊を総括する役職だったよな？

そう尋ねるとハルが肯定して、更に付け加えた。

「団長は前の大戦の功労者だからな。二代前の王から直々に近衛騎士団長へ取り立てられたんだ。今もあの勇猛さは健在で、だからこそ隊長に目をかけてくださる。ウンノは名前くらい聞いたことあるだろ？ アルゼル・クランベルグの名前くらい」

「えええええ？！ …… それつて、精霊姫と共にこの国を救った騎士の名前ですよね？」

「なんだ知ってるのか。 …… にしても、本当に古い事は知ってるんだな、ウンノは」

「いや…… あははは。ほ、僕おばーちゃん子だったんで」

慌てて余計な設定何番目だったかを確認しつつ、内心非常に興奮していた。

(………… 『精霊姫と騎士の旅』の騎士が………… 生きている！ うわあああ会いたい！ 会ってサイン貰いたい！)

あの小説の生き証人………… というか、まさにダブル主役の一人だよ！ あの精霊姫とのラブロマンス、実際その人の口から聞いてみたい。どっかで少しでも時間を貰って、サイン貰いに行こう！ とミ―ハー心に固く誓った。

「大分電も細かくなつたな。よし行くぞ」

ジエネが一声掛け、皆それぞれ馬上の人となつた。

私はまたまたジエネの前。乗れないから仕方ないんだけどね。

早足駆け足になると、口が避けても「乗り心地最高！」なんて言えたもんじゃない。サスペンションがどうこうじゃなくて、そもそも馬だし？ 上下にシェイクされ、跨る足は攣り、お尻は折角脂肪を溜めているのに(勝手に溜まる！)用を成さず。

ともすれば舌を噛みそうになるので黙ってるしかなく、ひたすら前を見た。

前を見ることに、集中する。

じゃないと、ね？

おっと、つてふらつく度ジエネの体へ背中を預ける形になり、がっちりとした壁の様な胸板腹筋を感じてしまい、それがまた広がって………… このまま凭れられたらいいのにな、とふと思う自分に慌て。

ほんの少しだけ、隙間を空けて前に集中した。

どことなく、潮の香りがする。

大分暗くなった空の下、小高い丘から眺め見ればそこにはレーンの首都クリムリクスの城郭都市が一望できた。

三層にわたって城壁が囲うその城は、なるほど攻め入るには相当苦勞しそうだ。別名『無敗都市』も頷ける。

その後方には日の光を全く反射していない為か、暗い色をした海が見えた。都市の後方は切り立つ崖であり、海から攻め入る事も出来ないだろう。

しかし景色にはどことなく、いや、はっきりとした違和感を感じた。

その違和感の正体を後ろのジエネに尋ねる。

「ジエネ、ちょっとあの城に近い城壁の一部…… なんてぼつかりと消えてるんですか?!」

ぐ…… と珍しく答えに詰まるジエネ。あれ、なんだか嫌な予感が……。

「それは 俺を助ける為に、カケルが牽制を込めてやったものだ」

「げ」

どんだけ人間離れしたんだ弟よ! 城に近い場所って明らかに王

城へ住まう物への嫌がらせだよ？！

すみませんすみませんうちの弟がご迷惑をー！

ひたすら恐縮する私の頭をポンと撫でながら

「そんな顔するな。俺はカケルのお陰で今があるんだ。それにあの当時、カケルは王でもないし変装していたからラスメリナの手の物と誤解されることも無いからな」

撫でていた手は最後にくしゃりと髪を軽く握り、再び手綱を持ち直した。

手が優しすぎるんですけどっ。

さっきまで撫でていたジエネの手を眺めながら、赤くなった顔を見られないで良かった、なんてざわつく心臓を押さえながら思った。

クリムリクス三層の城壁を、夜間に紛れそつと目立たないように通り抜ける。

一の壁と二の壁の間は、一般市民や商人達が住まう場所。二の壁と三の壁の間は一般貴族、三の壁の内側は王城とこの国を治める選ばれた物のみが許される場所。

壁には通路として巨大な門があり、夜間には篝火を焚いて通行人を監視する為兵士が常駐しているが、ジエネが居るので顔パスで通れた。

近衛騎士の職場は王城なので、三の壁門をくぐり裏手の厩舎へ馬を預けに向かう。

うー…… 足がガクガクするよおー。産まれたての小鹿のモノマネなら、今一番上手に出来そうだよ？

こういった時はやっぱり風呂でゆったり浸かるのがいいんだけど、今から男所帯にどっぶり浸かるんだよな……。

いや、うまくないし！

と、自分でツッコミ入れておき、せめて足湯くらいはしたいなと思っただ。

すると、厩舎から城の内部に通じる扉から一人の男性が出てきた。見た所…… 三十歳手前かな？ 灰色の短髪で水色の瞳をした、どこことなく冷たい感じのする人。ほっそりした体でこちらに向かってくる。感情の読めない目で私を見たが、すぐにジエネへと視線を動かした。

「隊長。団長より伝言で戻り次第報告を聞くので時間問わず即来るように」と

「分かった。バツツ、明日より通常任務に戻れ。ハル、ウンノを頼む」

「了解しました！ バツツ・ランカートン、只今をもって特別任務を離れ明日より通常任務に戻ります。失礼します！」

ビシツと右手を左胸に当て、隊長であるジエネに挨拶をした。うわー、こうしてるとちゃんと騎士らしい（失礼）

そして去り間際、私に「またな」と声を掛けて宿舎？ のある方に歩いていった。

「隊長、ウンノはあの部屋で本当によろしいんで？」

「構わない。とにかく今夜はもう休め」

「了解しました」

ハルも右手を胸に当て（敬礼の様なものかな？）ニヤツと笑いながら軽く頭を下げ、私を連れ立ち歩き出した。何その口の端の笑みっ！ 気になるじゃないか。

「ハルさん、あの人って誰ですか？」

私は小説の舞台に立っている！ という、軽く興奮状態でキヨロキヨロ辺りを見ながら聞いた。

そんな様子に呆れながらもハルは先を歩きながら答える。

「あの人？ ああ、アイツか。あれは七番隊の副隊長でロウ・グイランという名だ。前に言っただろ？ ラスメリナ往復の為の書類整えたのアイツなんだ。事務処理は最高の腕を持っている」

「なんですかその事務処理」は『最高の腕って」

「ロウは戦闘向きじゃないんだよ。剣も弓も近衛騎士としてギリギリ及第点を貰っただけで実践向きじゃない。それでも副隊長の座にいるというのは、事務関係が優秀だからだ。冷静、冷徹、冷血。あいつから予算取れるもんなら、よっぽど満足させる客観的な数字の説明が必要だろうな」

「うわー…… 有能なんですね。そんな方がどうして騎士団の、更にジエネの下に付いているんですか？」

「ロウが希望したからだ。ジエネシズ隊長の下で働けねば辞めますってな。 さあ着いたぞ」

どうしてそこまで？ って話が聞きたかったが、ハルが開けた部屋を見て驚き、続きどころではなくなつた。

そこは魔窟であつた

と言つたほうがいいだろうか。

紙の束、本の山、ありとあらゆる物が乱雑に…… いや、そんな

生易しい単語ではなくとにかくそう、散らかっていた。それも酷く。何の部屋か分からないけど、奥の机に行く為には『獣道』を通らねばならず、積まれた本に引つ掛かったら向こう三年は出て来れなそうな危険な雪崩が起きそうだ。腐敗臭だけはしない為、辛うじて人が存在できる部屋だ。

「ちょっとこれ…… ハルさん？」

「うーむ、僅か半月でここまで進むとは。ここは若の執務室なんだが、とにかくあのロウが溜め込むんだ。仕事上はちゃんと回ってるし、若も自分の事には無頓着なきらいがあるから、仕事上滞りなければ問題ないとそのままにしておられる」

「……」

充分問題な気がするけど。

そして獣道を二人で、積上げられた物を触らないようにそおつと進み、奥の机の近くにある扉を開けたらそこには意外にも散らかっていない部屋があった。

こぢんまりとした広さで、簡素なベッドが一つ。小さな机と衣類をしまう家具が備え付けられていた。

「ここは？」

「仮眠室だ。夜遅くまで執務する事もあるからな。まあ…… 見の通りの部屋だから滅多にここを使う事もないが。ここをウンノの部屋とするよう若から言われている」

「いいんですか？ 僕一人だけでこんな立派な部屋を使わせても

らうなんて」

「急遽決めたらしいからな。空いてる部屋はここしかない。今夜はもう遅いからゆっくり休むんだな」

そう言って、ハルは眼鏡を外して私の顔をじっと見た。

うわああああ!!!

なにその余計な動作！ ハルの持つ色気が私を侵食して体温が上昇する。

こんなんでゆっくり寝られるわけないだろう！

ハルは口の端をにやりと歪め（多分これだけでも溶ける）、「お休み、いい夢を」と扉の向こうに消えた。

部屋は隅に角灯が置かれていてほんのり明るく照らしていた。

これといった荷物はないが、外套はビチャビチャに濡れているから干したい。備え付けの家具を見たらハンガーっぽいのがあったからそれで窓枠に引っ掛けておく。

荷物を入れた袋も外側は濡れているが、中身は大丈夫。机に並べておこう。キムロスの町で手に入れた魚醤や山で採ったハーブ。

一通り並べた所でやっとな気持ちも落ち着いた。

長靴を脱ぎ、服も着替える為にポイポイと脱ぎ捨て、サラシを外して大きく深呼吸！ あー、やっぱり自由っていいな。やっぱり抑えたままだと苦しいよ。

寝るときくらいは外したいからね。

寝巻き代わりに薄手のシャツとズボンを履いてベッドに横になると、急に眠気がやってきてあっという間に意識が途絶えた。

トントン。

トントントントン。

「……入るぞ」

ガチャリ、とドアの開く音で目を覚ました私。ボンヤリと入ってくる主を見たらジェネだった。

「あー、じえねー、おはよーございますー」

頭がまだ動かないや。むっくりと起きてばやーっとジェネを見たら、一瞬で目を逸らされた。

何よ失礼な。

と思いつつ、自分を見下ろすと……あら？

サラシ巻いてないから、薄手のシャツからしっかりと胸の形が出てしまっている。

「うわっ！ すいませんっ。久しぶりに個室だったんで油断しちゃいました。お見苦しくてゴメンナサイ」

慌てて掛け布団を胸の上まで引つ張り上げて隠す。ジェネは目にかかる髪を掻き上げ、その手を今度は力なく落とした。

「……いや、目のやり場に困るだけだ。ここはウンノの部屋だから好きにしてくれて構わない。ただ、鍵はキチンと掛けておけ」

「へ？ 鍵なんてあつたんですか。気付かなかつたな」

「……ハルの奴め」と唸ったジェネは、何かを振り払うかのように頭を振った後、私の傍に近づき

「ここにはまず誰も近づかない。理由は……あの部屋の惨状を見れば分かるだろう？ そしてこの部屋には鍵が付いているのも理由の一つ。書状を渡すまでこの部屋を使うといい。俺は特務があるから四六時中一緒にはいられないが……」

ベッドに腰掛け、私の耳上の髪を指で後ろにスルリと梳くい上げた。無骨な指が微かに頬に触れ、やけに優しい動きに心臓が高鳴った。

「精霊達は皆ここに？」

あ、宝珠を見るためだった？

「皆ちよつと調べ物を頼んでいて出かけてます。あ、火の子だけはここに」

おいで、と声を掛ければすぐに現れた。

「姫さん、水のと風のはボチボチ帰ってくるぜ。地のはもうちょい」

「そつかー、じゃあまた帰ってきたら教えてね？」

「ウンノ？ 一体何を調べている？」

再び焰を宝珠へと戻し、精霊達に頼んだ調査内容を話す。

「うーんと、ジエネは知ってますよね？ 私達の世界で『先の大戦』とっていたたまさにその時代を見聞きしていた人が書いた物語があるんです。それが『精霊姫と騎士の旅』といって、ラインとアルゼルの出会いから戦争に関わるまで、そして悲しい別れの経緯が書かれたラブストーリー！ 愛を誓い合ったあの中庭のシーンがキーン死モノでした！ 何で愛し合ってた二人が別れて暮らすようになったってしまったのか……どうしてもそこは不思議だったんです。…

…あ、ゴメンナサイ話逸れました」

あまりに好きな物語だったせいか、熱く語りだしたら止まらない。段々興奮した自分をハッと省みて慌てて話を戻す。

「つ、つまりですよ。その時代に残っていた負の遺産やら懸案事項があつたら調べておこうと思ひまして。西の方にある山の鉄鉱石が採掘できるようになったかなー？ とか、食物の輸入量と自給率を何とかする方法と…… 後は王様のご様子を……」

特に最後の余計なお世話だったかも？ と思ひながらも、一応報告をする。

知らず目線が下がってしまい、布団の上に置いた自分の手をじつと見てると、その上から手が重なった。

ひゃっ。

「有難う、助かる。実を言うと、鉄鉱石はある人物が占有権を主張しており手出しが出来なかつたんだ。農業も専門外だが重要な情報だ。あと……王の様子とは何故？
ハルか」

手を軽く握られ耳元で低音を囁かれる私にこの状況は心臓が壊れそうだよ！ あっさりとハルから聞いてしまった事を肯定し、その上ジェネの生い立ちまでも知る事を謝った。

「弟さんを守る為に近衛騎士を志願した……と聞き、今周辺で何が起こっているのかを知りたいんじゃないかと思ひまして……ごめんなさい」

「謝るなウンノ。いいんだ、いずれ嫌でも聞かされるだろうし、

それならばハルから教えてもらった方が正確だ。黙ってた俺も、悪かった。」

お互いに謝るからつい顔を見合わせて、可笑しくなって噴出した。ジエネも小さく笑い、その柔らかな笑顔に私はたまらなく胸が苦しくなる。彼の私に向けてくれる表情は、とても甘い。

心の未熟な部分をとろりと溶かしていくような、温かさがある。ただ ジエネは面倒見がいいから私にもそう接してくれるのであって、勘違いしないように！

自分の心を叱咤して、なんとかどっかに流れそうな気持ちを押しとどめた。

「それで、今日私は何をすれば？」

改めて話の先へ水を向けると深い海の色をした瞳が少し揺れ、一日強く私の手を握り、離す。

「早速で悪いんだが、団長がお会いになるそうだ。 いや、心配は要らない。団長は大まかではあるが事情をご存知だ。 実際ウンノに会って話したいらしい」

「え！ ホントですか！！ うわー、いきなり夢叶っちゃった」

隠してた事も忘れ、ベッドから飛び降りて着替えの準備をした。早く会いたい！

ジエネは目を逸らしながら「準備が出来たら、声をかける」と隣の部屋へと出て行った。

Side ジェネシズ

団長の部屋へ向かう途中どうしても確認したい事が、とロウが話を切り出した。

「イル・メル・ジーンの弟？ …… 何番目の？ ありえませんか。あの兄弟は公式二十八名、非公式四十四名おり全て記憶しておりますが、黒髪黒目は一人として存在しません。 …… 隊長はこの馬の骨を拾い上げて大事そうに部屋に住まわせる気ですか？」

「相変わらず辛辣だな。いいだろう、お前には伝えておく。ウンノはラスメリナ王カケルと双子だ」

「冗談はよして下さい。あの竜帝と双子など、悪夢再来じゃないですか！」

「信じぬのも自由だがな、私は王よりウンノを預けられた。従者として周りに置くからそのつもりでいる。この件に関しては団長と私だけ関わる。他言無用だ」

「了解。隊長の従者ですか 　　まあいいでしょう、貴方の身の回りの世話をさせる従者は要りますからね。やっと傍に置く気になった事は喜ばしいです」

従者を置くと言ったときからこう言われる事が多くなったなど、なんとなく釈然としない。身支度なんて大して手間ではないし、着飾る必要もないから問題はない。

「さあ、着いたからこの話は終いだ。私がないときはウンノを

ハルに付けておけ」

「了解しました。色魔ですがそういう事には要領のいい男ですからね」

サツと踵を返し、従者を迎える為の書類整備に向かった。

ロウは、有能な男だが女性に関しては全くの鈍感さで、現にウンノの事を男だと一つも疑っていない。ハルとロウを足して割れば丁度良いだろうが、本人同士は全く相容れないだろう。

お互いに苦手としているが、仕事に関して言えば一目置く間柄。しかし一旦酒が入ると「この色魔!」「なんだ仕事馬鹿!」「歩く猥褻!」「枯れ木!」と低次元の言い争いをするのが定番となっている。

ドアを敲くと、すぐさま応答があった。

中に入るとこの部屋の主は長椅子に腰掛けて本を読んでいた。きつとまた趣味の釣りの本だろう。

「おおジエネシズ戻ったか、ご苦労。してカケル殿のご様子は如何だったか?」

本を閉じ、椅子を勧められたので向かいに腰を下ろし、今回の任務の目的であった内容を伝える。

そもそもカケルと克蘭ベルグ団長は面識があり、あの城壁を消した当事者同士でもある。カケルはその頃ラスメリナの王としてではなく、俺の居候をしていた友人で、レーンにとっては黒い歴史だが、団長と俺にとっては敵に一矢報いた爽快な思い出である。

ラスメリナの様子、城下の賑わい、竜達の安定。様々
な報告をする中、どうしても『精霊姫』の話は出来なかった。その
存在は、今この地に荒れ狂う天候不順に対し重要な位置を占める。
玉座の安定と共に、名を引き継いだ物が現れたとなれば、あの者達
は手段を選ばずウンノを掴むだろう。私利私欲だけの為に。それだ
けは避けなければ。

それに。

カケルもウンノも興奮して話す、アルゼル・クランベルグを英雄
とした過去の戦い。

団長は精霊姫とは結ばれず、その後も独身を通している。渦中に
あった人なので、心を痛めてしまわぬか気遣い、結局口にするこ
とはなかった。

今、カケルの双子の姉を従者として連れてきており、王に書状を
渡す役割を任されていると伝えると身を乗り出し

「ほお、カケル殿の姉君が！是非にお会いしたい。今夜はもう
休まっているだろうから明朝こちらへお連れしろ」

「了解」

部屋を辞し、今夜の自分の寝る部屋へと向かう。

普段は宿舎を使っていたが、今はウンノが執務室に備えた小部屋
にいたので出来るだけ近くにしようとして、すぐ隣の部屋を使うこと
にした。

Side ジェネシズ

朝になり、身支度を整えた後ウンノを迎えに行く。荒れた執務室を通り抜け、小部屋へ続く扉を敲いたが、応答がない。何度か敲いても動く気配がない為不審に重い、扉を押すと「開いた」

…… 鍵が閉まっていないではないか。

無用心さに眉を顰めながら寝台を見ると、丁度ウンノが起きた所だった。

「あー、じえねー、おはよーございますー」

なんとも寝起きの、気が抜けた挨拶をしてきた。いつもきびきびとした声を出す事が常だったので、その無防備な声だけで打ち負かされてしまう。姿を見たら…… そちらも無防備に薄手の布一枚だけの、しっかりと女性と分かる双丘が目には焼きついた。

ひよっとして試されているのか？

煽られてるとしか思えないその扇情的な姿は、容易く自制心を乗り越えそうだった。大体女性という物は肌を隠すべしと教えられているので、日常的に見る衣装は幾重にも重ねられた装飾華美なドレスだ。

子供^{ガキ}か、俺は！ 女の体など充分見知っているのに、好きな女というだけでこும்目を奪われてしまうとは、過去の自身がいまの俺を見たら嘲笑しただろう。

慌てて目を逸らすとウンノも気付き、隠した。

ようやく目線を戻せるようになり、鍵の件を問うと知らなかったという。ハルはわざと教えなかったに違いない。その手に乗るものか！

さら、とウンノの漆黒の髪が頬にこぼれる。いつもは後ろで一つに括り付けられた髪が、背中に流れるように落とされていた。

衝動的にその髪へ手を絡ませ、梳くい上げ、滑らかな手触りに満足したが…… どうするこの状況。

考え無しに触れた為、説明しようもない。直情的に気持ちを語ってもいいが、まだ早いかな？

ふと髪から見える赤く染まった耳朵を眺めれば、ウンノが契約した精霊たちの宝珠が見えた。

「精霊達は皆ここに？」

我ながら、不自然な質問だったか？ と思っただが、ウンノは一瞬きよとんとした後、護衛の焰だけを残し、調査に出した、と答えた。自分の為には精霊を使役するのは躊躇うのに、俺達の為に、精霊を遣わす……。それも人間である俺達が入ることの難解な箇所を、極めて正確に選んでいた。この娘は、よく視えている。

余計な手出しだったかと小さくなるウンノの手を大事に握り、謝意を伝える為顔を近づけて礼を言う。しかし、王の様子とは……？ その事はウンノは知らぬはずだが、この態度を見るとどうやらハルが喋ったらしい。

「弟さんを守る為に近衛騎士を志願した…… と聞き、今周辺で何が起こっているのかを知りたいんじゃないかと思ひまして…… ごめんなさい」

「謝るなウンノ。いいんだ、いずれ嫌でも聞かされるだろうし、

それならばハルから教えてもらった方が正確だ。黙ってた俺も、悪かった。」

ウンノは俺の為に王の近辺を調べたのを勝手にした事だと謝り、俺は黙っていた事を謝った。

その態度が余りに可愛くて、そして噴出し笑う姿が愛おしくて、意識せずとも自然に俺の口は弧を描いているのが分かった。

ウンノの瞳はじつと俺を見ていたが、やがて一瞬伏せた後にそれまで微かに感情を映していた瞳が、冷静な物へと移った。

「それで、今日私は何をすれば？」

まだ、駄目か。

ウンノは、まだ俺を見ていない。答える受け皿が出来ていない。押せば壊れるだろう、引けば気付かぬだろう。

容易くいかず難解な相手だが、初めて心から欲しいと思った相手。諦めることは出来ない。

本当に子供ガキに戻ってしまったかのようだ。こんなに心揺さぶられるとは。

内心の激しく揺れる感情は奥に仕舞い、これより団長に会いに行くと言げると、ウンノは服の事など全く忘れた様子で寝台から飛び降り、会えることを無邪気に喜んだ。

喜ぶ姿は見ていて嬉しいが…… 団長に嫉妬してしまつ自分をどうにかせねば。

小さく溜息ついて隣にいたりと言い残し、雑然とした部屋へと戻った。

1 近衛騎士団

支度を整え、魔窟へ入ると、ジエネは何枚かの書類にサインを入れているところだった。

眉間に皺を寄せ、サラサラとペンを走らせる姿はとても絵になっている。

ただその前髪は目にかかって、時折鬱陶しそうに掻き上げていたので、つい気になって声を掛けた。

「ジエネ？ あのー、良かったら前髪切りましょうか？」

「ん？ ああ、頼めるか？」

最後の一枚を書き終わり、顔を上げたジエネは前髪を軽く摘みながら答えた。

髪を切るをこの部屋では流石にどうかと思い、再び小部屋に戻って椅子に座らせ、櫛が無いから指で整えながら前髪を丁度よく切っていく。

うっわ、こんな間近でいい顔見るのって役得？

「ウンノは髪を切るのも上手なんだな」

大人しく切られるがままのジエネが、感心した様に言った。

「翔の髪を練習台にしてみましたからね。それなりには出来る様になりました」

最初の頃、ざんばらにできて泣かされた事もあったな、と言

う事は黙っておく。初心者に失敗は付き物だよね！今は大丈夫だけど。

ついでだから、と全体も軽く整えて完了！うん、カッコイイ！切った髪が付かない様に首周りに掛けていた布を取り払い、軽く叩いて仕上がりに満足してにつきり笑った。

なぜかジエネは眩しそうにこちらを見て（なんか反射したのかな、と後ろ見ちゃったよ）、有難う、とお礼を言われた。

「いつもはイル・メル・ジーンが気が向いたときに切ってくれるんだが、暫く会わなくてな」

「あ、そうそう！そのイル・メル・ジーンさんって、どんな人なんですか？一応私の兄弟設定なので知らないでいるのはちょっと…」

「あいつのこと、か。そうだな、知らないと困るか……」

何となく言い辛そうにしていたジエネだが、「変人だ」と一言で切って捨てた。

ちよちよちよちよと！それで済ますんですか！！

「あのっ！もうちょっと情報お願いします！！」

ジエネはその長い足を組み、手を顎に添えて眉間に皺を刻んだ。

「とにかく、そういう奴なんだ。……注意事項だけは言っておこうか。あいつは略称を言うと怒り出して面倒なのでちゃんと『イル・メル・ジーン』と言う事。逆らうと面倒なので、大概の事は流

す事。派手な姿をしているが、一応この国の宮廷魔術師をしているので、地位は確立している事。以上だ」

以上で！

「ああそれと兄弟は公式二十八名、非公式四十四名、まだ増えるかもしれないが、今現在はそれで全部だ」

全部で！

なんなのその人！私は頭を抱えてウンウン唸ってしまった。よりにもよって、そんな人の兄弟とは。

……逆に言えば、兄弟も多くて（多すぎて？）しかも偉い人っぽいので私が従者に就いてもおかしくはないだろうな。

もつともつと聞きたいことはあったけど、『変人の弟』という設定を心のメモに書き加えた。

ふ、と手に持ったままの鋏を見て思いついた。

「あ、私も髪を切った方がいいですよね？」

「どうして？」

怪訝な顔をしたジエネに、私は耳に付く宝珠を指し示す。

「ほら、団長って前の精霊姫よくご存知じゃないですか。リインもね、耳に宝珠付けてたんですよ。これ私が付けてるの見たらバレちゃうんで、隠してた方がいいんじゃないかと思ひまして」

「まあ確かに隠す方がいいが、それが何で髪を切るといふ話にな

るんだ」

何故かジエネは不機嫌になって私に聞く。

「髪をね、短くすれば自然と髪が耳を隠してくれるんで……きやつ！」

私がここら辺まで、と耳の辺りまで髪を切る仕草をしたら、ジエネが私の手を取り、もう一方の手で一つに結わえていたゴムを抜き取って解いた。

パラツと広がる髪を、ジエネは指で梳くしりながら私の頭頂部に頬を寄せた。

「切らずとも、これで解決だ」

隊長ー！ まるで抱き合ってるみたいなんですけどー！！

「長髪の男もいると言っただろう？ このままでいい。俺はこの方が好きだ」

俺はこの方が？ この方が？

ああ、好みとして下ろ

した髪が好きなんですネっ？！

私はあまりの状況に血液が沸騰しそうになる程熱くなって、髪を撫でられるその手を敏感に感じ、握られる手は第二の心臓みたく鼓動を感じた。

ジエネが『私』から『俺』と言う様になってから懐に入れられた気分になり、それが無性に甘い響きとなって伝わる。

包みこまれている安堵感で飛び込んで行きたくなるが、ジエネは『翔の姉』だから甘いのであって、別に私を好きではないのだと思

う。優しさを勘違いしてはいけないのだ。

ふー危ない危ない！ また流される所だった！！

「じゃ、見えないように下ろしたままにしますね。あの…そろそろ行きましようか？」

「……そうだな」

ジエネは最後にもう一度髪を撫で、頭頂部のつむじ辺りに何か触れる感触を残しながらそっと離れた。

ジエネに案内され重厚な扉を開くと、意外にも質素な部屋だった。飾り気の無い応接セットと窓側に机とテーブル。本棚。華美な物が嫌いだっとな、と本の内容を思い出しながら納得していると、視界の端から夢にまで見た憧れの騎士が歩いてきた。

「あなたがカケルの姉君か！ お初にお目にかかる。私はレーン王国近衛騎士団団長を任されているアルゼル・クランベルグだ」

「あ、ああ！ 初めまして。私はウンノ…海野翔子と言います。翔がお世話になりました」

緊張からぎこちなく返事をし、ぺこりとお辞儀をした。

初めて会うのに何故か既視感を覚えたが、映画化された時の俳優に似ているせいか？ と流す。

それよりも、あの英雄が目の前にいるというだけで興奮しちゃうね！ この手でラインの危機を救ったんだよなーとか、あの時肩に負った傷は大丈夫かな、とか。

小説の内容と挿絵では偉丈夫で朴訥とした人柄だったけど、今日の前にいる人はとても素敵に年齢を重ねた60手前位？ の、ロマンスグレーのナイスミドルだ。

ほおつと見続ける私に団長は優しくソファに誘導してくれた。うわーエスコートされちゃった！

「ふふ、姉君は可愛らしくられる。カケルは賑々しいから双子といえども違いが分かるものだな」

「あわわ、翔が色々やらかしたみたいで……すみませんでした」
慌てて頭を下げる私に、団長は「いや、楽しませてもらったよ」とクククと笑った。

私の隣にジエネも座り、団長は正面に腰を下ろす。

「概要はジエネシズより聞いている。レーン王の下へ、ラスメリナ王としてのカケルから書状を届ける、と」

それで合っているか？ とこちらを見る団長に、こくりと頷いて肯定する。

「国境付近で怪しい動きがある、と翔は言っていました。多分…ですが、翔は戦争は避けたいんです。面倒な国家間のやり取りをすっ飛ばしてレーン王と連絡を直接取り、早急に事の收拾を図りたいんじゃないかな……想像でしかないんですけど」

言いながら、翔なら「めんどくせーから王と話つけちゃおう！」なんて思ったんだろうなと検討をつけていた。戦争なんて、結局良かったと思えることなどない。上に立つ者だけの私利私欲の為に、全く興味のケケラもない平々凡々と暮らしている下々の者が煽りを食らって、徴兵されたり食料取り上げられたり。

国同士のやり取りとして、使者立てて往復させるのも時間の無駄だし、その度に会議だなんだと遅くなる。余計な事取っ払ってしまおうという考えは、私ももっともだと思う。

その考えを告げると、団長は思慮深い目をしながら「しかしな」と切り出す。

「姉君…いや、ウンノ、と呼ぶことにするか。ウンノはこの国の王の事は？」

「はい、在位二年目の ジエネの弟だと言うことは聞いております」

ちらりとジエネを窺いながら答える。「あと、傀儡政権だと言われている事も……」

言い淀みながらも知りえた情報を伝えたと、団長は立ち上がって窓際まで歩み、外の景色を眺め見た。

憂い顔に見えるその表情になんと声を掛けたいか分からず、じっと黙った。

「団長、この話はラスメリナ城下でも噂になっています。我が国の内情がここまで漏洩するのは明らかに情報統制が取れていない証拠。その上……食料調達も輸入頼り。天候を左右する精霊が荒れ狂うのは玉座の安定がなされておらず、それはつまり王の統治が機能していないんだと諸国に知らしめているようなものです」

ジエネが団長に自分自身確認するかのようにつつた。無表情に見えるその顔だけど、目は悔しそうに鈍く光っていて。ああ、ジエネは弟の事が好きなんだな、心配なんだな、と伝わった。

でもなんで王がそこまでグラついているんだろう？ 十六歳とはいえ統治二年目。頼る大人も沢山いるだろうし、団長だって支えてくれるのにな？

王のことで不思議がる私を余所に、ジエネは団長に諸国から見たレーンの状況を伝えていた。

ふ、と風が頬を撫でた。ん??

(ひめさまー、ぼくだよ、はやてー)

(うわっ！ お帰り疾風！ありがとう。そうそう、王の様子を見てきてくれたんだよね？ ナイスタイミング！ それでどうだった？)

(うーん……ちょっとねー、けっかがはってあって、なかなかはいれなかったの)

(結果?!)

(そうそう。おうのそばには せいれいつかいがいて、やなちからで ぼくをはじくんだよー)

(……王は精霊使いの結果に閉じ込められてるということ?)

(ということー。そこからはいれないし、なかからでられないの)

(わかった。他に何か気づいたことは?)

(うーん……あのおうさま、さいきんなにもたべてないから、しんじょうかも?)

「えええええええっ！！！！」

突然大声を上げてしまい、団長もジエネもこっちを驚いた目で見返した。

「ああいえ、げふんげふん。何でもありません」

動揺してしまいちょっと嘔みながら誤魔化した。と思ったら、ジエネがそつと私の背中に手をやり心配そうに「どうした？」なんて聞いてくる。

うおー、優しすぎる！ いやいや、それどころではなくて。こっそりジエネに耳打ちをした。

（あの、今風の子が帰ってきて王の様子を聞いたんですが、精霊使いにより結界に阻まれて軟禁状態らしいです。その上……食事を最近取っていないらしくて……）

死んじゃうかも、とはどうしても言えなくて飲み込んだ。

神妙な面持ちで聞いていたジエネは、ふわりと目を優しくに緩ませながら、「ありがとうな」と私の頭を軽く撫で、団長のいる窓際に向かった。

「先程の話、検討させていただきます」

団長に向かって、ジエネは決意を込めた声で言う。
一体何の話があったのか？ 私がそう聞くと、ジエネでなく団長

が答えてくれた。

「ジエネシズがラスメリナへ出立した頃から、王が姿を見せなくなったのだ。それまでは朝議や謁見の折にはお出まし下さっていたのだが、代わりに宰相のベナム・グランドーが取り仕切るようになった。……今までも王は言葉を発さず宰相が全てを動かしていたから、政務上は問題は無い。ただし、そこに王の姿がないだけで……」

団長は、沈痛な面持ちで外から視線を外し、私を見る。

「そこで　　王のお傍に仕える侍女をこちらで用意し、潜入させようと思うのだ。私の息が掛かっていない様に見せねばならぬ為、人選には少々苦労しそうだ、という所までジエネシズと話した所だ」

んっ？

「今の所候補として、バッツの姉辺りが適当かと思われませんが……」

おっ？

「そうだな、あの姉ならばあまり顔は知られていない。どうだ、連絡を　　」

「あのっ！　それ私やります！！」

勢い込んでびしりと拳手をした私に、二人とも目を見開き固まった。

「王の侍女として潜り込めばいいんでしょ？ だったら私が行きますー！」

「ウンノ！ 何を言っているんだー！」

団長より一足早く立ち直ったジエネが私の傍に寄り、私の上げていた手をグツと握りこんだかと思っただらその手を引き寄せられて、体ごとジエネにぶつかつた。そしてそのまま、ぎゅっと抱きしめられて

！！

「ちょ、ジエネ！ ジエネー！！」

太い腕が腰に回されて締められ苦しくて、しかし身動きみじろをした所で固いその腕は動く事も無く、抗議の声を上げたらやっと気付いたかの様にほんの少し緩くなった。

「どれほど危険な事だと思っているのか？！ 大体お前が行く理由など無い。体裁整えるからそれまで待て！」

「いーえ待てません！ 時間ないですよ？ だったら私の方が便利だと思いますー！」

「駄目だ！」

「駄目って言われても行っちゃいますからねっ！ それでもって、書状も渡しちゃいますからねっ！」

頭ごなしに却下するジエネと、子供みたいに駄々を捏ねる姿に団長がとうとう堪え切れず笑い出した。

「ク…… ククク…… アーッハッハッハッハッ！ ジエネシズ、お前の負けだ！ ふふふ、お前がここまで取り乱す相手が出来たとはなあ！」

団長が笑う姿を呆気にとられて見ていたジエネだったけど、自分が私を抱き締めているかの様な姿に、慌てて手を引つ込めた。やれやれ、苦しかったなあ。慌てたからといって、動けないようにするなんて酷いな！ そんな直ぐに飛んでいかないよ？

まだ笑っている団長を余所に、私はとある修行の成果を出す事にした。

「ジエネ…… お願いです。危ない事しないしあつたとしても逃げるんで、私を行かせて下さい！」

必殺『上目遣いでおねだりポーズ』でジエネを見上げる。

僅かにグラつく瞳に、ダメ押しとばかりにジエネの耳元に口を寄せ、コツソリと囁いた。

（私は現『精霊姫』ですよ？ 大丈夫です！）

ジエネの背中をパーンと叩き、にっこりと笑ってみせる。

団長はようやく声は止まったものの、目と口が愉快そうに緩んでいた。

「ジエネシズ、決まりだな。大事にするのも分かるがこの度胸は力になるに違いない」

ジエネはソファに腰を下ろし、大きく息を一つ吐くと片手で顔を覆った。

「一体この双子はどれだけ突拍子も無い事を何故言つのだろうか……」

小さく呟くその声にほんの少しだけ罪悪感を持ったけど、早く王の下へ行つてあげたかった。

王というより、ジエネの大事な弟だから。

団長の部屋を出た後、準備の為に私とジエネは近衛騎士団七番隊の詰所へと向かった。

この国の騎士団は、赤・青・黄・白・黒と五色に分かれており、それぞれ三番隊ずつ組まれている。ジエネ達七番隊が所属しているのは「黒騎士団」であり、よって制服も黒で統一されている。

第三層を守る近衛騎士団は、その五彩近衛とも呼ばれ、色ごとに交代勤務をして警備にあたるらしい。

このような体制が出来たのは大戦以降で団長が整備したといつので、流石に私は知らない。

ちなみに聞いた話だけど、一番隊から十五番隊までである近衛騎士団の順位があり、その順位は一年に一回王によって決められるそうだ。戦績が良いとか、功績によるものだとか、そんな感じで。

ジエネは…… 翔が前に剣の腕はこの国最強と言っていた。それなのに七番隊ってことは出生の事が色々絡んでいるから可もなく不可もなく七番ってところらしい。

「ジエネがあんなに怒る所、初めて見ました」

回廊をテクテク歩きながら、少し前に行くジエネに話しかけた。

「心配いただくのは嬉しいんですけど、今ここに疾風と焔がいるんで何とかなると思うんです。それに、ちゃんと女なんで誤魔化す必要が無くなるというかなんというか……」

なんだろう、この不思議な感じ。
結果オーライなのに言い訳してるかのような気分。うん、とりあ
えず。

「ごめんなさい」

立ち止まってジエネの服の裾をツンと引っ張り、謝った。

「勝手に決めてごめんなさい」

「いいんだウンノ、先程の事は俺も謝る。怒鳴って悪かった」

あれ？ また二人して謝ってるし！

今朝方と同じ状況になり、お互いに笑みがこぼれた。

「ウンノ、俺はお前を危険な目に合わせたくないんだ。確かにウ
ンノ程あの場所に入れる人物は居ないだろうということも、理性で
は充分に理解している」

そういつて私の頭をポンと軽く叩き、私を見つめた。その少し熱
を持った視線に居心地が良いのか悪いのか、モゾモゾした気持ち
がする。

「しかし理性では理解できても感情は」

「ここに居ましたか隊長！」

何か言いかけたジエネを遮る様に、副隊長？ のロウが回廊の先
から現れた。駆け足でやってくる姿を余所に、隣から「チッ」と舌

打ちの音と不機嫌のオーラが漂ったのは気のせいでしょうか？
あ、あのー、ジエネさん？

「何の用だ」

隠しもしない苛立ちを声に乗せてロウに問うと、若干戸惑った様子
をしながらも答えた。

「来たんですよ『災厄』が！ 隊長でしか抑えられません！」

災厄？！

その言葉を聞いたジエネは、「何でこう、次から次へと……」と
肩を落とした。

「どこに現れたんだ？」

「はっ、七番隊詰所に。今はハルドラードが抑えています」

「分かった、急いで向かおう。ウンノ、少し走るぞ」

「は、はいっ」

何事か分からないけれど、とにかく詰所へと 急いだ。

ドアの向こうからは、とても穏やかではない音が洩れ聞こえる。

(ちよつと、ジェネ、一体なんですか??)

息切れしながら小声で尋ねると、眉間に皺を寄せながら扉の把手に手をかける。

(イル・メル・ジーンだ。いつ来るか分からない上、傍若無人に振舞うから『災厄』以外何者でもない)

そして、そつと扉が開かれた先に、真っ赤なドレスが目に入った。

ドレス？

そのドレスの主を確かめようとそつとジェネの後ろから覗き見ると、そこには体に張り付くようなドレスに身を包む『妖艶』という名がピッタリ当てはまる美女が立っていた。長いスラリとした足、滑らかな曲線を描く尻、細く括れたウエストライン、豊満さを隠さず、むしろ開放してあられもない胸。

ゆつくり視線を上げていくと、最後にこれ以上ない整った顔が、豊かに波打つ赤髪に彩られていた。

う、うわー、何この超絶美女！

私が美女に釘付けになっていたら、ジェネ目掛けてその美女が飛び込んできた。

「ジェネ！ いやーん待っていたのよっ！ どこ行ってたの？」

見事な肢体を惜しげもなくジェネに押し付け、その手はジェネの頬をそつと撫でる。

むかつ。

「早く会いたくて、急いで帰ってきたのよ？ 寂しかった？
うふふ」

いらつ。

美女が一言ある度、なにか不快な感情が湧き出す。なんだこれ？
その正体を探ろうとしたけど良く分からなかった。うーん、まあ
いつか。

余計なことは後回しにするとして。

ジエネは纏わり付いてきた美女をベリツと剥がし（ホントにこんな
表現の通り）、表情の見えない顔で落ち着いて口を開く。

「相変わらずだな、イル・メル・ジーン。お前の弟を連れてきた。
話があるから別室にいくぞ」

ジエネの後ろに控える私を指し示し、それで視線を動かしたイ
ル・メル・ジーンは「まあっ」と嬌声を上げて艶やかに笑い、ジエ
ネの腕を取って「では参りましょうか」とサツサと行ってしまった。
ジエネは引き摺られながらも後ろを振り返り、私に口の動きだけ
で「ちよつと待ってる」と伝え、二人で隣室へと消えていった。

すっていた。

「一体何をされたんですか？」

ハルは溜息混じりに『災厄』が何であるかを私に教えてくれる。

「アイツはな、機嫌が悪いと周りの人間に八つ当たりをして気分転換を図るんだ。その方法がえげつなくて、こう……人の心の傷を抉り、広げて、塩を塗りこめる。それはそれは一人ずつ丁寧に、時間をかけて追い詰めて、落とす。ある程度耐性が出来た私やロウならばこの程度で済むんだが、バツツなど新人は今回の『災厄』は二度目で、まだ前回の傷が癒えてないからな……」

そんな八つ当たりの被害者は御免被る！ 怖いよ、怖すぎるよー！
そんな人の弟設定って、すごくない？！

道理でジエネが「変人」の一言で切って捨てるわけだ。

「この様子だと今日は7番隊、使い物になりませんね。『災厄』特約で本日特休を取れる様、後程団長に申し入れてきます」

「特約とはな、まあ……このような状態になった場合に休みがもらえる制度があるんだ。年に数回どこかの隊がやられるから、ある意味『お互い様』で協定を組んである」

ロウが皆に聞こえるように告げた後、ハルが私に説明をしてくれた。

そんな福利厚生まであるんだ！ どんだけだよイル・メル・ジン！

「伏しても座っても構わない。皆聞け、ジエネシズ隊長の従

者としてここにいるウンノが付く事になった。不慣れな所も出てくるだろうから、皆で協力して手伝え。以上だ
あ、いや
もう一点。イル・メル・ジーンの非公式な弟であるからそのつもりで接しろ」

途端に部屋の空気が一層暗くなった。

うっ、ゴメンナサイ姉（仮）のせいであつた。

「ロウ、ハル、ウンノ。話がある、入って来い」

二人きりでの話が終わったのか、ジエネが扉を開けて私達を呼びきくと、潜入の話がされるのだろう。

……でもさ。二人つきりでなんの話だったのかな。

私はてっきりイル・メル・ジーンって男だと思い込んでいた。なのに実際会ってみたら超絶美女で。ジエネしか暴走を止められないというのは、むしろ二人いい感じってこと？ 密着度といい、ジエネもまんざらではなさそうだったし、美男美女でお似合いで

実は恋人同士だったり？！

そこまで考え至り、急に胸の辺りが、きゅうつと締め付けられる気がした。

え、え？　なんで私こんなに動揺するわけ？

ジエネに、相手が、いても、おかしくない。

再び二人が寄り添う姿を思い浮かべると、同じように胸が苦しくなって、重くなる。大根おろし金のチクチクを触ったかのようにざらついて、痛い。

そつと胸に手をあてジツとして、その正体を探ろうとしていたけど、それを不審に思ったのかハルが「ウンノ行くぞ？」と声を掛けて促す。

慌てて立ち上がり、漠然としている正体を調べるのは後回しとした。

詰所の中にあるこの部屋は、やはり書類などが積まれた魔窟その二な感じだったけど、流石に執務室よりは人間らしく活動できそうな空間だった。

中央にテーブルが置かれて、十人ほどは腰掛けられるように椅子がそれぞれ並べてある。テーブルの上にもいくつか書類があったようだが、荒っぽくざっとテーブルの端に寄せ、片側はすっきりとなっていた。

ジェネとイル・メル・ジーンが向かい合わせに座っており、ロウがイル・メル・ジーンの隣へ、ハルは私をジェネの隣に座るように促して、自身は私の隣へと座った。

顔を上げ、そっと向かいを窺うと弧を美しく描いた唇が動く。

「初めまして？ 私がイル・メル・ジーンよ。お姉さまとお呼びなさい」

妖艶な微笑をたたえながら私に挨拶をするので、私は立ち上がった。「よろしく願います、お姉さま」と斜め四十五度の最敬礼となる正確なお辞儀をした。逆らわない、逆らわない。

よく出来ましたとばかりに笑ってるけど、隣の部屋の惨状を築いたのはこの人だ。逆に笑顔が怖いよ！

「イル・メル・ジーン、その危険な視線は止める。さてここに居る者には情報の共有を行う。まずはウンノの事だな。ウンノはあのカケルの双子の姉なのだが……」

「「ええっ！！」」

同時に二つの声が上がった。ハルとロウだ。

「若！ ウンノはカケル殿の姉君なのですかっ?!」

「隊長！ あ、あの…… 女性だったのですか？ ウンノは！」

「ああそつだ。本当にお前達は得意分野が違っんだな」

少々呆れた声で肯定すると、二人とも唸った。

「それでは…… ウンノは『女性だけど男性の振りをして従者となり、女っぽさを誤魔化す為に』隊長の従者やって給料を貯めるのは女になりたい願望がある男」とする、祖母と二人暮らしで貧乏だったイル・メル・ジーンの非公式の弟』という対外的な設定はこのままで？」

「あらー、あなた複雑かつ面倒な設定組んだわねえ」

ハルが指折り設定を数え、それをお姉さまが目を丸くして可笑しそうにコロコロと笑う。

その他に、色気を勉強するちよつとお腹の緩い子っつていうイタい設定もあるけどね！

そこは言う必要もないから黙っておく。

「私の傍も七番隊も、女性が付くには無理がある。乱暴な設定だが目を瞑れ。イル・メル・ジーンの弟と言えば誰も何も言わないからその点は安心していいだろう」

お姉さまは片眉を綺麗に上げて非難の目を向けたが、ジエネは気にするそぶりもなく続けた。

「それでこれからの話だが。王が最近姿を見せないという話は口ウ、聞いているか？」

「はい、隊長達が出立して直ぐの話です。朝議、謁見、『精霊殿』への祈りの儀式……まったく姿を見せなくなりました。団長が謁謁を望みましたが体調が優れないと断られ、未だ様子が分かりません」

「先程団長にお会いしたが、毎日の様に謁謁を申し入れても会うことは敵わないと言われた。王の周辺で何が起こっているのか調べる為に、このウンノが侍女となり潜入する事になった。

そこでお前達には後方支援をしてもらう。団長を身元保証人とするには宰相側にいらぬ疑念を抱かれかねないので、ロウがそこを手配しろ。ハルは……懇意にしている女官がいるだろう？ 手回しておけ。イル・メル・ジーンは先程聞いた報告の中から精査する。この後に執務室へ行き、話を詰めるぞ」

さすが隊長というだけあり、淀みなくそれぞれに役割を振る姿は堂に入ったものだ。

ただ、今の私は素直に見られない。隣に座っているのに、一番遠くに居るかのような錯覚を覚えていた。ここに来るまでの旅では殆ど一緒に過ごしていて身近な存在だったのに、一気に差が広がった。なによりも向かいに座るお姉さまの存在が、つきんと痛い。

項垂れたままの私にハルがなにか言いかけていたけど「なんでもないです」と笑って言葉を引つ込めた。

「全て動くのは明朝。それまでに準備を終えておけ。そしてこの

件は団長以下ここにいる顔ぶれのみとする。なにか質問があれば、その都度訊け。 では解散！」

ジエネの一言でロウとハルだけが「はっ！」と左胸に右手の平を当てて礼を取った後出て行き、お姉さまは大きな胸をこれ見よがしに組んだ腕の上に乗せて「じゃあ、執務室に先行つてるわね」と嫣然とした笑みを浮かべ、「早く来なさいよ？」とジエネの頬にキスを落として出て行った。

「……それで、私は明日の朝まで何かすることありませんか？」
今の姿を見なかったことにしよう、見なかったことに！ と、動揺する気持ちを抑えて予定を訊く。

「そうだな、引き続き王の様子を観察する事と……出来ればウンノの料理が食べたい」

「料理、ですか？」

ここに来てまで、私の料理？
突然言われた事にきよとんとしてしまっただが、一応の了承をする。

「そりゃ作るのは構いませんが……いいんですか？ 私の料理なんかで」

ジエネは椅子に座ったまま体をこちらに向け、「勿論だ」と頷く。

「ウンノの料理をカケル達といた時からずっと食べているが、本当に美味しい。 もう他の料理が食べたくない程にな。頼んでもいいか？」

じつと私を見つめてそんな事を言われると、舞い上がりそうに嬉しい反面、どこか居心地の悪さを感じていた。なんとか逃げ出したくて……。

「分かりました！ では厨房お借り出来るようお願いしますか？」

と勤めて明るく言い、ジエネは「分かった。よろしく頼む」と立ち上がり部屋を出ようとして。

「あ」

つい。

つい、私はジエネの袖口を捕まえた。

行ってしまう！ 私を置いて、あの人の所へ…… と思ったら、咄嗟に手が出てジエネを掴んでいた。

自分の行動に驚きながら、慌てて手を離して「なんでもありません」と誤魔化した。

一瞬ジエネの深い海の瞳が複雑な感情を映したが、私の頭を軽くポンポンと二回叩いた後ひと撫でした。

「厨房に行くときはハルを連れて行け。もうじき戻るだろうから、それまで詰所に待機だ」

ふわり、と笑い今度こそ部屋を出て行った。

撫でられた頭をくしゃりと指で触ると、まだそこにジエネの体温が残っている気がする。

無骨で、剣ダコ出来ていて、すこしザラツとするのに優しい大きな手。

撫でられたのは嬉しいくせに、泣きたくなるのは何故だろう。

自分の情緒が不安定なのに戸惑いを覚える。

一旦気持ちを鎮めようとしていると、焰と疾風が心話で語りかけ
てきた。

(ひめさま？ どうしたの？ きもち、ざわざわしてるよ？)

(姫さんの感情に俺達引っ張られるんだって前に言ったよな？
ちったあ落ち着け)

(えっ、あ、ごめんね？ 大丈夫大丈夫。深呼吸すれば落ち着く
から)

すー、はー、としたら大分マシになった。ただ、まだ奥底には澱
の様に沈んではいるが。

(飛沫と息吹は、まだ戻らないのかな？)

(姫さんが一声掛ければ即来るさ。まだ戻らないってのは気にな
る事があるのか、掴めないのか……)

焰でも理由までは分からないらしい。

うん、明日の事もあるし一旦戻そう。幸いこの部屋には私だけだ。

(飛沫！ 息吹！ おいで！)

目を閉じ心の中で彼らをイメージすると、中では赤色と黄色が光
っていたけど段々と青色と緑色が滲む様に広がった。帰ってきたん
だ、と分かる。

（姫君、只今戻りました）

心話でも礼をとる飛沫が想像でき、黙っているけど息吹がちゃんと戻ってきた事にも安堵した。

（二人ともありがとう。疲れてない？ 大丈夫？）

（我々は精霊なので人間と違い休息はいりません。それに主を得たので力が数倍上がってますからご心配なさる必要ありませんよ）

へえー、そうなんだ。

小さい子供の姿なのでとても力があるように見えないが、リイン時代の契約した精霊達も尋常ではない力を惜しげも無く使っていたから、それ位はあると理解する。

私はそこまで使役する気も無く『力を少々貸して頂く』という気持ちで契約した。むしろ力を存分に使う機会なんてあつてはならない事だと思っている。

この地の精霊の不安定さ。

王を立てる支えとして、私の『精霊姫』である力が添えられればいい。

その後は…… 開放へ？

正直、その場その場でないと見えてこないこともある。

召喚の契約が終了次第私は日本に戻る事になるんだけど、いざ戻るといふ瞬間、何を思うんだろう。

漠然とした不安が心を占めるけれど、今考えても仕方の無いこととこれも後回しとする。

(報告、お願いできるかしら？息吹から)

(…… 農作物、壊滅的。豪雨、日照り、極端。鉄鉱石、減りだした)

(そう……。これはホントに急がなきゃいけないわね。次、飛沫)

(はい、光と闇の精霊たちの調査結果ですが…… すみません、見つけることは叶いませんでした)

冷静なイメージの飛沫だけど、しょぼん、とした気配が伝わった。

(いいのよ、つまりあなたの方を持って見つからないと言う事は、『自ら隠れてる』か『隠されてる』って考えられるわけだし)

王の安定を望むならば、六精霊の力が必要である。
後残るは光と闇。

陰と陽を司る、肝心要の精霊。

(それでも手がかりは掴めました。情報を統合すると『未知なる感情をもたらせば気配に惹かれ現れるだろう』と)

未知の感情ってなんだ？

(姫様、様々な経験をなさいます。さすれば未知なる感情も芽生えましょう)

それだけ言うと、飛沫は沈黙した。反応が無いので、これ以上言う気は無い様だ。

知らない感情って事よね？ 私の知らない感情……
いやいや、私が知らない感情なんだから考えても出てこないよね。
経験かあ……。

いつまでも一人部屋に籠るのもなあ、ってことで詰所に戻る事に
した。

心が重かったが、動いていた方がましだ。

この部屋に入るまでは死屍累々としていたけど、流石に何度かの
経験者はチラホラと動き出していた。その人たちが私を見るとビク
ツと体を強張らせるのは仕方の無い事か。

相変わらずバツツは壁と仲良くしていた。何を言われたのか知ら
ないが、ここは一つ慰めておこう。

「先輩、大丈夫ですか？」

私の声に視点の合わない目を向けたけど、徐々に光が戻ってきた。

「あ　　ああ、ウンノか。ごめんちよつと余裕無くて」

すごい。ここまで心を折ることが出来るお姉さまって、本当にす
ごい。もうすごいしか言えない。

「会ったの初めてなんだったな。『災厄』が過ぎた後で助かった
ぞ、お前」

ふかーく溜息を吐き、両手で髪をバリバリ掻き毟った。

「なんで隊長幼馴染だからって今まで付き合ってたこれなんだ？！
よく平気だよ！ 平然とした顔だし、鋼の心を持つてるに違いない！」

さすが隊長！ と褒め出したバツツだけど私は心の中でそれは違うと否定した。

不快だと眉間の皺が濃くなる。

弟を思いやる表情は、影が生まれる。

笑うと、整った顔が途端に華やいだように輝く。蕩ける様な眼差し。

私は、知っている。

「隊長はやっぱり、頼れる兄貴って感じだよなー！」

ひとしきりジエネを褒めたバツツだったが、最後にそう結んだ。

兄貴？

お兄さん？

ああそうか！

私は、「兄という存在」をジエネに感じてたんだ！ きっとそうに違いない。

産まれてずっと「姉」をしていたので、そういう存在に憧れがあった。

気持ちの着地点をようやく見つけて、ホッとした。

Side ジェネシズ

翌朝王の下へ上がるウンノの為、荒れた室内に無理やり座る空間をあけて関連書類を広げ、宮廷魔術師であるイル・メル・ジーンの手を借りて話を詰めていく。

そもそも侍女として派遣できるには訳があり、王の癩癢や宰相の気に入らぬ者は、即辞めていくからだ。

最初の内は、王の下で侍女仕事が出来ると貴族の子女にとても人気があつたが、噂が広まるにつれ段々と人も集まらなくなり、今では無理に召し上げるのもよくあると聞いた。

弟とはいえ母親は身分違いであり王位継承権も降りた自分には、式典の末席に参内する時のみ同じ空間に存在するだけだ。

自ら招いた結果ではあるが、それでも出来ることをやっていくしかない。

「ねえ、あのお嬢さんって本当にカケルの姉よね？」

ゆっくりと足を組み替えながら優雅に椅子へ腰掛けるイル・メル・ジーンは問う。こいつはなんでこんな荒れた部屋であるのに、自分の部屋の様に寛いでいられるのだろうか。

「双子の姉だと本人から聞いているし、カケルからも言われたぞ？」

「双子、というのには間違いなしでしょうけど……なんていうか、気配が違うのよ」

「違う、とは？」

「んー、上手く言えないわ。基本的な部分は確かに同じよ？ だけど何かがウンノちゃんの気配に上乘せされてる感じ」

分からないと頭を捻るイル・メル・ジーンに、俺は思い当たる事があり押し黙る。

当代の精霊姫。

こいつ程の力を持つ者なら、「怪しむ」位はするだろうなと分かっていた。

でも、黙る。黙っている。

こいつに知れたが最後、馬車馬の様にこき使われて、精根尽き果てた所でようやく開放されることは容易に想像できるからだ。

「まあいいわ。またカケルの所に行って問い質してやるから。そういえば知ってる？ カケルは今コツソリ王城を抜け出してるのよ？」

「知らないな。だがあいつ程『密かに・穏やかに・忍びやかに』が似合わぬ男も居ないという事は知っている」

コロコロと鈴の鳴るような声でひとしきり同意の笑い声を出すと、にんまりと含みを持たせた唇に言葉をのせる。

「四大古竜の最後の難関、最も好戦的な火竜の『試し』に向かったそうよ？ ふふつ、見てみたいわよね』『試し』の様子。一対一でないと契約出来ないし、見学すらさせてもらえないのよね」

「残念だわ」と呟くが俺は愕然とした。カケルと別れる時こそ

んな素振りは一つもなかった。確かに俺が居た所で何も出来ないのは分かっているが、相手は竜族最強の火竜である。

双子の姉がここにいるが、無事に戻る便りが来てからで伝えた方がいいだろう。ウンノも任務を控える身であり、余分な心配事を抱えたまま行かせる訳にはいかない。

「カケルなら上手くやるさ。あいつはそれだけの力があるからな。俺達は無事を祈るだけだ。イル・メル・ジーン、戻ったら教えてくれ」

手に取った数枚の書類の不備を直しながらそう頼むと「そういえばね？」と身を乗り出した。

「ジエネ？ あなたウンノちゃんに随分優しいみたいじゃない？ カケルからの刷り込みとは言え、あの熱い視線はないわ」

意地の悪い視線を向けながら笑い零れる。

「うるさい。カケルから護衛を頼まれたから傍にいただけだ」

「またまた！ 私には判るのよ？ 長年だてに付き合っていないわよ。幼馴染じゃない」

「その言葉腐れ縁と書き換える！」

「で？ あの子のどういう所が好きなの？ やっぱりカケルの言う『ねーちゃん』そのままの所？」

こいつ、聞いてない！

俺は早々に諦めた。反論したって無駄なことは骨身に沁みている。知られたのは痛恨だが、否定した所でしつこい追求が待っているだけだ。

無言を肯定と受け取ったのか、ふうんと椅子から立ち上がり書類の不備を直した箇所を確認する。

「私は応援するわよ？ やつとあなたが心動かす女ひとが現れたんですもの。…… ふふっ、でも相当苦労しそうだわ、ジエネ？」

俺は手に持つ丸く潰れた羽ペンの先を短刀で削りながら、その言葉の先を待つ。

「カケルから聞いた事あるのよ。『ねーちゃんに手を出しそうな不埒な輩は片っ端からぶつとばした！』ってね。わかる？ 出しそうなのよ？ その程度で潰されたら堪えないわね〜うふふ」

その先を思うに、恐らくウンノに近寄る者は悉くカケルに潰こぼされて、それを乗り越えてまで姉に言い寄る強者は居なかつたのだろう。

「彼女元々恋愛に興味が無かつた様だし、それ以上に予防線引かれちゃうと相当奥手に仕上がるわよ？ カケルも罪な事してくれたわね。頑張って攻略なさい？」

優美な動きで完成した書類を摘み上げ「また来るわ〜。彼女によろしく」と科しなを作りながら扉の向こうに消えた。

完璧なる美女ではあるが俺は全く興味が無く、むしろ見た目に騙される男達を不憫に思う。

『災厄』でもあり……。

ふ、と机に置かれた書類の文字を目で追うと、鬱陶しかった前髪が掛からない事に気付く。今朝方ウンノが丁寧に髪を切ってくれ、とてもさっぱりした。その時の様子が蘇る。

彼女が「自分の髪を切る」と言い出した事に、自分でも制御できぬ程混乱した。真っ直ぐに背中の中半ばまで伸ばされた、黒く美しい髪。指に絡めると、するりするりと逃げ出す漆黒の極上な絹糸。

精霊の宝珠を隠す為だとはいえ、そんな簡単に切るとか言い出す姿に不機嫌さは隠し切れず、衝動的に引き寄せ纏めていた髪を解き、彼女の頭に頬を寄せたら彼女を慌てさせてしまった。

「長髪の男もいると言っただろう？ このままでいい。俺はこの方が好きだ」

髪を下ろしているウンノが、好きだ。

言葉には乗せない部分をそつと心で呟き、髪を指で梳すく。

彼女は顔を真っ赤にして硬直していたが、大きく深呼吸を数回した後、俺を見上げた。

「じゃ、見えないように下ろしたままにしますね。あの…そろそろ行きましようか？」

「……そうだな」

確かに、団長の所へ向かわねばならない。反対する理由も無い。しかし。

どうしてこう、鈍いのか。

せめてもの意趣返しとして頭頂部に可変らしく渦を巻くつむじへ、
軽く唇を落とした。

1 料理は戦い

「あ、ハルさんお帰りなさい！」

バッツが先に気付き同じ方向を見ると、眼鏡が外れているハルが詰所に入ってきた所だった。

あれ？　なんか少し髪が乱れてる？　あれ？　なんか唇の端に赤い物が？　あれ？　なんか首筋に……ハルドラーダ師匠！　確か王に仕える女官への手回しに行ったと思うんだけど……手出しに行っただのか？！

「なんだお前、割に回復早かったな」

「はいっ。隊長すごいつて話してたら落ち着きました」

そして私の方を見ながら

「隊長は頼れる兄貴ーってな！」

「そうです、隊長はお兄さんみたいです！」

バッツと二人で「ねー」「なー」と頷き合っていたら、ハルが小声で「……不憫な」と悲しそうに呟いた。バッツも私も兄という存在に憧れているんだからいいじゃないか！

そう反論したが「いや、そうではなくて」と言いかけ、しかし結局黙った。

「ハルさん、ちょっと厨房に行きたいんですけど一緒に行っても

「ええませんか？」

「ん？ どうした」

「隊長から料理作ってくれて言われたので、場所と材料をお借りしたくて」

「おっ！ ウンノの料理か！ 私も一緒にさせてもらえないだろうか？ ウンノの料理は本当に美味しいからな」

「厨房の方から許可出ればいいと思いますけど…… 食材の量の問題もありますし」

「はい！ はいっはいっ！！ 俺も！ 俺も食べたい！」

勢いよく手を上げるバツツに、詰所にいる他の騎士達も何事かと集まってきた。

バツツが「こいつの作る料理は、今まで食べた事の無いほど美味しいんだ！」と声を張り上げ、結果全員分作ることになってしまった。

どうするよ、自分！

かなりの量になるだろうな三十人前とチョイってところか。相手は肉体労働の食べ盛り何年目？ の男達だ。絶対三十人前では足りないだろう。

……流石に餃子はムリ。

色々な料理を思い浮かべ、ラスメリナで翔達と食べた中華を思い出したが、即座に却下した。刻んで揉んで包んで焼くだなんて、ど

んだけ量と時間と手間が掛かるんだ！ と気が遠くなる。
うん、ガーーーツと切つてガーーーツと煮て焼いて揚げてガ
ーーーツと並べよう！（超アバウト）

厨房にハルと向かえば、そこで働く女性達は悉くメロメロことごとで仕事
にならなくなり別室に移動。男性も何故か顔を赤らめて目を逸らす。
…… 身に覚えある者か！
こらこら！ ハル師匠！眼鏡どこ行つたーーー！

これじゃ仕事にならないよ……。
私は大分ハルに対して耐性が出来てきたのか視線が合つても大丈
夫になったので良かったけど、一人でやるには限界があるから、ハ
ルには眼鏡を付けるようお願いして厨房の人達に色々頼む。

ここの厨房で城全体賄うのではなく、人数が多い為五つ位に分か
れて作っているそうだ。

そりゃそうだ、七番隊だけで三十人つてことは十五番隊単純に合
わせただけで四百五十人だもんね！

それ以上に、王族、文官、精霊殿、女官侍女下女…… とにかく、
沢山！（計算苦手）

ここは主に近衛専用の厨房として回しているらしいので、七番隊
だけ違うメニューもな、と洩られたけどそこはハルが押した。

「だったら、ウンノが指示して全部同じ内容にすればいいじゃな
いか」

ええー！ 話大きくなつたー！ー！ー！

他ならぬハルが言う為に、特に反対も無く（おい）今日の夕飯は私の考えるメニューに決定。

もうね、これは女性戻ってもらわないと無理だよ！手が足りない。

厨房の責任者、アウランさんっていったかな？その人に頼んだ。

「女性達に、ハルさん好きにしていいいから戻って？ と伝えて下さい」

そのセリフにハルは片眉を上げたが、余裕ありげに「そんな事でいいの？」なんておっしゃる。

うわあ、構わないのか！

何人いると思ってるんだ…… ああ、大丈夫か。

『キムロス”夜の花”機能停止』を思い出し、可能である事を思い出した。

アウランさんが女性達を呼ぶ間、私はここにある材料からメニューを考える。

マーサさんの所でお手伝いした事は、こここの世界の食材を私の知っている食材と代替きそうな物へ、それなりに勉強したので成果はあったといえる。

種類が少ないのは輸入に頼っている為であり、仕方の無いことだけど……。

「なんですか、このイカ」

水場にこんもりと盛られた生のイカが鎮座していた。その傍で黙々と作業していた料理人が言うには

「団長が…… 団長が釣ってくるんです！」

と、半泣きでイカの下処理をしている。

どうやら、団長は趣味で釣りを嗜むらしい。

いや、嗜

むというレベルじゃないよね、この量。漁師か！

しかも一種類ピンポイント。

どうやって食べるのか聞いたら、ただ焼くだけと。じゃあ、活用させてもらいましょう。

ラスメリナと似たり寄ったりな料理らしいので、好きなようにさせていただくよ？

ジャガイモ（別の名前があったけどこれで押し通す）はでんぷんを取るだけの為に使っていたらしいけど、これが食材になるといったら驚かれたしね。

さて、戦闘開始だ！

俄然やる気の満ち溢れるこの方達怖いんですけど！ハル効果だとしても程度があるだろうに。

私が！私が！といい所見せたいのか鬼気迫るものがあつたけど、今の私には返つてありがたい。どんどん進めることが出来るしね。

五百人分という途方も無い量だけど、流石三食賄う厨房は慣れた手つきで私の出す指示をこなしていく。あちらこちらと動き回る料理人を数えるのも面倒だけど、かなりの人数がいた。人海戦術的調理室。うん、なんとかなるかも！

一応使うかも？と思って、小部屋に置いてきたハーブ達をハルに頼んで持ってきてもらう。

まず食材の確認から。

肉類…… 鶏肉はある。イカはあの量ならアレを作ればボチボチか？

野菜は輸入に頼っているために保存の利くものが殆どだ。卵とか、乾燥豆とか・・・他にはジャガイモ、人参、玉ねぎ　　ここまですうと「カレー！」って言いたくなるねー。

スパイスってハーブでもあるんで、私には馴染み深いものだ。アウランさんに聞いたところ、そんなスパイスを組み合わせる料理なんて聞いたことがないと。

よし決めた、カレーだ！大勢集まる場所にカレー有りだ！（違）

ただ、スパイスは手持ちの物じゃ絶対足りないよね！

あまり複雑な物を作ったことはないので、基本的なターメリック

とクミンシード、レッドペッパーがあればなんとかなる。

そこでふと思った。

これって、薬師持ってないか？

ターメリックやクミンシードは漢方としても広く知られている。

こつちでもその様な感じで使われてないかなと思ったのだ。

そう思ったら早速アウランさんに確認を取ってもらい、その間に出来ることをする。

まず手をつけたのはマヨネーズ！ジエネ気に入ってたしね。

作り方を指示して作っておいて貰う。

干し肉あるんだから塩漬けにした肉位あるでしょうと見つけた塊肉を、少し塩抜きして細かく切る。ジャガイモ、玉ねぎ、乾燥豆の赤っぽいのを彩りにふやかしてから加え、ジャガイモが透明っぽくなるまで炒める。その後は卵を溶いて、その中にマヨネーズと塩コショウ、少しの牛乳をよく混ぜて焼いたジャガイモ達に加え蓋をして、焼き色良くなったらひっくり返して、焼ければ完成。

スパニッシュオムレツ！

ほんの少して味がフワツと香るローズマリーを足してみた。うん、美味しい香りがする。

一回見本を作って、これを延々作ってもらうよう指示。

作り終えた所でアウランさん戻ってきた。

大きな袋を抱えて来たよ？

開けてみたらまさにターメリックの粉とクミンシード！聞けば発注ミスなんだと。私ツイてるね！

赤唐辛子があるのは知っていたので、それも粉にしてもらって。

飴色玉ねぎにしたり、鶏肉に焼き色つけてから投入したり。細かい事言ってる間にどんどん進めちゃいたいからやっている所を見せ

て、料理人たちに後を任せる。
一度見たらそんなに難しい事もないので、プロにやっていただこう。

後はナンも作る。

二次発酵のいらぬタイプなので簡単だ。薄いからあつという間に焼きあがるのもありがたい。

そしてイカ…… 団長、幾らなんでも釣りすぎですよ。

下ごしらえの人、何人掛かっていると思っんですかっ！まあともかく（？）、もう時間も無いのでサッサとやっつけよう。

輪切りにして、レモン汁と塩コショウで暫く漬け置き、卵液にくぐらせ小麦粉まぶして油で揚げる。以上！

そして、マヨネーズをそれに添えた。
うしっ！イカリングー！

いくらなんでもね？

下準備っていうか、「ある物で済ませる」には限界があるだろう！
ほんの数人なら何とかあったけど、この量は一般的にありえませんから。

精魂尽き果て、グツタリと隅っこにあった椅子に座り、料理人達の姿を眺めた。

初めての料理に戸惑いながらも、味見をしたその顔はパツと明るくなって。楽しそうに作業を進めていくその姿をみるのは、疲れてはいたがやった甲斐があったというものだ。

厨房全体がふわんとカレーのいい香りが広がる。

あー、お腹空いたなー。

思えば、朝は食べていない。

昼は…… パンらしきものを齧ったきりだ。

「ウンノ、疲れたか？」

ハルが気使わしげに私の隣へ腰掛けた。

なんで姿見え

ないかと思っただら、どうやら女性達をヤル気にしててくれたんですね……。

やる気がヤル気かもうどうでもいいやと投げる。

「もう、これ以上働けません……」

やることはやった。窓の外を見ればすっかり日も暮れようとしていた。

「近衛の交代の時間がそろそろだ。隊ごと順番に食べに来るぞ」

ハルはそういつて私の頭を「お疲れさん」と撫でてくれた。

でも。色気とかどうこうじゃなくて、なんだかその手が『違う』と違和感を感じた。

違う。違う。私が撫でて欲しいのは……？

そこまで考え、一体私は誰を思い浮かべようとしたのかと慌てて考えを振り払った。

2 (後書き)

全ての食材料理には「っぽいもの」と脳内で付け足しておいて下さい。
い。(人任せ)

なんなんだこれは。

俺は目の前に繰り広げられる光景に、暫し呆然となった。

そこには、近衛十五番隊全てが入れ替わり制として使う食堂がある。通常、粛々と厨房より料理が提供され速やかに食し、済んだ者から詰所に静かに戻るとしたものだ。

供される料理は、最初から器に盛られている為にスープだろうが何だろうが冷めているのが常だ。

しかし今はどうなのか。

まず厨房の入り口から一人ずつ盆を持ち、順に調理場から供される湯気の立つ料理が入った器を載せて机に着く。そのような体系は初めての事なので皆戸惑ってはいたが、温かい料理が盛られていると一様に笑顔となった。

食事を始めた者は、一口食べた後に目を輝かせ、瞬く間に皿の上を平らげ。これは一体どんな料理なんだと近くににいる者と会話をし。

食堂は、笑顔が溢れた。

初めて見る皆の明るい顔を見て、胸の内が熱くなる。

王政の不安、精霊達の暴走で陰気さが身に付いていた近衛の騎士達が、声を上げて笑っている。

温かく、美味しい味付けの料理を食すと、陰鬱だった日常風景がこうも変わるのか。

俺を呼びに来たハルは「若、すみません！ 話が大きくなって…」と申し訳なさそうに大きい体を気持ち縮めて謝った。何の事かと聞けば、ウンノの料理を皆が食べてみたくなった、と。

俺だけだったのになと小さな嫉妬心は生まれたが、この様子を見ればあっさりと飛んだ。

ウンノはどこだと目線で探れば、厨房の片隅にいたかと思えば食堂で机を拭き、入り口で戸惑う騎士を見れば説明をし、食事を終えた者に食器は自分であの場所へ片付けるようにと指導をしている。

どこかで同じような光景を見たような……？

ああ、キムロスのマーサの店だ。

あの時もウンノは活発に動いていた。一つも苦勞をしている様ではなく、楽しみに。

「あ、隊長！ 待ってました！ セルフサービス式ですが、これだけの人数がいるならこの方が効率いいと思ひまして。勝手してみません」

「せるふ……？」

「えー…… 訳せないのです、まあつまりこういうことです」

と、先程の光景を手で示した。口で説明するのが面倒になったのか、見て理解しろと。

こういった所は本当にカケルとよく似ているなど、ウンノを見て思った。

まだ食べていないというので、というウンノとハルも共に食卓へ着いた。

どれも見たことの無い調理法だ。特にこの『カレー』という物はとても鼻に刺激的で、食欲を刺激される。

「こうやって、ナンをちぎってカレーに付けて食べるんです」

実際やって見せながらウンノは美味しそうに頬張った。その様な食べ方は初めてだったが、やってみると実に食べやすい。ナンでカレーをすくい、口の中に入れた途端クミンシードと呼ばれる物の香りが一杯に広がり、あとからレッドペッパーの辛味が効いてくる。嫌な辛さではなく、食欲を刺激される辛味で堪らなく美味い。

そう感想を述べると「もっと前に準備できるのなら色々足したいハープ達があるので……」また作りますね」とにっこり笑った。これで完成ではなく基礎だけで作った物で、香りをもっと足したいそうだ。どんな味になるのか是非お願いしよう。

団長の釣り上げたイカも、見たことの無い調理法で驚いた。輪切りになっている。カラリと表面が揚がっており、それにマヨネーズを付けて食べると……こんな状況なのに酒が堪らなく呑みたくなくなる。

ハルも同じ気持ちだったようで、非番の日に厨房の女に作らせると言っていた。

スパニッシュオムレツ、このような厚焼きの卵も初めてである。大概、目玉に焼いて終わりだ。

具材が彩りよく詰まっておりローズマリーの香りがふわりと香る。なんとこの中にもマヨネーズが入っているらしい。万能だ。

すっかり平らげ満足したついでに周りをみると、普段はまばらに食事に來る騎士達が一度に押し寄せたらしくまだまだ行列は続いていた。匂いにつられ、騎士団以外までも紛れているのはどうなのか。そして遠くに見えるのは 団長！

団長の部屋は食堂に程近いので、匂いに釣られて普段は來ない食堂で食べる事にしたらしい。

あとは片付けだけとなり、それは厨房の者達がやるのでウンノは小部屋に戻す事にした。

俺は部屋まで送る為に一緒に歩く。

「ウンノ、とても美味しかった。しかし、あの量を作るには大変だっただろう?」

すると、ウンノは一寸遠い目をして「ええ…… 大変でした」とがっくりと項垂れた。

「そりゃそうですよ! あんな人数分考えた事ありませんし! せめてもう少し時間が欲しかったです」

中途半端だったなあ、と納得のいかない顔をしていたが、俺としては充分満足している。料理長のアウランなんて、ウンノを補佐に寄越せと団長に直訴しに行った程だ。誰がやるものか!

俺の執務室に入り、相変わらずの散らかった部屋を掻き分け(俺が戻ったから若干増えたか?)小部屋の前に立つ。

「今日は済まなかつたな。明日に備えて体を休めて欲しかったがまさかあのような事態になるとは」

「いえ、いいんです。みんな喜んでくれましたし」

人の為に役立てたと笑顔になるウンノを見て、抑えられない衝動が突き動かされる。

この位は許されるか？

「今度は俺だけに作って欲しいな」

ウンノの頭をそつと幾度か撫で、仕上げに前髪をよけて額に唇を軽く落とした。

ウンノは目を見開いて俺を見ていたが、やがて何をされたのか気付くと顔を真っ赤にして手を額に当て小部屋に飛び込んだ。

「おおおおお休みなさいっ！」

動揺したのか少し震えた声で挨拶をする。

その反応が可愛くて、若干苦笑混じりに「お休み。鍵きちんと閉めておけ」と扉越しに声をかけた。

明日から暫く会えなくなると思ったら、少しでも俺の事を思っ
欲しい。

そんな欲に塗れた自らの行動を自嘲気味に笑い、そして扉に向か

って声にならない言葉を紡ぐ。

。

明朝からは侍女に扮するので、今までの様に常に一緒にいる訳にはいかなくなる。

俺が会えずに辛くなる事は、想像に難くない。

1 初恋と失恋と混乱

バクバクバクバク……

暴れまくる心臓を片手で押さえ、閉めた扉を背にズルズル力なく崩れ落ちる。

なに?!

もう片方の手は額に当てたままだ。熱を持つその箇所は、先程ジエネに…… キ、キスをされた場所!

少しかさついたその唇はほんの少し冷たく、しかし触れた一瞬で火傷しそうに熱くなった。何をされたか理解した瞬間まともにジエネの顔が見られなくて扉の向こうへと逃げたのだ。

ぎこちなくお休みの挨拶をして、少し時間を置いてジエネが出て行く足音が聞こえた途端、どっと力が抜けた。まさに初めての体験で思考が追いつかない。

(ひめさまー、どうしたのー?!)

(ちよ、姫さん! 落ち着けよっ)

(大分混乱なさってますね……)

精霊達が不安そうに声をかけてくるが、今の私に穏やかになれと言っ方が無茶だ。

今度は

俺だけに作って欲しいな

どつという意味を持つのか。

『俺だけ』とは…… ジエネの為だけに？

その後頭を撫でられたけど、ハルとは違ってやけにしっくりと気持ちが入る。たとえ剣を握る者の同じ様な厚い手の平の感触でも、人が違つと感じ方が全く違つた。

深い海の底の色をした目が近づいてきたと思つたら、そつと額に落とされる唇。

そこまで思い出したらまた分からない衝動が湧き上がつて、居ても立ってもいられずとにかく着ている服を乱暴に脱ぎ捨てて寝巻きに着替え、ベッドに飛び込んだ。

掛布団を頭から被つて、さつさと寝てしまおうと思つたけど心臓の心拍数が高すぎて寝られない。

幾度か寝返りというか、ゴロゴロ転がってみたものの、ジエネのあの瞳が浮かんでは消えて眠気はちつともやつてこない。

バツツと二人で「お兄さんみたい」と言つたけど、兄相手にこんな動揺するものだろうか？

少なくとも弟である翔には、この様に感情乱されることは一つもない。兄…… 兄というならば、ジエネよりもハルの方が兄らしい。

じゃあ、ジエネって？ ジエネって私にとってどんな存在？

翔により召喚されたこの異世界で、翔に次いで最も頼りになる存在。守ってくれると誓ってくれた騎士。見事な体軀をその黒い服の下に潜め、支えてくれた腕はどこまでも遅しく。

囁く低い声は心地よく背中を痺れさせ、無骨な手は甘くて優しい。なにより。

あの深い海の底の色をした眼差しは蕩けるようで、普段無表情なくせにふわりと笑顔を見せてくれるその表情は堪らなく感情を乱さ

れる。

ようやく、私は理解した。

この感情を言葉にたとえるなら。

好き。

恋愛経験ゼロの私は、このような感情を持つのは初めての事であり、そのきゅうつとなる気持ちに名前があるだなんて正直分からなかった。

この気持ちを認めてしまふのがとても怖い。無意識に蓋をしていただけ、限界だったのか。

もっと撫でて欲しい、もっと笑って欲しい、もっと……私を見て欲しい。

気付いた途端欲深くなる自分が、なにやら可笑的でも、心の片隅から徐々に冷えてくる。

ジエネにとって私とは、翔が『貸し』で頼んだ護衛対象。貸しさえなかったら、こんなお荷物な私など相手にしなかつただろう。何より。

イル・メル・ジーンという女性がジエネの傍らに寄り添っている。ピタリと当てはまるその絵姿のような美しい一対は完成されており、私なんてとても入る余地は無い。

初恋と失恋、同時に経験しちゃったな。

自覚した途端実る事の無い不毛な感情のやり場は、じわりと浮かぶ涙で流れていった。

トントン。

ノックの音で、ノロノロと私は顔を上げた。しかし慌てて扉の向こうに声を掛ける。

「はいっ！ すみません着替えてる所なので待ってて下さい！」

「わかった」

こういえばジエネは入ってこないだろう。

昨夜は全く眠れず、明け方にウトウトした位なので酷い顔をしているに違いない。

その上子供みたいに泣いてしまい、翌日のことを考えてペーパーミントで作った水に浸したお絞りで目元を冷やして置いたけど、腫れが引いているかどうか分からない。

泣きながら考えたんだけど。

私は私の出来ることをして、役目を終えたら自分の世界へ帰るのだ。

元々私はこの世界に居ない人間なので、居なくなった所で問題は全く無い。

せめて、せめてジエネの役に立ってから帰ろう、と。

そう決めたんだから、仕事としてきっちりこなそう。

鏡の前でパンツと両頬を軽く叩き、気合を入れなおした。

おし、出陣！

ジエネに連れられ、二人で再び詰所へと向かう。

道中昨夜のことが気まずくて視線を合わせられなかった。ただでさえ赤面モノの「デコチュー」されたし、その上私は失恋したのだ。失恋、と認めるのは苦しかったけど、忘れるに限る。

時折気遣わしげな視線を感じたけど、できればほつといて欲しい。折角の決意が鈍るよ？ 私、まだぐらっぐらしてますから！

近衛騎士団7番隊の詰所に行く前に、厨房で朝食用のパンを受け取ったんだけど、中にいる料理人達がワツと集まってきて口々に私へ言葉を掛けた。

「ウンノ！ 今度はいつ来れる？」

「昨日の料理が評判で、文官のやつらも食べたといってよ！ 調理法教えてもいいか？」

「もつと教えておくれよウンノくん。とても美味しかったからさあ」

皆に囲まれて、ああ頑張ってたなと素直に嬉しくなった。喜んでもらえて、笑顔を貰って。じんわりと心が温かくなり涙が滲んだが、慌てて分からないようににつこり笑って「ありがとう」と。

「みんなありがとう！ ちょっと別の仕事があるから直ぐには来れないんだけど……。ああ、これだけはアドバイス 工夫

してね、色々！」

基本センスは悪くない。ただ、食べれりゃいいんだ的な食事を出す為に、味付けに関して全く工夫をせずにはいただけ。

これとこれを足せば、このような味に！　ってちよつとずつでも試していつてくれればいいのだ。

例えば、昨日の鶏肉。

これだけ肉があるのだから、鶏ガラはどうしてるのかと聞いたなら捨ててると。もったいない！

チキンスープを作るように、合間に調理法を教えた。

鶏ガラとは一旦茹でこぼし、水で洗ってアクや汚れを取り除く。

でっかい鍋に鶏ガラと水と、白ワイン的な酒をガバツと入れて、野菜……　人参や玉ねぎニンニクをボサツと入れて。ネギの青い葉が無いから玉ねぎの葉っぱの部分で代わりに入れてみたり、セロリが無いからスープセロリというハーブを入れてみた。これはたまたま食材の片隅にポツンと置いてあったのだ。料理人が生のまま齧ったら口の中がくさーくさーくなってしまい、使えない！と放置したらしい。うん、あれはクセが強くて好き嫌い分かれるよね。

そして取り出しましたるこのハーブ。ローリエ、ローズマリー、タイムは乾燥させた手持ちのがあったので使うことにする。パセリもあれば良かったけどねえ。せめてチャービル。でも無いから割愛！　あとは粒のままの胡椒を入れて、アクをとりながら2時間ほども煮れば完成だ。漉してスープを作っておけば、何にでも使えるチキンスープの完成。

これで野菜入れたり、かきたまの卵浮かしてみたりと、美味しいスープが飲めるんだ！

……と、つい熱く語ったんだよね。熱く語りすぎて回りの様子が見えなかったけど、ふと気付いたらメモを取る人垣ができていた……！
いやいや、そこまで重要じゃないよ？ テスト出さないよ？！

昼までには作ると言っていたので、頑張つてと声をかけて厨房を後にした。

うーん、なんか充実感。忙しければ苦しい気持ちも思い出さずに済むしいいね！

沈んでいた気持ちは少し浮上した。

詰所へ着いて扉を開けると、これから夜勤の隊と交代の為の騎士達が支度をしていた。かろうじて全裸はいなく、目のやり場に困るということにはなかったので助かった。

甲冑姿が数人、略式が殆どだ。甲冑は見栄えの為に謁見室や王城の出入り口に立つ。略式なのはその方が身動きしやすいからね。いざという時に動けないんじゃない、近衛を名乗る資格無し、だそうだ。

その様子を横目で見ながら、昨日の魔窟へと入る。

そこには、すでにハルとロウ、イル・メル・ジーンが待っていた。厨房で時間を掛けた為に遅れちゃた？！ と思つたら、「いや、私達が早く来過ぎたんだ」とハルが私にこっちへ来いと手で招きながら言った。

「侍女服を持ってきた。衝立の向こうで着替えてくれるか？」

「は、はいっ」

女心としてはみんなに扉の外へ出て行ってもらいたかったけど、

一応私は男という設定。いや、女になりたい男の設定なので、変じやないけどそこまでするには不自然か。

服は腰に巻くりボンみたいな物がよく分からなかったけど、基本ワンピースと一緒だし、何とかなるかな？

ザツと脱いで、サラシも外す。このサラシ外すだけでも非常にありがたい。とにかく苦しいんだから！

膝丈のワンピースを着たのはいいけど、背中部分にボタンが列を成している為に背中上部に行くほど手が届きにくくて辛い。どうしようかと思っていたら、イル・メル・ジーンが声をかけてくれた。

「手伝うわよ？ ウンノちゃん。背中ボタンの選ぶとはね、ハルったら。なかなか扇情的じゃない？ いい趣味してるわ」

「ど、どづいことでしょ？」

「ふふっ。説明いるだなんて初心^{ウラ}な娘ね？」

艶やかに笑うその顔は、同性ながら見惚れてしまう程の美しさ。

「まだ子供だ」と言われたのと同じ様な響きなのに、この人に言われたら「まさにそうです」と言ってしまうだろう。

こんな小さな嫉妬心なんて屁でもない。

「あら？ …… ねえ、ウンノちゃんこれは？」

イル・メル・ジーンが私の首に掛かったチエーンを摘んだ。

私は「あ、これはですね」と、前に垂らしていた物を手繰り寄せで見せる。

「翔が寄越したんです。お守りだからって」

元々指にアクセサリーをするのは調理する者として正しくないと指導されていたので、チェーンに通し、ネックレスとして首から下げていたのだ。

「ふうん…… ま、大事にしなさい？ 絶対外しちゃだめよ」

イル・メル・ジーンはそう言いながら、腰のリボンを美しいドレシープを作りながら纏めてくれる。うーん、私これ同じ事出来るかなあ？

あとは、男としていた為にスツピンだった顔に化粧をのせる。自前の一応持っていた為にそれを使うことにした。ホテルの従業員という立場だったから、無難な化粧くらいはできる。

その化粧道具を見て、お姉さまは「これは?!、あ!これも、これも!」と目の色変えて聞いてきたのには驚いた。確かにこの世界のとは随分違うし、発色も良いから仕方の無いことか。

恐ろしい勢いで商品名をメモしたので聞くと、「カケルに買わせる!」と。

行ったり来たりのカケルならば買ってこれるからね、確かに。

支度としてはこんなものかな、とおおよそ納得した所で衝立を出ると、三人ともポカンと私を見た。

えー、何か変っ?!

焦って自分の姿をキョロキョロ見てみたけど、特におかしな点は見つからなかった。

するとイル・メル・ジーンがパツと扇子を広げて口元を覆い、意地悪そうに笑い零した。

「見なさいよウンノちゃん。彼らはアナタに見惚れてるのよ。言っただでしょう?女は化けるってね!」

あー、可笑しいと止まらない笑い声を余所に、私は落ち着かなかった。こんなに視線を寄せられて平気な人はいないって!

ああいたっけ、すぐそこに。

一人突っ込みを入れている間に、イル・メル・ジーンはサツサと椅子に腰掛けて扇子をあおぐ。

「呆けてないでさっさとやりましょうよ。座って!」

「あ、ああ」

ハルがすぐに立ち直り、私を椅子へとエスコートしてくれた。

「ウンノ、とても綺麗だ。その…… 目元が随分変わったようだが、化粧で?」

「あ、はい。少し印象変えようと思って、タレ目メイクにして見

ましたが…… 変じやないですか？」

目元が結構キツメだという自覚はあるので、いかにも女子らしい桃色メイクを試してみたのだ。普段はやらないチークを入れてみたり。

「ほんつとこう見ると女の子なのねー。その胸は自前でしょ？」

大きいのに形いいし、うらやましいわ。あー、アイツにくれてやるにはもったいない！」

アイツって、どいつっ？！

なんのことがさっぱり分からないけどイル・メル・ジーンはそう言い、「とにかく話を進めましょ」と促した。

「これよりウンノには王の侍女として潜入してもらおうのですが、そちらにハルが手配した『ルネ』という女官がいるので、なにかあったらそちらを頼って下さい。それから……」

ロウが淡々と注意事項を言う間、ハルは何故かニヤニヤして、ジエネは…… ずっとこちらを見ていた。

うっ、何なのよおお。

非常に居心地の悪い思いをしながら耳を傾けていると、イル・メル・ジーンがパタリと扇子を畳んだ。

「それで…… 私の力はどこまで必要なの？ 一個は用意できたけど。あとはあの障壁ぶっ飛ばせはいいのかしら？」

おっかないよ、お姉さま！

剣呑な目つきイル・メル・ジーンはどこまでも本気らしかった。

そして、それだけの力があることも。

「私だってね、見過ごしてたわけじゃないのよ？ ウンノちゃん
精霊使いと魔術師の力の違い、知ってる？」

「へっ？ あ、ああ。精霊使いとは、六大精霊の力を借りて変化
をもたらすもの。魔術師とは、古代文明で開発された言葉の羅列を
呪文として読み上げる事によって、力ある変化をもたらすもの……
でしたっけ？」

「まあっ！ すごいわー！ カケルも知ってて驚いたけど、ウン
ノちゃんも知ってるのね?!」

「話せば長くなりますので端的に言つと、こちらの歴史書を読ん
でました」

歴史書…… 小説なんだけど、概ね間違つてはないよね？

「その性質の違いってのは分かるわね？ あの障壁は精霊使いが
作った物よ。私は魔術で壊せない事もないけれど、精霊と魔術の力
が反発して多分…… このクリムリクスは城壁ごと無くなるわね」

「……」

無くなるっていうけど、さっきあっさりぶっ飛ばすって言ってま
せんでしたか、お姉さまっ!？

「イル・メル・ジーンは御前会議に出る役職にある。その様子を
探ることとあと一点、通信魔具を用意する事」

「もうできてるわよっ。小さい事しかさせてもらえないなんてつまらないわっ」

イル・メル・ジーンがコトリとテーブルに置いたソレは携帯電話？

「あれれ、お姉さまこれって……？！」

「ああ、カケルから貰ったのよ。仕組みはよく分からないけど、音を伝える道具って言ったわよね？ ウンノちゃんも持ってるでしょ？ 寄越しなさい」

私は一纏めにした自分の荷物から携帯電話を取り出し、イル・メル・ジーンに渡す。うーん、充電してないけど大丈夫かな？

「じゃあちよつと待っててね？ 魔力込めるから」

集中する為、と言って衝立の向こうへ二つの携帯を持っていった。まさかここで携帯電話が必要だとは思わなかったな。カケル、どこまで分かってるんだろっ？

「ねえ、番号は何かいいかしら？」

暫くして戻ってきたお姉さまは、設定する番号について聞いてきた。

「え、番号ですか？」

どつやらこの世界用に番号が必要なようだ。

「うーん、110で!」

通報番号! これなら忘れない。

「もう一つは?」

「119!」

火事デスカ救急デスカ?

「分かったわー」

その場で何か呟くと、「よし上出来!」と一つ頷いて私とジェネに一つずつ渡した。二つ折りの携帯電話をパカリと開ければ、充電切れていたはずが何故か満タンになっていた。不思議だなあ。

「日に一度は必ず連絡しなさいよ? あの小生意気な馬鹿王……
あら失礼。王の様子もだけど、あなたの無事も確認したいんだからね?」

なにか気になるキーワードが聞こえたような……。

「はいっ。分かりました」

「ではいくぞ」

いよいよ王の下へ行くのかー。

背筋を伸ばし扉をくぐると、七番隊の騎士たちが一様に私を見た。

うっわ、怖いよお！

七番隊には『女装をして潜入』という事までは伝えてあるので折込済みだと思っただけ。

恥ずかしくて縮こまっていたら、バツツが近づいてきた。

「うわー、ウンノすげえ！ 女そのものだっ！ この胸もよくできてるな！」

そういって、ツンと胸を突かれた。

ギャツ！ っと思っただけど、そこはグツと抑えて「えへへ、そうですか？」と曖昧な笑いで過ごした。

後ろからはなにかひんやりとした空気を感じたけど。

「あーあ、お気の毒〜」

誰に言ったのか分からないイル・メル・ジーンの声が、一瞬静まり返った室内に響いた。

「あの〜、私に何か怒ってますか？」

女官であるルネとの待ち合わせ場所へ向かう最中の私とジエネだっただけ、どうにもジエネの雰囲気怖い。確かに朝会った時は私がよそよそしくしちゃったけど、他にもなにかやらかしちゃったかな？！

おそろおそろ窺うと、ジエネはハッと気付いたように視線を向けた。

「ああ、すまん。いや…… ウンノではなく。それよりも、大丈夫か？ これから一人になるが」

ん？逸らされた？

「大丈夫です。ちゃんと精霊達も守ってくれてるって言ってますし、ほらっ」

さつと、携帯電話を取り出してジエネに見せた。

「すぐに声、聞けますから。いつも持ってた下さいね？」

声くらいは許されるかな、独り占めしても。乙女趣味みたくてもいいよね？

ジエネとのホットライン。それだけで充分だ。

暫く回廊を幾度か曲がったり登ったりで王の私室まであと少し、という所に身体検査を受ける場所があった。ここは近衛騎士団一番隊が専門に行く。ジエネが連れてきているという事で隊の検査自体はなかったが、一番隊と共に控えている責任者、という肩書きの貴族が、のそり、と出てきた。

「おや、これはこれはジエネシズ殿ではありませんか。このような所で一体何を？ 本来なら、あなたのような卑しい女の腹から生まれた者が立ち入れる場所ではないのですがね」

ナニコイツ。

丸々太った体を豪華な衣装で纏い、弛たるんだ顎は首を覆っていた。

顔はいやらしく歪み、睨め付けるその目はとにかく　汚い！

「王付きの新人侍女を女官長へと届けに来ただけです。すぐに立ち去りますので」

ジエネは何も感じていないように、キチンと礼をとり先へ急ごうとした。が、男が更に言葉で責め立てる。

「まさか…… 王にお会いしようなどとは思われてはおらぬでしょうな？ 勘違いなされてもらっては困ります」

大きなお腹を揺すって、何が可笑しいのかさっぱり分からないけど粘つく笑いで続ける。

「あなたはたまたま先王の御子として妾出された、奇跡のような幸運に恵まれただけの只人。神に選ばれ精霊達に祝福されお生まれになった血筋正しい王とは、お立場が余りにも違う事をご理解頂きたいものです。お早くその泥臭いお体で、血生臭い戦いの場へとお戻りになられたら如何か」

「…… 失礼します」

ジエネは再び綺麗過ぎる礼をとり、私の手を引いてその場を立ち去った。

なんなの？ なんなのアイツ！

余りの怒りに目の前が真っ赤になり、視界が歪む。涙腺はとうに決壊していたが、私はジエネの背に隠され見えない位置にいたため、見咎められることはなかった。

嗚咽する私に、ジエネは暫く歩いた先の王族専用らしい庭に入り、人目のつかないような場所にあるベンチで私を落ち着かせてくれようとした。

そつと座らせてくれ、私をいたわる様に、頭を撫でてくれる。

「すまない、ウンノ。俺は慣れているが、お前に聞かせる内容ではなかった」

なんで、ジエネが、謝るの！！

くやしい、くやしい、あんな好き放題言わせるの！ ジエネの何を知っているというの？ 好きでその立場に生まれたわけじゃないし、王位継承権放棄して地方に行ったのに、弟を守る為にわざわざ一般試験受けて騎士になつたんだよね？！

あんな事言われて平気な訳ないでしょう！

燃える様な怒りに、全く立場が反対だと思いつつもジエネに当たった。

幾分困った顔を見せていたジエネだったけど、私の視界が突然暗くなった。

いや、違う。

ジエネの胸に引き寄せられたんだ。

ぎゅう、と頭は優しく包まれ、腰は強く引かれ。

耳に当たる厚い胸板から聞こえる規則正しい心音と撫でる大きな手の温かさに、ほっと尖った心が解れていくけど、涙腺は未だに壊れたままでだばだばと流れ止まらない。

怒りの思考は一旦停止していて、全く関係ない事を気にしてしまふ。

あああ、どうやってたら泣いて止まるんだっけ？ ジエネの服濡らしちゃってごめんなさい！

「…… ウンノ？」

上から呼びかける声に、ふと見上げると。

私と視線を合わせたジエネは、場違いなほど嬉しそうに笑って見せた。

「泣くな、ウンノ。いい子だから、泣くな」

大きな手の平が両頬に下りてきて、ざらついた太い親指が私の目尻から流れる涙を拭う。

そして　　少し冷たい、かさついた唇を額に落とされ、両

瞼に溜まった涙を、ちゅ、と音を立てて吸われ……

そのままその唇は、私のそれへと重なった。

あまりのことに固まった私は、涙があっさりと止まり、破裂しそうな心臓を押さえるのに必死になった。

駄目なのに。駄目なのに、どうして。

うれしいと思ってしまうの？

冷たいと感じたそれは一瞬の内に熱を持ち、震えるほどの歓喜と、締め付けられるほどの胸の痛みを覚えた。

微かに湿り気を感じるのは私の涙。そのせいか、柔らかさや温かさの感触がより鮮明になって伝わる。

唇が重なる事により、頬が……目が鼻が額が。距離が触れ合わんばかりに近くなる。

すべてが一体となる様なその心地よさへ溺れたい欲求に駆られる。

私を。私を見て欲しい。

『私を』愛して欲しい。

叶わぬ思いと知りながら願う自分とはなんと欲深いものか。

そ、と離された唇は、更にもう一度軽くつえばむ様なキスをした後やっと離された。

「涙は止まったようだな」

ジエネはそう言うと、再び私を引き寄せ抱き締めた。

ぼてりと私の頭に頬を寄せて、いつもの低くて耳障りの良い声で私に話す。

「ありがとうウンノ、俺の為に泣いてくれて。俺は言われ慣れてるし、今では近衛騎士団に居場所があるからもう何とも感じないんだ。大丈夫。だから、ありがとう」

それでも傷付かない訳じゃない。負の感情は触れるだけで火傷をするようなものだ。かさぶたの上にかさぶたを重ねるだけで、本当の傷は治っているのではないのだから。

唇に残るほんの少しの塩気を感じながら、たどたどしく紡ぐ自分の声は、酷く掠れていた。

「……お前はいつも人の為ばかりに心を砕くんだな」

溜息と共に零される言葉は熱っぽさと優しさを含み、私の胸の中で一番敏感な部分をぞわりと撫で上げた。

「人の役に立つ事が何よりも嬉しいんだろうが、人に心を砕くお前は、一体いつ休まるんだ？」

どうして、ジエネは私の事を見ているのだろう。確かに私は人の役に立つのが好きだ。幼い頃から母と翔の為に家事をして。お姉ちゃんだからしつかりしなきゃ！ 私がいなければ皆が困る！ と、張り切っていた。頼られれば俄然燃えたし、やりがいを感じた。

……逆に言えば、私は人の為に尽くして自分の居場所を作ろうとしていたのかもしれない。何か突出して出来る能力がある訳でもない何より自分の為に、人の世話を。

人の役に立つ、なんて聞こえのいい事言って、実の所エゴイズムの塊ではないのか。

抱き締める腕の強さが増して、少し苦しい。だけど体の苦しきさよりも、ひどく心が苦しい。

「ウンノ、俺を頼れ。俺に……甘えてくれ」

搾り出すように紡がれる言葉はまるで懇願されているかの様に聞こえた。

甘える？ 甘えていいの？ けれど……。

その時、サアツと明るい光が降り注がれた。

「 え？ 」 「 なっ?! 」

太陽の、光?!

この国でありえない現象に、二人して思わず天を見上げた。そこには真つ青な空の色と三つの光る球体が見えた。

球体の光が出るなんてこの王都では十年近くないと聞いていたのに驚いていると、徐々に天から降りてくるものが見えた。何???

「 ジエネ、何か来る……! 」

「 何かとは？ 俺には見えないが 」

ジエネに見えない？

ようやく姿が分かるまで近づくそれは、子供の姿。まさか……精霊？

しかし焰達が五歳位の大きさとするとそれは三歳程の大きさでしかなく、そして輪郭がぼやけている。精霊ならば判るか、宝珠からみんなを呼び出した。

「 あれは何? 」

「 姫さん、あいつは光の精霊だぜ? 」

「ひめさまー！ やったー！」

「光の、精霊？」

眩く私に、ジエネは「光の精霊がいる……。それで日の光が出たのか」と眩しそうに目を細めた。

少し離れた場所に地上から浮いた形でこちらを見る精霊は、幼い姿をしていても恐ろしいほどの力を感じる。そつと口を開き私に心話で語りかけてきた。

（精霊の新しいお姫様ですね？ 私は光を司る精霊です。歓喜の心を感じこうして姿を取れるまでになりました。しかし……。まだ足りません）

足りない？ 何が足りないのかしら？ 不思議に思っていると、飛沫が補足してくれた。

「姫君、光と闇の精霊は正と負、陰と陽でもあるんです。闇は陰の気を持ち、憎しみ、死などに心に刻まれればおのずと居場所が知れます。光は陽の気を持ち……。生命、喜び、愛情などを体験していれば具現するでしょう」

「光が言う足りないとは、まだ私に足りない感情があるって事よね？」

（ええ、そうですね。殆どの感情はつい先程ひとかけらを頂きました。異性に対する愛情です）

「ちよっ！ー！」

うつたえる私にジエネは不思議そうに私の顔を見る。ああそうか、光の子は契約していないから、ジエネに姿を見せるようお願い出来ない為、姿も声も見えていないのか。ああ良かった。

(あと一つ……繋がる喜び)

「？」

(お姫様、まだ生娘ですよね?)

「……！！！」

そ、そういう事なのー?! いやいやいや無理無理無理無理！！！！

「ウンノ、どうした?! そんな顔赤くして」

「キヤー! そそそそんな無茶な! 無しで! それ無しの方向で!」

上から覗かれた途端猛烈に恥ずかしくなって混乱して。

ジエネの回された手を解き、すくりと立ち上がって「じゃ、もうここでいいです! 行ってきます!」と、勢いよくジエネに向かってお辞儀をし、一目散に走り出した。

後ろからジエネの声が聞こえたけど、今私に振り向く余裕はありません!

とにかく、仕事! 仕事に逃げよう!!

side ジェネシス

俺の目の前から、逃げるように走り去るウンノを見て、激しく自己嫌悪を抱く。

昨夜に続き、再び額に唇を落としたら止まらなくなった。次に触れた涙は恐ろしく甘美であり。

つい自制がきかずに、奪うように重ねた唇。

それは恐ろしい程に柔らかく、触れ合うだけで歓喜に背骨が打ち震えた。好きな女と唇を合わせただけで恍惚となる自分は、どこか壊れているのではないかと思えるほどに。

掻き抱くその体は腕の中へ簡単に納まり、その華奢さに苦しくな
いよう力の加減をする。ウンノからほのかに匂う香草は煽るかの様
に立ち上り、いっそ溺れていたいと願う。

腹に当たる感触もいけない。柔らかく潰れた二つのそれは、弾力
という存在感でますます離れがたくなってしまうた。

大体バツが悪い。あいつがウンノの胸を突いたとき、俺は無意
識に剣を抜こうと柄を握った所でハルに止められた。しかし殺気は
抑えられず、7番隊の部下達は一様に顔を青くして震えていた。イ
ル・メル・ジーンがバツに制裁をする、と何故か嬉々としていた
から任せ、俺は詰所を後にした。

そつと瞼を開くと、ウンノの伏せられた目を縁取る綺麗な睫毛は微かに震えていた。しかし、もう涙は零れていない。

もつと深く交わりたい欲求をどうにか掻き集めた理性で止め一瞬唇を離れたが、欲深くもう一度掠めるように重ねてようやく離す事が出来た。

「涙は止まったようだな」

己の自制心が全く機能しない事を恥じていたので、それを隠すようにウンノの涙が止まった様子を口にのせた。

泣いたのは、俺の為。俺があの子から受けた侮蔑もあらわな台詞をウンノが聞いて、まるで自分が言われたかのように泣いたのだ。

気にするなと言っても、どこまでも人を思いやるこの娘は。

心の底から、愛おしい。

「ウンノ、俺を頼れ。俺に…… 甘えてくれ」

人の為に尽くすのもいい。しかし、俺という止まり木で休んで欲しい。心の底から願うその言葉に、ウンノは目を見開いて驚く。瞳は躊躇いを見せていたけれど、そつと何かを伝えるように揺れた。

その時、およそ10年振りとなる日差しが空から降り注いだ。

肌に刺すような光の刺激に呆然としていたら、ウンノが何かを見つけたようだ。指差す方に視線を巡らせも何も見えない。するとウンノは耳を彩る宝珠から精霊たちを呼び出して、確認を迫った。

「光の、精霊？」

ウンノは光と闇の精霊の力をまだ持つていない。小説とやらに書いていなかったのかと以前問うた。その返事は「リインは最初から六大精霊と契約済みでしたから分からないんです」肝心な所を端折られていたと、悔しそうに話すのを思い出した。

俺には見えない光の精霊と、挙動不審な動きをしながらも真剣にウンノは心での会話をしている…… と思ったら、突如肌という肌を真っ赤に染めて激しく動揺をした。

「ウンノ、どうした?! そんな顔赤くして」

「キヤー! そそそそんな無茶な! 無しで! それ無しの方向で!」

視線も合わせず立ち上がり「じゃ、もうここでいいです! 行つてきます!」と、脱鬼のごとく駆け出した。

制止の声も聞かず、ルネが待つこの先の侍女用の小部屋へと一目散に。

元々俺はこの先へは立ち入れないのだから、予定通りとも言うべきなのだが、暫く顔を合わせることが出来ないのだから、俺としては至極残念な別れ方をした。

結局、想いを言葉に乗せていないのだから。

詰所へ戻るとそこにイル・メル・ジーンの姿はなく、ロウが気が遠くなる量の書類を次々とハルと運んでいた。

どうやら俺の不在時によるしわ寄せが、今になってやってきたようだ。書類仕事は上官になればなるほど増え、椅子に縛り付けられる時間が長くなる。

剣をただ闇雲に鍛えていた頃を懐かしくなった。あの頃はハルを相手に一日中剣を振るったものだ。そうだ、少しでも時間を作って汗を流しに行こう。ようやくわが分身とも言える剣が戻り、腰に佩いているので久しぶりに剣術の稽古をしたいのだ。

あまりの仕事量に少し現実から目を逸らして考え事をしていたら、ハルが茶を差し出した。

「若、ウンノは無事ルネに引き渡せましたか？」

「あ、ああ……」

歯切れ悪く言う俺に、ハルは何か感じ取ったのか、片眉を綺麗に上げた。

「おや。まだ手出ししてなかったのですか？幾度も機会などあるでしょうに」

嘆かわしい、と首を振るハルに反論も出来ず「やかましい」と唸った。ロウは何の事だか分からない、といった表情をしていたが、ハルが要らぬお節介を入れた。

「ウンノは隊長の想い人だから、邪な思いを抱いてはならんぞ？」

「お前みたいなの四六時中常春と一緒にするな！」

え？

隊長の想い人？」

「ああそうだ。そして私はそれを応援しているんだ。若についてお相手が……！　しかし肝心のウンノは恋愛に関して鈍いな。ロウよりマシだが」

「煩い！　私を引き合いに出すな！」

「……　カケルが必要以上に男の手から守ったらしいから、手こずるだろうとイル・メル・ジーンにも言われた」

口付けを交わしたまでは、ウンノは別段おかしな様子はなかった。しかし『甘える』と伝えたら態度が少し硬化したのを感じていた。

「ウンノは、素直に若へ行きそうなのに、何で踏みとどまっているんですかね？」

ハルは狙った相手は確実に落としてきているし落ちてくるので、その気持ちがかく分らないようだ。

「あの、隊長。一つ確認しておきたいことがあるのですが、いいですか？」

普段仕事以外のことに関して興味を示さないロウが、珍しく口を挟んできた。

「なんだ？　言ってみろ」

「その……　私達はもう当たり前すぎて別段おかしいとも思わないのですが……」

言いよどむその言葉の先を待つ。

「隊長、ウンノはイル・メル・ジーンが『男』だという事、知らないのですか？」

「……………」

「……………」

俺とハルは、盲点をつかれた思いで絶句した。

「そうか！ ウンノは若とイル・メル・ジーンの仲を誤解しているのではないのですか？！ だから意図的に踏み込まないよう壁を作っているとしたか思えません」

そう主張するハルに、俺もその線が強いと確信していた。イル・メル・ジーンは昔から趣味で女装をしているが、段々態度まで女性らしくなってきたのをこの城全員が黙認している。何故誰も言わないかというと、そこは『災厄』を恐れるあまり、というやつだ。

俺を含め、城全体がイル・メル・ジーンを『そういうもの』と扱ってきたツケが回ってきたとしか思えない。

早く誤解を解きたい。

解いて思いを告げたい。

しかし侍女に扮したウンノとの定期連絡は夜間と決めてある為に、それまで逸る気持ちを自制するのは最大限の努力が必要だ。

「隊長…………」。この量の仕事を早く終わらせようと集中なさればい

いのですよ?」

普段から冷静沈着過ぎるロウは、その気持ちを逸らしてやると言わんばかりに積みあがった書類を指し示した。

。

とにかく仕事だ。仕事に逃げろぞ。

S i d e ジェネシズ（後書き）

結局仕事に逃げる二人は、似たもの同士ですかね？

1 玉座と精霊姫

ちょ、ちょっと落ち着こうよ自分！

あと数歩もしたら目指す扉があるんだけど、とにかく暴れだした心臓を鎮めようと柱の影にしゃがみ込む。

まず、まずよ？ 何でジエネは私に、キ、キッスをしたの？

表現が微妙に昭和だな、と思いつつ唇を指で押さえ、蘇る熱と感触に再び心を乱す。

え、えっと。アレは、うん。きっと私を慰めてくれようとしたのよ！ うん、そう、そうに違いない！ 現に止められなかった涙はあっさりと引いたしね！

ジエネが『ひよつとしたら私に好意を？』なんてのは、実に私に都合のいい解釈であり、最初から考えないよう除外した。

あと、光の精霊がいう「繋がる喜び」。
前後の文脈から読み解くと…… っていうか、明らかにアレだよ！
遠回りしてたどり着こうと思ったけど、あっさりと結果にたどり着いてしまった思考で再び脳内は沸騰した。

駄目だ駄目だこんなに動揺してちゃ！ ただでさえ寄り道して時間が遅れているのに！ クールダウンをしようと思っているのに！

初キスをした直後、更にその先の知識でしかない事をしなきゃな

らないという無茶振り。私にとって非常にハードルの高い、まさかの初体験。

だけどこの国にとって光は大事なのよね……。

安定した日光という物は、植物の成長には欠かせない要素の一つ。あとは水と栄養なんだけどね。諸外国からの輸入に頼ってばかりでは国益にならない。

この身たった一つ……しかも死ぬわけではないのだ。それならば捧げちゃってもいいのかな。みんなの為に。

ちくり、と胸が痛む。

ジエネには知って欲しくないな、こんなエゴのような価値観など。

『頼れ、甘えろ』と言われたが、もし何もかも頼っていたらきつと私は私でなくなるだろう。自分らしくいられる為に、ではどうするか？

大事にしてきた訳じゃなくて、機会がなかったただけなんだけどね！ 一度も体を…… どころか、キスだって初めてだったんですけどね！

半ばやさぐれつつ、大きく息を吐き出した。

大好きになった人とするもんだと思ってたけど、相手のいるジエネには頼めない。ってか頼める内容じゃないよ！……

この際、女慣れしているハルに頼むべき？ ハルなら見た目麗しく優しいから相手にとって申し分ない。一夜の恋として気持ちの面も盛り上げてくれるんじゃないかな。

思考を巡らせる度にだんだん気持ちは沈んでいく。想い人でない

相手と肌を重ねるなんて初めてな自分には辛すぎる。そっだ！ お酒でも浴びるほど飲めば……？

「…… その様な場所で何をなさっているのですか？」

「へ？ …… あ、きゃー！！」

文字通り飛び上がって驚いた私は、声をかけてきた相手に慌てて礼をとる。

「ははは初めまして！ え、と、今日から王付きの侍女になりましたサーラと申します！」

ラスメリナで仲良くなったサーラの名を偽名とするのは打ち合わせで決まっていたので、焦ってはいたがなんとか名乗る事ができた。

「なかなか来ないから探すよう手配をするところでした。さあこちらにいらして？ まずはその崩れた化粧を直しなさいな」

ルネ、と名乗った女性は、冷たい声でそう告げた。

夜中に泣いて、さっきも泣いて。恋を知って私の涙腺は随分と脆くなつたもんだな。

洗面所に置いてある鏡に、自分の姿を見やる。涙で崩れた化粧を直し、同じく鏡の向こうからこちらを見る自分の顔に軽くコツンと拳を当てた。

しっかりしろ、自分！

鏡の前でパンツと両頬を軽く叩き、気合を入れなおした。……
そっぴや朝も同じ事したっけ。

「あの、ありがとうございました」

支度が終わり、外で待つルネに声をかけた。

ルネは空色の髪をすっきりと纏めた、クールビューティー系の美人さんだ。銀縁眼鏡を掛けたらさぞ似合うことだろう。

「ハルドラード様に頼まれたので仕方なく、です。…… まずはあなたが使う部屋に案内しますわ」

うわ、嫌々だよこの人！

にじみ出る不機嫌オーラを隠そうともせず、先にたって待機室に案内をする。

私は元々の設定通り、十六歳の近衛騎士団の所属する男であり、王の様子を探るために女装して潜入してきた、という事になっている。

侍女女官は女性しかいないため、偽とはいえ男がいるのは都合が悪く一人部屋を用意してもらえた。これはとてもありがたい！
共同生活してたら私、いつボロだしちゃうか分からないしね。

で、案内された先は……。

「…… ここ、ですか？」

「はい、元炊事場と言いますか、王族の為にお茶などお出しする為の場所でした」

随分と埃が積もり、煤もこびりつき、鍋や食器が散在して……
ベッドがあった。

なんだよこの無理矢理加減は！

「凍死する時期でもありませんし、男性ですから寝られればどこでもよろしいでしょう？ 余分な部屋などありませんので」

私の困惑など全く意に介さずルネは「では次に行きますよ」と言う。

「え、どこへですか？」

目を丸くして聞き返す私に、あくまでも冷静にゆっくりと。

「ディエマルティウス・アルディアント・レーン王の所です」

も、もう一回言っただけ？ 覚えられないよっ！

必要以上に仰々しい扉。その両脇には近衛騎士を意味する完全装備の甲冑が立っていた。ああ、今日詰所に甲冑姿いたっけな。ってことは七番隊の誰かだろう。

ルネに促され、騎士から一通りの身体検査を受ける。その時「これは？」と兜の中から、くぐもった声でポケットに入っていた物体を問われる。

あ、これは…… 旅の石だ。ずっと肌身離さず、着替えても無意識に身に着けていたものだ。私の拳半分ほどの大きさとはいえ流石に王様に会うわけだから、武器になりそうな物は取り上げられるっものだ。

まあ、屋内だしそんな虫が湧いて出てくるだなんてないよね？
旅の石を騎士に預け、やっと室内に入る許可が下りた。

重厚な扉を叩き合図しても返事はなかった。しかし、別段気にした風もなくルネはサツサと扉の中へと滑り込む。

え？いいの？

続いて入った私の目の前に広がる光景は恐ろしいほどの広さをした長方形の部屋で、リビングの様な造りをしている。そして更に続き間へと入る扉がいくつもあり、一つは侍女の待機部屋だったり王の寝室だったり洗面所だったり……。ルネが次々指し示しながら説明をする。

広いよ、広すぎるよ！

私の勤めてたホテルのスイートルームなんて目じゃないよ！！

アンティーク調の家具類。いや、アンティーク調って見えるのは私の主観なだけだねっ。猫足のテーブルは飴色で、恐ろしく細か

な細工が施されている。その脇にあるソファは柔らかそうな革張り
で。周りに備え付けられている家具は全て同じテイストで固められ
ている。

ああ、値踏みする自分の何て下世話な事！

キョロキョロ眺める私を呆れた口調でルネが咎める。

「サーラさん、あなたそれなりにいいご身分の方とお聞きしまし
たけど？ …… まあいいです。とにかく部屋の説明は分かりまし
たね？ 待機部屋には私の他二名ほどが常に居りますが……。王の
下に参る事はありません。これからサーラさんには王の専属をして
もらいます」

「は？」

「これは決定です。あなたの好きなようになさって下さい」

「ちょ！ ちょっと待って！ 好きなようにつて?!」

それきり黙ったルネは幾分顔が青ざめていた。何か言いたげに口
を開くが結局きつく結びなおし、サツと踵を返すと侍女待機部屋へ
と消えてしまった。

おいおいおいおい！

一国の王の世話を初出勤、しかも素人の私にさせるとは一体何事
?!

しん、と静まり返った室内。その中にポツンと一人佇む私。

広くてガランとしたこの部屋は空虚感に包まれた。豪華なはずの
家具達も、色褪せて見える。

一国の主が住まう部屋の雰囲気では…… ないよね？

ざわりと嫌な予感が心をよぎる。

好きな様にしろと言われるなんて、王のはそんな扱いを受けているわけ？

いつでも出て来られるよう耳に宿る精霊達に声を掛け、王の寝室の扉に手をかけた。

カチャリ。

ゆっくりと開けて半身ほど扉に滑り込ませれば、室内は重い闇に覆われていた。

あれ？ ついさつき外は晴れてたよね？ また少し曇ってはきてるけど。カーテンを見ればちゃんと開いているっぽい。王がいるらしき場所を探すが、暗すぎて目を凝らしたって何も見えてこない。

（おい姫さん！ これは闇の精霊の力だ！）

焰が声を荒げる。焰は精霊を見極める力があるのだ。

「闇?! なんでここに闇の精霊が?!」

（ひめさま、ぼくいったでしょ？ せいれいつかいがつくったけっかいがあるって）

団長の部屋で疾風が報告してくれた時確かに言っていた。王は精霊使いが作る結界に捕らえられている、と。その精霊使いは闇の力を

使うのか！

私には闇の精霊が見えない。光と一緒に私に足りない感情があるせいだけだ。

闇の精霊が意味する所は、陰の気、負の感情、死。これだけ濃厚な気配の中で、王は……！

「みんな！ この闇の力追い出しちゃって！」

力を出し惜しみする場合でない。全ての宝珠の力を解放すると4人の精霊たちが（承）と口々に私に告げ、部屋の中心地辺りへと集う。

赤青黄緑の輝く色彩がゆらりと揺れ、（散！）と天に拳を突き上げ叫ぶと、ねっとりとした闇は一瞬のちに霧散した。

入れ替わりの様に窓から明るい光が差し込む。私は急いで窓を開けて「疾風、飛沫、清浄な空気を作って！」とお願いした。

（承）

と答えた二人は清らかな水を運び、細かな霧を作り出して室内を風で洗い流す。

その様子を横目に、私は王のベッドの傍へと駆け寄った。

「王様！ 大丈夫ですか?!」

柔らかな布団に包まれる王は少しくすんだ金髪で、顔立ちはやはり兄弟だけあってジエネに似ている。その相貌は閉じられている為に色まで確かめられないが……。

王の様子を一つ一つ観察する。呼びかけても反応がない。そつと首筋に手で触れれば脈は感じられた。肌はかさつき唇も荒れている。顔色は酷く悪い。

そういえば疾風が、王は何も食べていないって言った？

「息吹、王の状態は分かる？」

地の精霊である息吹は、生き物の成長に詳しい。じっと眺めていたけどボソツと呟く。

(……疲労、主に精神。胃腸虚弱。反抗による食事拒否。他問題ない)

良かった。病気や呪い系じゃないのね。でもこのままでは衰弱して死んでしまう！

ジエネが大事に守ろうとしている弟。なんとかしないと！

また精霊使用による侵食が行われないよう焔に見張ってもらい、私は水分を取らせる為の飲み物を用意する事にした。

水はどこ？ あと……。

ベッド横においてある水差しにはコップも付いている。でも私が欲しいのはそれだけではない。ああそうか、こういうのはこの子が得意ね。

「息吹、レモンっぱいのを一つもらえる？」

「……一つだけ？」

もっと出せるのといった物足りなさも滲ませながら、息吹の差

し出した手の平にはポンと一個、まさしくレモンが現れた。

「わ、ありがとう」

とりあえず一つでいい。冷蔵庫ないから。腐らせるのもつたいないしー！

あとは……。

ボタンと扉を開け放ち、侍女待機室まで走った。

コンコンとせわしなく叩き、返事があるのも待ちきれずに開け、尋ねる。

「ルネさん！ あの、砂糖と塩、ありますか？」

不思議そうな顔をしながらもルネはすぐに用意をしてくれた。

多分、ルネさんも他の人もあの闇のせいで入れなかったんじゃないかな？

私とは見え方が違ったかもしれないけど、あれほどまでに濃密な闇の気配を漂わせているのなら常人でも本能で避けるだろう。

この部屋にはあと二人居ると言っていた侍女が、突然飛び込んで来た私にビックリした顔で見ていた。軽くペコリと会釈を試みたけど、途端険しい顔を見せた。うっわ、怖い！何で？

「量はこの位でいいかしら？ 何に使うの？」

「あ、えっと、また後で！ 急ぎますからっ」

ルネから差し出された塩と砂糖の容器を引っ掴むように受け取り「ありがとうございます！」と再び寝室へ走る。枕元まで戻り、水差しに今手にした砂糖と塩を適量入れる。

「あ！ レモンどうやって切るっ……」

しまった、包丁ないじゃん！

（ひめさま、ぼくが！）

疾風は（それ〜〜）と、何となく気の抜けたような掛け声でレモンをスパッと二つに割ってくれた。うわ…… かまいたちみたい。

便利だけど怖いな！というか、そんなレモン切る位でこんな力使ってるってどうよ？！

偉大なる精霊の力で美しい切断面を見せるレモン。

その半身を水差しの中へギュウツと絞ってかき混ぜた。

「よし、完成！」

水分が体から失われている時に効率よく吸収できる特製飲料。通常のスポーツ飲料より塩分がちよつと多め。クエン酸も欲しいのでレモンを追加した。入れたほうが味もいいしね。

さて…… どうやって飲ませる？

ストローや吸いのみもない。

よし、起こしてみよう！

いささか乱暴かと思っただけど、意識があるかどうかもわかるしね。コップに飲み物を入れておき、私はそつと枕元から声を掛けてみた。

「王様。王様……。あれ、何て名前だっけ？」

名前を呼んでみようとしたけど、思い出せない。

ジエネ達はみんな王とか王様とか……。あと弟とかそんな呼び方しかしてなかったな、そっぴや。ルネが一回だけペロつとフルネーム言っただけだ。

なんだか・なんだか・レーン。…… だめじゃん！

なんだかマル……。なんだか・レーン。じつと王様を見つめながら呟く。

「マル……。マルちゃん？」

「……。誰がマルちゃんだ！」

ようやく一部思い出して口にした所、突然クワツと目を見開いて怒った王様。

「誰だ貴様？」

ゆつくりと首を巡らし私を見るその瞳は太陽の下で明るく輝く海の色。ジエネは深い海の底の様な青い色だったから、その違いに気をとられていた。

「誰だ貴様と言っている！」

苛立ちを含んだ問いに、「あ、ごめんなさいマルちゃん」とうっかり口を滑らせた。言った途端その双眸は怒りに燃え、更に怒気を含ませた声で私を問いただす。

「まずそのふざけた呼び名はやめろ！そして貴様は何者だ？
見ない顔だが」

ゆつくりと起き上がり、枕元に立つ私を睨み付ける様に見上げた。ジエネと似てると思っただけど、それはどうやら顔の造りだけだ。色彩は違うし、そもそもこんな手負いの獣の様な態度は取らない。十六歳って言うてたっけ？ 在位二年とは言っけど傀儡政権に仕立て上げられそりゃ性格も歪むだろうな。

「だから！俺の質問に答えろ！」

「あつ、すみません！」

再び思考に没頭してしまったのを咎められる。

「まあとにかく、お水飲んでください」

そつと先程作った特製ドリンクを差し出す。しかし怪しんで手を出してこない。

「あ、毒を心配されてますか？　じゃあまず私が飲んで見せますよっ。」

こくり、と喉の音を立てながら一口。うーん、美味しい！やっぱり搾りたてレモン果汁の味が生きてるね！

そしてそのままコップを差し出す。暫くジッと眺めていたけど、やがてフツと鼻で笑って受け取った。

「今更毒を気にしても仕方ないか。いい、飲んでやる」

どこまでも偉そうに呟いて、しかし喉が渴いていたんだろう。手に取ったコップをまず一口ちびりと飲んだ。偉そうに言う割には舐めるように。

「……　美味しい」

「でしょ？　これはですね、体の調子が悪い時などに飲む特製飲料です。肌の荒れ方から脱水状態と判断しまして、体に浸透圧の優れた飲み物を……」

「どうでもいい。次を寄越せ」

なんだ、折角説明口調がノッて来たのに。あつという間に空にしたコップに再び注ぎいれる。入れた途端一気飲みをして、大きく息を吐いた。

「で？ 貴様は何者だ？」

水分を取ったせいか、険しい表情は幾分和らいでこちらを見る。

「えっと、初めまして王様。私はサーラと申しまして、今日から王様のお世話を仰せつかって参りました。よろしくお願い致します」

につこりと笑ってペコリと斜め45度の礼をし、顔を上げると何故か変な顔していた。あれ？この礼の仕方おかしかった？

「侍女……？ 久し振りに人を見たな。」

「久し振りに人を見ただなんて……。普段どう生活されてたんですか、マルちゃん？」

「マルちゃんって言うな！ デイエマルティウスという名前があるっ！」

ガツと噛み付く勢いで怒鳴ったけど、やはり食事を取っていないせいか力が出ないようだ。

起き上がっているのは辛いらしく再びベッドに横たわった。

「でいえ、マル……ちゃん」

そんなに覚えられないような名前でもないのに、何故か覚えられない。王様を見ていると、どうしてもマルになってしまっただ。そんな私に呆れたのか諦めたのか。「もうよい」とさじを投げた。

「そうだな…… ここ一月ほどは人に会ってない。どうしてか部屋から出られず、外からも入れないようで食事も満足に取れず……。俺など居なくても構わぬ存在だから、大して影響はなかっただろう？」

「そんなんっ！」

「いい、俺は自覚はあるんだ。

疲れた。寝るぞ」

ふーっと息を吐き出し目を閉じたマル。顔色も一層悪く、明るい元で見るその姿は頬などこけて痛々しい。久し振りに人に会ったせいであろうか、初対面の私だけでも会話が出来て嬉しそうだった。

…… お世話、頑張ろう。

ジェネの弟だからというのもあるけど、弱っている人をほっておけない。書状渡したから「じゃあ！」って言うのは、余りにも勝手じゃないか。今の私の立場は王様専属の侍女。出来る限りのことをしてマルちゃんを元気にしてあげたい。っていうか。

なんでマルちゃんて呼んでるんだよ私！

その疑問も解けていない。今まで出会った人はちゃんと名前呼べたのに、マルちゃんだけは『マル』なのだ。ジッと見てたらそれしか浮かばなかった。

ま、マルちゃんが良いって言ったからいっか。どうせ他の人入ってこないみたいだし。

あっさり気持ち切り替えて、まず出来ることを考える。

マルは寝てしまった為、その間に何をすべきか。

部屋の掃除、食事の用意、よね？でも今寝てるから、部屋の中でガタガタしては起こしちゃうから…… 食事の用意。

幸い、私のあてがわれた部屋は元炊事場。調理道具も散乱してい

たけど片付ければなんとかかなりそうだった。よし、やるか！

部屋の見張りに疾風を残し、再び侍女待機部屋へ。一応ルネに許可取ろうと思つて。

さつきは慌しくしてしまつたけど、今は落ち着いてノックする。

「サーラです」

暫く間があり、少しだけ開いた扉から顔半分しか見えないルネの姿があつた。

「ちょっと…… 困るんですけど？ そう何度も来られると迷惑なんです。あなたのお好きなようになさつてと言いませんでしたか？」

小声で、しかし私を攻める口調に「でも……」と言い掛けたその時、私の手に素早くカサリと紙を握らされた。

「いいですね？ もうこちらの部屋に来ないでください。それ以外は好きになさつて」

言つたり、扉はすばやく閉じられた。

暫く閉じられた扉を見つめたが、ルネの何か怯えた瞳が忘れられない。

手の中に握られた紙 誰かに見られたらきつとまずい物よね？

私は騎士の居る扉を出て、自室へと戻つた。そして小さく折り置かれた紙を広げると、そこには走り書きの字が見て取れた……。…。

私、字は読めないんですけど！

きつと、何か大事な事が書いてあると思うんだよね？でもまさか私を読めないって思ってたないだろうな……。

え、えつと！ どうしよう。

あ、そうだ携帯！！

連絡手段としてイル・メル・ジーンに魔力を注ぎ込んでもらった携帯電話を思い出した。

定時連絡は夜…… だけど、緊急時だからいいよね？手紙の事と食材の準備。ブツブツブツ……。

それだけ！それだけなんだから！

今朝の出来事が脳内一杯に広がりそうで、呪文の様に二つのキーワードを繰り返して呟く。

ジェネの番号は110。

大きく深呼吸をして、ゆっくりとボタンを押した。

カコ、カコ、カコ……カコッ。

操作電子音は消しているけど、ボタンを押す音がやけに鮮明に響いた。

一回…… 二回……

「 ウンノ？」

ぎゃー！　でたっー！

いやいやいや、そりゃジエネに掛けたからジエネが出るに決まってるでしょー！

「あつ、ごめんなさい。今電話大丈夫ですか？」

あちらで何をしているか見える訳じゃないので状況を尋ねれば、今は魔窟まくつでハルとロウと共に報告書や許可証など事務処理をしているという。あの低音のいい声が携帯電話の受話口から直接私の耳へと伝わり、胸が震えた。

ぞくぞくするような快感が打ち寄せてくるが、理性を総動員して押さえ込む。

「あの……　ルネさんから手紙を買ったのですが私は読めないの内容を知りたい事と、後マルちゃん……　あ、いえ王様の為に食事を用意しようと思うので、食材をお願いしたいです」

「そうか、分かった」

「それですね。えっと……　出来ればハルさんに来てもらいたいです」

「ハルに?!」

「はい。ちょっとお願いしたい事がありました……」

「……　分かった。必要な食材の事など伝えるといい。ハルに代わるぞ」

なんでだろう、若干沈んだような声でジエネは言っているとハルに電話を代わった。

「おお！　なんと不思議な道具ですな！　声がハッキリと聞こえますぞ」と興奮したようにハルが大きな声で喋るので鼓膜が痛い。ハルの声も艶っぽさがあるので注意がいるよっ？！

「あの、ハルさん。近衛の厨房からスプーン貰ってきて下さい。あと……」

必要と思われる、そしてあの厨房で働いて見聞きした食材をいくつか挙げてお願いをした。

「了解。すぐに持って行く。なあウンノ？　行くのは若じゃなくていいのか？」

急に小声になったハルは、私にそう尋ねた。

「なっ、何でそこでジエネがっ！　……　ハルさんにナイシヨの相談事があるんです。だから、ハルさんお願いします」

「へえ、何だろうね？　とにかく持って行くよ」

そう言い、通話は終了した。

5 (今までのあらすじアリ)

とにかく、少しでも片付けない事には調理どころではない。
出し惜しみしないと決めたので、ここは一つ精霊達に手伝ってもらおう。

「飛沫、汚れを綺麗にして。焰、調度品は焦がさないようにゴミを焼いちやつて。息吹…… は、あの庭の整備ね！ 目立たない場所に食べられる野菜とかハーブ、植えて欲しいの。みんなお願い」
私の部屋はジエネと別れたあの庭に面している。家庭菜園レベルのをコツソリ植えても、荒れ放題の庭ならバレないだろう。

「承ウヤヒ！」

飛沫と焰が言うが早いか嵐が来たかのように部屋は荒れ、しかし次々と汚れていた食器や壁、床、竈が綺麗になっていき、炎が一面に広がったかと思うと埃などのゴミが焼かれた。私も触れているはずなのに、ちつとも熱くない炎を不思議に思っていたら、「姫さんは契約者だからな」と教えてくれた。うーん、こう言うては失礼なんだけど便利だよ！

片付けまでは焰達は出来ないので大まかに分類を分け、仕舞っていく。

そして飛沫に、発掘(?)された鍋や綺麗になった水瓶へ水を満たしてもらい、息吹には薪を用意してもらい、焰に消えなくて燃え広がらない火を竈に付けてもらう。薪が無くても炎は出ていられるけど、誰が来るか分からない為見た目を整えておく必要があるから

ね。

ここまで一気に終えたので、宝珠に戻ってもらった。

竈にかかった鍋のゆらりと立ち昇り始めた湯気を、ベッドに腰掛けながらぼんやりと眺める。

私、なんでこんなことしてんだろ。

日々の目まぐるしい出来事で考える暇も無かったけど、ぽっかりと時間の空いた今、自分の置かれた状況をふと振り返った。

面接の為電車に乗ろうとしてて。遅延でその間コーヒースタンドに入ったつもりが異世界に入っちゃって。ああ、その時ジエネの上に落ちたのよね。あ、あの綺麗な海の底の瞳、鋼の様に固くて、それでいてしなやかな肉食獣のような体。私を抱えたくらいじゃビクともしなかった。

……今思えば、一目惚れだったのかも？

刷り込み現象だよって誰かに言われそうだけど、例え刷り込みと言われた所で始まってしまった想いというものは止まらないのだ。

それから翔が何故かラスメリナの王様になって、ユীগとサラがいて。あのバカツプルどうしてるかな？

翔に乗せられてレーンに来る事になっちゃって……。ジエネの部下であるハルドラーダとバツツが外で待っていて。ハルの色男ぶりにクラクラしたし、バツツの空気の読めなさも新鮮だった。

竜と話も出来たっけなあ。『読みとり』だっけ？ 餞別だって言っただけど、どんな力なのか。

それからそれから。

国境越えて、私何故か倒れて。ジエネに迷惑かけちゃったな。雨に濡れて熱を出し、腕の切り傷も酷くて肩も腫れていた。助けたい一心で洞穴の外に出たら、精霊達がいたんだよね。ジエネの後押しもあって契約して…… 当代の「精霊姫」となって。

キムロスの町でハルとバツツと再会して、その時ジエネが実はジエネシズ・バルドウ・レーンという名の本当だったら王位継承権第一位だった事を聞いた。放棄して弟の為に近衛騎士隊長になったとジエネがそんな思いを抱えているつてのに、私はお気楽に引き受けて護衛のような事までさせて。猛反省だよ、私。

食堂でマーサの手伝いをしつつ食材調理法の勉強をして、レーンの王都であるクリムリクスへ行ったんだよね。

深夜だけど近衛7番隊副隊長であるロウが迎え、翌日は憧れの物語『精霊姫と騎士の旅』の主演であるアルゼル・克蘭ベルグ、その人に会った。近衛騎士団団長である克蘭ベルグはカケルの頼みを了解し、そして王の姿が見えないことを憂いていた。

そこで、私が侍女となって潜入して様子を見てくるってなったんだよね！

準備で近衛騎士団の詰所で…… イル・メル・ジーンが居た。なすばでいーな超絶美女。妖艶な雰囲気を漂わせ、ジエネとただならぬ関係を匂わせていた。

兄の様だと思い込もうとしたのもこの時。気持ちに気付かない振りをしたんだ。

ジエネに食事を作る話が、いつの間にか近衛騎士団全体について話が大きくなって。がむしゃらに作って何とかかなり、ハルが頭を撫でてくれた時感じた違和感。あの頭を撫でる手は、ジエネじゃなきゃ

いけなかったんだ。私、ジエネの手を求めていたんだ。

魔窟まくつの小部屋まで送ってくれたジエネが、私を労ってくれて……
「今度は俺だけに作って欲しいな」と、頭を何度か撫で、額にキスをした。

その時。ハッキリと自覚したんだ。

私は、ジエネシズが好きだと。

しかし、ジエネにはイル・メル・ジーンがいる。似合いすぎる二人には、最初から入る隙がない。私は初恋と失恋を同時に理解する夜となったのだ。

この気持ち、忘れよう、無かった事にしようと思合を入れて詰所へ行ったら、イル・メル・ジーンから携帯電話を寄越せと言われ。なんでここでこれが必要なの?!と思ったら翔が魔力の無い者同士の通信手段として置いていったものらしい。これで緊急時以外は夜に定時連絡をジエネと取ることになった。

いよいよ王の部屋へ向かったのだけど、身体検査を受ける場所でジエネに酷い侮辱を浴びせる相手に腹が立って私はくやし涙が止まらなかった。

ジエネが言われてるのに私がまたジエネに八つ当たりして。だって、許せなかったんだもん、あんな酷い言葉言われて。

涙の止まらない私にジエネは……私に口付けをした。
余りにも心地の良い感触に恍惚となりながらも、どうして？と心の片隅で恐慌をきたしていた。

そつと唇を離れたジエネは、「涙は止まったようだな」と私の目を見ながら言った。

そうか、これは単に私をビックリさせて涙を止めよう

としてくれたんだと理解する。

そうしたら、空に浮かぶ雲がサツと切れて、明るい光が差し込んだ。この国でまさかの日の光。

うわつと空を見ていたら、降りてきたのは光の精霊。

しかしまだ完璧な姿ではなく……私の足りない感情が満たされたら具現すると。

「繋がる喜び」

それって、まさか？

「……ノ。……ウンノ」

肩を揺すられて、ハツと気付いたらハルがそこに居た。

「きゃっ！ ハルさんいつの間に！」

ボンヤリ今までの事を思い返していたら、ノックの音が聞こえなかったみたいだ。

「扉を^{たた}叩いても返事がないから入らせてもらった。ど
うしたんだ？ そんなに涙を流して」

ハツと慌てて頬に手を当てれば、びしょびしょに濡れている。いつの間にか泣いていたらしい。

ゴシゴシと袖で乱暴に拭くと少し沁みた。朝から、いや昨日の夜から泣きっぱなしで目の周りが痛い。

「いえ、なんでもありません。食材ありがとうございます。また
お願いしちゃうかも知れませんが……」

「そりゃ構わないが」

何か言いたそうなハルをあえて無視して、私はルネから渡された紙を差し出した。

「ハルさん、これってなんて書いてあるんですか？」

「これは…… 『監視・衰弱・手加減』と書いてある。

おそらく、ルネは他の侍女に監視されているんだろう。王を衰弱させるように、しかし死なせないよう手加減を、と」

それであるの怯えた目つきか。待機部屋に居た二人の険しい表情も頷ける。

「この件については若と団長に報告する。それで？ ウンノの内緒の相談事ってなんだ？」

ハルはベッド脇にある小さな椅子を持ってきて私の近くに腰掛けた。

今のハルは眼鏡をかけていない。大人の魅力ムンムンで、全てを委ねても安心できそうな気がした。

「あの」

「ん？」

「あの…… 私を、抱いてもらえませんか？」

5 (今までのあらすじアリ) (後書き)

設定上初夏なのですが、今書いてることちは年末なので
ちよっと今までを振り返ってみました。

ここで終わるのもどうかと思ったけど(汗)

明日はちよっとした企画モノアップするんでお楽しみにー！

* 年末企画番外編 * (前書き)

とある作品とコラボです。

* 年末企画番外編 *

「ねーちゃん、ちよつとお節作ってもらえない？」

唐突に翔は、帰ってくるなり三段重ねの重箱を三つ（！）テープルに乗せて言った。

「へっ？ 何事?!」

大学三年生の年末。毎年作る家族分のお節に、何入れようかなと考えていた矢先の事であった。

すでに就職の決まっている翔と違って私はまだ先日受けたリゾートホテルの内定待ちで、大人しく自宅で過ごしてた。

「いやあ、お世話になった人達にお歳暮代わりにあげたくって」

「ちよつと、幾らなんでも……」

無茶言うな！ と即効断ろうとしているのを見越してか、翔は「もちろん……」と続けた。

「材料費は全て僕が持つよ？ 臨時のバイトで結構潤ったんだよねー。あと、ねーちゃん欲しがってたスチームオープンもどーんとプレゼントするよ。何より…… 自慢のねーちゃんの料理をみんなに食べてもらいたいんだ。お願いっ！」

くっ…… スチームオープンかっ！

今あるオーブンレンジは十年選手。たまに機嫌を損ねて動いてくれない為、とても欲しかった一品だ。

こうして、私はあっさりと籠絡された。

一の重は、基本酒のツマミになればいいので、かまぼこ、昆布巻き、きんとん、たたきごぼう、田作り…… 数の子も入れておくか。それと黒豆。

二の重。焼き物メイン。中に人参とインゲンを巻き込んだチキンロールを入れて、海老の焼き物を入れる。あとは紅白なます。縁起物のちよろぎも入れちゃおう。他には最近気に入ってる鶏ハムも作っておこうかな？

三の重は、不動の煮しめ。今回はスポンサーがいるから、くわいと海老芋を加えることにした。茶色ばかりになるから、人参とレンコンはお花の形になるよう飾り切りして、さやえんどうはサツと塩湯でして飾るとする。

うーん。なんだか商売でもやるんじゃないかという量だね！

山ほどやることはあるのに、なんだかやる気は満ちていた。

昔は冷蔵庫がない為に煮しめなど保存の利く料理が作られていた。つてことはですよ？冷蔵庫に保存しておけばわりと持つてことで、早い段階から作り始める事ができるのだ。

その中でも長持ちしそうな物から徐々に作り始め、三十日には完成。翔の指定日もこの日だった。

「ねーちゃんありがと〜！　じゃ、これ約束のプレゼント！」

「う、うん。嬉しい……」

流石に重箱三段重ね三つと自宅用、計四つでは疲れも半端ない。ぐったりしながらも、翔に疑問をぶつけてみた。

「ねえ？　それ、誰に持っていくの？」

「えー？　言ってなかったっけ？　就職先のおじさんと、女装趣味の友達と、マグノリアって国の友達とこー」

「ちよつと！　おじさんって言うな！　社長さんでしょ？！　あと何その女装趣味って……。それから、マグノリアって国、そんな国あった？」

脳内で世界地図を広げたけどどのみち私の知ってる国などごく一部であり、ひよつとしたらそんな名前の国があるのかもしれない。

「あー、えーつと。まあいいじゃん。とにかくありがとう！」

じゃあつ！　と三つの重箱を抱えて外に出て行ってしまった。これから渡しに行くそうさ。

後に残された私には、すでに疲労感しか残っておらず、大掃除としめ縄飾りを付ける力を回復するべく、コタツに潜って昼寝を決め込んだ。

「で？　これがカケルご自慢の姉君の手料理ってやつね？」

「そーなんだ！　日本の正月は、これ食べてテレビ見てミカン食べながらコタツに寝転んでの三が日が儀式なんだよ」

「？　良く分からないけどまあいいわ。美味しそうね。食べてもーい？」

「ダメダメ。うちでは正月迎えてからなんだ。だから明後日までお楽しみに」

「なあんだ。ねえ、ジエネにはあげないの？　すごく喜んで食べると思うけど？」

「まだ早い！」

「早いつてなによ」

「とにかくまだ早いんだ！　今回は、わざわざ日本に行って作って貰ったんだもん。ジエネにはもつと……。今、ジエネにねーちゃん料理を食べさせる訳には行かないんだよっ！」

「訳分らないわねっ！　でも一応後の事考えているんだ？　ふふっ、じゃあ私とカケルで二人で頂きましょう。ああそうそう、マグノリアのルークって誰？　いい男なの？」

「僕が時空を旅してる時に世話になったんだよ。……　助けられ系な？」

「時空……。もういちいち驚くのも飽きたわ。そうね、カケルならなんでもアリね」

「なんでもとは失礼な！ 色々修行をだね……」

「あーはいはい。もうそれ百三十八回聞いたからいいわ。それで？ ルークって人が助けてくれたのね？」

「恐ろしい程の美貌ってああいうの言うんだらうなあ。その上魔力も溢れて皇帝で……。こらっ！ イル・メル・ジーンは連れて行かないぞ？ んで、あそこんところも日本から迷い込んだ女の子がいて、その子とちよつと話が弾んじゃってさ」

「ああ……。なんだか読めたわ。カケル、その子と仲良くなりすぎたんじゃないの？」

「ご名答！ あのルークの圧力プレッシャーつたら、そんな趣味なくてもゾクゾクするよ？ 『ハナに近寄るな・ハナと話すな・ハナと同じ空気吸うな』まで言われちゃったしー。あっはっはっ」

「つまりルークとハナは恋人同士？ ……どこまで邪魔したのかしら」

「まーそんなわけでルーク介して話した結果、花ちゃんが希望する物を書いてもらい、それをお礼代わりにプレゼントする約束をしたのさー」

「介さなきゃ話せない程邪魔したのね？ カケルはどこまでも空気が読まないっていうか、それがカケルなんだけど。」

ンって、カケルの国だったわよね？ ああ、だから『おせち・こたつ・みかん』な訳？」

「そうだよ。希望の物を書いた手紙見たらさ、『日本の正月を味わいたい』って望んでたから。ルークと花ちゃんはラブラブだし、こういったのは女の子喜ばしとけばもれなく男の方も喜ぶからねっ。ルークは花ちゃんの笑顔見たさに、黒いオーラびっしり出してから僕に手紙渡す様子は見せたかったなあ！ あの黒さはイル・メル・ジーン大好物だし？」

「そうね、嫉妬に狂う男というのも美味しそうだよ」

「…… 怪しい目つきだな！ まっ、これで取引先が一個増えたり？ 流石僕だね！」

「まだ開拓してたの？ あの人に頼まれたからって貪欲ねえ」

「しっ！ どこで聞いているか分かんないんだからっ！ こらこらこら、それ、最後の一瓶じゃないか！ 半分以上飲んでるいぞイル・メル・ジーン！」

「カケルがたった二十本しかお酒用意しないから悪いんですよ？ そうね、カケルの女遍歴でも聞かせてくれたら差し上げてよ？」

「…… だいぶ酔いが回ってきたな？ タチ悪い」

「そういうアンタこそ目つき最悪よ？ ほら早く言いなさいな」

「言ってもいいけど、語れば三日はかかるからなっ！」

「ぶっ。そんな経験値あまりないくせに」

「うーん、そういう事にしよう！ イメージ崩れるからねっ」

「…… 誰に対してよ」

「パラレル番外物語おしまい。」

* 年末企画番外編 * (後書き)

年末年始特別企画番外編でした。
どの作品とコラボでしょ？w

たっぷり三十秒は経っただろうか……。

ハルは、こちらを見たままピクリとも動かなかった。

「あの、ハルさん？」

この空気に耐えられずそつとハルの顔を覗き込んだら、「あ、いや……」と何故か目があさつての方を向いた。

そして綺麗に後ろに撫で付けられている深緑色の髪を乱暴にガリガリ掻きながら、困った顔をした。

「なあウンノ、それはどういう意味だ？ 抱き締めれば良いのか、それとも……」

「ええつと…… それとも、の方で…… す……」

改めて聞かれると滅茶苦茶恥ずかしい！ 自然と顔は俯き語尾は尻すぼみで小声になり顔が赤くなっている自覚がある。そんな私を見たハルは、大きな溜息を吐きながら両手でぱしんと両膝を叩く。

「じゃ、致しますか」

え…… と思った時にはすでにハルの膝の上に座らされていた。背中にじわりと体温を感じる。ハルの右腕は腰に回り、左手は私の右耳に掛かる髪を後ろに回され、耳があらわになった。

何て素早い！

ハルの吐息がふうつと耳にかかり甘い痺れを起こさせ、「……んっ」と思わず声が洩れでた。

そしていつの間にか背中の中のボタンが中程まで外され剥きだしとなった肌が、触れる空気にもまで敏感に感じる。

ハルの濃厚な色香に流され、そんな自分がどうにかなってしまいたいそうで、だけど……。

その手の。

その熱の。

その触れる手が腕が足が息が熱が…… ちがう、すべてちがう！

「っ…… やっぱ、駄目！」

両腕でぎゅっと自分の体を抱えて立ち上がり、ハルの方をくると振り返り「ごめんなさいっ！」と頭を下げる。

どうしても、駄目だった。

私が今までジエネに触れたあのすべてをハルが触れる度によみがえ甦り、痺れる様な快感と刺す様な痛みが交互に胸を刺激されて辛くなった。

「ハルさんすみません…… こちらからお願いしておいて……」

「いや？ むしろ役得だったさ。ほら、まず涙を拭いて」

すっと差し出される手巾。うわ…… やっぱりこの辺りそつがな

い！

有難くお借りして、べちよべちよに濡れた頬に当てる。もうほんつと涙腺壊れてるね。呆れる位今日出すぎだよ。「背をこっちに向ける」と、私の背中のボタンを再び留めてくれながら聞いてきた。

「一体どうした？ 確かに私は得意分野ではあるが、理由無き契りなどたまにしかないし、嫌がるのを無理矢理する趣味もあまりないぞ？」

ハルさん言っちゃってるよ、色々！

「まあ座れ。……『抱け』とは、どうして急に？」

私はぽすんと再びベッドに座り、ふうつと息を吐いた。

「それは、今必要だと思ったからです。……ハルさんならいいかな、と」

「私なら……？ その役目、ジェネシズ隊長では駄目なのか？」

「…」

私はその名前に弾かれた様に顔を上げた。

思い切りハルと目が合い、しまったと思った。ハルは、気付いている。

「あ……」

ハルは、見惚れるほどの笑みを私に向けた。「わかってるさ」と長い足を組んだ。

「若を見る目で気付いてたよ。ウンノ、好きなんだろう?」

直球ー!

しかし私も直球勝負に出た身なのでもういいやと諦めた。どうせこの分野でハルに敵うはずがないのだ。

「う…… あ、はい」

自覚はあったけど、人に打ち明けるのは恥ずかしい。たった今ハルにお願いした内容よりかわいいはずなんだけど!

「じゃあ、何故若に頼まない? ぜった…… いや、おそらく若ならば叶えてくれると思うが」

「駄目ですっ! ジエネには頼めませんっ」

「…… ひょっとして。イル・メル・ジーンを気にしているのか?」

「なぜそれを…… ええ、ぶっちゃけてしまえばものっすごい気にしていますとも! 私はね、人の道を外したくありませんから。どキツパリ忘れる事にしたんです! まだちょっと苦しいけど、時間が経てばなんてことありませんよ! 今は仕事、そう仕事です!」

一気に言い切ると、なんだかスッキリした!

「あのなウンノ、イル・メル・ジーンは……」

「じゃ! そろそろ起きるかもしれないんで、マルちゃんの所に

行かないと!」

すくつと立ち上がり、「ハルさん、ありがとうございます!」
と礼を言う。

「お、おいマルちゃんて誰だ?! いやいや、それよりも聞け!
イルは……」

「ああそつだ! ちゃんと心構えが出来たらまたお願いしますね
!」

にっこり笑い、ハルが持つてきてくれた幾つかの食材をサツと抱
えてダツシュでマルの所に向かった。

後ろから「ウンノ、待て!」と声が追いかけてきたけど、今更ニ
人の仲を言われたつて私は邪魔する気はないんだから。

時間薬、時間薬!

大丈夫、きつと、平気になる。

6 (後書き)

年明け一発目です。今年もよろしくお願い致します。

食材を抱えて王の私室の前に来たけど、どうやってあの甲冑ズの身体検査を抜けるのか。

一侍女の持ってきた食材など、毒盛ってる？ 危険物？ など判断されるのがオチだ。私は柱の影に隠れて宝珠へ心声で話しかける。

（ちよつとみんな！ これをマルちゃんの寝室へ見つからないように運んで欲しいんだけど、お願いできるかな？）

（目晦ましは私がやりましょう。運ぶのは土の、頼む）

飛沫が申し出て私は持っていたものを任せる。そして再び身体検査を受けて中に入り、今度はルネに声をかけず寝室へと戻った。

マルはまだ寝ていた。ま、そうだよな。疾風は起きたと言っただけでなかったし。

暖炉を見るとほんの少しの薪が置いてあった。初夏なので火を付ける機会も無かっただろうから量については仕方ない。でもこれで暖めなおしができそうだ。

暖炉に薪を並べ、薪の消費が少なくなる程度の炎を焰に頼んで熾してもらい、鍋を暖める。

あとは 掃除かな。

ちつとも侍女が侍女らしい仕事をしてこなかったらしいので、相当…… アレね。ばつちいね。

掃除道具など分らないのでルネに聞きたい所だけど、私の手伝いをしてルネがとばかりを受けるのも悪いし好き勝手やらせてもらおう。責任取るのは私だけで充分だ。

あらゆる戸棚をゴソゴソしても寝室にはなかった。居間の方へ行き再びゴソゴソ。私、怪しすぎるよ！

そして発見した筈、ちりととり、雑巾、桶（バケツ？）。一通りの物は一箇所に置いてあり、それを持って寝室へ戻る。

さてと。まずはトイレから掃除しよう。

寝室には専用のトイレが付いている。流石に……ここはきれいにしないと駄目だろ！

ちなみにここの城のトイレは、意外にもまともだった。

一本溝があり、排泄されたものは傍に置かれた水瓶から桶を使って流す。溝の先は壁に隠れているんだけどキッチンと排水されていく。ラスメリナの上階から地面までポットンとは大きく違うよ？！私はこちらの方式をデイスカバラントの世界中に推奨したいね！

汚れ具合は差し控えるけど……。とにかくトイレは専用ブラシで磨く、磨く、磨く！

桶の水は尽きかけていたので、これはこっそり飛沫に頼んで満たしてもらおう。そして最後に床を磨き、水で流して雑巾で水気を拭き取り終了！ ああ、スッキリした。

再び寝室へ戻り、替えのシーツや着替える為の衣服を探して置き、タオルのような柔らかな布を何枚か用意しておく。きつとお風呂も入りたいだろうなと思っ。でも湯浴み出来るほどお湯を用意するのは一人では難しい。精霊の力を借りれば簡単なんだけど、人前では……って、王の目の前ではなおさらいけないだろう！ 私が精霊姫ってばれちゃうし！

私は『王が元気になって、書状渡して、帰る』んだよ！ もう、アッサリ帰ってやる！ 日本に戻ればファンタジーの世界から離れられるから。離れたらきつと胸の痛みも和らぐだろうし。

当代の精霊姫にはなっただけど、早々に次の人を飛沫達に見つけて

もらって、引き継いでもらおう！

(ひめさま？ あの、おうさまおきたよー)

疾風の声にドキリとする。 たった今思っていた内容に罪悪感が心を掠めた。折角懐いてくれたのに、まるで見捨てるかのような痛みを覚える。

(あ、ありがとう疾風。今行くね)

うん、これは後でちゃんと考えよう。

ベッドの傍に行くと、マルは天井をジッと見つめていた。

「マルちゃん？ 起きましたか？」

そつと声をかけたら、ゆっくり首を巡らせて私を見た。

その薄青の瞳は私の姿を認めると、ほのかに揺らぐ。

泣きそうなの…… そつという感情が滲んだように見えた。

「サーラ、だったか？ そつか…… 夢じゃなかったんだな」

まるで幼子の迷子の様な心細さの心情が、マルの手に現れる。その手はゆっくり伸ばされ、私の服をギュッと掴んでいた。どこにも行って欲しくない、私がここに存在している事を確かめているかのように。

私はわざと明るい声でマルに聞いてみた。

「夢じゃないですよ！ 私はちゃんとここに居ります。探さなくても大丈夫ですよ？」

につこり笑って顔を覗き込むと、マルは微かに目を見張り、「べ、別にそんな探してなんていないからなっ！」と顔を背けてしまった。

「それより、なんだかい匂いが……」

「あ、そうだった！ マルちゃん、食事にしましょう。ただし、暫くマトモに食べていなかったみたいなのでいきなり固形食は厳しいでしょうから、スープをお召し上がり下さい」

「マル…… ああそうだった。いや、なんでもない。好きに呼べ」

右手で両目を覆い、私が『マルちゃん』と呼ぶのを抗議しようとしたマルは、しかし何の理由か分からないけど了解してくれたらしい。

ほんとに、なんでだろう？

マルはスープと聞いて、ムツと声を荒げた。

「俺はちゃんとした食事が食べたい！ スープなんていらない！」

「駄目ですよ。急に食べたならお腹がビックリしてしまいますからね？ 徐々に慣らしていかないといけませんよ」

水分は先程の特製ドリンクで取れている。しかし固形物は胃がまだ消化に慣れなくて吐き出す恐れもあるから、ちよつとずつ様子をしながら食事の段階を上げていかないとね。

食べ盛りの十六歳では辛いけど、ほんの少しの我慢だ。若いからあつという間に回復するだろう。

依然ブツブツ言うマルをそのままに、暖炉にかけてあつた鍋からスープを掬って器によそう。このスープは私が厨房で教えたチキンスープ。あの後すぐに料理人達が作ったらしく早速それを戴いてきたのだ。もちろん毒入りの可能性があるため精霊に頼んで確認済みだ。

鶏と野菜の味がしつかりと出ているスープ。微かにハーブの香りがふわんと立ち、うーん美味しそう！

ちゃんと味付けをする前の物なのでそんなには胃を刺激しないと
思うけど、どうかな？

マルが上体を起こし、背もたれ代わりに枕を背中に置いてあげる。そして器を手渡して「どうぞ召し上がれ」と勧めた。

暫くジツとマルは眺めていたけど、匂いに負けたのかそつと口をつけて啜った。

「…… 美味しい」

「あ、慌てないでいいですよ！ ゆっくり、ゆっくり飲んでくださいね？」

さして多くもない量のスープをじっくり味わう様に飲んだマルは、最後の一口はぐいっと煽りそのまま私に「おかわり！」と器を差し出した。

「お前、どうやってこんな美味いもん作ったんだ？！ 初めてだぞ、この俺がお代わりなどというのは」

「あ、あはは…… それはありがとございます。では、あと一杯だけですよ？」

もう一杯よそってマルに手渡したら、大事そうにチビチビ飲み始めた。

うわ……可愛い！あと一杯って言ったからだよね。ちよつとずつ飲むの。

美味しそうに飲み干したマルに、私はよく出来ましたとばかりににっこり笑って器を受け取った。

「じゃ、体拭かせてもらいますね」

飲んでいる間に、私は桶にちよつと熱めのお湯を張って用意をしていた。

「拭く?! いや、俺は別に……」

「湯浴みは今用意できないので、これで我慢して下さい。拭くと気持ちがいいですよ」

脱いで！と言ったら軽く引かれたけど……いや流石に下着はそのままで！

王族ということ、よく侍女の手を借りないと着替えも出来ない
 ーなんて物語を見聞きしたけど、マルはちゃんと自分の事は自分で
 出来ていた。

お湯にはカモミールのハーブを入れてある。布を湯に浸け絞るた
 びにそれがほのかに香り立ち、ほっと息をついた。

届かない背中だけ私が手伝い、あとは自分で拭いてもらう。私は
 拭き終わるまで後ろを向く事にした。マルが拭いている間に、どう
 してそんなに自分の世話が出来るのか？ と、それを聞くとポツリ
 と寂しそうに零した。

「俺はな、最初から飾りなんだよ。形だけでもそこに王として
 居ればいい」からな。食事は一応用意されるし、服は表に出た時、
 王らしい格好をしなきゃいけない為にそれも用意される。ただ……
 誰も俺の周りにはいないんだ」

「……」

自嘲しながら体を拭いている姿は、心が苦しくなった。マルは己
 の立場という物を充分理解している。本当の意味でのお飾りな王と
 して存在させられているのに気付いている。それはつまり玉座が安
 定していない…… だから精霊達が暴走する、というのに繋がるん
 だ。

「お前が来て、飲み物飲んでまた寝て。目を覚ましたら、やつぱ
 りあれは夢だったのかと思ったら傍にいて……。嬉し
 かったんだ。誰か傍にいてくれることが」

「マルちゃん……」

「最近は何故か外に出る気がおきなくて…… 体の調子が一気に悪くなったんだ。全然食べられないし、寝台から起き上がれなくても、何故か今日は起きてからやけに調子がいい……」

変だなあ？ と呟くマルに、私はドキリとした。ひよっとしたら、『精霊姫』である事が、マルの調子を調整してるんじゃないのかと。

「やっと起きられたし。 久し振りに、兄上のお顔を見たいな。遠目でもいいから」

兄上……？ ポツリと小声で呟かれたその声を耳が広い、私は思わず反応した。

「へ？ ジエネ？！ …… きゃっ！」

兄上イコールジエネシズの図式に繋がりが、どういう事かと振り向いたらほぼ素っ裸のマルが見えてしまった。いや、マルのマルは見えてなかったから良かったけどね！

「お前…… 兄上を知っているのか?!」

衣擦れの音からこちらに来そうな雰囲気を感じて、慌てて「ダメダメ！ 服着て！」と制し、止まらせた。

「マルちゃんこそ…… 兄上つて。ジエネシズよね？」

「ああそつだ。腹違いだが俺にとって大事な兄上…… 賓客が来

た時の護衛で謁見室の片隅に配置される時か、たまに開催される俺名義の夜会で、庭の警戒に当たる姿を見かけるぐらいだが、それを見るだけでも安心するんだ」

ようやく新しい衣服を身に纏い、落ち着いた様子でベッドの近くに置いてある小ぶりのテーブルに向かい、同じ装飾のセット物だるう椅子に腰を下ろした。

「お前ちよつとこつち来い。ちゃんと話が聞きたい。お前の事情もな」

あら、ばれてましたか。

マルはただ単に専属侍女として来たとは露ほども信じていなかったようだ。しかし何故か信用されているような気配はする。

なににせよ、ちゃんと腰をすえて王様と話が出るのだ。「じゃあちよつと待つて下さい。準備しますから」と伝え、私はお茶の準備ともう一つを用意した。

茶器などは、私の部屋から発掘済だ。暖炉から沸かしておいたお湯をポットにいれ、暫く浸出させる。中身はエキナセアとセージ、ペパーミントとレモンバーベナ。免疫力高めたほうがいいと判断してだ。そして……

「はいマルちゃん。ここに足、乗っけて下さい」

「足?!」

「一本ずつですよー。これからマッサージしますね。ほら、左足から」

リゾートホテル勤務時代の同僚から簡単な足裏マッサージを教わ

つていたので、是非ともマルにもしてあげたい。そう思い、元々持っていたアロマオイルをオリブオイルみたいな油に少し垂らしてマッサージオイルとした。ちなみにホホバオイルを使う。私はベタベタするのが苦手なのでこのオイルを希釈した物を持ち歩き、乾燥した所にサツと塗るのだ。私はマルの向かいの椅子に座り膝にふわふわの布を置いて、早くここに！と言わんばかりにポンポン叩いて催促した。

一体何をされるのかとビクビクしながらもマルは左足を私の両膝の上に置く。

「さ、血液の流れを良くして行きましょね」

「俺、こんなの初めてだ」

「痛くしませんから」

言うてから、ん？　なんか会話おかしくないか？　と思ったけど、流すことにした。

両手にオイルをつけて、脛を両手で膝に向かってなで上げ、返す手で足を挟んだ形にして踝まで戻す。何度か繰り返し、今度は足指をクルクルと一本ずつ回し。

「それで……　何をお聞きになりたいですか？　私も聞きたいです。色々な事」

ゆっくりとオイルにより滑りやすくなった指で、教えられた通りにマッサージしながら、マルに促した。

一体何をされるのかと体全体で緊張していたマルは、しかし気持ちがいいのか次第に力を抜いてリラックスしていった。

「お前、誰かに頼まれて俺の所に来たのか？」

「そうです。もうね、こうなったら正直に言いますけど、主に三人から」

「三人?!」

「はい。クランベルグ団長と、ジェネと…… ラスメリナの王から」

「うえ!…… いやまで、までまで。一人ずつ確かめよう。まず、団長だな。団長はこの国の救世主でもあるから宰相といえどもあまり大きく出られない人物だ。俺の事をいつも気にかけてくださる。団長は分かる。しかし…… 兄上が?」

「マルちゃんのお兄さん、ジェネシズもとても心配してました」

私はゆっくり頷く。なんだ、マルはお兄ちゃん大好きっ子だね？
マルはじわりと滲んだ涙を隠すように俯いた。「兄上……」と
咳く声が聞こえてきたけど、それには触れずにおく。
左足を終え、右足に取り掛かる。再び脛から始めながら、ここに
来た当初の目的について話す。

「あとラスメリナからなんですけど……」

「ちよ、待て! 大体お前なんでラスメリナ王…… 竜帝だろ?
! どうして俺の事を……」

と
バツと顔を上げて軽く興奮した様子で私をジッと見つめた。する
と 何かに気付いたようで、呆けた表情になった。

「あ、あの？ マルちゃん？」

「お前…… その黒い髪と黒い瞳。竜帝カケル様とよく似ている……？」

「あはは。翔の双子の姉です。双子の割にあまり似てませんが」

笑う私に、パクパクと口を動かすだけで何も声を出さないマル。いや、出てるけど「え…… う…… あ……」と、声が詰まる？ そんな感じだ。

ゴクリ、とマルはテーブルの上でやや冷めたハーブティを飲んで大きく息をついた。

「カケル様の…… 姉？、といったか。あの竜帝の…… 姉君」

「うわわ、目がなんか熱持ってるよ?! 怖いよ！」

「あ、あの？ 翔をよくご存知で？」

「知ってるも何も！ あのお方は俺が九歳の頃、兄上が騎士になれるかどうかでクソ大臣と揉めていた時に救って下さったお方だ！ その時は覆面？ の様な物をつけていたが、後で俺の所に秘密だぞと来て下さって……」

マルは立ち上がって衣裳部屋に行き、なにやら大事そうにとある物体を抱えてきた。

「これが、その時の覆面。カケル様が俺に記念として下さった」

そつと私に見せてくれたソレはお祭りなどで並ぶお面で、某仮面をつけた特撮ヒーロー。

翔…… ものっすごい怪しいよっ?!

「マルちゃん、本題なんですけどね？ 翔から書状を預かってきました。国境付近が不穏な動きがあるので、なんとかして欲しいという内容だと思えますけど」

私は手を拭き居住まいを直してマルに言った。そつ、もともとはこのために来たのだ。渡して帰る。ただそれだけのシンプルな事。しかしマルは私が伝える内容に寂しそうな目をして首を振る。

「駄目だ。」

俺は受け取れない」

「受け取れない？ どうして！」

やっと渡せるこの機会。なのにマルは受け取れないという。
目の前のゴールが霞んでしまった。

「言つたろ？ 俺は飾りだと。何の権限もない俺がラスメリナ王から治安維持の書状を寄越されても、どうしようもないんだよ」

マルの目は長年の虚像としての自分のあり方に、疲れた色を滲ませていた。これからもなんの希望も感じられない未来に、ただただ浸っているようだ。

そんな姿に私はわけもなくイラっとした。
抑えられない気持ちだが、言葉となって洩れ出る。

「…… ねえ？ マルちゃんって今まで流されてただけなの？
何か自分で主張した事、ある？」

声音の変わった私に少し訝しみながらも答える。

「主張？…… あるぞ。兄上が騎士に上がる時に揉めたと言つた
ろ？ その時だな。俺は兄上が近くに存在してくれろというだけで
この上なく嬉しかったから、反対勢力…… まあそれが大多数だっ
たがなんとか認めさせようと努力した。結局事を収めたのはカケル
様だったがな。大体俺が何言つてもどうせ聞いてもらえ
ないし、あいつら欲しいのは血筋だけだろ。俺はとにかく生きてさ
えいれば価値があるようだから、別段困ることもない」

「なに悟っちゃってんのよ?! 大体ね、マルちゃん諦めすぎ。まだ十六でしょ? これからずーっとこのままでいいの? 血筋とかいけどその為だけに存在するのを黙って受け入れちゃうの?」

「仕方ないだろ。種馬にしかならないが、王は王だ」

「ばっ……! いやいいわ。でも王であることは自覚あるのよね?」

「生まれた瞬間から次代王と決められた俺は最低限の教育はされているからな。まあそれも諸外国相手の謁見でへましない為だが」

自嘲気味に笑うマルはそれでも私の剣幕に押されたのか、手に持っていた仮面をテーブルに置く椅子に座りなおした。

私はずずすと椅子を寄せて、膝詰めで話を続ける。

「この機会だから言わせてもらうけど。王の自覚があるとマルちゃんはやんは言ったよね? ならばそれ相応の努力をしなさいよ」

「だからっ!」

「内外に認められてるんだよ? いくら傀儡だろうがなんだだろうが、諸外国にも国民にもマルちゃんが王なんだよ。いい事も悪い事もマルちゃんが責任あることなんだよ。王という力は強大だからハイリスク・ハイリターンなのは仕方ないけど、今手にしている立場、大きく出てもバチは当たらないよっ!」

…… マルちゃんには、手を差し伸べてくれる人がちゃんというの。どうせ諦めるんだったら、やることやってからにしなさい!」

今なら分かる…… 私の傍には四人の精霊達が付いている。私の

気持ちに同調し、とても大きな緊張感フレッシンジャーをマルに与えている。これでは確かにサーラも怯えてしまうだろう。ごめんねサーラ。

一気に言いたい事をぶつけ、マルの膝をパーーンと気合一発叩いた。

口をポカンと開けて私を見ていたマルは、その一撃でハッと我に返ったのか私の目をじっと見て唇をきゅっと結ぶ。

「マルちゃん。私も、応援しますから」

マルの手をギュツと両手で握りしつかりと視線を合わせると、スツと目線を逸らされた。心なしか赤くなってるような？

「いつまで居てくれるんだ？ お前は」

暫くの沈黙の後、少し躊躇いながらも呟くその声に、「うーんとちよつと迷いながらも答える。

「えーつと…… マルちゃんつてどこまで翔のこと知ってます？」

「カケル様の事か。あのお方は異世界より参られて、時空を旅する事が趣味だと言っておられたな」

「じくうつ……！ アイツそんな事一言も！ と、とにかく、異世界つて事はご存知なのですね？ 今回私はその異世界から弟の翔に召喚されたんですよ。レーン国王に書状を渡す事…… これが翔が私に託してきた事です」

心の中の『翔に再会したらアレするリスト』にもう一文足して、マルに今回の旅の目的を伝えた。本当は召喚するときの契約事項と

して『レーン国にて国王謁見が成功を収めること』、確かこんなような内容だったかな？ それが帰る為の条件だったけどこれは叶った。ただ、これに関しては翔と私だけしか知らない契約条項。体裁を整える為でもある書状を渡さないと、ラスメリナとレーンの関係は改善しないのだ。

マルは顎に指を当て、何かを考えるような顔をする。

うーん、こう見るとやっぱりいい男だな。十六歳という年齢は、男としてまだ未成熟な部分があるけど充分目の保養になる。頬の微妙なやつれ具合が堪らなく庇護欲を刺激するね！

さらりと頬に掛かる金の髪。肩に掛からないまでも少し伸びすぎた感のあるその長さもまた絵になるんだな！

「では、俺が……俺がしっかりと家臣を掌握するまでというのは無理か？」

「ああ、そんなに長くは無理です。私もあちらの世界で仕事ありますし」

「き、キツパリ言うんだなお前」

「そうですね……期限決めましょう。それまでは居ますから、その時に書状受け取って下さいね？」

「分かった」

マルの体力回復するまでならいいかな？ 団長とジェネに要相談だ。私はとにかく早く帰るといふ目標がある。ああでも……。

「ねえマルちゃん。どうしてそんなに私を信用してくれるんです

か？ 翔の姉とはいっても、別人なんですよ？」

振り出しに戻してみた。そう、まずここから聞かなきゃ。

するとマルは何故か笑顔を見せた。笑顔なのに泣きそうに見える、笑顔。

「それはな…… あ」

「あ？」

突然マルは一点を見つめ、指し示した。

何の事かとキョトンとする私に、マルはこういった。

「肩にクモが乗ってるぞ」

9 (後書き)

私の作品一覧の方で イラスト展示室 があります。

そこで頂き物のイラストや自作のもち口つと飾ってますので
よろしかったら覗いて下さい

そして、イラストはいつでも受付中〜(うふふ)

Side ジェネシス

「あら…… お邪魔だったかしら？」

「イ、イル・メル・ジーン！！ 隊長を止めてください！！」

「若あ！ 頼みますから最後まで話をっ！」

優雅に執務室の扉から入って来たイル・メル・ジーンは、深紅の羽が異常に付いた扇子を口元に当て呟いたが、その目は愉快そうに光っていたから一つも自身が邪魔だと思っていないことは明白だ。

そんな様子を見てようやく我に返った俺は、ハルの胸倉を掴んでいた手を緩めて解放する。

後ろから羽交い絞めにしていた口ウも、俺の力が抜けたのが分かったのかゆっくり手を離し、ハルは少し咳き込んだ。イル・メル・ジーンが入ってきたのはこれ以上ない絶妙の頃合いだった。

「大体なんの騒ぎよ。私がこんなに忙しくしているっていうのに楽しいことしててー！」

イル・メル・ジーンは、獣道を無視して直線で机まで歩いてくる。何やら機嫌が悪かったようだが本人好みの場面に遭遇したことにより、すこし持ち直したようだ。

執務機の傍にあった椅子に書類や本が積み重なっていたが、それをなんの頓着もせず片手で床に払い、どかりと腰を下ろす。

「ジェネ？ その怖い気配も仕舞いなさい。 で？ 何

があつたわけ？」

扇子を、軽く仰ぎながら俺ではなくハルに問う。

ようやく咳がとまり、大きく深呼吸しながらハルが事の顛末を語りだした。

「ウンノから定時前にルネから手紙を預かったと連絡があり、それを読む為と……私に頼み事があるというのでウンノがあてがわれた私室に行つたのです」

「ふふっ、ハルドラーダに頼み事ねえ」

にたりと笑いながらイル・メル・ジーンはとても愉快そうに続きを促す。

ハルはこちらに視線を寄越しながら、緊張した面持ちで俺が激昂した言葉を再び口にした。

「ウンノはこう言つたのです。『私を、抱いてもらえませんか？』」

若！ 剣から手を離してくださいっ！

だから最後まで話を！」

言われて俺はハッと剣の柄から手を外した。無意識とは怖いものだ。

「ジエネ、いちいち反応しないの！　ロウ、あなたジエネの剣預かりなさい。それで？　望むまま抱いてあげたの？」

「とんでもありません！　幾ら私でも分別ありますよ。勿論手出しなどしておりません、ち、誓つて！　話すうちにウンノも……頭が冷えたのでしよう。今言つた事を忘れてくれ、と言いました。」

理由までは分かりませんが『今必要だと思ったから』頼んだと」

「今、必要だから……?」

ウンノが急にそんな事を思いつく性格ではない。そもそも今朝、あの庭で交わした口付けでさえぎこちなく、抱き寄せた体からは全てを委ねてられていない芯を感じた。

そこを飛び越えて願う内容ではない。

しかも、俺ではなくハルに！

再燃しかけた苛立ちを分析する余裕は出来た。これは嫉妬心だ。ウンノを愛するという心地良さと他の者に渡したくないという独占欲が心に黒い渦を巻く。

「私が言うべき事ではないのは重々承知していますが…… ウンノは誤解故に私に頼んだのだと思います」

「誤解? 何を誤解したの?」

ハルは言うべきか迷ったように幾許か逡巡いくほくした後に、結局吐き出した。それをイル・メル・ジーンが眉を顰める。

その声に、俺とハルとロウがじっとイル・メル・ジーンを見た。

「……」

「……」

「……」

「私？ 何、私何かした？」

「お前のその女装癖が元凶。 そういうことか、ハル？」

「は、はい。 ウンノは…… イル・メル・ジーンが女と思い込んでおり、それによる誤解があるようです。それを解けば、その理由も分かると思います。若…… 頼みますから、ウンノの話を聞いてあげてください」

無論そのつもりだ。

この女装癖が原因ならばいつそ剥いて証明してやるうか。

イル・メル・ジーンはそんな俺を見て急に焦ったように立ち上がった。

「ちょっと！ 怖い目で私を見ないでよ！ さ、じゃあ行くわよ」

「行くとは？」

突然イル・メル・ジーンが言い出すのに疑問を投げる。すると腰に手を当ててぱちりと閉じた扇子を俺に向けた。

「決まってるでしょ！ 王様の所よつ。何のために私が今忙しくしてるのか分かる？ 朝、急に天候が変わったからよ。このクリムリクスで日光が当たることなんて先王以来無いことよ？ ほぼ十年振りよね？ 原因究明する為に奔走してるわ、部下が」

「…… かわいそうに」

宮廷魔術師であるイル・メル・ジーンの部下の扱いを知っているロウは、同情してつい洩らす。

そんな言葉は聞こえているのにあえて無視して続けた。

「その後急に王の私室の障壁は綺麗さっぱり消えてるし。結局ね、玉座の主であるディエマルティウス王を確認しないことには始まらないのよ。玉座の安定がこのレーンの地を導く精霊達の安定に繋がるから。王に何かあったのか、それとも……」

俺の目をイル・メル・ジーンの薄氷の様な瞳が探る様に見据えながら、はつきりと宣言するように口にした。

「それとも。精霊姫が現れたか、ね」

ウンノを連れ立ち身体検査を受けた場所。しかし今は誰もいなかった。再びまたあの下らない揶揄を聞かされると構えていたが、どうやらイル・メル・ジーンが「面倒」と魔法で眠らせたらしい。

私室前の見張りの兵二人は、今の時間5番隊だ。職務に忠実に、俺達に身体検査を求めてきたがそれもイル・メル・ジーンの一喝で納まった。言った内容はとも口に出せないが、この騎士達は向こう3年は悪夢にうなされるだろう。

「入るわよ」

扉を叩きもせずまるで自分の自室かの様に入ると、広い応接間の一番端の扉から僅かに隙間が開き、こちらの様子を窺う人影が見えた。しかしこれもイル・メル・ジーンが「出てくるんじゃないわよ

？」と小胆な者なら気絶するような視線で押さえつけた。多分あの部屋が侍女用の部屋だろう。

寝室に続く扉に手をかけたところで、悲鳴が聞こえた。

この声は、ウンノ！

急ぎ扉を蹴り飛ばす勢いで中に入ると、そこには……。

悲鳴を上げているのはまさしくウンノ。そのウンノは弟のディエマルティウスに抱きついていた。

サツと周囲を見渡したが特に危険な様子は感じられず、何があったのか尋ねる必要がある。二人を確認すると、どうやら弟は椅子に座ったままでウンノから抱きついたようだ……が。

位置がいかんだろう！ 胸が顔に当たっているじゃないか！

弟の顔はウンノの胸に埋もれ、息が出来ないように手で助けを求めるようにせわしなく動いていた。

知るかつ！

「あら。またいい場面に出会っちゃったわね？」

イル・メル・ジーンがサツサと近くの椅子に座り、俺は……。すぐにでも引き剥がしたい衝動を無理矢理に抑え、ウンノの耳に口を寄せそつと囁いた。

「ウンノ、落ち着け。何があった」

すると、ぎゅっと目を瞑ったままのウンノは潤む瞳でこう言った。

「ク…… クモが！ 肩……」

「ん？ ああ虫か。…… もう大丈夫だ」

そう言って安心させ、俺はヒョイとウンノの両脇を持ち上げて弟から離し、足をそつと下ろして立たせた後、ウンノの肩を引き寄せた。

弟を見ると、どうやら半分意識が飛んでいるようだ。そのくせともいい笑顔なのが腹立たしい。

大事な弟だが、俺には譲れないものがある。

「あれ、ジエネ？ どうしてここへ？ うわっ、お姉さまもっ！」

俺に肩を抱かれたままのウンノは、むしろ安心したかのように体重を俺に預けながら驚いていた。俺はその重みが堪らなく愛おしい。ついウンノの頭頂部にある旋毛つむじにそつと分からぬよう口付けてしまった。

「あー、見てらんないわっ！ ジエネ、この子は寝かせておくからあなた達はウンノちゃんの部屋に行つて話してきなさいっ！」

イル・メル・ジーンが「何この変貌振り」と悪態を吐いてはいたが、この部屋で弟の傍にいてくれるというから遠慮なく行かせて貰おう。

ウンノは何のことか分からずキョトンとしていたが、とにかく部屋に行くというこつで

「じゃあ、夕食の支度してきますね」

と、目尻に残る涙を拭きながら、この部屋に残っていた洗物などを持ち、後にした。

そう…… まずは誤解を解かなければ。そして、精霊の事も。

そして 。

「すみません、ちょっとその辺座って下さいね」

そういうとウンノは火を熾して湯を沸かしながら食器を洗い出し、俺は椅子などないこの部屋で唯一座れるベッドに腰掛けた。

この部屋は……俺が三歳位の時か？ 乳母に用があるという乳兄弟のハルと一緒に訪れた以来だ。王とその家族の為に湯を沸かしたり食事を温め直したりする炊事場だった。

そこにベッドが無理矢理に置かれている。違和感ある光景だ。しかし女性に扮した男とルネに伝えていた為にこの様な場所になったのだろう。むしろ、個室となり更に炊事が出来るのは良かったとも言える。

洗い物が終わったウンノは、籠を持って「ナイシヨですけど食材調達ですっ」と言って窓からヒョイと中庭に下りた。驚いたが、すぐに後を追う。

この庭は王族専用の中庭である。城の最上階にあるが何代か前の王妃が作らせたらしく、それは見事な庭だっただろう。今は見る影もなく荒れているが。

夕刻となり、薄暗い中ウンノはズンズン奥に向かう。俺は夜目が利くが、ウンノは恐らく精霊に注意されながら向かっているのだろう。

目的の場所に辿り着いたのか、立ち止まったウンノは「うわ……」と言葉を失った。

そこには俺にはよく分からないが、野菜らしき物が沢山…… 繁っていた。

「季節感まるで無視なのね……」

なんでも初夏であるこの時期には生らないだろう植物も混在していたらしい。精霊に頼んで食材を作ってもらったようだが頑張りすぎだ、と。

収穫した物を籠に入れ、再び部屋に戻る。

髪を一つに括ったウンノは調理を始めた。包丁が食材を刻む音と、時折ふわりと美味そうな香りが漂い、それを行うウンノを見るだけで、何故か満ち足りた気分になった。

このまま時が止まってもいいと思えるほどに。

「それで…… ジエネ？ 何か話があるとか……」

背中をこちらに向けながら、ウンノが切り出した。

「早く終えて、お姉さまの所に行ってあげて下さいよ。私なら大丈夫ですから」

固い口調で話すウンノの表情は見えない。

「どうして俺があいつの所へ行かなければいけないんだ？」

「あ…… えと、 やっぱりジエネの大事な人だから、傍に付いててあげないと。ね？」

僅かにウンノの頭が下がり搾り出すような声に、俺は「やはり」と思った。

立ち上がり、ウンノの後ろに立つ。

「どうやらウンノは誤解しているようだ」

俺はウンノの両肩に手を置き、そつと息を吐き出すようにその言葉に乗せた。

「誤解？」

「ああ、誤解だ。俺とイル・メル・ジーンはなんでもない。そもそもあいつは　　男だ」

「えっ?!」

一瞬僅かに飛び上がったウンノは、くるりと俺の方に向きを変えて驚いた。

「お姉さまがお兄さまっ?!　お姉さまなの?!」

大分混乱しているようだ。

そこで、ウンノの両肩に手を置いたまま、俺は女装癖について懇々と説明をした。あいつは最初はちゃんと男のなりをしていた、カケルと会った時はすでに女装をしていた、実はハルと同じ年である、そして　　俺には男を好む趣味はない、と。

徐々に俺の言葉が頭に沁み込んでいったのか、大きく見開いたその目は段々と理解を示す色を見せたが、別の驚きも含まれているようだった。

「ハルさんと……　同じ年……　その上男の人なのにあんなにも

綺麗で……」

むしろ落ち込んでいるような……？ とにかく、理解はしたよう
だ。

「そうですね……。そういえば昔、翔が『女装趣味のある友達』
の為に料理を作ってくれと頼んできたことがありましたが、そうか
…… それってイル・メル・ジーンの事だったんですね」

ウンノが思い出した出来事を話すのを聞いて、俺は驚いた。
カケルはあの時何も言わなかった。何故だ……。姉の自慢話は散
々聞かされたが、そんな事があつたなど俺は知らない。

「分かりました。イル・メル・ジーンは男の人、ですね？ あっ、
お鍋が噴いてる！」

慌てて竈に掛けられた鍋の蓋を開け、ウンノは「他に何かお話、
ありますか？」と手を動かしながら聞いた。

魚になにやら粉を振りかけたかと思えば鍋をかき混ぜ小皿にひと
垂らしよそい、味見をして足りなかったらしい何かを振り入れた。

手際の良い動きを見つめながら、もう一つの懸念をウンノに伝え
る。

「イル・メル・ジーンが、『精霊姫』の存在を疑いだした」

一瞬手を止めたウンノは、しかしそのまま作業を続けた。

「疑われても…… 私は表に出る気もありませんし、それに……」

「それに？」

続きを促す俺にウンノは手にしていた調理道具を置いて、囁くような小声で。

「……………」
「帰りますから、私」

どくり、と心臓が大きく跳ねた。

「帰るんです、元の世界へ。王に会う事は叶いましたし、後は書状を渡したら条件揃います。……………」
精霊姫としてはここに残れないから、公表は出来ません。
あつ、でも帰る前にお世話になった方へ料理を作りた……………」

「ウンノ！」

最後まで言わせられなかった。

ウンノを後ろから手を回し、きつく抱き寄せた。

「ジエネ！ く、苦しいっ！」

その声に僅かに力を抜いたものの、俺は恐怖にも似た感情が一瞬過ぎり、とてもではないが手を離す気にはなれなかった。頭よの天辺に頬を寄せ、ずっと、ずっと、抑えていた感情がゆるりと溢れ出す。

「帰る、なんて言わないで欲しい」

「……………」

「帰るだなんて、言うな。」

「ずっと、居て欲しい」

「え、でも……」

そつと顔を動かし、俺を見上げるウンノ。

視線が絡み合う。

涙は出ていないのに泣きそうに見えるその瞳。

「ずっと、俺の傍に」

「……」

「好きだ」

大きく見開かれたウンノの瞳を見ながら、俺は身を屈めて。

そつと唇を、重ねた。

その唇を味わうのは二度目だが、恐ろしい程の幸福感が体の全てを突き抜け、柔らかい感触が唇を通して痺れる甘さを伝える。

二度、軽く啄ばむように重ね、もつと深くもつと味わいたいという欲求に逆らえず、そろりと舌先を伸ばした。

「んっ………！」

僅かに身動きをしたウンノは、それでも拒絶はしなかった。

腕に回した俺の腕を両手で掴み、その緊張を込めた指先がまたこの上なく愛おしい。腕とは反対の手でほっそりとした顎を捉え、支える。

慌てたように顔を伏せ、俺の胸に額を寄せた。

その行為で俺をますます煽らせているとは思っていないだろう。
なんて罪深い！

「…… ウンノは。ウンノは俺の事をどう思っている？」

返事がとても恐ろしい。幾多の戦場に向きあってきたが、今この時の方が数倍緊張した。

「私……」

1 闇と私と

「好きだ」

言われた瞬間耳を疑った。

ジエネが、私を、好き？

深い海底の様な色をした瞳と視線が絡み合う。それがゆっくりと近づいてきて、逃げたい気持ちに反してまるで自ら望むようにそっと私は目を伏せた。

私の顎を、ジエネの大きくて無骨な指が支える。

唇の、表皮一枚を軽く触れるかのようなキス。そしてもう一度、今度は確かにここにあると感じられる質感のあるキス。

少し固めで、少し冷たく、かさついた唇の感触がした。

「んっ……！」

急に熱を持った何かに触れ、驚いてつい声が洩れた。それはゆっくりと私の下唇を湿らせていく。

なぞるような感触に混乱しながらも、しかしそれ以上されると自分がどうなってしまうのか分からず、怖くなって伸ばされる舌先を阻んだ。

ジエネはそれ以上無理強いする事もなく、優しくもう一度重ね、ちゅ、と音を立てて唇を軽く吸われた。

あまりに気持ちが良いすぎて足に力が入らなくなり、私の胸上に回

「あ…… やっ！ わかり、分かりましたっ！」

その笑顔見せられたら、私どうにかなっちゃうよっ！

恥ずかしくて顔を伏せ、コツンとジエネの固い胸板におでこを当てた。

「…… ウンノは。ウンノは俺の事をどう思っている？」

上から降るその声は、微かに掠れているのに私は気付いた。

ああ…… ジエネも緊張しているんだ、怖いんだ。

私と同じね？ とても、怖い。

今すぐ「私も好き」と伝えたい。だけど異世界召喚への契約は、必ず実行されなければならないもの。それが世界の理でもある。

翔のように、行ったり来たりが出来るという保障も全く無く、ただ想いが通じ合って、それから……？ 現実的な距離じゃない恋愛は、幸せな未来像が全く見えてこない。

私はともかく、ジエネには幸せになってもらいたいのだ。

だから、気持ちを返すことが怖い。通じ合えないくらいなら、忘れてもらった方がいい。

「私……」

一言、ぼそりと洩らしたけどちっとも言葉が続かなかった。喉の奥に何かがぎゅうと詰まったように声が出ない。くつと指に力を込めて、高ぶった気持ちを落ち着かせようとしたら、不意にジエネの手が頭をポンポンと撫でた。

「いい…… 急に気持ちを押し付けられて困ってるんだろ？ だ
からいい。俺は俺の気持ちを伝えられただけで満足している。
すまなかつたな」

「ち、違っ……」

言ったものの何が違うのかうまく言えず、ただ優しく撫でられる
その掌の感触に心が痛んだ。

その時。

ぞわり、と背中が嫌な気配で粟立った。

(姫君！ 闇…… 闇のが再び！)

イル・メル・ジーンがいる為に一旦宝珠へと戻していたが、心声
で飛沫が警告をしてきた。

「ジエネ！ 闇の精霊がまた来たっ……」

「ああ、それにいくつかの殺気も。いくぞ！」

「殺気?!」

ジエネはそれまでの甘さを綺麗に切り替え、駆け出す。私も続き
ながら聞いた。

「 四、五…… 六人か。相当の手練だ」

抜刀しながら気配を探り、足音も立てずに走るその姿はまさに肉食獣であり美しい。私といえばバタバタ足音を立ててしまうので、疾風に頼んで音を消してもらった。

王の私室へと向かう私達。やはり狙いは王か？

マルちゃんっ！

私室前の見張りであるあの甲冑ズは…… 崩れるように倒れていった。

「大丈夫。眠らされているだけだ」

最悪の事態を想像した私に、小声でジエネが囁いた。ホツとしつつ扉の内部の様子を窺う。

（疾風、様子を教えて？）

（ひろーいへやに さんにん。ルネたちがいるへやに ふたり。おくのへやにひとりだよ。ねえ…… ひめさま、やみがこわいよお）

半泣きの疾風。疾風一人では闇をかわせない。朝行った障壁解除も、4人の精霊が揃ってこそ出来た事。

奥の部屋にいる一人…… この濃密な闇の気配を作る主。

「ジエネ？ この扉の脇に一人、侍女の部屋に二人、寝室の扉の前に二人いるわ。それから寝室の中に…… おそらく闇を操る精霊使いが入ってる」

配置を小声で伝えると、了承を示すように軽く頷く気配がした。

そろりと扉の脇に背をつける。

私は押しつぶされそうな緊張感に必死に耐える。こんな命のやり取りなんて物語の中だけ。まさか自分がその場に立つなんて思ってもいなかったから、怖くて仕方が無い。

でも、ジエネが傍にいる。そして私はそれを助けるだけの力……『精霊姫』の力を持っている。ひとかけらの勇気を振り絞り、出来る限りの事をしようと自分を奮い立たせた。

『光と闇の精霊は正と負、陰と陽でもあるんです。闇は陰の気を持ち、憎しみ、死などに刻まれればおのずと居場所が知れます。光は陽の気を持ち……生命、喜び、愛情などを体験していれば具現するでしょう』

飛沫の声が蘇る。

闇の力を掌握できたらこっちのものだけど、憎しみや死なんて……
： そんなおいそれと抱く感情ではない。どうにか方法はないものか。

とにかく、マルちゃんが危ない。

イル・メル・ジーンはどうしているのだろうか……。

内部の人間はまだこちらには気付いていないようだ。

日が落ちて暗くなったので私にはあまり様子は窺えないが、ジェネは夜目が利くようだ。焔に頼んで明かりを頼もうと思ったけど相手にも丸見えになってしまうため、ここは任せた方がいいだろう。

私室入り口の扉付近の音を疾風に消させ、ジェネがゆつくりと取っ手を押す。その長身が滑り込んだかと思うと、あっという間に一人倒した。なんて素早い！

無音ではあるが気配は隠せない。寢室の扉前にいた二人が気付き、こちらに飛び掛ってきた。一人は一合と交わさずジェネの剣の前に倒れたが、その間に一人が私に向かって何かを投げつけた。

(ひめさま！)

さあつと疾風の起こす風に絡め取られて、私に辿り着くことのないかかったそれは何だろう？ 暗くてあまり分からないけど助かった。

ジェネは体を低くして一気に距離を詰め下段蹴りで足を掬い、体を崩した相手を立ち上げる勢いで下段から上段へと剣を斬り上げる。

相手は寸での所で交わり、後方回転で間合いを広げた。

すい……。

息を詰めて見ていた私はその動きに目を見張る。

素人だけどここの動きの無駄のなさはわかる。強い。ジェネも相手も相当の腕を持っている。翔がレーンで一番強いのはジェネだと言

つていたけど、それに相對するこの人物もなかなかのものだろう。そんな強い人を今ここに寄越すとは…… 時期が来た、ということか。

そろり、と私を背に隠すようにしてジエネは劍を構える。やけに見覚えのあるその形は『日本刀』？

「 アンザスが雇われたか」

ジエネは、劍先を向けながら相手を窺った。私からは薄闇にボンヤリとしか見えない輪郭だけど、雰囲気で相手がニイ、と笑ったのが分かった。

「その声、その気配、その太刀筋。お前ジエネシズだな？」

野太い声がじつとりと響く。

しかし緊迫した空気は一つも緩まず、私は息を殺したまま動けない。

「ジュノー…… ジュノヴァーン。お前まだアンザスにいたのか」

アンザス…… それって、傭兵の国にある『暗殺者集団』の名称じゃなかったっけ？ 聞き覚えのある単語を拾った私は、記憶を辿った。

お金と契約次第で敵にも味方にもなる組織。昨日の敵は今日の友…… 昨日の友は今日の仇と言い方もあるか？ 友情愛情関係なしに人の闇を暗躍する集団。戦いがある場所にアンザス有り、と小説に書かれていた。

それを誰かが雇った、ということか。

「悪いな。俺今回はこつち側なんだ。お前も来ないか？ なかなか実入りはいいぜ？」

「断る。今の俺は騎士であり立場の違いは明らか。久し振りの再会にしては残念だが…… 覚悟しろ」

「ほんつと残念だな！ お前ほどの腕はいねえから惜しい」

どうやら旧知の仲、らしい？ でも友好的な気配は一切無く、ただ事実確認をしただけの会話だった。

ひとつも戦いなど分からない私だったけど、この二人の間にある一触即発の空気は分かる。私が身動き一つしただけでも双方の攻撃が始まるだろう。それだけの緊張が、肌をピリリと刺した。

お互いがお互いだけに意識しているので、私は動かず宝珠に心声で精霊達に声をかけた。

（疾風、息吹は侍女さんを、飛沫、焰はマルちゃんを守って）

（姫さん、それじゃあ……）

（私は大丈夫。さ、早く！）

（…… 承）

す、と精霊達が向かったのを目で追い、しかし緊張感はそのままでジェネの背から動けない。

「ハルドラーダもいるんだろ？」

「……」

「チツ。久し振りに会ったつてのにつれねえな！ 見た事ねえ剣もその背に大事にするお嬢さんも、聞きてーこと山ほどあるっつーのに」

「ならば手を引け」

「お前も解るだろ？ 仕事……」

ジュノーと呼んだ相手に最後まで言わせず、ジェネは深く踏み込んで横薙ぎに払う。相手は半歩足を後ろに引いただけでかわし、次に来るジェネの攻撃を見越したように上へ跳躍した。今居た場所へ鋭角に斬り下ろしたジェネは、横に飛んでジュノーの重力を利用した重い蹴りを避けた。

私との、距離が空いた。

「ウンノー！」

ジュノーの剣が、私に降りてくる。

あ…… 足が竦^{すく}んで動けない……！

視界の端から、黒い影が私とジュノーの間に割り込んだ。

ジェネの剣がジュノーの両手持ちの剣を阻んだのだ。しかし、距離を稼ぐ為か片手で持っていたので抑えきれず、すかさずジェネは左腕をその剣に差し出して押し返した。

「くっ……」

「ジエネ！」

ジユノーは深追いせずサツと剣を引いた。前腕から噴き出した血をそのままに私を背に隠し、ジエネは再び相対し構える。

「まだ甘いなジエネシズよ。…… フン、そろそろ頃合か。今回は挨拶代わりだ、またな！」

チラリと視線を動かし、パイと口笛を吹いたかと思うとそのまま窓を割って外へと消えた。侍女部屋からも同様の音が聞こえたので、同様に撤収したのだろう。

「ジエネ…… 血が！」

一気に緊張が解かれ、崩れ落ちそうになる膝を叱咤してジエネに駆け寄る。

「大丈夫だ。それより王を……」

「待つて！」

私はスカートの裾を一気に引き裂いてジエネの上腕に巻き、ギユウウツと締め上げて止血をした。そして傷口にも布を当てて圧迫する。

「出来るだけ…… 胸より高い位置につ」

それだけすると、私とジエネは寝室へと向かった。

「風の子、地の子！ 私とジエネを守って！」

侍女部屋から二人を呼び戻し、物音一つしない寝室の扉をゆっくりと開けるとそこには……

「ダメよ、近づかないでね」

イル・メル・ジーンがこちらを背にして、誰かと向き合っている。

「王は？」

「そこよ。丁度良く寝てたから、そのまま固めといたわ」

ジエネが問うと、こちらを振り向きもせず答えた。王はそのままつてことは、ベッドで寝ていたところ更に魔法で寝かせたってことなのかな。

「見せられないってのよね。ただでさえ不遇の王様なのに、アンタが出てくるんじゃないわ。ねえ？ 王太后様」

「お、王太后様?!」

驚いて思わず声をあげてしまった。

だって…… 王太后って事はマルちゃんの実の母親だよね？ それなのにどうして……

「？
ああ、下賤な血を引く犬と使用人ね？ 消えてくれないかしら？」

凜と澄んだ美しい声がする。声だけ聞けばとても若々しいけれど冷たい声。これが、王太后様……？ そういえば、マルちゃんとの会話の中で一度も実の母親である王太后の話は出てこなかった。今日の前にいるその人も、我が子を心配するとかいう印象は一切なく凍て付くような空気が滲むだけだ。それでも、親子なの？

「魔術師風情が邪魔をしないでくれない？ 精霊の力扱えないのに無駄な事よ？」

「だからと言って指咥えて見てるっての？ んなこと出来るわけないじゃない。ねえ王太后様ご存知よね？ 玉座の安定は精霊力の安定。……これ以上この国を荒らしたいの？」

「ふふつ？ いいじゃない荒れば。別に私は興味ないし。……ああ、その使用人がラスメリナから来た間者？ 本当に黒目黒髪してるのね。竜帝そっくり」

「！ よくご存知ね？」

「ええ勿論。 あら、あの者達はもう引き上げたのね？ では私も。誰がこの障壁を解いたのか知りたかったけど時間切れだわ」

そう言っつて呪文を唱えながら自身を中心にして闇の力を場に広げる。

全ての夜を濃縮したような闇色にくらりとしながらも、私はぎゅつと下肢に力を込めて踏ん張った。

「これも義務で産んだだけよ。その犬の恥知らずな女に寝取られたのが許せなかっただけ。別にどうでもいいもの。さ、無駄話はおしまい」

「待つて！ 焔、飛沫、疾風、息吹！ 闇を捕まえて！」

私の制止の声をあげ四人の精霊達に命を下したけど間に合わず、王太后は闇に溶けて消えた。

しん、と静まり返る室内。

そんな中、どろつとした気持ちを頭の中で整理する。

王太后は闇の精霊使い……。あの闇の精霊は無理矢理使役されていたみたいだ。それこそ『力づく』で。その力を使って、マルちゃんを生かさず殺さず……。

酷すぎる。酷すぎるよそんなの。

ふつふつ怒りが湧く気持ちの中じつとしてると、ジェネがそっと肩を抱いてくれた。

「ウンノ……」

しかし、掛ける言葉が見つからないのかそれきり黙ってしまった。ジェネもまさか王太后がそんな暴挙に出るとは思っていなかったようだ。ぎゅっと力を込める掌が悔しさとなって伝わる。

ポウツと辺りに数個の光球がうまれた。イル・メル・ジーンが魔術で出したようだ。その光をぼんやり見やると、イル・メル・ジーンは私を見て恐ろしい威力を込めてこう言った。

「ねえウンノちゃん？ …… 説明してくれるわよね？」

ひっ！

艶然とした笑みを浮かべてゆつくりと近づくイル・メル・ジーン。
私は蛇に睨まれた蛙状態で固まった。

「イル・メル・ジーン、これには訳がっ……！！！」

「ジエネは黙っててもらえる？」

ジエネが私を庇おうと前に出たけどそこで不自然に固まる。魔術？
それを一瞥してイル・メル・ジーンは私の前に立った。

「…… 初めまして？ 精霊姫様」

イル・メル・ジーンの瞳は私のそれをひたと見据える。確信を持って
告げられるその言葉に、もはや言い逃れの出来ない力を感じた。

「い、今のところは？」

「何で疑問系なのよ。大体さ、おかしいと思ったのよね？ ウン
ノちゃん来てから天候がみるみる回復するし、障壁キレイに消える
し」

「……」

「何故、名乗り出なかったの？ 国がこんなに荒れていてその原
因も知ってるでしょうに、どうして？」

自信がないから……。

光も闇も従えてないから……。

元の世界に帰るのに『精霊姫』を名乗るのは、この国に対して不誠実な気がしたから……。

いくつか考えを巡らせじつと黙り込んで目を伏せる私に、イル・メル・ジーンは人差し指で私の顎を捉えて顔を上に向かせた。

「『いつも自分を押し殺すお姉ちゃん』？ 少しは我を出しなさいよ。人の都合周りの事情考えてんじゃないわよ。あなたは、どうしたいの？」

「私は……」

それ以上に思う気持ちがある。それはとても利己的過ぎて口に出すのが恥ずかしい。だって…… 一番の理由は『ジエネの役に立ちたい』、だから……。

「人の役に立つのが好き？ そんなの偽善ね。結局、アナタは自分の為にやってるだけなんだわ。存在価値を認めてもらうために手を出してるだけ。自己満足もいい所よ」

違う、と言いたかったけどやけにストンと腑に落ちる。私は私の存在を、はつきりと認めてもらいたかったのだ。

小さい頃『お姉ちゃんだから』と言われ続け、そして自身もそうであろうと家でも外でも背筋を伸ばして『しっかりしている自分』を作り上げてきた。頼れる、しっかりした、海野翔子という人間を。

父親はいなくて、母親は仕事で不在がち。頼れる者がいない中、弟の翔と一生懸命生きてきた。それは、人に何かすることです。『自分』という存在を認めてもらいたかったからじゃないか。

ジエネに甘えろって言われたけど、ぐらぐらの土台に立っている自分が寄りかかったら、自分の全てを相手に依存してしまえば怖かった。

「……」

結局何か言いたかったけど、口に出せば言い訳にしか聞こえないので黙り続ける。

そんな私をイル・メル・ジーンはお見通しだったのだろう。顎に添えた指を離し、私をギュッと抱きしめた。

「…… わ、ちょ、お姉さま？」

「居場所、欲しかったんでしょ？」

「……！」

まさに、その『居場所』の一言で私の今までが集約されている気がする。

息を詰める私にイル・メル・ジーンは優しく抱きながら続けた。

「ここに居てもいいんだって、認められたかったのよね？ もう大丈夫よ、大丈夫。後の事は任せなさい。相談しなさい、頼りなさい、皆を。それに、アナタが居たい場所、もう決めてるんじゃない？」

沁み込むその言葉に泣きそうになりながらも、最後の耳元で囁かれた言葉に心臓が飛び上がるかと思った。

ハルだけじゃなくて、お姉さまにもバレてるよっ。

慌てて体を離し、ふとイル・メル・ジーン顔をじっと見つめる。超絶美女に圧倒されて、見つめるということはなかったけど……

ああ、そういうことが。

唐突に理解した。どうして自分がマルちゃんと呼んでしまう訳も。それはあの風竜によってもたらされた『読み取る力』……。

「お姉さま…… じゃなくて『ヴォルフ』お兄さま、ありがとう。私は召喚によって来たからには、帰らなきゃいけないの。…… それまでは、やれるだけの事はやらせて欲しい。でも、なるべく秘密にしたいな。私、光と闇は掌握してないから」

「えっ…… あ、あの?! 待って、ちょっと待ってウンノちゃん。あー、いやね、どこからどういったらいいのか……」

目を丸くして、珍しく動揺したイル・メル・ジーンがどさりと力なく椅子に座る。長く燃える様な長い髪を後ろに掻き揚げ、面倒くさそうに手をジェネに一振りした。すると魔術により拘束されていたジェネは自由を取り戻した途端イル・メル・ジーンに詰め寄った。

「イル・メル・ジーン! お前……!」

「ねえジェネ、あなた私の『本名』知らないわよね?」

「え? ああ、知らないな」

「私はカケルにも教えていないわよ?」

「なんでウンノ」

ちゃん知ってるの？」

「はあ…… まあ色々」

「色々って何よ！ もう何この双子、デタラメね！」

キイツと喚くイル・メル・ジーン。翔共々すみません。

「それから！ 光と闇を掌握してない、ですって?! そんな事あるの? …… ま、実際そうならそうなんでしようけど。どうやったら契約出来るか、それはもう分かっているの?」

「闇は王太后の所に囚われているので、それを何とか出来れば……。そうすれば王太后の力もなくなると思います」

精霊使いは一人一種類の精霊と契約が出来る。その常識を当てはめれば王太后は闇の力だけだ。他の精霊の力は感じなかったからねあの闇の精霊を何とかして私が助けられることが出来れば、王太后は力を無くして脅威はなくなり、マルちゃんも元気になるだろう。

そしてその闇の精霊を…… うん、手が無い訳でもない。

「じゃあ、光の精霊は?」

「ひか……」

途端一気に頭に血が上って、ボツと顔が赤くなるのを自覚する。

「えええいずれソレは何か…… あ、そうだ！ お腹空きませんか?! ご飯作りますから食べましょう！ 私マルちゃんに对精霊用の結界張ります！ ヴォルフさんは対魔術用を！ さ、じゃあ

先に行きますねっ」

早口で捲くし立てて私は話を切り上げ、自分の部屋へと走り出した。

3 (後書き)

これは『災厄』レベルではありませんW

Side ジェネシズ

「『ヴォルフ』……それがお前の本名なんだな」

「もう……こんな名前嫌なのよ！ いかにも野郎でさっ！ どうしてウンノちゃん知ってるのかしら。ジェネ、ホントに知らないわよね？」

「ああ、知らないとも。俺が知ってるのはお前が三十七の女装癖がある男で、腰が悪いから直ぐに座ると言うことだけだ」

「アンタも大概口悪いわよっ！ ウンノちゃんの前ではキレイに隠しちゃってさ！ 何……まだなの？ ジェネにしては慎重ね」

「ほっとけ。で？ 報告はいつ」

「団長の所に行って、各関係者集めて……それからよね。きつと深夜だわ。まずはアナタの腕の治療。それからウンノちゃんのご飯食べてから行きましょう」

「ディエマルティウス……弟に向かい結界の呪語を唱なえるイル・メル・ジーンを横目に、居間に続く扉を開くとそこには克蘭ベルグ団長と一番隊の副長、隊員、そしてハルが来ていた。

一番隊は直接団長が指揮する隊で、団長は隊長も兼ねている。

「ジェネシズ、これは一体……」

「六名の侵入者、内五名はアンザスの手の物です。そこに転がる二名は気絶しているだけです。情報を出来るだけ引き出して下さい。」

侍女の部屋にも二人いたようですが逃げられました。後二人については後ほど。それから 例の案件の詰めに入ります。ラムダの頃すりあわせを」

ラムダとは二十四ある天に浮かぶ光の球体の一つの名前。最も夜が深くなる時間を指し示す。天に球体を見ることが出来なくなつて久しいが、不便さから、とある研究者が時を刻む仕掛けを作りおおよその時刻が分かるようになったのは大きな進歩といえる。

小声で団長に伝えると、小さく顎を引き了承を得た。

そして、ジュノーが投げた短刀を調べる。ウンノに向かって放つたときは血が凍るかと思つたが、弾かれた様子を見ると精霊が防いだらしい。しかしその残された刃をよく見ると僅かに黒く付着した液体が見えた。 毒か。それも致死率の高い種類の。しかし俺と剣を交わした刀身にはその様な付着物を見て取れなかつた。つまりジュノーは……。

「わか…… 隊長、どうしましたかその腕は！」

いつもの様に若と口に出すハルをひと睨みすると慌てて言い直し、俺の左腕を手に取り検分する。

「またこの腕ですか…… 大事にしてください。隊長はご自分の体を粗末になさるから困ります」

「…… ジュノーだ」

ハルだけに聞こえるよう呟いた俺に、ハルは弾かれたように顔を上げた。

「師匠…… ですか。それは厄介ですね」

ジユノヴァーンは俺とハルに剣を教えてくれた。騎士にはありえない戦い方、『使えるべきものは何でも使え』手でも足でも木の枝でも。一撃で相手を仕留める。一合でも合わせる相手ならば死を覚悟しろ。その様な教えを元に様々な戦場を巡った。初めて出会ったのはいつの頃だったか……。

「あいつにも仕事があるように、俺にもある。ハルはこの部屋について警戒しろ。団長に支持を上げ」

「はっ」

腕の治療を終えた俺は、ウンノの部屋に着き扉に手をかける。

すると、中にはすでにイル・メル・ジーンがいるらしく笑い声が聞こえてきた。

先程の事があつた為、ぎこちなくなりはいしないかと心配したが無用だった様だ。『災厄』だったらおそらく三日は寝台から起き上がれないだろう。イル・メル・ジーンはウンノを自覚させる為にあえて責めた。その意図を察して、俺は拘束の魔術を解くことも出来たが黙っていることにしたのだ。

ウンノは現実的でその上自己評価が低い。周囲に評価されてこそ自分の価値を見出している姿に、過去の自分を重ねてしまう。

考えに沈みこむ俺の目の前で、扉が開いた。

「ジエネ！ 待ってましたよ？ ほら、冷めちゃうから早く」

暖かな光がこぼれ、柔らかい空気を纏い、俺を見上げるウンノ。

俺が望んだ全てが、今ここにある。

今すぐ抱き締めたい衝動が湧き上がるが、その先に見えるイル・メル・ジーンの好奇心な視線を感じて慌てて踏みとどまる。危なかった。

「ささ、座って！ 今お皿並べますね」

テキパキと動く姿は無駄がない。もう何度か調理する様子を見ているが、いつも感心してしまう。出来立てを食べて欲しいと今まで待っていてくれたらしい。オーブンから何かを取り出したり、大きな鍋からスープをよそう。この小さな部屋ではすべてが見て取れ、後姿をじっと見ていたらイル・メル・ジーンに小突かれた。

「何見とれてるの？ あんまり間抜けな顔してたら幻滅されるわよ？」

「煩い『ヴォルフ』」

「いやー！ それ禁句！ だからジェネには知られたくなかったのに！」

卓の下では蹴り合いだ。

「カケルよりマシだろう？ あいつは多分面白がって相当愉快的な行動を取るに違いない」

「…… 確かにいえるわ。なにあの自由人。ウンノちゃん良く姉』でいられたわね」

「へっ?! あ、ああ翔ですか? そうですね……」

料理を食卓に並べるウンノは、一旦手を止めどこか遠い目をしながら答えた。

「…… 聞きたいですか? その色々を」

「いや、いい。大体俺の想像以上のことがあるのだろう? 心臓が持たない」

「私も遠慮させて欲しいわ。デタラメなカケルってだけで充分よ」

「そうですね。ええ、その方がいいと思います。じゃ、食べましよう」

そういつて、ウンノも席に着く。

目の前には色とりどりの見た目鮮やかな料理が並んでいた。

魚のハーブソース焼き、豆とジャガイモのサラダ、鶏肉入りのスープ。そして拳ほどの大きさがいくつも連なったパン。ちぎりパン? といったか。

バジル、ディル、パセリ、ニンニクで味をつけた白身魚はとても豊かな味わいがする。鼻に抜ける香りが堪らなく美味い。豆とジャガイモのサラダに、なんと隠し味に魚醤を使っていると言っていた。あの液体がこんなに奥深い味を引き出すとは。

そしてスープ。ウンノはラスメリナの城下町で「何このオバケセロリ!」と驚いていたが、根セロリというらしく、店子に調理法を

聞いていた。それがあの庭に『生えてた!』と言って、早速調理したようだ。鶏肉を骨ごと入れ、根セロリ、玉ねぎ、人参、ローリエやクローブ、粒コショウを入れて煮込まれている。俺やイル・メル・ジーンが料理について聞いたたびに、嬉しそうな顔をして返すから眩しくてたまらない。

「このスープは、後でマルちゃんに持って行って貰えませんか？」

「マルちゃん？ 誰よそれ」

「えつと…… 王様？」

「そんなに仲が良くなったのか、愛称呼ぶほどに」

「えつ?! 愛称だったんですか？ 私どうしても名前覚えられなくて……」

弟に軽い嫉妬を覚えつつ、その愛称について話した。

「デイエマルティウス…… 元々はデイエティウスとなるはずだったんだ。王太后の父親、つまり宰相ベナム・グランドーが付けたんだがそこに王である…… 父親が間あいたにマルを入れた。」

王太后と宰相は、名づけたものの一度も抱き上げることがなく単に識別する為だけの名付けで愛情のカケラもなかった。唯一愛情を直接与えたのが父親で、『マル』と呼んでいたのも父親だけだ」

「父親って…… ジエネのお父さんでもあるんですね」

まるで自分のことのように傷ついた顔をして尋ねるウンノ。そんな顔するな、可愛いから。

「そつだ。少なくとも俺は九歳までは王位継承第一位を認められていたからな。それなりの待遇を受けていた。名付けは父親が。母親にも乳母にも乳兄弟にも愛されていたと自覚はあるから、尚の事弟が不憫で仕方がない。俺は、この国の責務を弟に負わせてしまった後悔もある。だからせめて傍で守ろうと戻ってきたに過ぎないんだ」

「ジエネ……」

懺悔を込めた言葉に、ウンノはじつと俺を見つめた。

「…… あーハイハイ、ご馳走様、ゴチソウサマ！ この無自覚アツアツ視線何よ！ もうサツサと邪魔者は消えろってことねっ。

じゃあウンノちゃん、いい？ 精霊の使役の仕方、教えた通りちゃんと覚えなさいね」

「は、はいっ！ あの…… お姉さま有難うございました」

立ち上がり扉に向かったイル・メル・ジーンは、慌ててそこまで見送ろうとしたウンノを振り返って、俺を挑発するように嫣然とした笑みを零しながらウンノの頬に唇を寄せた。

「美味しかったわ。また是非食べさせてね？」

「きゃっ！ えと、はい、分かりました！」

目を白黒させながらウンノが応じると、「またね」と扉の外へ出て行った。

side ジェネシズ

喧しいのが消えると、急に静かな室内となった。

「じゃあ、お茶入れますね」

そのまま竈に行き、湯を沸かしていた鍋からハーブを入れておいたポットにお湯を注ぐ。途端辺りに爽やかな香りが漂った。

「エキナセアとカモミール、ペパーミントとカレンデュラ、それとエルダーが入っています。気持ちが落ち着くし…… 免疫力上げたり抗菌作用もあるんです」

ウンノは俺の左腕の包帯を見ながら中に入れたハーブについて説明をした。

それから抽出したハーブティーをカップに注ぎ入れ俺の前に置くと、そつと俺の左手を両手で包むように握った。座ったままの俺からは、立っているウンノを少し見上げる形となる。

「ジェネありがとう。守ってくれて、嬉しい」

謝るのではなく、礼を言う。真っ直ぐに俺の目を見て言うウンノの瞳は、不思議なくらい澄んでいた。あのような出来事があったのにもかかわらず、何か決意を込めたような……。

「俺は最初に誓ったからな。だが、怖い思いをさせてしまった」

「大丈夫。ジエネがいたから。でも、アンザスのジュノヴァーン
って……？」

「それは今は言えない。いずれ、な？」

これ以上一緒にいたら、俺は何かしてしまいそうで慌てて切り上
げる。ハーブティを一気に喉へ流し込み立ち上がった。

「これから団長達と会議だ。色々話を詰めて対策を講じる。ウン
ノはもう休め」

「えっ。私も手伝わせて下さい！」

「駄目だ。夜も遅いし危険も付きまとう。…… 何よりお前の立
場は明かせない」

「……そうですか。わかりました」

やけにあっさり引いたな、と思いつつも安全な場所にいると了
承してくれた事に安堵を覚え、立ち上がるとウンノの頬に唇を寄せ
た。 イル・メル・ジーンとは反対側に。

「きやつー！」

「記憶の上書きだ。お休みウンノ」

ラムダの時間までまだ余裕がある。その間にすべき手配を終えて自室に戻った。ジュノーとの戦いで汚れた服を着替える為だ。

今夜から暫くは厳戒態勢となる。いよいよ時が満ちたというべきか。

ウンノを一人部屋に残してきたが、精霊への使役の仕方を知識だけは持っていたイル・メル・ジーンが教えたらしいので、襲撃に関しては大丈夫だろう。俺が心配するのは、ウンノが心細く思っているのでは…… 出来ることならずっと傍についていたい、という一方的で勝手な想いだけだ。

身支度を整えた後、団長の部屋へ向かう。

そこには極少数の限られた人がすでに集まっていた。宰相の息が掛からない、団長の信を得られている者だけが。

「よし、揃ったな？ イル・メル・ジーン、結界を」

「はあい。…… これで音は洩れないわ」

すでに椅子に腰を掛けていたイル・メル・ジーンが、この部屋に消音の魔術を使った。それを見届け、団長はぐるりと集まる面々を眺め一つ頷くと、端から順に指名する。

「まずは報告。一番隊副長」

「はつ。鉄鉱石の価格は昨年より僅かながらも上昇しております。産出量は変わりありません」

「四番隊隊長」

「カギラテ地方に調査へ参りました所、塩、穀物など備蓄食料の

品不足が報告されています。他に目立つ点は戦士の国、バルカーニから来た傭兵の姿が目立ったとのことですよ」

バルカーニは優れた戦士が多く集う国であり、傭兵を各国に派遣する事により国費の一部としている。非公認ながらアンザスもそれに属していて、戦いある所バルカーニありと恐れられている所以だ。

「七番隊副長」

「はい。グランドー家の財政一般、調査しました所書類上とても綺麗過ぎました。一つも数字に乱れがありませんので、上手く手を加えたのだと思います。城下に三箇所、カギラテに三箇所、バルカーニにも二箇所隠匿いんとくしている事は調査済みですよ」

ロウは淀みなく調査結果を報告する。宰相の領地はカギラテで、鉄鉱石がこの国で唯一取れる地でもある。宰相という立場を利用して裏金を作り、鉄鉱石の価格を吊り上げて差額を懐に入れているのだろう。

バルカーニが絡むと言う事は、ラスメリナとレーンを争わせてそこに自国商売の傭兵と武器を売り込もうという魂胆か。

浅慮な。

宰相、ベナム・グランドーを潰すなら今のうちだ。俺は強く剣の柄を握り締めた。

その後は団長による指揮系統の確認やこれから起こるであろう騒ぎの鎮圧方法、宰相側に積極的に付いて甘い汁を啜る者や、そちらに賛同はしたものの日和見な者を制圧する為の調整を行った。

朝議が行われる時、一気に畳み掛ける為だ。

「あ、そうそう。ジエネ？ やっぱり内通者は……」

「…… バッツ、だろ？」

「ご名答。アナタわざとラスメリナへ連れてったの？」

こちらの情報が宰相側へ漏れている。それを確かめる為、わざと新人のバッツを『イル・メル・ジーン』の弟を連れてくる仕事』としてラスメリナまで連れて行ったのだ。適当に泳がせておいたら案の定時折姿を隠し、文書を鳥に託したりキムロスでも俺達と合流する前に密偵と会っていたようだ。俺やハルには隠せるはずもないのだが。

ウンノが『竜帝の姉』と言う事まで知られたのは、恐らくバッツが七番隊詰所で会話していたのを扉越しに聞き耳を立てたのだろう。勿論そんな間抜けな姿は他の隊員にも目撃されている為こちらに報告が来ていた。

「バッツはね、姉を人質に取られていたのよ。…… 仕方ないじや済まされないけど、どうするの？」

「…… ひとまず保留だ。この件が片付き次第面談しよう。それまで禁錮だ」

「懐に入れたものには相変わらず甘いのね。…… いいわ、アナタに任せる」

そして俺はロウが作成した罪状確認書に目を通し、了解をした。

団長には…… 伝えた方がいいのだろうか。迷いはしたが、結局外せない内容だと判断して団長に声をかけた。

「団長、あの……」

「なんだ。 ああ、お前の配置は裏だ。 アンザスの警戒を頼む」

「はい。 おそらく私の元へ現れると思いますので、 適当に警備の穴を開けて置いて下さい。 それと……」

配置を裏にしてくれたのは団長の思いやりには他ならない。 俺は『王位継承権第一位』だった過去を持つ。 目障りな俺を幾度も窮地に陥れた宰相だ。 目が合ったら何を言い出すか分からないから、 外されたのだろう。

そして本題に入ろうと団長に耳打ちをする。

「ウンノの件についてですが……」

「ああ。 わかっている。 事が終わるまで、 部屋で待機していてもらいなさい」

「…… はい」

『わかっている』？ 何について？ 疑問符が頭を飛び交うが団長の見透かすような目に怯み、 その場を辞した。

夜明けまであと僅かだ。 そうしたら

* 特別企画 番外編 前編 * (前書き)

デタラメなアイツの、ある世界での出会い編。つまりコラボ。

「およ？ こどここだ？」

ぼんやりする頭をゆっくり持ち上げ、僕は辺りを見渡した。

鬱蒼とした木々が取り囲む。それらが空から降り注ぐ光を遮り、辺りは薄暗く陰鬱な雰囲気醸し出していた。

頭をガリガリ搔きながら、原因を記憶から探ってみる。

「……うん、多分三箇所で限界だったんだな？」

僕は自分の中に宿る『力』を使い果たしているのを感じていた。異世界三箇所目を巡った所で、元の世界に戻る為の『力』がギリギリ……いや、足りないかも？ って思いつつ、今居る場所が余りに生命の反応を感じないほど荒れていて帰りたかったから、ちよつと無理をして『扉』を描いた。

両手の人差し指で目の前の空間に、慣れた手つきで上から下へ円になるよう左右に分かれて模様を描いていく。文字だったり、線だったり。一つ描く度に『力』が吸い取られていくのは気付いていた。

あー、ちよつとまずい？

段々と……朦朧としてきた。しかし失敗は命が終わる事を意味する。気力を振り絞り、最後の一文を描く所で……ずれた。

「ああっ、うわっ！ ちょい待て！ 待て待て！ あららら……」

『扉』が開き、僕は飲まれた。『力』も尽きて、意識も暗転したのだった。

「ま、なんか結果オーライ？」

森があり生命反応も感じられる。そして、『力』と似たモノが満ちている。僕の『力』が戻るまで、暫くこの世界にいよう。

考えたって始まらない。うーんと伸びをして立ち上がるうとしたら、ふっと陰になった。

「あ？」

なんだ？　　と思つて上を見たら……でっかい口がこちらに近づいてきていた。

「う、うわあああ！！」

ポーンと前に軽く跳躍してかわし、正体を見極めようと見上げたら、そこには。

「怪獣?!」

ティラノサウルスっぽく見えるけど、双頭であるので地球の常識に当てはめられない。しかもなんか尻尾燃えてるし！

うっわー、超楽しい！

ワクワクしながらじつくり眺めたい所だけど、どうやら僕を食料と見定めたらしく、二つの口が迫ってくる。残念だ。

僕は腰の剣を抜き、構える。

「手加減ナシだよ？ ちょっと余裕ないし」

軽く横に飛んで後ろに回り、燃える尻尾の先は飛び越えて付け根辺りから背中へ一気に駆け上がり、剣を一閃させる。

どしーん。どしーん。

二つの首がスッパリと切られて落ちる。遅れて、胴体もゆっくりと崩れ落ちた。

ヒョイと降りた僕は、剣の峰で肩をトントンと叩きながら呟く。

「ごめんなー？ 僕、まだ死にたくないんだ」

剣に付いた血糊を振り落とし、鞘に仕舞う。

この剣は実は日本刀。だってカッコいいからね！ 室町時代の刀鍛冶に頼んで鍛えてもらった鋼。それに『力』を込めたので刃毀れも無いし切れ味落ちないし、便利便利。

ま、なんだ。

刀に『力』込めるとかそういう思いつきは、現代っ子の自分だからできるんじゃないかなー？

ゲームや漫画や小説……溢れかえる情報の中生きてきたので、使える情報モは使ってやるのだ。

クン、と鼻を近づけ、怪獣を切った断面の匂いをかいだらなんか大丈夫そうだったから、いまだ燃え続ける尻尾の炎で肉を焼くこと

にした。幾つかトントントと切り身にして枯れ木に刺して炙った。ジューツと焼けるいい匂いが辺りへ漂う。

厚切りなので中に火が通るまで時間が掛かりそう。その間、近くを散策することにした。

人の気配はこの辺りにはない。それから、さっきの様な怪物は多くはない……。ふう〜ん？

水の湧き出る泉を見つけた。……クン、と匂いをかいでやめた。これはやばいよ？ やーめた！ 僕の勘は外さない。多分こりや飲んだら即死だ。喉乾いたけど、またどつかでなんかあるでしょー。そろそろ焼ける頃合なので、先程の場所に戻った。

「よーし焼けた！ いったただつきまーす！」

あーんと口を開けて齧り付く。……うーん、味はイマイチだけど食べれない事もないかな？ あー、ねーちゃんがいたら料理してもらうのにつ！ 何の肉か言わなきゃ作ってくれるかな？

ちよつと考えて、切り分けた肉を大きい葉っぱで包んだ。『力が戻るにはまだまだ食事と睡眠が足りない。これから先食料がないのも困るから、弁当代わりに持ち歩くことにする。』

「お前は何者だ？」

散々この森を遊び尽くして(?)飽きたので森の外に出ることにした僕は、一歩出た途端急に目の前に現れた相手にビックリした。

テレポーション
瞬間移動?

無駄にそういう知識だけはあるので、すんなりと受け入れた。

しかし、この『力』の様な圧力……ゾクゾクするねっ! ひんやりと僕を見据える金色の瞳にサラツとした銀髪。顔は異常なほどに整って……あれだな。

「乙ゲーオトの難攻不落キャラみたい?」

うっかり口に出してしまったけど、相手は「乙ゲーオト」がなんなのか分からないらしく、ピクリとも表情を動かさなかった。

僕も命は大事大事なので『力』が足りないとは言え警戒する。刀の柄を左手でヘラッと笑いながら掴んだ。

けれども、とりあえずお邪魔したのは僕の方なので、欧米風に手を差し出し自己紹介をした。

「僕は翔カケル。ちょっとした迷子? 暫くしたら出てくから、見逃してくれない?」

僕が差し出した手を一瞬躊躇った銀髪のボスキャラは、それでも握ってくれた。キレイな手をして、でもちゃんと男の手で。うつわー、なんかそのケがあったら堪ないだろうね!

ある国で出来た親友によると『気が抜ける』と称された(失礼な!)笑顔全開で「よろしく」と挨拶したら、この場を圧倒的な気配で支配していた力をすうっと納めた。

「……レナード、剣を引け」

「ルーク、大丈夫なのか？」

「ああ」

「うわっ！ ナニ居たの?! あっぶねー！」

ルークと呼ばれたその男に集中していた為、僕のすぐ脇で剣を構えていた男に気が付かなかった。いや、この人もなかなか……。

「気付けよ……」

キョトンと見つめたら、呆れたような声で言うこの男。これまたなかなかステキな顔立ちで。

「あれ？ なんていうんだっけ、その髪色…… 校のグラウンドの色？ 服にコーヒーこぼして染みになっちゃった色？ 違うな。もうちよつと小粋な言い方があったような？ うーん、薄い茶色？」
「黒目黒髪、そして珍妙な黒の衣装着て剣を持つお前に言われたくないっ」

「うっわ、公式行事にも着る事のできる便利な学生服を珍妙っていう？ そんな事カツコイイおにーさんに言われたくないわっ！」

「褒め……っ?!」

「レナード、黙れ。カケルとやら、食事と休息が必要なのだろう？ 滞在する屋敷を提供しよう。ついてこい」

「え？ いいの？ ありがとうーん」

野宿よりも屋根の下がいいさ。

どうやら敵キャラ認定されなかったみたいだし、ご厄介になろつと。

オロオロしてるレッサー君は見ていて面白いなあ。

てくてく歩き、針を飛ばしてくる奇妙な小動物（毒アリ）とか愉

快すぎる怪物達を魔力（とここではいうらしい）とレナーの剣で倒しながら森を離れていく。

僕はちよつとお疲れなので歩くことに専念させてもらったね。だつてもうヘトヘトで。でも途中であの髪色は『亜麻色』と言つのを思い出し、つい気分よく歌っちゃった。

「~~~~~」

「止める五月蠅い黙れ雑音」

「うわーひでえ！ ダブルで突っ込みっ！ 折角気持ちよく歌つてたのに！」

「歌？」

「そだよ？ ……つてか、歌つて聞く？ 歌だろ紛れもなく……歌を知らない？」

「それが歌というものか？ 耳が壊れそうだ。二度とやるな」

「僕的美声を理解できないとは……もったいないなあ」

……ねーちゃんに「音痴いい！ やめてー！」「つて言われてるのは内緒だ。

「ではこのレナーの屋敷に滞在するがいい」

森から離れて数十分。怪物達の気配が薄れた所で唐突にクールな方の美形が立ち止まり、僕に声をかけた。

「おつ、おいつ！ なんで俺の家なんだよ！」

「じゃ、一晩だけよろしく？ メナードとやら」

「レナードだ！」

うーん、突っ込み上手だな！ レ……なんとかっていう人は楽しいねっ。なんかレ……なんとかって人の上司らしいルー君が、僕の滞在に許可をしてくれたらしい。
有難くそうさせてもらおう。

「回復したら早々に帰れ」

ボスはこう言って消えた。言って直ぐに、消えた。

「……くそっ、逃げられた」

「レ……ナントカ君？」

『押し付けられた』という表情を隠しもしないで唸るので、つい声をかけた。

すると、ジロツと僕を見て「レナードだ」と言い直した。

「お前、名前覚える気ないな？ ……大体いくつだ？ まだ子供の様に見えるが」

「え？ 僕はピチピチ十七歳の高校生やってるよ」

「じゅ……十七かっ？！」

「そーいうレニヤードは何歳？」

「レナードだっ！ 俺はもうじき六十七歳になる」

「うっわー！ なんて若々しいおじいちゃん！」

「……」

こんなにも見た目若いのに年齢は残念なんだな。ちょっと同情の目を向けつつ、脱力したレンさんが案内するまま後についていった。

* 特別企画 番外編 前編 * (後書き)

次話、『翔、レナードのお宅訪問』

* 特別企画 番外編 後編 *

「お帰りなさいおぼっちゃん。おや、そちらの方は？」

恐ろしい位広い敷地に、恐ろしい程の御殿がこのレレレさんの住まいらしい。玄関にたどり着いた途端合図もしていないのにスツと扉が開いて、ナイスミドルな紳士が素晴らしい角度で腰を折った。わー！ いかにも、執事！

「一晩限りの客だ。もてなしはいらぬ。適当な食事と寝るだけの寝台を用意してくれ」

「うわ、おぼっちゃんまつたら、扱い雑ー！」

「うるさい！ お前黙つてろ！」

「こんにちはー！ お友達の翔です！」

「誰がいつ友達になったんだ！ 厄介者の間違いだ！」

そんなやり取りを微笑ましく見守る執事さん。若い頃ブイブイ言わせただろウステキな笑顔でおぼっちゃんを窘めた。

「おぼっちゃん、『お友達』と楽しそうな会話も宜しいですが、とにかくお部屋にご案内しませんと」

「……」

ぐうつと喉の奥で唸ったレモンさん。禿げなきやいいな…… 人事ながら心配しちゃったよ。

玄関のホールを抜け、どこまでも続く回廊を歩く。壁に目をやるとそこには肖像画がずらりと並んでいた。どれもこれも綺麗な顔立ちをしていて、眺めるだけで眼福である。

「ねーレンコンコンー。これ、一枚位もらえない？」

「違う名前でもしも長い！ レナードだ！ いい加減覚える三文
字！ そしてこれはやれんぞ。俺の家の先祖だからな」

「ほー、先祖。…… 売れると思ったのに」

「売るなっ！」

裝飾が余りない扉を開き中に入ると、確かにそれなりの部屋だっ
た。てか、ベッドに布団すら乗ってませんがね？

チラツとレナウドを目線だけで見上げる。

「…… なんだ？ 何か言いたい事があるのか？」

「イエイエ ヤネガ アルダケデモ アリガタイデスー」

「棒読みするなっ！ ちゃんと用意するよう手配済みだっ」

言った通りに何人かが荷物を持って出入りをする。

僕とケナードは椅子に座ってその様子を眺めた。すると見た目同
じ歳位の女の子が（やっぱり年齢は残念なのか？）ティーセットを
ワゴンに乗せて運んできた。それを見て、僕は小声でおぼっちゃま
に尋ねる。

「…… もしかして、お手つきな彼女？」

「お手つき、とは？」

「いや、ほらさ…… 手出したのかどうかと」

「するかっ！」

「え？ じゃああの人？ おぼっちゃまったら、熟女好み？」

「あるか！」

「ああ…… ごめん。実は禁断の愛で執事さんとデキて……」

「そうなんです。ぼっちゃまはそれはそれは熱く私を求められて

……」

「やるかつ！ というか、いつの間に来た！」

「へえ？ ヒツジさんとラブなのかー」

「んなわけあるかつ！ こ、子供の頃の話ならまだしもっ」

「禁断の愛でございます」

「乗るな！」

「おぼちゃまつたら、好きねえ〜？」

「うるさいっ！ 俺は至って普通の趣味嗜好だ！ それに屋敷の者には手を出さんわっ！」

「あ、ねえヒツジさんご飯頂戴？」

「はい、只今お持ちしますよ」

「…… 聞いたって無視か！ そして何を手帳に書いているメーシプー！」

「はあ、これはおぼっちゃまの行動を記憶しておく為の物でございます」

「……」

天を仰ぐレナどん。ふかー！ 溜息をそれはそれは長く吐いた。白髪も生えてないじーちゃんのくせに、年寄りくさい表情を一瞬垣間見せた。

「…… それで？ お前どこから来たんだ？」

「さ？ 僕も分かんないね。むしろ逆に聞きたい。僕はどこから来たんだ？」

「いやいや、俺が聞いてるんだって！」

「この国って何て名前？ 何て世界の名前？」

「~~~~！！ あーもういい！ この国はマグノリア、世界はユシユータルだ！ というか、お前それすらも分からないのか？」

マグノリア、ユシユータル……

僕はその名前を口に乗せテーブルの上になぞる。両手人差し指で

上から下へ向かい、半円ずつ右と左に分かれ今知ったこの場所の名前を足しながら描く。軌跡は赤い光となり残っていく。

「お前…… それなんだよ」

その質問には答えず僕は描き続けた。「力」は込めてないから失敗はないけれど、書くにも精神力がいるんだな。じわりと額に滲む汗。しかし半円ほど描いた所で光は消滅した。

「ま、いいか。場所覚えたし？」

淹れてもらったお茶を一口飲んで喉を潤す。

ここに来るまでの飾られた壺や花瓶。柱の装飾の具合から絵画の技術。依頼に答えられそうなのでここに落ちたのも何かの縁だ。とにかく「力」の回復に専念しよう！僕はにつこり笑顔を向けてお願いをする。

「疲れたー、お腹すいたー、ねむーい」

「おまつ……！ほんつきで俺の質問に答える気ないな?!」

ヒツジさんが料理を運んでくれる。

僕は美味しく美味しくモリモリ食べてたら、「作りがいあるぞ！もっと食べてな」と料理長がドンドン持って来てくれた。

「お前…… 少しは遠慮しろよ」

呆れた様子で一旦席を外していたレーレンは、お酒の瓶とグラスを持ってやってきた。飲まなきゃやってられないからと言って、琥珀色をした酒をグイグイ飲み始める。

そこでふとグラスを見つめたかと思うと、僕に向かって軽く睨んだ。

「駄目だ、やらないぞ？ お前まだ子供だからな」

「うーん。やめとくー」

「やめとく？ まるで飲んだ事あるような口ぶりだな」

「まあね。ある国じゃ僕は成人扱いだけどある国ではまだ未成年。それでもって、その未成年の国には明日帰るから、酒の匂いは都合悪い」

「意味が分からない…… お前は本当にデタラメなやつだな。大

体なんだこの食事の量は。俺んちの食料食い尽くす気が！」

「イエイエ ソンナツモリ アリマセンヨー」

「だからその棒読みやめろ！」

最後のデザートもペロリと平らげ満足した僕は、ヒツジさんと料理を提供してくれた人達に有難く礼をいい寝ることにした。

「皆さんごちさーさまっ！ じゃ、お休みー！」

「こら！ 俺に礼はないのかっ！！ っつて、寝るの早

っ！！」

翌朝。

陽が昇ると同時に目が覚めた僕は、『力』が満ちている事を感じた。

「この世界は結構合っているのかもね？」

「よーし。じゃ、帰る前に調査開始〜」

扉の装飾、柱の造り、食器類の出来などをデジカメで撮っていく。うん、この技術はなかなかの物だし、あの人もこれなら許してくれるかなー？

ウツカリ落ちたユシュタールの世界。でも、間違いなく大当たりだ。

廊下をウロウロしていたら、飾り棚にいかにもな怪しさ全開の手帳が置いてあった。字は読めないけどとても気になる。そおつと持ち上げた所で早起きなここのお家のおぼっちゃんまくんに見つかった。

「あ！ お前それに触るな！」

「ええ〜？ これ何なに？」

必死になつて取り上げようとするってことは、よっぼど……

「そうか…… ダメだよこんな所置いてちゃ。定番はベッドの下だよ？ あー、でもそれは一番見つかる確立高いんだ！ 気をつけるよっ」

「何だそれは？ 何のことだ！ くっ…… わざわざ目に付く所に置きやがって！」

ここには居ない誰かに文句を言っているようだ。

きっとこの突っ込み担当おぼっちゃんまを相当イジツている人に違いない。

僕は大体をデータに収めた後なので、部屋に戻ることにした。

すると、そこには昨日丸投げした後あつという間に消えた美形がいた。

「おっ！ ルー君じゃないか。昨日振り〜」

「……」

あ、イラっとしてる。楽しい！ クールキャラがペース乱される姿って、萌えない？

ルー君はれんれん君と一言一言会話した後、僕に向かって冷たい視線を投げる。

「カケルといったか？ もう充分に回復しただろう。早々に帰れ」

「うわっ酷いっ！ 僕を一晩だけでもあそんで捨てるのねっ」

「……。お前が来てから不可侵の森より怒りを感じる」

ついつと窓の外を眺めるルー君。そんな事言われても、僕なんもしてないと思うけどな？

なんかあつたかな？ と考える横でレンぼっちやまはある物について聞いてきた。

「なあカケル。これ、昨日会った時から持ってたけど何だ？」

「あ、それはねえ……。あの森で襲ってきた怪獣の肉だよ。あまし美味くない」

「怪獣？」

「うーんと、二つの頭があつて、小さな山ほどの体してて、尻尾が燃えてる？」

「……！ 魔獣のケベリウスじゃ？！ お前コレ倒してしかも食べたのか！」

「…… 不可侵の契約が……」

「やっばお前ここに長居するな！！その肉持ってさっさと出て行けー！！」

「えー、出て行けかあ……。さみしいな。ねえレナード、僕また来てもいい？」

「なぜ俺に言う……！！」

僕より少し背の高いレナードをじつと見上げながらお願いする。

「ねー、レナード。来ちゃ、だめ？」

「……」

「レナード。お願い」

「……っ！ くそっ！ おいルーク！ たまに、ごくたまにならいんじゃないか？ 子供のやった事だし、時間を置けば……」

半ば呆れるように僕とレナードを見たルー君は、親指で眉間を抑えながらかぶりを振る。

「だからお前はバカなんだ、レナード。あの時の女もそうやって押されてほだされて、押し倒されて、あんな事に……」

「ルーク！ 子供の前だぞ！！」

「へえ……レナードったら色々残念なんだね」

「色々残念言うなっ！ 大体、なんで今頃俺の名前をマトモに言えるようになってるんだ？！」

「まあいいじゃん」

「よくない！」

「……まあ、しばらく時間を置いて忘れた頃に、短時間だけ来るのならばいいだろう。その時はレナードを呼びだすがいい」

「酷っ！」

「おいルーク！ なんで俺なんだよ！」

「お前が言いだしたんだろうが。お前が責任を取れ。後、カケル……不可侵の森へは二度と立ち入るな」

「楽しかったのになー。なんか宝物いっぱいあったし」

「お前……何盗ってんだよ！」

「元に戻しといたから大丈夫……多分？」

その後の抗議は聞かなかったことにして、僕は今度こそ『力』を慎重に込めて扉を描く。行き先は 日本だ。

「じゃ、まっただね〜！ ルー君とレナード」

「……」

「お、おい！ 今度は大人しくしろよな？」

目の前に赤い光で描かれた円を両手で押すと、観音開きの扉の様に二つに分かれた。そこへぴよいと飛び込むと…… 懐かしい匂いの僕の部屋へと戻って来たのだった。

でさー、聞いてよ。そのマグノリアに行った時の話。

え？ あー、えっとね、ユシユタルって世界の…… まあいいじゃん、どっかの異世界だよ。たまたま行った先で友達ができてさー。それからまた三年位過ぎて…… 内緒で行ってビックリさせようと思っただけ消して扉を開いたら、ウツカリ暖炉に落ちちゃって！ アワテンボウのサンタを地で言っちゃったよ。あはは。

ああ待って待って！ 切らないで！ これからなんだってば。

暖炉から出てったら、女の子…… 子？ いや女性……？ ごめん、微妙なお年頃だから若いほう言っただけ置くんだったね？ 教えは守りますとも！ うん、女の子がいて、なんと同じく日本から異世界にトリップした子がいたんですー！ いやーすごいね、結構ある話なんだねえ。名前？ 『花』ちゃんって言った。うん、こっちに帰る気はないんだって。たまたまねーちゃんから貰ったバレンタインチョコを半分あげたりして色々話し込んで、またお土産

持って遊びに来るねって言ったとこで帰ろうとしちゃったよ。花ちゃんが『今日は何をしに?』って聞いてきたから思い出したんだ。

ごめんっ！ いいじゃん思い出したんだから！

レナードを呼んでもらって…… ぷぷっ、その時の驚いた顔ったらないね！ 美形台無しだよ。ありや今も彼女ナシだねっ。

うっさいな、僕も今はいないけど。いいじゃん僕のこととは。

ルー君も来たんだけど、ルー君も酷いよ。あ？ 酷いってボスキヤラの如くな美形は変わりなかつただけ…… 花ちゃんにメロメロでね？ 「寄るな触るな離れる埋まれ」だって！ 何その最後の埋まれって！

そんな感じで楽しく話してたんだけど、なんだろ…… 僕やつぱりなんか間違えてて…… うーんと、八十年くらい後？ に来ちゃったんだな。

あああっ！ ごめんなさいごめんなさい！ でも大丈夫だよ。ね？

この国の人って長生きするみたいだし？ よくわかんないけど。会ったときレナードなんて六十七歳だったからさ。見た目全然変わってなくてびっくりだよ。雰囲気はちよつと落ち着いた感じがするな。オトナーなレナードだったよ。うん、ハゲてなかった。僕それが一番心配で。

うー、前置き長かったね。本題っど……。

えーっと、前に転送したとおりのインテリア技術。最初に写真撮ったデザインよりもだいたいぶ経った、今のマグノリアはもうちよつと細かい模様が流行っていたかな？ 取引には問題ないってレナードのおにーさん…… 宰相？ がいいって言ってくれた。もうちよつと細かい取り決めをして、契約書に仕上げるよ。それでいい？

いやいや、違うよ！ こっちではそれから更に二年経ってるけど、

あつちじゃ変わらないし！ 気にしないでよ。いつの時代がとか僕が何歳とか！ 大体でいいよ大体で！ 過去は振り返らない男なの僕はっ！ …… なにその溜息。モテない？ うわ、言ったなその一言！ いくら… ああもういいや。

ねーちゃん？ ああ……。

そうだね、うん。多分大丈夫かと思う。でもそろそろ仕上げ時かと思うけど？ …… それはそっちで何とかしてよ。僕だって忙し…… ！ ちよつと、何で知ってるのさ？ ああそうだよ、もう火竜と契約して四大竜揃えちゃった。すっげえ綺麗だよー？ ねーちゃんに見せなきゃ！

じゃ、その話はまた決まったら電話するよ。
顔見せるよな。

たまには

* 特別企画 番外編 後編 * (後書き)

元来お喋りな男なんです。

1 対峙

私はまだ陽が昇らず薄暗いなか目を覚ました。すうつと息を吸い込むと、澄んだ清浄な空気が入ってくる。朝の、匂いだ。

もそもそと起き上がり、持っている荷物の中から男物の服を取り出した。濃紺の綿のシャツを着て、生成りのズボンを履く。上下の服を革のベルトで締め、皮のブーツは紐で編み上げた。

仕上げに 背の半ばまである髪をゴムで無造作にひっつめる。

それから水を一杯飲んで、いつもより大きく深呼吸。パンツと両頬を叩き気合を入れた。

中庭に続く腰高窓を開けて、それ程高さもない窓枠に手を置き、足を引つ掛けて降りようとしたら、薄暗くてずるっと手が滑った。

「わっ!」

ぎゅっと目を瞑って落ちた衝撃に備えたけど、何故かふわりと抱えられる。

……抱えられる？

「おはよう、ウンノ」

「きや…… ジ、ジエネ？」

危うく悲鳴を上げそうになった所を慌てて手で押さえ、声の主に目をやるとジエネシズが私を抱えてくれていた。腰高窓の下背を壁に預け、座っていたジエネに私は落ちたらしい。

なんで……??

「こうしていると、初めてウンノが召喚されて来た時の事を思い出すな」

穏やかな目を向けながら、初めての出会いを話すジエネ。ああ、なんだか遠い昔のような気がする…… じゃなくて！

「ちよ、ジエネ！ どうしてここにいるの?!」

「こうなる気がしたから。待ってて正解だな」

「いつからここに？ ずっと座ってたんですか？」

「ずっと、というほどではないな。会議が終わってからそう時間は経っていない」

でも、私に触れるその手や服はひんやりと冷たかった。初夏とは言え朝方はまだ冷える。会議が終わって、そのままこの窓の下で見張っていたのだろうか。

抱えられたままでは居心地悪く、それに私には行かなければならない所がある。このままジエネとくっついていたい誘惑を断ち切り立ち上がるうと身じろいだけど、体ごと抱えられている為うまく力が入らない。

「下ろして。私ちよつと用事があるんです……」

「用事？ 何の」

「あー…… えと、ちよつとそこまで」

「ちよつと？ そこまで？」

そういつとジエネは私に顔を近づけて、至近距離で視線を絡ませる。

「どこに行く気だ？ こんな早朝、一人で」

深い海の底の色をした瞳。私が大好きな瞳。

私がかれからどこへ何をしに行くか、ジエネは予想はついているようだった。

だからといって、止められる訳には行かない。

「いいじゃないですか、私の勝手です。大丈夫です。

だから離して下さい」

「駄目だ」

堂々巡り……。

ジタバタしてみても鋼のような腕はびくともせず、しまいには抱えられたまま立ち上がってしまった。 うわわわわ、お姫様抱っこ

……！

「では俺も勝手にさせてもらおう。なに、俺が好きで付いて行くだけだから気にするな」

「気にします!」

「俺じゃ頼りにならないか?」

それ、卑怯だよ……。

ならないわけない、むしろ全てを委ねたい。でもそうしたら『私』の意味が無くなってしまふ。私が行かなくては意味がない。

「それは別の問題ですつ。私は……」

「出来ることならば、このまま閉じ込めて置きたいんだ。すべて終わるまで安全な場所に居てもらいたい。……だがウンノはそれをよしとはしないだろう? せめて傍に付き守らせて欲しい。目の届く範囲で」

やっと私を下ろしたかと思うと私の足元に片膝を付き、左手を自分の胸へ、右手は私の右手を取りキスをした。

「私は貴女を守ることを魂に掛けて誓う」俺に守らせてくれ、ウンノ」

手から唇を離し、じっと私を見上げるジェネ。この騎士の礼、ラメリナの王城でジェネが私に誓ってくれた。それを目の前で再現されて……。

ああ、もつっ。

立ったままだった私は、勢いよくそのままジエネに抱きついた。ぎゅゅと首に手を回して頬を寄せる。

「ずるいよジエネ！ 今そんな事されちゃ私……！」

「どうなるんだ？ 言ってみろ」

「…… 嫌です」

「では、言う気になるまでこうしてやる」

そう言うとジエネは私の顎を手で捕らえ、私の唇をジエネのそれで塞がれた。

「……」

前にされたキスよりも強引で、荒々しい。

幾度も角度を変え、なぞられ、踏み込まれ。

呼吸もままならず吐息が交わる。四肢に力が入らなくなり、しがみつくようにしながらジエネを感じていた。奥に怯えるようにしていた私のそれも、いつの間にか応える様に絡ませて……。

おそろしく長くもあり、一瞬だったのかもしれない交差。

唇が離れ、くたりとジエネに凭れていると、ジエネが私の髪をゆつくりと撫でながら私を窺う。

「すまない。…… つい我慢が出来なくて。嫌ってくれて構わないが、俺はどうしてもウンノの気持ちを知りたいんだ」

「き、嫌いな訳ないじゃないっ！」

私が嫌う？ 何故そういうことをいうの？！ あまりに意外な言葉聞いて思わず反論した。

「嫌いだったら…… 嫌いだったらこんな事しないっ！ 私は……」

「言ってくれ。ウンノがどうしてその先を言えないのかを」

懇願するようなその深い海の色をした瞳に、ついに私は心の底にあつた思いを吐き出した。

「だって……。元の世界に戻ったら、絶対またジエネの所に帰れるって約束できないからっ！ 言葉を残すとジエネが困る！ ……縛りたくないの！ 私なんか縛られて欲しくないの！」

溜まっていた言葉を一気にジエネにぶつけたけど、すべて吐き出したら高ぶった気持ちは急にしおれてしまう。

「…… でもね、私はここがいいの。ジエネの傍がいい。傍に居させて欲しいの。契約した召喚だから、一度は戻らなきゃいけない。でも、また戻ってこれたら。その時は……」

「ウンノ！」

「きゅっ」

きゅっつと抱き締められ、私はジエネの腕の中にすっぽりと包ま

れた。

「また戻れるよう、一緒に方法を探そう。一緒に、だ。……だから、俺と共にあってくれ」

一旦体を離し、私の頬を大きくて少しザラツとした無骨な手で沿わせる。

その掌が少しの湿り気を帯びていることに気付いた。

ジェネも緊張してたんだ。

それが分かり、ますます私の心臓は高鳴る。ジェネの瞳に今映るのは私だけ。

居場所、見つけた。

私を、求めてくれる。丸ごと、求められている。

嬉しい。

「それでも『今』は私の気持ち、言葉にできません。でも。でもね？ 一つだけ…… ジェネ、私の名前呼んでください」

「ウンノ？」

「うっん。翔子（しゅうこ）って」

「…… ショーコ？ ショウコ……」

「私はシヨークがいいな。ジエネだけ、私の名前ちゃんと呼んで欲しいな」

「シヨーク」

少し舌足らずに聞こえるわざと言わせた『シヨーク』。その名前がジエネの口から発せられるだけで、私の中の足りないピースがカチリとはまったように満たされた。

両頬をジエネの手で挟まれ、伝わるその温もりに心地良さを感じる。

最初から、私はジエネに甘えていたのだと思う。頼りにもしたし、姿が見えなければ不安を覚える。だってそれは『好き』だから。

でも今は『好き』と口に出せない我儘を許して欲しい。これも甘え、かな？

「シヨーク。好きだ」

ジエネはその瞳の奥に炎を宿しながらゆっくり顔を近づけ、私は目を伏せて再び受け入れた。

どの位の時間が経ったのだろうか……。

これから向かわねばならないのに、たつぷりとジエネからキスの嵐がそこかしこに降り注がれてしまい、よし行くぞ！ という意欲がしぼんでしまった。

折角気合入れたのに！

「ちよつとジエネ、離して下さいよ」

「まだ駄目だ」

「もういいでしょ？」

「駄目だ。これでも精一杯抑えているんだから、許せ」

ああ、もうっ！

ずるいじゃない、そんな言い方。私だって…… いやいや、『だつて』じゃないよ、流されちゃそれこそ駄目だ！

どうして私が冷静になっっているかというところ……。

「では光の。少しは協力願えるということではよろしいか？」

（はい、気持ちは充分通われているので。”繋がる”程にはまだ未熟ですが、今の姫の行動により些少ではあります。力が力をお貸しすることが出来ます）

「やったー！ はやくやみのところ、いこ？」

視線を横にやれば宝珠にいた飛沫と疾風が、再びやってきた光の精霊と話し合いをしていた。

（私も早く皆様のお仲間になりたいです。姫が早くその殿方と契りを持って頂けたら直ぐにでも契約を交わした……）

「わー！ー！！」

慌てて声をあげて、光の精霊の言葉を遮る。駄目ええそれ言っちゃ！

「どうした？ ショー」

「わ、あのっ！ ななななんでも！」

「水と風の精霊がいるのは見えるが…… もしかして光の精霊と話しているのか？」

「へっ？」

と思っただが、ああそういえばと思い当たる。ジェネには四人の精霊達を見えるようにしてあるけど、光と闇に関しては適用外だった。じゃあ、今のも聞かれてない…… よね？
ジェネは少し目を眇め、そして思案顔をした。

「光の精霊は二度ショーコの前に現れた。

出現条件は

一体？」

「ジエネ、私行かなきゃ！」

わざとらしい程に声を張り上げ、ジエネの思考を中断させた。だつてまずいじゃない？ 絶対前回の事、覚えてると思うもん。

ジエネはまだ私を離してくれないけれど、ようやく私の言葉に耳を傾けてくれた。

「わかつている。

王太后の所、だろ？」

「うん。闇の子…… 闇の精霊がね、王太后と消える時に私に向かつて言つてた…… 『助けて』 って。私が行かなきゃ駄目なの」

「おそらくその場にはジュノーもいる。あいつはショーコを狙つてくるはずだ。そちらを引き受ける。 ショーコ、もう俺と一緒に嫌だとは言わないな？」

「言わない。…… ねえジエネ？ 私の言葉、ちゃんと聞いてくれる？」

私の改まった声に、ようやく腕の拘束が解かれて、私はジエネと立って向かい合う。

二十三センチの身長差。武人らしく大きくて遅しい、けれどとてもしなやかな身体。整った顔立ちにのせる表情は、初めて会った時には考え付かないほど私に色々な感情を見せてくれる。

今も私を見つめる瞳は甘く、優しさに満ちていた。私を好きだと言ってくれて、私を溶かしてくれる唇の味も、甘いという事を知った。信じられない位幸せな気持ちに乗せて、ジエネに『お願い』をしました。

「ジエネ、お願い。私と一緒に行って欲しいの」

するとジエネは、今まで見たことのない、全開の笑顔で答えてくれた。

「分かった。共に行こう」

”私の精霊姫”

「いつまでそうやっているんだ？」

あれからジエネは『仕事モード』にキレイに切り替えた。甘さの気配を微塵も感じさせない『隊長』の貫禄だ。

それに対して、私は……。

「だって……、あんなセリフにあんな表情は反則ですよ！目が溶けて流れるかと……」

私は両手で目を覆っていた。正確には足元だけは見えるようにして歩く。

あの低音の美声で『俺の』って言われて…… さらにあの笑顔は目に毒だ。殺す気か！

二人で、早朝の静かな回廊を歩く。この城の人達が起きるには早すぎる時間。ジエネと私の足音だけがコツコツと律動的に聞こえる

だけ。

向かうは『王太后の間』。

私は場所を知らない。けれども、闇の精霊の気配が濃い場所に向かっていて。徐々に濃くなるその気配に少しずつ息が詰まる。

小さく、疾風に声をかける。

「疾風、結界を。私とジエネにお願い」

「わかりました、ひめさま」

途端、先程までいた中庭の、緑濃い爽やかな空気が身を包む。

昨日の夜は、イル・メル・ジーンに精霊達の扱い方『実践編』を学んだ。闇の精霊と対峙する時にうんと有効活用出来るように。

私がつまぐ扱えなければ、折角の精霊達の力が生かせない。

地・水・火・風の精霊の力は、お互いに作用する物であって、闇にはあまり効かないらしい。四つの力が合わさったからこそマルの部屋にあった障壁が取り除けたのであって、単体同士ではどうしても敵わない。

部屋に向かう前に、マルに付けていた焰と息吹を引き上げた。四人揃え、闇の子と対峙するためだ。

闇に対抗するには、光。

光の精霊を契約して闇に対抗させるのが一番手っ取り早いのだけど……ね？ うう、ジエネに頼むというか、そのタイミングってどうなのよ？

そりゃ私としてもジエネがいい。いいというより、むしろお願いしたい。でも、どう切り出すの？ ハルにお願いしたとき……思い出してみても今ほど緊張はしていなかったように思える。義務だからと自分に言い聞かせていたし、ええと……『ソレがどういう事をするのか』を深く考えていなかったからじゃないかな。

今ここでジエネに切り出すのは……。無理無理無理！！ 想像すら出来ないし！

闇を何とか出来そうな考えもある。現に私にはまだ視えないはずの闇の精霊が視えたから。そして一度だけ光の精霊は力を貸してくれるらしいので、これらで王太后から闇の精霊を切り離そうと思う。

それにしても…… なんて濃密な闇の気配なの？

一歩ずつ歩く度に、足が重みを増していく。徐々に深くなる泥沼を歩いているかのようだ。

おそらく、普通の精霊使いでは敵わないだろう。それほどまでに強すぎる瘴気。精霊使いであるからこそ、気配を敏感に感じて取り込まれる。

すぐ隣を歩くジエネは、その気配を余り感じないのか特に変化は見られず普通に歩いている。でも私は……。結界を張ってもらったにも関わらず、足を一歩踏み出すのも、空気を一つ吸い込むのも過大な努力が必要だった。

徐々に歩く速度が弱まり息切れをする私を、ジエネは心配してくれたけど、それよりも早く行かなきゃ！ というその思いだけで、鉛でもくっついたかのような重い足を動かして一歩ずつ前へ進む。

「まってひめさま」

闇の気配が凝縮されたような場所から一つ角を残して、疾風が緊張した声で制止の声をあげた。

私はグッタリと壁に身を預け、制する理由を心声で問う。これから先の相手に気付かれない為と……。息切れがして声にならないか

らだ。

「かどまがったら……ぼくたち、やみでせいっぱいになっちゃう」

「姫さん。俺達が束になって、やっと闇のに向き合えるんだ。悔しいがこればかりはどうにもならねえ。だからよ……敵意ある人間を相手にしてる余裕がねえんだ」

「……」

疾風、焰、息吹、飛沫がそれぞれ悔しそうな顔を隠せなかった。それぞれその分野では最も強い力を持つ精霊なのに、闇には敵わない……それでも、私を守ろうとしてくれている。

「姫君、私達は人間相手に関わる余裕が不本意ながらありません。全力で闇のに相對して、必ずやこちらに戻せるよう力を尽くしますので……その騎士よ。姫君を、頼む」

「俺も」

「ぼくも」

「……」

四人の精霊達が、ジエネに頭を垂れた。

「!!」

精霊が、契約者以外に礼をする事はまずありえない事。それは服

従を意味するからだ。ジエネに向かって四人とも『私を守るように』頼んでいる。私の為にそんな……胸がきゅうつと痛くなった。

ジエネは頭を垂れる四人の前で、驚いた様子は一つも見せずただ短く「わかった」と言った。

「ねえっ…… ジエネ。精霊達がここまで言うほど危険な場所なのよ？ ジエネがまた怪我しないか…… 怖いっ！」

今度こそ怪我で済まないかもしれない。私を守るために、すでに幾つか怪我を負っているのだ。私はいい。だけど、ジエネが傷つくのは怖い。一緒に行つて欲しいと言つたくせに、それでもそんなお願いは聞かなかつたことにして欲しいと訴える。

引き返すなら今だと見つめる私にジエネは視線を合わせ、私に言い聞かせるように声に出した。

「一度守ると決めた誓いぐらい、最後まで守らせる」

なんて殺し文句なの？！

（ 一度守ルト決メタ誓イグライ ）

何故だか急に泣きたくなつた。真摯な声でその言葉をその唇から紡がれ、真摯な瞳でその誓いを力強さでもって伝えられる。

（ 最後マデ守ラセロ ）

じわり、じわり、と私の心に沁み込んでいく。

咄嗟にジエネの手を取り、私も手の甲に口付けた。

「私も。私もジエネを守ります。ジエネの手の足りない所を支えさせて下さい」

私だって、守りたいものが出来たのよ？ 目の前の、あつという間に私の心に居場所を作つたジエネシズ・バルドウ・レーン。ひよつとしたら足りない所なんか無いかもしれない。充分足りているのかもしれない。

けれど、体調を守る事や食事の用意なども、『守る』事には違くないと思う。それに私はこの世界に来て『力』をつけたし、ジエネが持つていない『力』でもって、支えさせて欲しい……。

そう気持ちを伝えると、ジエネは暫く固まっていたけどほんの少

し視線を横にずらした。

「参るな……」

「え？」

「折角抑えてたのに、ここで俺を煽るな」

大きく息をつき、軽く前髪を掻き揚げたジエネは、私の両肩に手を置いた。

「…… ショーコ、行く前に俺の気持ち全てを預ける」

真剣な目に私は体の全ての自由が奪われたように囚われる。心臓の鼓動は高鳴る一方で、体中の熱が頭に集まった様にぼうつとなった。

「俺は、ショーコの全てが欲しいんだ。気持ちは勿論だが、その笑顔や泣き顔の表情、俺に話しかける可愛い声…… 全て俺のものにしたい」

肩に置いた手でそのまま引き寄せられ、強く抱き締められた。そして、耳元で低音を響かせながら囁く。

「勿論、身体も」

「……っ！」

「それほどの欲が俺の中で溢れかえっていて、抑えるのが辛い。闇を手に入れたら…… 一刻も早くショーコを」

(たべてしまいたい)

より一層声を落として囁かれた言葉は、声の大きさ以上に私の心に響いた。

う、うわっ……！

心の中は恐慌を起こして思考回路は破綻した。私が混乱しているのを見て取ったジエネはそつと体を離し、それまで貼り付けていた無表情をふわりと緩めた。

「嫌か？」

「いつ……、あ……」

余りにも直接的な言葉に、本当は願ったり叶ったりな行為だけど、恥ずかしさが先に来て思うように声にならなかった。そんな私を充分見越しているジエネは、言葉で私の心に刻んでいく。

「勿論、シヨーコの世界から再び戻せるという約束を取り付けてからだ。俺は何が何でもシヨーコを手に入れたい。今まで生きてきた中でこれほどまでに願うのは初めてなんだ。カケルやイル・メル・ジーンを締め上げてでも俺の腕の中に戻すからな？」

覚悟しておけ、とその目が言う。知らず私の喉がごっくんと鳴った。ジエネって、肉食獣の様な体つきだと思ってたけど、中身も肉食男子だったか！

私を欲しいといってくれるのは、存外心地のいいものだど驚く。リゾートホテルで働いていた時の同僚であるサヤカは、「彼ったら私をモノ扱いする！」と怒っていたけれど、丸ごと私を受け入れてくれるというジエネは、私の全てを認めてくれてるから。従属、

ではなくて。

元の世界で私は、出所の不確かな存在で足元がぐらぐらしていたけれど、ジエネが傍に立つならば私は『私』になり、真っ直ぐに立てるだろう。

ジエネは大きな掌で私の頭をポンと叩き、反対の手は剣の柄を握った。

その行為をされただけで、嘘みたいに私の不安な気持ちは飛んでいき、意思が固まった。二人で行くから。ジエネと一緒にだから乗り越えられる。

安心して、お互いの背中を預けられる。

もう一度頬を叩いて気合を入れなおし、ぐつと足に力を込めた。息苦しさは相変わらずだし、ねっとり絡みつく気配も重い。けれど、しっかりと前を見据えて気持ちは高める。

「ジエネ、行こ！」

定まった気持ちに気付いたのか、ジエネは一つ頷くとその先の王太后部屋がある周辺の様子を窺った。

「王太后の部屋の前に三人。中には…… わからないな、強い気配がして。これが闇の精霊の障壁というものか？」

「私にはもう暗闇にしか見えない。でもとにかく闇が最も濃い場所に王太后様と闇の子がいるわ。私はそれに集中するから。ジエネ、お願い」

「任せておけ。まずは入り口を片付けてくる。待つて
る」

言うが早くジエネは低く身をかがめたかと思うと、足音すら立てずに一気に距離を詰め、剣すら抜かずに一撃で倒したようだ。ようだ…… というのは、私にはやはり暗くて視界が悪く、見えないから。私は重くなる足を引きずりながら扉に近づいた。

倒れた三人は意識を失っている…… よかった。

私は物語の中でしか命のやり取りを知らないから、見たら恐怖で足が竦む。 というか…… ジエネ、ひよっとして私がい
るから？ 私に見せない為、なのかな。

いかにせよ、こつも視界が悪いと不都合だ。焔に頼んで少し火の光球を作り出してもらい、照らす。闇相手だからか、夕闇ほどの明るさにしかならない。でも見えないより上出来だ。

重厚な扉の前に、二人で立つ。

この向こうにひよっとしたら誰か待ち構えて、入るなりグサツてことはないのかな……？ ジエネも警戒しているのか、即突入、という力技はかけない。
すると。

「ジエネシズ、いるんだろ？ 来いよ」

ジュノーの声だ。

扉の内側からかけられた声に、何故かジエネは何のためらいも見せず把手に手を掛けた。

「えっ？ いいの？」

ビックリしてジエネに聞いたら、「大丈夫だ」とそのまま扉を開けてしまった。知り合いかも？とは思っていたけど、あのような殺気を込めた切り合いもするし、一体どんな関係なのかな。どうも底の方では信頼関係が結ばれているような気がする。

「 入る」

ジエネが扉を開けた途端一層濃い闇の気配がし、それが一度にぶつかって来た衝撃に私は片膝をついた。

「つ、く……」

「シヨー」

焰の光球は見えていて、辛うじて視界はそれなりに保たれているけど、『闇が重い』。

疾風に結界を頼んだけど、もはや意味を成さないものになっていた。早くなんとかしないと、私、持たないかも……。

「ジユノー、王太后は？」

私の腕を掴んで支えてくれたジエネは、ぶらりとただ部屋の中央に立つ男に声を掛ける。……この人がジユノー……。思ったよりも小柄で、浅黒い肌色、髭を蓄えて口の端をニヤリと歪めていた。何より、愉快そうに光るその瞳が印象的だ。そのくせこちらが少しでも動けば途端に牙を剥くだろう危うさも見て取れる。

「さあな。まだ寝てんじゃねーか？俺はここでお前が来るのを待っていただけだ」

「そうか」

言うなり、剣を抜く。ええ？ その会話だけでもう終わってしま
うの？ 何か分かりあう話って、あった？
ちっともわ
からないわ。

私は乱れる呼吸をなんとか落ち着かせ、膝に力を入れ立ち上がる。
私は私のやるべきことの為にここに来たんだ！

二人対峙して動かないその脇を、一、二歩足を進めた所だった。
不意に思い切り場違いな電子音が響いた。

ピリリリリ、ピリリリリ……

「……」「……」「……」

示し合わせたわけではないのに、三人でなんとも言いがたい『微
妙』な空気が流れた。ジュノーはこの音を知らない為に、より一層
面妖な面持ちをしている。

何度目かの呼び出し音に、ようやく動いたのはジエネだった。

腰のベルトに括りつけられた小袋の中から…… 携帯電話を取り
出したのだ。

「誰、だ？」

私はここにいるし、電話機の使い方を知るものはイル・メル・ジ
ーン位しか知らないはずだ。訝しい声で尋ねるジエネに、受話口か
ら声が漏れた。

「ちょ、出るの遅いって！」

「

翔かけるつ
? !
」

3 (後書き)

お知らせ

2月14日に、「猫かぶり姫と天上の音楽」の「ギャラリー」にて
コラボ作品が再び掲載されます

えー…… 翔が再びアチラに乱入ですw

相当引ッ掻き回して大変な事になってます(汗)お楽しみにーっ。

「あーよかった、ジエネ携帯持っててくれて。僕さ、いま団長といるから。んで、ねーちゃんに指輪を手に持っててって言うってー。じゃー!」

プツ…… ツー、ツー、ツー……。

ナニ?……。

啞然とする私に、ジエネはほんの少し天を仰いだかと思うと「……と、いうことだ」と言うにとどめた。
な、なにいいい!!!

「何なのー!」

私は闇の重さも息苦しさもそれどころじゃない。なんだ? なんなんだ翔は!

一気に沸点まで上がった気持ちの矛先は何故かジエネに向けた。

「ちよつとジエネ、アイツなんなのっ?!!」

「え、いや、俺に言われても…… ショーコの弟だろう?」

剣を構えたまま僅かながらに狼狽する様子を見たジュノーは、堪えきれず噴き出した。

「おま…… お前でもそんな顔するんだな！ ぶはははっ！」

それこそ、お腹を抱えて転がる勢いでヒーヒー笑い出した。

なにこのカオス。

電話一本でここまで混沌カオスに陥れるとはさすが翔…… いやいや、感心している場合じゃない！

翔が必要だと言い切るときは相当重要事項だ。私は急いで首にかけていたチェーンの前にある指輪を引っ張り出した。

掌に置くといつの間にか鈍く光る白銀のその指輪は、ぼうつと輝きを増して部屋中を照らす。指輪を中心にして時計回りに空気がうずたかく巻き、天井までの間に赤黒い柱のようなものがみるみる出来上がった。

空気が、振動する。

ビリビリと肌に響き、これから何が起こるのか分からない緊張感に震えた。

そして、その柱からガラスが割れるような音と共に、目を射す程に明るい閃光がきらめく。

一拍置いて。

どすん、と何かが落ちる音が聞こえた。

明るさから目を閉じていたけれど、そっと開くと目の前には『人がいる……？』

床にペタリと座り、髪は肩までのサラサラなショートボブ。こち

らに背を向けているけど女性のようだ。左手には弁当、右手には箸を持ち…… パンツスーツを着ている。……って！

「お…… お母さんっ?!」

「ん？ ああ、翔子じゃない。久し振りー？」

私が驚いて腰を抜かしそうだというのに、母親は暢気に弁当の続きを食べ始めた。

「ちょっと待ってよ。あと三口で終わるんだからっ」

「……」

ああ、そうだった……。母親と翔はこういう性格だ。マイペースなんだよね……。

盛大に大きい溜息を吐くと、呆然とこちらを見る二人に説明をした。

「あの…… すいません、こちら私の母です」

「どうも、母です。んぐっ！ ちょっと、翔子、お茶ない？ お

茶！」

「ないわよっー！」

あと三口と言った割には一口で食べ、ガサガサッとコンビニの袋に容器を放り込んだ。そしてカバンから鏡を取り出し「海苔よーし、ご飯よーし」と確認して、立ち上がって両手を開き振り向いた。

「翔子！ 会いたかったわー！」

「最初に言いなさいよっ！ 今から感動の対面なんてタイミングずれすぎ！」

ギュウツと抱き締められても、未だ混乱する脳内では再会の喜びどころではない。とにかく、ちょっと待て、だ。

「おおお母さんっ！ ねえどういこと？ どうしてお母さんが？ どうして指輪から？ どうして」

「そんな一度に言わないでよ。…… あ、さては翔め……。翔子、聞いてないって事ね？」

「だから何を?!」

「まあいいわ」

「よくないっ!」

母親はヒョイと私の後ろに立つ二人に目をやる。暫くじっと見つめ、目を眇め、…… たっぷり間があいてからそれぞれ指差した。

「んーん、ジェネシズ君とー、ジュノヴァーンね？」

呼ばれた二人は訝しげにその真意を探ろうとしている。突然出てきた私の母親を名乗る人物が、何故か自分達の名前を知っている事に疑問を持つ。

先程まで二人の間にあったピリピリとした殺気はとうに無く、抜き身の剣は翔の電話のあと鞘に収めていた。とにかく、この母親の

正体は？ と見るその目はひどく胡乱げだ。

「やだ、ジュノー忘れちゃった？ うーん、久し振りだからしょうがないか」

あははと笑うお母さんは親しみがこもった声でジュノーに声をかけた。ええっ、知り合い？

ジュノーはそう問われて、注意深く三歩近づきよく顔を見た。

「まさか？ お前っ…… リインか？」

「そ」

「は？」 「え？」

ジュノーの問いに簡潔に答えたのはお母さん。そしてジエネと私の声が重なった。

「お前何だそれ！ そんな見た目犯罪じゃねーか！ 結構いい年してるくせになっ！」

「あらいやだ！ 女性に年齢の事言っんじやないわよ馬鹿者っ！ 大体ね、日ごろの努力がモノを言うのよっ！」

「……………！！」 「……………！！」

言葉の応酬が続く中、並んで立った私とジエネは啞然としていた。

「シヨー」…………… 聞いてもいいか？」

「……聞かれても私分らないわよ?」

「今、ジュノーはショーコの母親の事を『リイン』と言ったな?」

「言ったわね……」

いや、お母さんは『海野 鈴子』だったと思うけど……。

「つまり、翔の母親でもあるんだな?」

「そういうことになるわね」

「では……。あくまでも予測に過ぎないが……。前の『精霊姫』と同じ名前……。つまり、同一人物ではないのか?」

「っ!! おかー!ー!さんっ!! どういうことっ?」

ぐりんつと勢い良く首を回し母親を見ると、何故かジュノーの髭を引つ張っていた。ちょ……。何その傍若無人さ。

「てめっ、離せ!」

「うるさいわね。あんな小僧がオヒゲ生やしてたらそりゃ引つ張らないと申し訳ないからだわっ」

「意味わかんねーよっ!」

「まあとにかくさ」

無理矢理話を畳んだ母親は、ある方向に真っ直ぐ顔を向けた。

「急がなきゃいけないようよ」

すとと空気が変わった。

真剣な顔で見据えるその顔は幾許かの焦りと厳しさを含んでいる。

「翔子、いらっしやい。一緒に行くわよ。そこの二人はここで待機ね」

「お母さん?!」

「…… 疑問なら後で答えるわ。ああ、でも簡単に言うておく。

確かに私はリン…… 精霊姫、と呼ばれていたわ。なんやかんやで日本に行くことになったけど、翔子と翔の産地はここよ」

「産地って!」

「さ、急ぎなさい」

闇の圧力以上に、母親から受ける脱力の方が今は大きく感じた。

「待つてください！」

母親と私が歩き出そうとしたその時、それまであまりの光景に呆然となっていたジエネが鋭い声をあげながら前に回りこむ。

「お二人で向かわれるには危険です。私が先に」

「いいえむしろ逆よ？ ジエネシズ下がっていなさい」

キツパリと断る母親。私は訳が分からないまま、しかしきつとこの意見の方が正しいと直感で思う。

「ジエネ、大丈夫よ。待っててくれる？」

「しかし、シヨーコ……」

前精霊姫の命令を聞くべきだろう。だけど私の身を案じ、躊躇いと心配という感情が私を見る目で伝わる。そんなジエネに、私は安心させるように一つ頷いてみせた。

その様子を見ていた母親は、ニツタリと人の悪い笑みをしたけど見なかった事にする。

…… ああ、後が怖い。

改めて、行くべき場所へ向き直った。

真っ暗に淀んで人を拒絶する意思があらわな、王太后の寝室。今

でさえ心配が重く辛いのに、そこに向かえるのかどうか……。そんな私を勇気付ける為か「私が付いているから。一緒にね？」と母親が肩を叩いた。

「じゃ、行つてきます」

決意を込めてジエネに一言残し、私はその部屋へ一歩、一歩と近づく。

…… 苦しい。濃い闇が押し掛かり、足を動かすたびに足が、肺が、悲鳴を上げる。滲む汗が目に入ったけど、払う事すら出来ない。

しかし母親は何故かケロリとして、すでに扉の前へ立っていた。

「は、あ……、お、母さん。どう、して、そんな平気、なの？」

息も絶え絶えになりながらも聞くと、一旦目を伏せたあと複雑な表情で笑った。

「私にはもう精霊の力がないから」

だから、闇の力の影響力もさほどではない。

それってどういうこと？

何度目かの疑問が浮かんだけれど、それは後で聞く他ないだろう。口元まで出かかった言葉を無理に飲み込んだ。

私が追いついたのを見た母親はドアを二度ノックした。

「ね…… いるんでしょタチアナ。開けるわね？」

返事を待たず勢い良くドアを開けると……。

マルちゃんのお部屋よりもより瘴気が満ち、どろりと淀むその空気は『妬み・恨み・嫉み』という負の感情がむき出しに表れていた。目には見えないけれど渦巻くそれらは、私の心に容赦なく突き刺さる。

痛い！ 苦しい！ …… 熱いつ！

例えるならば、ドロドロの溶岩がお腹に溜まりながら暴れて周囲を溶かしているかの様だ。

これほどまでの感情を溜めていたの？ 王太后様は……。あまりに強い感情、そして感じた事のない荒れ狂う黒い欲望に、私は悲鳴を懸命に堪えた。

その主はと探すと、闇の深淵に沈む王太后の姿が見えた。意識は無く、上半身だけ辛うじて床から出ているけれど飲み込まれるまでには時間の問題だ。

「お、王太后様っ！」

マルのお母さんが消えてしまう！ と、今にも潰されてしまいそうな体を引きずって近づこうとした。しかし、「ダメ！ 近寄っちゃいけないわ」と止められた。

「でもっ」

「下手に近寄ったところで一緒に飲まれるだけよ。それよりも翔子にはすることがあるでしょ？ 私は時間稼ぎするから任せて。出来るだけ引き伸ばすから…… タチアナが全て飲まれたら、闇の暴走が始まる。その前に『決めて』ね？」

そして私の一步前へ出て、王太后に向け声をかけた。

「タチアナ……？ 私の声聞こえる？」

それはひどく優しい声だった。ゆっくりと語りかけるように続ける。

「私よ、リインよ…… うーん、久し振りすぎて忘れちゃったかしら？」

もう一步、進む。息をすうつと吸い込む音が聞こえた。

「起きなさい！ どこまで自分に甘えてりや気が済むの？！」

どこにそんな覇気が隠れていたかと思うほど、張り上げる声はビリツと空気を切り裂く。

すると…… 王太后の瞼がピクリと僅かに動いた。完全に意識を飲まれているわけではなさそうだ。そして飲み込まれる勢いもほんの少しスピードが落ちる。

私は、私の出来ることを。

緩んだ今の内に、四人の精霊に命を下す。お願いではなく、初めて指令をした。光の精霊も一度だけの助力を約束できているので、その旨も伝える。

そして、後は私の問題。

すでに一步も動けず膝崩れそうになる上半身は、床に手をつき両腕で支えていた。黒い感情に翻弄される心を叱咤しながら、なん

とか王太后を飲み込む闇を見やる。

そこには、光と同じ三歳児程度の大きさをした闇の子が私をじつと見ていた。黒い涙を流しながら必死に『助けて、助けて』と口を動かしている。きつと本人も制御できないほどに育った闇の力に恐れをなしているんだ。

はやく、しなきゃ！

「父親から政略結婚の道具にさせられて、王妃になったタチアナ……。欲しい物はすぐ手に入り好き勝手してたわね？　そう、物だけは。……無関心な振りするのやめなさいよ。あんたこんな闇が膨れ上がるまで腹に溜めてたんでしょ？　せめて小出しにすれば良かったのにね。」

母親の言葉には、後悔が含まれているように私は感じた。もっとああすれば、こうしとけばという自責の念。その声により王太后の周りの黒き渦は大きなうねりとなり範囲を広げた。

これは一体？

俄かに変化が訪れた。悪い方へと。

「……リ、イン……」

小声で掠れて聞き取りづらい囁きが漏れた。そちらの方へ視線を向けると、僅かに開いた王太后の相貌が見えた。しかしそこに映る感情は……怒り。

「タチアナ？」

「今、更、何をしに来たっ！」

黒い涙を流し、怒りの声をぶつける。抜き身の剣を突きつけられたように私はゾクリと体を震わせた。

「そりやアナタと向き合うためよ　　今更と言われても、これはやらなきゃいけないことだわ。お互いに」

「お互いに？　ク、ククツ。　お前はいったい何様のつもりでこの私に口をきいているの？　道端に転がってるような薄汚い田舎娘が運よく馬鹿な精霊達を手懐けたからって、精霊姫を名乗るなどおこがましいのよ！」

王太后はおかあさんが精霊姫だった頃を、自身に抱えていた黒い感情をむき出しにして責める。

「私は……　私はお前が憎い！　大戦のさなかないつの間にか現れて精霊姫を名乗り、英雄であるクランベルグを惑わし、あまつさえ子供などっ……！」

目からは闇の子と同じ様に黒い涙がとめどなく流れ落ちる。

「お前に私の気持ちなどわかる訳がない！」

「そうよ、わからないわ。わかってたまるかってのよ！　アナタ相当甘ったれね。『ズルイズルイ』言うだけの単に子供じゃない。アナタさ、自分で何か努力した事あった？　宰相の娘であり王妃としての立場なら、色々出来たはずよ？」

「　私に何が出来たというの？　私はただお父様の道具でしかなかったのだから！　それでも本来なら私が……　この私が

全てを手に入れるはずだったのに。お前が現れたばかりに克蘭ベルグも精霊達も…… 何もかも手に入れてっ！」

「アナタがアルゼルを気に入っているのは知っていたわ。だから何？ 自分から行動一つ起こすことなく黙っていたら何も始まらないのよ？」

どこまでお子ちゃまなんだか」

「私は好きでもない男に無理矢理に嫁がされて、子を生せぬとお父様に責めたてられて…… そればかりか、王はあの卑しい洗濯女に子まで生ませてっ。…… そんな屈辱に耐えていたのよ？ なのにお前は全てあっさり捨てて逃げたじゃないの！ あの人も、精霊達も何もかも！」

ふ、と王太后の目が危険な色を灯した。

「もう遅いのよ…… 何もかも遅いのよ。お前など、この国はもはや必要としていないの。不要でしかないお前は闇に飲み込まれて消えてしまえばいいのよ！！」

怒りの感情に身を任せたままに、手を振り上げて黒く淀んだ黒い塊を母親に投げつけてきた。

「おかあさんっ！」

闇の精霊の子に集中していた為に反応が遅れてしまった！ 急いで精霊達に命を下そうにも間に合わない……！

黒い塊を当てられた母親はそのまま闇に取り込まれて、王太后と共に徐々に沈んでいく。

「あつ…… あ……」

私はなんとか助け出そうと、もはや匍匐前進の体となりながら必死に近づく。

「おかあさんっ！ おかあさんっ！」

しかし沈むスピードの方が速い。ありったけの力を足にこめて立ち上がり、ズルズルと足を引きずりながら歩みを進める。

このままでは母親も王太后も……！

母親は王太后に近づき、しっかりと抱え離れないようにしながら顔が沈むその前に、私を見た。

「……」

まだ、希望は捨てない。

必死に近づくけれどより一層重くなるその歩み。

ふと自分の足元を見たら、いつの間にか闇の波が押し寄せて徐々に沈みかけていた。

「きゃっ！ う、動けな……！」

「ショーコ！」

何の前触れもなくグイッと腕を引かれて、私は後方へと投げ出された。衝撃で一瞬目がくらむ。今の声はジエネ？ その声の主を探すと 私と入れ替わりに闇へと沈んでいくジエネが見えた。

「え、あ……？！ いやあああつ！ ジエネ、ジエネー……！」

必死に腕を伸ばし、ジエネの手を掴みかけて、指先だけが絡んで……。

外れた。

黒い闇の深淵へジエネの腕が、肩が、顎が、沈んでいく。焦点の合っていない深い海の底の色をした瞳が僅かに開き…… 閉じられ。そして全てが飲まれた。

「あ…… ああああつ……！」

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！

絶望、焦燥、喪失、悲嘆、狼狽、怒り 全ての感情が一度に押し寄せ混乱を起こした。このままでは駄目だ…… マルの母親をこのままにしておけない、お母さんも助けなきゃ！ それから

それから……。

「ジエネー!!」

私を『最後まで守る』と言ったけれど！ 私は身代わりなんて望んでない！ そんなのは駄目だ！ 私をもっともっと甘えさせてくれるんじゃないの？！

一度に來た感情の波が最後に残したのは

怒り。

「ふざけるんじゃないわよっ！ 何よみんな勝手すぎるわっ！
少しは周りの…… 『私の』気持ち考えなさい!!」

怒りの感情をそのまま声に乗せて、私は今や闇の子しか立っていない闇の深淵を睨みつけた。沸騰する頭で勢い付けて精霊達に命を下す。

「焰ひび！ 飛沫しぶき！ 息吹いきき！ 疾風はやて！ 闇の子を縛りなさい!!」

『承!』

私はとにかく一瞬でもいいからと、みんなに伝えていた。力の違う闇を縛るのは焰達にとつてかなり力を奪われる行為でもある。必死に私の指令に従おうと力を込めた。

かちり、と闇の気配が静まる。

闇の子は私に目を向けて見開いたまま止まった。

そして光の精霊の力を解放させる。

光には闇、闇には光。

光で照らすことにより、闇の力が薄らぐ。闇の子の体に張り巡らされた茨の蔓の様な物が、光により霧散した。

今だ！

私は『読み取る力』を必死に使う。

じっと目を凝らし、闇の子の『真名』を探った。王太后の名付けた名前　　お願い、視えて！

玉のような汗をボタボタと流しながら必死に探る。

四人の精霊達は苦しそうな顔をして、段々姿が透けてきてしまつて今にも消えそうだ。

ル……　　ボ……？　　早く！

ル……　　ボウ……　　早く早く！！

ディル……　　ボウ！……　　『視えたっ！』

「分かったわ！　闇の子、あなたディルボウねっ！」

『視えた』瞬間、闇の子の『真名』を叫ぶ。真名とは、契約者と契約した精霊のみが知りうる名前。他に知られたらその精霊は契約者から奪える！

空間を圧迫していた闇の気配は、一気に弛緩した。私は一旦大きく深呼吸をして、両頬を叩く。

「今から新しい『真名』を授ける。私に下りなさい！」

名前を上書きする事により、王太后に再び使役されないように。

ぴったりと闇の子に視線を合わせ、私はありったけの力を込めて命じた。

「帳！」
とばり

「とば、り……」

ぼう、と光の繭が現れた。強烈な閃光が視力を奪い、腕で庇って収まるのを待った。

そして、光が収束されて。闇の子 帳を見ると、額の中
央に黒い宝珠が埋め込まれていた。急いで自分の両耳を触ると、右
耳には二個、左耳には三個の宝珠が付いている。

「や、やった……」

へたりと抜けそうになる力を慌てて押しとどめ、早速闇の子に命
を下した。

「帳、今すぐ沈んだ三人を引き上げて！」

「…… 駄目だよ。僕だけでは……」

「姫さん、もう無理だ。相当深い所まで行ってる」

「そんなんっ！」

闇の精霊の領域でもあるのに、闇そのものが敵わぬ場所…… どうすればいいの?! その言葉は絶望となり、目の前が真っ暗になる。

その時、無口な息吹がボソツと口を開いた。

「繋がる、気持ち。それは、光……」

「そうか！ 姫さん光だよ！ 光のヤツならきつと行けるぜ！」

「…… そうですね。光のは繋がりを求めています、誰かを求め繋がる感情は今一度の助力を願えるかもしれせん。その為には姫君本人が赴かなくてはならないかもしれません……」

「行く！」

即答で決めた。

何でも手があるならやる！ 手をこまねいていたって何一つ前には進まないんだから！

「どうすればいいの？」

自分の気配が少し薄れた体を両腕で抱えている飛沫に尋ねたら、数秒考えた後に答えた。

「感情…… を繋げるといいかと思います。どんな『想い』でもいいです、とにかく沈んだ人達へ姫君が感情を脳裏に想ってください。繋がったら…… とても危険なことですが、姫君自身がこの闇に沈み、見つけ、自ら触れて引き上げないといけません。」

しょう。……それでも？」

「うん、やる！」

心配そうに精霊達は私を見るけど、私に出来る事があるのならばやるだけだ！

精霊達には、滞っている闇が暴走しないように抑えてもらい、必死に『繋がり』を求めてそれぞれに対する感情を脳裏に吐き出す。

王太后様

マルちゃんの、産みの親。確かにとても酷いことをしてきた。マルちゃんの苦しみを思うと許せない程腹が立つ。義務を果たさず権利を振りかざし、人を恨み人を妬み、人のせいにする。だからといって今ある生を見殺しになんて出来ない。

今まで駄目だった物を、今から、ここからスタートしてみてもいいと思う。マイナスよりもゼロ、ゼロよりもイチ。

今まで知らなかったであろう暖かい感情を知る経験をしていけばいい。

これは…… 同情？ 憐憫の情？

お母さん

小さい頃から一日中働いていた。今ならお母さんの大変さ、わかる。理由は分からないけれど異世界に渡り、一人で私たち双子を育てるのは並大抵の苦労ではなかっただろう。私と翔は、いつもいい母親に怒ったり寂しがったりして困らせたけれど、必死だったんだよね。

私達は大人になった。これから、母親に対して色々してあげたいんだ。

これは…… 肉親の情？ 家族愛？

そして…… ジェネシズ。

言いたい事、伝えたい事、沢山あるの！ 直接目を見て話したい。
大きな手で私の頭を、頬を、撫でて欲しいの。

これは…… 愛情。

大好きなの、大好きなのジェネシズ！ あなたと繋がりたいの、
心と、指と腕と足と唇と…… 体ごと全て！

「お願い！ 私と皆を繋げて！」

胸に手をあて祈るように目を伏せた。

すると……。

（姫！ 今のお気持ちにより案内の紐を通す事が出来ます。コレ
を手繰ってあの中に沈んだ者達を見つけて下さい）

光の子が再び出現して、サツと目前の深淵に腕を振ると三本の光
り輝く紐がすいっと飲まれていった。この先に、みんながいるんだ。

「光の子、ありがとう！」

ニッコリと笑い、焰達が心配の声をあげたけど、迷わずそのまま
闇の深淵へと飛び込んだ。

どろりと纏わりつく闇はとても不思議だ。

水に潜るイメージだったけれど、歩こうと思えばしっかりと足がつく。上下左右がなく、自分がどちらを向いているかも分からないので感覚が狂う。

この中で唯一確かな物は手にした光る紐。

二本と一本に分かれている……。どちらから先に？

一瞬だけ迷い、先に二本の紐が向かってる方にした。おそらくこちらは母親と王太后様だ。

先に飲まれている為にとても深い所まで沈んでいるみたい。手繰る紐から離さない様に伝いながら走って向かった。

「お母さーん！ お母さーんっ！」

幾度か叫び、荒れる呼吸そのままに走っていたら、真つ暗な闇の中ポツリと光る二人の姿が見えた。

しっかりと王太后様を守るように母親はその腕に抱えている。王太后様は意識は無かったけれど、母親は私を見るなり「待ってたわ」とニヤリと笑った。

母親は、光る紐は見えないようだけど触ることは出来るみたいだ。コレを手繰れば元の場所へ戻れると説明をし、私が王太后様を背負って行くと話す。とにかく……。早くジエネの元に行かなきゃと気ばかりが急いでいた。

「翔子？ どうしたの？」

「え、う、うん……。ジエネが一人まだ沈んでいて、助けたいの」

「翔子、ここはいいわ。精霊に指示して早く行きなさい！」

「でもっ」

「そっか、翔子はあまり精霊の使役方法を知らないんだったわね？ それじゃ今ここに下した精霊達を呼びなさい」

毅然とした態度で私と目を合わせた。そうだ…… 精霊姫だった母親なら、使役の方法は色々知っているのよね。

「地、水、火、風…… 闇ね？ で、光はまだ、と」

私の両耳をサツと一瞥した母親は、きつと光の宝珠が納まるだるう右耳をきゅつと摘み、「さ、早く」と急かす。

うわ、理由分かってるよ絶対！ と内心ドキリとしながらも、精霊達を呼び出した。

（みんな来て！）

呼びかけると即反応があった。私の目の前に一瞬にして現れる。

「お母さん、みんな来たよ？」

「やあね、ホントに見えなくなっちゃったわ」

精霊達がいる辺りを呆然と見る母親は、半ば泣きそうな顔で呟いた。しかしその表情は即座に消し、私に次々と指示を出す。

「まず闇の子に私とタチアナを運ばせる。闇を掻き分けるのに火

と風の子を先導させる。水の子には濁った闇の気配を清浄な水で洗い流させる、地の子には回復をさせる。おっけ？」

「はいっ！」

精霊使いとしては先生に当たるので、自然背筋が伸びた。

そして、次々に焔達を呼び出して命を下す。

「じゃ、頑張りなさい。元の場所に着いたら…… 色々話しまし
よう」

そう言っただけで依然意識の無い王太后を背負い、姿の見えない精霊達によって運ばれていった。

私は急いで踵を返し、もう一本の光る紐へと飛びつく。

どこ？ どこにいるの？ ジエネ！

逸る気持ちを押さえ、心臓がはち切れそうになりながら光る一本の紐を手繰る。早く会いたい、早く会いたいと願う一心で、懸命に駆ける。

ようやく紐の先の手ごたえが感じられ、ジエネの姿が見えた！

「ジエネ！」

力なく倒れるジエネに駆け寄り、膝を突いて肩を揺すが、反応が無い……。

「い、嫌！ 起きてよ！」

慌てて脈を取るけど…… 僅かに反応はあるものの酷く弱く感じられて、それは、まるで。

「……つ駄目！ 許さないんだからっ！ 帳、息吹、飛沫、焰、疾風！ 早く戻ってきて！」

半ば叫ぶように命を下し、私はジェネの上半身を抱き起こした。血の気が失せ、体の温かさが徐々に薄れている気がする……。

「姫さん！」

「焰！」

「やべえな…… さっきの二人は精霊に慣れてるけど、この人間は…… 耐性が無いぜ」

「ひめさま、ひかりのちからを！」

「疾風?!」

「もつとひかりのちからを つよめれば からだのなかから やみだせるよ？」

「姫君…… 早くしないとこのままでは」

「飛沫……」

「光の精霊が強く現れたのは口付けの時でしたね。あの光の強さがあれば、今この人間が犯されている闇の力を追い出す事が出来る

でしょう」

「その通りです新しい我が主、精霊姫殿」

「帳？」

「光は繋がる喜びを求めています。口付け程度では完全とは言えませんが、我が闇の力を抜くには有効かと」

ささっ、どろどろ

五人となった精霊達が一斉に私とジエネに向かって手を差し出した。

「……」

焦りと恐怖で満たされていた気持ちを一瞬忘れてしまったよ！
なにこのコント。こういう場面でもお約束って出るわけ？ 空気読まないんだ？

いや、キス…… を、すればいいのは分かったけれど。ね……。
呆けたお陰で、逆に肩の力が抜けた。うん、やってみよう。

流石に見られるのは精霊といえども恥ずかしい。全員後ろを向いてもらい、ジエネの上半身を抱えた私は……。

ジエネの顔を上に向け、すごく恥ずかしい。恥ずかしいけれど……。
手を軽くジエネの頬に添えて、ゆっくりと顔を近づけ。

ジエネの唇に、私のそれを一瞬躊躇った後に重ねた。

触れる瞬間少しかさついた感触と柔らかさ、そして冷たさが伝わ

る。

冷たすぎるよ…… 温めなきゃ。

ぎこちなく合わせただけの唇は徐々に隙間なく重なり、少しでも温もりを分けようと…… 朝抜け出した窓の下でジエネにされたように、恐る恐る私は進入した。

躊躇いながらも探り当て柔らかさに怯えていると、それは急に意思を持ち主導権を握られた。

「……んっ」

キスは次第に激しさを増し、存分に私の中を侵略する。私は反応が返ってきた事が嬉しくて、やがて恍惚となり、全てを預けた。ぎこちないなりに応えもした。

貪る様に交わされる情熱。

上半身を抱えていたはずの私はいつの間にか腰を引かれ抱き寄せられ、私はとろけるように身を委ねた。

「シヨーク……」

耳元を羽毛でくすぐられる様な、ぞくりと背中に響く声が私の耳朶を打つ。伏せていた瞼を開くと、私を緩やかに微笑み見つめるジエネの顔が見えた。そして視界の端には、光の子も微笑んでいた。

「ジエネ…… じえ、ね……」

よかった。

ずっとずっと我慢していた涙が、一気に流れ落ちた。

精霊達に運ばれ元の部屋に戻ると、爽やかで清浄な空気と明るい日差しが窓から零れ落ちていた。戻ってこれたという安堵感に、大きく息を吐き出し新鮮な空気を吸い込んだ。

「お帰りー、翔子」

「ただいま！ お母さん」

笑顔で私達を迎えてくれた母親は、視線を私の顔から下へと移動した。

「…… その繋いだ手って？」

「え？ きゃっ!」

私はジェネと手を繋いでいた事を思い出し、パツと離れた。

「こここここれはっ!」

火照る顔でジタバタしてみたけれど、綺麗に弧を描いた唇で母親は艶やかに笑った。その顔を見れば『時すでに遅し』だ。身構えたものの、直ぐに来ると思った”口撃”は来なかった。

不審に思っていたら、母親はジェネにこう言った。

「会議、見てきて頂戴？」

翔が暴走しないようにね」

その言葉を聞いて、ジエネはサツと表情を厳しいものへと変えた。翔が暴走となれば…… きつとあの城壁のように消滅もありうるだろう。私は元の世界における翔の暴走は知っているけれど、異世界のこの地、更になんらかの魔力？ を手にしている様なので危険すぎる。体調はここに来るまでの道すがら、二人とも息吹に整えてもらっていたので大丈夫なはずだ。私も行くと言ったけれど、母親とジエネに止められてしまった。だから。

「ジエネ…… 翔をお願い！」

「分かった。ショーコ、任せる。それからジュノーは……」

「俺の事は気にすんな。もうお前らに向く刃はねえよ」

しっしつとジュノーはジエネに向かって追い払う仕草をした。何かまだ言いたげだったけれど、ジエネは私の頭をくしゃりとひと撫でして「行ってくる」と一言残し駆け出した。その後姿を見てやはりカッコイイな…… とついウツトリみてしまった。

「…… 翔子？」

「……っ！」

地の底から聞こえるような声。後ろにいる母親はきつと笑顔だろ
う…… 恐ろしい、笑顔。

「翔子の話も、おかーさん、色々聞きたいなー？」

ジエネーツ、私も付いていきたいーっ！

* 闇からの帰還（小話）

というか、私なんてジエネの膝の上に乗っているんだろう？
いや、正確には腿の上なんだけど、あれれ？

最初は私がジエネの上半身支えてて、あの……キ、ス、をしてたら、いつの間にかジエネの意識が戻っててギュッと抱き締めてくれたんだよね？ で、コレ？

私はジエネの逞しい腕に包まれて、トクトクと規則正しい音を刻む胸に体を預けていた。ジエネは私の零した涙を太い指で何度も拭いて、たまにその男の唇で吸われ……私の胸の奥がきゅっとなつて顔に血が上ると、「そんな可愛い顔するな。止まらなくなる」とからかうようにジエネは目を細めた。

もうそれだけで頭がいっぱいで、自分が今どんな姿勢をしているか全く意識しなかった。いや、できなかった。そして、最初に戻るんだけど……。

「ね、ジエネ。あの、そろそろ戻るつよ？」

「ん？」

「ほら、お母さん待ってるし……」にずっといるのも、ね？」

「シヨールは……」

「なに？」

「……いや、何でもない。ただ、一度全てを忘れるほど溺れさせてみたいな、と思ったただけだ」

深い海の底の色をした瞳で私を見つめ、伸ばされたジエネの無骨な指が私の旋毛の辺りで私の髪をもて遊ぶ。

その眼差しを向けられただけで簡単に私の鼓動は跳ね、指の動きに堪らなく感情が高ぶる。

好き、大好き。溺れさせて？

見返すその目に気持ちを乗せ、そしてジエネの背中に手を回し、キュツと抱きついてからパツと立ち上がる。

「でも、ほら行く？」

「……ショーコは俺を試しているのか？」

「？」

「その切り替えの早さには感服する。……後でまた、な？」

少し意地悪な顔をして、ジエネも立ち上がる。

そして、私に「ほら」と言っつて、手を差し出した。

「えっ」

「手、よこせ」

手って！

恥じらい戸惑う私に、ジエネは強引に私の手を掴んだ。その勢いで引き寄せられ、耳元で囁きが聞こえた。

「俺の大事な精霊姫様？ 暗闇の苦手な俺の為に、手を引いて連れて行ってください」

そういつて私の目の前で、その繋いだ手に唇を落とした。

苦手？！

ジエネは闇夜でも問題ないように動いていた。私がそれを見ていたのを知っているはずだから、コレは明らかにからかわれている。でもそんなジエネが可愛らしくなって、小さく笑った。

「畏まりました。ついて来て下さいね？ しっかりと離さないで」

私からきゅっと強めに握ると、ジエネからは優しく握り返された。こんなにも大きく厚くゴツゴツとしたその手は、私の手をスッポリと覆い、肌と肌の密着でまるでその手が心臓になったかのように大きく脈打った。

「ショーコの手、温かいな」

「ジエネの手も、温かい。それに……」

「それに？」

「……」

この手も肌も好き、といいかけてやめた。だって、全部丸ごと全
て好きだから。

「内緒」

そう言ってごまかし、先を歩き出す。ジエネは片眉を綺麗に上げ
てその内容を聞きたそうにしていたけど、「いつか聞かせろ」と言
うに止めた。

1 母の歴史

「まあザツクリ説明するわ。お茶淹れてよ」

柔らかな布張りのソファにゆったりと腰を下ろし、まるで自分の部屋みたいに振舞うお母さん…… ちなみに王太后様は、意識が戻らずベッドに寝かされていた。

すうすうと、規則正しく呼吸がなされている。寝顔を見るとあの負に歪んだ表情は消えて、それこそ憑き物の落ちたような安らかな顔だった。私がした事、これでよかつたのかな？

もっと上手く出来たのでは、もっと早くお会いすれば良かったのでは、と後悔渦巻く中、私は茶器を探した。

大体…… この辺りかな？

その様な物を置く場所は、大体どの部屋も決まっている。探り当てたものの、お湯はどうしたらいいのか？

「お湯う？ 火の精霊に頼めばいいじゃない」

悩む私に、あっさり言つてのける『先代』精霊姫のお母さん。

こんな雑事に偉大なる精霊を使つてもいいのだろうか？

どことなく釈然としないまま焔に頼んで水を沸騰させてもらった。

焔にお願いしたらすこぶる上機嫌で力を使つていたけれど、本当にこんな小さな事で使役していいのだろうか？

疑問をぶつけたけれど、母親はコロコロと笑った。

「いいのよ？ だってさ、精霊達つたら『主の喜び』が何より

のご馳走だもの。単純な事でも命令されれば喜びで力が溢れるのよ？
力が増す、とも言っわね。だから、こんな湯沸してもなんでも使ってやりなさいな」

湯沸しのために呼び出した焰以外は宝珠に戻していたけれど、心声を通じてみんな賛同の声を上げていた。えええ……。なんだか自分が楽を覚えてしまいそうで怖い、そう訴えても「その考えを持つてるから大丈夫よ」なんて再び軽く言っただけだ。

カップ三つに香気が立ち上る。母親と、私と……。ジュノーの分。私に戻ったときにはすでに扉脇に背を預け座り、足は投げ出し腕を組んでいる。

「あら、翔子ったらジュノーちゃんの分まで淹れたのねー！ 優しいわ。さっすが私の娘ねっ！ ほらジュノーちゃん、ありがたーく飲みなさい」

「……なあ？ 一つ確認してえんだが」

『ちゃん』付けで呼ぶ母親に顔を顰めながらも、言った所で無駄と分かっているようで別段抗議の声は上げなかった。それよりも母親に聞きたいことがあるようだ。

ゆっくりと腰を上げ顎に沿って生える髭を撫でた。

「カケル、カケル、と言っていたが……。竜帝の事か？」

「あはっ！ 大層な名前を貰ったもんよねー。そうそう合ってる合ってる。それでもって、私の息子であり、この子はその双子の姉よ？
あんたま・さ・か・私のかわいい娘に悪い事してないでしょうね？」

ジトツと剣呑な目つきでジュノーを見るが、それ所ではない衝撃が襲っているようだ。

「は、はああああ？ 英雄クランベルグと精霊姫の息子だと？ あいつがっ？！ くっそ、俺の天敵がまさかつ！ むおお……世の中狭^{せめ}え……」

「まっ、それについては同意するわね」

バリバリ頭を掻き篦り再びしゃがみこんで「ありえねえ」と頂垂れるジュノーに、母親は足を組み優雅にカップを傾けた。

「で？ アンザスのジュノヴァーンとして請けた仕事はなあに？」

内容によってはただでは置かないという、聞く人間によって卒倒しかねない迫力を込めた問いに、ジュノーは一瞬固まったけれど、即座に平静を取り戻した。

お母さんのコレをいなせるなんて、流石アンザスの人。

私は物語の中で要所要所に出てくる傭兵や暗殺者を知識では知っていたけれど、このジュノーの様な人が沢山いるのだろうか……見てみたいと思ってしまうた。

「ぐっ…… てめ、怒るなよ？ 依頼主は宰相だ。 恐らく断罪にあつて成功報酬は無^ねえだろうから契約は破棄されたとみなす。っーことでバラすと、俺の仕事としてはソコのおじょーちゃ…… いや、そこのお嬢様をお殺しにさせていたかどうか、お亡くなりにならせていただくというか……」

グイングインと母親の怒りゲージが上がっていくのが、私には見えた。

そして……。

「じゃ、ジュノーちゃん。また呼び出すかもー？ ヨロシク。じゃ、出てけ」

この間のことは、私ミテナイ キイテナイ。

噂に聞くイル・メル・ジーンの『災厄』とどちらが最凶だろうか。うちも無い考えを振り払い、私は母親とジュノーを代わる代わる見た。氷の一瞥はかわせたが、直下の攻撃には流石にアンザス者でも敵わない。

いっそ清々しいといえる程の笑顔で送り出す母親と、十日間飲まず食わずで日の当たらない所にじっとしていました！ と思えるほどの変貌振りを遂げたジュノーは、やっと解放されたとばかりにヨタヨタと扉に手を掛けた。

「あ、あのっ！ ジュノーさん。ジエネとはどういう関係なんですか？」

マルの部屋で対面した二人は旧知の仲らしく、それなのに切り合

うとかただ事じゃない関係が気になっていた。

ジュノーは顔だけ振り向き声をかけた私を一瞥すると、溜息のよ
うな声を吐き出した。

「……………俺の弟子。それ以上は言えねえ……………い、言えません」

……………若干後半の声が引きつって聞こえたのは気のせいだろう。
うん。きつと。

一言残して消えた扉を私はじつと見た。弟子と言うからには、ジ
エネはアンザスに所属していたことがあるんだ。十歳で国を出て、
十七歳で騎士になる事を決めたジエネ。その間のことだろう。

私はまだまだジエネの事、知らない。

一つ溜息を落とすと、母親が優雅にお茶を飲んでいた正面に腰を
下ろす。

「ね、お母さん。私色々知りたいの。私が生まれる前、生まれて
から……………そしてこの世界の事を。教えて？」

決意を込めて母親を見つめる。その視線を受けて、母親はカップ
をそっとテーブルに戻した。

「……………長くなるわよ？」

2 (前書き)

100話目!

後書きにお知らせありますので読んで下さい。

何から話そうかしらね？ うーん。ま、順を追って話すわ。翔子も翔もあの小説読んだから大体のこの国の歴史、知ってるわよね？ そう、間違いなく私はその当時精霊姫だったリンよ。そしてあなた達の父親があのお騎士様…… アルゼル・クランベルグ。先の大戦のさなか出合って、恋して、叶って。でも戦後の処理でなかなか結婚を公にするタイミングがなかったの。

あはは、そうそう！ あの小説はホント私たちの事なのよねー。私の侍女をしてた子がドイツから召喚されてきた人と結婚して、彼と一緒にドイツに戻ったのよ。で、物語を書いたってワケ。

なかなか良く書いていたわー。物語の中での私、とっても純情っ！ 可愛いつ！ 最高ー！

…… 何よ。いいじゃない多少の脚色あつたって。腹黒上等よ。

それから…… あれはジエネシズ君が三歳の頃だったかしら？ 私のお腹に、生命が宿っているのを気付いたの。アルゼルと二人でそりゃあ喜んだわ！ 私達の愛の結晶ですもの。大戦中と戦後処理のストレスでなかなか子供できずに悩んだから、より一層！ これを期に結婚を公にして、と具体的に話を進めていたのだけれど……。

私気付いちやったのよ。

徐々に精霊を使役する力が弱まっている事に。

その頃のタチアナは、それはそれは荒れていて。闇の力は…… そうね、王がジェネシズの母親であるティミルに手をつけた辺りから侵食されてたようね。負の感情に囚われた者が闇に憑かれやすいのよ。

アルゼルと相談して、私は異世界へと行くことにしたの。今のままここにいても、精霊と繋がってられない上に、それによって王座に影響を及ぼしこの国を荒れさせてしまう危険を回避する為。

精霊達を解放したのち、闇の手の及ばぬ異世界へ。

「もつとやりようがあったのかも知れないわ。でもあの時の私達に出来たのは、異世界へと逃げるだけだった……。あんた達を産みたかったし」

「双子ってのはびっくりだったけど」と、母親は一方的に喋り続け、喉の渴きを潤すように一気にカップに残ったお茶を流し込んだ。

私は、話を聞きながら徐々に頭の中にあつた霧が晴れていくような気がしていた。

だから、父親の存在がなかったんだ。

だから、親戚もいなかったんだ。

だから、母親は一日中働いていたんだ。

「最初は異世界に着いて怖かった。全然文化違いすぎるんだもん。でもさ、先に異世界トリップしてる人が何人かいるの知ってたから、

なんとか連絡とって助けてもらって。お陰で安心して出産できたわ。今やっってる仕事も、その人達の紹介なのよ？」

その笑顔の裏には、歴史が刻まれている。妊娠しながら一人で異世界に来て、右も左も分からぬなか出産に望み、仕事をして。辛くないわけが無いのに、どうしてこう笑っていられるのか。そう聞くと「過ぎてしまえば、辛い事も思い出に変わるのよ」と。

確かにそう……かも。

常に母親がいない状態の日常。翔と二人きり。何をするにも二人きり。正直辛いと思っただこともあった。いない母親を恋しく思ったり、生存すら不明の父親を想像してみたり。

だけで成長するにつれ、深く傷ついた心は時間をかけて徐々に痛みが引いていった。

「でね？ 私は異世界に渡る時に指輪を置いてきたの。そう、その今翔子が手にしているヤツ。必要な時に一度だけ……戻れる座標になったたの。私が大戦中ずっと身につけていたものなのよ？」

懐かしそうに私から指輪を受け取り、そつと指に嵌めた。

「じゃ、翔子の話聞かせてよ。まずこっちに来たとき、誰の所に落ちたの？」

母親の独白を聞いて沈んだ気持ちになっていた私に、その質問は唐突過ぎて意図をはかる間もなく即座に「ジエネだけど？」と答え、それが何か？ と不審に思っていたら、母親は大きく頷きニッコリと笑った。

「そっか、翔が言った通りね！」

「何がよ？」

胡乱げな視線を送る私に、母親は私の胸の中心をトンと指で突き、「運命の人っ」と私の顔を覗き込むように見つめた。

「う、運命っ？」

「そ。私が出会った全てのトリップ経験者は、皆こっちに来た時落ちた相手と結ばれてるのよ？ 赤い糸でもあるのかしらねー？」

えええっ？ 聞いてないよそんな話！ そんなこと翔ったら一言も出さなかつたよねっ？ うろたえる私に、母親はコロコロ笑った。

「なんだ知らなかつたのね？ まあいいじゃない。ジェネシズ君の事、翔子好きなんでしょう？」

「うっ……」

しかし母親に否定した所ですぐバレるに決まっている。顔に血が上りながら辛うじて頷いてみせた。それを少し目を細め、満足そうに母親は私を抱き締めた。

「もっとその事について話したいんだけどね？ ちょっと私も顔出しに行かなきゃいけないわ」

「行かなきゃって……！ ねえお母さん、私も行く！ 行かせて？！」

実は父親であった団長と、翔、ジェネがいる場所に母親が行くと

いう。宰相との対決の場。ついて行きたいと強く訴えたけれど、「駄目」と即座に却下された。

「どうして？ 私もなにか力になりたいの！」

「ねえ翔子、こつちの世界に先に翔が来た理由分かる？」

それはね、翔が高校に入学したばかりの頃だった。私がつい最近この世界から戻ってきた人と話す機会があつてね？……度重なる諍いや乱れる世界情勢に居ても立つてもいられなくなつて、翔に事情を話したの。

翔と翔子に尋常ではない『力』が備わっているのは分かつていたから、レオンに行つて父親であるアルゼルを手伝つて欲しかったのでも、翔が……

『ダメだよ、ねーちゃんに行かせるなら僕が！ 僕が頑張るから、ねーちゃんはまだっ……』

つて言つてね。…… あの子、姉に残虐さや人の心の淀みを見せたくなかつたのよ。翔なりに守ろうとしてたんだわ。そして単身向かう事になつただけど

…… あの子があんな『チート』だとは思わなかつたわ」

半ば呆れたように呟く母親を、私はじつと見ていた。

翔から、私は守られていた、の？

小さい頃からずっと『姉』だからと守っていたつもりが、守られていた。

私、一人で立っていた気になつていたけれど、ふと周りを見回せば色々な支えがあつてこそだったんだ。

じわりと心がほぐれていく。

私の中の最後の枷が、カチリと外れた音が聞こえた。

「うん、わかった、待ってる。……でも何か私に出来ること、ないかな？」

それを聞いた母親は、私の手を両手でギュッと握った。

「あのねっ………！ おかーさん、翔子の料理食べたいのっ！ お酒に合うやつー！」

うわぁ……… 飲むつもりだこの人。

「う、うん分かったわ。お母さんに作るの久し振りだから頑張るね」

「でね、私アルゼルと会うのも久し振りだし、とにかく皆で宴会したいなって思うんだわ。多分そんなに時間がかからず例の件は片付くでしょう。気分悪いまま次の日に引っ張りたくないし、もう大勢集まって宴会！ もー、近衛だろぅが誰だろぅが大勢！ だからその指揮とってね？」

「ちよっ！……… 話大きくなってきてない？ 私の気のせい？」

「まあいいじゃない」

「よくなーいっ！」

そして母親は王太后の部屋の机に向かい、引き出しから紙を取り出し羽ペンの先をインク壺に突っ込んでサラサラッと何かを書き付

けた。

「はいっ、これ近衛騎士団の厨房の責任者に見せなさい。
分かるかしら？」

ええ勿論。充分存じ上げております。

こちらの文字で書いてあるから私は全く読めないけれど、母親が言うには私に全権預けてあるから命令に従いなさい、と記したらしい。

そして、精霊の力をバリバリ使え、と……。

じ、自信ないなあ。

でも私がやれるといえば料理だけだ。沢山美味しい物を作って、喜んでもらえるのならいいな。

「じゃっ、よろしくー」

と言うなり、母親は勝手知ったる王城をカツカツとパンプスのヒールを慣らして歩いていった。

カバンとレジ袋に入ったゴミを置いて。

ちょっと、コレ忘れ物ー！

2 (後書き)

私の3月2日の『活動報告』に、オマケの小話を載せています。翔子とジエネが闇の中から元の部屋に戻るまでを書きました。よろしかったらご覧下さいませw

詳しい時間は全く分からないけれど、光の加減からおおよそ昼少し前じゃないかと見当をつけた。大勢で食べる為のメニューなんて全く考える暇が無い。

あれっ？　そういえば毎回時間ないよね？

私が作るときは大体準備も何もない。前日からとか言ってくれればそれなりに下ごしらえとか漬けて置くとか下準備色々出来るのに……。

またいつか落ち着いて作らせて貰おう。とにかく厨房へ急がないと夕食の準備が始まってしまう。

母親のカバンとレジ袋は七番隊の魔窟まくつに放り込んでおき、そこから程近い近衛騎士団専用の厨房へと駆け込んだ。

「アウランさんいますかっ?!」

「おや、ウンノじゃないか！　おい料理長ー!」

突然入ってきた私に目を丸くしつつ、恰幅のいいおばちゃん料理人は奥にいるアウランさんと呼んでくれた。

昼食の準備が終わった所らしく、丁度良かったと言いながら私に椅子を勧めてくれた。

「それでどうしたんだい？ そんな急いで」

私は母親から預かった手紙を渡しながら、今夜の説明をした。つまり大宴会をする、と。

「こ……これは本当なのか？」

「え？」

「精霊姫、いや、ライン様が戻ってこられたと?!」

「あ、はい。今朝議の席に行っていると思いま……」

「皆聞いてくれ！ リン様がこのクリームリクスに…… レーンに戻られた！」

私が最後まで言い終わらないうちに、ガタリと音を立てて立ち上がったアウランさんは、厨房にいる料理人全てに聞こえるよう大声を出した。すると、厨房が水を打ったように静かになったと思った一瞬後、皆一斉に声を上げる。

「精霊姫様が！」

「ああ…… よくぞお戻りにっ！」

「今どちらに?! リン様あ！」

中には感極まって泣き出す人も出て、歓喜の声は途切れない。

お母さん、中身アレだけど慕われてたんだな。

名前の威力というものはすごいと思う。翔も『竜帝』と呼ばれていて、さも高潔な勇者の様に扱われているのには普段をよく知る私にとって、体中の血液が痒くなるという不思議な現象を起こさせるけれど。

性格はともかく、仕事をキチンとしていれば付けられた名前に間違いはない。

「皆静かに！」

アウランさんがもう一度叫び、騒然とした厨房は水を打ったように静かになった。

「リイン様が今夜こちらで宴会をご所望だ。ウンノが指揮を取る。皆頑張つて間に合わせよう！」

おおー！ と一致団結した声上がる。昼食の為に使った道具類の片付けをドタバタと片付け始め、在庫の確認などに駆け出し、そして私の元にはそれぞれ担当する主任クラスの人が集まった。

「ではウンノ、一体どんな料理を考えているんだい？」

え、なんにも……。

とにかく、在庫によるよね？

私も自宅でご飯作るときは、まず冷蔵庫の中身と相談したから。

大体、長らくこの国は悪天候で新鮮な物を手に入れるのが至極困難であり、よって長期保存に適した食材のみが多くある。

小麦、根菜、卵、乾燥豆…… 簡単に言えばこの程度の物しかない。生野菜や肉、魚は、その時々の人荷次第。私はアウランさんと一緒に倉庫に行つて、確認した。

うーん…… ジャガイモは山の様にある。魚は、流石に海に面した国であるので、白身魚も赤身魚も充分な量がある。ちよつと小ぶりのアジっぽい魚も見つけた。

とにかくお酒に合うというのが母親の希望だ。時間もなし、自宅で作つてたような簡単な物にしよう。

足りないものは急いで精霊達に頼もう。

(息吹、頼めるかしら?)

(…… 承)

恐らくあの王室専用の庭に沢山生るはずだ。何人かの料理人を呼んで、収穫してくるようをお願いした。自然現象ではありえない現象なのは、母親のせいにしておこう。そうしよう。

「あとは…… 貝と? うーん、まあ居酒屋メニューでいっかい。手間もかからず時間もかからず、酒に合うといったらアレしかない。」

「ジャガイモは拍子切りと薄切り! あと茹でて! 鶏肉は一口サイズに!…… あ、その手羽駄目だよ捨てちゃ。それから、鶏ガラのスープ出来てる? えーっと、そう、その乾燥したパンは使え

るわ！ それからそれから……」

それぞれ担当する場所に下ごしらえの指示を出す。

後学の為とアウランさんはメモを片手に色々書き付けていた。またいつか、もっと一緒に作りたいな。

私も一緒に下ごしらえを手伝いながら、母親との会話を思い出す。

ね、名前ってどうやって決めたの？ お母さんもこっちの人だったし、日本的な名前考えたんだよね？ 大体さ、お母さんの名前の鈴子って何？！

えっとねー苗字はさ、ほら、レーンって海に面してるし、その先は野原なんだよね。

…… なんか読めちゃった。だから『海野』？

あつたりー。それに私の名前は鈴っぽいし？ それで戸籍に登録したのよ。あ？ 戸籍？ ほら、まあ色々あるのよ。裏の手がね。うふふつ。まっ、あなた達の名前はさ、日本で色々調べて一個使いたい漢字があったからそれに決めてただけど、まさか双子とはねー。だから、二人に付けちゃった。あははっ。

翔、って字ね？

世界を翔けて欲しいなと願って…… ちよつと翔け過ぎた想定外のアレな子になっただけど……。

そ、そうね……。

二人して遠い目をしたあの会話。

母親としては、二人ともこんな能力を持つとは思っていなかったらしい。今まで胎内に子を宿したまま異世界を渡った例がなく、自分そのせいでこのような桁違いの能力が開花したのかも？ とあたりをつける。

何個目か数えるのも嫌になる玉葱の皮を剥きながら、翔の事を思う。

高校入学してすぐって言うってたよね。バイトしてるって言うってたけど……。後土日は部活の遠征とか言っていないことも多かった……。あれっ？ 私気が付かなかっただけ？

ま、いいか。

また翔にちゃんと聞こう。

「ウンノちゃん！ あの野菜なんなの？！」

バターンと大きな音を立てて入ってきた料理人のおばさま。血相

を変えて私に訴える。

「あたしがね、採っても？いでも抜いても切っても生えてくるんだよ！ どういうことだいこれは！」

「あ、あはははは……」

息吹、やりすぎだ。

私も例の場所へ付いて行き、パニックに陥る料理人達を宥めながら収獲した。

s i d e 翔（前書き）

長らくお待たせいたしました。

「クランベルグ殿、これは一体どの様な茶番劇かな？」

「ここは国政を司る朝議の場ですぞ！ 何故そなた達の様な下級の者達がこの場におるのだ。即刻立ち去らねば逆賊としてその首が飛ぶ事になるぞ！」

口火を切ったのは宰相？ そして腰巾着の大將軍。あー、二人ともやな声してるね。まっ、他にもざわざわとそれに追隨する声も上がってるけど。この辺は小物だな。

僕が今いる場所は朝議が執り行われている部屋の窓の外。とーちやんに「外で待つてる」って言われちゃったからねっ。

うーん、多分威圧になるかなーと思って、やっと揃えた四大古竜全て連れて来ちゃったからだと思うんだ。まっ、半分見せびらかしなんだけど。

デッ力過ぎて隠れるなんて無理だから、一般的に飼われてるサイズの竜、つまり馬位の大きさへと変化してもらってそれに乗って窓際に隠れている僕。

傍から見ると怪しい事この上ないねっ！

朝議の席に連ねるイル・メル・ジーンに携帯電話を持たせ、『力』と『魔力』により集音力を上げてよく聞こえるから話は大体聞こえ

る。

イルは発言権があるくせに政治そのものに関して興味がないため、この場は黙ってみているようだ。

中の声だけは拾えるから、とりあえず僕も成り行きを見守る。

数年前に僕がこの国の城壁を消し、ついでにお仕置きした宰相と大將軍。その時の事を『この僕が』珍しく覚えていてから、この声はあの二人で間違いない。

なんだ、まだこんなくつだらな事してんだな！

「いやいや宰相殿、こいつらを呼んだのは私です。申し訳ないが、今暫く私の話を聞いて頂きたい」

とーちゃんがそれでもと丁寧^{ていねい}に宰相へと許可を求めた。中に引き入れたのは、一番隊副長、四番隊隊長、七番隊副長。他数名部下の者達が入っている。近衛隊にも宰相などの息が掛かったものがある為、一枚岩とはいかないけれど、とーちゃん自身の求心力により固い絆で結ばれているらしい。

「クランベルグ殿、貴殿は確かに先の大戦ではレーンの為に大いに活躍し、貢献なされ英雄とまで呼ばれておられますが……些^{ちか}か勘違いが過ぎるのではありませんか？」

「その通りです宰相殿！ 本来なら貴殿のような大した爵位も持たない一騎士が、この場にいる事など許されるものではないのですぞ。それをいつまでも過去の栄光を振りかざし、この平和な時代に大きな顔で王宮内を練り歩くなど…… 恥^ちというものをお知りになつた方がよろしいのでは？」

む。この声は大將軍だな？ 半年間『バブバブ』しか喋られない

上にアフロにしてやったのを忘れたか。

「ははっ、平和……ですか。大將軍殿、恥を知るのは私ではないぞ？ この国で貴殿らは王に次ぐ地位にあるにもかかわらず、少しもこの国の事を考えぬばかりか、その地位を利用して己の利潤ばかりを追い求め、この国にどれだけの損害を与えたのか……少しは反省した方がよろしいかと思ひましてね？」

「利潤？ 損害？ 反省？……クランベルグ殿、申し訳ないが、貴殿の言う事は私にはさっぱり理解ができませんなあ。どうかその筋肉でできたガチガチの頭を、もう少し柔らかくしてから物を申して頂きたいものですな」

む。この声は宰相だな？ アレを半年間役立たずにした上に……あ、元々役立たずではあったけどね。その上落ち武者へアーにしてやったのを忘れたか！

それにしてもよく喋る豚だ。紅の空飛ぶ豚を見習うがいい。

「ハハハ、筋肉の頭ですか！ それはそれで悪くない。ふむ、確かに宰相殿のおっしゃる通り、私ではあなた方が理解出来るように上手く説明する事は出来ませんなあ。ですから代わりに……ロウ、お前が宰相殿達にわかりやすく説明してやってくれ」

「 畏まりました」

ろー？

誰だっけ。

いや流石にね、僕も短い名前なら覚えられるし、ジェネの副官と
いうのも知ってるさ。ろーね、ろー。

「まず初めにですが……」

「おやおや、どこかで見た顔だと思えばお前は…… 確かあの老いぼれの 失礼、前宰相殿のご子息ではないか？ どんなに才気あふれる有能な人物でも判断力に欠けているとは…… ククッ、親子共々、従うべき相手を間違えその才能を無駄にするとは。実に惜しいですなあ」

うつわ、やだねーこの嫌味。もっかい『バブバブ』の刑か？ いや、今度は『ぴろくん』だな！

僕はろーがどう切り返すのかと興味シンシンで耳を澄ます。

「さて、私が調査しました所」

おおっ！ 華麗にスルーだ！ あの大将軍の嫌味をまるっと無視か！ やるなあ、ろー！

「…… そして国へ上げる税の帳簿、そうですね…… 宰相になられてから少しずつ、しかしこのところ大胆になってきていましたね。上手に隠したつもりですが、数字に表れています。鉄鉱石が主に算出される領地にて、売り上げの一部が国税として送られるはずが、それとは全く関係のない商品に少しずつ上乘せという不正をし、税金を売り上げ金額から少なくするという…… なんとも分かりやすいごまかしが認められました。

これは各地域全ての流通と価値を調査済みであり、裏付けも取れています」

完璧だな。

僕は内心舌を巻く。あの膨大な資料の中からよく見つけたよ！

しかも過去の資料何年分もひっくり返して、些細な変化に気付くとはやるなあ！

僕だったら、ユーグに丸投げだな。ってか、今もラスメリナをユーグに丸投げしてきた所だ。

僕はいずれ王を辞める。その為にユーグを育てているといってい…… いいんだ！

「クツクツク…… そうですか、そうですか。しかし一介の騎士という身分のお前に、私が相手にするものか！ 下らぬ茶番は仕舞いだ！ 皆、解散！」

「ちよつと待て！」

ざわり、と場が乱れた。誰だ？ この声は……

「私とその罪を認めよう」

「なつ…… デイエ…… ディエマルティウス、お、う」

誰が入ってきたのか気になり、コツソリ窓枠の端から覗くと、そこに現れたのはこの国の王、ディエ…… うん、王だ。

「おじ…… いや、宰相よ。そなたが犯した罪は大きい。私の名に置いてそなたを罰する」

王はハルに支えられながら、とーちゃんの横に立った。おつきくなつたなあ！ 僕が某特撮ヒーローの仮面被って会ったのは、もう六年程前になると思う。あの当時十歳だった王が、こんな立派になつて……。僕はなんか孫でも見るような感じで見つめちゃった。

「大きく出たものですね…… いや？ おい大將軍。こやつは王に成り代わった偽者に違いない。連行せよ！」

「 つ！ あのヤロー！」

言つに事欠いて、自分の孫を偽者扱いか！

僕は乗っていた火竜から立ち上がり窓を蹴破つて進入しようとした所「待て！ カケル！」と制止の声が聞こえた。

「う、わつ！ ジエネ？！ お、おいおいつ！！」

城の上の辺りから、ジエネが僕目掛けて飛び降りてきた。

「うひゃああ！ あぶなっ！」

どすーんと竜の上に落ちてきたジエネ。

(カケル、何者だこやつは。我を踏みつけるなどと……)

(あー！ ダメダメ！ 僕の親友だから手を出さないで！)

火竜が踏まれて苛立ちの声を上げる。

やややつ、相当機嫌悪いねっ！ この火竜は好戦的で、今炎をひと吹きでもされたらこの城は無くなってしまうよっ。

(こらギース！ ギースラルゼータ！)

(……)

真名を心声に乗せれば不承不承ではあるけれど怒りを納めた。う

ん、流石に僕が頑張つて捕まえた竜達のながーい名前は覚えてるわ。

僕はギースの怒りの原因を注意する。

「ちょっと！ ジエネつてば、あぶねーじゃん！」

「それはお前が今まさに飛び込もうとしていたからだ！」

「えー、だつてー」

「だつてじゃないだろう！」

すつと息を吸い込む。あー、これは来るな。

「大体だ、カケルはい・つ・も・後先考えずに力を使うのが悪い！ 城壁消したり宰相などに呪いをかけたりと挙げればキリがない。それを未然に防がねばこの国は滅ぶ！ 間違いなく！」

「滅ぶつて！ そこまでしないよお…… 多分」

「その多分が問題なんだ！ 今まで多分で治まったことなど一度もないだろうが！」

小さく反論したものの、あつという間に言い返されもうゴメンナサイだ。

しゅーんと頂垂れる僕に、ジエネは「分かつたら突入などするな」と釘を刺した。その声に被さるように、僕達に声が落とされた。

「…… 話は終わったかな？」

ぎよつと、声ができる方を見た僕とジエネ。そこにはとーちゃん……
いや、団長がすぐ傍の窓を開け、呆れた顔をして見下ろしていた。

そつだ忘れてた、ここは窓のすぐ傍。…… 大声あげちゃってた
ね？ あははっ。

ジエネをチラッと横目で見れば「しまった」と珍しく口を歪めた。
無表情が売りのジエネが。

「あ、ごめんね？ だんちょー」

困ったやつだと言わんばかりの目線に、僕はにへらっと笑って立ち上がった。

「カケルと…… ジェネシズか。いいだろう、入って来い」

「あーい」

ジェネが何か言い出す前にサツサと返事をする。

（ギース、窓枠まで上がって？ 僕達を下ろしたら、みんな空で待機しててー）

心声で四匹の竜に命を下し、「おっじゃまっしまーす！」と、とーちゃんが開けた窓から堂々に入った。遅れてジェネもしぶしぶ続く。

うわー、みんなの視線が集中するう！ 僕、アイドルー！……
なんつって。実際「誰だコイツ？」だろうな。あははっ。

つつい、その目線が気持ちよくなって、にっこりと笑ったら後頭部を叩かれた。

「気が抜けるからそれやめろ」

「失礼な！ イタタ、ジェネ手加減してよ！」

僕の猛抗議を軽く流し、ジェネは団長と王に「失礼致しました」
と礼をとる。しかしそんなジェネの姿を見た宰相おともねに阿る者達が、猛然と抗議の声をあげた。

「今度は一体何事ですか?! 全く団長殿は騒動の火種にしかなりませんな」

「団長よ、何故その様な身元の知れぬ者と下賤の血を引く者を招くか!」

「この機に乗じて、王位篡奪を目論んでおるのだらう!」

「何をしている! 早くつまみ出せ!」

なんだこいつら。ジエネに対して平気でそういうこと言うわけ?

「その王を騙る者と共に、国家転覆を狙う逆賊を捕らえよ!」

その言葉が聞こえた途端、僕は怒りの為溜めておいた『力』を一気に放出した。

「あー、もー、うるせえっ!! だああああえええええっ

!!!!」

バツシャーシューッと、朝議の席全ての者に満遍なく水をぶっ掛ける。滝のよーにつ!

「んだよお前ら! そういうこと平気で言うわけ? それにさ、王の御前であるぞ控えおろっ!」

某時代劇風に声を張り上げた。一回は言ってみたいセリフのひとつだねっ。

それから僕は馬鹿共に未成年の主張…… あ、成人してるけど。僕の思いを一気にぶちまけた。

「大体、王はこの国で一番敬意を払わなきゃいけない人だよな？
なにが国家転覆だ、お前らにそれが言えんのかバカ！ 国の一大
事だろ？ テメーらの欲に塗れた足の引っ張り合いしてる場合かあ
ほんだらっ！

あのね、政の役職にいるという自覚ある？ ただこの椅子に座つ
てるだけで満足すんなよ。その地位その役職つてのは、全うしてか
らこそなんだよ馬鹿！ やりもしねー提案だの、揚げ足取りだのく
だらねーっての！」

わーっと捲くし立て、ふうつと大きく息をついた。ああなんだか
色々メンドクサイ。

「あーもうお前らアレを向こう三年立たなくしてやるからなっ！
そんでもってイルに『災厄』落とさせる！…… 勿論、個別にね
っ」

「あんたナニソレ。勝手に私を使わないでよ」

びっしりと水に濡れたイルが、顔にかかる髪を掻き上げながら
文句をつけた。ふと周りを見ると、イルとジエネと団長以外は自分
の大事な部分をきゅうつと押さえていた。縮み上がったかバカ野郎
しかしハルは堂々と立っていた。 うん、アイツはソコに
関して規格外だからそうなのだろう。

宰相の腰巾着達は『災厄』と聞いて更に震え上がっていたけど、
んなこた知るかっ！

ギロリと一瞥すると、目を伏せる者、蒼白になって震える者と様
々な反応が見てとれた。

「あら？ いいのよ遠慮しなくて。特別休暇あるでしょ。その時

に自分のおかれた立場をよーく考えたら？ オジサマ達。そんなことよりカケル、私の折角の美貌が台無しよ！…… まあ、これはこれで私の魅力は変わらないけれども」

「カケルやりすぎだ。なんとかしろ。これでは收拾がつかない」

「あー、はいはい。んじゃ、『水よ集まれ』」

イルとジエネの抗議を受け、僕は両手を前に差し出しイメージする。あたり一面びっしやびっしやに濡れた水や、『近衛騎士団員とイルと王だけ』衣服についた水分を、僕の目の前の空間に集める。すると、割合大きな水球が出来た。それを…… どうしちゃうのかなー。

「あんたほんつとにデタラメな力ね。それ作るだけでどれだけ魔力がいると思ってるのよ」

「カケル、遊んでないで捨てる」

「えー、あんな事やこんな事したかったけど…… まあいつか。ぼーい」

宰相の息の掛かった兵士達が後へ回って僕達を捕らえようとしていたので、そちらに水球を放った。バツシャーという音と共に情けない悲鳴が聞こえたが、しーらない。

「お主…… 何者だ？」

宰相がなんとか居住まいを正し僕の正体を尋ねる。あ、そっかー。あの時は仮面被ってたし自己紹介してないっけ。

「あー、えつと。ラスメリナの王様？」

「自分の事なのに何故疑問形を使う！」と、ジエネから小声で突っ込まれた。いいじゃん、僕がそれっぽく見えないの自覚あるからさっ。

すると、それを聞いた外野からのざわめく声が聞こえた。

「ラスメリナの……王っ?!」

「竜帝！」

あ? ごめん、意外すぎだった?

「……城壁の悪夢っ!!」

……いや、その二つ名初耳だけど?

「あのな、僕は王としてやってきたんだ。正体知った以上それなりの態度あつてしかるべきだと思っただけど、どうかな?」

団長の横から一歩進み出て、腕を組んで相手の出方を見る。一国の王が出てきたんだ。さあ、どうする?

するとハルに支えられて立っていた人物が、僕の正面へと歩みを進めた。

「ラスメリナの王、カケル殿。わざわざお越し頂き有難うございます。私はこのレーン国の王、ディエマルティウス・アルディアント・レーンと申します。此度の我が国の者達の貴殿に対する無礼極まりない態度、恥ずべきものであり、王として非常に申し訳なく思っております。何卒お許し下さいますようお願い申し上げます」

うつとりと見惚れる所作で腰を折ったこの国の十六歳の王様。隣国の王に対し、最大級の敬意を示した。その動きに宰相以下メンドクサイやつ達が動揺する。

「王がそのように頭を下げるなど！」

「我が国が阿る相手ではありませんぞ！！」

「竜帝はこれを機に我が国を属国扱いなさるおつもりでは？！レインもおしまいだ！」

「アホか！ 属国扱い？ するわけないだろこの僕が。メンドクサイもん」

最後の一言は聞こえないよう呟く。王はそいつらに「失礼なことを申すな！」と窘めるよう声をあげていたけれど王としての立場は限りなく低いからか、あまり聞き入れられなかった。

ワーワー好き勝手言い出す小物達を眺めながら、僕の傍にいた団長がゆっくりと立ち上がる。

「おぬしら、黙らんかつ！」

団長が机をバーンと叩き、一喝した……うつわ、怖っ！ 流石戦場の鬼だねっ。気合の籠った声はこの場を一発で静めた。折角静かになった事だし、僕が思う提案を話そつと。

「この王が一人前になるまでは僕が後見人になる。僕にとって大事な人達がいるから他国なんかにやりたくないからさ。拒否権は無いと思つて？ つーか、拒否できる立場ではないって自覚あるだろーし、そこんとこヨロシク」

宰相を見れば、もはや血の気が見られない顔色をしていた。うん、前回のお仕置きも効いてるな。よしよし。しかし辛うじて動くその舌で僕に対して聞く質問は、全く意外な所だった。

「り、竜帝……何故隣国の王などになったか。この国を乗っ取る事も容易いだろうに」

「あ？ そんな事？ ……隣国の王に理由ねえ。ほら、ラスメリナがレーンにとって一番脅威だっただろ？」

そこ抑えちゃえばこの国暫く大丈夫かなーと……何となく。ま、有名な竜がいる国だし欲しかったし？ あと……まあいいやあれば内緒」

「しか、しか、しかし！ 例え貴殿がラスメリナの王であろうと、いや、だからこそ、我が国内の政に干渉される訳にはいきませぬ！ しかも王位に就く以前は謎に包まれた……と言えば聞こえはいいが、ただの素性すら知れぬ成り上がり者ではないか！ その様な者、信用が置けぬ！！ クランベルグ殿、この騒動の責任はこの者達を引き入れたそなたの いや、そもそもこの国の混乱こそ、そなたが招いたものではないか！！ そなたと行方知れずの精霊姫が！！」

しかしか
鹿鹿いうな、馬鹿！

「グランドー！ なんと言うことをっ」

レーン王が立ち上がって宰相を制止したその時……。
バーンと観音開きのドアが開き、カツカツとヒールの音が聞こえた。

「ハイ、お久しぶりね皆さん？」

なんつータイミングだよ、かーちゃん！
絶対狙ってたね！

ぐるーりと僕は視線を巡らせた。みんなキョトンとしてる。うん、まあ正しい反応だね。ただ一人、団長……とーちゃんは。

「リイン……」

と一言呟き、じっと見つめている。そうだよ、僕達を産む為に異世界へ渡って早二十三年。その間一度も会っていないんだ。

かーちゃんは、とーちゃんと一呼吸の間だけ視線を絡ませ、一つ頷く。その頷きにどれほどの想いが込められているか。僕の中で、ちよっと何かこみ上げるものがあつた。

それからかーちゃんは、僕の方を見てパチツとウインク。え？ちよっとそこ軽すぎじゃない？

「さて……」と腰に手をあて、頬にかかった髪を耳に引っ掛ける。

「久し振りでまあなんだけど。その翔はどっからか降ってきたわけじゃないのよ？ 身元は保証するわ」

「保障って……」

誰かが小さく呟く。

突然の登場にみんな動揺を隠せず、ただひたすらその動向を見守った。しかしドロドロ泥仕合に慣れてる宰相は違った。突然現れたかーちゃんに因縁をつけ始める。あらら、知らないよ？

「まさか……精霊姫かつ?! 今更何をしに戻って来た? 精霊を捨て、国を捨てた貴様がよく恥ずかしげもなく姿を現せたものだな!」

「そそそ、そうだ!! 突然姿を晦ましこの国の安定を放棄し、混乱を導いた事は明白であるぞ! 逆賊め!」

一瞬の動揺を見せたものの、すぐに気を取り直したらしい宰相と違つて、大將軍の態度には余裕がなく、必死で取り繕っているようだった。

「あんた何様? 私はこの国の主の王様あまじと話したいのよ。お呼びじゃないわ」

かーちゃん、宰相と話す気ねえな!

宰相の言葉をフンと鼻息一つで飛ばし、「翔、やっておしまい!」と僕に指差し命令をした。ちょ、うっかり「アイアイサー」って言ういたくなるじゃん! かーちゃん自由だなあ。

「わかったよ。じゃー、ちょっと黙つてもらおっかな」

「な、何をする!」

「宰相殿!」

僕は自ら動き、宰相と大將軍二人ともグルグルつと簞た巻きにして天井からぶら下げ、『力』を込めてその喧しい事を喋る口から飛び出す言葉を『カケル最高』『カッコイイよカケル』『カケル最高』に固定した。

暫く『カケル最高』『カッコイイよカケル』『カケル最高』『カッコイイよカケル』と喋っていたけど口を開けば結局僕を褒めてい

る形になるからやがて押し黙った。

なんだよ、もっと喋っていいのにさ！

それをコツソリ救出しようとか動く面々は……。ふふふ。

「みんな動かないでね？ 僕達の邪魔するようだったら、すごいことしちゃうから。外見てごらん？」

「！！！」

「ひっ……………」

「な……………」

窓の外を見たみんなは一樣に固まった。ある者は顎を落とし、ある者は腰が砕け。

「僕が契約した竜だよー。折角さ、四大古竜揃えたし？ おっ披露目ー！」

地水火風の竜達は、小さい体に身を変化していたけれど存在感はハンパない。火竜のギースなんて、むっちゃ乗り気で凶悪な口の先からチヨ口チヨ口炎を出して見せている。

あらら？ ちよつとほぼ全員動けなくなっちゃった？ ごめーんやりすぎ？

そんなこんなを黙ってみていたかーちゃんは、外野が黙つたのを見届けた後、ヒールを鳴らしながらレーン王の傍へ歩き……膝をついた。

「此度の混乱、全て私の因る所であります。時系列での説明のち、王の判断にて処断下さいます様お願い申し上げます」

その凜とした背中からは表情が読み取れない。けれど、責任を果たそうとしているんだ。僕は黙って見守る事にした。

淡々と……これまでの経緯を説明した。おおよそ僕が知っている事と変わらない。

精霊を従える力が弱まっていた事、妊娠していた事、王太后の闇の力に干渉を受け異世界へ逃れた事　　精霊と繋がったままでは今以上の混乱が生じる為、解放してから。

「どうしても、精霊姫として残る事は出来なかったのか？」

窓の外からじつと室内を眺める竜に、王はビクビクしながら尋ねる。すると、少し寂しそうな顔をしてかーちゃんは答えた。

「元々精霊姫としての力は弱まっていた、という事は私が繋がったままだと精霊たちも消滅してしまう恐れがありました。この国にはなくてはならない存在、それが精霊。解放以外に道はなかったのです。」

そして私は異世界にて子を産み、こちらに戻る機会を窺っていました。子供は胎内にいながら異世界を渡った為、強大な『力』を手に入れた　　」

一旦言葉を切って、僕をピシリと指差す。

「それが、これです」

「これっていうな！　かーちゃん！」

「ちよっと！　カケル、アナタ団長と精霊姫の……子だったの？」

イルが驚いた顔して僕を指差す。おろろろ、あれー？

「言つてなかったっけか？」

「知らないわよバカッ！」

「あつはつは、ごめーん」

そつかそつか、この場で知ってるのはとーちゃんかーちゃん、あと驚かない様子を見るとジエネだけが。

「その通りよ、ね、アルゼル？ 可愛い私達の子よ」

「紹介が遅れましたな、王よ。私達の子供であり、ラスメリナの王である翔と申します。どうぞお見知りおきを」

僕の肩に手をあて、腰を屈めて王へと挨拶をするとーちゃん。いやー、やっと公に出来たねっ！

「あ、ちなみにだけでもう一人いるのよ。今騎士団の厨房にいるけれど『翔子』って名前よ。『ウンノ』とも呼ばれてたみたいけれど、翔の双子の姉。何かおかしなマネしたら翔が承知しないわよ？」

「なんで僕に丸投げかなっ？！ …… っつて、その通りだけどね」

全く人聞き悪いな！ 僕はこんなに人畜無害なのにさ！

あれ？ なんか外野静かすぎじゃない？

「双子？」

「あんなバケモノがもう一人?!」

「しっ! 聞こえたら消し炭だぞ?!」

聞こえてるっつての!

「じゃ、そーゆーことで。レーンの王様? これからどうしようか」

僕は気軽な感じで話を振る。イジワルかとは思っけど、一国の主同士の話し合いでもあるからね。

「……私は、貴方の姉君から叱られました。それで目が覚めました。私はこの国の王です。王としての責務を果たそうと思います」

「へえ。ま、自覚できたならいいよ。とーちゃんとかーちゃん、それに僕も後見に付くし頑張る?」

「はいっ」

軽く頬を紅潮させて、僕を正面から見据えた。初めて会ったあの時の少年ではなく、しっかりと決意を持ったその目に安心できる。僕は振り返り、とーちゃんに収拾を任せた。

「じゃ、あとはこの国の中でやってちょよ」

室内の片隅にある椅子に腰掛け、見守る。と、ジエネも隣に来た。

「どしたのジエネ。僕もう何もしなっつてば」

「そう言っつて本当に何もしなっつたことがあるか?」

「なかったかもしれないし、あったかもしれない」

「後者だ」

「ひどっ！」

ま、どうせなら「追って沙汰する！これにて一件落着！」と高らかに宣言したいもんだけどこれは元ネタが分からないと面白さが伝わらない。大ヤケド確定だからやめた。

「私は王として未熟だ。至らぬ点多いゆえ、そなたらに支えて欲しい。祖父ではあるが宰相はこの国にとつて災いを招いた事は明白。私に気を使うことなく処断をせよ。大將軍やその罪の汁にたかる者達も同様だ。その近衛騎士……ロウといったな？ どうせその様な人物の一覧も調べ上げているのだろうか？ この際、全てこの国の膿を吐き出そう」

「御意のままに」

団長以下近衛騎士達は一斉に膝をつき騎士の礼をとった。

ただただ青ざめるのはその罪を受ける者だ。パラパラと書類を捲り、ろーは軽く溜息を吐いた。

「大小様々な罪があります。ここにすべて記してありますが読み上げてても？」

めんどくさいんだな、ろーったら。多分アレだ。調べるの好きだけど、結果が分かったら興味を途端に無くすタイプだ。

かなりの人数が関わっていきそうだね……眠くなっちゃいそうだよ、

僕。

……

……

……つて、寝ちゃった！

「何で起こしてくれないんだよ、ジエネ！」

「いや、静かでいいと思ってな」

飛び起きた僕は窓の外を見たらとつぷりと日が暮れていた。なんてこった！ 口の端のヨダレをグイツと袖で拭い、立ち上がってキヨロキヨロ見回すと、そこは大分閑散としていた。

レーン王、とーちゃん、かーちゃん、イル、ハル、ろー、えーと……なんか近衛騎士団ばい方々。

宰相と大將軍、あと野次飛ばしてた文官達何人かも消えていた。

「ちよつと、イルう？ どうなった？」

こそこそつとイルの所まで足を運ぶと、「カケルが静かで滞りなく進んだわよ」と晴れやかな笑顔で答えた。うっわ、怖！ 晴れやかだつて！ 絶対何か含んでるよコレほんとに。

僕にびつたりくつついてきたジエネが補足してくれた。

宰相以下罪状明らかな者は城壁北にある塔に捕らえ、裁いていくそうさ。人数多いしね！ それから、人事再編成も。これから話を詰めるそうさ。

しっかし。

「ねー、僕お腹すいちゃったんだけど」

『力』を使ったし、今日は色々忙しかった。エネルギー入れないと倒れちゃうよ！

「そうね。王よ、食事にしましょうか？ 近衛の食堂に夕飯頼んであります。みんな、飲むわよっ！」

後半は周り全ての人間にあてた言葉だ。

……そう、かーちゃんは……。

「リイン、飲むつもりか！ 私とは……」

「あら、アルゼルったら。アナタとは後でゆっくりでいいじゃない。とにかく私は飲みたいの！ 宴会、久し振りね」

「リイン……」

とーちゃんかわいそうだろー！

かーちゃんは飲み会大好き。そりゃこの国の武勇伝も耳にタコできるほど聞いたし、もちろんあつちの世界でも色々ね。

こうなったらもう止められないだろう。僕でもとーちゃんでもねーちゃんでも！

「翔子に作るように言ってるから、楽しみね」

「ねーちゃんが？」

「ウンノが？」「ウンノの料理？」

「シヨークが？」「あのウンノが！」

かーちゃんが料理をねーちゃんに頼んだと聞いて、一斉にみんな声をあげたけど、僕は聞き漏らさなかった。

「へえ？ ジエネったらねーちゃん的事、シヨークって呼んでるんだ？」

「あ……いや、その」

「へー？」

うつわ、おもしろ！ ジエネがこんな動揺するだなんて！！ おもしろっ！

どうチョッカイ出してやろうと思ったら、とーちゃんがジエネの肩を叩いた。

「ジエネシズ、この場の始末を任せた」

とーちゃん！ 早く『父親』として会いたいだけだろ！

それに対し、ジエネは非常に複雑な顔をした。きつと……自分は今早くねーちゃんの所に行きたい、けれど恩人でもある団長の命には従うしかない、けれど……けれど……。

オモシローー！ 情けない顔、僕でも分かっちゃうね！

とーちゃんは、多分かーちゃんから何らかの事情を聞いたんだな？ ジエネとねーちゃんが、とか。娘の父親としてこれが初仕事なのかっ？！ 頑張れジエネ！

「じゃ、僕も早くねーちゃんのゴハン食べたいから、お先！」

「待て！ カケル くそっ！」

僕はジェネの悪態を背中を受けながら食堂へと走った。

1 宴会家族

んー、大体はこんなもんかな……。

私は熱気が籠る厨房を出て食堂を見回した。流石に一人ずつ盛るのは無理がある。大きなテーブルにそれぞれ大皿料理をボンボンと置いて、好きなように食べてもらおう。

つまり居酒屋風なんだけどもね。

用意できる食材はそう種類が多いわけでもなく、息吹が用意できるのは植物に限る。そしてなんととっても時間のなさが一番痛い。

鶏肉を使って唐揚げと、ニンニクで味をつけた手羽先揚げ、小さな鰯を香草パン粉焼きにして、イカは内臓と軟骨を取ったら輪切りにしてそのまま焼き、魚醤で味をつけた。

パンは、ローズマリーを入れたフォカッチャを大きな四角で焼き、包丁で適当に切り分ける。手間いらずの一品だ。それとは別に、ピザも焼く。具はどうしようかなー？ と、思いついたのはアンチョビポテト……アンチョビの変わりに魚醤で代用！ ピザ生地に茹でて薄切りにしたジャガイモを並べ、マヨネーズとニンニクと魚醤を混ぜたソースをかけて焼く。仕上げに小口切りした細ネギを散らしてみた。

そして、料理長のアウランさんが「とっておきだ！」と、どこから手配して持ってきたのは牛肉の塊！

いや、そりゃ私いくらなんでも牛一頭は下ろせないから塊で正解ですけどね。ええっと、どう調理しようかな。おおよそ五百人前。この塊肉の量なら

前菜にはなれるかな？

「んー、じゃあちょっと塩胡椒して焼き目つけてもらえますか？」

その間に私は赤の葡萄酒とお酢、塩砂糖ローリエを混ぜておく。
量が多いから目分量って厳しいね！

表面が香ばしく焼きあがった牛肉をその漬け汁に入れ、同じフライパンで人参とセロリと玉葱を焼き、火を通したら同じ漬け汁に入れておく。

漬けて置くだけだから簡単だね！ 時間が経ち丁度いい頃合いになったら、薄切りにしてクレソンを添えた。

「ウンノ、これは？」

「牛肉のマリネです。ちょっと冷えてないのが残念ですが」

次々と出来上がる料理たち。

下拵えさえできれば、後の仕上げは簡単な物ばかりなのであつという間に卓上は一杯になった。葡萄酒も並べられ、宴会の準備は出来上がった。

「ねーちゃん！！」

「わわっ！ 翔！」

入口近くでアウランさんと最終チェックをしていたら、後から急に抱きつかれた。

「ちょっと！ 危ないじゃない！」

「だってー」

「だつてじゃない！」

「うわー、お・い・し・そー！！」

「こら！ よそ見しないで人の話し聞きなさいっ！」

大体、私は翔に言いたいことが山ほどあるんだ！ 膝詰めで説教三時間コース！ わあわあ言つて逃げ出そうとする翔を捕まえようとしていたら団長が勢いよく飛び込んできて、私の目の前で立ち止まった。

団長、じゃなくて。

アルゼル・クランベルグ近衛騎士団長、この国の英雄。そして

お父さん。

「ようやく名乗ることができてうれしいよ。私の娘、翔子。一人前の女性に育つたんだね」

大きく手を広げ、私をそつと抱き寄せた。広くて、あつたかくて。小さな頃から想像でしかなかった『父親』が、今現実に私を包んでくれている。

「……お」

胸が一杯で、声にするのがもどかしい。けれど、ずつとずつと言いたかった一言を溢れる感情を乗せて伝える。

「お父さんっ」

「翔子！」

小さい頃憧れたり寂しかったりした父親という存在。私を、大きな体で包んでくれるその体からは『愛情』が溢れていた。

「父娘、感動の再会ね〜」

「リン！」

「お母さん！」

「かーちゃんも来るの早いな！」

家族、揃いました……。異なる世界で初めて。お父さんは「これが私の家族だ！」と三人をぎゅうぎゅうと抱き締めた。みんなそれぞれ痛いとか離しなさいよとか言っけれど……。笑っていた。

やっと、やっと。

「でも」

私が急に切り出したから、みんな何だどこっちを見る。言いたい事は沢山あるんだから！

「大体、事情知らないの私だけだったじゃない！ どういうことよっ！〜」

「あー……それは、なあ、リン」

「もう知ったからいいじゃない。あら美味しそうね〜。翔、説明よろしく〜」

「ちよっ！ 待てよそこの両親！」

「か・け・る？」

「……」

絶対逃がさないもんね！ 仕上げ作業をアウランさん達に任せ、私は翔と食堂の一番隅に腰掛けた。翔は脱線しながらも色々話す。

いずねちゃんには話すつもりだった。このタイミングは丁度リストラになったと聞いたから。世界背景は小説読んでたから言わなくてもいっかなーと思ったから。僕と同じ様な『力』は持っているってのは分かっていたから、何とかなるかなーと思ったから。父親の事は、母親から許可待ちだった事。

「だって、ビックリさせたいじゃない？ って言われたら……僕は黙るしかないし？」

これだけ聞き出すのもかなり時間を要した。一つずつ取り上げる度に「あ、それはさー」「でもこのときって……」「って、関係ない話が長い！」

言いたいことは沢山ある。沢山ありすぎる。でも、一番聞きたいことは。。。

「ねえ、条件揃ったらまたあつちの世界に戻っちゃうのよね？」

いつの間にか手元に料理が乗った皿を抱えていた翔は、「うーんと小首を傾げながら天井を見た。

「今回召喚魔方陣作った魔術師……イルだからね。契約事項クリアした時点で戻れると思う。僕その時ちよつと『力』を使える状況になくて、急遽召喚魔法でやってもらったからさー。だけどほらアレだよ。多分ねーちゃんも練習すれば自分で自由に行き来できるんじゃない？」

「自分で？」

「うん、僕はいつも自分で『扉』を作って時空を渡ってるんだけども、ねーちゃんも多分作れる。何とかかなると思うよ。」

「??？」

扉？ 時空?? 何とかかなると言われても翔に言われると信憑性がない。でも、本人は本当に行ったり来たりしているようだから…。

「私、一回あつちに帰っても、また戻ってこれるんだよね?!」

じゃないと、私!

祈るような気持ちで訴えれば、翔は……笑った。その顔は、泣くとも笑うともとれるような笑顔だった。

「そっか、ねーちゃん、そうなんだ。いや、それは思った通りになつて僕は嬉しいんだ。嬉しいんだけど何だか変な気分だなー。ま、いいや。それはとーちゃんと分かち合うから」

「翔？」

「戻れるよ。保障する」

おもむろに皿の料理をガツガツと口に運びながら、翔はキツパリと言った。

「僕が連れてくし、連れて帰る。僕が『扉』を教える。だから、安心して?」

何故か私を見ないように、けれど力強くこの世界への繋がりを肯定した翔。

良かった! どうしても言えなかった、伝えられなかった、あの言葉を彼へ!

すぐにでも会いに行きたいけれど、どうやら事後処理に追われているらしくて姿が見られない。そして徐々に食堂は近衛騎士達で埋まってきた。でもなんでだろう? 数人がこちらをチラ見するたびにぎよっとするのは……。

「ちよつと! カケル……とウンノちゃん!」

そこに現れたのはイル・メル・ジーンで、今日も意匠は違っけど相変わらず真っ赤なドレスを着ている。とても男だとは思えない抜群のプロポーシヨンで着るそのドレスは、イル・メル・ジーンの妖艶さを引き立てていた。

カツカツと恐ろしい速さでこちらに向かって駆け寄る。……それだけで何だか逃げ出したくなる怖さがあるよっ!

「ウンノちゃん、あ、名前違ったわよね」

「いえ、ウンノでいいです」

翔子は家族、シヨークは……もう特別だから。

「じゃあウンノちゃん。ちよつと急いで服変えて!」

「えっ?! どうしてですか??」

「この悪魔^{カケル}と見間違っからよ! せめて女性らしく服を変えてちょうだい!」

うっわ! それは嫌だ!!

今の服は男装。動きやすさを一番に考えたらこれがベストだったから。イル・メル・ジーンが服を貸してくれるといったけど、あの魔女的なドレスを着る勇氣はない。

侍女服がまだあるからそれにしようかな。ああでも服は王の部屋の近くだったっけ。そう言うと、イル・メル・ジーンは大丈夫と笑顔を見せる。王に仕える女官　ルネさんが、私の荷物を魔窟^{しつむじう}に届けてくれたらしいので、急いでそちらに向かって着替える事にした。

2 宴会家族

部屋に入ると、そこにはラスメリナに置いてきたはずの大きな荷物も一緒に纏められていた。うわ、助かった！ 翔が持ってきたのね。

侍女服へと着替え、軽く髪も梳かして淡い色の口紅を差した。あまり似てないとはいえ双子には違いない。これで少しは区別付けてもらえるかな？ それに……あの人に少しでも女性らしくして見せたいし。

耳朶に付く五つの宝珠をなぞり、「みんなは周りを見てもらえるかな？ 怪しい人がいないかとか。あと王太后様の様子もお願いな」と頼む。「承」と間髪いれず返事があり気配が遠のいたのが分かった。

あ……元の世界に戻るときは一旦精霊達と離れなきゃいけないだよ。すでに体の一部となっていたからウツカリ忘れそう。その点についてもお母さんと話し合わなくちゃ。

食堂入り口の扉を開いたら、大勢の視線が一気に集まったのを感じた。

「きゃっ！ な、何?!」

「翔子、丁度良かったわ。いらっしやい」

大勢の近衛騎士達が一同に集まり、正面にはお母さん、お父さん、あと数名の騎士と文官らしき人が立っていた。そのお母さんが私に手招きで呼ぶ。

こ、この大勢の前に出ておいでっていうの、お母さん……。

私の事はきつと食堂の料理人だと思っっている人も多数いるようだ。しかし侍女服を着ているから全く立場が分からない存在となっているだろう。

「みんな聞いて！ 大体の事は今話した通りよ。私はこれから王の補佐に付く。そして団長……アルゼル・クランベルグは大将軍の座に着く。私が色々と説明不足のまま消えてしまったその罪は消えない。その償いをこれから生涯をかけてキッチリやらせてもらうわ。だから……よろしくお願いします」

そういつて、お母さんは大勢の前で

深く、礼をした。

これは、けじめだ。お母さんなりの。私もお父さんも、黙って見守った。

やがて顔を上げたお母さんは、今度は私を引き寄せにつこりと笑う。

「それから紹介！ この子はね、私とアルゼルの娘よ」

おおおおおつ！！

一気に食堂がざわめきに包まれた。口々に「団長と精霊姫は……」「いやしかし」「ウンノは女だったのか！」「精霊姫っていくつだ」「か、可愛い……」と聞こえてきたが、そんな中間こえるセリフに耳を咎めたお母さんは「誰っ！ 年齢の事言ったのは！」と素

早く反応をして鋭い視線を向ける。怖いよ地獄耳！

「あとこの国……というか、王の後見についたのは隣国ラスメリナの王、翔よ。この子の双子の弟だからよろしくね、みんな」

と、お母さんが指差す先には翔がガツツリと並んだ料理を食べていた。テーブルに並ぶ数々の品はほぼ消えていて、翔は頬をパンパンに膨らめて口を動かす。頬張りすぎだつて！

「なつ！ 竜帝！」「うおつ！ また城壁消されるぞつ」「待て、団長の息子と言ってたぞ！」「なんて規格外な息子さんだつ！」

口々に言い、ザザツと翔の周りにいた人たちは綺麗に円を描くよう後ずさつた。

「うっわ、失礼しちゃうな。僕だつてそんな考えなしにやること、あんまりないんだからね！」

翔……それ反論になってないから。
手に持ったグラスをお母さんと団長に向けて振る。

「ねえ早く飲もうよ！ 待ってるんだけどな！」

「食べるのも待ちなさいな！ あと一人皆に挨拶をするわ。さあ、こちらへ」

そうお母さんが手を向けた先には、マルちゃんがいた。少しまだ顔色は優れないようだったけど、何か幾分スッキリした顔をしていて微笑をたたえていた。

十六歳でしょ……この笑顔、危険だわ。

ふとした瞬間ジエネに似るその整った顔立ち。そりや王族って大体顔がいい人が集まるんだけどさ。美しい相手と婚姻結ばもれなく王家は美形の一族となるよね。でも……内側から光りだしているような錯覚をするほど惹きつけられるその姿に、食堂にいる全ての人間が釘付けとなった。

皆の前に立つたマルちゃん。一旦軽く目を伏せた。

「皆の者……私はこの国の王、ディエマルティウス・アルディアント・レーンだ」

まだ年若い声だったけど、澄んだその声色は部屋の隅々まで響く。あまり王がこのように間近に接する機会がなかったので、正体を窺っていた多くの騎士は、マルちゃんの名乗りとともに儀礼として膝を折ろうとしたけれど、それをマルちゃんはおしとどめた。

「よい。普段は形式もあるから仕方ないが、今はこのまま聞いて欲しい。

まず、皆には……私が王たる自覚を持たぬが故に、一言では表せぬほどの苦勞をかけてしまった事を謝罪させて欲しい。祖父である宰相、母である王太后の好き勝手な政治は、市井の者、城の者……國中、いや隣国までにも多大な迷惑を被った事であるう。しかし、ここにいるラスメリナ王カケル殿とその姉君、精霊姫だったリイン殿と、ずっと私を支えてくれていた克蘭ベルグ団長のお陰で、私は自覚もなく随分甘えてきた事を思い知った」

ゆつくりと、一言一言確かめるように話すマルちゃん。

綺麗な明るい海の色をしたその双眸で、自らに集まる視線を確認しながら言葉を紡ぐ。

「これからは。この身全て、この人生全てをにかけて国を立て直していく。次代の精霊姫も恐らくではあるが近くにいろらしく、天候の安定も図れるだろう。まだ未熟な私にどうか力を……皆の力を貸して欲しい。共に、レーンの再建をして欲しい」

しん……と一瞬の静寂の後、わああつと歓声が沸いた。

口々に明るい未来の希望を唱え、一様に明るい表情となる。私としては『次代の精霊姫』という言葉にどきつとしたけれど、お母さんが私に向かってバチツとウインクした。まだ私の覚悟の決まらないうちに公表するのは避けてくれたんだろう。

「さあ！ とりあえずさ。飲もうじゃないのよ皆、宴会よ！ グラス持ちなさい」

お母さんの声に、皆近くにあったグラスを持ち、天に掲げる。この国の乾杯のポーズらしい。

「この国の再出発に！」

「この国の未来に！」

葡萄酒が注がれたそのグラスを高く上げ、お父さんとマルちゃん
が声をあげて言うと、口々に食堂に集まる全ての者達がそれに続き、
くるりとグラスで円を描いて一気に煽った。

それからは「無礼講よ！」とお母さんは張り切って……飲み始めた。

いえね、元々お酒とか飲み会とか好きな人だと思っていたけど。
この国にいた時から好きだったみたいで数々の伝説が残されているらしい。
古参の騎士達が飲み始めたお母さんを見て顔を青くして

いたから、一体どんな事をしでかしたのか。知りたくもないけど。

お父さんは、お母さんが上機嫌で飲み始めたその様子を見て、嬉しいのか悲しいのか良く分からない複雑な表情を浮かべている。

やっと自分のところに戻ってきた妻だし、上機嫌に飲み始めたその姿は確かに自分にとって嬉しいけれど、二人きりで時間がまだ持っていないらしく……ちょっとお母さん少しは構ってあげて！

始まった宴会だけれど、どうも近衛騎士だけでなく文官達もちらほから見受けられる。更に増えているような……って、料理足りないよね?! ちょっと大丈夫かしら。

私はテーブルの上に乗る料理の量を調べる為、各テーブルを回ることにした。

3 宴会家族

今のところは……大丈夫そうね。

料理もお酒もみるみる無くなる様は、ある意味爽快ともいえる。気持ちいいほど皿が空になり、水のように杯が干されていく。

この国を傾かせていた膿を出し、これからの再出発としての宴会は、どこまでも雰囲気が出るかつた。

私に「ウンノ！ ああもうそんな気軽に呼べないな。え？ いいのか？」「俺の嫁に！」「食堂にずっと勤めてくれないか?!」など様々な声をかけてくれる。

「私」を認められたのかな、と思うと何故だか心の奥底からじんわりと温かい気持ち湧いてきて、うれしいだなんて一言で終わらせたくない喜びで満たされる。

「ウンノちゃん、ちょっと王様呼んでるわよ、こっちきて」

イル・メル・ジーンにツンと袖を引つ張られて、食堂中央あたりのテーブルへと連れてかれた。私の知らない騎士何名かと同席していたマルちゃんは、私を見るなり顔をパツと輝かせて立ち上がった。

「ウンノ！」

「マルちゃん！ さっきとっても格好良かったわ！」

私はマルちゃんに駆け寄ってぎゅうつと手を握った。あの演説は心からの言葉だと感じ取れたし、ちゃんと私の気持ちが伝わったこ

とが何より嬉しかった。
するとマルちゃんは顔を赤くして俯いた。

「あつ、ごめん……なさい。そうですよ、一国の王様に不敬にあたりますよね。すみませんでした」

握っていた手を解こうとすれば、逆にぎゅっと固く掴まれてしまった。

「いや違うんだ、違うんだよウンノ。その……お前だけには王である前に『マル』であると思っていて欲しいんだ。だから敬語も要らぬ。頼む」

「は、はい。 じゃないわ、ええっと、わかったわマルちゃん」

じつと真摯な目で見つめられて、しかも顔のとても整った十六歳の熱の籠った懇願に私はコクンと頷いた。王としての責務もあるだろうけれど、ひと時だけの重い鎧を外せる場所も必要だろう。

そうだ、七歳年下の弟だと思えばいいかも。むしろ翔よりもマルちゃんの方がちゃんと弟らしいかもしれない。

そう思うと急に可愛く思えて、自分とそう身長の変わらないマルちゃんをぎゅっと抱き締めた。

「王様の仕事、大変だけれどみんなで支えるからね！ もちろん私も！」

「はいはい、わかったから離れなさいよウンノちゃん。
つたく、罪な娘ね。このお坊ちゃんに刺激強すぎよ」

そう言っただけで私の手を剥がしたのはイル・メル・ジーンだ
った。

後半ボソツと付け足された言葉はよく聞き取れなかったけど……
うわわわ、ここには近衛騎士団の面々や厨房で働く人たちもいるん
だった！

慌てて離れると、マルちゃんは……肌という肌を全て赤くして天
を仰いでいた。

やだっ、みんなの前で子ども扱いされて恥ずかしかったのね！
同じテーブルにいた人たちも、ポカンと私たちの様子を見ていた
ので相当呆れているに違いない。

「あのっ、すみませんでしたお騒がせして！」

「いや、いいんだ。君が団長とリインの娘さんなんだね？ 会え
て嬉しいよ。私は一番隊長セイベン・スイーオ。ここにいる者達
はすべて団長を慕って近衛に入団したんだ。先の大戦における団長
の武勇は凄まじいものがあつたんだぞ」

まるで自分の事のように誇らしげに語るのを、私はなんだかくすぐ
つたく思う。

「ええ、私もその戦争の事は知っています。ただ……父親だと分
かったのは今日初めてなので、実感が湧かないというか、なんと
いうか」

本当にこの世界に来てから、ありとあらゆる事柄が一度に起こり
すぎて、自分の処理速度がなかなかついていけない。父親という存
在をまるっと受け入れるにはまだ早すぎて……憧れていたあの騎士
が父親だという事を、徐々に家族として噛み締めて行こうと思う。
これから時間は沢山あるのだから。

「そうだったな。しかしこれで団長の元に家族が揃ったんだ。団長のあの寂しそうな背中を見なくてすむのは俺たちにとっても嬉しいぞ」

そういつて、セイベンはテーブルに着く他の騎士達と杯を交し合った。

二十三年の月日は、お父さんにとっても私たちにとっても非常に長かった。やっと、家族としての歴史が始まるんだと思うと、とても胸が熱くなる。

「ウンノ！ ちょっと来てくれないか！」

その時厨房の方から私に声が掛かった。何だろう、なにかあったのかな？！

「じゃ、マルちゃん、みなさん！ 沢山食べてね！」

そついい残し、私は声の主アウランさんの下へと駆け寄った。少し困ったような顔をしていたので何かあったのかな？

「ウンノ、折角の所すまないが料理が足りなくなりそうだ。その……竜帝様が……」

まさか食べ過ぎてるんじゃないだろうな、翔！！

しかしそのまさからしくどんどんテーブルに乗る料理を平らげて、只今三つ目のテーブルを攻略した所だと。

その上、近衛騎士だけの食堂なのに噂を聞きつけた文官やらなにやら、コッソリと加わってきているようで人数がとても増えている！
うっそー、ムリムリ足りないわ絶対！

「ウンノ、何か簡単なのではないだろうか？ ころう言つては何だが、酒さえあればあの騎士団の連中は大丈夫だ。普段酒が入るときは、塩茹での豆だけだからな」

「豆だけって！ 酒さえ飲めればいいのかな？！ しかし今はお母さんもいるし、豆だけ出すなんてそんな恐ろしいことは出来ないよ！ 食材の在庫は把握している。ジャガイモだけは恐ろしく量があるのでとにかくジャガイモろう！ そして私はアイツを止めよう！

アウランさんに「ジャガイモ沢山茹でておいて！」と頼み、ある場所へと走った。

3 宴会家族（後書き）

妄想部

<http://mypage.syosetu.com/144526/>

こちらに翔が相当アレしてます。

是非番号順にお楽しみ下さい！

最後のにも私の「とある会社」シリーズの面々が
それは楽しそうにワイワイとしていますw

多くの方にお気に入りユーザーしていただいて

ありがとうございます またひよつとしたら何か

あるかもしれません……と、ここで部のほうに振っておくw

4 宴会家族

アイツのいる場所はすぐに知れた。
周りの騎士達が恐ろしくて近づけない為に、ぼっかりと空間が開いているからだ。

「くら翔っ！」

「わーい、ねーちゃん！ ご飯美味しいけど足りないよー、もっとないの？」

「もっとないの、じゃなーい！」

冬眠前のリスみたいに頬袋を膨らませてモリモリ食べるその姿はある意味気持ちがいいけれど……いかんせん、食べすぎよっ！

「ほらージュノーもさ、もっと頂戴っつていえよー！」

「うつせ！ 大体、お前が食べ過ぎなだけだろーがバカヤロウ」

翔だけだと思っていたテーブルには、もう一人が座っていた。わ、ジュノーさん！ 母親との席で、ジュノーさんは翔が天敵と言っていたけど……どうして一緒に座ってるのかしら？

そう聞くと、ふて腐れたようにテーブルにコンコンと指を打ちつけた。

「俺はサツサとこんな国オサラバしたかったんだよ。実入りのねえ無駄足踏んじまったしな！」

「オトモダチの僕に声かけないなんて酷いー！」

「誰が友達だ！
フン、報酬代わりに酒もツマミもたらふく食ってやらあ！」

杯になみなみ入れた葡萄酒をまるで水を飲むようにあおり、「で」と切り出す。

「アイツはどうしてるんだ」

「んー？ あいつって？」

隣のテーブルから無理矢理奪ってきた料理の皿をテーブルに並べていた翔は、聞かれた意味をわざとらしくとぼけた声で聞き返した。うっわ、意地悪！ ジュノーさんなんだか言い辛そうにしているのに。案の定、額に青筋立てながらジュノーさんは大きく息を吐き、ぷいと横を向きながらもう一度翔に声を潜めて尋ねる。

「サーラはどうしてるんだ」

「プーッ！ なんだよっば気になってるんじゃない！ もー、早くそこ認めて堂々と会えば？ ばっかだなあ」

「テメーふざけんな！ 俺はだな、ただ情報として持つだけであって別にアイツは……！！」

バーンとテーブルを叩いて立ち上がったジュノーさん。声を潜め

た意味自分からなくしてるよ！

「ええっ?! どうしてジュノーさんがサーラの事を? んん? まって、翔に聞くって事はあのラスメリナのサーラよね?」

「あーそつかゴメンゴメン、ねーちゃんには言っていないっけね! ジュノーはサーラのパパなのだー」

えええっ?! ちょっとほんとなのそれ! サーラって確か十四歳だったわね。ジュノーさんって見た目四十歳前後だから、無くもない。それにじっと見れば確かに面影が?

「うつせーカケル! 叩つ斬るぞテメー!! …… まあ、なんだ。裏の世界に生きる俺だし、そうそう父親だなんて名乗れねえよ」

後半は私に向かって語ったジュノーさん。その目は少し寂しそうで、何があって離れて暮らしているのか私にはわからないけど、私たち親子みたいにいつか……。

しみりとした私とジュノーさんの間に、翔の軽い声が割って入った。

「あつれー、ジュノー知らないの? サーラもアンザスにいたんだけど」

「は、はあああああっ?! なんだとオメーふざけんなよっ」

「翔! ちょっと冗談でしょ?!」

アンザスというのはこの世界で最も恐れられている暗殺団の事であり、その構成員と認められたごく一部は世界中の政変や戦争の

裏で暗躍している事は、小さな子供ですら知っている。『出来ない事は無い』と豪語し、また情報にも強く、一度請け負った任務は必ず遂行されるとあり、正義だろうが悪だろうが金次第で動く引く手あまたの集団だ。

そんな所にサーラがいたとは……。ユーグさんとあの甘い関係を築くまでに一体なにがあつたのかな。間違いなく翔が絡んでいるんだろうけど。

「まあそれはともかくさ。あつ！　ねーちゃん風竜が呼んでるよー」

「えー！　風竜が……って！　バカ翔！　その前にサーラの事言いなさいよ！　どうしてアンザスに?!」

「えー、面倒くさいな。大体でいい？　僕がこつちに来て知り合つて連れてつた、以上!」

「ちつともわからないわ!」

「まあいいじゃん」

「よくない!」

「すげえな、竜帝カケルと対等に会話できてるぜ。いやー、姉君も充分怖えよ!」

はつと気が付くと、ジユノーさんが私達を眺めながら酒を飲んでた。い、いやいや!　ジユノーさん、そもそもジユノーさんがサーラの事聞いたんじゃない?!　なんで俺外野みたいな顔してるの!

「いんや、そりやまさかアンザスつー同じ所にいたのは驚いたけどよ。俺？俺はずっと地方回り専門だから知らねえさ。同胞であつても情報は隠すのが常だ。けどよお……アイツが今ラスメリナにいて、それでいて元気にしてるんならそれでいい」

ふんと鼻を鳴らして翔の座る椅子を一つ蹴飛ばすと、再び酒を飲み始めた。

……そうなのかな？無事さえ分かればいいのかな？色々抱えるものがあるだろうから簡単には言えないけれど、サーラがもし望むのだつたら会わせたいな。

そう口を開きかけたとき、翔が待ちきれないといった様子で立ち上がり、私の腕を掴んだ。

「ほらねーちゃん！風竜呼んでるってホントだから行こうよ！風竜がめっちゃねーちゃんを気に入ってるんだけど、何かしたの？」

ぐいぐいと窓に向かって歩き出す翔。私は躓きそうになりながらも何とかついていった。広い食堂を横に突っ切り、窓が幾つか並んだ壁伝いに歩いて、^{ひしげ}人気の少ない一つの窓の前に立つ。

二人で外に顔を出すと、少しひんやりした空気と吸い込まれそうな濃紺の空に星がいくつもちりばめられ、六つの月のような球体がぽっかりと浮かんでいる。

そのうちの一つの球体を背にした黒いシルエットが浮かぶ
あれは、竜？

（娘。久しいな）

心声で直接語りかけるのは、まさにあの時の風竜だ。

(わあっ！ お久し振りです風竜様)

ちょっと遠くて姿が良く分からないけれど、心声ならば聞き取れないことがないから大丈夫だ。窓から少しだけ身を乗り出していたら、ぐいと腕を持ち上げられた。何かと思っただけ腕の先を見たら、翔が窓辺に立ち上がって私の腕を引っ張っている。

「もー、僕聞こえないからツマンナイじゃん。いつくよー！」

「え、ええっ？！ まってー！！ …… つっきゃー！！！！」

ぴよいと気軽に翔は飛び降り、腕を捕らえられたままなので自動的に私も落下。遊園地の落下を楽しむ乗り物みたいけれど……な、生身生身！ 安全装置ないし！

「あー、そうだった！ ねーちゃんまだ飛べないんだっけ」

ウツカリと笑う翔を見て殺意を覚えたのは仕方ないよね！ 地面まであと僅か！ ってなんで翔まで一緒に落ちてるのよ！

「ひめさまー！ ぼくささえるよー！」

「きゃっ！」

ふわっと体が浮く感触がした。あ、危ない所だったー！！ 私と翔を助けてくれたのは精霊の疾風はやて。風の力を使ってゆるやかに元の窓辺付近まで持ち上げてくれた。

「ありがとう！ 助かったわ。あ、そうだ！ 風竜様の所まで連れて行ってくれる？」

「はい！ ぼく ふうりゆうだいすきー」

そうね、属性が一緒だもんね。

どうやら翔は疾風は見えないようだけど、この展開にキヤツキヤしてた。

「うっわー、すげ！ ねーちゃんなにこれ！ あれ？ っていうか？ えーまじでほんとすげえー！」

「……分かるように喋ってよ」

「親子で？」

端的過ぎる翔の言葉に呆れつつ「親子二代で精霊姫なんだ？」と正確な意味で驚く姿が、ああ翔ってだからこの世界で必要とされているんだな、と私はすとんと腑に落ちた。

理性的や論理的という言葉がちつとも当てはまらなくても、翔は感性だけで全てを引つ張っていく。「こいつならなんとかしてくれ」と思わせる何かがあるんだ。

「まあ……そういうことになったのよ。でも私はあまり……」

「表に出たくない、でしょ？ っていうかさ、ジエネがねーちゃんを出さないでしょきつと。まーいいじゃん、いちいち公表しなくたってさ、天候落ち着いているんだっいたら別に困る事もないし。その辺うまくやってもらおう。こっちで暮らしたいんでしょ？」

辿りついた風竜の背に翔はよっこらせと移り、竜の頭の天辺までいって座る。

私は疾風に支えてもらいながら風竜と翔の目の前に立った。うわー、こつ見ると風竜の顔はとても大きいし、ワニの様な……？ 爬虫類系の顔は恐ろしいけれど心声で通じ合った後なので、実はおちやめな毒舌家というのも分かっている。何より翔と契約しているから安心だ。

そう考えていたら、軽く目を眇めて風竜が低音の威厳ある声で私に問いかけた。

「娘、どういう意味だ？」

「きゃー！ 心を読まないで下さいよっ！」

「フン、主の思ってる事など読むまでもないわ」

「あははっ！ ねーちゃんどうせシユーの事、毒舌だとかなんとか言っただんでしょ」

何で分かつちやたのかしら！ でも『次会う時は、多少の色気をつけておけ』なんて言われたし、アレを毒舌じゃなくてなんだというの？

あ、でも先にあの事を伝えなきゃ！

「風竜様、私に『読みとり』を授けて下さって有難うございました！ 今回、あの力がなければ正直何も出来なかったと思います。本当に助かりました」

ぺこつとお辞儀をして礼を言うと、竜の頭にごろつと寝そべっていた翔が飛び起きた。

「ねーちゃん！ ちょっと何どういう事?! までシユー、お前

……！」

「いいだろうカケル。我は主の姉が気に入ったまで。我に言霊で縛った『ねーちゃんを大事に扱え』それに反しているとも思えぬしな。して、我が名は読み取れるか？」

えっ……いいのかな？ 契約者だけが知りえる真名。私が読み取る事によって翔との契約が揺らがないか心配だけど。

翔を窺うように見ると「うーん、まあいいんじゃないか？」と口を尖らせた。

「ちえっ、僕にはそんなに優しくしてくれないくせにー。ずるいなー」

私はじつと風竜の瞳をみつめ、その奥に見えるものに意識を集中した。初めて会ったときは断片的だったある文字が、今は……一列に繋がり……。

「シュラ…… シュライナルギース……ゼルネ、ス？ シュライナルギースゼルネス！」

するとパパパツと花火が私を取り囲むように明るく瞬き、風竜シュライナルギースゼルネスの体がぶるっと打ち震えた。

「我、得たり」

「すっげ、ねーちゃんやるう！ 風竜の加護貰っちゃったね。つか名前長くて覚えられないからシューでいいよ！」

「三文字以上覚えられない翔が言うなー！」

「何人かは覚えてるもん！」

「何人かだけってのが問題なのよ！」

ホントに翔は……名前を覚えられない。二文字が限度で、三文字以上もし覚えていたら相当親しい人物であると察することができる。親しい？ 親しい……あれ、なにか引つ掛かる。あ！

「そうだ翔！」

「なんだよ急に」

「翔はこの世界に来たとき誰に落ちたの？」

私の問いかけに、珍しく翔は「え」と言っただけ黙った。

あの翔が黙った。

ちよつと、何?! あまり見た事がない翔の動揺っぷりに、これは一体何があったのかを絶対聞き出さなきゃと近づくと、翔は両手で円を描くよう指で器用に上から下へと滑らせた。赤い光る文字? 下まで書き終えて、それを私に投げつけた!

「きゃ! 何よこれ!」

「転送! ぼーい!」

私の目の前で円の真ん中が開き、そして飲まれた。

ぎゅっと閉じていた目をそろそろと開けると……あれ? ここは窓辺? 後の方からは宴会の喧騒が聞こえてくる。うわ……翔、や

つてくれたわね！

恐らく聞かれたくなかった事に違いない。手っ取り早く質問から逃げようと、私に向かって何かしらの力を使ったんだ。あれが翔の『時空を翔ける力』なのね？ なんてデタラメなの！

先程までいた場所を窓から見上げると、ぽうつと明るく光る球体を背にした竜と翔のシルエットが小さく見えた。軽く手も振ってたり……！！ もうつ！

絶対絶対聞きだしてやる！ そう心に固く誓った時、知っている声が二つ言い争っているのが背後から聞こえてきた。

わ、何？ 何だろう？

私は様子を見ようと騒ぎの中心へ歩を進めた。

4 宴会家族（後書き）

妄想部

<http://mypage.syosetu.com/144526/>

6月1日に部で新作出します。

そして私はまだ書いていない……（汗）どうすんだ！

5 宴会家族

「大体そんな脳内万年花盛りの人に言われたくありませんね」

「ほう、それはそれは。心も体も満たされるのを知らぬとは悲しいな」

「不要ですよ面倒な」

「愛でる心が無いとは……もつと心に余裕を持って」

「余裕持ちすぎて下半身がだらしない人と一緒にしないでいただきたい」

「なんだとこの冷血家！」

「色情狂！」

「棒切れ！」

「筋肉ダルマ！」

なんなのこれ。

ハルとロウが争うように杯を重ねながら、舌戦とは言いがたい、なんとも低レベルな争いが目の前で繰り広げられ私は呆然と立ち尽くす。

ハルは両手に目麗しい女性を腕に抱えて左右の膝に据わらせ、その周囲にも様々な職種の女性（たまに男性も）ぽおっと頬を染めて見入っていた。す、すごいよハーレムだよ。まさにここにハーレムがあるよ！ 男女の垣根を越えてハルは魅了しつくしている。破壊力抑制眼鏡も今は外され、色気がダダ漏れだ。ああ、部屋の片隅にはその色気に当てられた人が何人も倒れている……公害レベルだよ！ 対してロウといえはその冷徹に見える水色の目をすうっと細めな

がら、武人にしては細い体を椅子の背に預け足を組み、およそ普段の姿からは想像つかない低次元の口論をハルに対して展開する。

わー……見ちゃいけないもの見てしまったような。回れ右して移動しよ……

「ウンノ！ こいつを少し鍋で茹でてくれ！ 少しは血が通うだろうからな！」

「ハハ、そちらこそ、その苔みたいな色の髪を桃色に染められるがいい！ なに、常春な脳内と同じで分かりやすかるう」

やめてー！ 巻きこまないで私を！

なにこの二人、実は相当仲が悪いの？ だけど口から出るのは小学生レベル。くだらない言い争いにどうやって仲裁したらいいものか困っていると、助け舟が来た。

「あんた達いい加減にしなさいよ？ この酔っ払いが！ ウンノちゃん困ってるじゃない」

イル・メル・ジーンが片手に葡萄酒のボトル、片手に杯を持って現れた……って、説得力ないよその姿！

手酌でトトトツと注ぎ、それはそれは美味しそうに飲み干すイル・メル・ジーンは、とてもハルと同じ年に見えないし、男とも思えない絶世の美女っぷりだ。いや、ハルもそう言う意味では年齢より割と若く見えるので……結局規格外なんだよね。並ぶと目麗しい二人なのでお似合いだけど、イル・メル・ジーンは女装が趣味なだけで男性が好きというわけではないらしい。ハルはどちらでもいいけるクチだけど、イル・メル・ジーン相手では……ありえないそうだ。

「ハル、まず侍^{はべ}らせるのやめなさいな！ そういうのはヨソでやって頂戴！」

ボトルをゴスツとテーブルに刺して（刺して?!）ハルに取り巻く一団にギロつと一瞥をくれると、『災厄』を知る、または噂を聞いたことがあるのか、サアアッと潮が引くように皆あつという間に散っていった。

それを未練がましそうに見るハルを「フン」と鼻息一つで片付け、今度はロウに向き直る。

「ロウ、アンタも考えなしに当たれる相手だからって気を抜いてるんじゃないわよ！　　ったく、恋人の一人でも早く見つけなさいな」

「生憎その方面は全く興味ありませんので」

興を削がれた、まさにそんな表情でイル・メル・ジーンが刺したボトルを取り上げ自分の杯に葡萄酒を注ぎいれた。

「うーん、確かにロウさんてクールなイメージで、こう……熱血……とか、彼女にメロメローなんて姿は想像できないけれど。もしそういう相手がいたらどうなるのか見てみたい気がする。」

「しかしウンノ、あなたには感謝する。隊長に関して私達では心労を取り除く事などできなかつたからな。よくぞ来てくれた。ありがとう」

「そうだぞ、若の凍った感情が緩く溶け出したのもウンノのお陰だ。私からも礼を言う」

ロウとハルからそれぞれ言葉をもらい、私は慌てて両手をバタバタ左右に動かす。

「やつ、そんな！ 私はっ」

「ふふっ、そんな可愛い顔しないで？ 食べちゃいたくなるわ」

「イル・メル・ジーン、お前がそう言つと洒落にならん」

「あら失礼ね！ ねえウンノちゃん。契約条件済んであちらの世界に戻つても……また帰ってきてくれるわよね？」

急に改まった口調でイル・メル・ジーンが私に尋ねる。その緑柱石のような輝きをもつ瞳は僅かに揺らめき、じっと私を見つめる。

「もちろん帰ってくるだろ？ 若の為に。勿論私の為にもね？」

「隊長殿には心の羽を休める場所が要りますからね」

二人の声も続き、私は……心がじんわりと温かくなり、そしてこの世界での居場所が少しずつ増えて行くのを感じた。嬉しい、嬉しいよー！

「ありがとう。翔がいうには、私も練習すれば『扉』っての作れるし、行き来自由になれるみたい。私、あちらの世界で仕事に行くところだったのよ……色々整理してから、絶対こちらに戻るわ」

来る、じゃなくて、戻る。

私はこちらの世界を基本として生きて行く。その決意をこめた返事を感じ取ったのが、イル・メル・ジーンは「ウンノちゃんっ！」と私をギュウウと抱きしめた。

「きゃー！ イル・メル・ジーン！ 苦しいー！」

そ、その胸は何で出来てるの?! やけに精巧な作りで、プニプニでやわやわで……! 燃えるような赤髪はとて素晴らしい香りが出て、こんな妖艶さを醸し出すイル・メル・ジーンに私は男だったら悩殺されてたね! だって女の私だってクラクラしちゃうもん!

「あ、ごめんなさいねウンノちゃん。……まったく、ジエネは何してるのかしら! 早く来ないと私がいたただいちゃうわよ?」

食べちゃうとか、いただいちゃうって、なにーっ!

その言葉に軽く怯えている私をよそに、イル・メル・ジーンはハルやロウ、そして周りの騎士達に尋ねて回る。　　どうやら団長に今日中にやらねばならない事後処理を一人だけ任されてしまったらしく(丸投げ?) 仕事量が半端ないらしい。

早く会いたいな。少しでもジエネと離れたら寂しく思うようになった。　　ジエネさえ迷惑に思わなければ、共にありたい、傍にいたい。会ったら、言いたい事沢山あるのに。

「なに辛気臭い顔してるのよ翔子」

「つきゃー! お、お母さんっ」

突然両胸をわしっつと掴まれ小さく悲鳴を上げてしまった。

振り向くと……半眼になって上機嫌の、完全に酔っ払いと化した母親が私の胸を背後から掴み、「アハハハハ」と笑う。

「アハハじゃないわよっ! やめてセクハラよもっっ!」

「ふふふ、よく育ったわね、私の手じゃ掴みきれないわ! ……」

…ちっ、くれてやるのが勿体無いっ！」

おおお母さん?! 何を言いました?? 舌打ちもすごく怖いわっ!

母親は私の耳をクンツと引っ張って、口を近づけた。内緒話?

「いい? 今夜キめてきなさい」

「え? 何を?」

「光の精霊と契約よ」

それはつまり……っっ!!

ボンツと一気に顔から火が出る。え、え、えー!! お母さん、いま私にそれ言うの?!

私が内心パニックを起こしていると、母親は「腹を決めなさい」とニツコリ笑った。

「私も通ってきた道よ。そりゃ、精霊と契約する為にやんなきゃいけないってのは嫌よ。でもね? 『繋がる喜び』って、好きな相手だからこそ喜びであるし、私だってアルゼルじゃなきゃ嫌だわ。まず考える順番を変えてみればいいのよ? 好きな相手と一つになれたら、たまたま精霊と契約できた、ってな具合にね!」

「ちよ、ちよっとお母さん!」

あけすけな言葉に目を白黒していると、しゅいと指を一本唇に当てて声を落とすように注意された。うわ、危ない危ないっ。聞かれちゃ困るよ!

「婚前交渉は特例ってことで認めるけど……まだおばあちゃんになりたくないわ。本当だったらせめて結婚の契約をしてからが理想なのよね。それだけが心配だわー」

そ、そこ？！

その前にもつとなんか色々あるでしょ！　こつ……親として複雑な心境とか、色々！

「とにかく頑張りなさい。　　つて、ジエネシズ君は？　え、まだ？　もー！　アルゼルったら」

私の心境など知れているのか、さつさと話を畳み、元精霊姫である母親をポカンと見ていた三人に向かって鋭い声を向ける。

「ハルドラーダ・メツシ！　七番隊隊長を直ちに呼び戻す！　口ウ・グイラン！　一番隊副長及び四番隊副長らと共に七番隊隊長の仕事を引き継ぐ！　それからイル・メル・ジーン！　……翔を抑えておきなさい」

「はっ」

「はっ」

「はあい……一番厄介だわ」

う、うん。翔を押さえるのってかなり……大変だと思う。

それぞれかなりの酒量を体内に入ってるのは、床にずらりと並べられた空瓶から分かるけど。

さつと仕事の顔をして立ち上がり、それぞれの目的に向かって行く姿は『一滴も酒など飲んでいません』と見えるからすごいと思う。感心していたら、私に向かって母親が「じゃあ翔子はあ……」と

人差し指を口に啜えた。

「ツマミもつとちよーだい？」

お、おかーさんっ！ 娘にやるポーズとしてどうかと思うよ、それ！

1 契約

調理場に戻った私は、アウランさん達が茹でておいてくれたジャガイモを前に戦闘を開始する。まずは皮を剥いて軽く潰したジャガイモに、塩で揉んでおいた胡瓜やサツと茹でた人参など入れたポテトサラダを作った。マヨネーズと塩コショウを入れて、隠し味に砂糖。

「ウンノ、どうして砂糖をいれるんだ？」

「あ、これはマヨネーズの酸味を柔らかくする為ですよ。私はこの方が好みなので」

あと植物油にローズマリーの枝とニンニクを香りが立ち上がるまで熱して取り出し、ザツと四つ切にしたジャガイモを投入。表面がキツネ色になったら取り出して塩振って完成。全部取り出したら、今度は下味付けて小麦粉つけた鶏肉を入れて、これまたいい色になるまで揚げて完成。ああ、いい香り！

あとはもう、焼くだけとか切るだけとか、そんな感じをどんどん提供する。こうやって出していくのに次から次へと空の皿が運ばれてくるので、ものすごく目が回る忙しさだ。どんだけ食べるのー?!

「ちよつと何でそんなちっさな意地悪してるのよ！」

「うるさい！俺はだな、やっと父親と名乗れたのに浸る間もないのだぞー！」

「それで彼に？ かつわいそー！ 娘に嫌われるわよ？」

「昔から目をかけていたアイツだがな、それとこれとは別の話だ！」

「はいはい、まあいいから飲みなさいな」

料理を各テーブルに運ぶ際、聞こえてくる声の方には向かわず離れた席にタンタンっと皿を置き、空いた皿を下げる。その間も相変わらず声は聞こえてきて……お、お父さんはお酒が入ると愚痴っぽくなるのかな？ それをお母さんが宥めているようだ。ちよつと離れた場所でそのテーブルに目をやると、二人並んで座り、あつという間に空になる二つの杯に酌をするお母さんは どころなく嬉しそうだった。 うん、お母さんにとっても二十三年振りの再会なんだよね。あの小説の内容が事実とするならば、それはそれは大恋愛で結ばれた仲なので、離れている間は……私には見せなかつたけど辛かつただろうな。私だってジエネの姿が見えないだけで、こんなにも心細く思うんだから。

今とはとにかく料理提供や空いた皿を下げる、汚れたテーブルを布巾で拭くなどのさながらホテルのバイキング会場のホール係のように、黙々と仕事をした。「座って一緒に飲んでなよ」と様々な人に言われたけど、今は動いている方が考えが紛れていい。

「シヨーク」

沢山空いた皿を調理場に下げ、再び食堂に戻って何かすることがないかキョロキョロしていたら、突然後から腕を引かれた。

「きゃっ！ わわっ、ジエネ！」

「こっちだ」

突然現れたジエネは驚く私に構わず腕を引つ張ってどこかへ連れて行くこととする。誰にも言わず場を離れる訳にも戸惑っていたら、ジエネは遅れてきたハルに目配せをして「大丈夫だ」と私を安心させる。

「若、ごゆつくり」

ヒラヒラと手を振り、ハルは調理場へと消えて行った。 ナニをする気なんだろう？ え、黄色い歓声が聞こえたよ？！ えっ、ハルってば、ちょっと……?!

その様子を見ることもなく、私はジエネに引かれるまま付いて行った。

連れて行かれたのは魔窟^{しゅく}。通称獣道を渡り、執務機の奥にある窓辺へと並んで立った。ジエネが窓を押して開け、「見てごらん」と私の視線を上へと導く。夜風がヒンヤリと私の頬を撫で、澄んだ空気を吸い込みながら私は夜空を見上げた。

「わあ、綺麗……」

この世界に来たばかりの頃は濃紺の空に浮かぶ十二個の光る球体に驚いたけど、今はそれぞれに特徴を備えていることも覚えた。

「ね、あの頂点に来ているのは何て言う名前なの？」

窓枠に手を掛け夜空を見上げた私の後ろから、ジエネは私が指差す同じ方向を見る。

「あれはラムダだ。一日を区切る目安になる。ラムダに始まり、トゥーラで終わる。それがこの世界の理だ。ショーコ、お前のお陰で再びこの美しいラムダをレーンに呼び戻す事ができた……礼をいう」

ジエネが私の肩に腕を回し優しく引き寄せた。トン、と背中を鍛えられた厚い胸に押され、それだけで私の鼓動は跳ね上がる。どきまぎしながらも、ジエネに伝えたい気持ちに懸命に言葉へと乗せる。

「確かに大変だったけど……それは私だけじゃない、ジエネ達みんな、そう、みんなで頑張ったからよ。それに私は嬉しいの」

「嬉しい？」

「うん。色々な人に出会えて、色々な経験ができて。私、ちゃんと自立出来ていたかと思っていただけ、私が気づかなかっただけで皆に守られていたんだなって発見できたの。力を抜いて周りを見れば、険しいだけの世間じゃないんだなって。頼る相手がいるというのは、こんなにも心を強くするのね。　ねえ、ジエネ？　私が甘えたいなって思うのは、あなただけなの。あなたの傍で……甘えさせて？」

私の背後から前に回された筋が固い腕を軽く掴み、振り返るように見上げてジエネをお願いをする。するとジエネは何か眩しい物でも見たかの様にほんのり目を細めた。

「……そんな目をしながら可愛いこというな。俺もシヨークの前では自然体になれる。こんなに気持ちが悪く安らげるのは初めてだ。ただ……俺は欲深い。シヨークのすべてが欲しくなる」

肩を抱く力が一層強くなり、全てを求められる心地良さに全てを預けたい。

こんなにも私を欲してくれて、愛してくれて、満たしてくれる。

そう 契約の為ではなくただ単純に、私はジエネと深くなりたいんだ。私とジエネと、一つに。

もう……決めた。

「あの、その事なんですけど」

「なんだ？」

緊張感から口をついて出た掠れ声は自分でないような気がした。

「あつ、でも先にこっちを言わなきゃ！」

鼓動が激しく乱れ巡る血が熱いけれど、これだけは伝えなければ。肩を抱くジエネの腕を外し、私からジエネの胸に回り込んで抱きつき顔を伏せ、勢いのまま口を動かした。

「私、ジエネが好き！ 大好き！ ずっとずっと、言いたかったのっ！」

ぎゅうつと頬をジエネの体に押し付け、厚くて手が回らない背中を抱き締めた。

「またこつちに戻れる方法あるんだって！ 翔が私に方法教えてくれるって！ だから……きゃあっ！」

抱き締めていたのは私だったはずなのに、逆に掻き抱かれてしまった。いつもならもう少し優しく抱き締めてくれるのに、この余裕の無さは……！

「シヨーク、シヨーク！」

「ちよつと、ジエネ！ 苦しいよ」

「シヨーク……。この手、この体。離したくない。もう俺はシヨークなしではいられない」

喉の奥から紡ぎだされるその言葉はとても苦しそうで、それはジエネの気持ちが強く込められていた。胸が熱くなった私からも、ぎゅゅとより一層抱き締める。

「シヨーク、愛してる」

体を屈めたジエネが耳元で熱っぽく囁き、熱い吐息と共に柔らかな何かが耳朵をなぞり上げた。

「ひゃっ」

背中がぞくりと震える。慌てて顔をあげると、ジエネが緩く弧を描いた目で私を見下ろしていた。その瞳の奥にはなにか熱い炎が見える。ああ、ジエネは私を……。

『求めてくれる』の……？

「ね、ジエネ。お願いがあるんですけど」

ジエネは私の声に何かしらの決意が伝わったのか抱き締める手を緩め、向かい合っていた体を片膝をついて視線を合わせてくれた。しかし私としてはこれから伝える言葉を目を合わせてだなんて絶対無理！ 俯いてぎゅっつと目を閉じて一気に口を開く。

「あの。ジエネ、あの……っ！ 私と……し、してください、ま
せんかつ！」

1 契約（後書き）

明日にはすぐに続きを上げます！

顔から火が出る、まさに言葉の通り、いやそれ以上に体中が羞恥で熱くなりながらも思い切って。口に出したものの何故かジエネから何の反応もなく、不安になった私は俯きながらもチラリと視線をジエネに向けると。

『無表情』『鉄面皮』など言われていたジエネシズ・バルドウ・レーン、この国の近衛騎士七番隊長を務める元王位継承権第一位の彼が……口をぽかんと開けて、呆けたように私を見た。

や、やだっ！ これ人に見せていい顔じゃないよっ！ 何ジエネどうしたのっ？？ ああでも私ってこの表情見ただけでなんか得したかも……？

ジエネの顔をコレ幸いとじっくり見ていたら「くそ……」と唸る様に呟き、ふいと横を向いてしまった。

え……私なにか悪い事言った？ って、まさに言ったわ！ そうだよな、ドン引きしちゃうよね。いきなりしてくださいなんて、何言っちゃってるのだよね！

ゴメンナサイ、聞かなかったことにして！ とパッと離れようとした私の右手をジエネの右手が押さえる。片膝をついたままのジエネは、横を向いたまま私に幾分怒りを押さえた声を絞り出す。

「二点、確認したいことがあるんだが」

「……ハイ」

「何故だ？」

そうだよね、そりゃ気になるよね。いきなり『してください』なんて色々段階すつ飛ばしてるからね。母親は、『光の精霊との契約方法はね、代々の精霊姫じゃないと知らないのよ。翔も知らないし、私はアルゼルにも言っていないのよ。だから安心してね？』と軽く笑って言ったけど。私はこれから相手を頼むのに、黙っていられそうもない。

そこで、とにかく『繋がる喜び』という条件を云々という話を、ただたどしく伝えたら「あの庭で知ったのか」と聞かれた。わーっ！　そ、そうなのよっ！　ジエネから落とされた唇により現れた光の精霊。その時に契約条件を知ったのよね。不自然に走り去ったから、理由が気になっていたらしい。

「あともう一点。　それ、ハルにも言っただろ」

「えっ、やっ、やあっ！　聞いちゃ………いましたか」

「ああ、俺はそれを耳に入れたとき猛烈に悔しい思いをした。何故俺に言わないのかと」

わああっ、そこなんだ？！

慌ててジエネの手を両手で握っていい訳をする。

「だって！　私その頃は、イル・メル・ジーンは女性だと思っていて、なんだかジエネといい雰囲気だし……頼めないもの、そんなこと」

「そう………言っていたな、あの時。　そんなにも俺とイル・メル・

ジーンの仲を気にしていたのか？」

口角を少し上げて、握り合う私の手をジエネの指がゆっくりと撫でる。それだけでぞわっと腰の辺りに痺れが襲う。なんだろ、とても変な……感覚。

「気に……なりますよ、好きな人ですから。好きな人の邪魔にはなりたくないから、頼めなかつたんです」

あの時の苦しい気持ちがじわりと滲む……兄と思い込もうと気持ちに蓋をしたけれど、気持ちの後から後から溢れて。イル・メル・ジーンとの仲を考えて無理矢理感情を押し込めたあの夜の長さといったら、今までで一番長く感じたと思う。

「そうか、分かった。……だがとても帳消しには出来ない、超過分は覚悟しろよ？」

「か、覚悟って！」

途端情欲溢れる目で私をみつめるジエネ。わ、私からお願いしておいてなんだけど……！ 若干のけぞる私に。

「改めて言わせて欲しい。俺はショーコを守ることを魂に懸けてここに誓う」

そしてジエネは真剣な顔をして左手を自分の胸へ、右手は私の右手を取りキスをした。今までにないくらい強い意志に、私の心は存分に包まれた。

わ、私もっ！

私の掌に添えられたジエネの厚い手を、今度は私がぎゅうっと両

手で掴んでジエネに負けなくらいの力を声にこめた。

「私も！ 私にも誓わせて？ 私もジエネを守ることを、魂に懸けて誓います！」

知略、剣術、体術……どれも私がジエネを守るほどの力は無い。しかし、大きく聳え立つ杭も、添え木となる物があればもっと地に對して真っ直ぐに立っていられると思うんだ。

どんな大雨でも、どんな風でも、二人一緒なら。

私とジエネは目を合わせると、お互いにふふっと笑った。　　っ
と思ったら！

「きゃっ！！」

「では全てをいただく」

いわゆるお姫様抱っこで私を軽々と抱き上げ、隣の部屋　私が使わせてもらっている仮眠室へと扉が開かれる。わっ！　確かにここならベッドがあるけど！

体に密着しているジエネの厚い胸板に縋ると、「怖いか？」と探るように声が落とされる。

うん、怖い。怖いけれど……。

「ジエネなら怖くないよ。でも……私、は、初めてだからっ」

「そうか。それは……」

いいことを聞いた。そんな言葉が聞こえたような？　そして、

扉はそっと閉められた。

2 (後書き)

大人は月に行くことにします

1 光と、そして

ん……？

瞼は明るさを感じ、徐々に意識が浮上する。

もう朝か……って？

体にピタリと温もりを感じ、しかし何故か胸の辺りに不埒な動きをする何かに気付いてそっと目を開けば、そこには

「おはよう、シヨー」

「……っ！」

朝日がジエネの背後からあたり、黒髪から透けて零れる光がキラキラと眩しい。丹精な面立ちは私に向けられ、その瞳に映る私の姿って、どういう風に見えるのかな、一体……あっ！ そうだった！ コトが終わり他愛もない話をしているうちにジエネの低音が眠気を誘い、グツスリと今まで寝ちゃった……？

「お、はよう、ジエネ」

致したのを思い出しぼつと顔が火照る。うわああっ、どんな顔すればいいか分からないよっ！ ……ん？ ちょっと待ってこの手は何？

片胸すっぱり覆うほどの大きな手が怪しく動いていたので、ぺち

っと叩いて外させた。

「……目の前にあるのに触らねば失礼だろう？」

そんなわけないでしょっ！

あれ、でも今何時なのかな？ 起きなきゃ！

ベッドから身を起こそうとすると、普段意識もしないような箇所があちこち悲鳴を上げた。

「ああ、無理をするな。体が痛むだろう？」

そういつて体を支えてくれた。昨夜のままなので当然下は何もつけておらず、掛布団を手繰り寄せて体に纏わせたけど、何故かジエネはすっかりと着替え終わっていた。

「あれ？ ジエネ、先に起きていたんですか？」

「先に起きたというより、寝ていない。ずっとショーコの顔を見ていたからな」

「キヤー！ 何言ってるのジエネってば！ 私の寝顔なんか見たの？！」

「当然だろう？ やつと俺のものになった女だ。じわじわと全身に広がる喜びに浸りながら、この上ない幸福感に満たされた。ショーコの艶のある髪も、恥らう度に赤く染まる肌も、華奢に見えるのに脱げは扇情的な……」

「やーっ！！ もういいです！ もういいですからやめてー！！」

掛布団を勢いよくジエネに被せて言葉を封じ、痛む体を押しつけてベツドを降り衣服を手早く身に着けた。不服そうに唸るジエネだったが、流石に仕事があるのでのんびりもしていられない様だ。押し付けられた布団を畳んで整え、「シヨーク、先に行く」と言っ私にトンと軽く口付けてからジエネは部屋を出て行った。

触れた唇を指でそつとなぞり、キスの余韻に浸る私。

愛されている。愛している。

もうそれは疑いようのない事実として私とジエネの間にある。人を好きになるといふのはこんなにも満ち足りる物かと幸福感で一杯になった。

ひめさまー……

その時随分とか細い声が心の片隅に聞こえてきた。様子を窺うよううな……。

姫君……

うわっ！ そうだったー！

精霊達を部屋の外に追いやったまま放置しちゃってたわ！

「うわっ、ごめんねっ！ 焔ほむ、飛沫しぶき、疾風はやて、息吹いぶき、帳とほり、それから光の子、みんな集まってー！」

声を出して呼び寄せると、即座に現れた6人の子供サイズの精霊達。

「待ちくたびれたっつーの！」

「事態の推移を息を殺して待ち、光のが降りて即座に捕獲してお

りましたが如何せん遅すぎですね」

「ひめさまおっそーい！」

「……」

「姫、まさかお忘れで？」

一度に言わないでー！ だからごめんなさいってば！

しゅんと肩を落として反省しながらも、焔と息吹に両腕掴まれて
いる「光の子」に目をやる。銀糸のような美しい髪を肩まで伸ばし
たいわゆるおかつぱスタイルで、瞳も銀にきらめく。

「お姫様、ようやく繋がりをもてたのですね！ ふむふむ、ちゃ
んと貫……」

「イヤー！ ダメダメ言わないでっ！！」

遠慮のない光の子の口をぎゅうと押さえてこれ以上の言葉の暴走
を止めた。

「もがが！！ もがっ！」

「姫君、光のは名前の契約を求めていますよ？」

「わっ！ そうだった！」

ようやく全ての精霊が揃う。この時の為に考えていた名前を付け
るんだ。

押し付けていた手を離して光の子と向かい立ち、すうっつと息を吸
い込む。

「光の子、名前を授けます。」

ひかる
光ー！」

「ひかる」

ぼうつと光の繭に包まれ、強烈な光が辺りを支配する。そして徐々に柔らかな光と変化して収束すると、光の子　光ひかるの額の中心に、ダイヤモンドのようにキラキラと美しく反射する宝珠が現れ、私の耳にも一つ追加された。

左右どちらも三つずつの宝珠が私の耳朵を彩り、これでこの国の精霊達の気配が全て私の知る所となった。少し意識を向けるだけで、どこになが、どんなことをしているか。そしてそれらを意のままに動かせる……力を手に入れたことを理解した。

「みんな、ありがとう。それから、これからもよろしくね？」

大きすぎる責任に不安や恐れはあるけれど、私には色々な人が付いている。支えたり、支えられたりしてこの国の為の一つの役目になえればいい。

私の言葉に、みんなはそれぞれの言葉で決意を述べてくれるけど……。

「ちよっと！　一人ずつ喋ってよ！」

わーわーと一度に大きな声で自己主張を始めるから全く聞き取れない。一喝でピタリと静かになったけど、今度は一人ずつ言う順番をそれぞれが肘で後にしると隣を小突く。

「てめーあとにしるよ」

「やだー、ぼくさいしょにいつて、ひめさまにだっこされたいのー！」

「私も後は嫌ですね。印象薄くなりますし」

「お姫様、私からですよね?!」

「やはりここは私から姫に……?!」

「……」

コンコン……コンコン……

「あー！ もううるせえっ！ 俺に先に言わせろっ！」

『どんぞんぞんぞん』

「……!」

ちよ、ちよっとー!

焔が叫ぶと同時に残りの五人が焔に向かい手を差し出し、うわこれ何度目？ と目が点になった。

お約束ってのは、つまりこういう事なんだけどね……。呆れるやら可笑いやらで、お腹がよじれるほど笑った。

1 光と、そして（後書き）

6月1日に「妄想部」にてコンビニをテーマにした
短編が公開です！

それぞれ人物が交差したり……お楽しみw

公開時刻は18時！ よろしくお願い致します

<http://mypage.syosetu.com/144526/>

それぞれの決意表明（？）を聞き終えた所で（とはいってもぼくがんばるーとか言っただけだったり、そんな感じ）、誰もいない部屋だから丁度いいので、今後の事について話すことにした。

「あのね、私一度別の世界に行ってこなきゃいけないの。私の母親……うん、前の精霊姫ただけだね、繋がりが薄くなったから皆を解放して、それから次元を渡つたと聞いたわ。それで合ってる？」

私の言葉に進み出たのは飛沫だ。この子はこういう話し合いの先導者なのね。

「はい、間違いありません。ある程度年数が経つと精霊姫の世代交代が起こります。何年か、何十年か……まちまちなので予測が付かないのですが。」

通常力が弱まる時にはすでに後継者が存在し、速やかに交代の儀を迎えこの国にはなんの影響も与えませんでした。……が、今回非常に珍しく血縁者が後継者と選ばれました。そうです、先代の中で

「

そうか……次代に選ばれた私は母親の胎内で成長への鼓動を始めていた。すぐに交代が出来る筈もなく更に世界を超えてしまったので、精霊達は抛り所を無くして天候が荒れたようだった。

うーん、どうしたらいいのかな。

すると、光があっさり口にした。

「なんだ、その様な事……簡単ですよ」

「えっ？」

「『血』ですよ。お姫様、あなたの血を私たちに預けて下さい。そこから力が貰えるので暫くは状態を維持することが出来ます」

「そう……ですね。血が繋がりの楔となり私たちも惑わずにすむでしょう」

飛沫もその言葉に頷く。

「それに」と光が部屋の片隅に置かれたある物を指差し微笑んだ。

「あの繋がりの血ならばより一層」

「キヤーーー！」

汚してしまった敷布を後で自分が洗おうと置いていたものだった。いやっ、流石にそれはっ！

しかし「折角……」「力が一番……」「誰にも見せない……」「など説得されてしまい、しぶしぶ渡す約束をした。

荷物の中から布袋を取り出して、問題の箇所を最奥へと嚴重に折り畳んで袋にしまい、強く強く念を押して飛沫へ手渡す。

「いい、ゼツタイに、誰にも見つからないようにしてね！」

「わっかんねーな。これってそんな恥ずかしいもんなのか？」

焔をはじめみんな不思議な顔をしてたけど、精霊と人間とではそもそも違う立場だし理解が出来ないのも仕方がない。

さてと。

母親に顔を合わすのはとても気まずいけれど。……うん、とつても気まずいけれど！ どこにいるか探して精霊達の事や私達の細かな話をしに行かないと！

魔窟まくつを抜けて廊下への扉を出た所で丁度ロウが書類を持って入ってくる所だった。沢山重なったそれで扉を開けるのは無茶じゃない？ 「手伝います！」と扉を開けて書類の束も幾つか持ち、一緒に執務机に置きにいった。

「ウンノ、助かった。礼を言う」

「どういたしまして。それにしてもすごい量ですね……」

書類の束というか、もう山になっている。それをテキパキと慣れた調子でロウは自分で処理できる物、ジエネのサインがあるもの、細かく話を詰めなければならぬ案件など細々仕分けて行く。デスクワークの達人なのに、ジエネを支えたいから畑違いの騎士団に入団したという変わった人物だ。

「ああ、これから人事異動や法制改革、それに……処罰対象の精査をしなければならぬ。宰相や大將軍以下かなりの人数が削られ、今いる者達で割り振っている所だ」

私はあの会議の場にいなかったから分からないけれど、宴会の最中チラホラと耳には入った。まあほとんどが『翔の非常識さ』が目立っただけなんだけどね。けどこの国は大きく動くんだろつな、とその時私は大きく期待を持った。だってマルちゃんもやる気になったし、お父さんであるこの国の騎士団長、そしてお母さんは前精霊姫、ジエネもハルモイル・メル・ジーンも、それからみんなみんな表情が明るかった。前を向いて歩く、一団となって。そして私もその一部でありたい、そう願うようになった。

「あれ……そういえばバツツっていませんでしたね？ どこにいるんですか？」

騎士団の食堂で初めて料理をした時以来姿を見ていない。昨日の宴会にもいなかったの、すこし気がかりだったのよね。

「……バツツは姉と一緒に田舎へ帰ったんだ。あちらで自警団員がどうしても必要という事で急ではあるが」

一瞬空気を飲み込んだ様な間があったけど、ロウはバツツの不在の理由を教えてくれた。お姉さんといえば『上目遣いでおねだりポーズ』が必殺技な人だったわ。いつかお姉さんにも会ってみたいなお互い変わった弟を持つ姉同士として。

「そうなんですか……残念です」

なんとなくそれ以上訊ける感じではなかったので話を変え、母親の居場所を尋ねた。

そういえばラスメリナ王がウンノに『書状持って来てほしー』
と言っていたぞ。なんでも、『あつれー、なんて書いたんだっけ。
ヤバいこと書いてないか確認したいよー』だそうだ。

……翔のセリフをこのロウさんがそのまま言うとなかなかの破壊
力ね。

眉一つ動かす『ほしー』とか『ヤバい』なんて言われると、笑っ
ていいのかスルーしていいのか、複雑な心境に陥る。

持っていたバッグの中に、母親が使いたがった化粧品用品など細々
した物もあった為、バッグ丸ごと肩にかけて皆いるらしい王の私室
へと向かった。

途中食堂に寄ったら、アウランさんが「試作してみました」と、
たまごのサンドイッチを持たせてくれた。調理しながらジエネが喜
んで食べてくれた話をして、興味を持ったアウランさんにレシピを
教えたのよね。といっても難しい料理ではないし、もともと腕のあ
る人だからコレからどんどん美味しい料理が作れると思うのよね。
こういうものだからって工夫してこなかった食事文化にも、変化が
生まれそうだった。

「あつ……………」

私室に続く回廊を歩いていたら女官のルネが私を見つけ、こわば
った表情で柱の傍に立ち尽くしていた。

そうか。ひょっとしてルネさんってば……………。

目を逸らし、そわそわと落ち着かなげにしているルネさんに近づき、私は目の前に立った。

「ルネさん」

私の呼びかけに、覚悟を決めたのか目線をルネさんは合わせてくれた。

「サーラ……いえ、ウンノ様、でしたね。あの時は大変失礼を致しました。お立場を知らぬとはいえ、私のした事は到底許されるものではない……」

「あー！ ダメダメ！ そんなこと言わないでルネさん」

両膝を突いて、目上の者にする女性の正式な礼を取るルネさんに私は駆け寄って立たせる。いくらなんでもここまでされる理由はない。

「ね、ルネさん。あなたのお陰で私……ううん、皆が助かったのよ？ 手紙を貰って、各方面に連絡することができた。あの手紙がなければあんな急に動かなかったと思うわ。本当にありがとう」

「ウンノ様……」

「様、それやめて？ 私はそんな偉い立場じゃないし、第一あなたとお友達になりたいからそんな言葉遣いも止めて欲しいの……だめかな？」

ルネの手を両手でぎゅうっと握ってお願いをすると……一瞬息を飲んだ後、澄んだ薄茶の綺麗な瞳を瞬かせ固く結んだ口が緩み、「

いいの、ですか？」と声を震わせた。

「もちろん！ よろしく、ルネ」

「はい、ウンノさ……」

様、と言い掛けたので軽く睨むと、顔をほころばせてようやく「ウンノ」と呼んでくれた。私室にお茶を持って行く為に、私が使ったあの部屋でお湯を沸かしたところらしい。女官の仕事のアレコレを聞きながら一緒に歩いていき、お湯を入れたポットや茶器を載せたワゴンを押し、私室へと入った。

「大体翔がいい加減だから悪いでしょ！」

「わ、それ言う？ かーちゃんがそれ言うっちゃうの？！ いい加減の代名詞のかーちゃんがー！」

「うるさいうるさいデタラメ翔に言われたくないわ！ 大体翔が説明するって決めてたじゃないのよっ」

「あー、えーとえーと……テヘツ」

「二十三の野郎がはにかんでも可愛くないわー！」

わーわーと言い合う目の前の光景に半歩後ずさったものの、奇妙な懐かしさが浮かぶ。いやこれ日本での日常風景だったしね……。

それを遠巻きに見ているのはマルちゃんとお父さん。大きなテーブルに座って言い争う二人を見てポカンとしていた。それからお父さんの横に座るのは、ジエネ。

うわぁ……やっぱりカツコいいわ。墨染めをされた詰襟の制服がジエネの精悍さをより際立たせ、その禁欲的な服の下に隠された厚い胸板や、軍規で定められた長袖の下の筋張った腕。ほんと長袖で

よかった！ 無意識ではあるけど随分と傷を付けてしまったから……
…つて！ ダメダメ！ なんか余計な事まで思い出しちゃうわ！
脳裏に浮上してくるあれやこれやを振り払い、ジエネから視線を横に移動させる。

そのテールには騎士団の一番隊副隊長のセイベンさんやイル・メル・ジーンもいて……あれ？ マルちゃんの隣に座る某時代劇の好々爺みたいな人は誰だろう？

「ねーちゃん！！！」

私をいち早く見つけた翔は、これ幸いと母親から逃げ出して私に抱き付いてきた。

「うわっ！ 翔なにするのよー！」

「かーちゃんが苛めるんだ！」

「身に覚えありすぎるでしょ！ 反省しなさい！」

思いつきり被害者の私に翔が泣きつくなどおかしな話だ。だけど今となつてはジエネと出会えたのである意味感謝はしてる。内緒だ
けど。

「つーか僕ちよつとしたらラスメリナに戻んなきゃいけないんだよねー。アホな大臣がまたなんかやらかしたみたいでさー」

「やらかしたって……」

やらかしっぱなしの翔が王様って本当に大丈夫なのかな、ラスメリナの皆さん。ごめんなさいユーグさん、今度胃薬差し入れます。

と、心の中で謝罪した。

「あ、翔子。……おめでと?」

「ちょ……!」

イタズラっぽくウインクした母親は、私の耳に口を寄せる。

「契約はできたのね?」

顔は微笑を崩さず、だけど声の調子は真剣だった。私が一回頷くと、ぼんと肩に手をあてて今度はちゃんと喜びを声に滲ませた。

「そう、良かった。あのね、ここにいる人達だけには翔子が精霊姫だって伝えるから。いくらなんでも王が知らないのはありえないでしょ?」

それはそうだ、よね? うん。ここにいる人達で私が知らないのは一人だけだけど、きつと両親の信頼置ける人物なのだろう。

少しふっくらした体つきで温厚そうなその人を見つめていたら、あちらも気付いたようで柔らかな笑みと共に立ち上がり、私に声を掛けた。

「アルゼルとリインの娘、ですね? 初めてお目にかかります。

私はダーリス・グイラン、この度再び宰相へと任が与えられました」

「えっ?! ダーリスさんって!」

「そうだよなーちゃん、『皆の一昼夜』の作戦考えた人だよ?」

聞き覚えのある名前に驚く私へ、翔が小説の名シーンを上げた。そもそも、『精霊姫と騎士の旅』という小説の舞台がまさにこのレインの国であり、主人公の精霊姫と騎士つてのがこれまた自分の両親というんだから腰を抜かすどころではない。

騎士がいよいよ最後の戦いへ赴き、とある砦で起こるクライマックスシーンはあつと驚くような逆転劇が起こり、その筋書き通りに采配を振ったのがこのダールリス・グイランさんだ。……ん？ グイラン？

「翔子、彼は元々宰相職にあつたがああべナムなどによって引退を余儀なくされたのだ。此度ダールリス殿にまた復帰していただく事になり……ああ、そうだ。翔子も知っているだろう？ ロウの父親だ」

わっ！ なるほど！

父親が紹介してくれて、よく見れば目元が良く似ている。ロウが線の細い体をしているので、パツと見気付かなかつた。なるほど、だからデスクワークが得意なのね。

このダールリスさんはジエネを憂慮していて、それでロウが「それならば」と父親の代わりとなって騎士団に入団した……そんないきさつがあつたらしい。文官では側近になれないため、努力して。

しかし今回大量の処罰対象が出たため文官の方にも空きが出てしまい、出来れば内情に明るい有能な人材が……ということ、ロウはダールリスさんの、父親の補佐官として就く事になつたらしい。

一つだけ心配があるとすれば。

ジエネもロウもハルも片付けられない人なんだよね……あの魔窟しちむくどうなるんだろ。いつか片付けをさせてもらいたいな。

全員が席に着き、ルネが美味しそうな香りを漂わせた茶を配り終え部屋を退出したのを機に、マルちゃんが一人立ち上がって挨拶をする。

「皆のもの、今回は私的な集まりなので他言は無用だ。先に紹介したとおり、宰相には再びこのダールスを据える。そして大將軍はアルゼルに任せたい。承諾、してもらえるか？ そして　どうか未熟な私を支えて欲しい」

マルちゃんは徐々にはあるけど自分がこの国の「王」である自覚が出てきて、とても頼もしく感じる。奢ることも無く、出来ない事は素直に物言えるし意見を謙虚に聞き入れるのは大変貴重だと思う。その感覚は皆が感じ取っているようで、これからの成長が楽しみの一つとなった。

「ハハハ、王よ。今この場では構わないが、公式の場でその様な弱腰では困りますぞ！　な、ダールス」

「そうですね。我々はダイエマルティウス様を支え、そして構造腐敗のおきた内政や外交を立て直すのに久々腕が鳴っております。是非とも王には見た目だけでも堂々となさっていて下さい」

と、茶目つ気たつぷりにダールスさんはマルちゃんに笑顔を向け、役を受け入れた。

うん、肩の力を抜けさせるの上手だね、ダールスさん。マルちゃんのこわばった表情が緩んで、少し緊張が解けたようだ。

「では私から少しお伝えしたい事があります」

母親がその緩んだ空気の間に入り込んだ。

何を言い出すのか？ そんな怪訝な顔で皆が母親に注目をする。その視線を浴びて一つ頷くと、ニツコリと満面の笑みを浮かべた。

「えー、私の次の精霊姫つてのが、実はここにいる翔子なのよ」

「は？」 「え？」 「まさか……！」 それぞれの驚きの声が一度に上がり、それはそのまま私に向けられた。

「翔子、本当なのか？」

父親からの問いかけに、黙って小さく頷いた。

「血縁者からつてのは過去帳調べたけれど、そうそう無い例よ？」

イル・メル・ジーンが真っ赤な羽扇をヒラヒラ仰ぎながら言う。

この場で先に知っていたのは母親と翔とイル・メル・ジーンと……精霊姫になる事に背中を押してくれたジエネだけだ。

「確かに、翔子がこの城に来てから天候が安定しているとは感じていたが……」と父親が言うけれど。うっ……多分それ、ジエネが私にキスしたりして私の感情がワーっとなったからだと思うのよね。ただ感情とか契約内容とかそんなのは絶対口が裂けてもいえないわ！

お腹の中にいた時にはすでに次代に決まっていた事や、耳に彩る六つの宝珠を見せて「つまりこういう事になりました。よろしくお願ひします」と一同に向かってぺこっと一礼をした。

精霊姫となるのは、きちんと心を決めた結果。だけど表舞台に出るのはちよつと……出来れば謎の人という事にして欲しい。そんな私の勝手に我儘な願いをマルちゃんは許してくれた。

やけにアツサリ了承してくれたな、と理由を聞いてみたら。

そもそも精霊姫だった先代の母親は、色々元氣すぎた為に（随分遠まわしな言い方だね）表に出てきていて、更に戦争という一大事があつた。だからなおさら小説の主人公となりえたらしいんだけど。

それまでの精霊姫は、なんというか……存在だけでよかつたらしく、どこかの宮にただ困われているだけで一生を終えていたようだ。特に表に出ることもなく、王の公式な謁見などの折に傍に仕えるだけの存在だった。うう、私が目立つのは嫌だと思ふキツカケはただ母親のせいか！

まあ……謁見の折もベルやフードをつけてなら、いてもいいかな？　なんて思えた。

ジエネはそんな私をほんのり口元を緩めて温かく見守ってくれていて、応える様に私も視線を絡ませた。

「ひゅーひゅー」

場違いだし死語だし……って、翔っ！

「お熱いねえ！　いよつ、お二人さんっ！」

「ごらっ！　んもっっ」

椅子を倒さんばかりに立ち上がって翔の口を塞ぎにいく私をよそ

に、当時戦友だった両親とダーリスさん、セイベンさんの四人は、
久し振りに会ったとも思えぬ気安さで会話が進んでいた。

「ふ、複雑な父親心というのは、こんな感じなのか……」

「アルゼルよ、どちらもお主は大事に思っているのだから丁度い
いのではないか」

「しかしいや娘が……娘がつ！」

「温かく見守ってやるのが父親だぞ」

「あきらめなさいよアルゼル。私がいるじゃない」

「リイン！」

「あの様子じゃ孫が早くできるかもしれないわね？ アルゼル、
『娘の父親』実感する前におじいちゃんになっちゃうー！」

「……！」

「リイン、それくらいにしてやらんか。みよ、アルゼルの顔色が
おかしくなっておる」

「ま、茶でも飲め」

そしてもう一方はマルちゃんとイル・メル・ジーンとジエネが。

「兄上……ウンノ、と、恋仲なのですか」

「ああ。やらんぞ」

「こらジエネってば意地悪しないの！ ねえマルちゃん良く考え
てごらんなさいよ」

「マルちゃん……」

「あら非公式ならいいでしょ？ 可愛いわ、この呼び方。でね、
実はウンノちゃんて二十三歳なのよ。だからウンノちゃんにとって
はあなた弟としか思われてないのは確実。……でもよ？ 家族とな
れるなら、どう？」

「か、ぞく？」

「そうよ！ マルちゃんの大好きな兄上と一緒になってくれたら、

義姉あねっえ上つて呼べるのよ?」

「……あねっえか。それはそれで……いいな」

頬をほんのりピンクに染めたマルちゃん……って、ちょっとちよつと待つてよ話進みすぎてない?

私の気が逸れたのを気付いた翔は私のバッグを手にして、書状を取り出した。

「あーこれこれ! ……うっわ、よかったコレそんなにマズい事書いてないや」

「どんな事よ!」

「いやーほらさ、書いた時はここまでアレとかそこまでソレなんて思つてなかったからさ!」

「アレとかソレってなによ!」

「ラスメリナ王から私への……ああ、前にウンノが言っていた書状だな?」

書状の中身を広げて一人ウンウンと頷いていた翔は、興味が湧いたらしいマルちゃんに「お? 見たい? いいよー」とぽん、と渡した。

「あ」

私を中心として

空気が歪む。

「えっ?!」

何が起こったのか視線を彷徨させた私は、マルちゃんの手にする物を捉えた。

「しょ……」

書状! そう、それは召喚の契約条項であって……満たされると私は え、え、こんな急に?

「ショーコ!」

渦巻く密度の濃い空気が厚い壁となつて私の周りを阻む。切羽詰つたジエネの声やみんなの声が……声だけが私に届く。

でも私はただ一人だけの声を、喉を枯らさんばかりに叫ぶ。

「ジエネー、ジエネー……!」

私の足元には半径一メートル程の円が幾何学模様を描いて鈍く光る。そこから螺旋状に濃密な気配が上昇し、私のスカートの裾がはためいた。

すでに人影すら見えなくなり、それでも手を伸ばすけど見えない壁に阻まれる。無理だと分かっているながらも、その壁を力いっばい叩いて せめてひと目、せめてジエネと一言でも会話したかった。

「ねーちゃんこれーっ！」

ボシュっとな音がして、私のバッグが外より円の中へ放り込まれた。翔が何かしらの力を使って無理矢理ねじ込んだようだ。歯の根も合わぬほど震える私は、突然すぎる展開に恐慌に陥り両手でぎゅっとなと締るようにしてバッグを抱きかかえた。

「ねーちゃんっ！ 迎えに行くから待ってー！」

パパパパパッと閃光が煌き、そして。

一日千秋

「……さま……お客様？ どうなさいましたか？」

気遣わしげな声にハッと顔を上げたら、そこは……。

呆然と立ち尽くしていたこの場所は、見覚えがある。そう、

あちらの世界に行く前に入ったコーヒーショップ。

「お客様？」

店員に再度話しかけられ、慌てて「な、なんでもありません」と自動ドアから表に飛び出した。

「あ……」

声を失う私の目の前に広がるのは「日常」。ずっとずっと、これが当たり前だと思っていた文明社会。膝から力が抜けそうになるのをぐっと堪え、ベンチへフラフラと歩いて座った。

腕時計を見ながら足早に過ぎるサラリーマン、デパートからの帰りだろうか、主婦達が談笑しながら電車を待つ。携帯画面を一心に操作する大学生など　　全くの日常風景。

駄目だ、思考が動かない。

暫くぼうつと景色をただ目に映していた。まるで人形のように座って……どのくらい経った頃だろうか、突然携帯電話が鳴り出した。

ビクツと飛び上がりながらもバッグから取り出し、見覚えの無い番号だったけど通話ボタンを押して耳に当てた。

「は、はいっ」

「えっと、海野さんですね？　こちら　ホテルの採用担当、佐藤です」

「……あつ、お、お世話になります！」

ああ、そうだった。あちらの世界に行く前、このホテルの仕事に就く為電車を待っていて……遅延で到着が遅れるとの電話をこの担当者の人に連絡したんだっけ。

「すみません、まだ電車が来なくて……」

構内アナウンスは点検整備が遅れていると繰り返し放送されていた。その旨を伝えると……。

「あの……大変申し上げにくいのですが、この度の採用……無かったことにしていただけませんか」

「えっ?!」

「ごめんなさい、ここからは私のオフレコとして……。海野さんの前の職場の方から圧力かかりまして……採用するならば私どもの方と提携打ち切る、と」

思い当たる節は、一つだけあった。

そう、前の職場。リゾートホテルのオーナーの息子。
告白されて、でもそんな付き合うつとか考えられずに振った形とな
ってしまったが、まさか……今回のリストラ対象や関連企業への根
回しをしたのは、彼なのだろうか。

申し訳ない、そんな声が滲む担当者になんとか承諾の意を伝え、
電話を切った。

「は……あ……」

空虚な心が色々な事態を飲み込めなくて空回りしていく。
一人ぼっちになった今、何をしたらいいのだろう。

ふと、奥底からこみ上げて溢れそうになる気持ちを無理矢理押さ
え込んで、とにかく横になれる場所……自宅へと戻ることにした。

着ていた侍女服は、古めかしいデザインだけど目を引くほどでも
なくて良かった。母親名義で借りているアパートへと、高速バスや
路線バスを乗り継いで久し振りの自宅アパートへと着いた。

このアパートは母親と翔と私の拠点ともなっていて、都合がつけ
ばこのアパートでたまの再会を喜んだ。翔も私も職場の寮に住んで
いたし、母親は月に半分もここに住んでいないから借りているのが
不経済だと私は言ったけれど、そこは母親が押し切った。

充分すぎるほど賃金も貯蓄もある母親に逆らえるわけもなく、そ
のまま契約を更新していたあのアパートなら身を寄せるには丁度い
い。

県庁所在地ではあるけど、乗り換えのための主要駅から三十分も

バスに揺られればそこは田舎といって差し支えない風景。バス停から重いバッグを抱えて徒歩五分で、我が家ともいえるアパートが見えてきた。

二階建て2LDKの全四戸が入居するこのアパートは、他に三棟が連なっている。

チャリツと音を立て鍵を取り出し、一階東側のドアに差し込んだ。開錠の音が聞こえ、ドアノブを回して開ける……あれ、こんな薄いドアだったかな？ 随分とあちらの重厚なドアに慣れていたらしい。貧弱な作りに、でも確かに記憶では間違いないと気持ちを納めて中に入る。

途端締め切った室内に籠る空気が纏わりつき、開けられる窓という窓を開けて入れ替えをした。

へんなの。泣いて泣いてどうしようもない程取り乱すかと思っただのに。

自分の心は確かに凍りついたままだけど、体は日常生活に戻っている。

それは、翔が最後に「迎えに行くから」と言ったからだと思う。そうじゃなかったら……とてもこんな落ち着いていられない。だって私、ジエネと「またね」と一言も交わせなかった。別離の挨拶すら誰とも出来ず、突然にポンと帰されたから。

あちらの世界は、夢ではない。

あちらの世界は、本当のこと。

今身に着けている侍女服もそうだけど、耳に彩る六つの宝珠、そして……体に残る繋がり証。どれもが現実だと訴えていた。

迎えに来る。それを私は待つだけ。

一週間目は、久し振りの日本を満喫できた。

二週間目は、人恋しくて前の職場でできた親友のサヤカに電話した。

三週間目は、気力でなんとか乗り越えた。

四週間目は　　引きこもった。

遅すぎじゃないの……？

夜が来るたびに、静か過ぎる室内で一人ベッドに寝るのは堪える。

こんなにかかるのならばアルバイトでもすればよかった。けどいつ迎えに来るかわからないし、勤め始めてすぐ辞めるなどそんな迷惑は掛けられない。

幸い貯金が好きだったので、資金に関しては心配が無い。気分転換に散財してやる！ と、デパートに出かけても、普段から節約が身についた私は値段を見ただけで尻込みしてしまい、結局何一つ買えずにいた。かわりに目に付くのは……

こんな服着たら、似合うだろうな。靴のサイズ、どのくらいかな。この革のベルトなら違和感なく付けてくれるかな。

「その商品は人気がありますよ？　ほかのお色もございます」

店員に声を掛けられ、慌てて退散した。
そして、背が高く体格がいい人がいると、つい目で追ってしまふ。
一人でちよっとオシャレなお店に入って美味しそうなランチを注
文しても、ああ、こういうの作ってあげたいな、と……。

どうしても、どうしても、どうしても。

離れない。思考のすべてがイコールになっている。

いま、何してるのかな？　いま、あの部屋で書類を覗んでるの
かな？　いま、私の事考えてくれているかな？

駄目なのに。いくら考えても私には待つことしか出来ないのに。

ジエネシズ！

何度目か分からない程心の中で叫ぶ。大好きで愛しくて焦がれて
やまない彼の名を。

とつくに涙なんて枯れてる。毎晩毎晩ベッドに横になるだけで溢
れていた涙は、私の心と同じ様に枯れてきたのかもしれない。

食欲……なんて一向に湧かないけど、もし迎えに来たらすぐに飛
び出せるよう機械的に口には運んでいる。味なんて全くわからない
けれど。同じ理由でシャワーだけは浴びている。乱れた格好で再会
なんて恥ずかしいから

料理をしても掃除をしても買い物に行っても、なにもかも楽しく
ない。

朝が来る度今日も来なかった、と落胆する自分が嫌で雨戸もカー
テンも閉め、真っ暗な室内でただベッドに転がったり膝を抱えて座

ったりして。

愛する人から離れただけでこんなにも駄目な自分になるだなんて
思いもしなかった。一度味わってしまった喜び。自分が作った料理
を「美味しい」と食べてくれたあの顔や、剣にかけて誓ってくれた
あの真摯な表情、普段は誰に対しても鉄面皮だけど、私には僅かに
緩む目元と口角。そして 私を全て満たしてくれた心。その喜び
が突然遮断されてしまった。あれは夢だったんだよって言われるに
はあまりにも現実過ぎるのよ！

そして、昼夜分らない中とろとろと睡魔が訪れる。

今、何日目だろう？ ん……どうでもいいんだけど。

ふと目が覚めて、ぼおとした頭であれから何日経ったのか考え
た。四週間まるまる経った事は間違いないだろう……ほぼ一ヶ月？
いや、もう過ぎた？

水を一杯飲もうと、力の入らない足で立ち上がり台所へフラフラ
歩いた。何もしなくても喉は渴く。コップに蛇口から水を注いで、
一口飲んだ所で。

トントン。

玄関ドアにノックする音が聞こえた。普段だったら訪問販売かと
思っ居留守を使うけれど、玄関にある呼び出しチャイムではなく
何故かノックというのが妙に気になった。

トントントン。

……？

何故か、聞き覚えのあるノックのタイミング。

まさか？！

コップをシンクに置くのももどかしく、玄関まで小走りに、そして飛びつくようにドアスコープを覗いた。

まさか。まさかまさか。

そこに見えたのは
！

鍵もチェーンも焦るあまり余計に時間がかかりながら外し、ドアを開けると。

「……っ！ ジエネ！」

一番に会いたい人が、そこにいた。

闇色の髪、背が高く筋肉による厚みのある体は騎士団の制服に包まれ、そしてその深い海の底の色をした瞳は私を見つめ、心なしかじわりと揺らめいていた。

「おそいよっ！」

後から思えばとっても酷い言い方だったけど、ジエネについぶつけてしまった。しかし、ジエネはただ緩く目を細め、一步前に踏み出して、私の腰辺りに手を回して抱き締める。

「すまん」

そう言って私の頭を何度も撫でてくれた。

やっと、やっと、やっと！
を待っていたの。

私は、この手この体この声

心がバラバラになりそうだったけど、耐えられたのはこの手の温
もりを覚えていたから……。

一日千秋（後書き）

完結まで残り一話となりました。
明日には出せるかと。

終わりから始まりへ

どのくらい抱き合っていただろうか。

お互いの温もりと匂いに包まれて幸せを噛み締めていたけど、私の耳は朝刊を配るバイクのエンジン音を拾った。

え……と。今つて早朝なのかな？

時間を見ないで寝たり起きたりを繰り返していたから、外が少し明るいか全く気付かなかった。

やだっ！ あの新聞配達は確かこの棟にも来るのよね！

とにかくジエネには家が上がってもらい、話を聞きだそうと玄関の中に引き入れてドアを閉める。しかし部屋に上がる所で、何故かジエネが少し戸惑う様子が見て取れた。

あっ、そうか！ 異世界！

今更ながらに違う文化にいたんだなと実感させられた。私もあちらに行つてすぐは電気がないとかトイレは……など戸惑ったのは身に覚えがある。

まず靴を脱がせ、リビングへと案内した。案内するといってもそこは日本のアパート。数歩もすればたどり着く。ジエネの大きな体がこの空間にいるというのがまず不思議で仕方がない。一人だと広く感じたこのリビングはやけに手狭に感じた。

ソファーにジエネを座らせ、台所に行きヤカンに水を入れ火にかける。沸くまでの間に棚に置いてある瓶を幾つか取り出した。

ジャーマンカモミールと、レモンバーベナ、ほんの少しラベンダーとペパーミントを足そうかな……？

ドライになったハーブを目分量でザザッと急須に入れて、沸いたお湯を注ぎいれる。少し残ったお湯はマグカップに入れて温め用にした。

淹れたハーブティーをソファの前にあるリビングテーブルに置き、ジエネを改めてよく見ると……あれ、少し痩せた？ それに、顔色が幾分悪いような。

ジエネは興味深そうに室内へ視線を彷徨わせていたけれど、私が隣に座ったら緩く口の端を上げて腰を引き寄せ密着の体勢をとった。

「わっ」

「ショーコ、待たせてすまなかった」

私の腰に手を回したまま、ジエネは私の頭に頬を預けた。心からそう思っているのが伝わり、私は塞ぎこんでいたこの一ヶ月の自分はあるという間にかき消される。ジエネに会えただけでたちまち浮上できる自分って現金なものだな、と心の中で苦笑した。

「ううん、ちゃんと来てくれたから。それだけでもういいわ。でも、どうしてジエネが来たの？ 翔は？」

あの時確かに翔は「迎えに行くから」と言っていた。翔なら直ぐにでも来れそうなものだし、そもそもジエネは「扉」を開けない。来てくれたのはとても嬉しいんだけど、どうしてなんだろう？ そう尋ねる私に、ジエネはマグカップを手にとり一口飲んだ。

「詫び、だそうだ」

「詫び……？」

「ああ、俺は一週間休暇を貰いこちらで過ごす事になった。社会見学、といったところか」

え、と……？

「最終日に翔は迎えに来るそうだ。ロウの回収もかねて、な」

ロウの回収？！ えっ、何やつちゃったの翔！

ギョツとする私に、ジエネは視線を遠くにやりながらその時の話をしてくれた。

翔子が消えて、即座に俺は翔に迎えに行けと迫ったが、ラスメリナに戻らねばならない翔に『一週間待つて！』と懇願され不承ではあるが待つことにしたんだ。ラスメリナの国内もまだまだ落ち着かず、在位三ヶ月の翔は対応に追われているようだ……あの不思議な力も温存しておきたいのだろう。

イル・メル・ジーンが召喚を行っても良かったが、それこそ準備に一ヶ月は掛かる上、当人が面倒がつて実現できなかった。

ようやく約束の一週間が経ち、現れた翔は少し生気がなく、いつもならば突然現れるのに竜に乗ってやってきた。それほどに余裕が無かった様で……文句も無理矢理飲み込んだ。『扉を開けるのは一日三回までが限度』と言っていたしな。ショーコを呼ぶのならばこの地……レーンで行った方が手間が省けるとの弁だ。

そして……ああいや、ここからの話は脱力以外何物でもないんだが……。

『扉』を描いた翔は、いざ自ら飛び込む段になって　クシヤミをしたんだ。あ、こら呆れるな。待て、とにかく続きを聞け。そのクシヤミの反動で『扉』があさつての方向に飛んで行き……

たまたま俺を呼びに来たロウに当たって……どつやらこちらの世界に飛ばされたようだ。

あまりのありえなさに一瞬言葉を失い、はあ……と私は大きく溜息を一つ吐く。

ウツカリにも程があるだろう！

「つまり、翔のクシャミでロウはこちらの世界に？」

ああ、頭が痛い。

「そう……らしい。座標は合っている様なので、この近くにいる事は間違いない」

ゴメンねロウ。とぼっちりもいいところよね。

私はすっかりぬるくなったマグカップを手にして一気飲みする……
…心の中で『ウツカリ翔』を知ってる限りの罵詈雑言を浴びせ続けながら。

うん、まあロウならばかなりシツカリしているからこの世界でも大丈夫だとは思うけど。むしろ私が動かない方が、ロウは自力で見つけてくれる気もする。

「それで？ もう一回『扉』を作ることは出来なかったの？」

あと二回は出来ただろうし、食事や睡眠さえ取れば回復すると聞いたことがある。そう尋ねると腰を抱く手とは反対の手が私の頬をなでた。

「自国の統治の為に力の余分は出せないそうだ。カケルはカケル

だけれど、ラスメリナにとっては唯一の王なんだ。あいつもその辺りは自覚があるのだろう。

失敗はしたが、厳しい情勢の中無理矢理時間を作って来たカケルに無茶はさせられない。俺だけの願いだったら何が何でも押し通したが、隣国である以上外交にも影響が出るだろう。今更それは避けたいとの思いもあり……翔子とロウが結果的に後回しになってしまった。本当にすまない」

いいのに。

ジエネが謝る事じゃないし、ウツカリしすぎな翔が全部悪いのに。

「待つ、というのは本当に辛いものだな。やれる限りの仕事をこなしていたら仕事が尽きてしまい……訓練に精を出せば団員どもは直ぐに根をあげ……」

ああ……前にバツツが言ってたな。ジエネは隊長としてとても厳しい人だと。いやそんな綺麗な言葉じゃなかった、確か『訓練の鬼』……近衛騎士となるほど実力がある団員が根をあげる程って、どんだけしごいたのやら。

食堂に集まる面々を脳裏に浮かべ同情した。

私の頬をなでるジエネの手が背中に回され、ふんわりと抱き締められる。顔は私の首筋に埋められ、息が当たる度背中が甘く疼いた。そのままの体勢でジエネは再び口を開く。

翔がやっときた時に、団長……ああいや、いまは大將軍に代わったのだが、俺は一週間の謹慎を命じられた……部下を虐げた罰とやらで。

自室を出ないのが条件。俺には気の狂いそうな罰だったが、リィンどのが耳打ちで補足をしてくださったんだ。

一週間、翔子のところへ行つてらっしい。休暇をあげるわ、と。

「そうして、俺はここに送られたんだ」

言い終えたジエネは、耳に心地いい低音で語り終え、私を抱き締めたままソファに仰向けになった。ジエネに押し掛かった様な格好になり、私はあたふたと声をあげた。

「ちよつと、ジエネ?!」

「すまないショーコ。……安心したら、眠気が……」

「あああ、ここじゃ駄目よ！ 私のベッドに！」

顔色の悪さは睡眠不足のせいだったのか？ すでに半分寝ているようなジエネから降りて無理矢理腕を引っ張り起こし、私のベッドに誘導する。途中「手紙が……」とジエネが呟いたけどそれきり黙ってしまった。ちよつと！ その先きになるじゃないのよ！

皺になるといけないから制服を脱がせて、ズボンは……そのままにして寝かせた。流石に枕を使うと足が少し飛び出る。

横になった途端すうつと寝入るジエネを見て、なんだか自分の心が浮き立つのを感じた。

ジエネが私のところに。

そう思うだけでモノクロだった世界が途端フルカラーに見えるのだから。

私の部屋の窓はそのままに、リビングやあちこちの雨戸とカーテンを開ける。途端爽やかな朝の空気が、鬱屈とした空気を一掃して

いった。

よし、ジエネの目が覚めるまで掃除と、洗濯と、料理の準備をしよう。それからそれから……。ほんの少し前の自分がウソのように心も体も身軽に動く。

さて家事を始めようと先ほど飲み終えたマグカップを片付ける為、リビングテーブルに行くとその下には手紙が落ちていた。

気付かなかったけど、どうやらジエネが落としたらしい。そういえば手紙、って言ってたわね？

テーブルに置いておこうと手に取ると、そこに書かれていたのは。

ねーちゃんへ

翔からの手紙だった。

え、私宛？ ちゃんと汚い字ながら日本語で書かれたそれは、確かに翔から私に宛てた手紙だった。これを渡そうとしてたのかな。

私宛ならば開けてみても問題ないだろう。封はされているけどよっぽど慌てていたのか封印も折り目もずれている。

中身を取り出し広げると。

「……」

ううっ。よ、読みづらい……！

ミミズののたくった様な、『翔フォント』で書かれたその文字を読むのはなかなか骨が折れる。しかし長年この文字に付き合ってきた私は、なんとか初見で解読できた。

『 ねーちゃんへ。』

おまたせ！ やつとジエネをそっちに送れたー！ いやホントごめんって。多分ジエネが伝えたと思うんだけど、ラスメリナってあの時相当ヤバくてさ。内乱もあつたし三方国土を隣国に囲まれて、レーンはもう大丈夫だけであつちもこつちもチヨツカイ出されててさー！ いや参ったよ。今はちよつと落ち着いたから、ようやく迎えにいける。

僕は出来る限り力を使いたくない。

それはこの国の将来の為でもあるから。

ユーグと、それに信頼できる臣下もボチボチ増えてきて、徐々に任せているんだ。その調整が正直きつくて……ねーちゃんを結果的に放置することになつちやつて、ほんとごめん。

一旦落ち着いた時を狙ってレーンに行つたんだけど、ちよつと失敗しちゃつてさ！ ちよつとだけウツカリ……何だっけな……ああ、ろーね、ろーと言つたかな？ あいつ日本に送つちやつたんだ。聞いた？

座標は間違つていないから自宅前に着くと思うんだけど、もしかしたら『運命の〜』がいてそこに落ちてたらもう分かんないよズレちゃうから。ま、ねーちゃんを僕が迎えに行つたときちゃんと探すから大丈夫！ ……多分。

あーもうジエネが急かすから字が曲がつちやつたじゃんか！

そうなんだよ、ジエネつたらさ！ 自分じゃ絶対言わないだろうし日本語読めないから手紙にしちゃうんだけどね？

ねーちゃんが消えてからそれは……荒んでたらしいよ。僕

も後から耳にしたからアレなんだけど、何かを振り払うかのように事務処理に没頭し、それが尽きれば騎士団でのシゴキに明け暮れて脱落者多数中には泣き喚いて止めるよう懇願した人もいたって聞いたよ。超怖いつてそれ！ どんだけだよ！

しかもさ、ベッドで寝ないらしいんだ。ほぼ不眠不休体勢ですつと執務室に詰めて、限界が来たらスイッチが切れたように椅子かソファで寝て、でもまた直ぐに起きて執務に取り掛かるという鬼気迫る状況だったみたいよ。そりゃ周りみんなガクブルだよね！

あー……なんか悪い事したよね、僕。

しかも一回失敗して、結局一ヶ月待たせちゃったもんね。反省してるって！

そんなジエネを見ていられないって流石にとーちゃんが心配してさ。とーちゃんもちょっと父親として複雑な気持ちだったけど、ねーちゃんとジエネが想いあっているの……ちゃんと分かっている。どンドン憔悴していくジエネに休暇を取らせようって事で、ねーちゃんの所に送ることにしたんだ。

ほら、こっちにいるとどうしても仕事があるからね？ 無理矢理切り離そうって。

だから、一週間だけどジエネの異世界体験楽しんでね。

あー、ジエネが刀に手を掛けてる！ 早くしろってことらしいよ。焦るなっば！

まあとにかく。

僕はさ、こつちに来てジエネに会った時から確信してたんだよ。ねーちゃんの相手はジエネしかいないって。僕が認めた相手だから間違いない。だから召喚したときにジエネの所に落ちてくれてメチャメチャ嬉しかったよ。確信が現実になったって。

いやー、さすが僕！ そっち行ったら褒めてね！ そんなでもって、ご飯食べさせてー！

うわー、なんたる、背後からおっそろしー心配がするわ。首筋スーサー寒気するわ。じゃこれからとにかく送る！

滞在費っつーかジエネにかかる費用、僕の部屋の引き出しにあるからさ、それ好きに使ってー！。

じゃ、また一週間後に！

翔』

それから、あつという間の一週間が過ぎていく。

あちらの世界と全く違う文化に驚くジエネと、蜜月と言っているほどの時間を過ごした。

初日は丸一日ジエネは寝ている。その後三日程二人で部屋にいたんだけど、流石に人としてどうよ！ とジエネを窘めて、ちよつと近所を散歩することにした。体のアチコチが痛くて（謎）長い時間は無理だったけど、なんてことはない日常風景にジエネと歩けるのが楽しかったり。

そうして、次の日も人生初のデートなど楽しんだ。

六日目はちよつと電車乗って遠出して。夕方私が一人で買い物をしていたら、なんとロウが声をかけてきた。自力で私を探し出すなんて、流石ね、ロウ！

丁度明日翔が来る事を伝えると、何か辛そうな面持ちで「分かりました」と踵を返した。一体何があつたのか知らないけれど、ロウなりに異世界の一ヶ月を過ごしてきたのだから、思う所があるのだらう。

七日目。ロウがああの表情をした意味が分かった。ロウの傍に寄り添う女性……あの人の所に『落ちた』んだね。

私は早く『扉』を使えるように頑張るから、と宣言し。

「お待たせー！ あれっ？！ どうしてるーがいんのさ！」

私たちの目の前に現れた翔は目を丸くして驚き、私とジエネは顔を見合わせて笑った。

これから私は精霊姫として。

そして『扉』を開く者として

「世界を翔ける！」

終わりに始まりへ（後書き）

2010年10月7日～2011年6月9日

大体8ヶ月もの間に渡り書き続けた「世界を翔ける！」

これにて完結となりました。

ひとえに皆様のお陰です。本当に有難うございました。

活動報告など載せているページ

<http://mypage.syosetu.com/1067>

64 /

* 番外編 一週間 1 (前書き)

最終話で翔からの手紙を読んだ所から始まります。

翔からの手紙を読み終えた私は、途中時が曲がったという箇所を探してみたけれどすべてが元々曲がっている為見つけれず、あきらめて丁寧に畳んで引き出しへとしまった。

さて、どれから始めようかな？

一週間引きこもった部屋をざっと見渡したけど、元々自分一人だったし散らかりようがない。とりあえず洗濯機を動かそうかな。幸い天気もよく、抜けるような青空と心地良い風が吹いているからよく乾きそう。

そこでふと、手に取ったジエネの上着を見て思った。

ジエネの服、なんとかしないと……いけないわね。

詰襟の制服はとても似合っているけど流石にこの日本では違和感がある。なにか大きめの服がないか探す。翔は確か一七六センチのMサイズ。ジエネは……う、うん。明らかにサイズ違うよね。目測で一八五センチのLL？ LLL？
筋肉による体の厚みがあるため、私の目測の許容範囲を超えている。

これは起きたら一緒に買いに行かないと！

翔からの軍資金は結構な厚みを持ってその金額を知らしめた。翔のポケットマネーには用意が良すぎる。……まあいいか。翔だけに、考えるだけ無駄だわ。

ジエネの足のサイズもなかなか大きそうで、この近辺の靴屋では……取り寄せ扱いになると思う。一週間しか滞在期間がない。なら、いつそデパートで一揃い整えようと思ひ至る。

シーツや細々したものを洗濯機に放り込みスイッチオン。トイレ、洗面所、お風呂を掃除し終わったタイミングで洗濯機のアラームが終了を知らせた。チャチャツと干し終え今度は冷蔵庫を開けて在庫をザツと眺める。

わあ……我ながら終わってるわ。

ただ口に運ぶだけの、日持ち優先で選ばれたそれらは栄養機能が詰まったゼリー飲料。だって食欲なんてなかったし。

調味料、米、乾麺などは揃っているから生鮮品を仕入れに行こう。財布など入れたバッグを片手に、もう一度ジエネの様子を窺う。そろりと足音を忍ばせて部屋に入るけど気付いた様子はなく、規則正しい呼吸の音が聞き取れた。

少し、痩せたのかな。

頬の辺りをそつと撫でると、あの夜触れた時よりも若干こけた感じがする。気配に敏感なジエネがここまで熟睡するとは……相当疲れていたんだらう。翔の手紙にもあったように。

沢山お料理作って、食べてもらわなきゃね！

俄然やる気が湧いてくる。目にかかりそうな前髪を少し横に梳いて、部屋を出る前にもう一度寝姿を振り返って扉を閉めた。

地元商店街を久々歩き、靴屋でサンダルを買った。ジエネの足を自分の掌を当てて測り、それに丁度合いそうなのを選ぶ。サンダル

ならそんな足の形を選ばないし少しくらいはみ出しても何とかなるだろう。

次いで衣料品のお店へ。大きなサイズはＬＬまでしかなかった。抱き締めたときの感じを思い出し、服を体に当てて見るのもちよつとその場では恥ずかしく、結局ゴムウエストのジャージをカゴにいられた。下着は……うん、翔のと同じボクサーパンツでＬＬ寸。

まるで格闘技系の人……や、まあ……それ系の人で通せばいいかな？ 外国人選手も多いから、ジエネの洋風な面立ちも誤魔化せると思う。

ひとまず用として、一点ずつ購入。

同じく商店街にあるスーパーでかなり多く買い込み、肩が外れるんじゃないかと思うほどの荷物になって帰宅した。

コソつとまたジエネの様子を見たけれど、起きる様子はない。

なら、うんと手の込んだ物を作っておこうかな。

あちらの世界ではいつもいつも時間がなかった。しかも量が半端なかったり。ほんの一ヶ月前のことなのに懐かしく感じちゃうな。

どんな料理が喜んでくれるかな、と想像しながら手際よく下拵えを始める。

コトコトと煮込む間に乾いた洗濯物を仕舞い、それからそれからと細々家事をこなしていたけどジエネは一向に目を覚まさない。

一週間だけの二人きり生活。でもジエネの体を休めたいから、起こさずに自然に起きて来るまで待つことにした。

ん？ もう朝？

カーテンが架かる窓の、隙間から零れる明るさで夜が明けたこと

を知った。ぼんやりと天井を眺め、掛布団を外そうと腕を動かそう
と思っただら……？

「……！」

振り向いたらジエネの寝顔が目前にあった。私の背中を抱えるよ
うなポーズで腕枕、さらに腰辺りにもう一本の腕が絡みつき、完全
に密着した体勢だ。

あ、あれ？

私確か翔の部屋で寝てた、よね？

昨晚一緒にベッドに寝る誘惑を断ち切り、翔の部屋の床に客用布
団を敷いて寝たはずだった。それが何故か私のベッドの上と一緒に
寝ているとは？

寝ぼけて慣れた自分のベッドに行ったのかな、と首を傾げながら、
今だ寝ているジエネを起こさぬようそつと絡まる腕からすり抜けた。

軽く身支度を整えて台所に立つ。昨日は料理をしながら軽く食事
を取っただけだったのでお腹がすいた。んー、何食べようかな。

ぼつと頭に浮かんだのは、表面をカリッとトーストした食パンに
バターを軽く塗ったあの香ばしさ。焼きたてのパンは何であんなに
美味しいのかな！ じゃあそれにオムレットと、ベビーリーフにトマ
トを足して。

ヤカンに水を入れてコンロに置き、お湯を沸かす。その間に食パ
ンをトースターに入れてダイヤルを回し、その流れで冷蔵庫から卵
二個と牛乳、トマトとベビーリーフを取り出した。

冷凍庫からは大体十グラムになるよう切り分けたバターを、保存
容器から二つ小皿に乗せた。ひとつはオムレット用、ひとつはトース
ト用を使う。

フライパンに一つバターを入れて火にかけ、溶けるまでの間に卵を別容器に割りいれてほぐし塩コショウと牛乳を入れる。急須に紅茶の葉を入れて沸いたお湯を注いでおき、フライパンの中のバターがシュワシュワしてきた所で卵液を一気に投入！

ちゅーん、と音を立てて一気に香りが広がった。ここからは手際が勝負だ。お箸でとにかく細かくかき混ぜながらフライパンを揺すり、全体に満遍なく火を通していく。半熟状態になったら火をとめて余熱を利用しつつトントんとフライパンを叩いてオムレツの形に仕上げ、お皿にそつとのせた。

その脇にベビリーフとトマトを添えて、焼きあがったトーストの上にバターを乗せる。

「いい香りだな」

「でしょ？ うわっ！ ジエネ?!」

ダイニングテーブルに並べ、急須からマグカップに紅茶を淹れた所で急に声を掛けられて文字通り飛び上がって驚いた。

「シヨーク、おはよう」

「おはよう、ジエネ！」

穏やかな顔をして私にうつすらわかる程度の笑顔で挨拶をし、私もそれに笑顔で答えた。すると、ぐうう……と鳴るお腹の虫が聞こえた。

「……………ジエネ？」

「……あまりに美味そうだからな」

ほんの僅かにジエネの耳が赤く染まり、私は笑いを堪えながら先に手を洗うよう洗面所へと案内した。ついでにトイレの使い方も説明をして。設備をしきりに感心していたジエネは「この文明になれたシヨークは、さぞかしあちらの生活が大変だったのだろうな」と済まなそうにする。ジエネが悪いわけではないし、それに私はこれからずっとあちらで暮らすつもりだからすぐ慣れるわよ？　と言ったら何故か喜ばれた。

ジエネの為に今から焼くねと言った途端、盛大な腹の虫がもうひと鳴きしたため今度こそクスクスと笑いながら、並べたお皿の前にジエネを座らせて食事を勧めた。

「美味しそうだ。シヨーク、いただきます」

「足りなかったら言ってね？」

と伝えたものの、三口で食パンが消えたのを見て黙ってトースターに追加のパンを焼き始める。それからのジエネはすごかった。食パンは一斤が瞬く間に消え、オムレツもあつという間に胃に収められた。こつちに来てからあまつたご飯を冷凍してあったのでそれを三人前ほど解凍し、ネギ、卵、トリガラスープの素と塩コショウだけの焼飯を作った。一人前は自分用に。二人前はジエネに差し出し、それでも足りなさそうですぐに出来るカップラーメンを一つ取り出し、ちよつと考えてもう一つ封を開け湯を注ぐ。

それも食べつくした所でようやくジエネの食欲は落ち着いたようだ。

「美味かった、シヨーク。まともな食事を今まで取らずにいた為、

つい食べ過ぎてしまった」

三杯目のお代わりした紅茶を飲み、人心地ついたジェネが私に礼を言った。

「やだ、いいのよ？ 私はジェネに食べてもらうのすごく好きだから」

食後のお茶を飲むジェネの向かいに座ってようやく焼飯を食べる。先に食べてしまつて悪いとジェネは謝るけれど、食欲大王の翔で慣れているし、それに。

あー、なんか幸せ！ 慣れ親しんだこの風景にジェネがいるってだけで心が喜びに満ち溢れる。

「あ、そうだ。あのね、今日ジェネの服買いに行こう」

「服？」

「うん。翔からお金も預かつてるの。だから遠慮は要らないわ」

「翔からか。ならば遠慮なく使わせてもらおう」

私が食事を終えるまでの間に、お風呂に入ってもらつことにした。使い方を説明し、熱い湯が自動的に出て、ある範囲だけ雨の様に降りそそぐのかと不思議がりながらも使用方法は理解したらしい。着替えとタオルを置いて、私は食事に戻った。

「着方はこれでいいのか？」

タオルで髪をガシガシ拭き上げながら出てきたジエネは……ありえないほど格好良かった。元々見せる筋肉じゃなく、実用的かつ身長とのバランスが大変よろしい。パツパツなジャージはやつぱりししだったかなと思うけど、より一層男としての色気が強調されて『これはこれでよし!』と妙なテンションになってきた。何より顔立ちがとてもよく、更に王族の血を引くからか気品が滲み出ている。だけど近衛騎士団七番隊長としての凛々しさ、そして無表情さが少しだけ人との距離を開けさせる。

でも、私に対してだけはその距離を感じさせないんだ。

その事実が嬉しくて、つい正面からぎゅっと抱きついてしまった。

「えへへ。ジエネ?」

「どうした、ショーコ」

どうしたといいながらも、ジエネは目を細めて私の髪を指で梳いてくれる。あまりに心地が良くてスリスリと頬を寄せると、何故か困った声をあげた。

「ショーコ、今日は出かけるんだろう?」

「? うん、そうだけど」

「であるのならば……。一緒に例の物も買いに行かねばな」

「例のもの……あっ!」

何のことか分からず、だけど瞬時に理解した私はあっという間に頬が熱くなる。そんな私の頬を両手で挟んだジエネは「あまり触れると俺の我慢が利かなくなる。だがせめて……」と言って私の唇に

軽くキスをした。

* 番外編 一週間 1 (後書き)

ロウが飛ばされてどうなったか気になる方！ 18歳以上の方対象
ですが、月であるお方がそのお話を書いてくださりました！

「災難は運命を繋ぐ」

<http://novel18.syosetu.com/n9813t/>

こちらサイドでも少し関わっていきますので未読の方は是非！

パツパツジャージでバスに乗るのは流石に目立つよね、とタクシ
ーを呼んだ。

自宅アパートから営業所始発点である停留所までは徒歩十分。そ
こまでは商店街が建ち並び、田舎だけにジエネの容貌はかなり目立
つだろう。私だってビツクリするよ！

戸締りして、ジエネと一緒に表に出る。

丁度そこに呼んだタクシーが滑り込んできた。

「さ、乗るよジエネ」

「あ、ああ……」

ぎこちなく頷くジエネに、すっかり生活習慣が違つのを忘れてい
た。あつちの世界じゃ馬車に当たるのよ、と小声で伝えとにかく奥
へと押し込んだ。

「駅前のデパートまでお願いします」

行き先を運転手さんに伝えた。私の住むこの地域の最寄り駅まで
は徒歩三十分はかかる。なぜかこのバスは最寄駅に行ってくれず、
一駅先の県庁所在地の大きな駅へ三十分かけて走らせる。したがっ
て自宅近辺に住む人はバスで主要駅に向かうのだ。

まあ、ジエネのこの姿では電車でも目立つだろうけど。

「シヨーク、地面が固いんだな」

「あ、舗装されているから。車……うん、今乗っているこの事
なんだけど、走りやすくする為なのよ」

「空には……一つだけ、か」

「うん。こっちでは昼と夜、一つずつだけ」

目に映る全てに興味を示し、しかし拳動は落ち着いて見えるジエ
ネに私は一つずつ答える。そんな様子が気になるのか、運転手さん
がチラチラとバックミラー越しに視線を向けた。

流暢に話すジエネの日本語が不思議なのかな、と思う。時限を越
える折には言葉や色々世界にあったものに再構成されるし、私も実
際に経験した。

文字は分からないけれど言葉だけでも通じて助かるね。

やがて駅前のデパート正面にタクシーが横付けされた。料金を支
払い二人で降りると、ジエネの息を飲む音が聞こえた。

そりゃ……そうだよ。レーンにもラスメリナにもない風景だ
から。

地方とはいえそれなりに大きなビルが建ち、何車線かの道路は車
が行きかう。大勢の人間がかなりの軽装で 特に若い女性はここ
の所の気温もあるため割合薄着だ 追い立てられるように早足で
過ぎていく。

ジエネは慎重に視線を巡らせて状況を測っているようだった。さ
すがに軍人というべきか、さりげなく目を配り、観察をする。

しかし私としては通行人がジエネ、そして一緒にいる私へと注目
されているのが気恥ずかしくてジエネの手を取ってデパートに入っ

た。

「えーと、紳士服はー……」

確か二階だけど、その前に。

正面カウンターに向かい、受付の人にあることを頼んだ。少々お待ちくださいと受話器を取り上げどこかへと連絡を取り、暫くして。

「お待たせいたしました」

完璧なメイクが施された、パリッとスーツを着こなす女性が颯爽と現れた。

翔の服を選ぶ時、この女性に色々お世話になっているのだ。翔はああ見えてバリバリの営業をしている。社長の一存で入社日数よりも出来高制となっているから、たまの入社でも許されるという……実生活でもデタラメなんだよね。

だからそれなりにキチンとした服を揃えたかったのだけど、翔本人が選ぶと……ゴホン。それで困っていた所、学生時代の友達の姉がこのデパートに勤めているという事で紹介されたのだった。

「根岸さんお久し振りです。お忙しい所すみませんでした」

「いいえ、丁度接客終わった所でしたから」

早速ジエネの服を選んで欲しいとお願いしたら、快く「お任せ下さい。ふふ、やりがいありますわ」とジエネにも笑顔を向けて、こちらへ、と二階へ続くエスカレーターに向かった。

どこか遠くのほうで「カチヨー、もう要りませんってえええ！」と可愛らしい大声（？）が聞こえたけれど、根岸さんは「嬉しい悲鳴なのですよ」とニッコリ笑って流した。ええ……あ、そ、そうな

の。

よく分からないけれどそうなのだろう。こういうのは流した方がいい。私は翔で骨の髄まで学習しているから。

二階紳士服売り場で根岸さんはジエネのサイズを測り、テキパキと色々なお店から服を選んできた。こういうのは流石社員さんだね。

「体格がよろしいですけど、スポーツか何かなさっているんですか？」とジエネは聞かれていたけど、そもそもあちらにスポーツなんてものはない。生か死か。その生を勝ち取る為日夜訓練をしているので……うん、殺伐とした話になるし、第一別世界なんて言っても仕方がない。そんなところですよ、と私が横から口ぞえした。

またいつこちらに来てもいいように、カジユアルな物からスーツまで。そして下着に靴下にと揃え、今度は一階の靴売り場でジエネの足のサイズを測る。……二十八、九？　あまり店頭に並ばないサイズなので根岸さんが靴売り場担当の店子にいい、奥から何箱か運んで来る。スニーカーと革靴と……あとあちらでも履けるような編み上げのブーツ。丈夫なのがウリなのを選んだ。

再び二階の紳士服売り場に戻り、全ての衣服を着用して出てきたジエネは……。

「シヨーク、これでいいか？」

その長身に映える黒のTシャツにカーキのカーゴパンツ。流石デパートの一品だけあり、ジエネの広い背中中はシャツの綺麗なラインをもつてより一層魅せられる。私の服　七部袖でポートネックのボーダーシャツにデニムの膝丈スカート、そして履き心地重視のミユール　に合わせて選ばれたそれらは、とてもジエネに似合っていた。無表情でスニーカーを履いて試着室から出てきたジエネは、私から見たら随分照れくさそうにしているなと見て取れる。

「うん！ とつてもカツコイイよ！」

「ほんと、ジエネシズさん素敵ですね。 お願いがあるんですけど、ウチのデパートのモデルになりませんか？」

九割方本気の根岸さんへ丁重にお断りを入れ、多くの荷物を抱えてデパートを後にした。うん、殆どジエネが持ってくれたんだけどね。

「見てみて、あの人超カツコイイ！」

「えー、有名人？ モデル？」

雑踏の中、ジエネを見た人達……主に若い女性なんだけど、黄色い声が上がった。背も高く体つきもよく何より顔が非常によろしい為、明らかに一般市民とかけ離れたジエネに群がりつつある。

ふ、と足が止まり、先に行くジエネを見た。それはとても存在感があり、威厳すら感じる立ち居振る舞いで私は気後れしてしまった。そんな私に、大勢の視線を浴びながら「ほら」と手を差し出す。

ジエネにとって本当に私でよかったのかな、と心の片隅で思ったけど、奥の奥に押し込めて差し出されたその手を取った。私よりほんの少し冷たくて、大きくて、ゴツゴツして、じわっと胸が暖かくなる手を。

用は済んだので家に帰る。バス停に行く道すがら少し大きめのドラッグストアに寄った。

「ここは何でも売っているのか？」

「えーと、そうね。クスリや日用雑貨よ」

読めないけれど写真やイラストを見てなんとなく用途を推し量っているようだった。私は目的を果たす為ジエネをそのままにして籠を手に取った。

トイレットペーパーと、ゴミ袋……ああそうだ、ジエネの分の歯ブラシもいるわね。ポイポイツと籠に入れてみると、ちょっと離れた所でジエネが何やら男性の店員と話しているのが見えた。二、三会話した後に店の奥の扉へ二人で入って、そして暫くして出てきたえ、え、なんなの？

会計の時に顔を真っ赤にしたその店員さんがレジを叩く。私とジエネを交互に見て、何度か打ち間違いなながらも合計金額を伝えた。

「えっ？ そんなに高いんですか？」

思ったよりもかなり高い。ついそう聞くと、ジエネが口の端を僅かに上げた。

「追加したからな」

「へっ？」

私が選んだ物とは違うものが、籠の脇に置かれている。見えない色のビニール袋に包まれた箱？ そして店員の真っ赤な顔……。

「きっ……」

叫びたい所だけど辛うじて飲み込み、体中の血液が沸騰しそうな錯覚に陥りながら言われた金額を出し、そそくさと店を後にした。

せめてもの救いは、近所の店じゃなかったことだ。

* 番外編 一週間 2 (後書き)

ロウが飛ばされてどうなったか気になる方！ 18歳以上の方対象
ですが、月であるお方がそのお話を書いてくださりました！

「災難は運命を繋ぐ」

<http://novel118.syosetu.com/n9813t/>

こちらサイドでも少し関わっていきますので未読の方は是非！
全10話、完結しました

バスに揺られて三十分の間。

大柄のジエネには二人掛け椅子が小さすぎる為、一番後ろの席に並んで座った。ジエネは見慣れない風景への戸惑い以外は、終始寛いでいるようにみえる。

用途など見て少し考えれば分かるもの以外について、小声で私に質問が飛ぶ。

ここの地方のバスは後払いで、最初にカードをタッチするかチケットを手に取り、降りたい場所の前でボタンを押し鳴らし、降りる際にカードをタッチして、またはチケットに書いてある分の金額を支払って降りるのが決まりだ。

「しかしこちらの女性は皆薄着なのだな」

そればかりはいくら考えても分からないらしい。まあね、私もそう言うものだと思うっていたから深く考えてなかったわ。キャミソールにホットパンツなんて、真夏にはアチコチ出没する。肌を隠す文化のアチラとはそれだけでも違うから、もしヘソ出しの服や某歌手の半露出な女性を見たらどんな顔をするのか見てみたい気がする。でも一番の違和感は。

なぜか心の片隅にモヤモヤと引つ掛かるものがあつた。なんだろう？

降りるのは営業所と車庫が一つになった最終の停留所。ロータリ

ーをバスは大きく回って小さな屋根のついたベンチの並ぶ乗降所に
停まり、ジエネと私の分の料金を支払ってタラップを降りる。

この停留所から東西に伸びる商店街。小さいながらも郵便局や銀
行、スーパー、コンビニ、個人商店など品数はそれほどではないが、
生活に必要な物が一度に色々揃えることができるのでとても住みや
すい街だ。

「さ、こつちよジエネ」

ここから自宅アパートまでは徒歩五分。昔の名残で所々松並木が
ある道をのんびり歩いていく。時折、すれ違う人からチラチラとジ
エネに視線が向けられるけれど、不躰な感じがしないのもこの土
地柄である。

すれ違う人、自転車、車……お店、服、地面、空……。

異世界の住人であるジエネのその瞳はどういう風に映しているの
かな。

「はー、やっと着いた！ ね、その服貸して？ 皺にならないよ
うに掛けておかなきゃ」

ジエネから買った服を受け取り、チャツチャとクローゼットに仕
舞う。下着などは水通しをしたいから、そのまま洗濯機に入れスタ
ートボタンを押し、買ってきた食材は冷蔵庫へ、そして洗濯物を取
り入れてやっと人心地ついた。

パン屋さんのイートインでお昼は済ませたし（ここでもジエネは
恐ろしい量を食べて、店の人が目を丸くしていたのが印象的だった）
、夕食は昨日大量に作りすぎた感のある料理で大丈夫だろう。

ご飯だけは炊かないと。ジエネの食欲を考えて五合炊きの炊飯器

に五合フルでセットして、そうだ……と、ジエネに日用品や機械の使い方を教える事にした。

ちょっとしたイタズラ心でテレビをつけてみたら、動き出す映像に普段表情筋を動かさないジエネはテレビ画面を凝視した。そしてお約束のようにテレビの裏を確かめたり。テレビの説明？　なんか電波がどうのって私自身が『そういうもの』と受け入れているからうまく説明できない。魔術師などが使う水鏡みたいなものといったら、おおよそではあるけど納得してくれた。

洗面所では、蛇口を捻るだけで水とお湯が出るシステムに感心し、冷蔵庫の説明……ガラスのコップに自動製氷機からできた氷を三個入れ麦茶を注いで「はいっ」と渡すとかなり驚かれた。

「魔術師が精霊使いの高位でなければ、このような氷は作れない。もしくは、徒歩で二ヶ月ほど北に行った大きな山にはある。この箱で出来るなど、不思議で仕方がないな」

氷そのものは知っているらしい。というか、その山に登った事もあると。ハルと一緒にアンザスの仕事をしつつ旅をしていたので、その知識はとても広くて深い。

飲み物はここから適当に取って飲んでね、と伝えて自分にも麦茶を注ぎ、二人でソファに腰掛けた。カラッとした爽やかな風がすつと部屋の中を通り抜け、私たちの頬も撫でていった。

「上の階に人の気配を感じないのだが……そもそもこの建物は貸家なのか？」

「四軒が一棟に住む集合住宅なのよ。この部屋の上階は今空き家……ええつと部屋の契約者待ちらしいわ。だから誰もいないの」

「周りの環境も穏やかで。いい……所だな。シヨーコとカケルが育ったこの地は」

「うん。色々あったけど……」

あ。

違和感の正体。

「平和がなによりだ」

ジエネが生きてきた世界。
腰に佩いていた刀がない。

それなのに、私以外の気配すら気にせず熟睡した。

それは唐突に私を刺した。

私は何を見てきたのだろう。

ジエネの生きてきたあちらは、生と死が間近にある。私の中で、
どれだけ『本当』を理解できたのかな。どこかで私は『小説と同じ
世界だから』と、空想世界のように思っていたのではないか。

ジエネの腰に佩いた剣は飾りじゃない、実用品。アンザスに在籍

すると言う事は、つまり生死に関わる『仕事』をしていたという事。映画でもテレビでもアニメでもない現実に使っている武器。

同じ、血の通う人間がいる。

同じ、感情のある人間がいる。

同じ、生死が訪れる。

私は何を見てきたのだろう。

今いるこの世界、戦争がないとはいえないけれど実際目にしたわけではなく、画面を通しての他国の話。過去あった戦争の話も、どこか現実味がない。犯罪もあるけれど、皆がみな剣や銃を持ち歩きなどそんな物騒な日常は見られない。平和なんだ。そう、平和。

ジエネが言った『平和がなによりだ』 その言葉に私は何故か猛烈に恥ずかしくなった。あちらの世界を見てきたくせに、何一つ理解せずどこか絵空事のように捉えていたのではないか。

私は、ぬるい。

気付いてしまった自らの思考の海に溺れる。

「シヨーク？ どうした？」

急に黙りこくった私を不審に思ったのか、ジエネは不思議そうに見ていたテレビから振り返って、驚きの声を上げた。でも私は答える事ができない。だって、どうしたもこっしたもないんだよ！

「……いいから。ごめん。あ？ わから、ない……？」

言ってることも支離滅裂だ。するとジエネは、私の肩を抱き、自らに引き寄せた。私の頭はコテンとジエネの胸に当たる。ドクンドクンと力強くも規則正しいその音が、私の心を少しだけ落ち着かせてくれた。

「言いたくなければそれでもいいが、泣かれると俺は弱い」

泣いてる？ そう気づいたら、よりいっそう涙が溢れる様に頬へと流れた。そんな私をトントンとあやすようにジエネは背中を叩いてくれる。

「言いたくない、訳じゃないの。でも、なんだか、あやまるのも失礼な、気がするし。どうしたら、いいんだろっつ」

混乱のまま思考をなんとか言葉にすると、ジエネはそうか、と言。それはひどく優しい声色で、私のぐちゃぐちゃで大荒れだった心の波は、緩やかに凪いでいった。

一粒涙が零れる度に、ジエネの大きな親指が濡れる頬を拭き取ってくれる。そして厚い胸に当てられた耳に響く心臓の音が、私のこんがらがった感情を次第にほぐしていつてくれた。

言葉にしなければ、伝わらない。

気持ちだけで、目だけで、伝わるだなんてそんなものは。

百パーセント自分の言いたい事が伝わるだなんて思わない。実際に口に出さなければ正確に相手に伝わらないんだ。

だからうまく気持ちが纏まらないけれど、ジエネに私を感じた、そして思い知った気持ちをポツリポツリと口に出した。

その間もジエネは背中を優しく叩き続け、私の言葉を遮ることな

く凝った気持ち全てを吐き出せた。

すると。

「何だそんな事か」

アツサリとジエネは言つてのけた。

えっ?! と顔を上げると、少し西に傾いたオレンジ色の光がジエネの顔に当たって陰影を作り、とてもキラキラしていた。うわ…
…男性にこういうのもなんだけど、美しい。一瞬ぼうつと見とれてしまい、慌ててまた顔を伏せた。

たった今までワーッと泣いていたのに、私つてば!

そんな私を別段気にせず、今度は私の頭をよしよしと大きな掌で撫でてくれる。

「その様な事、きにするな。俺だつてこちらの世界では全くの別世界なんだぞ? それこそ夢を見ているかのようだ。むしろ俺の方は……汚れている」

汚れている、というジエネの声は苦さが混じっていた。下女との間に生まれ王位継承権第一位だったジエネシズ。マルちゃんという弟が生まれ、血筋的には申し分ないあちらに与する貴族の執拗なまでの嫌がらせにととうとう母親が力尽き、そして国を一旦は捨てて…
…どういふキツカケかアンザスへと入り、ジュノーに師事したんだよね。それから、マルちゃんが王位に就く……傀儡政権の始まりを知って、周りの思惑はどうあれど弟が可愛かったジエネは軍の一般募集の兵から騎士団の近衛隊長まで上り詰めて。

人を殺めなかったなんて、そんな甘い考えは持っていない。持っていないけど私は実際目にしたわけではない。ジエネが剣を持っているからといって恐怖は感じていない。いないけど……。

ジエネは左の手で私の頭に手を置きながら、右の掌を開きじつと視線を落とす。

「俺は……それこそ、何人もの人生を狂わせてきた。自ら望んでも望まなくても。ショーコにも言えない様な卑しくて無様な真似も何遍もしてきた。汚れたこの手を嫌悪もするが……反対に死線を幾度と潜り抜けているうちに、これが生きているんだと……生きていく価値を体中で感じられたんだ。俺がこれまで生きてきた過去は、反省はするが後悔はしていない。それはショーコ、お前もそうだろう?」

……過去のレベルがうんと違う過ぎる気がするけど、後悔はしていない点は同じなので、一つ頷いた。

「いいんだ。ショーコはそのままできてくれ」

え?

こんなぬるい世界にいて、あつちの世界の地に足をちゃんとつけていなかった私を?

「……そのまま?」

「ああ。俺は普通感覚を失っているのだろう。生きて嬉しい、死んだら悲しい。そういうた単純な事すら感情の揺れ幅がない。その心に気付かせてくれるのは、ショーコなんだ。ショーコが思い起こさせてくれる。むしろ……俺の方がショーコに縋っているのかもしれないな」

苦笑しながら髪を梳くその無骨な手を、私はそつと自分の手で捕らえて重ねる。節くれだって、太くて、大きくて、温かな……大

好きな人の、手。

ぎゅ、と握り締めながら上体を起こし、ジエネと顔を合わせる。

「ジエネ、手があつたかいね」

「ああ、シヨークの手も温かい」

「住む場所は今まで違つたけれど、こうして触れば同じ人間だつて分かるわ。これからは一緒だよ。これから、ずっとずっと」

「シヨーク」

「だから、ジエネの見てきたこと、感じた事、それから色々旅した先の話を教えて？ うん、もちろんいえる範囲でいいの。ちゃんと、生の声を聞きたいわ」

「ああ」

「そうしてちゃんと私、現実にするの。現実にして、ジエネや皆と同じ世界の住人になりたいの……きゃあっ！」

の、まで言うかわいわないかでジエネの手が私の体を救い上げ、ソファに座るジエネの腿の上に跨る格好で座らされた。

ちよつと、ちよつと！ メチャクチャ恥ずかしいんですけどこの格好！

ジエネの上に座つてもやや視線は上になる。ジトツと睨んでみたものの、ジエネの真摯な目に打ち抜かれた私は黙って顔を赤くした。

「シヨーク」

「な、なに？」

「では、シヨークはずっと……レーンに居てくれるんだな？」

あ……ジエネは。ジエネにも不安に思う所があったのね？ その不確かな今までの流れから、ジエネはひよつとして私がこちらの文に心残りがあって、生活基盤は基本ここ日本にして、たまにレーンに来る事にするのではないか、そんな恐れも抱いていたらしい。目をほんの少し横に逸らしながら、ポツポツと語るジエネは……恐ろしく可愛かった。うん、表現間違っていないよ。筋肉がゴツゴツしている長身のイケメンが可愛い不安を洩らすのは。

「当たり前よ。私は、ジエネの傍から離れたくないもん」

そういつて、私は真正面から挑むようにジエネと視線を合わせた。けど、大失敗だったかも！ この体勢は安定が悪く、支える為についたジエネの腹筋から、ついあの夜のことを思い出して体中の血が顔に集まったんじゃないかと思うぐらいカーッと熱くなった。

「やつ、あのねっ、そういう意味じゃなくてっ」

「そういう意味とは？」

「~~~~っ！ いじわるっ」

伏せがちになる顔を少しだけ上げて、チラッと上目遣いでジエネに文句を言つと、一気に上体を抱き寄せられた。

「どつちが意地悪だ。では……離れたくないというのを体に教えないといけないな」

「えっ」

「俺も離れたくない。シヨークから」

そのジエネの情欲が燃える瞳に、私は焼かれて啼かされて求められて。。

三日間、アパートから出なかった。違つ、出してもらえなかった。

今、何時？

ボンヤリと目を開ければ天井が見えた。腰に絡められた腕をのけて、けだるい上体を起こす。ベッド脇の目覚まし時計は四の所を短針がわずかに過ぎて、遮光カーテンの隙間から零れる光は……オレンジ色の混じった……。

「っ、えええ?!」

もう夕方じゃない！ 今日が終わってしまう……。

ジエネが来た日は寝てしまったのでそれで終わり、次の日の夕方から、その次の日、そして今日と全く外へ出ていない、いや、出られなかった。

それもこれもあれもどれもジエネがつ！

ジエネからもたらされた数々の行為を、まざまざと脳裏に浮かべてしまい顔が火照る。寝顔を軽く睨むけれどもどこか怒れないのは、私も……それを望んだからに過ぎない。でも言っただけやるもんか！

一緒に掛けていた布団をそつと抜け出し、ベッドから降りようとしたら手首を掴まれた。

「わっ！ ジエネ、起きていたの？」

「ああ」

その掴んだ手首に、ジエネはちゅうつと音を立てて唇を寄せる。再びもたらされる甘い痺れに、再びベッドへ戻りそうになったけどなんとか踏みとどまった。

「ダメダメ！ もう今日はおしまい！」

「いいだろう？ 邪魔するものはいないのだし」

「もうね、これ以上人として良くないと思うの！ 洗濯もしたいのにもう夕方だし……」

あーあ、とカーテンの隙間から外を見ると、今日もいい天気だったようだ。ちよつと勿体無いな。

「買い物も行きたいからもう駄目！」と残念そうなジエネを諫め、サツと服を着てタオルやなにやらを洗濯機に放り込んでスタートを押す。それから冷蔵庫の中身を確認して……。大量に作ったはずの料理は部屋に籠っていた間に全て食べ尽くし、非常用のレトルトご飯やカップ麺すら在庫が尽きた。ジエネ、結構食べるんだよね。沢山食べてくれるのは嬉しいんだけど。

「シヨーク、この服でいいか？」

諦めたのか、ジエネも着替えたようだ。シンプルな白とグレーの重ね着風Tシャツにブルーブラックのスリムストレートジーンズ。うわ……ただでさえ端正な顔立ちで身長もあり、筋肉が実用かつ美しい形で全身を彩るその立ち姿が、一言では言い表せないほど格好いい。

ぼおつと見惚れていたら、ジエネは私の髪をひと掬い持ち上げて口付けた。

「ありのままのシヨールも美しいが、服を着たシヨールもまた綺麗だ」

「なっ」

なんて甘い言葉を吐くのっ！ その顔で！

え、あの、その、なんて動揺しながら家中の戸締りをして、財布とエコバッグを小さなシヨルダーバッグに押し込む。

「顔が赤いな」

誰のせいよっ！

太陽は今だ沈まず、影だけは長く伸びていく。夏本番の入り口なのに、じわりと絡みつく蒸し暑い熱気は毎年の事なのに慣れない。

涼しい気を浴びようと、遠回りになるけど散歩がてら川の土手沿いを歩く。

規模は小さいけれど山裾際に流れるその川はとても澄んでいて、カワセミなど見かける綺麗な水質だ。久し振りに歩く土手は、夕方の常連であるウオーキングする人たちで行き交う。それぞれが顔見知りらしくにこやかに挨拶を交わしていた。

そんな中私の隣を歩くジエネを見た人たちは、一瞬ぎよつとした表情をするけどそれでも「こんにちは、今日も暑かったですね」などと声を掛けてくる。

日本人に良くある曖昧な笑いだけれど、嫌な感じはしない。相手からは好奇心しか向けられなかったからかな。

「本音を隠す笑みではあるが、いいな」

穏やかな声で私に呟く。

……あちらの城では侮蔑に満ちた野次や心無い言葉に晒されてきたジエネ。誰も「ジエネシズ・バルトウ・レーン」を知らない世界。気が休まるのは、そういう理由もあるのではないか。

てくてくと、のんびり歩く。特に会話らしい会話もないけれど、黙って隣に添えるのがとても居心地がいい。

肩を組むでもなく、手を繋ぐでもなく、二人で並んで歩く。

だけど二人の間は、気持ち繋がつている。この見えない空間が、私を丸ごと包んでくれる居場所。

土手から横道にそれて住宅街を抜けると、昨日歩いた街道に出る。それなりに交通量のあるこの道は歩道が整備されて、その両側には商店が立ち並び。

ジエネと降り立ったバスの停留所を通りすぎ、隣のスーパーへと入った。

籠を一つ手に取り……ちょっと思い直してもう一つ。カートの下に籠を置き、押しながら店内へ。冷蔵品が多いから、外とは違いヒンヤリとした空気が体を包む。

「これは……まるで別世界だな」

「あはは。精霊の力みたいでしょ」

私が丈の短い服を着て外を歩くのが、ジエネは嫌だと。だから七部袖のカットソーにデニムのパンツだった私はその冷気が心地いい。果物、野菜、鮮魚、肉、惣菜などコーナーを回る度に、ジエネが

文字は読めないけれど興味津々で「これも、これも」と選ぶからあつという間に二つの籠はてんこ盛りになった。……これ、九割はジエネが食べるんだろうな。……あと残り三日だけど、間違いなく更に買い足すんだろうな。

エンゲル係数がとんでも無い事になりそうだと、これからの生活を考え……考え……。

「何か考え事か？」

ジエネが、考えにふける私の顔を覗きこむので飛び上がって驚いた。

「いつ、いやっ！ なんでもないのなんでも！」

好き合って、両親公認の仲で……。それってつまりけけけけ……。

「こら、潰れてるぞ」

「きゃー！」

手に持っていたポテトチップスの袋が……中身粉々になっていた。恥ずかしさを隠す為籠に乗せて急いでレジへ向かう。相当買い込んだので手持ちのエコバッグでは足りず、無料で持ち帰り出来るダンボールを貰ってそれに詰め込んだ。

ジエネは当然のように重いダンボールをヒョイと抱え、私の持つエコバッグまで取り上げる。どちらも左手一本で持つジエネに「重くない？」と尋ねる私に「大した重さではないな」と頼もしい返事が返ってきた。

自宅への道を再び歩いていく。

夕暮れ時のこの時間は、帰宅を急ぐ子供達や大人達でどことなくせわしない。大通りから一本入ればアパートだという曲がり角で、ドンッとジエネに誰かがぶつかった。

「ぎゃっ」

「……つと」

ジエネは揺らぎもしないけれど相手がひっくり返りそうになった。それをジエネは片腕で支える。

「わ、大丈夫ですか……ん？ アキラちゃん？」

「イタタタ。えっ、翔子お姉ちゃん？」

ぶつかってきた相手は近所の空手道場の一人娘で、名前は青島アキラ。中学二年生のボーイッシュな女の子。小さい頃は……そりゃ少し男の子と見間違えるような容姿をしていたけれど、思春期真っ只中の十五歳は僅かに花が綻ぶよう綺麗に面立ちが変わってきた。私の声にはつと笑顔を向け、そして自分を支えている腕を見て、最後その顔を見て……。

ぼ、と頬が染まったのが見えた。

「……いい筋肉」

思わず零れたであろうその単語に「え、筋肉って」ぎよつとしていたら、アキラちゃんはキラキラした目でジエネを見つめていた。

「お、おにいさんっ！ 初めまして、あたしアキラって言います。突然で申し訳ありませんがなにが武道されているんですか?!」

突然熱く語りだした少女に、ジエネは一瞬身を引いて私にタスケテの目線を送ってきた。そうよね、どう扱っていいか分からないわね。

「あー……、アキラちゃん、ちょっと落ち着こうか」

「翔子お姉ちゃん！ どこでこんないい彼氏見つけたんですかっ！ 筋肉だし筋肉だしカッコいいし筋肉だし！ あーもう理想体型！」

「あ、あの、アキラちゃん？」

「ねえお兄さん、良かったら私の道場で手合わせを……」

「こらー！ アキラ待て！」

「げっ、有ヶ谷だ」

面白いほど顔を歪めて振り返るアキラちゃん。どうやら追われていたようだ。さっとジエネの背に隠れたアキラちゃん。そしてその前に息せき切って駆けつけたのは、アキラちゃんと同じ年頃同じ背格好した男の子だった。

「アキラっ！ 逃げんじゃねーよバカ！」

「うっさい！ 毎回毎回組手なんてめんどいんだー！」

「俺が勝てばそれで終わるから！」

「はあっ？ あたしに勝とうなんて寝言ってんじゃないよバー
ーカ！！」

「……………」私とジエネは顔を見合わせた。一体なんなの
これは。

会話で察するに、この少年はアキラちゃんに勝ちたくて組手を申
し込むけれど、アキラちゃんは面倒だと断っているんだね？

というか、この少年はただ勝ちただけじゃないような、そんな
気がする。

「はいはい、アキラちゃん一回してあげればいいのよ」

「お姉ちゃんっ！ コイツ嫌だって言っても、何度も何度もする
んだよ！」

「バツ！ ちょ、変な言い方すんじゃないよー！」

「ショーコ、言い回しが人聞き悪い」

少年とジエネに言われて一瞬首を傾げた私は、急に意味が分かっ
てあわあわと赤くなる頬を手で押さえた。ただアキラちゃんはき
よんとしたまま、ジエネの背から顔だけ出して「イー」っと歯を
むき出して威嚇する。……ちよつとアキラちゃんてば。

「悔しかったら、この彼氏さん位になっってみろー」

アキラちゃん、煽る煽る。

そこでやっとジエネに目を留めた少年は、頭の上からつま先までジエネの体軀を眺め……泣きそうな顔になった。そ、そりゃそうだよ、ジエネは現役近衛騎士隊長だしね。本気で本職の武人だしね。

「……俺、三回生まれ変わっても無理かも知れねえ」

そこまでっ？

肩を落とし落ち込む少年へ、ジエネは肩に手を置いた。

「努力と根性があれば大丈夫だ」

ジエネ、まさかのスポ根熱血教師っ？

そして私を振り返り「夕食のあと少し時間いいか？」と尋ねてくる。勿論予定はないので了承すると、自分の背後にいるアキラちゃんに向かった。

「では、後ほど道場に窺うがよろしいか」

「はっ、はいっ！！ 勿論ですよ筋に……手合わせ、是非！」

心の声漏れてるよ！

先程とは打って変わってご機嫌になったアキラちゃんは、少年を小突きながら道場のある方へ駆けて行った。

なんだろう、ちよつと脱力感が。

「ジエネ、いいの？」

「何が」

「あの子達、空手っていう武道をやっているのよ。ジエネ……見たことないでしょ？」

「ないな。しかしどの国にも体術はあるものだ。俺は剣で生きてきたが、体術も使えなくはない。新しいのを知るいい機会だ」

「そっか。じゃあ早めに飯食べようね」

「二食分作っておいてくれ。帰ってきたら夜に備えたい」

「夜？」

「……………それってー！」

* 番外編 一週間 4 (後書き)

アキラちゃんと有ヶ谷少年については、妄想部7月企画にて出ています。

<http://ncode.syosetu.com/n4429u/>

まさかここで絡むとはねw

それから、18歳以上の大人の方への連絡です。

お気に入り小説登録者、または活動報告見てくださった方にだけご存知かな。

ムーンさんにて、番外編3と4の間を投稿してあります。

ガッツリなので、年齢に満たない方と苦手な方は回れ右でお願いします。

家に帰り、超特急でご飯の支度。買ってきた食材を冷蔵庫にしまい、五合炊きの炊飯器をセットして。今夜は舞茸と牛蒡の炊き込みご飯にする。ジエネはこちらの世界の料理にも問題なく……どころかいたく気に入り、和食を希望してきたのだ。野菜を切った時に少し分けておいた物をビニール袋に入れて昆布茶をまぶして揉んで放置。他には？ ざかざか切つてすぐに出来上がるメニューで、しかもボリユームつて……あれ、なんかまたスピードメニュー？

豚バラと白菜の重ね蒸しには、生姜を摩り下ろしたものを酒と共に振りかけて蒸す。最後にポン酢をぐるりと回しかけて完成。他にはなすとピーマンの味噌いため、あさりとわかめの潮汁。ジエネが「肉がもつと欲しい」と言うので、漬け込み時間短縮できる薄切りの豚肉を使った生姜焼きを作った。

丁度いい頃合で炊飯器の終了の合図が聞こえる。

おかずをリビングテーブルに並べた。うちでは大きなダイニングテーブル置くスペースがないので、床座りになつて食事を食べるのだ。このスタイルにジエネは最初戸惑ったけれど、旅を通じて異文化に触れたり、野宿でもなんでも経験しているのですぐに慣れた。お箸は難しいようだけどね。

ご飯を二膳よそう。ジエネの分は初めからどんぶり。出かける前にまた五合ご飯を炊かなければいけないな、なんて思ったり。米の消費量はお母さんと翔と三人で住んでいた頃の三倍はある。翔、こちらの世界にいた頃は、普通の男の子の量を食べていたんだけどな（遠い目）

その間にジエネは冷蔵庫からピッチャーを取り出し、冷たいお茶を用意してくれた。

大分家電に慣れたようで、特に冷蔵庫はお気に入りに入らしい。冷たい飲み物 特にビールが気に入り、いそいそと用意する姿は微笑ましい。流石にこれから出かけるとあつて控えているけれど、帰ったらまた飲むだろうな。お母さんが大量に買って置いていたらしく、在庫は沢山ある。

いただきます、と私は手を合わせ、ジエネは左手を自分の胸に当てて何かを呟く。私のいただきますと意味合いは同じだと言っていた。

「このコメやシヨウウユを使った料理、あちらで作れないか？」

ジエネにどんぶりご飯二杯目のお代わりを渡すと、そう聞いてきた。本気であちらでも食べたいなと思っかけてくれるのは嬉しい。嬉しいけど。

「うーん、自分たち周りだけならいいけれど……生産、製造となるとやりたくないわ」

一言に纏めるなら、今の私の気持ちは『汚けがしたくない』だ。

あちらにはあちらの文化がある。もともとある物での工夫ならいずれ発生するかもしれないけれど、育てる、製造するというのは文化を変えてしまいそうで怖い。

あくまでも、内々だけで……じゃダメかな？ と尋ねれば、そうか、と頷いた。

「シヨウコの気持ちはよく分かった。世界を大事にしてくれ

て、ありがとう」

ジエネは、私の大好きな……深い海の底の色をした目を私に向けてほわんと緩めた。色気ダダ漏れだからやめてー！

「こんばんはー。海野うんのです」

「おお、翔子ちゃんじゃないか。久し振りだな」

ジエネと連れ立って、自宅近くにある道場に入ると、アキラちゃんのお父さんがすぐに声をかけてくれた。

「おじさん、お久しぶりです。お元気でしたか？」

「ああ勿論だ。翔君はどうしてる？」

「あー……元気にしてますよ……はは……」

翔は小学生の頃から、この道場に通っていた。とても面倒見のいいアキラちゃんのお父さん。おじさんが誘い、翔の基礎はここで作られたと言ってもいい。「男たるもの」を教えてくれた恩人なのである。

……ゴメンねおじさん。あの頃は本当にご迷惑をお掛けしまして。とにかく、翔は規格外だった。

観察力があるのか、じっくり先生の動きを見たかと思えば即自分のモノにして。

昇段審査は日が決まっているから、飛び級するにも制限がある。しかし制限いっぱいまで毎回飛び級で合格し、最短日数であつという間に黒帯となった。型を見たことあるけれど、まるで一本芯が通つたかの様に縦軸が動かない。頭の位置は水平に動き、手足の軌跡が見えるかのような流れるような美しい動き。組手も観察力を生かし、相手の隙をつくのが非常にうまい。

これが普段「ねーちゃんねーちゃん」言っている同一人物なのかなど、目を奪われる現実からちよつとだけ逸らしたくなる。

黒帯にまで昇段した後は、空手の練習には顔を出すものの別の武道にも手を出していた。そしてそのすべてに置いて最高の位まで達するデタラメさ。しかし……大会などの参加は、積極的にはしなかった。『僕は結果を求めない。目に見える結果じゃなくて、ただ強くなりたいだけなんだ。世界を相手に守りたいものがあるからだよね……ねっ？』と、青い発言を残したのは後輩達の語り草となっている。

「お兄さん、待ってたよ！」

私とおじさんの間に飛び込んできた声はアキラちゃん。空手着に黒帯を締めた姿はとて凛々しい。それこそ幼い頃は本人すら「あたしサルなの！」という程、男の子のように見た目も動きも活発だった。しかし中学生に上がってから徐々に女の子らしくなって、将来空手界のアイドルになるのも時間の問題だとお母さんと話したことがある。

「折角の容姿の変化なのにまだ中身が伴わない」など、おじさんが嘆くのをご近所さんの立ち話でよく耳にしたものだ。

アキラちゃんは実に好戦的な姿勢でジエネを組手へと誘う。

「ねえ！ 彼氏さん早速手合わせをしようよ！」

目を爛々と輝かせて畳敷きの中央へと引つ張っていく。そんなアキラちゃんをおじさんは「待てアキラ。折角だから着替えていただこう」と引きとめ、おじさんと二人更衣室へと消えていった。その間、夕食を食べながらジエネと話した内容を思い出す。

ねえ、準備運動とか……あと毎日鍛錬とかしていなくても、維持できるの？

陸上競技などの運動選手は、一日でも休むと体が鈍る。そう聞いたことがある。しかし私が異世界に行きジエネに会ってからというもの、何か体を鍛えているという場面に出くわした事がない。それなのに緩む事のない筋肉に動きの無駄のなさはどうやって作られているんだろう？ 余分な所が微塵もないあの体の筋肉の締め具合、素肌で触れ合った時の……いやいや！ 待って！ なに思い出しちゃってるのよ私！

頬に熱が集中するのを誤魔化す為両手でぺちぺちと頬を叩く私に、ジエネはご飯粒一つ残すことなく食べ終えた茶碗を置いて、お茶を一口啜りながら答える。

いついかなる時も動けなくては意味が無い。何日休んだからといって鈍るような体では、己を守ることなど出来ないからな。

ひと時も休まる暇がない王太子時代。出奔後の傭兵時代。近衛徴用から今までの騎士時代。隙あらば死という過酷な環境で、緩むわけにいかない緊張感。ジエネはその様な日常に身を置いて培った体力精神力で、今もなお克己心を高めているからこそ、己に絶対の自信を持っているんだ。改めて、自分の愛する人は尊敬できる素晴らしい人だなと胸が高鳴った。

そして再び現れたジエネに、私は「うわっ」と目を見張る。上背もあり、実用的な筋肉に包まれたその体格で空手の道着を纏うその立ち姿は、一枚の絵画のようでも美しい。スーツ姿も良かったけど、これはこれでまた……。う、うん。この姿を見られただけでも、アリだったわ。

「じゃあアキラ、まずジエネシズさんに一通り型を見せなさい」

父親だけけど、この道場では師範であるおじさんには流石のアキラちゃんも従う。

「はいっ」

と、気合の入った返事でアキラちゃんは道場の真ん中に立ち、姿勢を正す。

「まずは基本型。始めっ！」

「とても美しい体術ですね。力強いです」

基本型、慈恩、岩鶴、抜塞……などなど、様々な空手の型を披露してくれたアキラちゃんは、額に汗を滲ませて、手首足首をブラブラと解す。

「じゃあもういいでしょ？ 組手、お願いします」

アキラちゃんは真っ直ぐジエネの目を射抜く。キラキラしたその瞳は、ただ強い人と戦える興奮に満ちていた。おじさん、アキラちゃんは格闘技に恋していますよ？ ……その少年、アキラちゃんにはまだまだ恋愛感情無理だと思うわよ？ ……と、アキラちゃんにぽおつと見惚れている先程の少年へ心の中でそつと忠告した。

「わかった。だが俺は我流だ。それでも？」

軽く体を解しながらジエネは問う。にっつとアキラちゃんは笑顔全開で「望む所よ！」と姿勢を正し、ジエネがその向かいへと立つ。ピリツとした緊張感が私の肌を刺激してくる。おじさんの合図があるまで、ただ二人向かい合って立っているだけのように見えるけれど、お互い力を推し量っているのは何となく読み取れた。

「はじめっ！」

おじさんの下腹から力強く放たれた合図に、両者はただじつと相

手を見据えていた。相手の力量を推し量るかのように見える。ジエネが、す、と右手を軽く上げるとアキラちゃんは僅かに右足を後方へずらす。そして一瞬の間をあげ、アキラちゃんはぐっと姿勢を屈め一步前へ踏み込み、素早く突きを繰り出す。それをジエネは腕でふわりと絡めとるように弧を描いて受け流した。しかし一撃で済むとは最初から思っていなかったようで、アキラちゃんはそのままもう一步踏み込み、くるりと半回転して回し蹴りをジエネの首筋に決めようとす。それすらも同じ片腕で受け流し、そして。

ドオンつと音がしたと思ったら、アキラちゃんがお尻から畳へ落とされていた。え、一体何があったの？！

私にはサツパリ見えなかったけれど、ジエネはどうやら回し蹴りの軸である足を払ったらしい。おじさんがそう苦笑しながら私に教えてくれた。

「僅か三手とはな。彼は一体何をやっている人なんだい？」

おじさんは興味深そうにジエネをしげしげと観察しながらジエネの出自を尋ねる。しかし「異世界のレーンという国で、近衛隊長やっています」だなんて言えないし、たとえ本当の事を言った所で冗談だと受け止められるだろう。

「えーつと、そ、そうですね、ヨーロッパ辺りのSPやっているんですよ。国家機密レベル？ になるんで詳しいことは言えないみたいですが」

苦しい説明をする私の拳動不審な態度を、おじさんは単に秘密にしなければならぬなら仕方ないなと特に追求せずに、再び道場の中央に目を向ける。

もう一本、もう一本と負けたのを気にした風もなく組手をねだる

アキラちゃん。それをジエネはアキラちゃんの細かなクセを見つけては指摘して修正する。前にバツツが言っていた通り、部下に対して非常に面倒見がいいというのはこういう所なのかもしれない。

「十四歳だったか？ 私の動きで反応できるいい感覚の持ち主だ。ただ今までは力技でも良かったが、これからは一段階上に行く方がより伸びる。型を見る限り直線が多いが、それにしなやかな動きを取り入れるだけでも……」

決して大きな声ではないが、耳に伝わる声はとても艶やかな張りのある声だ。うっとり聞きほれていたけど、ふと周りを見れば皆一言でも聞き漏らすまいと耳を傾けていた。おじさんはそんな二人の様子を見ながら顎に手をやった。

「しかし、アキラでは絶対に勝てない。ジエネシズさんは恐ろしく腕が立つだろうからな」

「なんでですか？」

「足元をよく見るんだ。彼は最初の立ち位置から全く動いていない」

あ、とジエネの足の位置を見れば、確かに全く変わっていないかった。

「受け流してくれたのはアキラに負担を掛けない為だろう。剛に剛で返せば強く反発しあい同じだけ自分にもダメージがある。その柔らかさが足りない直情型のアキラに教えるためだな。うつむ、ジエネシズさんはどれだけ強いのか私も手合わせをお願いしたくなかったよ」

言葉通り本当に掛かって行きそうだ。流石アキラちゃんの父親だけある。

いつの間にかジエネとアキラちゃんの周りには門下生 大人からチビツ子まで が集まり、順番に組手を始めていた。そして幾度か手を合わせた後にジエネのワンポイントアドバイス（まさにそんな感じ）をもらい、再び列の最終尾へと並びなおしている。

件の彼も並び、それこそアドバイスを必死に求めていた。彼も、一般レベルから見ればなかなかの腕らしいが、その上を行くのがアキラちゃんなのだ。おじさんは彼を焚きつければアキラちゃんを更上の段階へ押し上げてくれると目論んでいる様で、彼の恋心に気付きながらも利用しているみたいだ。

でも……私が思うに、おじさんは本当にアキラちゃんと彼が恋仲になったら相当荒れるんじゃないかなと。そのいつか来るかもしれない未来の為に、頑張っって強くなっって欲しいと思う。

「翔君はね、そりゃあデタラメな強さだったけどな……強くなる為の理由があつたからなんだ」

おじさんは、ジエネから視線を外さずに語りかけてきた。突然何故か翔の話になっって驚きはしたものの、当時の翔の心境が知れるとあつて黙っって続きを待つ。

「あれは翔子ちゃんも翔君も五歳の頃だったか？ いつも二人で過ごしていて、あのアパートに住む母子家庭の子供。幼稚園も通っていない、と近所では有名だったんだ。口さがない人間はどこにもいて、やれ育児放棄だなんだと下世話な噂をされていてな。翔子ちゃん、黙っって耐えてただろ？ あの顔は、言われている事を理解して、ただ言葉飲み込んでいるっって表情だ」

見ていてくれたんだ。

その事実にも、心の片隅にいた幼い頃の自分がポツと温かな光に灯された気がした。

確かに私は分かっていた。一方的に傷つける言葉を投げつけてくる相手に対し、所詮五歳児の反論など痛くも痒くもないだろう。それどころか痛くもない腹を探られて、我が家の内情が伝わる事であっても恐ろしかった。

私と翔を育てる為に朝から晩まで働くお母さん。生まれ時間は殆ど変わらないけど、弟である翔を守ろうと必死に両足で全てを支えた。

でも自分のことで精一杯だった私は、他の大人に目を向けることがなかったんだ。頼ってしまうと、自分が築き上げた矜持が崩れてしまいそう。

「ある時ね、翔君がいつもいつもこの道場の窓から覗いているのに気付いたんだ。空手やるかい？ って聞いたんだが、そしたら翔君…… 『ぼくんちおかないからできないよ。でもみていいーい？』 と、にっこり笑うんだ。なんとというか、言っている言葉は切ないが、あまりにアツサリしていて毒気を抜かれるというか……。」

それで一ヶ月ほど経った頃かな？ 熱心に見ているその姿に興味が出て聞いてみたんだ。どうして空手を見ているのかと。それまでニコニコした笑顔でいたのに、急に男の顔をして言うんだ。『まもりたいものがある』 いやー、シビれたね！ 自身だってまだチビっ子の癖にいっぱしの男のツラを持つてくるとはやってくれる。どう成長するのか見てみたくなってな？ 出世払いだとかどうにか言いくるめて、これから通うようになってしまったんだ。

……守りたいもの、それは翔子ちゃんと母親だ。どうだい、あいつ今も守れているか？」

「お兄さんっ！ また絶対手合わせお願いね。それまでにもっともっと練習するから」

「ああ、期待している」

大興奮のままジエネと握手を交わすアキラちゃんは、頬を高潮させてとても愛らしい。大人の女性へと急激に成長しつつあるその容姿で、にこにここと笑顔を向けて……あ。私、ちよつと気付いちゃった。その赤面する顔の理由に。

……彼、頑張ってるね。

ハードルが上がってしまった彼に対し、ちよつと遠い目をして生温かい笑みを浮かべる。

「そうなつて当然だよな」との思いと「私のだからダメ！」との複雑な思いが縋い交ぜになりながらも、相当苦勞をするだろう彼に深く同情した。

道場を後にした私たちは、街灯が等間隔で灯る夜道を並んでアパートまでの道のりをてくてく歩く。昼間は徐々に来る夏の気配が気温の上昇とともに感じられるけど、夜はまだまだひんやりと涼しい。さっきのもやつとした気持ちも払拭しようと、私からジエネの腕に手を絡めた。普段人目に触れる場所で私から何かすることがないのを知っているジエネは、寄り添う私に反対の手でぼんぼんと頭を

軽く叩いて「どうした？」と聞いてきた。

「ジエネ、かつこよかった。空手着がとても似合っていたし、それに……強いんだなって」

ぎゅゅつと遅しい腕に絡めた手に力を込める。ジエネなら、この心に重く押し掛かる空気を吐き出してもいいよ……ね？

「さつきおじさんがね、小さい頃の翔の話を教えてくれたの。それを聞いたら。……私は目の前の事でいっぱいになって、ちつとも周りが見えてなかったのよ。でも翔は、そうじゃなかった。うんと先の未来を見据えていたの」

だから異世界でも堂々と。そして王ともなりえた。

器が違つんだ。ととても大きな、みんな丸ごと抱えてくれる器。いや、でも多少小さな事にも目を向けて欲しいんだけどね。

うん、これは嫉妬とかじゃなくて純粹に「私の弟、すごいでしょ！」という身内自慢だ。小さな頃から二人で過ごしてきた。戸籍がなかった時は、いいことよりも悪いことの方が多くて、でも決してお互い涙は見せずに励ましあってきた。そんな翔が今、大勢の人から頼りにされているというのは我が事のように嬉しいんだ。

「私も、負けてられないわ。周りにはうんと規格外が多すぎて勝負にならないかもしれないけど」

「こら、シヨー」

立ち止まり、頭に手を置かれたままだったのをくしゃくしゃつと髪ごと撫で回し、その手を今度は私の頬に当てた。夜風に当たって冷えた頬は、大きな掌から伝わる熱にじんわりと温まる。

「お前も充分規格外だ。自覚しろ、精霊姫様？」

頭一つ分背が高いジエネを見上げ、ほんの少し笑いの含まれた声に気付いた私はふふつと笑った。

「私は自分の力で手に入れたんじゃないもの。それに、あちらに行ったら私の役割なんてただそこにいるだけ、になるのよね？ 精霊姫って存在さえしていればいいんだもの。でも私は働きたい。だから厨房で働かせてもらおうかと思っっているわ。とても忙しい職場だけど、やりがいがあるの」

ジエネの添えられた手に自らも添えて、何か言いたげにしたジエネを遮ってさつき覚えた胸のざわめきを口にする。

「ジエネ、アキラちゃんの初恋の人になってるわよ、絶対」

いきなり話題が変わり、面食らった様子のジエネは「まさか」と口の動きだけで否定した。あれ？ 気付いてないのか。

「ただの勘だけだね？ うん、私も覚えがあるから分かるのよ。強い人に憧れて……」

「強い人？ 誰だ？」

ジエネの剣呑な気配が含まれる質問に気付かず「え？ アキラちゃんの父さんよ。すつごく強くてかつこよかつたんだから！」私の初恋だったかも？ と、甘酸っぱい思い出に自分で照れていたら……。

「悪いが、手加減できぬかもしれん」

「え？ 何が？」

「夜食の前に、ショーコを頂くとするか」

「えっ！ ちょっと、まっ……っ！！」

そういつてジエネは手を繋いだまま、私が小走りになるほどの歩みのスピードを上げてアパートへ向かった。

* 番外編 一週間 8 (前書き)

18歳以上の方は、先にこちらを一読いただけるとより一層楽しめる仕様となっておりますw

<http://ncode.syosetu.com/n60000t/3/>

(「鍵屋」さんが書いてくださいました)

話は遡り空手道場へ向かう前の出来事

「え、なに？」

「だから、彼氏に会わせてっていつてるのよ。今日街に行つたでしょ？ 翔子が超イケメンの彼氏連れていたって見かけた人がいたのー！」

うわあ……見られていたんだ。

ジエネとデパートへ行つて帰ってきてからというもの。カーテンも開けずに昼夜問わず、好きなだけ体を重ねてそのまま寄り添つて寝て。起きても気付いたらあらぬ場所へ手を這われ、ベッドから離してもらえずにいた……それこそトイレ以外。その小さな個室は断固として拒否した。いくら私でも許容範囲というものがあるのだ。

それ以外は常にどこか触れ合っていた。まさに蜜月。

お風呂でも食事でも手を繋いでいたり、腰に手を回されていたり。悪い気がしないどころか、私の方が触れていきたいくらいに繋がっていた。どっちもどっちだ。何よ、ジエネってこんなに甘い人だったの？ って思うほどに雰囲気柔らかく、視線だけで蕩けそう。

お陰で食事を作るのは難しく……よかった。本当によかったよ作つておいて。ジエネが寝ている初日になり大量に準備をしていたから。それらは温めるだけだったり、冷蔵庫から出せばすぐに食

べられる状態。本当だったら一週間でちよつとずつ食べていけばいいなんて思ったのに、ジエネの食欲の前ではあっけなく敗北した。

夕方買出しに出て帰って来た丁度のタイミングで携帯電話が鳴った。そして「会わせて」発言へと繋がったのだ。

「え、と……」

「だってさ、初めてじゃない？ 翔子が彼氏できたのって！ ね、いつなら大丈夫？」

高校時代の友人で、私が帰省するタイミングに合わせて毎回飲み会をセツティングしてくれる面倒見のいい子なんだけど、いかにせん押しが強い。もうすでに彼女の中で会えるのが当然として日程の調整に入っているのが素早い所だ。

「いつ、いつって、その……」

一週間だけこちらの世界にいられるけれど、その後の予定は全く立っていない。『扉』を開く修行次第では行き来が可能になるだろうけれど、ジエネは近衛隊長なのでそう簡単に抜け出せないと思う。

「じゃあ明日の夜は？ お願い、ちよつと顔出すだけでもいいから！」

「ちよつとだけ？ うーん……私もみんなと会いたいし……じゃあ、本当に顔出すだけね？」

そうして明日の夜七時主要駅近くの居酒屋と話がついて、ぱちんと携帯を畳みサイドボードに置いた。駅で夜会うのだし、その前に

折角だからデートをしたい。デート！ 憧れの！

そして翌日、腰が重くて足の普段だったら絶対使わない筋が痛みながらも、ジエネと二人で出かけた。日帰り範囲の近場で、バスと電車を使い継いで遊園地へ。見目もよく上背もあるから注目を集めるジエネだったけれど、本人はどこ吹く風で受け流す。敵意のこもらない視線は気にならないそうだ。

一緒にジェットコースターに乗れば「風の精霊に運ばれた時を思い出す」といい、お化け屋敷に入れば「闇の精霊の方が本格的だな」と若干ずれた感想を洩らし、シューティングゲームの様な乗り物ではあつという間にコツを掴み「弓矢よりも簡単に仕留められるな」と物騒なセリフで隣にいたカップルにぎよつとされた。

楽しい？ と無表情を張り付かせているジエネにおそろおそろ尋ねれば「こういうものだ」と理解はしているし、楽しい。しかし俺は、シヨーコが笑顔で横にいるという事実がなによりも嬉しい」なんて感情の読めない顔だとしても、じつと見つめられながら言われてしまつと即座に私の心拍数は跳ね上がる。

だから私もだよつて言葉で伝える代わりに、黙って手を繋ぎ指を絡めた。ジエネもきゅつと握り返し、そつと二人の開いた隙間を埋めた。

帰りは電車で、主要駅に向かって走り出す。ドアに近いベンチシートでガタゴト揺られるうちに、いつの間にかジエネに寄りかかって寝ていた私。相変わらず『恋人繋ぎ』で指を絡めたまま、体も気持ちも頼れる相手だからかな。

「着いたぞ」と声をかけられるまでグッスリと寝てしまった。

「うわっ！ ゴメンねジエネ、私寝ちゃった……」

「かまわない。ショーコの寝顔をじっくり見られたし、頼られるのは存外心地の良いものだ。それに 疲れた原因は俺に由来するんだろっ？」

「……！」

午後七時。 繁華街の喧騒は薄闇の深さに比例して大きくなっていく気がする。

高校時代の友達と飲むといたら、大体この店が選ばれる。 駅から程近く、料理も美味しい。 なにより常連だから多少の時間の融通などしてくれるありがたいお店なので重宝している。

「らっしゃいませー」

入り口の暖簾をくぐると、店員の元気な掛け声が飛び込んでくる。 カウンター席が左側に、個室風の座敷が右側をいくつか連ねていて、一番奥の席が大人数が入れる広間となっていた。

「マメ先輩ー、生中三つ追加ー」「了解！ あと他に注文あるー？」など合コンらしき集団も見受けられる。

店員に待ち合わせと友人の名前を告げれば、店の奥の広間へと誘導された。 その道すがら、きゃあつと黄色い声がかしこに上がるのは、まあジエネを見た女性ならあるよね。 私も同じ立場だったら同じ様に色めき立ち、同じ様な声をあげただろう。

「こんばんはー」

広間の入り口には暖簾がかかり、それをくぐって挨拶をかければピタッと賑やかだった声が一瞬止んだ。え、なに？ とキョトンとしていたら、今度は湧き上がるような声がそこかしこで上がった。

「きゃー！ 翔子久し振りー！！」

「誰、噂の彼、どこどこ?!」

「翔子元気そうで良かった」

「例の彼早く紹介してよ！」

「もー、一度に言わないでー！」

久し振りに味わう高校時代のテンションに、後から参加するとすぐには馴染めない。一旦落ち着いてと宥めながら、今回参加したメンバーをぐるりと見回す。

出入り口付近には、昨日電話をしてきて幹事の友人が座り、その周囲は女性メンバーで占められている。奥座敷には同じ学年の男性が始まって間もないはずなのに、大分ジヨッキが開けられていた。早いピッチで進んでいたようで、幾分顔が赤らんでいる。ザッと見た感じ二十人ほどで男女比はほぼ半々だ。そのなかで、どこか最近見たことあるような気がする男性がいたけれど、目が合うなり何故か真っ赤に染まり顔を伏せられてしまった。……えーと、誰だっけ？

「ねえ翔子。早く彼氏紹介してよ」

幹事の彼女がせっつき、ああ、と暖簾の向こうに声をかける。

「ジエネ、入ってきて」

そして私に続き広間に大きな体躯を若干縮めて入ってきたジエネを見て、何故かみんなポカンと仰ぎ見た。

「えーっと、こちらが、その……私のか、か、彼、氏の……ジエネシズです」

「初めまして」

彼氏、と言うのが初めてなだけにとっても恥ずかしく、どくどくと心臓の音が跳ねながらジエネを紹介し、そのジエネはというと落ち着き払った声色で挨拶をした。

ジエネは、奥座敷にいる男性の方に向かい、普段だったら絶対に動かない口の端を緩め、にこりと笑った。

「ど……ど……ど……ぞよろしく」

ガタ、と男性陣は持っていたジョッキをテーブルに置き、何故か一様に顔色を悪くした。逆に女性からは「きゃああっ！」と上擦った声が上がった。

「ちよっと、翔子！ どこで見つけたのこんなカッコいい人！」

「えー、えっと……」

「外国人よね？ どの国の人？」

「綺麗な目の色しているのね！」

「何歳なの？ やだ超カッコいいんですけどー」

「スポーツやっているの？ すっごい筋肉！」

「だから、一度に喋らないでー！」

質問攻めに合った私達は、ジエネと打ち合わせたとおりに話す。

『ヨーロッパ辺りの政府公認SPで、休暇を使って日本にやってきた。たまたま翔子の職場であるリゾートホテルに滞在していて、そこで知り合った。国家機密レベルなのでこれ以上は話せない』

というのが、ジエネのこちらの世界での設定だ。

異世界やら近衛隊長やらなんて言っても絵空事だ。もちろんあちらの世界を舞台にした小説は、子供からお年寄りまで知っている有名な話だけれど、まさかその世界からやってきたなんて信じてもらえるはずもなく、ちよつと疲れているんじゃない？ って心配されるのがオチだ。黙っているに限る。

女子に囲まれたジエネは意外にも丁寧な態度で質問に答え、そつがない。進められるままビールを飲み（好きだしね）、なんとも柔らかな笑みを浮かべて対応に当たっていた。

ちよつと、ちよつとー！ 笑顔安売りしすぎじゃないのジエネってば！ 私でさえごくまれな頻度の笑顔にそんな無駄打ちされて……ずるいつ！

むつつと内心の面白くない気持ちに、生絞りグレープフルーツサワーを流し込んだ。

「翔子、でもよかつたわ。私安心したのよ」

幹事が私の持つグラスにカチンと自分のそれを当てて、一口飲む。

「安心？ なにか？」

「翔子に、やっと彼氏が出来たこと」

「やつ……そ、うん。ありがとう」

「私達みんな安心したのよ。これで水面下の小競り合いがなくなるって」

何その小競り合いって……初耳なんですけど。

あまりに私がキョトンとしていたから、「ああ、そうね、翔子は知らないか」そう言っ、て、高校時代何があつたのかを教えてくれた。

やたらに綺麗な顔した男女の双子が同学年にいるらしいって噂が広まつたのは、それこそまさに入学式その日のことよ。私と翔子って最初は違うクラスだったじゃない？ 私、こんなにも早く噂が拡散するだなんてよっぽどの事じゃない！ って思っ、て、早速見にいっ、たの……ああそうよ？ 初日やけに廊下に人が溢れてい、ると思わなかつ、た？ あれっ、て、翔子と翔君を見るためよ。

翔君は……うん。まあ……その……。ええ？ 何の事かっ、て？

うーん……もう時効よね。確かに翔君って顔はいいんだけどさ、それっ、て『黙っ、てれば』なのよ。カッコイイっ、ていうよりも、どこか人好きのする笑顔が張り付いてるから、折角の顔のよさが隠れちゃうし。何よりよく喋るしやること規格外だし……自然とモテ率下がるのよ。

それにさ、言いくいんだけど翔子への恋愛フラグを叩き折つ、たの翔君なのよ。ちよっ、と、落ち着いて落ち着いて！ 順を追っ、ていうから！

まずさ、翔子っ、てホントに純情可憐天然美少女っ、て絵に描いた様な子でさ。いいじゃないの、本当の事よ。それで、翔子の事いいな！ っ、て男どもが多々いたわけよ。でも翔子っ、てば下校時刻になればすっ、とんで家に帰っ、ちゃうし、土日はバイトしてたし、隙がないの。

まあ興味も無かった様だからそれはそれでいいんだけど。でも問題なのは男子よ。いつ告白しようか、いつ想いを伝えようかっていうのがワラワラいたはずなんだけど……日が経つにつれ、一人減り、二人減り……いつの間にか、一定の距離を取っていたの。翔子は気付いていなかったかもしれないけれど、当然話題になったわ。何でこんな分かりやすく引いたのかって。んで、私達はその中で一番翔子を狙っていて分かりやすく萎んだ人に聞いたの。そしたら。

いやっ、俺何も知らない何も見ていない何も聞こえない！

そういつて逃げようとするから、無理矢理答えさせたわ。どうやら翔君がそれこそ各個撃破で潰していったみたいよ？ 方法は各個人で様々らしいけど。彼の場合は精神的に追い詰められたって顔を真っ青にしていたわ。他に何人かに当たってみたけれど、力づくつてもあつたわね。『翔は相当なシスコンで、姉に手を出したら末代まで祟られる』ってあながち間違いじゃない噂も広がったわ。

……き、聞かなきゃよかったかも。私全然知らなかったよそんなことがあつただなんて。翔の暗躍がなかったら、私ひょっとして高校時代彼氏ができていたかも？

うーん……でも、今となつてはありがたいかも。だって、隣にいるのは。

「今日さ、平日にもかかわらずこれだけ急に集まつたつてのは、女子は翔子の彼氏を見たかつたからで、男子は……まだ足掻くつもりだったからよ。でもあの様子見ればコテンパンね」

そう顎で指し示す先は、まるでそこだけ照明を落としたかの様に、一様に深く沈んでいた。

今日は楽しかった。また飲みましようね？ ジエネシズさんも良かったら一緒に

そういつてみんなと別れた終電間近。この時間ではバスもなく、電車だと結構な距離になる為タクシーを使った。ジエネを奥に、私はそれに続いて後部座席に座る。

車内で、ジエネに「随分愛想が良かったじゃないの」と、ヤキモチなのは分かっていたけどつい口に出さずにはいらなかった。

そんな私に、ジエネはポンポンと左手で私の頭を撫で、そのまま手を下ろして肩を抱き寄せてきた。

「まあな。ショーコの友達相手だからな」

「私の友達相手だから？」

「ああ。それに……」

「それに？」

「牽制の意味も込めて」

低く囁かれた言葉とともに、つむじにキスが落ちてきた。

うわっ、ちよっと、運転手さんもいるのに！

意味を聞きたくても、ジエネはそれ以上言うつもりがないらしく、家までただひたすら体を寄せ合って到着を待った。

* 番外編 一週間 8 (後書き)

アルファポリスさんの方で、ファンタジー大賞に応募しました。
完結しているものの、ちょっと参加w

そして妄想部は本日18時更新です。

<http://mypage.syosetu.com/144526/>

けたたましい携帯の呼び出し音で目が覚める。

昨夜は飲み会だったし、家にたどり着いてからは素直に寝かせてもらえるはずもなく、結局外が明るみ始めてから眠りに落ちた。

数回の呼び出し後に切れた携帯電話はベッドボードに置いてある。それを掴み、けだるい体を起こして画面を見れば見知った名前が履歴に記されて……。

「んん……サヤカ？」

リストラになっちゃった前の職場の同僚であり、親友。

こちらの世界に来てから何度か連絡は取り合っていた。それこそ取り留めのない話からサヤカの恋人とのノロケ話から、翔子の今後について。

ジエネが来る前の一ヶ月、前半はそれなりに明るく話せたし楽しかったけれど、後半あまりに心細くて、不安で、先のことなんか真っ暗で……徐々に返事も暗くなった。そんな微妙な変化をサヤカは分かっていた、「話せないことならそれでもいいよ。でも辛いなら声に出さないと。言えるまで、私は待つてるからね？」そう言って、こちらの気持ちを押し量り、私が落ち着くまで待っていてくれたのだ。

「シヨーコ？」

「あ、ゴメンね。電話があって……」

そういいながら発信ボタンを押す。この時間、といつても大半の社会が動き出す時間だ。リゾートホテルに勤めるサヤカにしては珍しいタイピングで電話をしてくるから、よっぽど何かあったのかと心配し、即座に折り返す。

二回目のコール音で繋がった。あちらも再度掛ける所だったのかもしれない。

「もしもし、サヤカ？」

「あつ、翔子！ ごめんねこんな時間に。いま大丈夫？」

「うん、平気よ。何かあったの？」

するとサヤカはうーんと唸り、言うか言つまいか迷うそぶりを見せた。けれど結局伝えなければならぬ内容だったようで、躊躇いながらも口を開いた。

「それが……ショーコ、なにか忘れ物した？」

忘れ物ってなんだろう？ 私は荷物が多いほうではない。現に引越しいつても大きなバッグ一つで、それを持って寮を後にしたのだ。そう伝えると、サヤカは「落ち着いてよく聞いてね？」と大きく息を吐いた。

「手島ボンがさ、夜勤明けの私に翔子の物を預かっているって言うてきたのよ。翔子と仲がいいの知ってて伝えるのは分かるけれどさ、だったらそれ私に渡すなり郵送するなりすればいいじゃない？ でも言うだけ。おかしいわよね？ つまり取りに来て私に言わせたいんですかって聞いたわ。そしたらなんていったと思う？ あいつ！」

手島ボンというのは、リゾートホテル支配人手島の息子に対しての隠語だ。当時の怒りを思い出してか、カッカしながらサヤカは続きを話す。

「理解が早くて助かるよ、ですってー！ ああ腹の立つ！ 二代目ボンボンって大体親の会社潰すのよ！！ もーだれか、外部の人に継がせてちょうだい！」

元々サヤカはオーナーの息子にいい印象を持っていない。一番のキツカケは、私が彼を振ってからの風当たりの強さに憤慨しての事だ。

元々弱い立場で断りにくいのを分かった上でホテルの裏手に呼び出し、付き合ってくれと告白してきた。けど私は気持ちもないのに付き合うだなんて、そんな不誠実な行為はどうしても出来ない。断った翌日から、任される仕事が無端に減った。いつも私がやっていた配膳や受付業務、部屋の案内など表に出る仕事がなくなり、調理場やベッドメイキング、清掃などに回された。あからさま過ぎる私は軽く呆れただけだったけど、サヤカの怒りっぷりはすごかった。見た目はふわふわして、まるでパステルカラーで彩られたような容姿をしているのに、中身は……本人の名誉の為に言うのも憚れるほど、熱い。

ふっざけんなボンめ！ パパの後からじゃないと何も出来ないくせにこういふことばかり気が回ってアホかー！

一喝してやるわ！ と、本当に駆け出し、それを慌てて止めたのは私だ。猪突猛進なサヤカをどうにか宥めて血祭り一歩手前で事を

収めた。……手島ボンにとって私は命の恩人だと思う。心の中で一方的に恩を着せておいた。

それに、私は元々裏方が好き。家でずっと家事をやっていたせいもあり、いかに居心地良くこのホテルでお客様に過ごせていただけか。その気持ちを持って仕事をするのは家事と似ていて性にあってている。従業員の皆も、仕事を割り振れないのをこっそりとだけ心配してくれた。厨房の料理長はどうせなら厨房だけで働かないかと言われてしまったけれど、専属になる前にまだ色々経験したかったので丁重にお断りを入れた。

緑の気配が濃くなり朝晩の涼しさを除けば、夏の気配を感じる風が吹く。

いつもの時間に寮を出てホテルに出勤した私へ、突然それは告げられた。

リストラ、ですか。

すまんね。君はまだ若いから再雇用も可能だろう。しかしこの職場はそれが厳しくなる人が多々いる。飲んでくれ。

このことにもサヤカは爆発した。今回のリストラは五名だけだったが、サヤカはその候補に入っていない。それにも噛み付いた。

「つたりまえじゃないの！ これ絶対翔子への仕返しよ。翔子を辞めさせて、私を残すだなんてあてつけもいいところよ。しかもなに、今度は系列ホテルを紹介だあ？ 目の届く所に置いて、ほどばり冷めたら俺のお陰」とか言っちゃってまた翔子を狙う気よ？ 見え透いた手え使うんじゃないわ全く！」

しかし、業績不振は予約台帳を見れば明らかだし、何より私はサヤカよりは身軽だ。バッグ一つで移動できるし、母親は仕事で半月

以上家を空けてるし、弟の翔は県外へ就職してるし。

サヤカはと見れば、実家はこのホテルと同じ市内で、彼氏は出入りの業者。比べるまでもなく、適合者は私だ。

素直に分かりました、と頷きサツサと荷物をまとめて出る。同情貰いながら居座るなんてそこまで神経太くない。すでに系列ホテルに就職できるよう、こちらのホテルから話は通っているらしいし、書類やその他諸々送ってもらう手筈も整えてくれた。あとは面接を残すのみで、急いでホテルを後にした。　　ら、何故か異世界へ呼ばれちゃったんだけど。

何があるか分からないわ、全く。

手島ボンは結局何が目的なのか全く見当はつかないけれど、何かしら用事があるのだろう。ひよっとしたら書類関係かな？ 提携ホテルに送られるはずだった書類は、自宅に届く事もなく宙ぶらりんになっていたから。

次の就職先を潰されたけれど、今となっては異世界に行く身。下手に就職もしていたら即辞める訳にもいかないので、丁度良かったかとチャツカリ思った。

行って帰ってくるだけなら半日もあればいけそうだ。時計を見ながら移動時間を計り、サヤカにもそう伝えて電話を切った。

「シヨーク、どこかへいくのか？」

いつの間にかジエネも上半身を起こして背後に体を寄せ、太くて逞しい腕は私の首と腰に巻かれていた。やわやわと肌を撫でられ……って、服着なきや！

「ジエネ、ごめん！ 今日ちょっと出掛ける！」

「どこへ？」

「えーと、前の職場。また電車に乗って忘れ物を取りに行かなきゃなの。」

言いながら、ジエネの腕をすり抜けてクローゼットを開ける。衣服を身に着けつつジエネは連れて行っていいものか迷った。もちろん一人で残しても大丈夫だろうが、私はひと時といえど離れていたくないと思っている。あちらの世界に戻ったら、このように甘い時間を過ごせる時間があるかどうか不明なのだ。

だったら ホテルにあるレストランのランチを、客として一緒に食へに行けばいいかな、と考えた。あの料理長の作る美味しい食事をジエネと一緒に味わいたい。

「ジエネ、一緒に行ってくれる？」

「勿論」

ジエネも身なりを整え、バスと電車を乗り継いで観光名所でもあるリゾートホテルへと向かった。

電車、といっても新幹線で。

翔から軍資金にはまだまだ余裕がある。必要な物を必要なだけ買う私には余る金額なので、貯金……とも思っただけれどジエネが一緒にいる今、思い切って使いきってやろうと思う。

バスで主要駅まで向かい、そこから新幹線に乗り込む。朝の首都圏へ向かうラッシュは落ち着き、長いホームは乗車を待つ人もそう多くはない。まあ、のぞみが止まらないからそんなものかもしれない。

いけど。

約四十分新幹線に乗り、そこから更に電車に乗り換え着いた先は
……。

電車、といつても新幹線で。

翔から軍資金にはまだまだ余裕がある。必要な物を必要なだけ買う私には余る金額なので、貯金……とも思ったけれどジエネが一緒にいる今、思い切って使おうと決めた。

バスで主要駅まで向かい、そこから新幹線に乗り込む。朝の首都圏へ向かうラッシュは一通り落ち着き、長いホームは乗車を待つ人もそう多くはない。まあ、のぞみが止まらないからそんなものかもしれないけど。

約四十分新幹線に乗り、そこから更に電車に乗り換え着いた先は。

静岡県伊東市にある、伊豆高原。

静岡県東部に位置する伊豆半島の観光地のなかの一つであり、山あり海あり気候も温暖ということで首都圏からの観光客はもとより有名企業の保養所、別荘、ホテル、そして一般に売り出された別荘貸別荘があちらこちらに点在している。温泉も湧き、観光施設もありのリゾート地だ。中でも大室山という火山だった標高五百八十メートルの山に登って、火山口周りの稜線をを歩く『御鉢巡り』をしながら望む景色は最高に気持ちがいい。登る、といつてもリフトがあり、往復それに乗って移動するのだ。毎年冬に行われる山焼きで山全体が丸坊主に焼かれる。よって大きな木など生えない草山は、まるで人工物を思わせた。

サヤカとシフトが違う一人だけの休日、ここに登って頂上にある

売店で牛乳を一本飲むのが楽しみだった。視界に入る大室山を眺めながら、帰りにジエネと寄っていきこうと心に決める。

駅から乗ったリゾートホテルの送迎バスに揺られながらそう思うと、これから会わなければならぬ相手　手島に対しての陰鬱な気分が少しだけ軽くなれた。

程なくして着いたのは、リゾートホテルの正面玄関。

ほんの一ヶ月前まで勤めていた……というのはこちらの世界だけで、デイスカバランチという世界を旅していた私には非常に懐かしい思いに駆られていた。嫌で辞めたわけではないので、どれもこれも愛着がある。勿論同僚も。

送迎バスの運転手のおじさんは、定年退職した後に専属の運転手へと変わった優しい人。正面玄関にいるドアマンのイケメンお兄さんはちよつとごつい体をしているんだけど、それは警備も兼ねてだと言っていた。フロントのお姉さん達はいつも隙もなくビシッと身を固めているけれど、お客様対応の時は柔和な笑顔を浮かべてご案内をする格好いい先輩だ。

それぞれが皆私に会うなり、「良く来てくれたね！」と歓迎してくれた。私がいストラされたのは周知の事実で、それによって私がもう二度と寄り付いてくれないかもと話していたらしい。そして傍らにいるジエネを見て、何故か「そういうことか」と納得された。ええっ？　どういう意味なのそれって！

「翔子ちゃん、良く来てくれたわ」

フロント近くにいたコンシェルジュの鳥沢さんが、私たちに気付いて声をかけてくれた。

鳥沢さんは元々地元観光協会に勤めていた人で、結婚出産で一旦は仕事を辞めていたけれど、地元が顔が効く人なので、ここのオーナーが是非にと子育てがひと段落した鳥沢さんを引っ張ってきたの

だ。優しい物腰で客に無理難題を吹っかけられても臆することなく対応し、例えそのものが用意出来なくても代替で済ませられるようお客様に提案できる手腕は、鳥沢さんだからこそ。

就職して寮に入り気を張りすぎていた私を、優しく解してくれたのもこの鳥沢さんで、私が大好きな一人である。

「鳥沢さんお久しぶりです！　ろくに挨拶もしないまま辞めてしまつてすみませんでした」

「そうよ翔子ちゃんたら、サツサと出て行つてしまつんですもの。こんな形で辞めさせられたんだから、せめて送別会ぐらいパーツとしたかつたわ」

チェックアウトのピークも過ぎ、ランチタイム手前の時間でよかつた。凜とした立ち姿の美しい鳥沢さんが顔を顰め不満げな顔を露わにするなど、ありえない光景を客に晒す所だつた。

「本当は正面からでは悪いと思つたのですが、従業員じゃなくなつたし……」

元従業員という微妙な立場を計り、混雑のタイミングをずらすなどしてみただけれどそれも鳥沢さんにとっては「他人行儀過ぎる！」と怒られた。

「いい？　ここの従業員はみんな家族なの！　色々配慮できる立派な娘よ。それをあの勘違い坊ちゃんに勝手をやるから！」

ヒートアップする鳥沢さんを宥め、サヤカを呼び出してもらう。そしてランチを食べたいと申し出ると、「嬉しい事言ってくれるじゃない、料理長も喜ぶわ」と受話器を手にする。内線で予約を取り、

改めて私と向き直ると、それまで少し後方で私の邪魔になるまいと気配を消していたジエネによく視線を向けた鳥沢さんは「まあ、まあ、まあ！」と私とジエネを交互に見やって両手を一回叩いた。

「翔子ちゃん！ この方ひよつとして……！」

「え、あの、か、彼氏、です」

「初めまして。ジエネシズ・バルドウと申します」

相変わらず彼氏という単語につっかえる私の傍に、控えめながら並んだジエネはそう自己紹介をした。すると上気した頬で鳥沢さんはがしつと私の手を胸の前で掴み、目をキラキラさせてこういった。

「そっか、そっか！ 翔子ちゃん、やだ嬉しいわ！ ここの式場で彼氏とけっ……」

「きやあああつ……！」

慌てて鳥沢さんに掴まれた手のまま、引きずるようにしてフロント傍にある簡素なパーティーションに区切られた影に滑り込んだ。

（ちよ、ちよつと鳥沢さん！ ちちち違いますって！）

（あら私てつきりウエディングプラン使ってくれるのかと！）

（……っ……！）

「翔子！ ……んん？ 鳥沢さんも？ 何やっているのこんな所で」

後から呆れた口調で聞こえてきたのは。

「どうしたの顔真っ赤にして」

パーティーションからひよこつと顔を出すのは、親友のサヤカだった。

「サヤカ！」

「翔子！」

パツと鳥沢さんの手を離して、私はサヤカにぎゅっつと抱きつく。これはサヤカと恒例の挨拶でもあるのだ。

「生身の翔子と久し振りに会えたー！」

「うんうん！ 嬉しいっ！ サヤカー！」

一ヶ月振りとなる再会の挨拶を交わした所で、はた、と思い出す。

しまった、サヤカにジエネの事言ってない……っ！

* 番外編 一週間 10 (後書き)

大室山

<http://www.i-younet.ne.jp/oh-muroi/>

牛乳美味しいです。リフト乗り場の焼きたてお菓子の匂いに誘われ
つい買ってしまおう。

アルファポリス大賞エントリー中です。

鳥沢さんは、手島ボンに連絡を取るのもその間ロビーで待っていて、と言い残しフロント奥に行った。私はとりあえずロビーにあるソファに座ろうとサヤカに言い、それから……ジエネにも声をかけた。

「ジエネ、ちょっとこっちの席に座ろう」

「分かった」

「え、ちょ……翔子！ ええっ??」

ジエネを誘導し、テーブルを挟んで向かい合うソファ席にジエネと並んで座る。サヤカはあんぐりと口を開けたまま私達から目を逸らさずにソファへ腰掛けた。

「ねえ、翔子？」

「あー……うん。かれ……しの、ジエネシズよ。ジエネ、こちら渡邊サヤカ。私の大事な友達なの」

彼氏、の部分で突っかかりながらもジエネを紹介する。ううう、照れくさいな。

ジエネは私の初めて出来た恋人であり、サヤカにこうやって次元を超えて紹介できる日が来るとは思わなかった。

「初めまして」とジエネはまたも微笑を上乗せして挨拶をすると、サヤカはハッと我に返ったのか私をギロツと睨みつけた。

「翔子？ 私聞いてないんだけど」

ひっ！ 怖いよっ！！

私は再び、ジエネのこちらの世界での設定を語る。

『ヨーロッパ辺りの政府公認SPで、休暇を使って日本にやってきた。国家機密レベルなのでこれ以上は話せない』

間違いじゃないんだよ、ある意味ね。

ヨーロッパ辺りの雰囲気似た異世界のレーンという国で、王様を守るための近衛騎士というある意味SPの様な職種。働きすぎて無理矢理取らされた休暇で日本にやってきた。

次元を超えて世界を翔けるなど国家機密も何もない。その点について実際体験してみない事には信じられない話なので黙っておく。日本語ペラペラに聞こえるのも次元を超えた副産物というか、再構成されるから、とは翔に聞いたけどそれだって素直に言えるわけではない。工作上必要だからとしておく。昨日友人達に語った『職場であるリゾートホテルに滞在していてそこで知り合った』は、まさにここだから言えるはずもなく後でまた……とその部分も曖昧に誤魔化した。

こちらに戻った当初は、いつ迎えにくるのが分からずいたからジエネの存在を話せなかった。後半なんてもっと悲観していたから余計に。ひよっとして自分はもうあちらの世界に行けないのではないのか、ひよっとしてもう要らない存在になったのじゃないか。ジエネともう二度と会えないのではないか……負の考えは留まる所を知らない。考えれば考えるほど深みに嵌り、心配するサヤカとの連

絡を絶ってしまったほど。

今回の連絡がなければ、そのサヤカに報告することなくあちらに帰るところだった。危ない危ない。

ふうん……と半目で私をじっと見ながら聞くサヤカは怖い。違った。とても、怖い。見た目とても可愛らしくアイドル然としているからそうは見えないが、気を許した相手にはとことん辛辣な言葉を並べるのだ。折角想いが通い合ったサヤカの彼氏よがんばれと、こんな場面なのに心の中で応援してしまった。

「私に内緒にしてたんだ？　せめて彼氏が出来たって一言欲しかったな」

「う……ごめんね？　ちょっと事情があつて……」

「ショーコを責めないでやって欲しい。私が原因で、ショーコを不安にさせたのだ」

ジエネが膝上においていた私の手をギュツと握って庇う。まったくそれ逆効果だし！

案の定サヤカは「そう、そんなにラブラブなのに、私には黙つたのね」と黒いオーラ出しながらその繋がれた手を凝視する。きやーやめてー！

だけどサヤカはそれ以上攻勢に出ることなく、ふうつと息を吐いてソファの背に体を預けた。

「でも安心したわ。結局私は翔子を庇えなかつたし、仕事や場所を言い訳に傍にいてあげられなかつた。電話の向こうで元気を無くしていく翔子を、口だけは心配するくせに今回も何も……出来なかつたもの」

「サヤカ……」

「翔子の一番が出来たじゃない。一番大事な人。よかったわね、翔子」

「うん、ありがとう」

「だけどやっぱり一言欲しかったわ」と付け加えるのを忘れないサヤカは流石だ。そこへ手島と連絡が取れたらしい鳥沢さんがやってきた。

「翔子ちゃん、お昼過ぎに第二会議室で待つようにですって。全く自分都合もいいところね！ 今何やってるか知ってる？ テニスよテニス！ そのコート勝手に使って手下と遊んでいるのよ」

「やだー、あの人『ド』が付くほど下手糞なのに！ ヨイショしてくれる手下がいるからいい気になってるのね全く！ 仕事しろっての」

「ちよっと、サヤカ声大きいって」

相当腹に据えかねているのか二人ともヒートアップしてしまい、私が止めに入るまで他にも色々不満が噴出した。鳥沢さんなんて本来この様な事を言う性格でも立場でもない。よっぽど普段から目に余る光景なのだろう。

とにかく昼過ぎまでは時間があるらしいので、レストラン行く事にした。サヤカは夜勤上がりで明日は休みということもあり、一緒にランチを食べようと誘った。

すると「彼もいいかな？」といって、ここのレストランに卸している食材業者の彼を呼び出す。本当はこの後デートだったらしいけれど、折角翔子が来たからとサヤカの彼も一緒に四人でテーブルを囲む事になった。

開店すぐとあって、一面ガラス張りの窓際でしかも料理が取りやすい特等席に案内された。された、といっても働く人は皆知る相手です、特別にねと笑い、人差し指を口に当てる仕草をして仕事に戻った。

ここのみんなは本当に優しくかった。今でもその空気に混じりたい気持ち湧くほどに。

ランチはバイキングスタイルの和・洋・中、そして地元ならではの料理が揃っている。好きな物を好きなだけ食べられるけれど、残すのはマナー違反だとジエネに教えて共に並べられた料理を皿に移す。

海が近いだけあって、海鮮物がメイン。真鯛のカルパッチョやお刺身、鮑のバターソテーや地元野菜をふんだんに使ったシーザーサラダ……数え切れないほどの料理が並び、どれもこれも美味しそうで目移りがする。でも私が一番食べたかったのは金目鯛の煮付け。ほわほわの白身が甘く煮付けられていて、これがまた堪らなく美味しいのだ。

一度取り方を教えて、あとはジエネのペースに任せた……ら、どれも満遍なく空になっていくという恐ろしい光景が目に入る。うわっ、料理長さんごめんなさい。

その良く食べるジエネの姿をサヤカは「よく……食べるわね」と驚き、その彼氏は「いや、いつそ気持ちがいいよ」と妙な方向に感心した。

合間に、それはそれは根掘り葉掘りジエネとの間柄を聞かれたけ

れど、話していい部分とファンタジー過ぎて言えない部分がある。

『自宅に帰宅した所、翔が問題を起こしてその始末に向かった所ジエネがいて、共に行動するうちに好きになった』

く、苦しい……けど、これも間違いではないよね？

言える範囲は狭いけれど、翔が、と言ったところで「ああ……」と納得されたのはどうかと思う。サヤカは翔と会った事があるからかもしれないけれど。

美味しい料理とお腹いっぱい食べ、デザートに特産のニューサマーオレンジを使ったパウンドケーキにバニラアイスを添えて食べる。甘酸っぱくて爽やかな風味がとても美味しい。自分でもよくこのオレンジを使ってジャムを作ったものだ。

コーヒーを飲みながら、私が手島に会う間ジエネはどうしているのか相談する。流石にそこまで一緒に付いてきてもらうなんて出来ないからね。

すると、サヤカの彼氏が提案をしてくれた。

「だったらここの大浴場に行こうよ。露天風呂とか気持ちいいしね」

「じゃあ案内してあげて？ 私、男風呂入りたくても入れないから」

「入りたいのかよ」

「勿論よ」

「だが断る！」

いつもの掛け合いが始まり、私はそれを微笑ましく見ることが出来た。ほんの少し前は、こういったノロケも落ち込む原因となったのに、ジエネが来た途端笑えるのだから現金なものだ。

ジェネはサヤ力達に任せて行動を別にする。まだ時間はあるのでどうしようかな、と思索していたら鳥沢さんが「皆の所顔出して来なさいよ。私が許可するわ」と言ってくれたので、お言葉に甘えて懐かしい職場を回る事にした。皆気のいい人ばかりで歓迎してくれるけれど、逆にそれが胸につまる。

私、もうちょっとここで頑張ればよかったな。

誰もが表立って手島に抗議する事はなかった。間違いなく私のように切られるのが分かっている為、生活が掛かっている人にとってそれは自分の首を絞めることに他ならない。

私自身もそこまで人を巻き込むわけにはいかないのです、サツサと退職を飲んだのだけだ。

約束された時間が来た為、従業員用のドアから第二会議室を指す。勝手知ったる通路を右に折れて階段を上がり、二階北側にある第二会議室と書かれた部屋の前で立ち止まる。

ここにあの人がいるんだと思うと気が重い、早い所済ませてしまいたい。

すうつと息を吸い、軽くノックして名乗る。

「失礼します。海野翔子です」

「入れ」

少しの間があき返事が聞こえたのでそろりとノブを回して中に入

ると、整然と並べられた机の上に軽く腰を掛けた男がいた。

手島啓介二十六歳。肩書きは特にないが、次代オーナーと自称する厄介者でもある。手島の父親がオーナーで、とても優れた経営をするものの自分の息子の管理は出来ていなかった。父親が出張などでいないと、鬼のいない隙にとばかりこのホテル内を好き勝手に使うなど、評判を落として廃業に追い込む典型的なパターンでもある。

「久し振りだね、元氣そうだなによりだよ。あれからもう一ヶ月経つのに、僕は君との思い出が忘れられないでいんだ」

私を手島に持つ思い出は一つだけなんだけど。そんな思い出話をするためだけに呼び出したの？

「あの、渡す物って何でしょうか？」

くだらない話ならさっさと切り上げたい。しかし手島はニヤリと人の悪い笑みを浮かべて、裏庭が見える窓辺へ寄った。

「僕が君に交際を申し込んだのはあのベンチだったな」

促され仕方なく距離を取りながら同じ窓辺に立つと、眼下にはベンチが見えた。

去年の秋だったか　この手島に呼び出され、告白をされたのだ。当時私は、オーナーの息子ということもあり断りづらく感じたものの気持ちに応えることはできないので、正直にお付き合いはできません、とお断りをしたのだ。

そんな話を懐かしく思うほど私は手島に気持ちを一つも置いていない。再度用件を尋ねれば「つれないな。でも少しくらい話に付き

合ってくれてもいいだろう?」そういつて、苦笑しながら近くの机にあった茶封筒を私に寄越す。

なんだろうと不審に思いながら中身を改めると、そこには雇用保険被保険者証、源泉徴収票、その他次の就職する予定だった系列ホテルに送られる私に関しての書類が纏めて入っていた。

本来これらは仕事の話が無くなってすぐに私の自宅へ送られるはずだった。なのにどうしてまだここにあるのか……いや、私も確認しなかったから悪いんだけども。

そして、何通かの手紙が束になって入っていた。これは？

「君宛の手紙だよ。封をしてあるのもあれば、部屋に備え付けのメモを使ったものまで。利用客からの君を惜しむメッセージが入っているそうだ」

わ……嬉しい! 剥き出しのメモを見れば『海野さんと会いたかったからまたホテルに来たのに残念です。いつかまた戻ってきてくださいね』とか、『あなたのサービスでとても居心地の良い休暇が取れました』など、身に余る言葉が書かれていた。

「……これを渡さなければ、また君がここへ帰ってきてくれると思っていた」

手紙を何枚か捲る私に、手島は呟きのような言葉を溜息と共に零した。

「気付いていただろう? 断られた腹いせに僕が手を回して君の仕事を奪っていた事を。あの時君はすぐに僕の元へ来て懇願すると思っていたんだ。お願いだから許して下さいと頼みにね……だが、来なかった。丁度リストラの話があって君を指名したのも僕だ。今度こそ来るかと思っただけれど、君はあっさり退職を飲み次へと行こ

うとするからそこも潰し……なんなんだ君は。どうして僕に『助けて下さい』の一言が言えない？ そんなに僕の物になるのが嫌なのか！」

言うわけないでしょう！

喉元までせりあがった怒りの言葉を無理矢理飲み込む。手島の語る内容はまるで子供だ。いい大人のくせに、年齢ばかり重ねてそのあたりの分別が全くついていないようだ。レーンの王、マルちゃんの方がよっぽど大人だよ。一国を預かる身と比べるのは無体な話だけれど、この目の前でベラベラと喋る小さい男を見てなんだか可哀想になってしまった。黙る私に手島は益々自分に酔いしれ、私に言葉を投げつける。

「僕がどうして君に手を入れたいかわかるかい？」

知るわけがない。どうせ手近にいて思い通りになりそうな相手だとか、そんなくだらない理由じゃないかと当たりをつける。視線は手島から逸らしたまま窓を開け、外の空気に触れながら風に揺れる木々を眺めた。

「まあ、単純な理由さ。君は見た目もいいし客からも従業員からも評判が良いからな。君にホテル経営を任せれば僕は一生安泰だ。それに君にとつてもメリットがあるだろう？ リゾートホテルオーナーの妻という座を苦勞せず手に入れられるだなんて、逆に僕に感謝して欲しいくらいさ」

どうしよう……折角美味しいもの食べたのに気分が悪い。こんな言葉を聞かされて。

「気に入らない人間は排除すればいいし、給料もうんと取れば良
いさ。それで宝飾品でもバッグでもなんでも好きに買えばいい。わ
ざわざこの僕がこんなオイシイ話を持ちかけているんだ。乗らな
いわけがないよな？」

……だめだ、本当にバカだ。

私は前にマルちゃんに言ったのをこの手島ボンに教える気にはな
れなかった。説教する価値もない。言った所で一ミクロンも理解で
きるとは思わなかったから。

「お断りします」

「そうか、受けてくれるか……えっ？」

今度はひたりと視線を合わせて大きな声で、はっきりと口にする。

「お断りしますって言ったんです。私はもう二度とあなたと関わ
りたくありませんから」

ぬるい。ぬるすぎるのよこの人。

「何もかもあなたの思い通りに動くと思っただら大間違いです。物
事には権利と義務、需要と供給、色々やったからこそ手に入れられ
るものがあるんです。あなたは何をしてきましたか？ このホテル
次期オーナーを名乗るあなたは、何が出来ますか？」

それが分からない内は名乗る資格も無いわ。

受け取るものは受け取ったし、本当に大好きな職場だったけれど
二度と来ることは無いだろう。手島がいる限りは。

踵を返して出入り口に向かおうとしたら、さっと横に手が伸びた。

手島が私の進路を阻む。

「何のつもりですか？」

「お前……っ、ふざけんなよ！ この僕がこんなにも下手に出てやったのに何のつもりだ！ 僕を誰だと思っっている！」

「自称次期オーナーでしたね？ 自称が取れたらご立派ですけど、あなたのその言葉、下手に出るといふ態度ではありませんよ。それに私はもう辞めた身です。あなたに従ういわれはありません」

じり、と後に下がるが、踵が窓際の壁に当たった時点でこれ以上逃げられないことは分かってしまった。手島はその距離を測った上で更に詰める。危機感を募らせながらも、私は最後通牒を下した。

「それに私は、もう決めた人がいますから」

「……っ！ だったら力づくでもモノにするさ！」

考えが浅く短絡的なお坊ちやまの考える事などたかが知れている。こんな人の気配のない建物奥の第二会議室に呼び出す時点で、最後にそう出るとは予想していた。なるべく穏便にと思っていた私が、大胆にも相手の火に油を注ぐようなセリフを言うのは勿論勝算あつての事。

飛びかかる手島を横へのステップで交わし、大きく開いた窓枠に足をかける。

「さよなら！」

「なっ……！ 待て！」

手島の制止の声を聞かず、私は勢いをつけて窓の外へ大きく躍り出た。二階の部屋から地面まではそれなりに距離がある。このまま落ちて着地したとて無事にはすまないだろう。けれど。

「ジエネ！ 受け止めて！」

私が叫ぶその先には、ジエネが居た。

手島と窓の外を見たときはいなくなっていたけれど、手島が視線を外したあたりでジエネとサヤカの彼氏がやってきたのだ。それを踏まえたと上で、窓枠を越えた。

必ずジエネは助けしてくれると信じているので、くるりと受け止めやすいよう背を地面に向けて、重力に任せた。

そして、それは叶えられる。

ふわり、と抱かれて落下の速度が和らぎ、ややあつて着地の衝撃が体に伝わった。実際には浮遊感がとても怖くて目をぎゅっと瞑っていたけれど、私の体を支える頑丈な腕や胸板が、そして唯一絶対と安心できる匂いが ジエネだと分かって力を抜いた。

「全く……ショーコにはいつも驚かされる」

「あは、ごめんねジエネ」

愛しい人の腕の中、ふにやっつと蕩けてしまう。

ジエネの胸元に顔を摺り寄せながら、ああそうだと目線をあげる。そこには顔をこわばらせてこちらを凝視する手島が、窓枠から身を乗り出していた。

突然窓から飛び降りたから驚いたんだろうけど、どうも手島が見ているのはジエネだ。顔を会わせるのは初めてのはずなのに、どうして顔色が青を通り越して白くなっているのだろう？

ジエネをと見るけど、表情はこちらから見えない。ジエネ？ と呼びかけると、「さあ、サヤカさんが待っているのだろう？ 行くぞ」と幾分早めの歩調で建物の表に歩き出した。

サヤカの彼氏がすこし遅れてロビーに着いた頃には、私も幾分冷静さを取り戻せていた。まず人目に着く前に降ろしてもらい、すでに待っているサヤカの冷やかしの視線から身を守れた。

だけど、さっき私がやってしまった行動はとても誤魔化せない。なにせバツチリとサヤカの彼氏が見ていたからね！

「で、何があったの？」

彼氏の様子から、ただ事ではない出来事があったようだと思察したサヤカは、心配する声を滲ませながら私に聞いてくる。

私は細かく言えばサヤカが切れるのを分かっていたので、所々端折りながら纏めた。

「まずは書類関係を貰って、あとは……そうね、まだ諦めていなかったよ。キツパリとお断りしたの。それだけよ」

「諦めてない……今回の呼び出し、翔子が目当てだったのねボン

は！」

「やっ、それ言っちゃ駄目」

「シヨー」が目当て、だと？」

「そうよ。あのお坊ちゃんは翔子にご執心なんだから！」

剣呑な雰囲気の子エネに気付かず、サヤカは過去私がされてきた仕打ちを暴露する。あああ、それ、子エネに言わないで欲しかった

……！

隣の席に座る子エネの滲み出す黒いオーラから目を逸らし、そういえばと疑問をぶつけた。

「どうして子エネたち、あの場所にいたの？」

「ああ、それはね？」

言葉を引き取ったのはサヤカの彼氏だ。

「俺達温泉に浸かった後、湯冷ましに散歩に出たんだよ。たまたまこの場所だったってだけなんだけど……すごいな、子エネシズさん！ 翔子ちゃんの声が上がらしたと思ったら、子エネシズさんがジャンプして落ちてくる翔子ちゃんを空中でキャッチしたんだ。どんだけすげえんだよって、俺ビックリしたわ」

「落ちてくるって……翔子、どうしたらそんな無謀な行動とれるのよー！」

「やっ、だって……子エネなら絶対受け止めてくれるから……」

「ノロケは後で聞く！ 落ちる意味が分からないって言っているの！」

怖いよサヤカ！

そのサヤカをまあまあと彼氏が宥めながら、「あ、そういえば手島ボンが風呂に来てた」と何かを思い出したようだ。

「あいつ、テニスやってたって言ってたよな？ あのあと汗を流す為か風呂に入ってきたんだ。手下どもとギヤーギヤー騒いで入るから、ジエネシズさんが一喝して……」

大浴場まで私物化してるんだ手島って……。ホテルの評判落とす行為はほんとやめてほしい。従業員一同路頭に迷わす気が！ でもジエネが宥めてくれて……。それならば彼らは絶対に大人しくなるだろう。こちらの世界に来てからというもの、ジエネは腰の剣を佩いていなくても落ち着いていられると本人なりに気が緩んでいる。そのジエネがスイッチを入れた状態になるとどういう状態になるのか。お山の大将よろしく手下に担ぎ上げられている手島にとって、初めて恐怖する相手じゃないだろうか？ もちろん手下にとっても。

「ジエネシズさんってさ、本当にガタイがよくて……。男の俺から見ても惚れ惚れするもんな！ 無駄な筋肉一つもないし、顔は整っているし……。なにより……。なるべく温泉もトイレも隣になるには勇気が必要だったことかな。手島のやつさ、顔見て体見てもっと下見てまた顔見てって縦に三往復してから『熱い熱い、のぼせるから出るぞ！』って手下ども引き連れて出てっただぜ？ まだ五分と経っていないのに」

随分空々しい言い訳したんだね……。って、一体どこ見たんだろう？

私がキョトンとしていると、何故かその言葉だけでピンと来たらしいサヤカはクククと口を手で押さえながら笑いを噛み殺していた。

「あはっ、可笑しい！ 手島ボンたら、男として全て負けているのを認められないのね」

「そうだな。だから裏庭でも翔子ちゃんの相手がジェネシズさんと知って、色々思い出したんだろ」

あいつの取り乱した姿、見せたかったなと彼氏が言えば、サヤカは今度こそ本当に吹きだした。私は一人理由が分からずただ一人取り残されてしまった。なんなのよ、もう！

「あら、もう?」

「はい、そろそろ帰ります。鳥沢さん有難うございました」

コンシェルジュデスクに座る鳥沢さんに、声をかける。「また」と言えないのは私なりのけじめだ。だけど……。

「手島さんに伝えて置いて下さい。私の言った意味が分かったら……今度はちゃんとお話ししましょうねって」

「翔子、甘いわ」

「サヤカ……うん、これは単に私が後味悪いだけだもん。彼がこれから良くなるきっかけになってくれたら、それでいいわ」

そしたら大好きなこのホテルに泊まりにくるね！ とジエネにピツタリ寄り添いながら伝えた。その時はもちろんジエネと来たいな。

「翔子ちゃん、もう私も遠慮しないであのお坊ちゃんを教育する事にするわ！ 私達も結局見てみぬ振りをしてきたんだもの……キツカケが掴めて良かった。オーナーには耳が痛いでしょうけれどもそれから」

そういつて茶目つ気たつぷりの笑顔を向けた鳥沢さんは、更に「出来ればうちのチャペル使って欲しいんだけど」と私の耳元で囁いてから仕事に戻った。

「シヨーコ、チャペルとは……？」

「うっ、な、なんでもないわ！ じゃ、じゃあサヤカ、また連絡するー！」

「待つて翔子！ これ、家に帰ってから開けてね？」

現物を見せると言われないうちにとジエネの腕を引いて帰ろうとしたら、サヤカが紙袋に入った手提げをニッコリ満面の笑みで手渡してきた。男二人で温泉に行っている間に用意をしたらしい。

「だけど……笑顔のサヤカが渡すものだ。前のアレといい、嫌な予感が拭えない。「返品不可だからね」と押し付けられ、結局受け取ってしまった。うう、開けるのが怖いよー！」

サヤカには言えないけれど、私の修行次第ではいつまたこっちに來れるか未定だ。次に会う約束が出来ないまま、別れる時間となった。

ジエネの仕事の都合上どこの国とは言えないけれど、私もそ

ここで働く事になった。だから連絡はいつ取れるか分からないけれど、必ずこちらから電話なりメールなりするね！ と、再会した時のようにぎゅっつと抱き締めあった。

「ジエネシズさん、翔子の事よろしくお願いします」

「承知した」

そう言ったジエネは、左手を腰の辺りで握りこむ。

……あ、これって。

私はその手の位置を見ていたら、ジエネはどこか遠くの一点を眺め。そしてほんの少し意地が悪い顔をそちらに向けてから私の頤おとがを持ち上げキスをした。

「んっ……!!」

「おっ!!」

「わっ!!」

「まっ!! 情熱的ね」

触れ合うだけの口付けだとしても三人の目の前だし、エントランス付近でされるにはいささか目立ちすぎる!

「ちよつと! ジエネいきなり何するのよ!」

手でジエネの胸を押し体を開き猛抗議をすると、ジエネは私の頭を軽く撫でながら先ほど見ていた方面を再び見た。

私もサヤカ達も、なんだろうと同じ方向をみたら。

「ちょっと、あれボンじゃない？」

「ははっ、止めを刺したといったところか」

ホテルエントランスから屋内のロビー突き当りの角。顔色が裏庭で見た時には白かったのに、今度は更に土気色に変化した……手島がいた。

え？ ちょっとまさか見せ付ける為に？

「二度とおかしな気を起こさぬよう、念押しだ」

「ジエネシズさん、やるう！」

片腕で私の腰を引き寄せて、見せつけるよう密着してから再び手島に向かってジエネは口だけを動かした。

これは、俺のだ。

それが読み取れたのは、すぐ傍に居た私と視線で捕縛された手島だけだろう。

手島はそれを見るなり建物の奥に引っ込んで、私といえは赤くなる顔を隠すのに必死だった。

* 番外編 一週間 14 (前書き)

今更だけどこんな設定でしたw

サヤカとその彼氏に別れの挨拶をし、私とジエネは再び送迎バスに乗り込んでホテルを後にした。

途中下車をさせてもらい、運転手のおじさんに別れの挨拶を済ませた後私たちが向かったのは。

「大人二枚お願いします」

往復チケットを受け取り、ジエネと二人でリフトの乗降口に立つ。ベンチのような椅子が流れてくるタイミングにあわせてそれに座ると、ゆるやかに斜面を昇り始める。

ここは大室山。

行きのバスからの車窓で、後で寄ろうと思った場所だ。徒歩で登るのは禁じられているため、このリフトで頂上へ向かうのだ。

「ね、折角だからお鉢巡りしよ?」

頂上には土産物と軽食を売る売店がある。そこはまた帰りに寄るとして、ジエネを誘い歩き出す。

ぐるりと一周火山口周りを歩くのを、お鉢巡りという。大して距離があるわけではなくおおよそ一キロ、ゆっくり歩いて二十分程度だ。てくてくと整備された通路を稜線に沿って歩く。

三百六十度大パノラマが広がる景色は本当に素晴らしい。遠くに見える富士山はその姿をくっきりと表し、相模灘、伊豆諸島、そして空気が澄んでいるのか、遠く房総半島まで眺める事ができた。

山と言えばラスメリナとレーンの国境付近が思い出される。行きはとにかく疲れを知らないかのようにガツガツ登れたのが不思議だった。それは精霊姫としてレーンに近づいて、国外で押さえられていた『力』というものが国境でリミッター解除となるからだ。今となつては納得いくけれど、当時初めてその解放された力に耐え切れなかった私は意識を失ってしまった……。

「きやつ」

「危ないぞ」

ちよつと前の出来事を思い出しながらボンヤリ歩いていた私は、足元が疎かになりちよつとした段差に躓いてしまった。それをジエネは手を差し出し転ぶのを防いで、「ほら」と私の手をぎゅつと握つて再び歩き出す。

こういった所がなんだか私愛されてるな、って思っちゃうんだ。

ジエネのゴツゴツとしてる関節の、私の手をすっぽり包む大きな手。ザラザラしてて厚く、所々タコがある働く手。働くといつても扱うものは剣なんだけどね。私をこうやって優しく包んでくれたり、危険から守ってくれたり、私がここにいていいんだって思える大好きな手なんだ。

出会えて良かった。ジエネの所に落ちて、本当に良かった。

手島から逃れる為に窓から飛び出してジエネに抱きとめられた時、やっぱりジエネは私にとって『運命の人』なんだと胸が熱くなった。

『私が出会った全てのトリップ経験者は、皆こっちに来た時落ちた相手と結ばれてるのよ？ 赤い糸でもあるのかしらねー？』

そう言った母親。まれに落ちない人もいたらしいけれど、それは個々に理由あつての事。次元を超えたのが妊娠中という他に例を見ない体験をした母親や、生殖が望めない年齢のトリップは皆一人でこの地球に降り立ったらしい。

そういえば、と昔の記憶を辿ってレーンにいる母親に聞いたことがある。幼い頃急に「コセキができた」と言っていたのは？ と。

ああ、それはね？ ほらあつちの世界に日本はもとより世界中から次元超えちゃった人がいるじゃない？ で、また戻れた人がこちらの世界でそれなりに組織作つててさ。それも結構古い歴史持つちゃつてて、国の中枢にまで入り込んでたりするのよね。だから。

ああ、だから戸籍が作つてもらえたのか。

極秘事項だから表には一切だせないけどね？ と、母親は勿論その組織に属している、と明らかにした。その中の一人が『精霊姫と騎士の旅』や『剣と竜の騎士団物語』などを書いているのも、そしてそれが組織運営費の主軸であるのも、すべてが異世界を渡った同士の繋がりで作られた組織なのだ。

世界中に支店を持つ家具や雑貨を取り扱う会社に、母親は戸籍ができる辺りから勤めているけれど、それが組織の表の顔らしい。裏では異世界経験者とその理解者がそれを運営管理する。

翔も実は属しており、あちこちの異世界へトリップできる能力を持つからとても重宝がられているようだ。トリップした先で、一点物の家具を輸入して売る。明らかに地球上ありえないもの、文化を

壊す物は仕入れないというルールの下、売買が行われていると言っていた。

翔は元々大学生の時に、車会社の社長にナンパ(?)されて就職した経緯がある。

それもよくよく聞いて見れば、『完全歩合制』での車販売の営業だった。翔自身日本でずっと居られないから就職は……と難色を示していたが、社長がそう提示したので「その話乗った!」となったらしい。

ノルマクリアさえすれば出社も完全自由という、まさに翔にとって好都合の就職先だ。私は単に車屋さんに勤めている、としか思っていなかった。その点も寝耳に水だった。

私の知らないところでこんなにも世界は動いている。

ちょっと手を伸ばすだけで、広がる世界がある。

私も、その世界の歯車の一つとなって何かを成し遂げたいな。

漠然とした思っただけで、志を新たにこれからの未来に翔け出そう。そう心に刻んで繋いだジェネの手に指を絡めた。

「はいどうぞ」

一周歩いて元の売店で二本牛乳を買った。なかなかお目にかからない瓶入りの牛乳で、コーヒー牛乳と二種類ある。腰に手を当てる作法も忘れずにジエネに伝え、紙製の蓋を捲つてグイッと飲む。ほんの二十分間歩いただけなのに少し熱くなつた体には、冷たい牛乳がとっても美味しかった。

「ショーコ、ついてる」

ぐいつと私の口元を指で拭い、そのままそれをぺろりと舐め取った。

う、わ……こんなこと自然にやるなんて、この人実は天然？ と、彼女の立場にいる自分としては他にそういうことしないかどうかコツソリ心配をする。

牛乳瓶を売店に返し、少し離れた位置に立っていたジエネは、どこかをじつと見ていた。何を見ているのか隣に並んで視線を追うと、「気になっていたんだが……」と、山の火口にある物を指差した。大室山は休火山で、すり鉢状に窪んだ火口には何故かアーチェリーが体験できる施設がある。分かりやすく弓矢の練習場よとジエネに伝えてからそういえばと思い出し、そこに続く階段を下りる。

「シヨーク？」

「ああ、違うの。練習じゃなくて、用があるのはこっち」

火口との間に、ひっそりと祭られた社がある。

全国でも珍しい浅間神社で、永続性を表す神として知られており、だからこそ私はここに願い事をしようと思った。願わくば、ずっと、ずっと。

作法に則り拍手と拝を重ね、「じゃ、行こ」と促した。

「ここは一体なんの……？」

「ふふ、ナイシヨ」

「ご利益は様々いわれがあるけれど、これから先の未来の為に祈った。」

帰りは再びリフトに乗って降りる。行きとは違い帰りは眼下に広がる景色は広大に広がり、足元も一番下まで見えるからちよつと怖い。左側に座っていた私は、ジエネの左手をぎゅうつと握った。そこでふと、サヤカと交わした時の様子を思い出す。

「ジエネ、そういえば剣の柄を握るみたいにしてたね？ 無意識だろうけど」

「そうか？ 気が付かなかつたな。腰元に剣がないとどうも体の一部が欠けた気がして心許無い」

癖だな、とジエネはほんの僅かに口角を上げた。

「柄を握るのは……俺なりの証を込めているからだ」

一旦私の手を離れたジエネは、左手を腰の辺りで握って真摯な目で私を見つめた。

「過去も現在も……そしてこれからの未来も全て愛している」

あ……。

私がさっきの社で願った、まさに同じ想いをジエネも言うてくれるだなんて……すごい。

「またレーンに戻ったら仕切りなおさせてくれ。どうも格好がつかない」

握った左手を開いたり閉じたりする様子に、堪えきれず吹き出してしまった。

か、かわいいよジエネ！

笑い出す私に慥然とした表情を僅かに見せながら再び私の手を握り締めるジエネ。

私は地上に下りるまで約十分間、ふわふわと夢心地でリフトに揺れた。

在来線、新幹線と乗り継ぎ主要駅に着いた。

あとは自宅へ向かうバスに乗るといふ段になって、ジエネは寄りたい所があると言い出し私と別々に帰る事になった。私も付いて行こうとは思ったけれど、「先に帰って夕食を作っていてくれ」とバスに乗る私にヒラヒラと手を振った。

一体どこに寄りたいたいのだろうか。

明日には翔が迎えに来るから、少しこちらの世界を冒険したくなつたのかもしれない。お金は軍資金の中から渡してあるし、使い方も分かつている。言葉も通じるから困った事態にはならないだろうと結論付けて、一旦頭を切り替えて今夜のメニューを考える。

……確か今日、あそこのスーパーが夕方市で安くなつてたな、と普段は利用しない少し離れたお店を思いつく。

いつも使う終点の停留所から一つ手前の停留所で降りて店に向かう。

ああ……歩きなのに、そう言うときに限って買いすぎるのよね……。

ウツカリあれやこれやとついつい買いすぎてしまった。

だって！ 豚肉の塊が底値とっていい値段だったし！ ぶかぶかしていない白ネギが三束で安かったし！ いつもと違うお店というのも気分が変わって楽しかった。戦利品をエコバッグに詰めて、帰路を急ぐ。豚肉は煮豚がいいかな、それともゆで豚にして……と料理法を考えながら角を曲がる。

すると遠くから私を呼ぶ声が聞こえた。

「ん……？」

キョロキョロと見回しても呼んだらしい相手は見つけられず、聞き間違いかと再び歩き出そうとしたら。

「ウンノッ！」

荒い息をつきながら私の目の前に駆け込んできたのは。

「……………っ！　ロウ！」

「おれが、見つけました……………」

普段使わないスーパーにたまたま寄ったのが良かったのか、ロウと会えた。やっと会えた。

ロウの有能さは折り紙つきで、私が下手にウロウロしないほうが確実に見つけてくれるだろうと踏んでのことだ。私は別に何もしなかったわけではない。アキラちゃんやおじさん、近所のおばさまなどにロウの外見的特長である『灰色の短髪に水色の瞳』という男性を見たことがあるかと尋ねてみたけれど、誰も知らない、分からないと答えた。

いかにも外国人風というのはこの狭い地域においてとても目立つひょっとしたら外出時などは帽子なりして紛れるようにしていたのかもしれない。

「ロウ！ 元気そう良かった……」

あの翔の最大の被害者でもあるロウになんと詫びたらいいかわからない。とにかく自宅へと導き話を聞くことにした。

「ごめんなさい、荷物持たせちゃって」

冷蔵庫に買ってきた品物をしまいながらロウに礼を述べた。買いすぎた荷物を下げていたら、それを自然な動作で「重いものを持つ

のが男の役目ですから」と家まで運んでくれたのだ。

「気にしないで下さい」

そういつてソファに腰掛け僅かに目元を緩めたロウを見て、私は何かを感じた。

……あれ？　なんだか雰囲気か？

一ヶ月前に話した時と違い、どことなく柔らかい気がする。ここ日本での暮らしで、何かしらの変化があったのかな？

お湯を沸かし、ロウに何か飲みたいものはあるか聞くと、「コーヒーを下さい」と返って来た。コーヒーはレインにもラスメリナにも、そしてデイスカブランドという世界にはなかった。つまりこちらの世界で覚えたんだね。

コーヒーは豆を買ってきて使い切るほどこの部屋にいないため、一回使いきりのドリップ式をセットする。コポコポとじっくり湯を注ぎながら、ロウは一ヶ月という期間いかにして過ごしてきたのか……。

「砂糖かミルク使う？」

「いえ、そのまま結構です」

すぐに戻らねばなりませんので、とロウは時間を気にしつつコーヒーに手を伸ばした。

「ロウ、一体どこで暮らしていたの？　一ヶ月も異世界にいるって相当……苦勞したでしょ？」

「いえ……私は親切な方に拾っていただき、そこでこちらの文化を学ばせていただきました。翔殿に飛ばされるとは全くの想定外でしたが、このような機会に恵まれた事には感謝しております」

う……そう言っていただければ、た、助かります。

翔が『扉』を開き、ジエネに潜らせる筈だったこちらの世界を、クシャミーつでロウに発動させてしまった。国の中枢を担う役目を拝命されたばかりだったロウにとって、不測の事態という一言では済まされない程の時間が奪われた。新しい王になり、新体制を築き、罪を犯した者への対処という 事務処理に長けたロウにとって一番力が発揮されるタイミング。

それなのに、感謝という言葉がでるとは……。

なにがあつたの？ ロウ。

「ジエネもこちらに来ているのよ。今はちょっと出かけているけどね。特別に休暇を貰ったらしくて……帰りは翔が迎えに来るわ。今度はちゃんとね」

「隊長が……そうですか。いつ翔殿は迎えに？」

「明日よ。ロウにとっては急で悪いんだけど……」

明日、と声に出さずに口を動かしたロウは、どことなく沈んでいた。

その姿は……。

まるで明日という日が来て欲しくないようで。

まるであちらの世界に戻るのを躊躇うようで

苦渋に満ちた表

情を見せた。

声を掛けるのが躊躇われ、私は黙ってロウの言葉を待った。

暫くの沈黙の後、ロウは「わかりました」とコーヒを一気に飲み込み立ち上がる。

「明日……明日、必ず来ます。それまでに色々整理して参りますので、本日はこれにて失礼致します」

「ロウ……えと、大丈夫なの？」

「はい。色々私も思う所があり……。隊長にご挨拶できなくて申し訳ありませんとお伝え下さい」

それだけ言うと、靴を履くのももどかしげに玄関のドアを開けて「ではまた」と足を踏み出した。私は急いでベランダに回って「明日は、お昼前に来てね」と、すでに駆け出していたロウの背中に伝えた言葉は、右手を軽く振る姿に了解の意図を受け取った。

「
」
というわけなのよ

夕食を食べながら、ジエネにロウとのやり取りを伝えた。

「そうか。ロウならば如才なくこちらの世界でも立ち回るだろう。
シヨーコ、お代わり」

「はい。それでね、お世話になったんだしこちらからご挨拶に伺ったほうがいいのかしら？　って思ってた。あ、このくらいでいい？」

「もう少し足してくれ。逗留先はどこか聞いたのか？」

「あー……それなただけけど……」

ジエネにごはん山盛りにしたお茶碗を渡しながら、先ほど見た口ウの表情が気になっていた。彼は彼なりに過ごした一ヶ月が、あんなにも表に感情を出す程辛そうでした。

本人すら結論を出していないのは明白で、それを私が聞くのも憚られた。けれどロウは明日必ず来ると言っていた。それは守られるだろう。

それからでも遅くないかな、と再び箸を取り食事を再開した。

昼食は翔も食べるだろう。だからそれ相応の量を用意しなければならぬ。ジエネの食欲を合わせたら、とてもじゃないがこの五合炊きの炊飯釜では太刀打ちできない。何回ご飯を炊けばいいのか頭が痛い。

一人ずつ小皿に盛るのでは絶対に間に合わないから大皿盛りで……まあ、ある意味家庭内バイキング形式と言っかなんというか。

明日の午後にはこの部屋とも暫く離れる事になる。食材などは全て片付けてしまわないとね。

ジエネがお風呂に入っている間に下拵えも済み、入れ替わりに風呂へ行くこうと支度を始めたところ、リビングテーブルの上にある物を思い出した。

「あ、サヤカからのプレゼントってなんだったのかな？」

紙袋に入っていたのは、二つの包装された包み。そのうち一つは『ジエネシズさんへ』と書かれているから、もう一つの包みを開けてみる。

「これって」

小箱がでてきて、中を開けたらネックレスが出てきた。繊細に作られたチェーンは硬質なはずの素材を柔らかく演出していた。

しかし、流石にサヤカらしい。

「肩こりに効くんだ……」

磁気ネックレス と、小箱には書かれていた。しかし一見そうは分からない、シルバーカラーのデザインは毎日身に着けても違和感がなさそうだ。

メッセージカードが添えられていて、サヤカの筆跡で書かれていたのは。

なんでも自分で抱え込まないで、このネックレスして肩を解して気持ちも解して、人に頼りなさいよ！ 私は翔子の幸せを願っているからね

サヤカ、ありがとう。

私の事よく見ていてくれたんだね。

翔が仕組んだ召喚で、異世界という場所で様々な体験をしてきた。楽しい、怖い、辛い、なんて単純な言葉では済まされない出来事が

次々と起こり、その中で『頼る』という、単純なのにその通りにできなかつた行為を覚えた。

今までの私から少し成長できた……んだよ。私だけが大変、私だけが頑張らなきゃって肩肘張っていたけれど、ふと緩めてみれば、実は色々な人が私を支えていてくれたんだと気付いた。

サヤカの心遣いに感謝し、お風呂上りに早速着けてみようと思わず小箱に戻す。

「シヨーク、出たぞ」

「あ、はい。ねえ、これサヤカからジェネにつて」

「なんだ？」

「わからないけど、ジェネ宛よ？　じゃあお風呂行ってきまーす」

テーブルの上に置かれたプレゼントの包みを指し示し、私はお風呂場に向かった。

……サヤカからのプレゼントは、嫌な予感が当たっていた。ええ、思いつきり。

ジエネは喜んでいたけど。しかしあちらの世界に持って行っても使えないものも含まれているので、それは私の部屋に仕舞っておく事にした。嚴重に嚴重に奥底に隠してね！

もう一度お風呂に入りベッドに横になろうとしたら、ジエネが何か小さな包みを手にベッドに腰掛けた。

「何持っているの？」

「目、閉じて」

なんだか分からないまま正座に座りなおし、手は膝に置いた。

カサカサと何かを開ける音がしてから、左手をとられ 硬い何かが私の指を通り、手の甲へ熱い吐息と共に柔らかな温もりが押し付けられた。

「ひゃっ」

「もういいぞ」

手を握られたままそおつと瞼を持ち上げると、そこにあったのは……。

「これ……って……」

「ああ、サイズが合ってよかった」

左手の指に収まっているのは 指輪。しかも、薬指に。

それをジエネの少しかさついた親指が優しくなぞり、そのたびに煌く光で存在感が増していた。

「サヤカさん達からこちらの風習を聞いて、ショーコに贈りたくなった。俺の選んだ物をずっと身に付けていて欲しい」

そういつてジエネは私の頬を両手で壊れ物を扱うように挟み、私の瞳の奥の奥を覗くようにじっと見据えた。

「所有の証だ」

ジエネの色 深い、海の底の色。それが真っ直ぐ私を射抜き、私の『私』である部分へじわりと、ジエネシズという一人の男性の色に染められた。

私がいるから彼がいる。彼がいるから私がいる。

全てを頼るわけじゃない。けれど、精神的な繋がりを持ってより強く立てる。そんな二人でありたいな……。

私が大好きなジエネの瞳が近づいてくる。私は瞼をそっと閉じながらそれを受け入れた。

朝から煮炊き、洗濯、掃除など、出来る家事を効率よくこなす。暫く留守にするので、いくら綺麗にしても様々な差し障りが出てく

るだろう。

コンセントを抜けるものは抜いて、出せるゴミは全て出したい。近所の人に暫く海外に住むのでと伝えたら、手紙など預かるよと申し出てくれ、ごみも玄関横に置いておけば一緒に集荷の日に出すよと言ってくれた。

手紙は溢れてしまうと確かに防犯上不安になるから、ありがたく甘えさせてもらう。

それにこの人は信用がおける人なので大丈夫だ。なんといっても翔が懐いていたから。ああ見えて翔は人を選ぶ。飄々とした態度は崩さないけれど、透明な壁を作り一定の距離を測っている。殆どがなんとなく、という理由だけれど翔がその壁を作る人は……確かにあんまりな人が多かった。

煮込みの鍋を下ろし、次の鍋を乗せる。煮物は冷めるときに味が染み込むので、その間に別の料理を作るのだ。

鍋に水を入れて火をかけ、沸騰するまでの間にまた別の支度を始める。

生活は、出来るだけあちらの世界に合わせるけれど……下着はどうしても自前のを持っていききたい。

男装の時サラシですつと締め付けていた胸は苦しく、逆に侍女服の時は胸に支えがないのが何とも心許なかった。周りから見えるものでもないからいいかな？ と、幾つか荷物に忍ばせた。

イル・メル・ジーンが興味を持っていた化粧品、たまに欲しくなる醤油……歴史を変えるようなものではなく、自分の周りだけで済ませられる類の細々した物をバッグに纏めて部屋の片隅へと寄せておく。

ジエネはその間に掃除をしてくれている。器用に何でもこなすので、どうしてあの執務室が魔窟になるのかが不思議で仕方が無い。まあ……折角なので、普段出来ないような高い所もお願いした。

ピーと電子音がして、オーブンレンジからキツシユを取り出し、続けて次の料理を入れる。グラタン皿に並べておいたナスとトマト、それにニンニクの味を移したオリーブオイルで炒めておいた挽肉を重ね、味付けは塩コショウ、タイム、ナツメグ。上に乗せたチーズが溶け、中に火が通るまで焼く。

キツシユはスモークサーモンとほうれん草とジャガイモで作り、適当な大きさに切り分けてお皿に盛った。

他にブロッコリーとゆで卵のサラダ、赤ワインと玉葱で時間をかけて作った煮豚、炊飯器で炊いた海老ととうもろこしのピラフ、フライパンで作ったパエリア、白菜を焼いてツナに粉チーズとバジルとオリーブオイルを混ぜておいたものをかけたサラダ、ひよこ豆とチキンの煮込み、アサリが少し余ったのでクラムチャウダーも。余っても持っていていけるようにアニスシードのクツキーや、レモンのすりおろしを入れちよつとラム酒を効かせたパウンドケーキも用意する。

大皿に盛って飾り付けをしていたら、インターホンから呼び出し音が。

「はい」とモニター越しに返事をする、「ロウです」とよく通る声で簡潔に名乗りがあった。手が放せないのので後を振り返ってテーブルを拭き上げていたジエネに声をかける。

「ジエネ、玄関に出てくれる？」

「わかった」

再び受話口に向かって「ちよつと待つてね」と伝え、ふきこぼれそうだった鍋の火を調整し、お茶の準備をする。うーん、そろそろかなー？ と、オーブンの中を見て。……あれ？ まだ入ってこないのかな？ なかなかジエネとロウが来ないので一旦手を止めて玄

関に向かった。

「ジエネ、何をしているの？ 早く上がってもらったら？」

玄関のドアを半分ほど開けジエネとロウが立っている。けれどその間に、何か別の人影が見えた。

ロウ、と……女の人？

ロウに寄り添うようにして、こちらをどこか驚いたように目を見開く、綺麗な女性が立っていた。

ロウは自然な仕草で彼女の腰を抱き、こちらから見ると『とろけそう』眼差しで見下ろしている。ああ、これはつまり。

「初めまして、望月優実と申します」

緊張は僅かに感じるものの、にっこりと綺麗な笑顔で自己紹介をしてきた。

「ああ、そういうこと」

嬉しい。単純にもう嬉しいよ。なるほどね、ロウはそういうことだったんだ。

「初めまして、私は海野翔子です。あ、とにかくここでは何ですから上がって？ ほら、ジエネも早く」

ジエネはさっぱり気づいていないようだけど、私には分かっちゃった。

だって、私も同じだから。

運命の相手。

ロウは時空を越えて、彼女の元に落ちたのね。

経緯は分からないけれど、思い合っているのは見て取れる。翔が来るまでの間、話を聞かせてもらおう。

* 番外編 一週間 17 (後書き)

サヤカからのプレゼントの内容はまた近いうちに「月」にてw

レモングラス、ミント、タイムのドライハーブに熱湯を注ぎ、程よく抽出したところで葉を取り、はちみつを加えてティーカップに淹れた。

お盆に乗せ、リビングテーブルに向かい合って座るそれぞれの前に配る。

私はジェネの隣に座り、ロウが語る一ヶ月に耳を傾けた。

翔にウツカリで飛ばされ 優実の上に何故か落ち、ストーカーに付け狙われていたという所を助け、居候させてもらえることになった。

そこで先にこちらへ来ているはずの私を捜しながら、こちらの政治経済文化などを学び、ようやく昨日出会えたという運びだ。

うう、ごめんなさい。私、後半引きこもっていたから探しても出会えないよ……ね？

不安で不安で押しつぶされそうだったあの一ヶ月。もちろんロウが翔のウツカリの犠牲となつてこちらに飛ばされていたなんて知らなかった。だけど、ジェネが来てそれを知って、でも私は近所の人に尋ねる程度でちゃんと探していなかったのは事実だ。

身の縮む思いで謝罪をすると、ロウは苦笑を浮かべながら「もういいですよ」と言いながら緩く首を横に振った。

「私はこちらに来て、ユミに会えた事は感謝しています。ウンノ

が気に病む事ではありません」

しかし、とロウは私の目をしっかりと見て続ける。

「カケル殿にはそれ相応の対処をさせていただこうと思います」

「あ、あはは……お任せするわ」

ロウと優実さんは、一旦離れ離れになる。

明日帰るなんて急すぎて、社会人として生活をしてきた優実さんには様々な準備ができていない。仕事を持ち、家族に説明をして……などを考えると、何もかも捨てて付いていくなど出来ないからだ。後顧の憂いのないよう、こちらに迎えに来るまでの期間支度をしてもらうとロウは言った。

私が翔からこちらとあちらの世界を繋ぐ『扉』を教わる事をロウにも伝える。翔は流石に王としての責務があるから、今現在自由に動ける時間が殆ど取れないらしい。私が教わって、『扉』が開ければ優実さんも行き来が可能になるだろう。

離れるのは寂しい。しかも異世界だ。容易に連絡の取れない距離に置いておかれる気持ちはこの一ヶ月で良く分かる。

だから、優実さんがレーンの国に行く不安をできるだけ軽くしてあげたいとの一心で、ロウの隣でじつと俯いて座る優実さんに向かって声をかけた。

「ロウと遠距離以上の別世界で暫く待つ……優実さん、寂しいよね。だから私、頑張って『扉』を開く練習するから！」

俯いたままの優実さんに代わって、ロウが答える。

「一ヶ月でお願いします。それ以上は待てません」

「ええっ?!」

ちよつと! ロウ厳しいじゃない!

どれだけの修行になるか分からないけれど、それをあつさりと身に付けると言うのはあまりに厳しくないですか? でも、何とかなるような予感もしていた。

「うん! 大丈夫!! 頑張つて一ヶ月で扉を開けるようにしてみせるから。大丈夫よ、翔に出来て私に出来ないなんて事はないと思うわ……多分」

「大体で話すのは、お前達双子の悪い癖だな」

ジエネは呆れた様に私を小突くけど、「だつて見た事ないものと少し開き直つて答える。奥底で眠る『力』というもの。なにかつかめそうな気がするその存在は、いまだ不確かだけれど……翔によつてそれをくつきりと浮き立たせれば私にも扱える気がするんだ。

「と、とにかく! 優実さん、待つてね?」

「あの……何を?」

「え?」

酷く青ざめた顔を向けた優実さんは、うつすら目に涙を溜めていた。

会つた時には笑顔を見せていたけれどあれは作られたもので、こちらの『今』の表情が素の表情だと分かってしまった。

何か……何かまだ、伝わっていないのかな? ロウとしつかり意

思疎通取れていない部分があるんじゃないかな？

分かっていない様子の優実さんは、頬を緩めぎこちなく笑う。それを見たロウは大げさに溜息を吐いて軽く目を伏せた。

「ユミは人の話を聞いていない時がたまにありますよね。そして、必ずその笑顔で誤魔化そうとするんです」

「……なんか、ちょっと二人で話し合ったほうがいいみたいね？」

「ええ、そうさせて頂けますか？」

私の言葉にロウが頷く。

もう時間はない。ここで二人でその気持ちのこじれた辺りを解さない。

立ち上がってジエネの腕を引く。

「ジエネ、ちょっとこっち！」

「どうした？」

「いいからっ！」

何も気づいていないジエネは二人で話し合うように言った私の意図が掴めないらしいけど、されるがまま立ち上がる。

リビングから私の部屋へ移動した私たちは、ベッドに腰掛けた。

「べっぴんさんって、そういってよ」

「全くわからんな」

首を捻るジェネに、体をびったり寄り添ってぎゅっつとジェネの硬い腕に絡ませる。

「じゅいじゅい」とも

「じゅいじゅい……」

「運命の相手」

「……は？」

ロウと優実さんは、想いは同じだけどどこか小さくずれている。異世界というただでさえ常識外な事象の前では『想像すれば分かるだろう』という態度では全く通じない。会話によってお互いの考えをすり合わせてようやく重なるものだ。どちらも、声にしないとダメだよ。

「しかし、あのロウがねえ……」

甘い甘い雰囲気。

宴会をしている時、イル・メル・ジーンに恋人の一人でも作りなさいよと言われていたロウは、全く興味がなさそうに葡萄酒の入った杯を傾けていた。

生憎その方面は全く興味ありませんので。

あんなこと言っていたけれど、運命の相手に会えてロウは変わった。冷静沈着、クールな印象なロウが柔らかい空気をたたえるようになった。

「ロウのお父さんに早く教えてあげたいわ」

「ならば修行をがんばるんだな」

「うっ……ハイ、がんばります」

ポンポンと頭を撫でられ、それが余りに心地よくてジエネの胸に頭をすり寄せる。

「私、ジエネにそうされるの好き」

「お望みならいくらでも。俺の大事な姫君」

暫くして、ドアの向こうからしていた話し声が消えた。

……。

……。

「話、まとまったのかしら」

「見にいけばいいだろう」

「や、それはちょっと……タイミングってものがあるかもだし」

「ではどうする」

「うー……」

ロウが言い出すまで待つべきかどうか。
ジエネと二人で頭を捻っていると。

ぴんぽーん

がちやつ

「たっだいまー！」

能天気な声、どすどすと廊下を歩く音、そしてドアを開ける音。

「おっ？　ろーがいるじゃん。あれっ、ここ僕んちだよな？　何してんのここで。えーと、えーと……こちらの方はどちらさま？　つていやそれよりねーちゃんどこー！　お腹空いたんだけどーっ！」

あ、相変わらずね……翔。なんだか一気に力が抜けちゃったよ。帰るなりドタバタうるさいのは何歳になっても変わらないらしい。初対面の優実さんもいるから紹介をしたいし、それより何よりまずは謝罪させないと！

部屋から急いで出て、リビングにいる翔の腕を捕まえ振り向かせる。

「こら！　先に色々言うことあるんじゃないの？！」

「あっ！　ただいまねーちゃん！」

「違うでしょ！　ロウによー！」

「ごめーん！　……いぢやっ……！」

「軽いよっ！」

ゴチンと頭に拳骨を与えたあと、ロウに向きなおって深々と頭を下げ、翔の頭も押さえつけるようにして下げる。

「本当にごめんなさい。このアホ翔が多なるご迷惑をおかけしました」

「ごめんなさい」

「ああ顔をあげてください、ウンノ。貴女には感謝していますから」

「僕は?!」

「……多少は」

「あーそー。まあいいじゃん、相手見つかったんだろ？ よかったよかった!」

ピッタリと寄り添う二人を見て、翔も気付いたようだった。その上でロウが相手を見つけたということを、翔の中で『クシャミでウツカリ』はチャラ、と片付けたらしい。そ、それとこれは別問題じゃないかな?!

「それはともかくさ、僕お腹すいたんだよ。もう出来てるじゃん食べよう食べよう! ひゃっほう!」

「あ、こら翔! 皆で食べるんだからダメよ!」

「えー、いいじゃん」

「よくない!」

ゴチンと翔の頭に再び拳骨を与えると、大げさに痛がって見せたが誰の同情も引かなかったようだ。ジエネですら「自業自得だな」と冷たく突き放した。

一人増えたけれど、量は沢山あるので問題はないだろう。あるとすれば翔だけだ。

「じゃ、ちよっと待ってね？」飯にしましょ」

「あ、手伝います」

「ありがとう優実さん」

食器やら料理をテキパキと運んでくれてすごく助かる。その間翔は自室に飛び込み、ジエネとロウは情報交換をしていた。

小皿やお箸が並び終わった所で五人で食卓を囲んだ。

「うっはー！ やっぱねーちゃんの料理サイコーだよ！ そうそう、ねーちゃんの料理食べたくて今回来たんだよねー！」

口いっぱいに頬張って食べる翔に、違うだろ！ と私だけでなくジエネもロウも……初対面であるはずの優実さんまでもが口を開きかけ。しかし、それぞれがあさつての方向に視線を逸らせ、それぞれが黙って言葉を飲み込んだ。

うん、それ、すごく正解。

対翔における対処の方法は問題ないとわかった。優実さんにはそのスキルがあつてよかったよ。

優実さんは優実さんなりに翔という存在を大体で推し量ったように、隣にいるロウにこそつと耳打ちをする。その内容は近くにいた私にも聞こえた。

「……災難だったわね」

「お陰で運命に繋がりました」

翔にそれ相応の対処を、とは言っていたロウだけれど。

優実さんに出会えたことに、今の言葉からして本当は感謝しているようだ。しかしそこはロウ。これを何かしらの取引材料にするのではないか、とはジエネの談だ。こ、怖っ！

翔とジエネのお陰で、沢山作ったはずの料理は片端から消えていった。

目を丸くして驚く優実さんに、ロウはそれを見越して先に確保しておいた料理を渡す。

「ウンノの料理は美味しいですよ。規格外を見ていないで食べましょう」

「あ、は……え、ええ……」

そう言っつて、箸を伸ばし口に運んだ優実さんは「美味しい！」と言ってくれた。お口にあつて良かったわ、と思わず顔が綻ぶ。やっぱり私は人に喜んでもらえるのが好き。

レーンの食堂で働くのがとても楽しみだ。

食事が終わり、キレイサツパリ全て食べつくされ、冷蔵庫の中身も片付いた。ええ、一応予備にと買っておいたカップラーメンすら、綺麗に。

翔が言うには、『力』を使うと食欲と睡眠欲が増えるからだ、と私もそうなってしまうのだろうか……ちょっと怖い。

「ご馳走さま！」と自室に入って、またすぐ出てきた翔は何故かスーツ姿だった。

相変わらず似合わないわね……。

何度か見た事のある翔のスーツ姿だけれど、着こなしが悪いのか童顔な顔が悪いのか、どうしてもちぐはぐな印象を受けてしまう。

「翔？ どこにいくの？」

その姿に疑問を持った私が食器を洗う手を一旦止めて尋ねると、ネクタイを首に引っ掛けただけの翔は「久しぶりに会社に顔を出してくる！」と答えた。

「いやー……どっちも久し振りすぎてさ、行くの怖いわー。気が重いー。車のほうは何かかなるけどさ、こっちの あ、かーちゃんから聞いただろ？ 輸入関係の方だよ。うちの課長すっげー怖いからやだなあ……」

車も輸入も営業の仕事をしている翔。そして異世界では王様。

こっちは文字だけ羅列すればすぐできる男なのに、どうしてこっちは……翔というだけで残念なんだろう。

また夕方には戻るよっ！ と文字通りすっ飛んでいった翔。つまり、夕方には私達もいよいよあちらの世界に行くことになるのだ。

短いようで長かった一ヶ月。

長いようで短かった一週間。

時間の長さは、心の充実度によって感じ方が変わるんだね。

あとに残された私とジエネ、それからロウと優実さんで、今までの事やこれからの事について話し合う。

ロウは自分がいない間のレーンでの国内情勢について、ジエネに質問をしている。今回の大きな事件により様々な法の整備が行われた。騎士団内にも処分を受けた者がいるのでその人員の充当方法や精霊姫　つまり私なんだけど　精霊の暴走が止まり天候の安定がみられたので、田畑の整備と収穫を迎えたときの税制改正に至るまで、細々……。

深く突っ込んだ話もあり、私と優実さんには難しすぎて……その間二人で女子トークに花を咲かせた。

優実さんについて色々聞かせてもらったり。

望月優実二十九歳、主要駅近くの病院受付をしていて、住まいは最寄り駅近くの実家住まい　。そうだよね、生活圈が違うんだ。私もよく主要駅に行ったりするけれど、ここらへんに住む人は駅まで徒歩で行くとなると三十分はかかる。その三十分歩くのならば、同じ時間バスに揺られた方がまだとそういう理由だ。あちらは駅の近くにスーパーがあり、こちらはバスの停留所の横にスーパーがある。

そりゃ顔見ないわけだよ。

小学校の学区が違い、中学校は同じだけれど六年離れていたら全く分からない。直線距離なら大して離れていないのにね。

「ねえ翔子ちゃん、私に料理教えて欲しいの」

色々話すうちにすっかり打ち解けた私達。

年上と言うこともあり、私に向かつて敬語で話されるのはどうにもムズムズしたので、距離が近くなって嬉しい。

料理をもっと上手になって、ロウに食べさせたいようだ。

わかるよー！好きな相手に自分の手料理食べてもらうの、嬉しいもの！体調管理もしたいしね。

私は近衛騎士団の食堂で働くので、時間をみて教える約束をした。

それから優実さんは、どうしても気になることが……と小さな声でコツソリと私に耳打ちをしてきた。

「男も女も関係ない常春頭の節操無しに比べれば……って前に口ウが言っていたんだけど、翔子ちゃん、知ってるかしら？」

え。

いるにはいるけど。いえ、確かにいるけど約一名。

恐ろしいほどに色気が溢れて男女問わず惑わす、本当の意味の色男が。

「つまり、男と男がアリって事よね？紹介してとまでは言わな
いけれど、是非観察を……いえ、ちょっと見てみたいの！」

「あ、あはは……。すぐに会えると思うわ」

優実さんはとても清潔感があってパリッとした美人さんだけど、その手の類を鑑賞する趣味があるようだ。是非存分に堪能して下さい

いと言ったら「スケブ持つてかなきゃ！」と、こぶしをぐっと握って頬を染め、「ふふっ、ふふふふ……」と期待に胸を膨らませていた。

「ユミ？　あまり飛ばさないで下さい」

「あら、いやだわ。私とした事が……。ゴホン、私もレーンの国に行けるのを楽しみに待ってます！」

様子に気付いたロウが優実さんの手を握って窘めた。

やれやれと肩をすくめ、それでも愛しそくに熱を持った視線で優実さんを見るロウは幸せそうに見えた。

空から降り注ぐ光は徐々に赤い衣を纏い、昼と夜は茜色の濃淡をもって入れ替わる。

翔はまだ仕事から戻らないけれど、それも時間の問題だ。

「じゃあ、私はそろそろ……帰るわね。見送ること出来なくてごめんなさい」

優実さんが立ち上がり、それをロウが玄関先まで送る。

ジェネも立とうとしたけれど「野暮な事しないの！」と腕を捕まえ再び座らせた。私が『扉』を習得するのに一ヶ月と言う期限ある……いえ、ロウによって決められたんだけど。私が出来なければもっと長い間待つことになる二人。暫しの別れになるかもしれないけれど、そこは二人きりで挨拶を交わしてもらいたいから。

ジェネだつて分かるでしょ？　と言ったら。

「急すぎて俺達は挨拶も何もしていないぞ？　しかし待機する辛

さは理解できる。この度の休暇が無ければ、俺は今頃……」

ジエネの視線は吐き出し窓から見える茜雲に向けられ、後に続いた言葉は部屋に入ってきた風によってかき消えた。

ジエネの端正な面立ちが夕焼けの色に染まり、私はただ黙ってその横顔を見つめる。

今日まで本当に色々な事があった。一言で片付けられない、私の人生が根底から覆ってしまうほどの大きな出来事。

小説の舞台が実は本当にあり、次元を超えてこちらとあちらが交わって。

母子家庭だと思っていたら、あちらの世界の英雄である騎士アルゼル・クランベルグと精霊姫のリン、まさにその二人の子供で、事情があつて離れ離れになったからだ……とか。双子で生まれた姉の私と弟の翔。その翔はなにやら色々な才能を開花させ、ありとあらゆる異世界を旅することができるトリッパーになっていて、何故かラスメリナと言う国で王の座に納まって……。

で、今に至る。うん、間を端折ったけど、本当に色々ありすぎたから。

私は精霊姫となり、あちらの世界で生活の基盤を築いていく決意をした。そして私の隣にはジエネシズが立ち、共に支え合って生きていくんだ。

「 団長とリン殿に、戻ったら早速挨拶に伺おう」

ジエネは私の頭をポンポンと大きな手で二回撫で、手をおろして今度は私の薬指に光る指輪をなぞった。あれ？ な、なによその意味ありげな視線はっ？！

「今後の事だ」

「今後って……あ、優実さんどうだった？」

何を両親に話そうというのか、それを聞こうとしたらロウが戻ってきた。

「笑っていましたが……無理をしていますね。ということですね、一刻も早い習得をお願いします」

「お願いします、の所で妙に力が籠って……うわっ、目が本気だ……！」

喉の奥がひくつとなつて声が出せず、カクカクと頷く事しか出来なかった。怖いよお！

「ただいまー！ やー、疲れた疲れたっ。もうあの課長、俺のこ
と何だと思ってるわけ？ 鬼がいたよりアル鬼！」

帰ってくるなりポイポイとスーツを脱ぎ捨て、玄関から転々と服を落としていく。

「もうっ！ 散らかさないでよ」

「帰る早々騒がしいな」

「聞いてくれよジエネ！ 俺一応上司なわけ。じょ・う・し！」

あー、ろーったら何その目、疑わないでよー！

「カケル殿が上司と聞くだけで、部下諸々社の方たちに同情を禁じえないだけです」

「全くだ」

「ひどっ!」

両手で顔を覆い、よよよと泣き崩れるがどうみても演技だ。本気で話を聞くのがばかばかしいとばかりに口ウは電話帳を捲って読み始め(そ、それ面白いの?)、ジエネにいたっては戸締りの確認へ行ってしまった。

「で? どんなご迷惑掛けてきたの?」

「迷惑前提なの?! いやほら違うよ! 前に僕が来たときはさー、やたらめったら課長ご機嫌でね? ……だから、ちよっぴり溜めちゃった書類なんかをコソっつと……」

「ばかつ、怒られるに決まってるじゃない!」

そりや当たり前だよっ! ああもうゴメンナサイ課長さん……! 脱ぎ捨てられたスーツを皺にならないよう拾い、ハンガーに掛けながら部下である課長さんに心の中で謝った。

翔の会社での立ち位置は”遊撃手”であり、入社などは自由なんだけどその分結果が求められる。車の営業では、何故か社用車として何台もまとめてお買い上げ! など上手い具合に大口の客を捕まえてくるので、社長に大事にされているらしい……たとえこんな翔でも。

輸入家具会社の上層部は異世界トリップ経験者などが名を連ねて

おり、世界各地に支社がある。ここのとある地方も勿論そうであ
ちなみに母親は暫く社長をしていたらしいけれど、翔からそろそ
かもと言われて役職は降りていた。社長以下役職付きは異世界の
事や翔の事を知らされるらしい。

表向きは全くの一般企業と変わらない為、社員の多くはまさか異
世界からやってくる家具とは知らずに取り扱っている。上役はそれ
を観察し、適応できる人物を昇進させている……と。

ああそうか……ラスメリナでもユীগさんに事務処理丸投げして
たもんね。

いつか課長さんのところに菓子折りの一つでも贈らせてもらおう。

「シヨーク、設置しておいたぞ」

「ありがとうジエネ！」

ジエネが各部屋を回り、戸締り確認後に置いてくれたのは『
旅の石』。留守でもアレが来ない。アレ……アレとは……虫……。
う、うん。もうこれは一生手放せないねっ！

そして、私達は翔の部屋に移動した。

来た時は玄関から入ってきたのに？ と不思議に思ったけど、そ
れは四人の大人が一緒に移動ともなると目立つからだ。

「じゃー行くよ。忘れ物無いか？ ねーちゃん、よく見とい
てね！」

翔は両手の人差し指を目の前に差し出し、そこを頂点として左右
に分かれて円を描いていく。ただの円ではなく、合間に小指で文字
らしき字を書きながら。

「えっ、それどうやっ」

「開くよー!」

翔が書くそれは赤い軌跡となり、最下部まで行くとより一層光が増した。両掌を真っ直ぐ伸ばし、その円の中心から観音開きのように押し開いて。

「ちよつと、翔、まっ……!」

こうして、ジエネとの一週間が終わった。
長くもあり、短くもあり。

レーンに着いたら翔はまたラスメリナへと戻った。

「扉の練習は?!」と聞いたなら「もう見ただろ? 自主練してー!」と言うが早いか待機させていた風竜に乗って飛び立ってしまい、翔の背中を見送るロウの静かな怒りがとても怖かった。両親へ挨拶をとジエネが言っていたので、帰還を知らせるのかなと思っただらなんと「結婚させてください」という挨拶だったり。

両親も、ちゃんと世間に夫婦である事を宣言したり。
結局扉が上手いかわず、ロウに言いくるめられて単身ラスメリナに行つて翔の元修行したり。

マルちゃんがレーンの国始まって以来の治世を行つたと褒め称え

られるのは、ちょっと先の話。

こうして私『海野翔子』は。

精霊姫として、そして近衛騎士団の食堂で働く一人として、そして……。

「シヨーコ、いくぞ」

「はいっ、ジエネ！」

差し出された大きい大きい手に、自分の手を重ねる。

私はジエネシズの妻となった。

二人寄り添い暮らしてい。

「ねーちゃんちょっとコレどうしたらっ……！」

「なにやってんのよっ……！」

穏やかにはいられないけれど、とても満ち足りた幸せな日常を過ごしています……！

おわり。

* 番外編 一週間 20 最終話(後書き)

これにて完結です！

ありがとうございましたー！

また活動報告など見てくださいね。

<http://mypage.syo-setu.com/106764/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1841o/>

世界を翔ける！

2011年9月29日14時03分発行